

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 235

# 窪木遺跡 南溝手遺跡 北溝手遺跡

一般県道服部停車場線道路改築に伴う発掘調査

2012

岡山県教育委員会



道跡遠景（南東上空から）



南溝手遺跡 弥生時代～古墳時代全景（南東から）



南溝手遺跡 36ⅡU～ⅡW弥生時代全景（北西から）

卷頭図版 4



1 北満手遺跡  
竪穴住居 3 出土土器



2 北満手遺跡竪穴住居 3 出土管玉



3 北満手遺跡竪穴住居 3 出土赤色彩文石製品



4 北満手遺跡井戸 1 出土土器

## 序

岡山県南中央部に位置する総社平野は、高梁川とその分流によって形成された肥沃な平野です。近年では、地理的な条件と豊かな自然環境を背景に宅地開発が進むとともに、岡山自動車道岡山総社インターや岡山県立大学が建設されるなど発展を遂げています。

こうした中、さらなる地域の活性化と利便性の向上のため国道180号バイパスとJ R 古備線服部駅を結ぶ一般県道服部停車場線の道路改築事業が計画されました。

工事予定地周辺は古代備中国を支えた有力氏族である賀夜氏の拠点とされ、氏寺である栢寺院寺や備中国府推定地も所在するなど歴史的に重要な位置を占める地域であります。また、これまでの発掘調査によって縄文・弥生時代以降近世に至るまでの多くの遺跡が存在することも判明しています。

このため、岡山県教育委員会では建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて関係当局と繰り返し協議を重ねた結果、現状保存が困難な部分については記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

発掘調査の結果、窪木遺跡では中世の屋敷地の一端が明らかとなり、南溝手遺跡では分銅形土製品の祖形と考えられる弥生時代中期の土製品が出土し、北溝手遺跡では弥生時代前期としては県下最大級の竪穴住居が発見されるなど多くの貴重な成果を得ることができました。

こうした発掘調査成果を収載した本報告書が学術研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に際しましては、岡山県埋蔵文化財専門委員をはじめとする多くの方々から有益な御教示と御指導を賜りました。また、備中県民局建設部をはじめとする関係機関や地元住民の皆様からは御理解と多大な御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成24年2月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 平井 泰男



## 例 言

- 1 本書は、一般県道服部停車場線道路改築事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備中県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代古備文化財センターが発掘調査を実施した、窪木遺跡・南溝手遺跡・北溝手遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 窪木遺跡は総社市窪木717-1ほか、南溝手遺跡は総社市南溝手140-1ほか、北溝手遺跡は総社市北溝手260ほかの所に所在する。
- 3 確認調査は平成20年1月28日～2月19日に和田剛が、一次調査を平成20年5月19日～6月6日に岡本寛久・松尾佳子・白木亨が担当して実施した。  
本発掘調査は、平成20年度から平成22年度に島崎東・岡本・渡邊恵果子・松尾・白木・岩崎佳奈・高山沙織が担当して実施した。調査面積は6,585㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、埋蔵文化財専門委員の狩野久氏と稲田孝司氏から御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の作成は、平成22年度に島崎・渡邊・松尾・和田・高山・三輪宣生が担当し、平成23年度は渡邊・杉山・雄が担当して実施した。
- 6 本書の執筆は、発掘担当者および整理担当者あたり、文責はそれぞれ文末に記した。また、窪木遺跡・南溝手遺跡の編集を松尾が、北溝手遺跡の編集を渡邊が、全体編集は渡邊が行った。
- 7 遺物の鑑定・同定については次の方々へ依頼し、有益な御教示を得た。記して御礼申し上げる。

人骨鑑定	大塚 愛二 (岡山大学)
種子鑑定	小西 猛朗 (元九州大学)
種子鑑定	松谷 暁子 (東京大学総合研究博物館)
年代測定	米田 穰 (東京大学大学院)
石材鑑定	鈴木 茂之 (岡山大学)
三彩・緑釉鑑定	高橋 照彦 (大阪大学)
獣骨鑑定	富岡 直人 (岡山理科大学)
- 8 南溝手遺跡のプラント・オパール分析及び北溝手遺跡の炭化材樹種同定については株式会社ハレオ・ラボに、北溝手遺跡の粘土鉱物分析・プラント・オパール分析・花粉分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社へ分析委託した。また放射性炭素年代測定についてはバリノ・サーヴェイ株式会社及び株式会社ハレオ・ラボに分析委託した。
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代古備文化財センター（岡山市北区西北尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は標高である。
- 2 遺跡の調査に用いたグリッドは世界測地系に準拠している。  
X = -144.95km, Y = -51.10kmを基準として10m間隔のグリッドを設定し、X軸では北から南にA～Z (ⅡA～ⅡZ, ⅢA～ⅢI)を、Y軸では西から東へ0～50を付した(第4図参照)。なお、遺構などの位置を表す場合、20m毎を1単位(Y軸は偶数字、X軸はA・C・E…)とし、12Kのように半角数字および全角アルファベット(ローマ数字・アルファベット)で表し、グリッド名は北西隅を基準としている。
- 3 方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。
- 4 本報告書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

遺構 竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列：1/60 井戸・土壙墓・土壙：1/30

遺物 上器：1/4 石製品：1/2、1/3 土製品・金属製品：1/3 銭貨：1/2

下類：1/1

- 5 全体図では遺構名を次のように略称を用いている。  
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：列 横列状遺構：構 井戸：井  
土壙墓：墓 土壙：土 土器溜まり：溜 河道：河 柱穴：柱
- 6 掲載遺物番号については、遺跡ごとに上器、土製品、石製品、金属製品に分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。

土製品：C 石製品：S 金属製品：M

- 7 土器実測図における中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性のあることを示す。
- 8 掲載した遺構上のスクリーントーンは以下の範囲を示すものである。



被熱



炭

- 9 土器観察表の上色は「新版標準上色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)によるものである。
- 10 本報告書に掲載した地形図のうち第6図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「高粱」・「玉島」・「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 11 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用した。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過 .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	3
第3節 報告書作成の経過 .....	5
第4節 調査および整理の体制 .....	7
第2章 遺跡の位置と環境 .....	9
第3章 窪木遺跡 .....	13
第1節 遺跡の概要 .....	13
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物 .....	14
1 概要 .....	14
2 上墳 .....	14
3 遺構に伴わない遺物 .....	15
第3節 古代～中世の遺構・遺物 .....	16
1 概要 .....	16
2 掘立柱建物 .....	16
3 柱穴列 .....	16
4 上墳墓 .....	18
5 上墳 .....	19
6 溝 .....	19
7 柱穴 .....	19
8 遺構に伴わない遺物 .....	20
第4節 まとめ .....	20
第4章 南溝手遺跡 .....	21
第1節 遺跡の概要 .....	21
第2節 縄文時代後期～晩期の遺構・遺物 .....	22

1	概要	22
2	上墳	22
3	柱穴	23
4	遺構に伴わない遺物	23
第3節	弥生時代の遺構・遺物	25
1	概要	25
2	竪穴住居	29
3	井戸	35
4	上墳	40
5	溝	57
6	土器溜まり	58
7	河道	60
8	柱穴	62
9	遺構に伴わない遺物	63
第4節	古墳時代～古代の遺構・遺物	65
1	概要	65
2	竪穴住居	67
3	掘立柱建物	70
4	柱穴列	71
5	上墳	72
6	溝	73
7	河道	75
8	柱穴	77
9	遺構に伴わない遺物	78
第5節	中世～近世の遺構・遺物	81
1	概要	81
2	掘立柱建物	84
3	柱穴列	87
4	井戸	89
5	土墳	90
6	溝	93
7	素掘溝群	97
8	下がり	98
9	柱穴	99

10	遺構に伴わない遺物	100
第6節	まとめ	102
第5章	北溝手遺跡	103
第1節	遺跡の概要	103
第2節	縄文時代の遺構・遺物	104
1	概要	104
2	土壌	106
3	柱穴	107
4	遺構に伴わない遺物	108
第3節	弥生時代の遺構・遺物	109
1	概要	109
2	竪穴住居	115
3	掘立柱建物	152
4	井戸	156
5	土壌	169
6	被熱面	219
7	溝	220
8	水田	230
9	河道	230
10	柱穴	232
11	遺構に伴わない遺物	233
第4節	古墳時代～古代の遺構・遺物	237
1	概要	237
2	土壌	237
3	柵列状遺構	239
4	溝	241
5	水田	244
6	遺構に伴わない遺物	244
第5節	中世～近世の遺構・遺物	245
1	概要	245
2	井戸	248
3	土壌	252
4	溝	257
5	素掘溝群	265

6	水田	265
7	たわみ	266
8	遺構に伴わない遺物	268
第6節	まとめ	269
第6章	総括	271
第1節	遺跡の概要	271
第2節	南溝手遺跡五角形住居について	276
第3節	北溝手遺跡竪穴住居3出土石製品について	279
第4節	漁撈具について	282
付載	自然科学分野における分析・鑑定	288
付載1	南溝手遺跡のプラント・オパール	288
付載2	北溝手遺跡の河道堆積物における稲作の検討	291
付載3	北溝手遺跡竪穴住居3出土炭化材の樹種同定	294
付載4	北溝手遺跡竪穴住居3出土炭化材の放射性炭素年代測定Ⅰ	296
付載5	北溝手遺跡竪穴住居3出土炭化材の放射性炭素年代測定Ⅱ	299
付載6	北溝手遺跡竪穴住居3出土赤色彩文石製品の顔料素材推定	301
付載7	北溝手遺跡井戸1出土種子の識別報告	303
遺構一覧表・遺物観察表		
新旧遺構名称対照表		
図版		
報告書抄録		

## 目次

第1図	遺跡位置図(1/1,500,000)	1	《窪木遺跡》		
第2図	遺跡位置図および 調査地周辺大字名(1/5,000)	2	第7図	遺構全体図・東横断面図(1/500-1/600)	13
第3図	窪木遺跡1事立会調査出土遺物(1/4・1/3)	2	第8図	古墳時代遺構図(1/300)	14
第4図	調査区配置図(1/6,000)	3	第9図	土壇1(1/30)	14
第5図	調査地地形模式図(1/4,000、断面縦1/200)	4	第10図	土壇2(1/30)	14
第6図	周辺主要遺跡分布図(1/50,000)	10	第11図	土壇3(1/30)	15
			第12図	遺構に伴わない遺物(1/4)	15

第13區	中世遺構區(1/300)	16
第14區	掘立柱建物1(1/60)	17
第15區	掘立柱建物2(1/60)・出土遺物(1/4)	17
第16區	柱穴列1(1/60)	18
第17區	柱穴列2(1/60)・出土遺物(1/2)	18
第18區	土槨1・2(1/30)	18
第19區	土槨1(1/30)	19
第20區	土槨5(1/30)・出土遺物(1/4)	19
第21區	溝1(1/30)	19
第22區	溝2(1/30)	19
第23區	柱穴1～3出土遺物(1/4)	19
第24區	遺構に伴わない遺物(1/4・1/3)	20
(南溝手遺跡)		
第25區	遺構全体區・東室所面區(1/2000・1/60)	21
第26區	縄文時代後期～晩期遺構全体區(1/1500)	22
第27區	土槨1(1/30)・出土遺物(1/4)	22
第28區	柱穴1(1/30)・出土遺物(1/4)	23
第29區	遺構に伴わない遺物①(縄文後期①)(1/4)	23
第30區	遺構に伴わない遺物②(縄文後期②)(1/4・1/2)	24
第31區	遺構に伴わない遺物③(縄文晩期)(1/4)	24
第32區	弥生時代遺構全体區(1/1500)	25
第33區	弥生時代遺構區①(1/300)	26
第34區	弥生時代遺構區②(1/300)	27
第35區	弥生時代遺構區③(1/300)	28
第36區	竊穴住居1(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	29
第37區	竊穴住居2占(1/60)・出土遺物(1/3・1/4)	30
第38區	竊穴住居2占出土遺物②(1/3・1/5)	31
第39區	竊穴住居2新(1/60)	31
第40區	竊穴住居2新出土遺物(1/4・1/2)	32
第41區	竊穴住居3古(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	33
第42區	竊穴住居3新(1/60)・出土遺物①(1/4)	34
第43區	竊穴住居3新出土遺物②(1/4・1/2)	35
第44區	井戸1(1/30)・出土遺物(1/4)	35
第45區	井戸2(1/30)・出土遺物(1/4)	36
第46區	井戸3(1/30)・出土遺物(1/4)	37
第47區	井戸4(1/30)・出土遺物①(1/4)	37
第48區	井戸4出土遺物②(1/4・1/2)	38
第49區	井戸5(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	39
第50區	井戸6(1/30)・出土遺物(1/4)	39
第51區	土槨2(1/30)・出土遺物(1/4)	40
第52區	土槨3(1/30)・出土遺物(1/4)	40
第53區	土槨4(1/30)	41
第54區	土槨5(1/30)・出土遺物(1/4)	41
第55區	土槨6(1/30)	42

第56區	土槨7(1/30)・出土遺物(1/4)	42
第57區	土槨8(1/30)・出土遺物①(1/4)	42
第58區	土槨8出土遺物②(1/4)	43
第59區	土槨9(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	43
第60區	土槨10(1/30)	44
第61區	土槨11(1/30)・出土遺物(1/4)	44
第62區	土槨12(1/30)	44
第63區	土槨13(1/30)	45
第64區	土槨14(1/30)	45
第65區	土槨15(1/30)	45
第66區	土槨16(1/30)	45
第67區	土槨17(1/30)	45
第68區	土槨18(1/30)	46
第69區	土槨19(1/30)・出土遺物①(1/4)	46
第70區	土槨19出土遺物②(1/4)	47
第71區	土槨20(1/60)・出土遺物①(1/4・1/3)	47
第72區	土槨20出土遺物②(1/4・1/2・1/3)	48
第73區	土槨21(1/30)	49
第74區	土槨22(1/30)・出土遺物(1/4)	49
第75區	土槨23(1/30)・出土遺物(1/4)	49
第76區	土槨24(1/30)	50
第77區	土槨25(1/30)・出土遺物(1/4)	50
第78區	土槨26(1/30)・出土遺物(1/4)	50
第79區	土槨27(1/30)	51
第80區	土槨28(1/30)	51
第81區	土槨29(1/30)	51
第82區	土槨30(1/30)・出土遺物(1/4)	51
第83區	土槨31(1/30)	52
第84區	土槨32(1/30)	52
第85區	土槨33(1/30)・出土遺物(1/4)	52
第86區	土槨34(1/30)・出土遺物(1/4)	52
第87區	土槨35(1/30)	53
第88區	土槨36(1/30)	53
第89區	土槨37(1/30)・出土遺物(1/4)	53
第90區	土槨38(1/30)	54
第91區	土槨39(1/30)・出土遺物(1/4)	54
第92區	土槨40(1/30)	55
第93區	土槨41(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	55
第94區	土槨42(1/30)	55
第95區	土槨43(1/30)	56
第96區	土槨44(1/30)・出土遺物(1/4)	56
第97區	土槨45(1/30)	56
第98區	土槨45出土遺物(1/4)	57
第99區	土槨46(1/30)	57
第100區	溝1(1/30)	57

第101回	溝 2 (1/30) .....	58	第144回	孤立柱建物 5 (1/60) .....	86
第102回	土器高まり 1 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	58	第145回	孤立柱建物 6 (1/60)・出土遺物(1/4) .....	87
第103回	土器高まり 2 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	59	第146回	柱穴列 3 (1/60)・出土遺物(1/4) .....	88
第104回	土器高まり 3 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	59	第147回	柱穴列 4 (1/60) .....	88
第105回	土器高まり 4 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	60	第148回	柱穴列 5 (1/60) .....	88
第106回	河道 1・2 断面図(1/80) .....	60	第149回	柱穴列 6 (1/60) .....	88
第107回	河道 1 出土遺物①(1/4) .....	61	第150回	井戸 7 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	89
第108回	河道 1 出土遺物②(1/4) .....	62	第151回	井戸 8 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	89
第109回	柱穴 2 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	62	第152回	井戸 9 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	90
第110回	柱穴 3～9 出土遺物(1/4) .....	62	第153回	土坑50(1/30)・出土遺物(1/4) .....	90
第111回	遺構に伴わない遺物①(1/4) .....	63	第154回	土坑51(1/30) .....	90
第112回	遺構に伴わない遺物②(1/1・1/3・1/2) .....	64	第155回	土坑52(1/30) .....	91
第113回	古墳時代～古代遺構全体図(1/1,500) .....	65	第156回	土坑53(1/30) .....	91
第114回	古墳時代～古代遺構図①(1/300) .....	66	第157回	土坑54(1/30) .....	91
第115回	古墳時代～古代遺構図②(1/300) .....	67	第158回	土坑55(1/30)・出土遺物(1/4) .....	91
第116回	堅穴住居 4 (1/60) .....	68	第159回	土坑56(1/60)・出土遺物(1/4) .....	92
第117回	堅穴住居 4 出土遺物①(1/4・1/3・1/2) .....	69	第160回	土坑57(1/30)・出土遺物(1/4) .....	93
第118回	堅穴住居 4 出土遺物②(1/3・1/5) .....	70	第161回	土坑58(1/60)・出土遺物(1/4) .....	93
第119回	孤立柱建物 1 (1/60)・出土遺物(1/4) .....	71	第162回	溝 8・9 (1/30) .....	93
第120回	柱穴列 1 (1/60)・出土遺物(1/4) .....	72	第163回	溝 8 (1/30)・溝 8・9 出土遺物(1/4) .....	94
第121回	柱穴列 2 (1/60) .....	72	第164回	溝10(1/30) .....	94
第122回	土坑17(1/30)・出土遺物(1/4) .....	72	第165回	溝11(1/30) .....	94
第123回	土坑48(1/30)・出土遺物(1/4) .....	72	第166回	溝11出土遺物(1/4) .....	95
第124回	土坑19(1/30)・出土遺物(1/4・1/3) .....	73	第167回	溝12(1/30)・出土遺物(1/4) .....	95
第125回	溝 3 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	73	第168回	溝13(1/30)・出土遺物(1/4) .....	95
第126回	溝 4 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	74	第169回	溝14(1/30) .....	95
第127回	溝 5 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	74	第170回	溝15(1/30) .....	95
第128回	溝 6 (1/30) .....	74	第171回	溝16(1/60) .....	96
第129回	溝 7 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	74	第172回	溝17(1/30)・出土遺物(1/4) .....	96
第130回	河道 2 出土遺物①(1/4) .....	75	第173回	溝18・19(1/30)・溝19出土遺物(1/4) .....	96
第131回	河道 2 出土遺物②(1/4・1/3) .....	76	第174回	素掘溝群 1 (1/60) .....	97
第132回	河道 2 出土遺物③(1/4・1/3) .....	77	第175回	素掘溝群 2 (1/60) .....	97
第133回	柱穴10(1/30)・出土遺物(1/4) .....	77	第176回	素掘溝群 3 (1/60) .....	97
第134回	柱穴11出土遺物(1/4) .....	77	第177回	下がり 1 出土遺物(1/4・1/3) .....	98
第135回	遺構に伴わない遺物①(1/4・1/3) .....	78	第178回	下がり 2 出土遺物(1/4) .....	98
第136回	遺構に伴わない遺物②(1/1・1/3) .....	79	第179回	下がり 3 出土遺物(1/4) .....	98
第137回	遺構に伴わない遺物③(1/3) .....	80	第180回	下がり 3 (1/60) .....	99
第138回	中世～近世遺構全体図(1/1,500) .....	81	第181回	柱穴12(1/30)・出土遺物(1/4) .....	99
第139回	中世～近世遺構図①(1/300) .....	82	第182回	柱穴13～17出土遺物(1/3・1/4) .....	100
第140回	中世～近世遺構図②(1/300) .....	83	第183回	遺構に伴わない遺物①(1/4) .....	100
第141回	孤立柱建物 2 (1/60) .....	84	第184回	遺構に伴わない遺物②(1/4・1/2・1/3) .....	101
	・P 3 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	84			
第142回	孤立柱建物 3 (1/60) .....	85			
	・P 4 (1/30)・出土遺物(1/4) .....	85			
第143回	孤立柱建物 4 (1/60) .....	85			

(北溝手遺跡)

第185回	遺構全体図(1/2,000) .....	103
第186回	西壁前面図(1/60) .....	104

第187回	縄文時代遺構図①(1/300)	104	第228回	堅穴住居12(1/60)・出土遺物(1/2・1/1)	141
第188回	縄文時代遺構図②(1/300)	105	第229回	堅穴住居13~15(1/60)	142
第189回	土壇1(1/30)・出土遺物(1/4)	106	第230回	堅穴住居13(1/60)	143
第190回	土壇2(1/30)・出土遺物(1/4)	106	第231回	堅穴住居14(1/60)	143
第191回	土壇3(1/30)・出土遺物(1/4)	107	第232回	堅穴住居15(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	144
第192回	柱穴1出土遺物(1/4・1/2)	107	第233回	堅穴住居16(1/60)・出土遺物(1/4)	145
第193回	柱穴2出土遺物(1/4)	107	第234回	堅穴住居17(1/60)	145
第194回	遺構に伴わない遺物(1/4・1/2・1/3)	108	第235回	堅穴住居17出土遺物(1/4・1/2)	146
第195回	弥生時代遺構全体図(1/1,500)	109	第236回	堅穴住居18(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	146
第196回	弥生時代遺構図①(1/300)	110	第237回	堅穴住居18出土遺物②(1/4)	147
第197回	弥生時代遺構図②(1/300)	111	第238回	堅穴住居19(1/60)	147
第198回	弥生時代遺構図③(1/300)	112	第239回	堅穴住居19出土遺物①(1/1・1/2・1/3)	148
第199回	弥生時代遺構図④(1/300)	113	第240回	堅穴住居19出土遺物②(1/4)	149
第200回	弥生時代遺構図⑤(1/300)	114	第241回	堅穴住居20(1/60)・出土遺物①(1/4・1/3)	149
第201回	堅穴住居1(1/60)・出土遺物①(1/1)	115	第242回	堅穴住居21(1/60)	150
第202回	堅穴住居1出土遺物②(1/4)	116	第243回	堅穴住居22(1/60)	150
第203回	堅穴住居2(1/60)	116	第244回	堅穴住居22出土遺物(1/4・1/2)	151
第204回	堅穴住居2出土遺物①(1/1)	117	第245回	堅穴住居23(1/60)・出土遺物(1/4)	151
第205回	堅穴住居2出土遺物②(1/1・1/2)	118	第246回	稲刈柱建物1(1/60)	152
第206回	堅穴住居3(1/60)	119	第247回	稲刈柱建物1出土遺物(1/4)	153
第207回	堅穴住居3南面図(1/60)	120	第248回	稲刈柱建物2(1/60)	153
第208回	堅穴住居3出土遺物①(1/1・1/2)	121	第249回	稲刈柱建物3(1/60)・出土遺物(1/1)	154
第209回	堅穴住居3出土遺物②(1/4)	122	第250回	稲刈柱建物4(1/60)	154
第210回	堅穴住居3出土遺物③(1/2・1/3)	123	第251回	稲刈柱建物5(1/60)・出土遺物(1/4)	155
第211回	堅穴住居5アワード設定図(1/120)	124	第252回	稲刈柱建物6(1/60)	155
第212回	堅穴住居5出土遺物①(1/4)	125	第253回	井戸1(1/30)	156
第213回	堅穴住居5出土遺物②(1/4)	126	第254回	井戸1出土遺物①(1/4)	157
第214回	堅穴住居5出土遺物③(1/3・1/1・1/3・1/2)	127	第255回	井戸1出土遺物②(1/4)	158
第215回	堅穴住居5出土遺物④(1/2・1/3・1/4)	128	第256回	井戸1出土遺物③(1/4)	159
第216回	堅穴住居4(1/60)・出土遺物(1/3・1/2)	129	第257回	井戸1出土遺物④(1/4)	160
第217回	堅穴住居5(1/60)・出土遺物(1/2・1/4)	130	第258回	井戸1出土遺物⑤(1/4)	161
第218回	堅穴住居6~10(1/80)	131	第259回	井戸1出土遺物⑥(1/4)	162
第219回	堅穴住居6(1/60) ・出土遺物(1/4・1/2・1/3)	132	第260回	井戸1出土遺物⑦(1/4)	163
第220回	堅穴住居7(1/60)	133	第261回	井戸1出土遺物⑧(1/4)	164
第221回	堅穴住居7出土遺物(1/4・1/2・1/3)	134	第262回	井戸2(1/30)・出土遺物①(1/4)	165
第222回	堅穴住居8古(1/60) ・出土遺物(1/4・1/3・1/2)	135	第263回	井戸2出土遺物②(1/4)	166
第223回	堅穴住居8新(1/60) ・出土遺物(1/2・1/3・1/4)	136	第264回	井戸3(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	167
第224回	堅穴住居9(1/60)・出土遺物(1/4)	137	第265回	井戸4(1/30)・出土遺物①(1/2)	168
第225回	堅穴住居10(1/60) ・出土遺物(1/3・1/2・1/4)	138	第266回	井戸4出土遺物②(1/4)	169
第226回	堅穴住居11(1/60)・出土遺物①(1/3・1/2)	139	第267回	土壇4(1/30)・出土遺物(1/2)	169
第227回	堅穴住居11出土遺物②(1/1)	140	第268回	土壇5(1/30)・出土遺物(1/4)	170
			第269回	土壇6(1/30)	170
			第270回	土壇6出土遺物(1/4)	171
			第271回	土壇7(1/30)・出土遺物(1/4)	171
			第272回	土壇8(1/30)・出土遺物(1/4)	172

第273回	上塚9(1/30)	172	第318回	土塚18(1/30)・出土遺物(1/4)	197
第274回	上塚10(1/30)	173	第319回	土塚49(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	198
第275回	土塚11(1/30)・出土遺物(1/4)	173	第320回	土塚50(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	198
第276回	土塚12(1/30)・出土遺物(1/2・1/4)	174	第321回	土塚51(1/30)	198
第277回	土塚13(1/30)	174	第322回	土塚52(1/30)・出土遺物(1/4)	199
第278回	土塚14(1/40)・出土遺物①(1/4)	175	第323回	土塚53(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	200
第279回	土塚14出土遺物②(1/4)	176	第324回	土塚54(1/30)・出土遺物(1/4)	200
第280回	上塚14出土遺物③(1/4・1/2・1/3)	177	第325回	土塚55(1/30)	201
第281回	土塚15(1/30)・出土遺物①(1/3・1/2)	178	第326回	土塚56(1/30)・出土遺物(1/4)	201
第282回	土塚15出土遺物②(1/4)	179	第327回	土塚57(1/30)・出土遺物(1/4)	201
第283回	土塚16(1/30)・出土遺物(1/2)	180	第328回	土塚58(1/30)・出土遺物(1/4)	202
第284回	土塚17(1/30)・出土遺物(1/4)	180	第329回	土塚59(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	202
第285回	土塚18(1/30)・出土遺物(1/4)	181	第330回	土塚60(1/30)	202
第286回	土塚19(1/30)・出土遺物(1/4)	182	第331回	土塚60出土遺物(1/4)	203
第287回	土塚20(1/30)・出土遺物(1/4)	182	第332回	土塚61(1/30)	203
第288回	土塚21(1/30)・出土遺物(1/2)	182	第333回	土塚61出土遺物(1/4)	204
第289回	土塚22(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	183	第334回	土塚62(1/30)・出土遺物(1/4)	204
第290回	土塚23(1/30)・出土遺物(1/4)	184	第335回	土塚63(1/30)・出土遺物(1/4)	204
第291回	土塚24(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	184	第336回	土塚64(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	205
第292回	土塚25(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	184	第337回	土塚65(1/30)	205
第293回	土塚26(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	185	第338回	土塚66(1/30)・出土遺物(1/4)	205
第294回	土塚27(1/30)・出土遺物(1/4)	186	第339回	土塚67(1/30)・出土遺物(1/4)	206
第295回	土塚28(1/30)・出土遺物(1/4)	186	第340回	土塚68(1/30)・出土遺物(1/4)	206
第296回	土塚29(1/30)・出土遺物(1/4)	186	第341回	土塚69(1/30)・出土遺物①(1/3)	206
第297回	土塚30(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	187	第342回	土塚69出土遺物②(1/4)	207
第298回	土塚31(1/30)・出土遺物(1/4)	188	第343回	土塚70(1/30)・出土遺物(1/4)	207
第299回	土塚32(1/30)	188	第344回	土塚71(1/30)	207
第300回	土塚32出土遺物(1/4)	189	第345回	土塚71出土遺物(1/4)	208
第301回	土塚33(1/30)	189	第346回	土塚72(1/30)・出土遺物(1/4)	208
第302回	土塚33出土遺物(1/4)	190	第347回	土塚73(1/30)・出土遺物(1/4)	209
第303回	土塚34(1/30)・出土遺物(1/4)	190	第348回	土塚74(1/30)・出土遺物(1/4)	209
第304回	土塚35(1/30)	191	第349回	土塚75(1/30)	210
第305回	土塚36(1/30)・出土遺物(1/4)	191	第350回	土塚76(1/30)	210
第306回	土塚37(1/30)	191	第351回	土塚77(1/30)	210
第307回	土塚37出土遺物(1/4)	192	第352回	土塚78(1/30)・出土遺物(1/4)	210
第308回	土塚38(1/60)・出土遺物(1/4)	192	第353回	土塚79(1/30)	211
第309回	土塚39(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	193	第354回	土塚80(1/30)	211
第310回	土塚40(1/30)・出土遺物(1/4)	193	第355回	土塚81(1/30)・出土遺物(1/4)	212
第311回	土塚41(1/30)・出土遺物(1/4)	194	第356回	土塚82(1/30)	213
第312回	土塚42(1/30)	194	第357回	土塚83(1/30)・出土遺物(1/4)	213
第313回	土塚43(1/30)・出土遺物(1/4)	195	第358回	土塚84(1/30)	213
第314回	土塚44(1/30)・出土遺物(1/4)	195	第359回	土塚85(1/30)	213
第315回	土塚45(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	196	第360回	土塚85出土遺物(1/4)	214
第316回	土塚46(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	196	第361回	土塚86(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	214
第317回	土塚47(1/30)・出土遺物(1/4)	197	第362回	土塚87(1/30)	215

第363図	土塚88(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)……………	215	第408図	横列状遺構1(1/60)……………	230
第364図	土塚89(1/30)……………	216	第409図	横列状遺構2(1/60)・出土遺物(1/3)……………	239
第365図	土塚90(1/30)・出土遺物(1/4)……………	216	第410図	横列状遺構3(1/60)……………	240
第366図	土塚91(1/30)・出土遺物(1/4)……………	216	第411図	横列状遺構4(1/60)……………	210
第367図	土塚92(1/30)……………	216	第412図	横列状遺構5(1/60)……………	240
第368図	土塚93(1/30)・出土遺物(1/4)……………	217	第413図	溝21(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)……………	241
第369図	土塚94(1/30)……………	217	第414図	溝22(1/30)・出土遺物(1/4)……………	212
第370図	土塚95(1/30)・出土遺物(1/4)……………	218	第415図	溝23(1/30)・出土遺物(1/4)……………	242
第371図	土塚96(1/30)・出土遺物(1/4)……………	218	第416図	溝24(1/30)・出土遺物(1/4)……………	242
第372図	土塚97・98(1/30)・土塚97出土遺物(1/4)……………	219	第417図	溝25(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)……………	242
第373図	核断面1(1/30)……………	219	第418図	溝26(1/30)……………	242
第374図	溝1(1/60)・出土遺物①(1/2・1/3)……………	220	第419図	溝27・29(1/30)・溝29出土遺物(1/4)……………	213
第375図	溝1出土遺物②(1/4)……………	221	第420図	溝30・31(1/30)……………	243
第376図	溝1出土遺物③(1/4)……………	222	第421図	水田2出土遺物(1/4)……………	244
第377図	溝1出土遺物④(1/4)……………	223	第422図	遺構に伴わない遺物(1/4・1/3)……………	211
第378図	溝2(1/30)・出土遺物(1/4)……………	223	第423図	中世～近世遺構全体図(1/500)……………	245
第379図	溝3(1/30)・出土遺物(1/2・1/4)……………	223	第424図	中世～近世遺構区①(1/400)……………	246
第380図	溝4(1/30)・出土遺物(1/4)……………	224	第425図	中世～近世遺構区②(1/300)……………	217
第381図	溝5(1/30)・出土遺物(1/4)……………	224	第426図	調査区北壁断面図(1/60)……………	247
第382図	溝6(1/30)……………	224	第427図	井戸5(1/30)……………	248
第383図	溝7(1/30)・出土遺物(1/4)……………	224	第428図	井戸6(1/30)・出土遺物(1/3)……………	219
第384図	溝8(1/30)・出土遺物(1/4)……………	225	第429図	井戸7(1/30)・出土遺物(1/4)……………	249
第385図	溝9(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)……………	225	第430図	井戸8(1/30)……………	249
第386図	溝10(1/30)・出土遺物①(1/4)……………	226	第431図	井戸9・10(1/30)・井戸9出土遺物(1/4)……………	250
第387図	溝10出土遺物②(1/2)……………	227	第432図	井戸11(1/30)・出土遺物(1/4)……………	251
第388図	溝11(1/30)・出土遺物①(1/2・1/3)……………	227	第433図	井戸12・13(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)……………	251
第389図	溝11出土遺物②(1/4)……………	228	第434図	土塚100(1/30)……………	252
第390図	溝12(1/30)……………	228	第435図	土塚101(1/60)……………	252
第391図	溝13(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)……………	229	第436図	土塚102(1/60)……………	252
第392図	溝14～16(1/30)……………	229	第437図	土塚103(1/60)……………	252
第393図	溝17(1/30)・出土遺物(1/4)……………	229	第438図	土塚104(1/30)……………	253
第394図	溝18(1/30)……………	230	第439図	土塚105(1/30)……………	253
第395図	溝19(1/30)……………	230	第440図	土塚106(1/30)……………	253
第396図	溝20(1/30)・出土遺物(1/4)……………	230	第441図	土塚107(1/30)・出土遺物(1/3)……………	254
第397図	河道1(1/120)・出土遺物①(1/4)……………	231	第442図	土塚108(1/30)……………	254
第398図	河道1出土遺物②(1/3)……………	232	第443図	土塚109(1/30)……………	254
第399図	柱穴出土遺物①(1/4・1/2)……………	232	第444図	土塚110(1/30)……………	255
第400図	柱穴出土遺物②(1/4)……………	233	第445図	土塚111(1/30)……………	255
第401図	遺構に伴わない遺物①(1/4)……………	233	第446図	土塚112(1/30)……………	255
第402図	遺構に伴わない遺物②(1/4)……………	234	第447図	土塚113～116(1/30)……………	256
第403図	遺構に伴わない遺物③(1/2)……………	235		・土塚115・116出土遺物(1/4)……………	256
第404図	遺構に伴わない遺物④(1/3・1/2)……………	236	第448図	土塚117(1/30)……………	257
第405図	土塚99(1/30)・出土遺物(1/3)……………	237	第449図	溝33・34(1/30)……………	257
第406図	古墳時代～古代遺構全体図(1/500)……………	237	第450図	溝35・36(1/30)……………	257
第407図	古墳時代～古代遺構図(1/600)……………	238	第451図	溝37(1/30)……………	258

第452回	溝38(1/30).....	258	第470回	溝57(1/30)・出土遺物(1/4・1/3).....	263
第453回	溝39(1/30).....	258	第471回	溝58～60(1/30)・溝58～60出土遺物(1/4).....	264
第454回	溝40(1/30).....	258	第472回	溝61(1/30).....	264
第455回	溝41(1/30).....	258	第473回	溝62(1/30)・出土遺物(1/4).....	264
第456回	溝42(1/30).....	258	第474回	素掘溝群1(1/30).....	265
第457回	溝43・44(1/30).....	259	第475回	素掘溝群2(1/30).....	265
第458回	溝45(1/30)・出土遺物(1/4・1/3).....	259	第476回	水田3(1/30).....	265
第459回	溝46(1/30・1/80) ・溝45・46出土遺物(1/4・1/3).....	260	第477回	水田3出土遺物(1/4・1/3).....	266
第460回	溝47(1/30).....	261	第478回	たわみ1(1/30).....	266
第461回	溝48(1/30・1/80)・出土遺物(1/4).....	261	第479回	たわみ2(1/30)・出土遺物(1/4).....	266
第462回	溝49(1/30)・出土遺物(1/4).....	261	第480回	たわみ3(1/30)・出土遺物(1/3).....	267
第463回	溝50(1/30).....	262	第481回	たわみ4(1/30).....	267
第464回	溝51(1/30).....	262	第482回	たわみ5(1/30)・出土遺物(1/4).....	267
第465回	溝52(1/30).....	262	第483回	遺構に伴わない遺物(1/4・1/3・1/2).....	268
第466回	溝53(1/30).....	262	第484回	遺跡安瀬園(1/2,500).....	272
第467回	溝54(1/30)・出土遺物(1/4).....	262	第485回	主要遺構位置図(1/5,000).....	274
第468回	溝55(1/30).....	263	第486回	竪穴住居3石材表出1分布(1/150).....	280
第469回	溝56(1/30).....	263	第487回	南溝子遺跡・北溝子遺跡から出土した銅.....	283

## 表目次

表1	調査一覧・経過一覧.....	3	表6	竪穴住居3出土石製品の種類.....	270
表2	現地説明会・現地公開一覧.....	5	表7	南溝子遺跡・北溝子遺跡出土物の分類.....	282
表3	文化財保護法に基づいた文書一覧.....	6	表8	岡山県内の主な石鐘・土鐘出土遺跡一覧.....	284
表4	時期別主要遺構一覧.....	271	表9	兵庫北門入船納帳に記載されている瀬産物の種目何.....	286
表5	岡山県内の多角形住居一覧.....	277			

## 写真目次

写真1	現地説明会 H21.6.28.....	5	写真14	竪立柱建物1周辺(南東から).....	85
写真2	現地説明会 H22.2.21.....	5	写真15	竪立柱建物6・柱穴列6(北西から).....	86
写真3	現場公開 H22.7.27.....	5	写真16	土器29出土状況(北から).....	108
写真4	現地説明会 H22.9.4.....	5	写真17	作業風景(南西から).....	121
写真5	土器3作業風景(南西から).....	15	写真18	土器80・84出土状況(南から).....	124
写真6	窪木遺跡調査風景(北西から).....	15	写真19	竪穴住居6・8検出状況(南から).....	131
写真7	土器器1・2調査風景(南東から).....	18	写真20	方形土坑検出状況(南から).....	141
写真8	南溝子遺跡遠景(南西から).....	25	写真21	東側壁体内小穴列検出状況(南から).....	150
写真9	36H(井)1・土器群作業風景(北西から).....	57	写真22	P4・5検出状況(南西から).....	150
写真10	河道2作業風景(北西から).....	65	写真23	白色粘土検出状況(西から).....	156
写真11	竪立柱建物1作業風景(北西から).....	70	写真24	土器350出土状況(南東から).....	167
写真12	38H Y 銅位部作業風景(南から).....	80	写真25	B区南平中世～近世全景(北から).....	245
写真13	下谷り3作業風景(北から).....	81	写真26	溝35(南東から).....	257

# 図版目次

## (巻頭図版)

- 巻頭図版1 遺跡透景(南東上空から)  
巻頭図版2 南溝手遺跡 弥生時代～古墳時代全景(南東から)  
巻頭図版3 南溝手遺跡 36H1～11W弥生時代全景(北西から)  
巻頭図版4 1 北溝手遺跡竪穴住居3出土土器  
2 北溝手遺跡竪穴住居3出土管玉  
3 北溝手遺跡竪穴住居3出土赤色彩文石製品  
4 北溝手遺跡井戸1出土土器

## (窪木遺跡)

- 図版1 1 掘立柱建物1・2、柱穴列1・2(南から)  
2 土壇墓1・2(南から)  
3 土壇3(西から)  
図版2 1 遺跡全景(北西から)  
2 出土遺物

## (南溝手遺跡)

- 図版3 1 32H O～32H W縄文時代後期遺物出土状況  
(南東から)  
2 土壇1(北西から)  
図版4 1 竪穴住居1(西から)  
2 竪穴住居2古(北から)  
3 竪穴住居2新(西から)  
図版5 1 竪穴住居3古(北西から)  
2 竪穴住居3新(北西から)  
3 井戸1(北から)  
図版6 1 井戸2(北西から)  
2 井戸4(東から)  
3 土壇8(南から)  
図版7 1 土壇9(西から)  
2 土壇10・20(東から)  
3 土壇30(北東から)  
図版8 1 土壇40(南から)  
2 土壇42(東から)  
3 河道1(南西から)  
図版9 1 竪穴住居4(南東から)  
2 土壇47(南から)  
3 溝3(東から)  
図版10 1 河道2(南西から)  
2 掘立柱建物2(北から)  
3 掘立柱建物3 階段(南西から)

- 図版11 1 掘立柱建物3(北西から)  
2 掘立柱建物4(北東から)  
3 掘立柱建物5・柱穴列4(南から)  
図版12 1 井戸8(南東から)  
2 井戸9(東から)  
3 土壇56(北東から)  
図版13 1 土壇57・58周辺(南東から)  
2 溝8・9 階段(北西から)  
3 柱穴12(南東から)  
図版14 土器①(縄文土器)  
図版15 土器②(弥生土器)  
図版16 土器③(弥生土器・土器器・須恵器・瓦)  
図版17 1 土製品  
2 金属製品  
図版18 石器

## (北溝手遺跡)

- 図版19 16O・Q弥生時代遺物全景(南から)  
図版20 1 10E・G、12G・I、14K・M、16M弥生時代遺物全景(上空から・上から)  
2 同上(北西から)  
図版21 1 22H A南西面西壁土層断面(南東から)  
2 土壇2(北東から)  
図版22 1 10・12G弥生時代遺物全景(南東から)  
2 14K・M、16M弥生時代遺物全景(南東から)  
3 22W・Y弥生時代遺物全景(北西から)  
図版23 1 22W・Y弥生時代遺物全景(南東から)  
2 竪穴住居1(南から)  
3 竪穴住居2(南から)  
図版24 1 竪穴住居3炭化材・遺物出土状況①(南東から)  
2 竪穴住居3炭化材・遺物出土状況②(南から)  
3 竪穴住居3完掘状況(南東から)  
図版25 1 竪穴住居3 P40～42土層断面(南から)  
2 竪穴住居3 P40～42完掘状況(南東から)  
3 竪穴住居4(北東から)  
図版26 1 竪穴住居5(北から)  
2 竪穴住居7(西から)  
3 竪穴住居11遺物出土状況(北から)  
図版27 1 竪穴住居12(東から)  
2 竪穴住居13～15(北から)  
3 竪穴住居19(南西から)

図版28	1	竪穴住居22 (南西から)	図版37	1	横列状遺構3 (東から)
	2	竪穴住居25 (南西から)		2	溝25 (北西から)
	3	掘立柱建物1・2 (東から)		3	14K・M、16M・O中世～近世遺構全景 (北西から)
図版29	1	掘立柱建物3 (東から)			
	2	掘立柱建物4 (南東から)	図版38	1	井戸5・6 (北西から)
	3	掘立柱建物6 (南西から)		2	井戸7 (南東から)
図版30	1	井戸1 上層遺物出土状況 (西から)		3	井戸12・13 (南西から)
	2	井戸1 完掘状況 (西から)	図版39	1	土壇100 (北東から)
	3	井戸2 遺物出土状況 (北東から)		2	土壇106 (北から)
図版31	1	井戸3 (北東から)		3	土壇108～112 (南東から)
	2	井戸4 (南東から)	図版40	1	土器① (縄文土器)
	3	土壇5 (南西から)		2	土器② (弥生前期土器)
図版32	1	土壇6 (東から)	図版41	1	土器③ (竪穴住居3出土土器)
	2	土壇14 (南から)		2	土器④ (弥生土器)
	3	土壇11土層断面 (南から)	図版42	土器⑤ (弥生土器)	
図版33	1	土壇15 (南西から)	図版43	土器⑥ (弥生土器)	
	2	土壇17 (西から)	図版44	1	土器⑦ (弥生土器)
	3	土壇18遺物出土状況 (南西から)		2	土器⑧ (土壇14出土弥生土器)
図版34	1	土壇17～19 (西から)	図版45	土器⑨ (弥生土器)	
	2	土壇72 (南東から)	図版46	土器⑩ (弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・備前 焼・陶器・磁器・瓦)	
	3	土壇78 (北東から)	図版47	石器①	
図版35	1	土壇86 (北西から)	図版48	石器②	
	2	土壇93 (西から)	図版49	石器③	
	3	溝1 (北東から)	図版50	1	土製品
図版36	1	溝1 土層断面 (西から)		2	金属製品
	2	溝9～11 (北西から)			
	3	横列状遺構1・2 (北から)			

# 第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

岡山市西部から総社市・高梁市・新見市を経て鳥取県へと至る一般国道180号は、岡山市北区橋津から総社市井尻野にかけての利用頻度が特に高く、年々増加傾向の交通量とこれによる渋滞が問題化していた。一般国道180号バイパスは、これを解消する目的で計画され、平成20年3月総社ICから総社市窪木間の一部が供用開始となった。

一方、これと接続して地域の一層の利便性を高めることを目的に岡山県備中県民局によって計画されたのが、一般県道服部停車場線の改築である。従来の服部停車場線は、旧国道180号沿線の南溝手と北溝手のJR吉備線服部駅北地点を結んで集落内を抜ける道であった。計画ではこれを東200mの地点に新たにルート変更し、2車線で幅員6mの道路とするものであった。

当該地域は、古くから数多くの遺跡が存在することが知られていた。なかでも備中国府跡・稻寺庵寺をはじめとして平成2～6年の県立大学建設に伴う発掘調査、および平成14年～19年にかけての180号バイパス工事に伴う発掘調査等によって判明した縄文時代以降中・近世にかけての多くの遺跡が広く存在する地域であった。

こうした地域性に鑑み、計画を受けた岡山県文化財課はその取り扱いについて岡山県備中県民局と協議を重ねた。その結果、対象地である南溝手遺跡については、平成20年1月から予定路線内での遺跡の有無と広がりとその内容を探る目的で確認調査を実施した。この結果、路線内には全面に遺構の存在が判明した。これにより、南溝手遺跡の全面調査を岡山県古代吉備文化財センターによって実施することとなった。また、調査途中の平成20年5月には北溝手遺跡についても二次調査を実施し、遺跡の広がりを確認したことで引き続き本発掘調査の対象となった。

さらに、県立大学西に接した道路と水路部分(北溝手遺跡A区)についても遺跡の広がり、特に条里遺構が現用水路と重複して、その遺存が予想されることから、県民局と協議を行い、工事工程を睨みながら調査を実施することとなった。

なお、平成19年8月、180号バイパスと服部線の交差点に歩道橋の建設が予定され、その基礎の用地が県有地の未掘部分にあることから県文化財課が立会調査を実施した。その結果、土層断面中において竈穴住居の存在を確認したが掘削対象範囲が狭小であることから調査については工事立会とした。

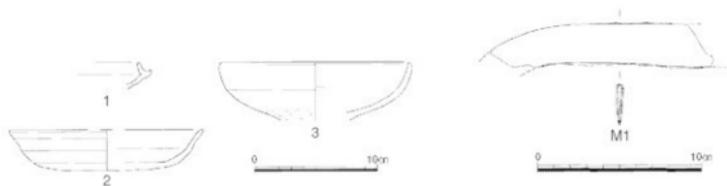
(島崎)



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 遺跡位置図および調査地周辺大字名 (1/5,000)

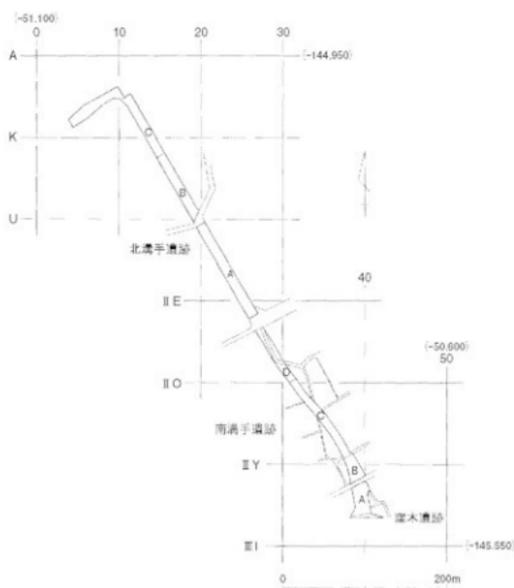


第3図 窪木遺跡 工事立会調査出土遺物 (1/4・1/3)

## 第2節 発掘調査の経過

平成19年度に行った南溝手遺跡の確認調査結果を受けて、平成20年度は調査員3名体制で発掘調査を進めた。調査対象地のほとんどが大字「南溝手」であったが、一般国道180号総社・一宮バイパスとの取り付け部のみが大字「窪木」であるため、その部分を窪木遺跡と呼称して調査を行った。

平成20年度はまず4～6月の3か月間で、窪木遺跡と南溝手遺跡A区・B区の調査に入り、窪木遺跡では中世の建物群や土壘墓を検出した。南溝手遺跡A区・B区は窪木遺跡の微高地から北へと下がる旧河道域にあたる。特にB区北端では、河道埋没過程の最終段階状況を確認することができ、その中に含まれる多くの弥生土器や土師器は、

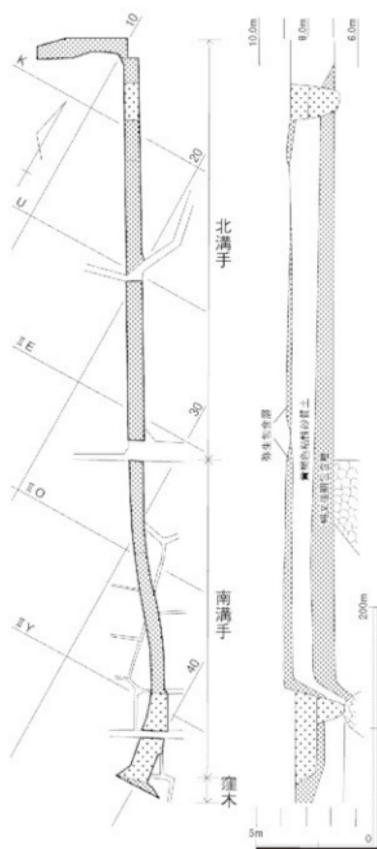


第4図 調査区配置図 (1/6,000)

表1 調査一覧・経過一覧

遺跡・地区名	年度	面積 (㎡)	遺構数	遺物数	担当者	
確認調査	19	42	6	1	畑田 剛	
窪木遺跡	20	146	17	6	岡本浩久 松尾佳子 西木 亨	
南溝手遺跡	A・B・C・DE区	20	1,748	53	57	岡本浩久 松尾佳子 西木 亨 野崎佳世
	C・DE区	21	1,377	73	43	岡本浩久 松尾佳子 高山洋樹
	小計		3,125	126	100	
北溝手遺跡	BE区	21	972	112	85	岡本浩久 松尾佳子 高山洋樹
	A・B・C区	22	2,342	152	93	島尾 東 渡邊憲昭 高山洋樹
	小計		3,314	264	173	
総計		6,585	416	286		

	10	20	21	22
窪木遺跡	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100			
南溝手遺跡	A	—		
	B	—		
	C		—	
	D		—	—
	E			—
北溝手遺跡	A			—
	B		—	—
	C			—



第5図 調査地旧地形模式図  
(1/4,000、断面縦1/200)

10～12月の3か月間は、A区中央に流れる用水路の付け替え工事が必要なため調査員3名は報告書作成に従事し、翌1～3月にA区西の調査を行った。なおこれらの発掘調査成果を県民に広く周知するため、計4回の現地説明会及び現地公開を開催している(表2)。

今回の調査により判明した路線内の旧地形(第5図)について最後に記しておきたい。ただし北溝手遺跡C区北西の路線が屈曲する部分については、J R吉備線服部駅周辺開発との兼ね合いから発掘調査が延期になっている。したがって、その部分については平成20年度に実施した一次調査の成果に基づいて旧地形の復原を行うこととする。

路線南端に位置する窪木遺跡は、一般国道180号バイパスに伴う発掘調査(『県報告214』、以下国道

C区の微高地上に新たな集落の存在を予感させた。なお5～6月の間に北溝手遺跡の一次調査をあわせて行い、路線内全域に遺跡が存在することを確認している。

1～3月には南溝手遺跡D区とC区北端の調査に入った。弥生時代の堅穴住居・土壇・土器溜まりや、中世の建物・井戸・土壇・溝などを検出した。

平成21年度は、調査員3名でまず南溝手遺跡C区の調査を行った。当初の予想通り弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて多くの遺構を検出した。また現地表面より1.4m下(標高7.6m)に縄文時代後期の包含層が存在することを確認し、包含層中あるいは上面より土器片や打製石斧が出土した。10月から北溝手遺跡B区へと調査地を移動したところ、弥生時代中期中葉の堅穴住居5軒が重複して見つかるなど遺構密度は極めて高く、県立大学の調査成果を含めて当該期集落の中心域であることが判明した。途中の1か月間(12月)で南溝手遺跡D区の調査残地(用水路)を調査し、中世の井戸・土壇・溝等を検出した。

平成22年度は調査員3名体制で調査を進めた。4～9月には北溝手遺跡B区北半とC区、そしてA区東側の調査を行った。北溝手遺跡B区北半では弥生時代前期の大塚住居を確認し、埋土からは多くの石製品が出土したことから、埋土の洗浄を現場にて実施した。C区では弥生時代後期の基幹水路や古墳時代の水田、A区東では弥生時代中期から後期にかけての堅穴住居・建物・土壇などを検出した。

180B P調査と略す)で明らかになった古墳時代後期集落が展開する微高地の北端にあたる。この微高地から北約60mの幅には旧高梁川の支流である旧河道が東流している。この河道は徐々に埋没していき、中世段階には耕作地となっている。旧河道北端から北溝手遺跡C区の低位部南端にかけては微高地が存在する。この微高地は標高7.6mの地点に縄文時代後期包含層が堆積し、その上には縄文時代晩期以来の基盤層となる黄褐色粘性砂質土層が、その上に弥生時代以降の包含層が堆積している。北溝手遺跡C区の低位部から北には新たな微高地が存在する。なお縄文時代後期包含層は、旧河道を隔てた窪木遺跡や北溝手遺跡C区の低位部より北には広がっていない。また縄文時代後期包含層の下には、部分的に隆起する礫層の存在を確認している。(松尾)

表2 現地説明会・  
現地公開一覧

調査年度	開催日時	遺跡	調査年度	開催日時	遺跡
21年度	6月28日(日)	南溝手遺跡	22年度	7月27日(火)	北溝手遺跡
	2月21日(土)	北溝手遺跡		9月4日(土)	北溝手遺跡



写真1 現地説明会 H21.6.28



写真2 現地説明会 H22.2.21



写真3 現場公開 H22.7.27



写真4 現地説明会 H22.9.4

### 第3節 報告書作成の経過

報告書作成のための整理作業は、平成22年度から文化財センターで実施した。初年度は北溝手遺跡の発掘調査と並行して行ったため、変則的な人員配置になっている。すなわち、調査員1名が通年従事し、4～7月は他1名、10～3月に他1名、10～12月は北溝手遺跡の発掘調査を行っていた調査員3名が共に作業を行った。続く平成23年度の整理作業は、調査員2名で4～7月の4か月間従事した。なお、調査員相互の共通理解を深めるため、随時編集会議を実施した。(松尾)

表3 文化財保護法に基づく文書一覧

## 埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	文書番号 区分	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	F 号	発掘者	期数	発掘内容
1	紀文財 第121号 E20.3.4	墓塚跡 土溝手遺跡	和歌山県和歌山県白旗4-4小	7,000	通知	西山湧水開発局員	E20.1.1～ E21.3.31	発掘調査

## 埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 区分	期数、期別等	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	試掘	試掘地の 名称	発掘者	調査者	調査
1	紀文財 第121号 E20.2.21	期別	墓塚跡 土溝手遺跡	紀文財内溝手140-1小	42	通知	去	西山湧水開発文化財セ ンターが主 調査は行	西山 堀	E20.1.28～ E20.2.19

## 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 区分	対象エリア名称	区画名称	面積 (㎡)	試掘	報告者	調査者	期数
1	紀文財 第100号 E20.4.8	墓塚跡 土溝手遺跡、内溝手遺跡	紀文財内溝手141-1小	2100	近畿7丁	E1上、E2古墳文化財 センター 調査 西山湧水	西山湧水開発局員、西山 堀	E20.1.1～ E21.3.31
2	紀文財 第101号 E21.1.9	墓塚跡 土溝手遺跡	紀文財内溝手121-3小	840			西山湧水開発局員、西山 堀	E21.1.1～ E21.3.31
3	紀文財 第11号 E21.4.7	墓塚跡 内溝手遺跡、土溝手遺跡	紀文財内溝手125-7小	3600		E1内溝手古墳文化財 センターが主 西山湧水	西山湧水開発局員、西山 堀	E21.1.1～ E21.3.31
4	紀文財 第1号 E22.1.7	墓塚跡 土溝手遺跡	紀文財北溝手200-2小	2332			西山湧水開発局員、西山 堀	E22.4.1～ E23.3.31

## 埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

番号	文書番号 区分	物件名	所在地	地上面積	発見者	発見場所	土地所有者
1	紀文財 第122号 E20.2.20	(E20)遺跡 紀文土器、弥生土器、土器群、須賀系、須賀系 土器群第1期	和歌山県和歌山県白旗4-4小	E20.1.28～ E20.2.19	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀
2	紀文財 第6号 E20.7.1	(内溝手遺跡) 弥生土器、土器群、須賀系、土器群など 有 意地帯の試掘 (E20)遺跡 紀文土器、土器群、須賀系、土器群、弥生 土器など 有 意地帯の試掘 (土溝手遺跡) 弥生土器、土器群など 有 意地帯の試掘	和歌山県和歌山県白旗 141小 和歌山県和歌山県白旗286-1小	E20.4.1～ E20.6.30	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀
3	紀文財 第17号 E21.3.19	(土溝手遺跡) 紀文土器、弥生土器、土器群、須賀系、 弥生土器など 有 意地帯の試掘	和歌山県和歌山県白旗 141小	E21.1.1～ E21.3.19	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀
4	紀文財 第100号 E22.3.19	(E20)遺跡 紀文土器、弥生土器、土器群、須賀系、二 須賀系など 有 意地帯の試掘 (土溝手遺跡) 紀文土器、弥生土器、土器群、弥生土 器など 有 意地帯の試掘	和歌山県和歌山県白旗125-4小 和歌山県和歌山県白旗200-2小	E21.1.17～ E22.3.19	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀
5	紀文財 第135号 E23.3.16	(土溝手遺跡) 紀文土器、弥生土器、土器群、須賀系、二 須賀系など 有 意地帯の試掘	和歌山県和歌山県白旗 141小	E22.4.7～ E23.3.16	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀	西山湧水開発局員 西山 堀

## 第4節 調査および整理の体制

平成19年度（2007年度）

岡山県教育委員会	
教育長	門野八洲雄
岡山県教育庁	
教育次長	神田 益穂
文化財課	
課長	藤井 守雄
参事	木山 潤郎
参事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	光永 真一
主任	小嶋 善邦 （工事立会調査担当）
主任	金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター	
所長	高畑 知功
次長（総務課長事務取扱）	小林 勝
参事	岡田 博
副参事	中島 謙次
（総務課）	
総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主任	福池 光修
（調査第一課）	
課長	中野 雅美
総括主幹（第一班長）	大橋 雅也
主事	和田 剛
	（確認調査担当）

平成20年度（2008年度）

岡山県教育委員会	
教育長	門野八洲雄
岡山県教育庁	
教育次長	岡野 健一
文化財課	
課長	三村 修
参事	木山 潤郎
参事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	光永 真一
主任	小嶋 善邦
主事	平井 利尚
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	藤川 洋二
次長（総務課長事務取扱）	小林 勝
参事	岡田 博

（総務課）	
総括副参事（総務班長）	若林 一憲
主任	福池 光修
主任	中島 忍
（調査第二課）	
課長	島崎 東
総括副参事（第二班長）	岡本 寛久 （調査担当）
主任	松尾 佳子 （調査担当）
主事	白木 亨 （調査担当）
主事	岩崎 佳奈 （調査担当）

平成21年度（2009年度）

岡山県教育委員会	
教育長	門野八洲雄
岡山県教育庁	
教育次長	増木 好孝
文化財課	
課長	三村 修

参事	田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）	光永 真一
主任	米田 克彦
主任	平井 利尚
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	児仁井克一

次 長 (総務課長事務取扱)	小林 勝	総括副参事 (第二班長)	岡本 寛久 (調査担当)
参 事	中野 雅美	主 任	松尾 佳子 (調査担当)
(総務課)		主 事	高山 沙織 (調査担当)
総括副参事 (総務班長)	上田 利弘		
主 任	中島 忍		
(調査第二課)			
課 長	島崎 東		
平成22年度 (2010年度)		主 任	植木寿美子
岡山県教育委員会		主 任	越野 忍
教 育 長	門野八洲雄	主 任	行守 智和
岡山県教育庁		(調査第二課)	
教育次長	増本 好孝	課 長	島崎 東 (調査・整理担当)
文化財課		総括主幹 (第一班長)	渡邊恵里子 (調査・整理担当)
課 長	田村 啓介	主 任	松尾 佳子 (整理担当)
参 事	光永 真一	主 任	和田 剛 (整理担当)
総括副参事 (埋蔵文化財班長)	宇垣 匡雅	主 事	高山 沙織 (調査・整理担当)
主 任	米田 克彦	主 事	三輪 宜生 (整理担当)
主 事	一色 武		
岡山県古代吉備文化財センター			
所 長	児仁井克一		
次 長 (総務課長事務取扱)	片山 淳司		
参 事	中野 雅美		
(総務課)			
総括副参事 (総務班長)	上田 利弘		
平成23年度 (2011年度)		次 長 (総務課長事務取扱)	片山 淳司
岡山県教育委員会		参 事	中野 雅美
教 育 長	竹井 千塚	(総務課)	
岡山県教育庁		総括副参事 (総務班長)	上田 利弘
教育次長	阿部 淳二	主 任	植木寿美子
文化財課		主 任	行守 智和
課 長	村木 生久	(調査第二課)	
参 事	光永 真一	課 長	弘田 和司
総括副参事 (埋蔵文化財班長)	宇垣 匡雅	総括主幹 (第一班長)	渡邊恵里子 (整理担当)
主 任	石田 爲成	主 任	杉山 一雄 (整理担当)
主 任	一色 武		
岡山県古代吉備文化財センター			
所 長	平井 泰男		

## 第2章 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境

今回調査対象となった窪木遺跡(1)・南溝手遺跡(2)・北溝手遺跡(3)は、総社市窪木・南溝手・北溝手に位置する。本遺跡群は岡山県西部の総社平野に位置しており、南北が約2.5km、東西が約7.5kmの東西に細長い平野である。総社平野の東半分はもともと平安期から服部郷という郷名がつけられていた。この服部郷は近代になると服部村<sup>1)</sup>という自治体に属し、現在の総社市に含まれるようになる。そのため、今日でも服部とは総社平野東半部のことを指しており、今回調査の原因となった服部停車場線道路改築に伴う発掘調査という事業名につく「服部」も、ここに由来している。そして本遺跡群は服部のほぼ中央に位置している。

さて、当遺跡群の南には標高100m程度の丘陵群が東西に連なっている。丘陵群の多くは白亜紀の花崗岩層で形成されており、風化や浸食作用を受けやすい地質構成である。遺跡群の北には吉備高原の南縁である海拔300～400m級の鬼城山や経山等の山塊が所在し、鬼城山周辺は新生代の砂礫層で形成されている。総社平野は吉備高原を侵食して南流していた古高梁川東流の河道跡に所在しているため、この地域は自然堤防と後背湿地からなり、自然堤防の上には古くから集落が営まれている。

### (2) 歴史的環境

総社平野周辺で確認されている旧石器時代の遺跡は、丘陵上に浅尾遺跡(12)と宝福寺裏山遺跡(8)が位置する程度で少ない。また、窪木薬師遺跡(24)では、紛れ込みではあるものの、中世包含層からササカイト製ナイフ形石器が出土している。

縄文時代早期も旧石器時代と同様に遺跡数は少ない。真壁遺跡(43)と長良山遺跡(19)がある。真壁遺跡からは山形文の押型文土器が出土し、長良山遺跡からは格子目文・山形文の押型文土器がそれぞれ出土している。縄文時代後期以降になると、海水面の低下や河川の沖積作用などにより、新たに形成された沖積地に入々が住み始める。真壁遺跡や、岡山県立大学建設に伴い発掘調査が行われた窪木遺跡、南溝手遺跡が代表的な遺跡である。なかでも南溝手遺跡において、柗圧痕が付着した縄文時代後期中葉の土器が出土しており、稲作導入期を考えるうえでの重要な資料を得ることができたといえる。

弥生時代前期・中期の遺構は、真壁遺跡や窪木遺跡、南溝手遺跡のほか山津田遺跡(57)や鎌戸原遺跡(55)で確認されている。特に南溝手遺跡では、「松菊里型」住居と呼ばれる朝鮮半島からの影響を受けた竪穴住居が数軒確認された。そのうちの1軒からは管玉の未製品や玉砥石、メノウ製錐等が出土しており、玉作りを行っていたことが判明している<sup>2)</sup>。

弥生時代中期後半から後期前半にかけては、集落規模が拡大し、新たな集落の形成も始まる。三須高田遺跡(46)もこの頃に作られた集落の1つである。また、三須からは銅鐸が出土したと伝えられている。そして集落周辺の丘陵上には、このように発展した集落の首長の存在を物語るかのように前山遺跡(56)や鈔物師谷遺跡(59)・宮山墳墓群(61)などの弥生墳丘墓が出現する。

古墳時代の集落は、現在までの発掘調査成果からみると、弥生時代後期に比べて減少傾向が認めら



- |                |                |             |             |
|----------------|----------------|-------------|-------------|
| 1. 榎木遺跡        | 17. 藤部遺跡       | 31. 千原古墳    | 46. 越山古墳群   |
| 2. 南藤手遺跡       | 18. 深町遺跡       | 34. 俣山古墳    | 50. 山崎古墳    |
| 3. 北藤手遺跡       | 19. 長良山遺跡、長良山竪 | 53. 角力坂山古墳  | 51. こうもり塚古墳 |
| 4. 金井戸遺跡       | 20. 榎木宮後遺跡     | 56. 三須寺     | 52. 備中四分堂寺  |
| 5. 総社遺跡        | 21. 榎守塔寺       | 57. 金井戸天神遺跡 | 53. 備中四分堂寺  |
| 6. 表町古墳群       | 22. 伝馬中町跡      | 38. 金井戸新田遺跡 | 54. 備守山古墳   |
| 7. 金田池東遺跡      | 23. 網新遺跡       | 59. 金井戸礎石遺跡 | 55. 鎌田遺跡    |
| 8. 宝徳寺裏山遺跡     | 24. 榎木薬師遺跡     | 40. 才手村伝遺跡  | 56. 前山遺跡    |
| 9. 奥ノ谷遺跡       | 25. 高松田中遺跡     | 41. 美濃田遺跡   | 57. 山津井遺跡   |
| 10. 中山古墳群      | 26. 千引小ヶくろ音遺跡  | 42. 大溝遺跡    | 58. 木ノ島遺跡   |
| 11. 西山遺跡、西山古墳群 | 27. 岡電古墳       | 43. 高塚遺跡    | 59. 神影御音遺跡  |
| 12. 浅尾遺跡       | 28. 生石神社赤生壇丘墓  | 44. 榎手天原遺跡  | 00. 岩屋遺跡    |
| 13. 鬼ノ塚        | 29. 高塚遺跡       | 45. 才手見延遺跡  | 61. 宮山遺基跡   |
| 14. 齊山塔寺       | 30. 小笠山古墳      | 46. 三須山遺跡   | 62. 天笠山古墳   |
| 15. 越山遺跡       | 31. 龜山古墳       | 47. 三須河原遺跡  | 63. 三笠山古墳   |
| 16. 久米大池1号墳    | 32. 榎山古墳       | 48. 三須中河遺跡  | 64. 三輪庵寺    |

第6図 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

れる。そのような状況において、国道180号バイパスに伴い調査した窪木遺跡では、古墳時代後半期の集落が検出された。調査によると窪木遺跡では、住居形態が7世紀を境に堅穴住居から掘立柱建物へと変化していることが判明している<sup>37</sup>。

古墳時代において、この地域には多くの古墳が認められる。前期では天望台古墳(55m)(62)や三笠山古墳(70m)(63)などの前方後円墳が造られている。中期になると、総社平野には350mの造山古墳(31)や286mの作山古墳(34)など、全国的にみても突出した規模を誇る前方後円墳の存在が知られる。ところが後期になると前期から行われていた前方後円墳の築造も、こうもり塚古墳(100m)(51)・江崎古墳(45m)(50)を最後に終焉を迎える。さて、当地域では鍛冶具一式が開葬されていた随庵古墳(27)からもみられるように、中期後半には鉄器生産が行われていたことが知られている。さらに後期になると、千引かなくる谷遺跡(26)では製鉄が、窪木薬師遺跡では鉄器製作が大規模に行われていた。また奥ヶ谷窯跡(9)では、初期須恵器の生産が行われていた。これらのことから、当遺跡周辺地域は朝鮮半島と密接な関係を持っていたことが窺える。

古代になると総社平野は国一郡一郷里制により北半分が賀陽(賀夜)郡、南半分が窪屋郡、高梁川以西が下道郡にわけられ、この地域は備中国賀陽郡にあたる。備中国府は、「和名抄」にも記述があることからわかるように、賀陽郡内に存在していたようである。総社市教育委員会が調査した御所遺跡(23)は、奈良時代の遺物等の出土は認められないが、平安時代末期の備中国府に関連する可能性が高い遺構が検出されているという。それに対して郡衙は所在地そのものは不明である。しかし本遺跡付近には白鳳期創建の栢寺廃寺(21)があり、この寺は賀陽郡に付随する郡寺だと指摘されている<sup>38</sup>。さらに国道180号バイパスに伴う南溝手遺跡の調査で栢寺と同範の瓦や畿内産土師器、陶馬等が出土している。これらの条件は、賀陽郡衙の所在地を推定するうえでの有力な手がかりである。加えて、平成22年度に総社市教育委員会が行った市道拡幅工事に伴う窪木遺跡の発掘調査において建物群が確認された。発掘調査成果によるとこの建物群は、公的施設である可能性が指摘されている<sup>39</sup>。その他の官的施設としては古代山城である鬼ノ城(13)<sup>40</sup>や備中国分僧寺(52)・尼寺(53)があげられる。

中世に入り、総社平野の様子は、鎌倉時代末に作成されたといわれる「備中国賀夜郡服部郷図」に詳しい。周辺遺跡の発掘調査においても郷図に記載された、条里に伴う溝などの遺構が確認されている。この郷図によると服部地域はこの時から広く水田が形成されており、現在と似た景観であったことが推察される。その後の南北朝時代には、福山山頂に存在する福山城が戦場となり、新田方の武将・大江田氏経と足利尊氏側・足利直義との間で攻防が繰り返された。

戦国時代になるとこの地は備中と備前の境目とあって多くの山城が築かれ、合戦が幾度となく行われた。中でも織田信長の命を受けた羽柴秀吉が中国侵攻をすすめた際、天正10(1582)年に行った備中高松城水攻めは有名である。この高松城をめぐる攻防は織田氏側優位に終わり、秀吉は毛利輝元に備中・備後・出雲・伯耆・美作五カ国の割譲を求めた。平成13年度から行われた国道180号バイパスに伴う総社遺跡(5)の発掘調査により、備中高松城に籠城していた清水宗治の家臣国府市正の居館の一部と思われる遺構が確認された。さらに窪木大文字には、長良山城主である禰屋七郎兵衛親光の居館があったといわれている。

主要参考文献

- 『岡山県史。考古資料、岡山県、1986』  
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告。31・86・100・115・120・121・156・162・198・203・214 岡山県教育委員会、1979・1993・1995・1997・2001・2002・2006・2008』  
『総社市史。考古資料編、総社市 1987』  
『総社市史。通史編、総社市 1998』  
『総社市埋蔵文化財調査報告書』1～19・21 総社市教育委員会 1984～2006  
『総社市埋蔵文化財調査年報』1～19 総社市教育委員会 1991～2005  
『山手村史。本編 山手村 2004』  
『図説 倉敷・総社の歴史』

註

- (1) 服部村は窪木・南溝手・北溝手・金井戸・長良の5ヵ村が合併して成立し、旧村名を継承した5大字を編成している。『角川日本地名大辞典』33 角川書店 1989  
(2) 『南溝手遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995  
(3) 松尾佳子「第5章 総括 『南溝手遺跡 窪木遺跡』」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』214 岡山県教育委員会 2008  
(4) 『法蓮広常山古墳群』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』21 岡山県総社市教育委員会 2010  
(5) 『窪木遺跡現地説明会資料』 総社市教育委員会文化課 平成22年2月21日  
(6) 平成18年度から開始した調査事業から、鬼ノ城は7世紀後半頃に築造され、8世紀初頭に廃絶されたことが判明している。この調査成果によると、鬼ノ城内には大規模な鍛冶工房があり、城内で必要な鉄器製作を行っていたことが確認された。『鬼ノ城』『所報吉備』48 2010.3

## 第3章 窪木遺跡

### 第1節 遺跡の概要

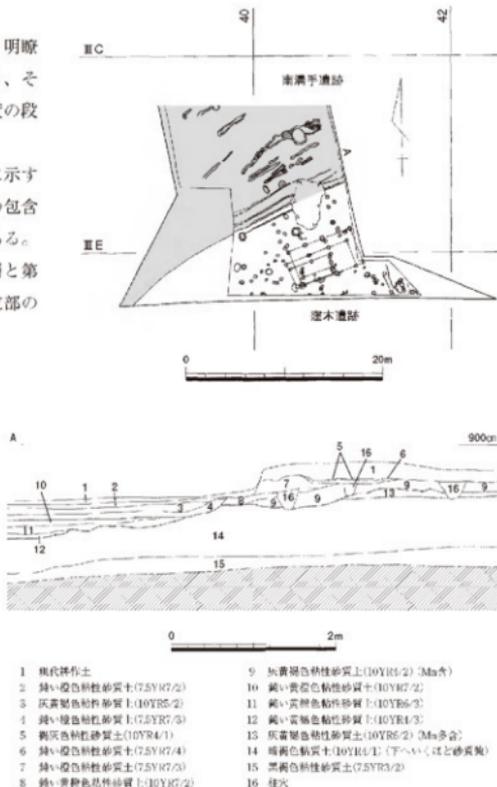
総社市窪木は南端が国道180号線付近で北端が砂川、東は長良山で西は総社市立服部幼稚園辺りまでの範囲を占める地名（大字）である。大字の範囲は南北に広く幾筋もの旧河道が流れ、その間には高状に微高地が形成されていた。したがって、同じ窪木遺跡であっても微高地が異なればその上に形成される遺跡の性格は違う。今回調査した窪木遺跡は国道180B P調査で明らかとなった、古墳時代後期集落が展開する微高地と同一であり、その北端部にあたる。

窪木遺跡と南溝手遺跡の境には、明瞭な地形の下がりを認めることができ、それは現在の水田面に現れる20cm程度の段差からも明らかである。

基本層序は第7図の東壁断面図に示す通りで、第7～9・13層は中近世の包含層、第14層は古墳時代の基盤層である。第4章に詳細は譲るが、第2～4層と第10～12層は南溝手遺跡における低位部の堆積状況を示している。

遺構は当初の予想に反して古墳時代の遺構が少なく、中心は中世である。古墳時代は後期と考えられる土壇3基を数えるのみ。

中世の遺構は掘立柱建物2棟、柱穴列2列、土壇墓2基、土壇2基、溝2条を確認した。その他に多数の柱穴を検出しているが、大多数は中世に属するものと考えられる。遺物の出土した主な柱穴のみ位置を示し、上器等の遺物を掲載している。（松尾）



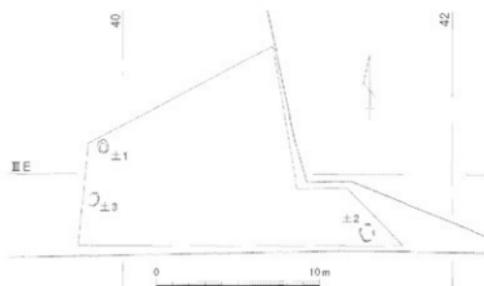
第7図 遺構全体図・東壁断面図 (1/500・1/60)

## 第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

## 1 概要

国道180B P調査で明らかとなった、古墳時代後期集落の展開する微高地北端にあたる。調査区の北に位置する南溝手遺跡の下がりから北には低位部が広がる。

古墳時代以前にさかのぼる遺構は希薄で、古墳時代後期の土壌3基を確認したのみ。遺物も多くは



第8図 古墳時代遺構図 (1/300)

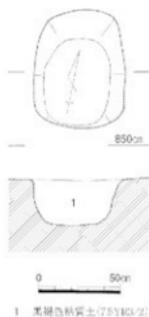
なく、古墳時代後期を中心とした土師器や須恵器が出土している。これらのことから今回の調査地は、いわゆる安定した微高地ではあるものの、集落縁辺部の様相を示していると考えられる。

包含層出土遺物の中に弥生時代前期の埴4が出土している。ゆえに古墳時代以降の基盤層である暗褐色粘質土層は、弥生時代前期には形成されていたあるいは形成途中であったと思われる。(松尾)

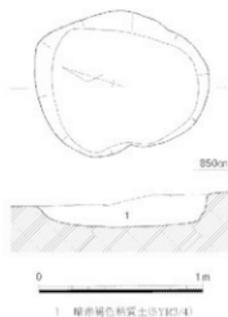
## 2 土壌

## 土壌1 (第8・9図)

調査区の北西38ⅢCに位置し、微高地の下がりに近接している。平面形は長軸72cm、短軸56cmの隅丸長方形を呈し、断面形は検出面から深さ28cmを測る逆台形である。底面は平坦であった。



第9図 土壌1 (1/30)



第10図 土壌2 (1/30)

出土遺物は無く時期の決め手は欠くものの、検出状況や埋土の状態から古墳時代後期と思われる。(松尾)

## 土壌2 (第8・10図)

調査区南東の40ⅢEに位置し、平面形が不整形形を呈する土壌であり、長軸は1.15m、短軸は88cmを測る。断面形は検出面から深さ19cmを測る逆台形である。

土壌1同様に出土遺物は無く時期の決め手は欠くものの、検出状況や埋土の状態から古墳時代後期と思われる。(松尾)

## 土壌3 (第8・11図、写真5、図版1)

38ⅢEに位置し、土壌1の南で確認した。土壌の西側は調査の都合上平面全体を検出することができなかったが、調査区外に延びるとは考えられず、側溝内で取まっていると思われる。平面形は長軸78cmを測る楕円形を呈する。遺物の出土は無いが、土壌1・2同様古墳時代後期である。(松尾)



1 黒褐色粘質土(75YR3/2)

第11図 土壌3 (1/30)

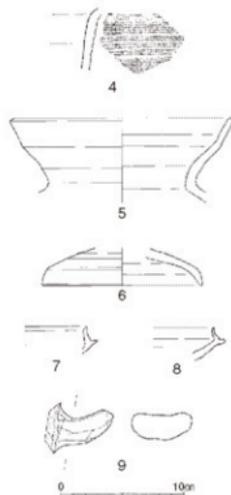


写真5 土壌3作業風景 (南西から)

## 3 遺構に伴わない遺物 (第12図、写真6)

古墳時代後期集落が展開する微高地であるにも関わらず、包含層等から出土する遺物量は少ない。4は3条のヘラ描き沈線を有する弥生時代前期後葉の甕。5は古墳時代前期の口縁が大きく開く壺。6は須恵器杯蓋、7・8は須恵器杯身、9は土師器甕の把手部分。6～9は古墳時代後期である。

5～9までは古墳時代基盤層の上面付近から出土しているが、4のみは基盤層中からの出土である。(松尾)



第12図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

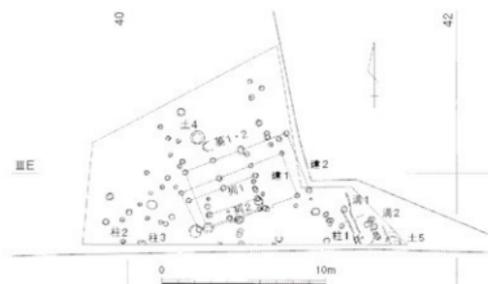


写真6 窪木遺跡調査風景 (北西から)

## 第3節 古代～中世の遺構・遺物

### 1 概要

前代までとは異なり、中世になると調査区全域で遺構が見られるようになる。掘立柱建物2棟、柱穴列1列、土壇墓2基、土塋2基、溝2条が主な遺構であり、その他多くの柱穴は埋土等から中世に属するものと考えている。



第13図 中世遺構図 (1/300)

前節でも説明したように、北に隣接する南溝手遺跡には低位部が広がっている。この低位部は中世段階になると水田として利用されていたようで、耕作土と思われるマンガン粒を多く含む灰色粘質土が水平に堆積していることを確認した(第7図)。

古代までさかのぼる遺構は無く、遺物も少ない。包含層中から僅かに出土した土器片を掲載している。

(松尾)

### 2 掘立柱建物

#### 掘立柱建物1 (第13・14図、図版1)

40ⅢC～ⅢEにかけて検出した桁行3間×梁行1間の東西棟建物で、棟はN-70°-Eを向く。平面形は桁行6.3～6.6m、梁行2.5～2.76mを測り、西側の梁間距離が若干短い。床面積は18.76㎡。

柱穴の掘り方は円形を呈し、直径20～30cm、深さは10～40cmを測る。後述する掘立柱建物2の柱穴とP6・P7が切り合い関係にあり、掘立柱建物1の方が古い。出土遺物は無く確実な時期決定は難しいが、検出状況等から13世紀前半と考えられる。

(松尾)

#### 掘立柱建物2 (第13・15図、図版1)

掘立柱建物1と重複して検出された桁行3間×梁行1間の東西棟建物で、棟の方向は掘立柱建物1と同じである。規模はやや大きく桁行約6.6m、梁行3.78～3.86mを測り、桁行の柱間距離が東端部のみ若干広い。床面積は25.46㎡。

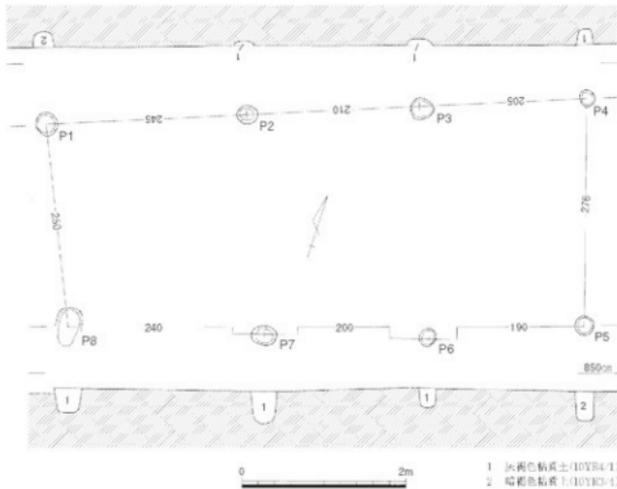
柱穴の掘り方は円形あるいは不整形円形を呈し、直径30～50cm、深さは20～40cmを測る。出土遺物はP1から出土している土器器溝の破片のみ。13世紀前半と思われる。

(松尾)

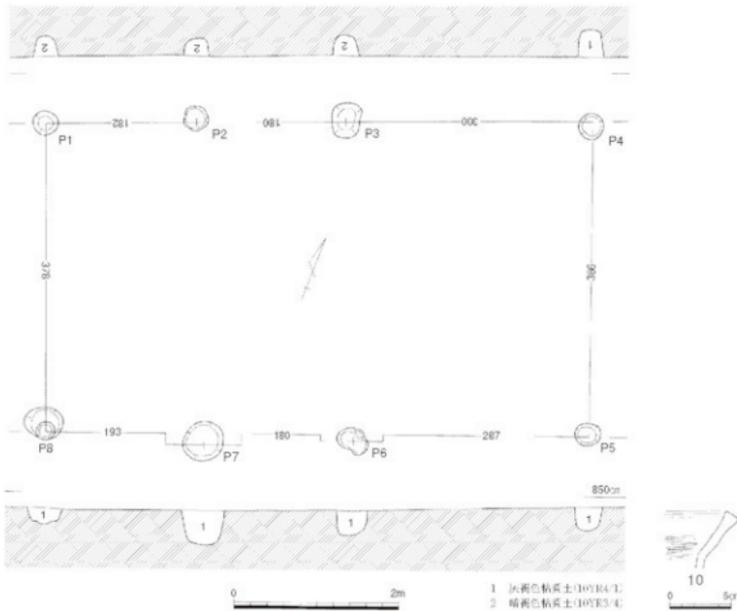
### 3 柱穴列

#### 柱穴列1 (第13・16図、図版1)

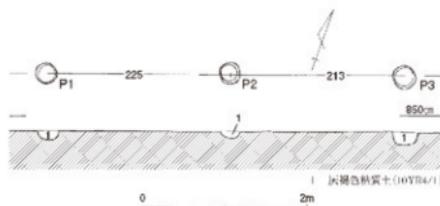
40ⅢE北西で検出した3つの柱穴より成る柱穴列である。柱間距離は2.25～2.13m、全長は4.38mを



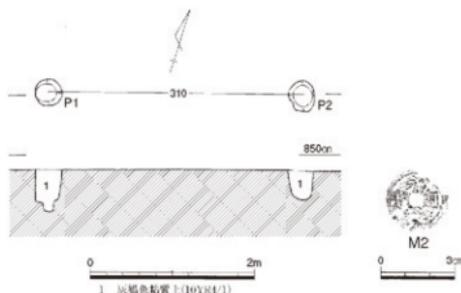
第14図 掘立柱建物 1 (1/60)



第15図 掘立柱建物 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第16図 柱穴1 (1/60)



第17図 柱穴2 (1/60)・出土遺物 (1/2)

測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、直径約25cm。主軸は $N-68^{\circ}-E$ 。出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、掘立柱建物1・2と重複関係にあることと、柱穴2の柱穴から出土している古銭の時期などから、中世後半のものであろう。(松尾) 柱穴2 (第13・17図、図版1)

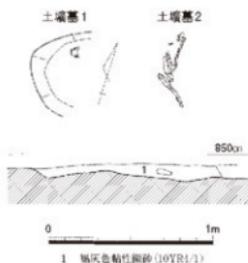
柱穴列1の南に位置する2つの柱穴より成る柱穴列である。全長3.2mで、主軸は $N-72^{\circ}-E$ 。柱穴の掘り方は直径35cmの円形を呈し、深さは検出面から35~50cmを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土。

出土遺物はP2から出土した永楽通宝M2のみ。詳細な時期決定は難しいが、柱穴列1と同様に掘立柱建物1・2と重複関係にあることと、出土している古銭の時期などから、中世後半と思われる。(松尾)

#### 4 土墳墓

土墳墓1・2 (第13・18図、写真7、図版1)

40ⅢCの南端で当初1つの土墳墓として調査したが、人骨鑑定の結果等から別遺構として報告する。掘り方は不明瞭であるが、底面のレベルが異なることから土墳墓1は東西幅60cm以上、土墳墓2は東西幅70cm以上を復元できる。土墳墓1から上顎の永久歯、土墳墓2から上肢骨と下肢骨の一部と思われる長管竹4本と上顎と下顎が出土した。性別・体格・年齢等は不明。時期は中世。(松尾)



第18図 土墳墓1・2 (1/30)

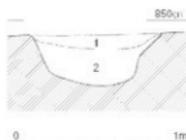
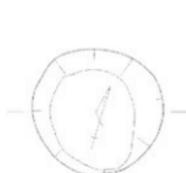


写真7 土墳墓1・2調査風景(南東から)

## 5 土坑

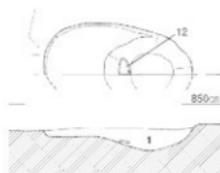
## 土坑4 (第13・19図)

40ⅢCの南端で土坑第1・2の北西に位置する。平面形は円形で直径75cm程度、断面形は東側が途中屈曲する逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、第1層が褐灰色粘性微砂、第2層が暗褐色粘性微砂。出土遺物は無いが、検出状況や埋土等から中世と考えられる。(松尾)



1 褐灰色粘性微砂(10YR4/1)  
2 暗褐色粘性微砂(10YR3/1)

第19図 土坑4 (1/30)

第20図 土坑5 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

## 土坑5 (第13・20図)

40ⅢEの北東で調査区の南東隅で検出した。後述する溝2に切られている。南半分は調査区外に延びているが、平面形は長軸91cmを測る楕円形を呈すると思われる。断面形は浅い皿状で東部分が一段窪んでいた。

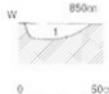
出土遺物は上師器皿11と鍋12がある。13世紀前半頃と思われる。

(松尾)

## 6 溝

## 溝1 (第13・21図)

40ⅢEの北東に位置し、南東から北東方向へ延びる幅約40cmの溝。断面形は皿状を呈し、検出面から底面までの深さは10cmを測る。遺構の切り合い関係等から中世後半と思われる。(松尾)



1 褐灰色粘性微砂(10YR4/1)

第21図 溝1  
(1/30)

1 褐灰色粘性微砂(10YR4/1)

第22図 溝2  
(1/30)

## 溝2 (第13・22図)

溝1の東に位置し、掘削の方向も同じ溝である。検出面からの深さは4cmと浅く、掘り方は不明瞭でたわみ状に窪んでいた。中世後半と考えられる。(松尾)

## 7 柱穴

## 柱穴1～3 (第13・23図)

柱穴1・3は40ⅢE、柱穴2は38ⅢEに位置し、どれも調査区南半で検出した。13は柱穴1、14は柱穴2、15は柱穴3より出土している。

13～15は上師器碗で、いずれも白色の胎土を有する。13世紀前半に属するものであろう。(松尾)

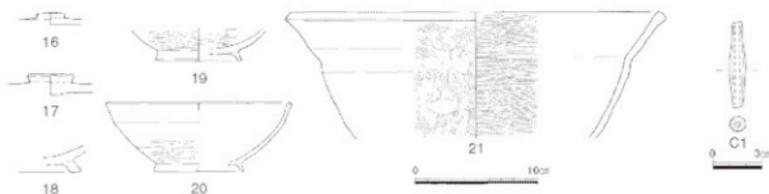


第23図 柱穴1～3出土遺物 (1/4)

## 8 遺構に伴わない遺物 (第24図)

包含層中から出土する遺物の量は、古墳時代以前の遺物量からすると格段に増える。遺物の時期を概観してみると、中世以降が最も多く古代まで遡るものは少量である。

16は土師器杯蓋で外面に丹塗りがある。17は須恵器杯蓋。18は須恵器壺の底部片。いずれも8世紀後半頃のものと思われる。19・20は土師器椀で外面あるいは内面に横方向のヘラミガキがみられる。12世紀末から13世紀初頭位か。21は土師器鍋。C1は棒状穿孔土師器である。(松尾)



第24図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

## 第4節 まとめ

今回調査した調査区は大変狭く、また北側には南溝手遺跡の微高地と隔絶するように低位部あるいは旧河道が広がっている。したがって今回調査した窪木遺跡の位置付けは、国道180B P調査で明らかとなった遺構の変遷の中でとらえる必要があると思われる。なお、まとめを行うにあたって混乱が生じないように、国道180B P調査で確認あるいは出土した遺構・遺物については、掲載遺構番号あるいは掲載遺物番号の前にB Pを付けて表記することとする。

窪木遺跡の微高地上に人が住み始めるのは、古墳時代以降であると推察される。国道180B P調査でも弥生時代以前の遺構が確認されていないことから、比較的新しい時期に形成された微高地といえるだろう。このことを傍証するように、南溝手遺跡で確認した縄文時代後期の包含層は窪木遺跡まで延びていない(第5図)。この微高地がいつ頃形成されたものであるのかは明確にし難いが、今回の調査で基盤層中から出土した弥生時代前期後葉の壺4が、1つの手がかりになると思われる。

国道180B P調査の成果によると、古墳時代後期には多くの竪穴住居や建物が建てられ、人々の集住が顕著になる。今回確認した土壌1～3はその時期に属するが、全体的に遺構密度は低く集落縁辺部の様相を呈している。続く古代の遺構は全く確認できていない。包含層中からわざわざ奈良時代後半の土器が出土している。中世になると調査区全面に遺構が分布する。掘立柱建物1・2は、B P掘立柱建物21～23・25と規模や柱間数など類似している点が多いが、棟方向が若干異なる。恐らく掘立柱建物1・2は微高地縁辺部に位置するため、地形下りの方向に規制されているものと考えられる。

最後に国道180B Pの調査成果を併せて中世の様相をまとめると、13～14世紀代には数棟の建物や土壌墓が点在し、15世紀以降からは建物や土壌墓が減少する傾向にある。15世紀後半以降にはB P溝12・溝13で画された屋敷地が出現し、周囲は耕地化が進む。(松尾)

## 第4章 南溝手遺跡

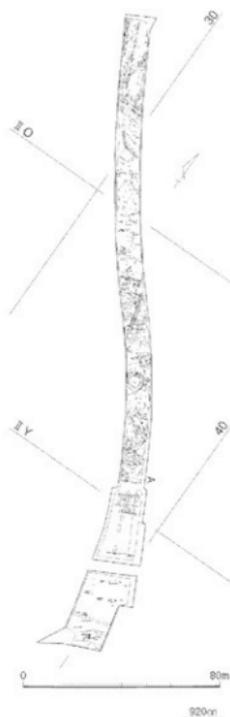
### 第1節 遺跡の概要

総社市南溝手は北が県立大学、南は国道180号線を越えた総社東小学校付近までの南北に長い地名（大字）である。

今回調査した南溝手遺跡は、洋木遺跡との境となる南北幅約70mの低位部を除く全域が微高地となっている。その微高地は岡山県立大学建設に伴い発掘調査を行った、南溝手遺跡〔県報告100〕〔県報告107〕、以下県立大学調査と略す）における第4微高地に相当するものと思われる。

微高地の基本層序は第25図の東壁断面図に示した通りで、第8層は弥生時代包含層、第9層は縄文時代晩期～弥生時代前期の基盤層、第11層は縄文時代後期包含層である。なお、第11層は河道1より南には延びていない。この層序関係は基本的に南溝手遺跡の微高地全域で共通する。

縄文時代後期の遺物は第11層上面あるいは第11層中の上半で出土している。縄文時代晩期の土壇と柱穴そして遺物は、第9層上面および層中において確認した。弥生時代になると遺構数は増えるが、前期から中期前葉にかけてはそれほど多くはない。中期中葉から後期にかけて徐々に増加し、後期から古墳時代初頭には堅穴住居や井戸・土壇などが微高地南半に集中する。続く古墳時代中期から古代にかけては遺構・遺物共に単発的な検出にとどまっており、次に遺構・遺物が増加するのは中世段階である。（松尾）

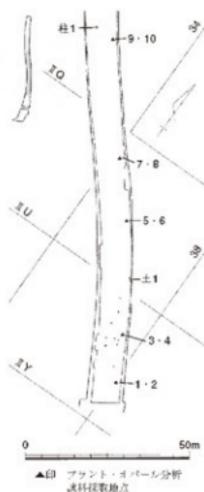


第25図 遺構全体図・東壁断面図 (1/2,000・1/60)

## 第2節 縄文時代後期～晩期の遺構・遺物

## 1 概要

現代水田層から1.4m下の標高7.6m付近に堆積する第11層（第25図）から、縄文時代後期の土器が出土した。土器は南溝手遺跡の微高地南半（30ⅡO～38ⅡW）特に微高地から低位部へと地形が下がる南側（36・38ⅡW）で集中する傾向がある。縄文時代後期の包含層である第11層は、地形が下がる南端部分でのみ黒褐色を呈し、北へいくほどに黄色味を帯びた褐色へと変化していく。土器や打製石斧などの石器は、第11層上面あるいは第11層上半から出土した。なお、縄文時代後期の遺物が出土する微高地南半において、第11層およびその上層である第10層の土壌についてプラント・オパール分析を行っている。詳細は付載に譲るが、結果としては稲作が行われていた可能性は低いと判断されている。



第26図 縄文時代後期～晩期遺構全体図（1/1,500）

縄文時代晩期（谷尻式）の柱穴を1基、微高地中央で確認している。この柱穴は第9層を20cmほど掘り下げた面で検出した。

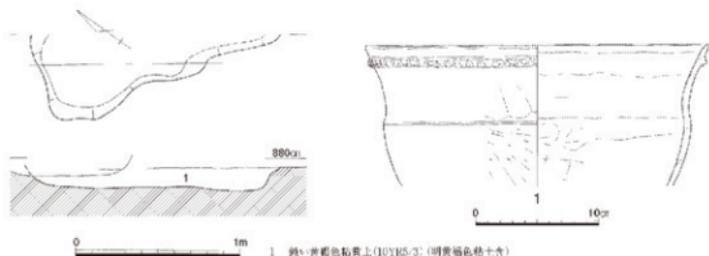
続く縄文時代晩期後半、突帯土器期の遺構は弥生時代前期と同様、第9層上面より掘り込んでいた。なお土器の出土量は少ないが、微高地全域からの出土を確認している。（松尾）

## 2 土壌

## 土壌1（第26・27図、図版3）

土壌1は36ⅡSの南西に位置する。平面形は楕円形を呈す。調査区外にのびているため、規模は定かではない。検出面からの深さは14cmあり、底面の標高は8.60mを測る。

時期は出土した深鉢から、縄文時代晩期末・沢田式に属すると考えられる。（高山）



第27図 土壌1（1/30）・出土遺物（1/4）

## 3 柱穴

## 柱穴1 (第26・28図)

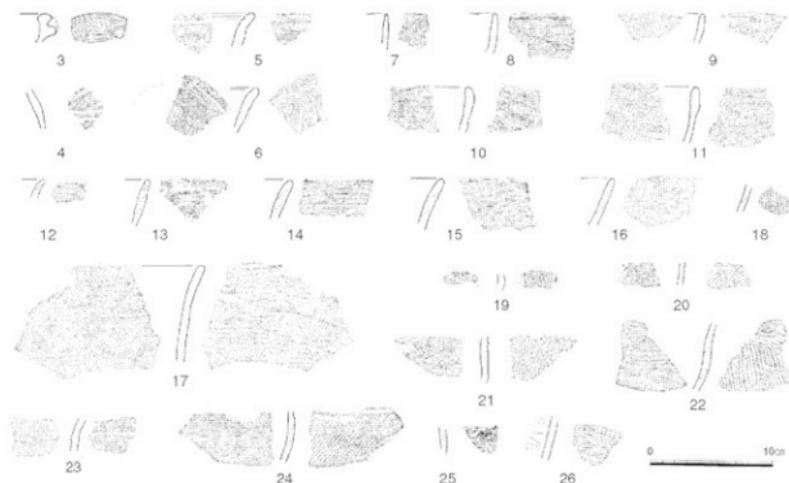
30ⅡOに位置する柱穴。縄文時代晩期後半～弥生時代前期にかけての基盤層を20cm程掘り下げた際に確認した。平面形は長軸50cm、短軸40cmの不整形円形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。深鉢2は底面よりやや浮いた状態で出土した。縄文時代晩期(谷尻式)である。(松尾)



第28図 柱穴1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

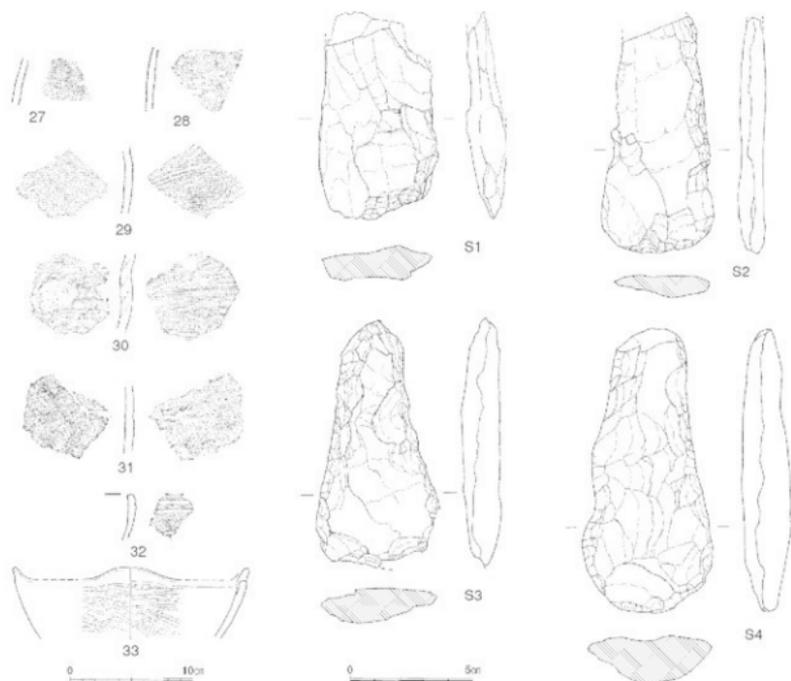
## 4 遺構に伴わない遺物 (第29～31図)

第29・30図に掲載した土器・石器は、縄文時代後期の遺物である。3は口縁を肥厚させたいわゆる縁帯文を有する深鉢であり、後期中葉の彦崎K1式。4は内湾した口縁部の外面に沈線による文様を施した深鉢。5は口縁端部の内外面に縄文を施し、内面にはその下端に沈線を巡らしている。6も口縁端部の内外面に縄文を施し、内面にはその下にクランク状の沈線が観察できる。7～17は無文の深鉢。外面にはミガキあるいは巻貝条痕が見られる。19～31は胴部破片。32は口縁部が内湾する有文の浅鉢。33は無文の浅鉢で波状口縁をなす。これらの土器は広義の彦崎KⅡ式に含まれるものであろう。

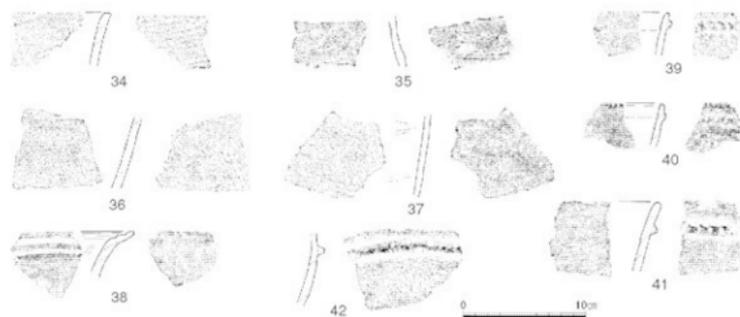


第29図 遺構に伴わない遺物①(縄文後期①) (1/4)

S1～4は粘板岩製の打製石斧で、後期包含層上面より出土。第31図34～37は晩期前半の深鉢。38は口縁内面に沈線が巡る浅鉢。39～42は晩期後半の突帯文土器深鉢。39は沢田式。(松尾)



第30図 遺構に伴わない遺物②(縄文後期②)(1/4・1/2)



第31図 遺構に伴わない遺物③(縄文晩期)(1/4)

## 第3節 弥生時代の遺構・遺物

## 1 概要

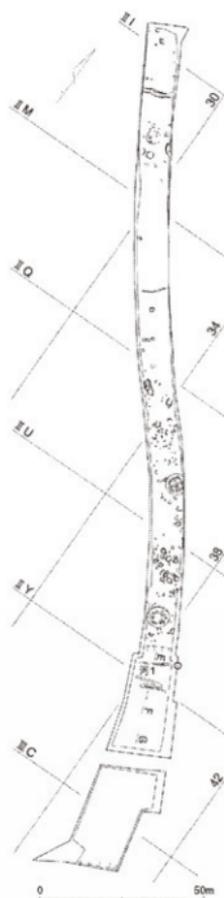
遺跡南端の低位部より北に広がる微高地には、弥生時代前期から後期にかけての遺構が広がっている。しかしその分布状況を見ると、同じ微高地であっても粗密があり、時期によっても異なることが分かる。なお前期の遺構は第9層を基盤として形成され、中期以降は第8層中から掘り込んでいることを確認している（第25図）。

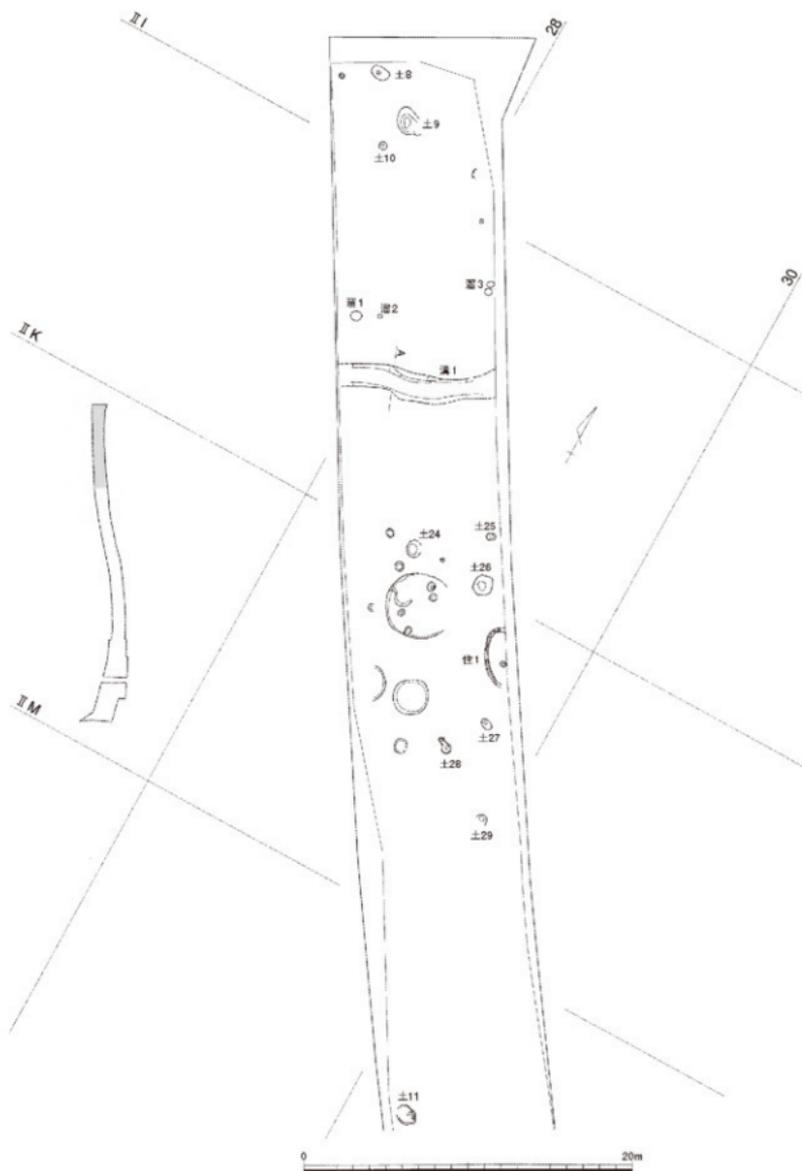
前期の遺構は土壇のみの単発的な確認にとどまっている。土壇の中にはいわゆる舟形土壇と呼ばれる形状のものも含まれているが、積極的に墓として評価できるものではない。中期前葉の遺構は少なく、中期中葉には土壇や土器溜まり等の遺構が散見できる。中期後葉から後期は、遺構数・遺物数ともに最も増加している時期であり、その傾向は特に微高地南半において顕著である。後期の住居である竪穴住居2・3に挟まれた36ⅡUでは、多くの井戸や土壇が掘削されている。井戸はいずれも素掘りで、掘削のレベルもほぼ同じであることから、集落内で共同使用する井戸を同じ場所で幾度も掘削していたと考えられる。

微高地から南へと地形が下がった場所に、河道が東流している。この河道から出土する土器は、微高地上の集落に由来するものである。（松尾）

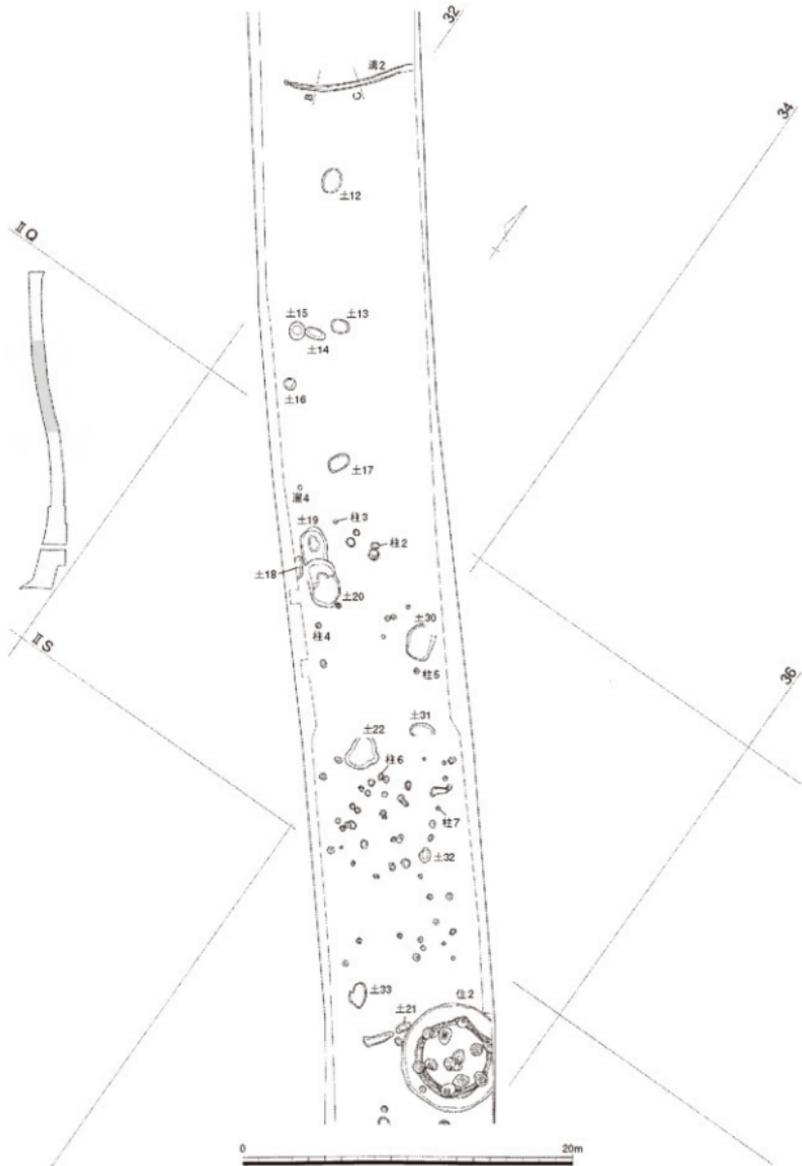


写真8 南溝手遺跡遠景（南西から）

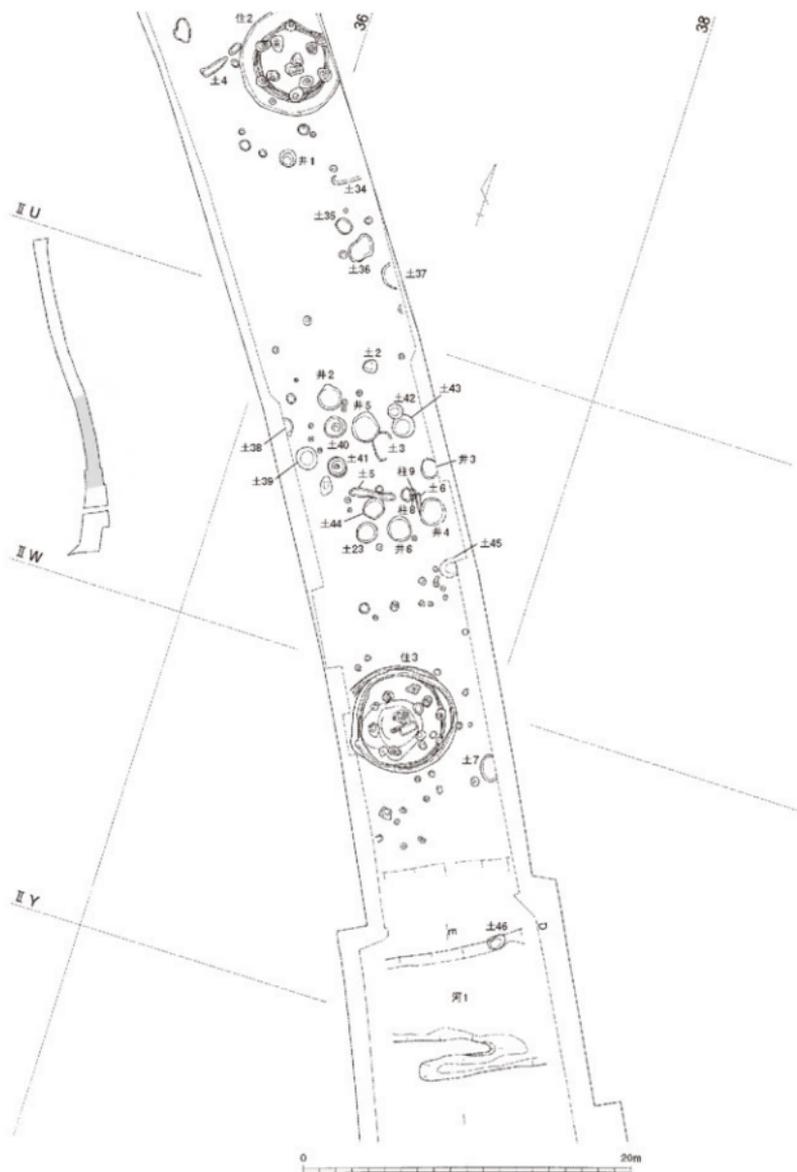
第32図 弥生時代遺構全体図  
(1/1,500)



第33図 弥生時代遺構図① (1/300)



第34図 弥生時代遺構図② (1/300)



第35図 弥生時代遺構図③ (1/300)

## 2 竪穴住居

## 竪穴住居 1 (第33・36図、図版4)

28ⅡKの北東で検出した竪穴住居で、西側の一部のみを検出した。全体を窺うことはできないが、長軸3.5mの隅丸方形を呈すると思われる。第1～3層は埋上で、第4層は貼り床。住居の周囲には幅20cm、深さ10cmほどの壁体溝が巡っている。住居内に1基柱穴を確認したが、深さが浅いため主柱穴になり得ないと思われる。

出土遺物は少なく、石鏃S5は埋上中から、小型の鏃43は壁

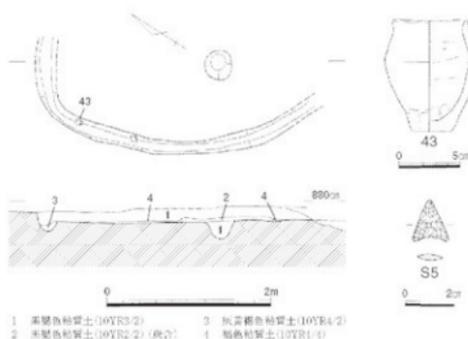
体溝の埋上上面より出土している。明確な時期の分かる遺物が無いため判断が難しいが、後期後半には廃絶した住居であると思われる。(松尾)

## 竪穴住居 2 (第34・37～40、図版4)

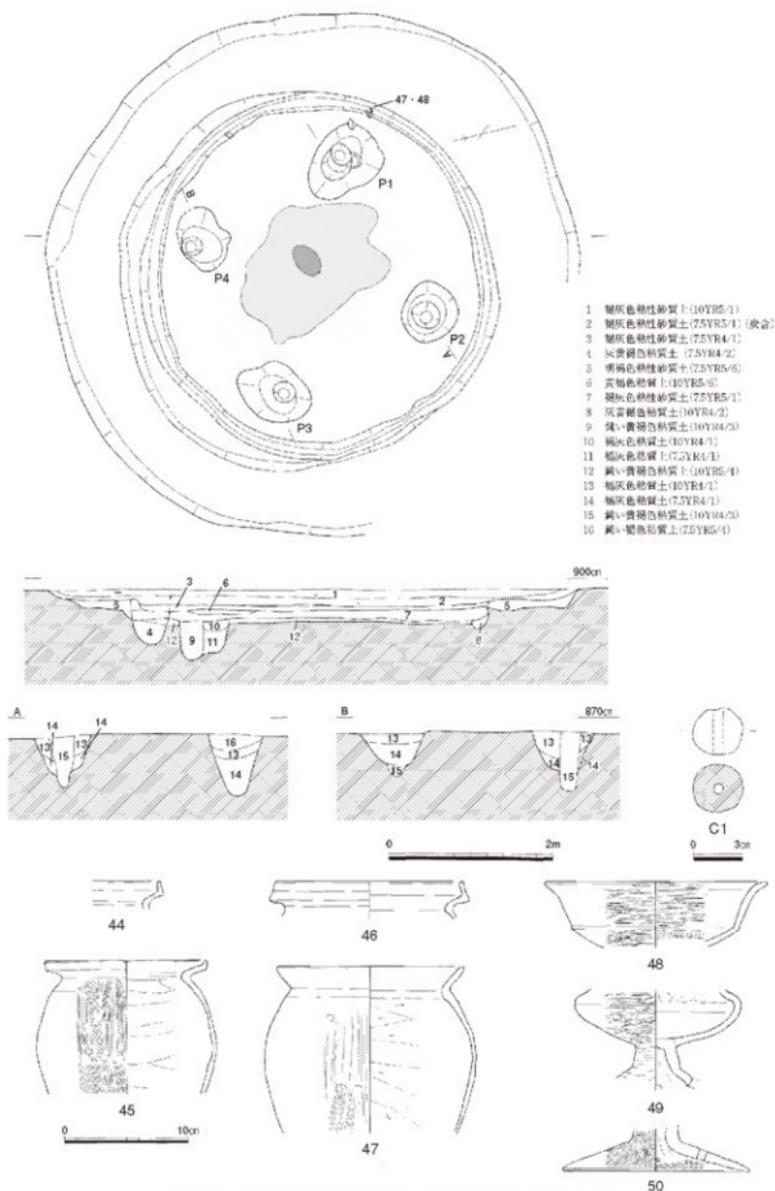
34ⅡSの北東で検出した竪穴住居で、床面を2面確認し、それぞれの床面に対応する主柱穴を検出している。そのため古い住居を2古、新しい住居を2新と呼称して報告する。

竪穴住居2古は直径6.4mの円形住居で、周囲には幅80cm～1.2mを測る、地山ケズリ出しの高床部が全周する。高床部の内部には幅20～30cm、深さ10cmの壁体溝が巡る。壁体溝は北半分が高床部に沿って、南半分は高床部内面よりも30cmほど内側で掘削されていた。第37図の断面図第6・7層が埋上で、第12層は貼り床である。その貼り床を切って4本(P1～4)の主柱穴が掘り込まれていた。主柱穴の掘り方は70cm～1mの不整形形を呈し、床面からの深さは50～75cmを測る。柱痕は直径25～35cmで、P1のみ複数の柱痕を検出した。住居の中央には長軸40×短軸25cmの焼土面があり、その周囲1.5～2mの範囲には炭が分布している。出土遺物は埋土から45・46・50、C1、M1～3、S6・7。P3からは44、床面上面から47～49がそれぞれ出土した。

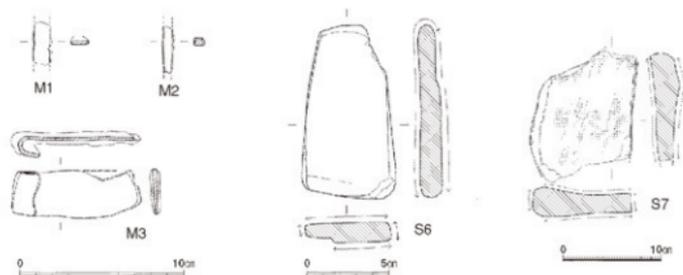
竪穴住居2Bは平面形が2Aと全く同じで、主柱穴の本数が6本に増えたことにより、高床部の形状が変化している。高床部は住居の周囲約1mの範囲に、第5層(第37図)を10cmほど積み上げて成形している。若干いびつな形ではあるが、本来は主柱穴6本が各隅に対応する六角形を呈していたのだろう。第37図の第1・2層が埋上であり、第3層が貼り床に対応する。主柱穴6本(P1～6)は高床部及び貼り床を施工した後に、掘り方を掘っていると思われる。主柱穴の掘り方は70cm～1.1mを測る不整形形を呈し、深さは60cm程度。柱痕は直径20～30cm。住居の中央には2つの中央穴(P7・8)が重複し、その周囲には炭が分布していた。焼土面は住居の西寄りで確認している。遺物は埋土から55～61・63・64、南側中央穴から53、北側中央穴から51・54、P3から52、P4から62、P6からS8がそれぞれ出土している。この住居は後期後葉に機能し、木葉には廃絶したと思われる。(松尾)



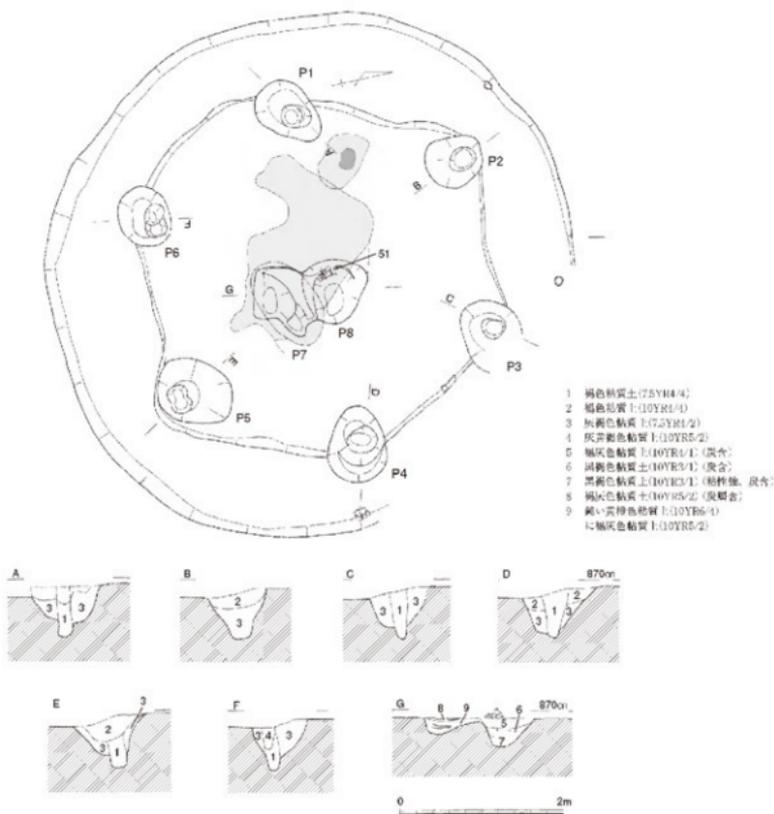
第36図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)



第37図 竪穴住居2古(1/60)・出土遺物①(1/3・1/4)

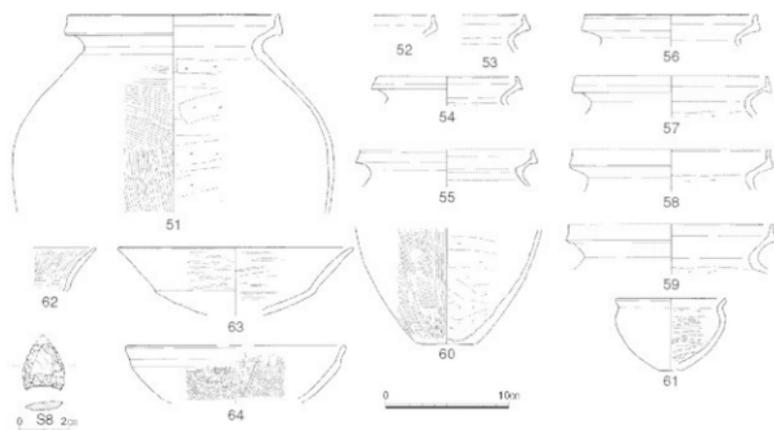


第38図 竪穴住居2古出土遺物② (1/3・1/5)



- 1 褐色粘質土(75YH4-4)
- 2 褐色粘質土(10YR11-4)
- 3 灰褐色粘質土(7.5YR11-2)
- 4 灰赤褐色粘質土(10YR5-2)
- 5 極灰色粘質土(10YR6/1)(炭灰)
- 6 黒褐色粘質土(10YR9/1)(炭灰)
- 7 黒褐色粘質土(10YR3/1)(粘性強、炭灰)
- 8 黒灰色粘質土(10YR5/2)(炭層面)
- 9 黄い灰褐色粘質土(10YR6/0)に極灰色粘質土(10YR5/2)

第39図 竪穴住居2新 (1/60)



第40図 竪穴住居2新出土遺物(1/4・1/2)

## 竪穴住居3(第35・41~43図、図版5)

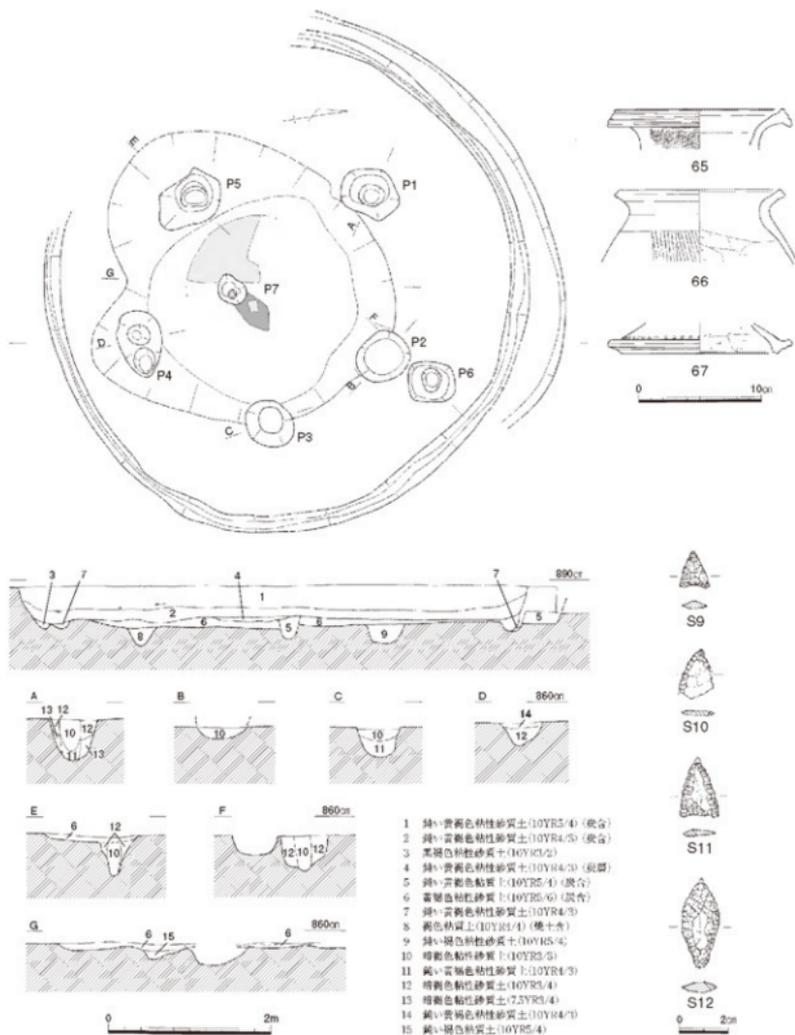
36ⅡWの北東に位置する円形住居である。床面2面とそれぞれに対応する主柱穴を確認していることから、古い住居を3古、新しい住居を3新と呼称して報告する。

竪穴住居3古は3新へと拡張する際に掘り方を壊されており、北側一部の掘り方しか残存していない。推定では直径6.5mを測る円形住居であると推測される。内部には幅20cm、深さ10cm程度の壁体溝が巡る。第41図第5・7層が埋土で、基盤層を床面としている。主柱穴はP1・3~6の5本、掘り方は幅55~90cmを測る不整形を呈し、柱痕は直径20~30cmの円形、深さは30~50cmを測る。住居の中心よりやや南寄りに、長軸4m・短軸3.5m・深さ10cmの不整形な落ち込みが見られる。その落ち込みの中心部に幅40cmで深さ10cmの中央穴P7を確認した。中央穴の周囲には被熱面や炭の分布が多く見られた。なお10cm程度の落ち込みは、断面図の第6層(黄褐色粘性砂質土)によって埋められ、平坦な面を作り出すことにより、竪穴住居3新の床面として使用している。

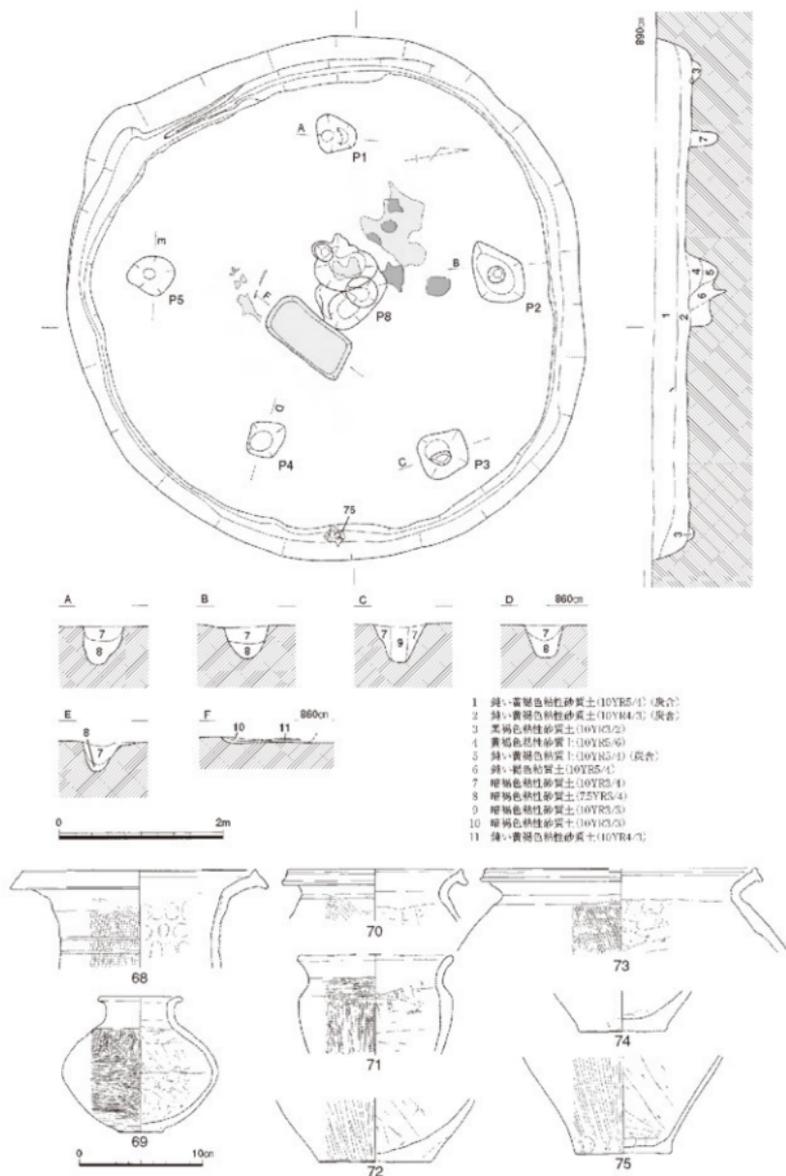
遺物は、壺65がP5、甕66がP6、高杯67がP4、石甌S9がP5、S10がP6、S11が床面、S12が中央穴P7より出土した。

竪穴住居3新は3古から50cm程南へずらして建てられており、前述したように3古の床面中央にある落ち込みを平坦に整地することによって、床面を作り出している。実際3古の落ち込み部分には炭が多く分布しており、3古の機能面として利用されていたことは間違いない。3新へと建て直した際に、床面の汚れや凹凸を隠すために黄褐色粘性砂質土(第6層)により整地したと考えられる。平面形は直径6.4mの円形を呈し、周囲には幅20~30cm、深さ10cmの壁体溝が巡る。主柱穴はP1~5の5本で、掘り方は幅40~70cmの不整形円形、柱痕は直径15~20cmの円形、深さは40~50cmを測る。住居中央には長軸1m×短軸85cmの中央穴P8がある。この中央穴P8は2回ほど掘り直しが行われており、内部からは炭が出上している。中央穴P8の南西に隣接して長軸1m×短軸50cm、深さ5cmで底面に炭層が堆積する方形土壇を確認した。この方形土壇から中央穴を挟んだ反対側には、数カ所の被熱面

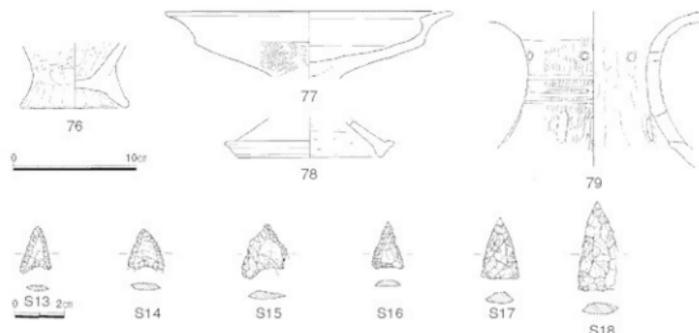
と炭の分布範囲を検出している。遺物は68・70・71・73・76~79、S13~18が埋土から、69はP2、74はP5、72・75は壁体溝埋土上面からそれぞれ出土している。上器の諸特徴から後期前葉に機能した住居であると考えられる。(松尾)



第41図 竪穴住居3古(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)



第42図 竪穴住居3新(1/60)・出土遺物①(1/4)



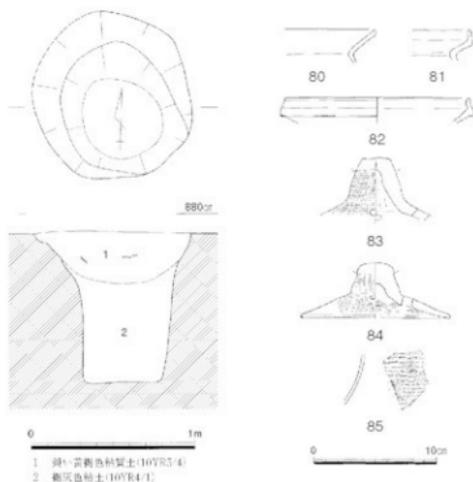
第43図 竪穴住居3新出土遺物②(1/4・1/2)

### 3 井戸

#### 井戸1 (第35・44図、図版5)

34ⅡSの東端、住居4から南へ2m下った場所に位置する。北西側の肩口を後述する古墳時代の溝3に破壊されている。平面形は不整形を呈しており、規模は長軸が1.02m、短軸が93cmを測る。断面は検出面から約20cmの深さまでは逆台形、それより下はほぼ垂直に落ちこむ。底部は平坦である。底までの深さは93cmである。埋土は2層のみであるため、意図的に埋め戻された可能性が高い。調査中も水が湧いてくるような状況であった。

遺物は甕の口縁部破片が3点、高杯脚部の破片が3点出土した。掲載した土器は第1層からの出土である。



第44図 井戸1(1/30)・出土遺物(1/4)

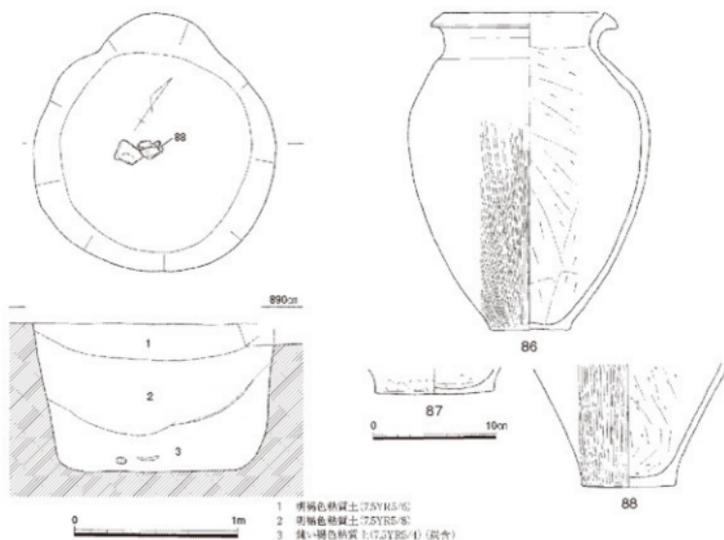
この井戸は前述の通り、古墳時代の溝に上部を壊されているため、80・81は溝3から紛れ込んだ土器だと思われる。その他の土器から後期後葉に埋没したと考えられる。(高山)

#### 井戸2 (第35・45図、図版6)

井戸1から南東へ15m南、36ⅡJの北西に位置する。長軸は1.59m、短軸が1.47mあり、平面形は北西がこぶ状に突き出すような不整形をしている。断面は筒状に立ち上がり、底は平坦である。その

底面までの深さは91cmを測る。

この井戸の近辺は大きな穴がまぎまぎと検出できた。井戸と土壌の区別が難しいが、この遺構は土壌として報告したものよりも深く、湧水が認められたため井戸として報告する。甕が3個体分出土しており、後期前葉の形態と思われる。(高山)



第45図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 井戸3 (第35・46図)

36ⅡJのやや東寄りに位置し、井戸2から東へ約7mのところにある。

井戸3は東側を側溝に切られているため、長軸は不明であるが、復元長で短軸は1.22mある。検出面からの深さは62cmを測る。断面形は垂直に立ち上がる筒状を呈しており、底面は平坦である。第3層の下面から自然石が出土しており、埋没する過程で投げ込まれたものと推察される。

遺物は甕89・鉢90と高杯の脚部91が出土している。高杯91の脚柱部には櫛描き直線文が施文されていた。

これら土器の特徴から、弥生時代後期前葉には埋没した井戸であると思われる。(高山)

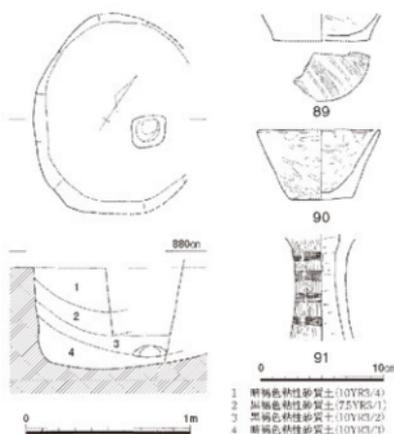
### 井戸4 (第35・47・48図、図版6)

井戸3の南、36ⅡJの中央あたりに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、北西隅に段をもつ。短軸は1.55m、長軸は破壊されているため復元長になるが、1.77mである。平坦な底をしており、検出面からこの底面までの深さは約1.12mを測る。底面標高は約7.63mであった。断面形は逆台形に近い、筒のような形状を持つ。この遺構も土壌との区別が難しかったが、他の井戸と同様に、深さがあったため井戸とした。さらに、底に近い部分を掘り進めると、水が湧き出てくるような状況であったこと

も井戸として報告する理由である。埋土は4層からなり、第4層以外は炭や焼土が含まれている。特に第2層は、焼土や炭、土器片を他の層よりも多く含んでいた。そのため、第1～3層までは人為的に埋め戻しが行われたと考えられる。

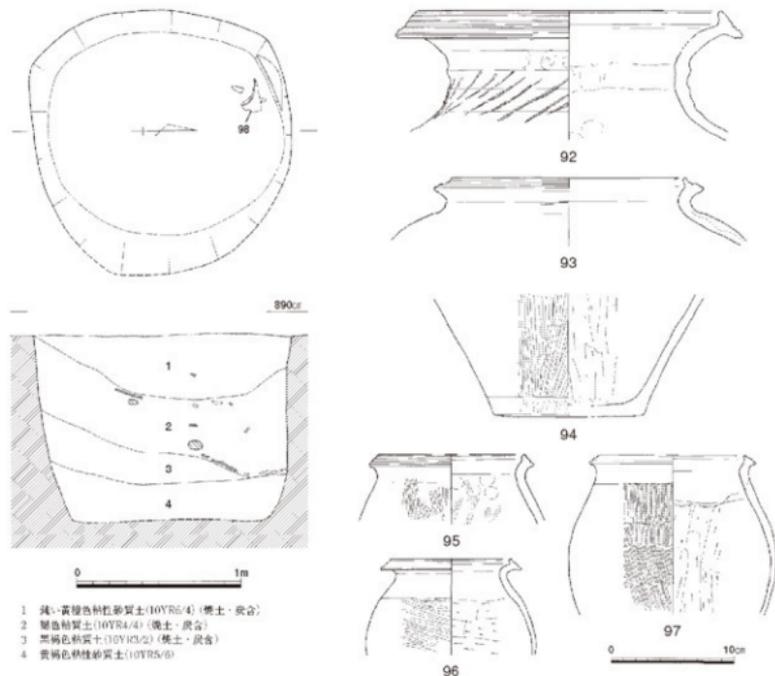
遺物は石器と土器が出土している。石器S19は打製石包丁である。土器は壺の口縁部92・93と、壺と思われる土器の底部94、甕の口縁部95～97・99、全体の2/3まで復元できた甕98、高杯の杯部から脚部にかけての破片100がある。

井戸が埋没した時期は、これらの土器の諸特徴から、中期末から後期初頭と考えられる。(高山)



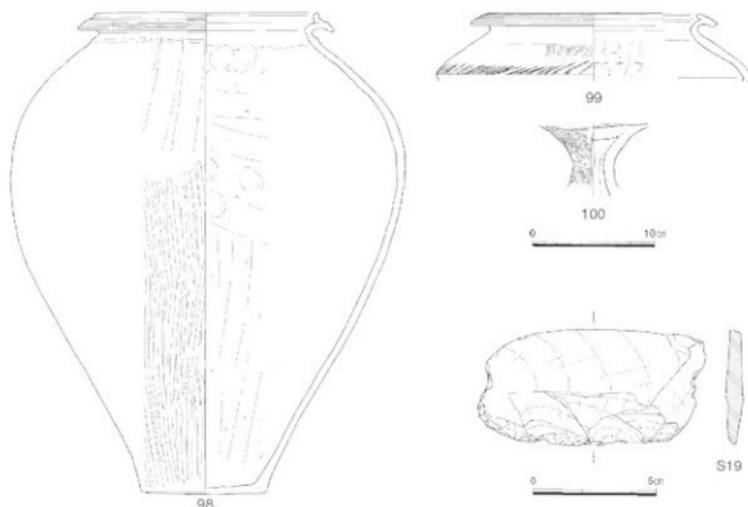
第46図 井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

- 1 黒褐色粘状砂質土(10YR5/4)
- 2 黒褐色粘状砂質土(7.5YR5/1)
- 3 黒褐色粘状砂質土(10YR3/2)
- 4 黒褐色粘状砂質土(10YR3/0)



第47図 井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/4)

- 1 黄・黄褐色粘状砂質土(10YR5/4) (焼土・炭含)
- 2 黒色粘質土(10YR4/4) (焼土・炭含)
- 3 黒褐色粘質土(10YR3/2) (焼土・炭含)
- 4 黄褐色粘状砂質土(10YR5/0)



第48図 井戸4出土遺物② (1/4・1/2)

## 井戸5 (第35・49図)

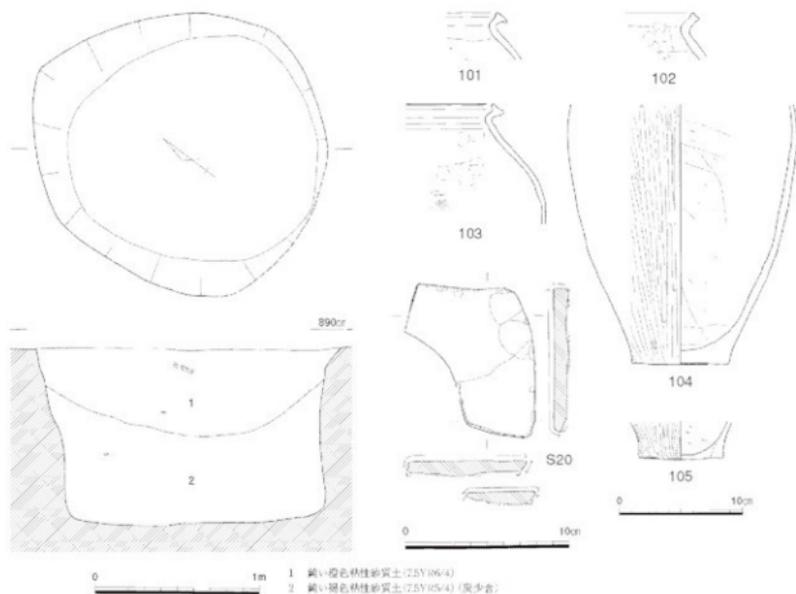
36 II Uの北西にあり、井戸4からみて北西に5m北上したところに位置し、上層3を切っている。ほぼ円形になる平面形を呈しており、長軸は1.77m、短軸は1.72mを測る。検出面から平坦な底面までの深さは1.07mある。断面は北側の壁は逆台形のように斜めに立ち上がっているのに対して、南側の壁は検出面から10cmまでは漏斗状に広がり、そこから下は底面まではほぼ垂直におちている。底面標高は7.72mである。埋土は2層のみで、第1層には土器片やマンガン粒が含まれており第2層には少量の炭が含まれていた。

遺物は砥石S20と土器が出土している。砥石はこの井戸から出てきた破片と、井戸4から出てきた破片とが接合した。このため井戸4と井戸5は同時期性が高い。出土土器は101～105の、甕の口縁部破片と底部破片、胴部から底部にかけての破片である。これらの土器の特徴から、中期末から後期初頭には埋没したと考えられる。(高山)

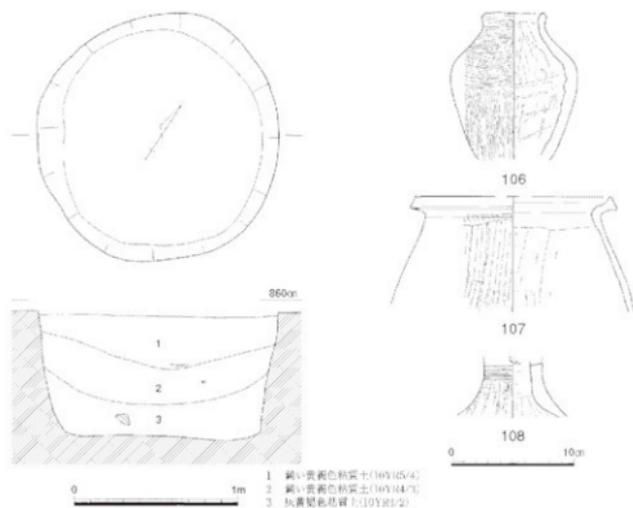
## 井戸6 (第35・50図)

36 II Uにあり、井戸5から南東へ5m南下した場所に位置する。平面形はほぼ円形を呈しており、直径は約1.5mを測る。断面形は逆台形をしているが、底面の中央部はやや盛り上がっている。底面の標高は7.77mあり、調査中も湧水が認められた。この遺構は、上層と報告した遺構よりも底面の標高が低かったため、井戸と考えた。検出面から凸状に膨らんだ底面までの深さは74cmである。埋土は図示したように3層からなる。

口縁部から胴部下半にかけての壺106や、口縁部から胴部にかけての甕破片107、高杯脚部破片108などの土器片が出土している。これらの土器から、井戸が機能していたのは後期前半までであると思われる。(高山)



第49図 井戸5 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



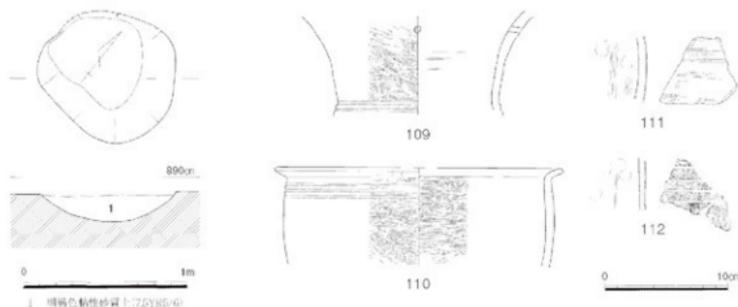
第50図 井戸6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 4 土壇

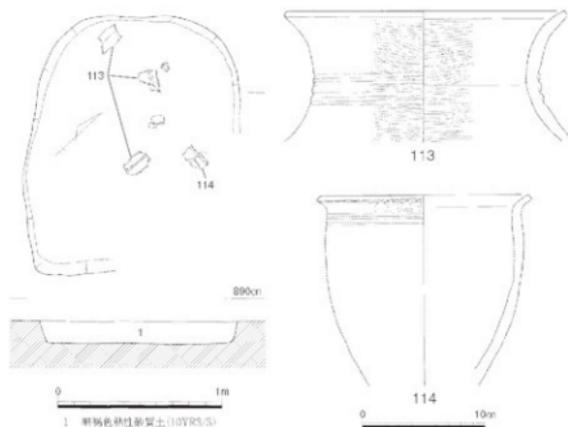
### 土壇2 (第35・51図)

36Ⅱ Uの北東で検出した長軸83cm、短軸80cmを測り、平面形が不整形円形を呈する土壇である。断面形は皿状で、検出面から底面までの深さは16cm。

出土遺物は壺109、甕110～112。109は口縁を大きく広げた壺で頸部に2条の沈線が巡る。110～112は屈曲部に数条の沈線が巡る。土器の特徴から前期後葉に埋没した土壇であろう。(松尾)



第51図 土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第52図 土壇3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 土壇3 (第35・52図)

36Ⅱ Uの中央やや北よりで、井戸5に西隅を切られて検出した。平面形は長軸1.57m、短軸1.24mの隅丸方形を呈する。断面形は壁が垂直に立ち上がり、底面は平坦である。検出面からの深さは16cmを測る。底面より10cmほど浮いて113・114の上器が出土した。113の頸部には、ケズリ出し突帯上に4条のヘラ描き沈線が巡り、内外

面ともに横方向のヘラミガキを行う。114は屈曲部にヘラ描き沈線2条が巡る。土器の特徴から前期後葉の土器とともに埋没した土壇であると思われる。(松尾)

## 土壌4 (第35・53図)

土壌4は34ⅡSのほぼ中央にある。平面形は不整形円形をしており、長軸が1.9m、短軸が52cmある。断面形は台形で、底部は平坦である。

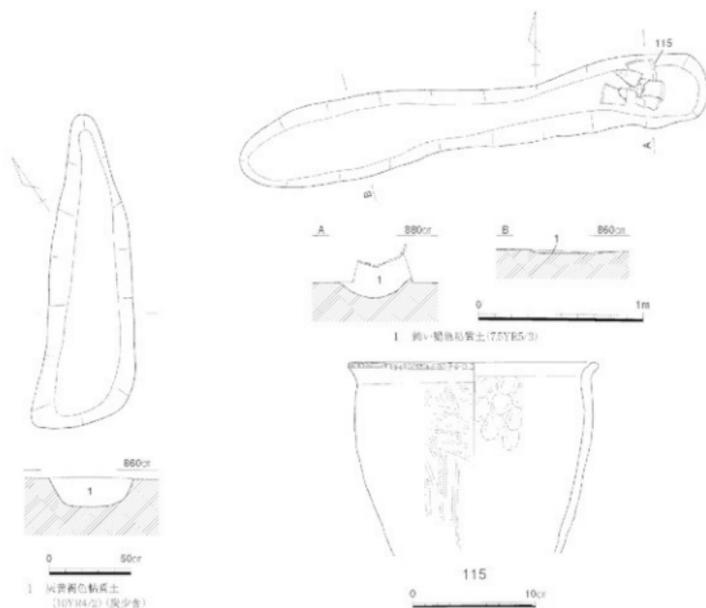
弥生時代前期と考えられる土器の小破片が出土している。

(高山)

## 土壌5 (第35・54図)

平面形が不整形円形をした東西に長い舟形土壌で、36ⅡUの中央にある。長軸は2.87mあり、短軸は45cmを測る。ほとんど削平されているため立ち上がりは不明で、底は平坦である。遺物は土器が出土している。甕115は口縁端部に刻目があり、胴部内外面にはナデを施している。弥生時代前期後葉と考えられる。

(高山)



第53図 土壌4 (1/30)

第54図 土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壌6 (第35・55図)

土壌6は36ⅡUにあり、南端を井戸4に破壊されている。短軸は31cmを測る。底部は平坦である。土壌の上部がほとんど削平されているため、土器が出土しておらず、正確な時期は不明であるが、検出レベルや埋土から弥生時代に属すると思われる。

(高山)

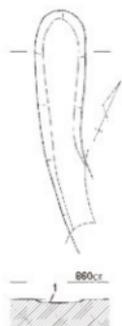
## 土壌7 (第35・56図)

38ⅡWの北東隅で検出した。側溝によって東部分を確認しきれていないが、平面形は長軸1.65mを測る楕円形を呈すると思われる。断面形は逆台形で底面はやや凸凹しており、検出面からの深さは15

cm程度。出土遺物は少なく、固化できたものは甕116のみ。

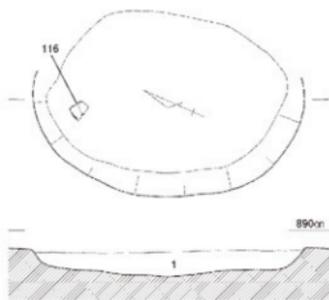
前期後葉に埋没した土壌と考えられる。

(松尾)



1 緑い褐色粘質土(7.2YR5/3)

第55図 土壌 6 (1/30)



1 黄い黄褐色粘性砂質土(10YR1/3)

第56図 土壌 7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

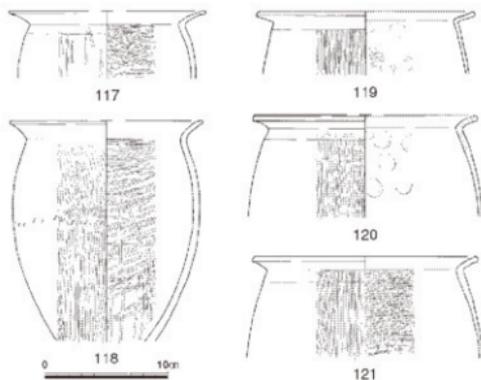
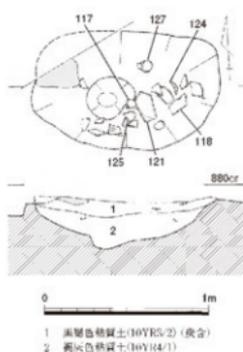


土壌 8 (第33・57・58図、図版 6)

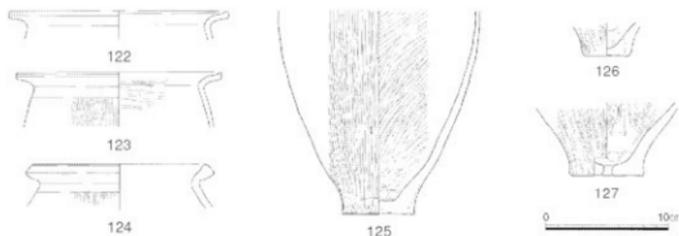
26 II G 南東、調査区北端において検出した。平面形は長軸1.14m、短軸71cmの不整長方形。断面形はなだらかに落ち込み、中央がやや窪んでいる。検出面から底面までの深さは30cmを測る。なお土壌の西端において、炭の塊を第1層中より確認した。

遺物は土壌の底面より10cmほど上から出土している。上器は117～127の甕のみ。諸特徴から中期中葉の古段階には埋没した土壌であると思われる。

(松尾)



第57図 土壌 8 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第58図 土坑8出土遺物② (1/4)

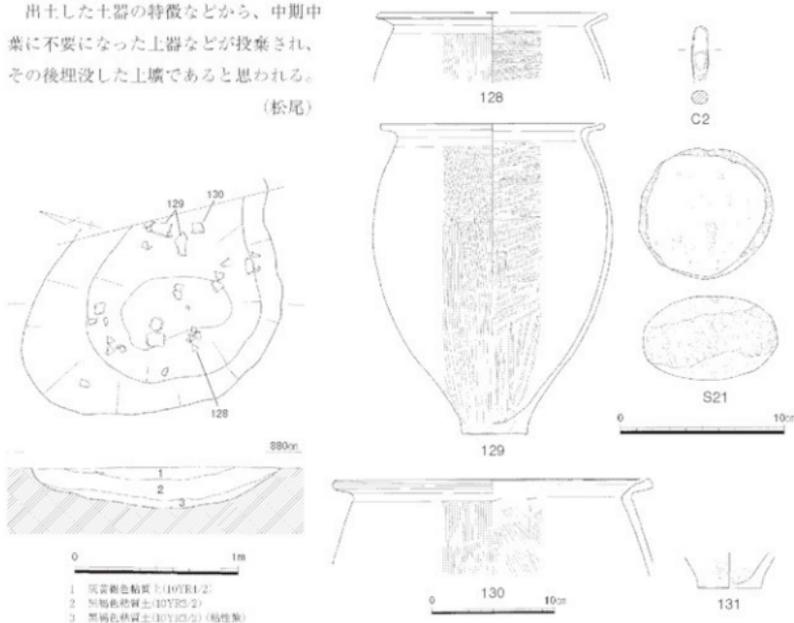
## 土坑9 (第33・59図、図版7)

26ⅡGの南東隅で、土坑8の南東側より検出した。平面形は幅1.5mを測る不整形を呈し、断面形は皿状にゆるく落ち込んでいる。検出面からの深さは25cmを測る。調査工程の関係から、土坑東端については全体形を明確にできなかった。ただし、東へはそれほど延びていないと思われる。

遺物は底面より10cmほど高い、第2層より多く出土している。平面図にも図化しているように、細かい土器の破片が散在していた。土器は壺128~130、C2は用途不明の上製品で、中央に指頭圧痕が観察できる。S21は流紋岩製の磨石。

出土した土器の特徴などから、中期中葉に不要になった土器などが投棄され、その後埋没した土坑であると思われる。

(松尾)



第59図 土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

- 1 灰青褐色粘質土(10YR4/2)
- 2 黒褐色粘質土(10YR5/2)
- 3 黒褐色粘質土(10YR5/2)(粘性強)

土壌10 (第33・60図)

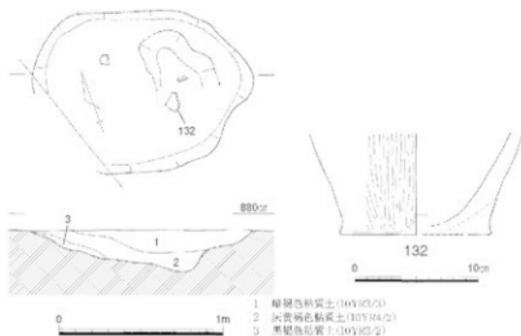
26ⅡGの南端で、土壌9の南側より検出した。平面形は長軸45cm、短軸44cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10cmを測る。出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、検出状況や埋土などから弥生時代の土壌であると思われる。(松尾)

土壌11 (第33・61図)

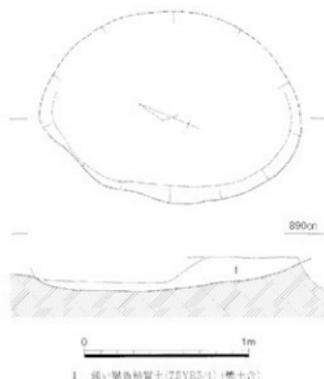
30ⅡMの西端中央に位置し、平面形は長軸1.35m、短軸98cmの不整形長方形を呈する。断面形はなだらかに落ち込み、底面は凹凸がある。検出面から底面までの深さは26cmを測る。底面よりやや高い位置から数点の土器が出土した。壺の底部132などから中期前半の土壌と推察される。(松尾)



第60図 土壌10 (1/30)



第61図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第62図 土壌12 (1/30)

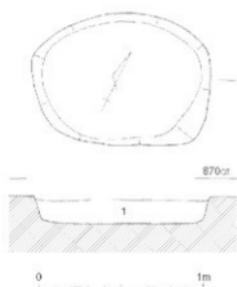
土壌12 (第34・62図)

30・32ⅡOで検出した土壌で、東半分は明確な掘り方を確認できなかった。推定では、平面形が長軸1.59m、短軸1mの楕円形で、断面形は深さ16cmの皿状を呈する。

出土遺物は図化に耐えうるものがなく、明確な時期は不明である。検出状況や埋土などから、弥生時代であると思われる。(松尾)

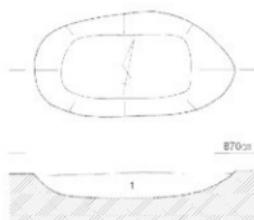
土壌13~15 (第34・63~65図)

32ⅡOで検出した土壌で、いずれも縄文時代晩期後半から弥生時代前期にかけての基盤層である、鈍い黄褐色粘性砂質土を下げっていく過程で検出している。3基ともに出土遺物は皆無で、時期を明確にするのは難しい。縄文時代晩期前半(谷尻式)の柱穴1と同じレベルで検出しているの、その時期まで遡る可能性も考えられる。(松尾)



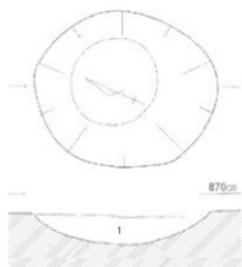
1 黄い褐色粘質土(7.5YR5/4)  
(緑色粘土含)

第63図 土壌13 (1/30)



1 褐色粘質土(7.5YR4/4)(緑色粘土含)

第64図 土壌14 (1/30)



1 黄い褐色粘質土(7.5YR5/4)  
(黄緑色粘土含)

第65図 土壌15 (1/30)

#### 土壌16 (第34・66図)

32ⅡOの南西で、土壌13～15の南に位置する。平面形は直径73cm程度の円形で、断面形は深さ20cmを測る逆台形を呈する。土壌内には川原石が2つ積み重なるように出土している。土器の出土が無く明確な時期は不明だが、土壌13～15と同様の理由により縄文時代晩期前半まで遡る可能性がある。(松尾)

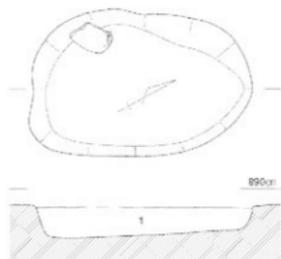
#### 土壌17 (第34・67図)

32ⅡO・ⅡQで検出した平面形が長軸1.33m、短軸89cmの楕円形を呈する土壌である。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは19cmを測る。土壌の西側壁際に川原石が1つ出土した。土器は皆無であるが、状況などから弥生時代と思われる。(松尾)



1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)  
(黒土・炭含)

第66図 土壌16 (1/30)



1 褐色粘性粘質土(7.5YR4/6)

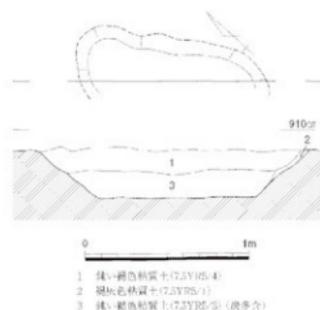
第67図 土壌17 (1/30)

#### 土壌18 (第34・68図)

土壌18は32ⅡQの中央あたりに位置する。平面形は不整長方形だと考えられ、復元長は1.14m。底部は平坦で、断面は台形をしており、深さは29cmを測る。検出レベラや埋土から弥生時代の遺構であると考えられる。(高山)

#### 土壌19 (第34・69・70図、図版7)

32ⅡQの北、土壌18の北隣で検出した。後述する土壌20に南東の一部が切られている。平面形は長軸2m以上、短軸1.53mの不整長方形。断面は皿状を呈し、中央やや北西寄りに1m×55cmを測る不



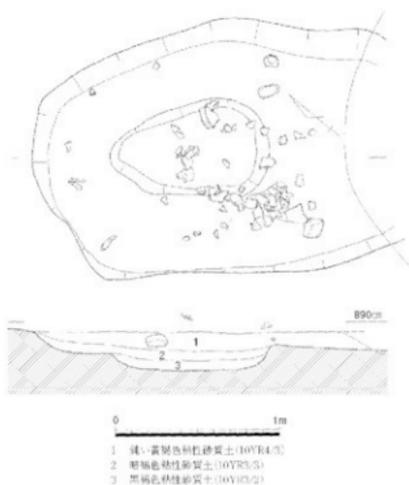
- 1 黄褐色粘質土(17.2V R5-4)
- 2 黒灰色粘質土(17.2V R5-1)
- 3 黄褐色粘質土(17.2V R5-2) (後混合)

第68図 土坑18 (1/30)

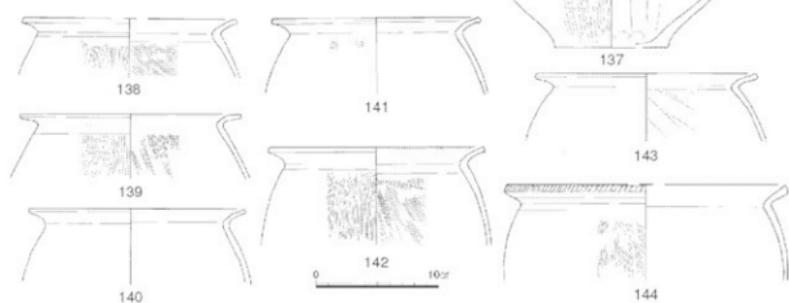
整形な落ち込みがある。検出面から落ち込み底面までの深さは23cm。

遺物は第1層中、あるいは検出面よりレベル的に高い位置から多く出土している。土器は多くが破片資料で、口縁部が大きく開く壺133や、頸部あるいは肩部に加飾のある壺134。138～148は甕。144は口縁端部に面をもち、刻目を巡らしている。148は底部に焼成後の穿孔あり。149～150は高杯。150は碗形の杯部に水平に延びる口縁を有し、内外面は横方向のヘラミガキ。

土器の特徴から中期中葉には埋没した土壌であると思われる。(松尾)



- 1 黄褐色粘紅砂質土(10VR4-3)
- 2 暗褐色粘紅砂質土(10VR5-3)
- 3 黒褐色粘紅砂質土(10YR5-2)

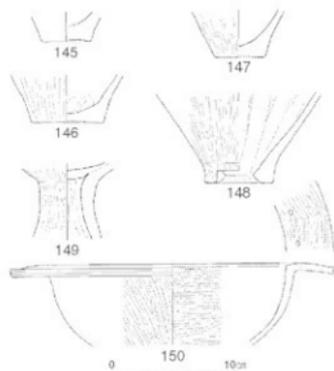


第69図 土坑19 (1/30)・出土遺物① (1/4)

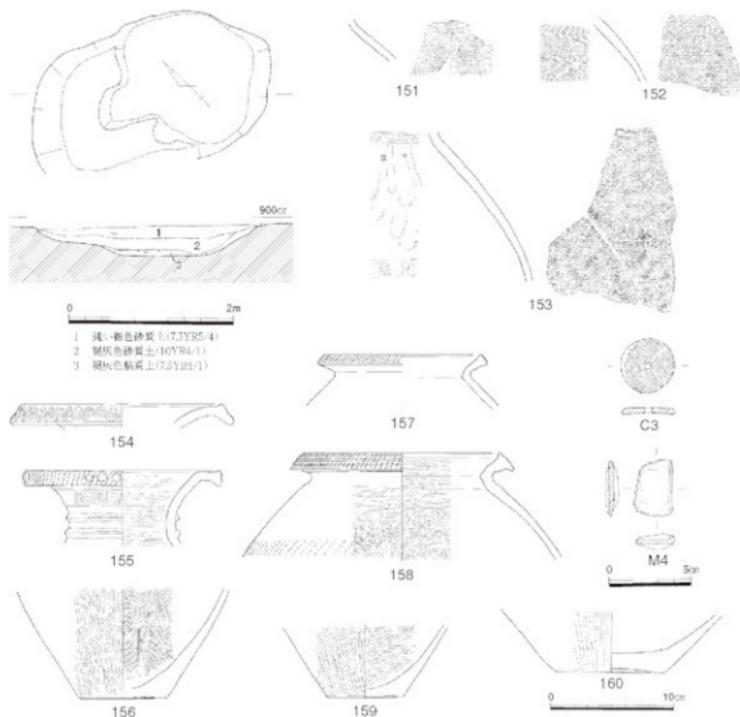
## 土壌20 (第34・71・72図、図版7)

32ⅡQの北で検出した土壌で、土壌19の南東部を切っている。平面形は長軸2.8mの不整長方形を呈し、東の一部は調査区外へと延びている。断面形は緩やかに落ち込み、底面はやや凹凸がある。

遺物は第3層より多く出土した。151～160は壺。151～153は体部に櫛描きの直線文や波状文、刺突文が施されている。155は頸部に貼付突帯が巡る。161～180は甕。181は鉢。182～186は高杯。182・183は杯部が碗形を呈し、口縁端部に刻目を巡らす。C3は土製紡錘車。M4は铸造鉄斧を再加工した鉄製品。S22・23は石製品。中期中葉に使用され、その後埋没したと考えられる。(松尾)



第70図 土壌19出土遺物② (1/4)



第71図 土壌20 (1/60)・出土遺物① (1/4・1/3)



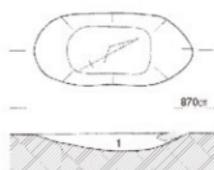
第72図 土坑20出土遺物② (1/4・1/2・1/3)

## 土壌21 (第34・73図)

34ⅡSの北東に位置し、堅穴住居2古に切られて確認した。平面形は長軸96cm、短軸44cmの楕円形で、断面形は皿状を呈す。検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土には炭を多く含んでいた。出土遺物は少なく、図化が難しい土器の小破片のみ。中期中葉と思われる。(松尾)

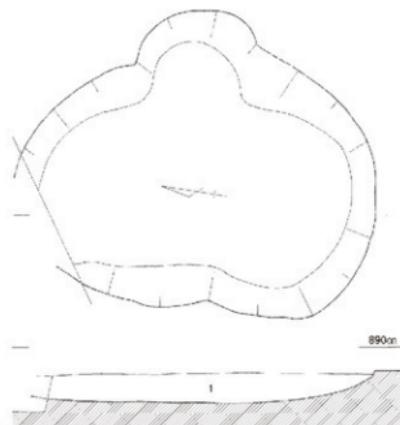
## 土壌22 (第34・74図)

34ⅡQの西端に位置する。平面形は不整形楕円形をしており、短軸は1.75m、底面は平坦で、断面は逆台形を呈し、深さは18cmである。出土した壺胴部の破片187から、中期前半に属すると考えられる。(高山)



0 1m  
1 黄赤褐色粘質土(GYR34) (炭含)

第73図 土壌21 (1/30)



0 1m  
1 褐色粘性質土(Z2YR4-7)

第74図 土壌22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壌23 (第35・75図)

36ⅡJの中央あたりに位置する。

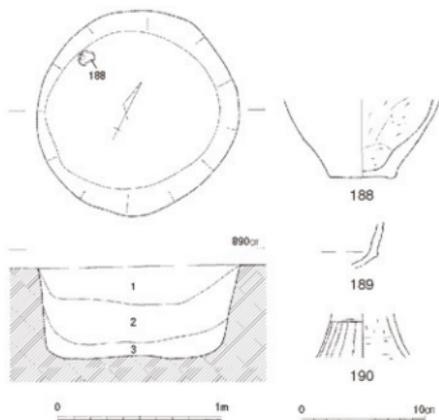
平面は円形で、断面は下場から上場に向かって筒状に伸び、底面は中央が盛り上がっている。長軸は1.25m、短軸は1.23m、深さは56cmを測る。

井戸との区別が難しいが、井戸と報告した遺構に比べると深さが浅いため土壌とした。出土した土器から、弥生時代後期初頭のものと考えられる。

(高山)

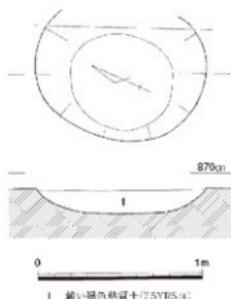
## 土壌24 (第33・76図)

28ⅡI・ⅡKに位置する。平面形は長軸1.03mを測る楕円形で、断面形は皿状を呈する。検出面から底面までの深さは14cmを測る。



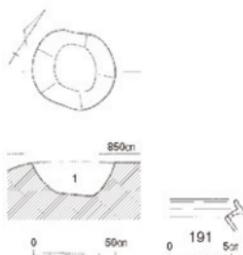
0 1m  
1 黄褐色粘性質土(10YR4/3)  
2 黄褐色粘質土(7.5YR5/4) (炭含)  
3 黄褐色粘質土(10YR4/2)

第75図 土壌23 (1/30)・出土遺物 (1/4)



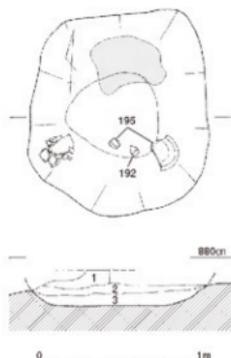
第76図 土壌24 (1/30)

1 黄い褐色粘質土(10YR5/4)



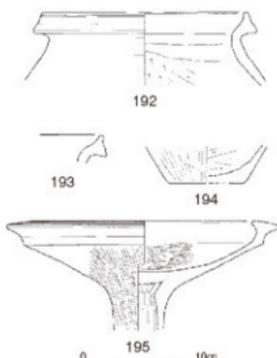
第77図 土壌25 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

1 黄褐色粘質土(10YR5/2)



第78図 土壌26 (1/30)・出土遺物 (1/4)

1 黄褐色粘質土(10YR5/2)  
2 灰黄色粘質土(10YR4/2)  
3 灰黄色粘質土(10YR5/2)



出土遺物は少なく、図化のできない小破片のみ。詳細な時期は不明であるが、検出状況や埋土などから弥生時代の土壌と推察される。(松尾)

土壌27～29 (第33・79～81図)

28ⅡKの南東に位置する土壌群。土壌27は平面形が長軸76cm×短軸45cmの楕円形で、断面形は検出面から底面までの深さが24cmを測る逆台形。土壌28は平面形が長軸1.07m×短軸56cmの不整形円形で、断面形は検出面から底面までの深さが8cmを測る皿状を呈する。土壌29は南側が現代用水路によって切られているため平面形は明確ではないが、長軸71cmを測る楕円形を呈する。断面形は検出面から底面までの深さが38cmを測るややいびつな逆台形であった。出土遺物は少なく、時期を明確に得る土器はないが、検出状況等から弥生時代の土壌と思われる。(松尾)

出土遺物は少なく、図化のできない小破片のみ。詳細な時期は不明であるが、検出状況や埋土などから弥生時代の土壌と推察される。(松尾)

土壌25 (第33・77図)

28ⅡIの南端中央に位置し、土壌24の東、土壌26の北西で検出した。平面形は長軸50cm×短軸47cmの不整形円形。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは21cmを測る。

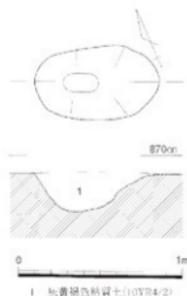
出土遺物は少なく、図化できたものは191の甕のみ。後期前半と思われる。(松尾)

土壌26 (第33・78図)

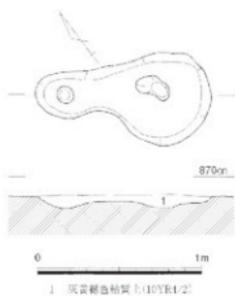
28ⅡI・ⅡKに位置し、土壌24の東で検出した。平面形は長軸1.22m×短軸1.06mを測る長方形で、断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは22cmを測る。ただし上面が中世以降に大幅な削平を受けているとみられ、本来はもう少し深さがあっただと思われる。

遺物は192～195の土器が出土した。

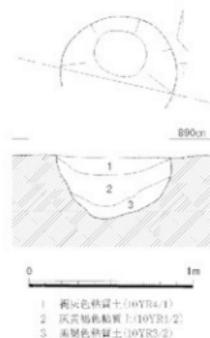
いずれも埋土第3層上面、土壌底面より10cm程度浮いた状態で確認している。192・193は口縁端部を上方につまみ出し、外面には凹線を巡らす甕。194は甕の底部。195は口縁端部を水平に拡張した面に凹線を巡らした高杯。後期初頭に埋没した土壌であろう。(松尾)



第79図 土壌27 (1/30)



第80図 土壌28 (1/30)



第81図 土壌29 (1/30)

## 土壌30 (第34・82図)

32ⅡQと34ⅡQの境界で検出し、土壌20から東へ約5m、土壌31から北西へ5mのところに位置する。

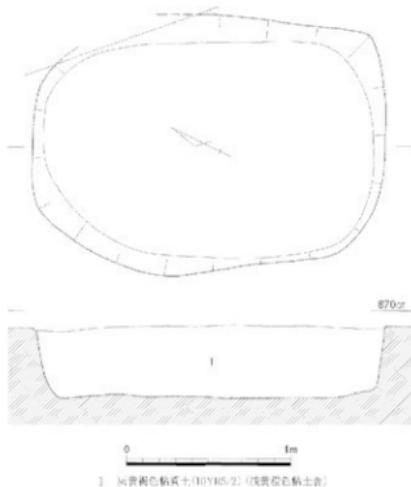
平面はやや隅が丸い、いびつな長方形をしており、壁面は筒状に近い逆台形で、底面にはわずかに凸凹がみられる。長軸が2.13m、短軸が1.56mを測る。深さは検出面から44cmあり、底面の標高は8.17mである。

埋土は1層のみで、土壌42や土壌43の埋土によく似た、黄色い粘土塊を含んでいた。

甕の口縁部破片196・197が出土しており、この土器から弥生時代後期後葉に埋没したと考えられる。(高山)

## 土壌31 (第34・83図)

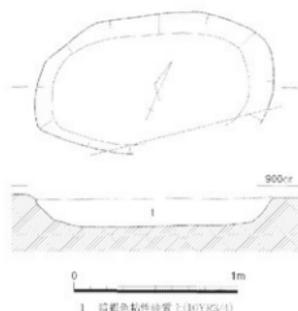
土壌30から4mほど南下した場所に位置する。規模は、長軸が1.45m、短軸が復元長で約83cmを測る。検出面からの深さが17cmである。平面は隅丸長方形を呈し、底部は平坦で、断面は逆台形をしている。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出したレベルや埋土の色から弥生時代の遺構だと考えられる。



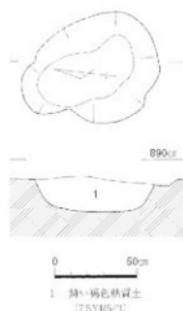
第82図 土壌30 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙32 (第34・84図)

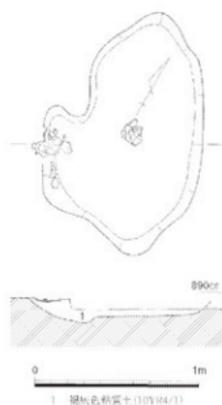
34ⅡQの南西、土壙31から約8m南に位置する。不整な楕円形をした平面で、断面形は逆台形を呈す。底面は平坦になっており、その標高は8.57mである。出土遺物は少なく、実測に耐えうる土器はない。後期の土壙であろう。



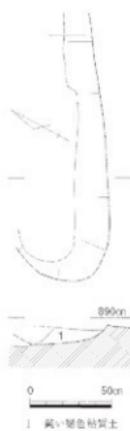
第83図 土壙31 (1/30)



第84図 土壙32 (1/30)



第85図 土壙33(1/30)・  
出土遺物 (1/4)



第86図 土壙34(1/30)・  
出土遺物 (1/4)

土壙33 (第34・85図)

土壙33は、34ⅡSのやや北寄りにある。削平を受けたためか、検出時には深さは14cmであった。断面をみると底は東側から西側にかけて段状に低くなっており、低い西側で標高は8.72mである。平面はいびつな楕円形のような形をしており、長辺が1.4mあり、短辺が97cmであった。土壙の機能は不明である。底面から浮いた状態で甕の口縁部破片が出上している。この土器から後期後葉に位置づけられる。

(高山)

土壙34 (第35・86図)

土壙34は、36ⅡSの西端に位置する。この土壙は、東側は調査区外に延び、北側は古墳時代の溝3に破壊されている。そのため規模は不明で、平面形は、残っている部分から、楕円形を呈していたと考えられる。検出面からの深さは11cmを測り、底面の標高は8.74mである。

遺物は高杯の脚部が出土している。土器から弥生時代後期前葉に属すると考えられる。

(高山)

土壙35 (第35・87図)

土壙35は土壙34の南に位置する。不整な円形をしており、規模は1.04m×85cmである。断面形は筒状に近い逆台形を呈しており、底面は平坦である。

検出面からの深さは15cmあり、標高は底面で8.36mを測る。土器は出土していないが、周囲の状況から弥生時代に位置づけられるだろう。(高山)

#### 土壌36 (第35・88図)

36Ⅱ S にあり、土壌35の南隣に位置する。平坦な底面をしており、標高は8.37m、深さは17cmある。平面形は不整な楕円形をしており、大きさは長軸で1.78m、短軸で1.27mを測る。土器は出土していないが、弥生時代の遺構と考えられる。(高山)



1 褐色赤褐色粘質土(10YR5-1)  
第87図 土壌35 (1/30)



1 褐色粘質砂質土(10Y10-4)  
第88図 土壌36 (1/30)

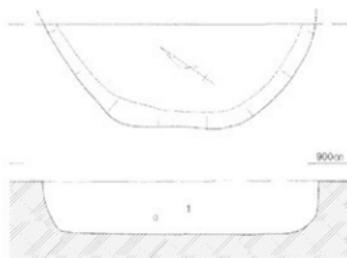
#### 土壌37 (第35・89図)

土壌36の南東に位置する。東側が調査区外に延びているため、規模や平面形は不明瞭である。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、底面は平坦な形をしている。深さは32cmあり、底面の標高は8.57mである。埋土は炭を含んだ単層であった。

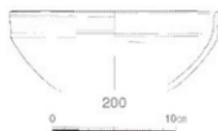
遺物は鉢が出土している。形状から、弥生時代後期後葉のものだと考えられる。(高山)

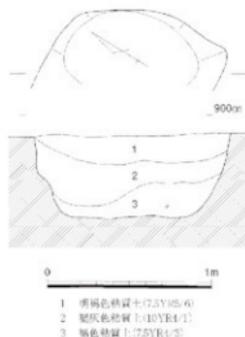
#### 土壌38 (第35・90図)

土壌38は36Ⅱ S の西側にある。西側は側溝に切られてはいるが、現存長で1.12mを測る。断面は逆台形をしており、底面は平坦である。検出面からの深さは49cmである。この土壌も井戸との区別が難しいが、深さから土壌として報告する。埋土等から弥生時代と思われる。(高山)



1 灰青褐色粘質土(10YR5-2) (炭層)  
第89図 土壌37 (1/30)・出土遺物 (1/4)



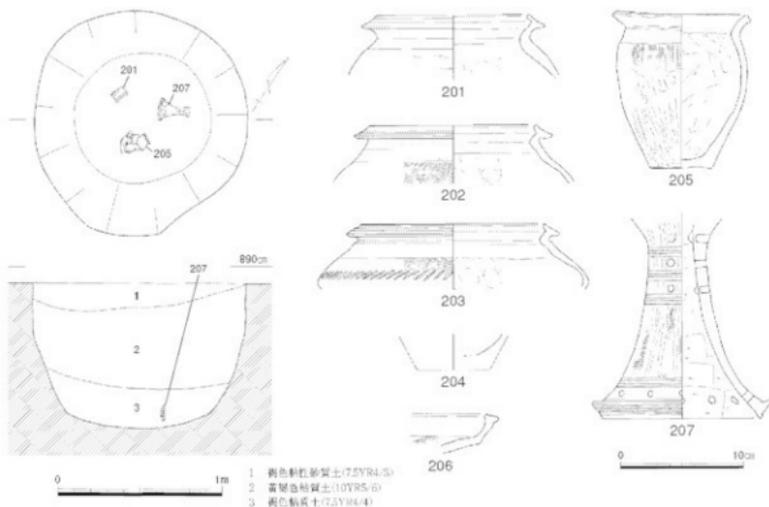


第90図 土壌38 (1/30)

- 1 赤褐色粘質土(7.5YR5/6)
- 2 紫灰色粘質土(10YR4/1)
- 3 褐色粘質土(7.5YR4/2)

土壌39 (第35・91図、図版7)

36ⅡU北西、土壌38の東隣で検出した。平面形は長軸1.37m、短軸1.29mを測る不整形円形を呈し、断面形は検出面から底面までの深さ89cmを測る逆台形。埋土は3層に分層できた。第1層は褐色粘質砂質土、第2層は黄褐色粘質土、第3層は褐色粘質土で、第3層から201・205・207などの土器が出土した。201・202は甕で口縁部は上下に拡張し、外面に凹線を巡らしている。203は台付鉢。201・202の口縁と同様上下に拡張し外面には凹線が巡り、肩部には刺突文を配する。204は甕の底部。205は「く」字甕。206・207は高杯。206は口縁部が外側へ拡張し、水平口縁をもつ。207の脚部には直線文や円孔を配し加飾している。中期末から後期初頭の特徴を示す。(松尾)



第91図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌40 (第35・92図、図版8)

36ⅡUの北西部に位置する。平面は円形を呈しており、直径は1.31~1.27mを測る。底面の中央が大きくくぼんでおり、検出面からくぼんでいる底面までの深さは56cmある。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層からなり、どちらの層にも炭が少量含まれている。土器は出土していないが検出レベル等から弥生時代の遺構と考えられる。(高山)

土壌41 (第35・93図)

36ⅡUの北西部に位置し、土壌40から南に1mのところ検出された平面がほぼ円形を呈す土壌で

ある。

規模は径約1.24mで、土壘40と同様に底部中央がややくぼんでおり、検出面からの深さは69cmを測る。断面形はやや急な傾斜の逆台形をしており、上部には北側を除いて緩やかなテラス状の段が巡っている。

埋土は1層のみであるため、意図的に埋め戻されたと考えられる。

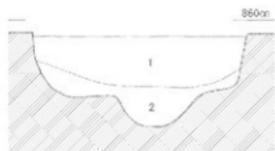
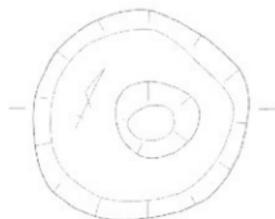
遺構の埋没時期は後期初頭であろう。(高山)

#### 土壘42 (第35・94図)

36ⅡUの北に位置し、土壘43を切っている。

平面はほぼ円形を呈しており、規模は直径約91cmである。底部は平坦で、断面は緩やかに立ち上がり、逆台形をしている。深さは28cmである。

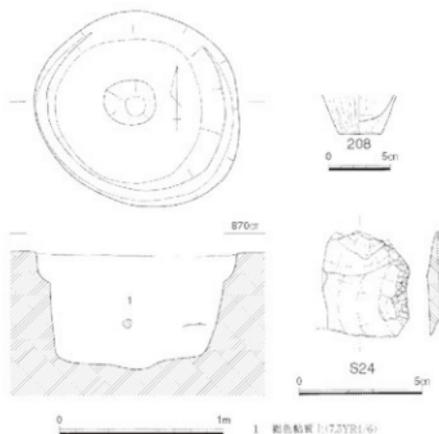
埋土は1層で、ベースの土によく似た埋土で、黄色っぽい粘土塊を含んでいた。遺物の出土はないが、弥生時代に属すると思われる。(高山)



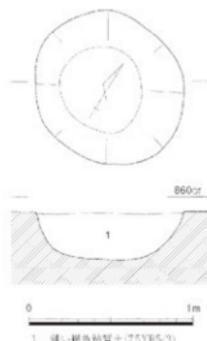
0 1m

- 1 褐色粘質土(7.23YR1/0)・灰白  
2 灰白色粘質土(7.5YR1/2)・灰(少量)

第92図 土壘40 (1/30)



第93図 土壘41 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



第94図 土壘42 (1/30)

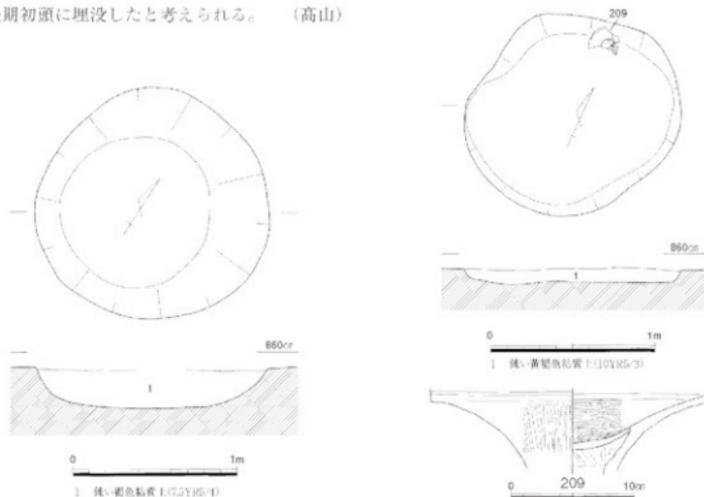
#### 土壘43 (第35・95図)

36ⅡUの北に位置し、土壘42に北側を切られている。平面はほぼ円形を呈しており、直径は約1.42mで、検出面からの深さは23cmを測る。断面形をみると、壁は弧を描くように緩やかな立ち上がりをしており、底面は平坦である。埋土は土壘42とよく似ていた。遺物は出土していないが、弥生時代に属する可能性が高いと考えられる。(高山)

土壙44 (第35・96図)

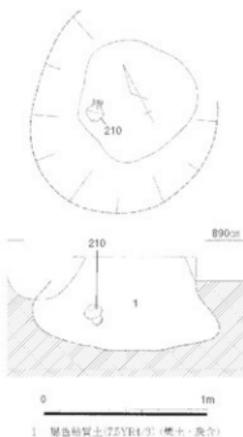
36ⅡUのほぼ中央にあり、土壙43から5m南下したところに位置する。平面は不整な円形をしており、径は1.3~1.23mを測る。底面はほぼ平坦で、断面形はほぼ逆台形をしている。深さは9cmで、検出した面からの深さは非常に浅い遺構であった。

土壙の北から高杯209が出土している。この土壙は後期初頭に埋没したと考えられる。(高山)



第95図 土壙43 (1/30)

第96図 土壙44 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第97図 土壙45 (1/30)

土壙45 (第35・97・98図、図版8)

36ⅡUの南東に位置し、東の一部分が調査区の側溝により切られている。平面形は長軸76cm、短軸74cmを測る不整円形。底面の幅は1.13mを測り、断面形はいわゆる袋状を呈する。検出面から底面までの深さは57cm。

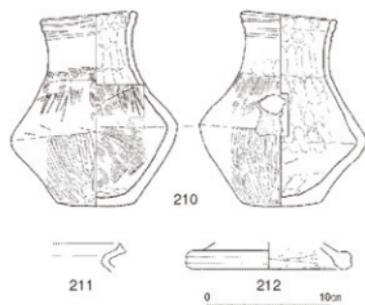
埋土は焼土や炭を含む褐色粘質土の単層で、土壙の使用が終了した後、人為的に埋め戻しているようである。

遺物の出土は少なく、完形の壺210の他に211・212など土器の破片のみ。210は土壙の東側面において、底面から10cmほど高い位置から口縁部を下に向けた形で確認している。算盤玉のような横に張る体部をもつ直口壺で、口縁部下端にはヘラ状工具による3条の沈線が巡る。肩部には焼成後の穿孔と、それに対称する位置に先の尖った工具による線刻が、2つ横並びに描かれている。左に少し下がった横線とこれに交差する縦線が5~6本引かれ、向かって左側の線刻は横線を引き直したためか、

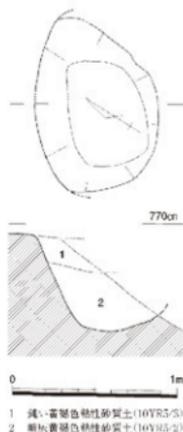
一部二重になっている箇所が観察できるが、基本的に2つの線刻は同じものを表現していると思われる。211は甕。212は高杯の脚部。後期前葉に役目を終え埋められた土壌であろう。（松尾）

#### 土壌46（第35・99図）

38ⅡWの南に位置する。土壌北端部のみを残し、残りの大部分は河道1の肩部にかかる。残存している長軸は1.05m、短軸は75cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは55cm。出土した土器片や河道1との関係、検出状況等から後期前葉の土壌と思われる。（松尾）



第98図 土壌45出土遺物（1/4）



第99図 土壌46（1/30）



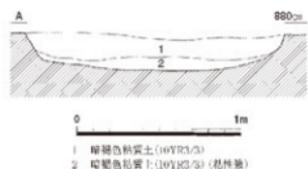
写真9 36ⅡU井戸・土壌群作業風景（北西から）

## 5 溝

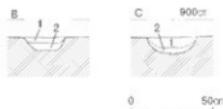
#### 溝1（第33・100図）

26・28Ⅱ1に位置し、土器溜まり1～3の南で検出した南西-北東に流れる溝。断面形は幅1.57mを測る逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは22cm。埋土は2層あり、第1層は暗褐色粘質土で第2層は粘性の強い暗褐色粘質土。

出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、検出状況等から弥生時代の溝であると思われる。（松尾）



第100図 溝1（1/30）



- 1 鈍い黄褐色粘質土(10YR4/3)  
2 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)

第101図 溝2 (1/30)

## 溝2 (第31・101図)

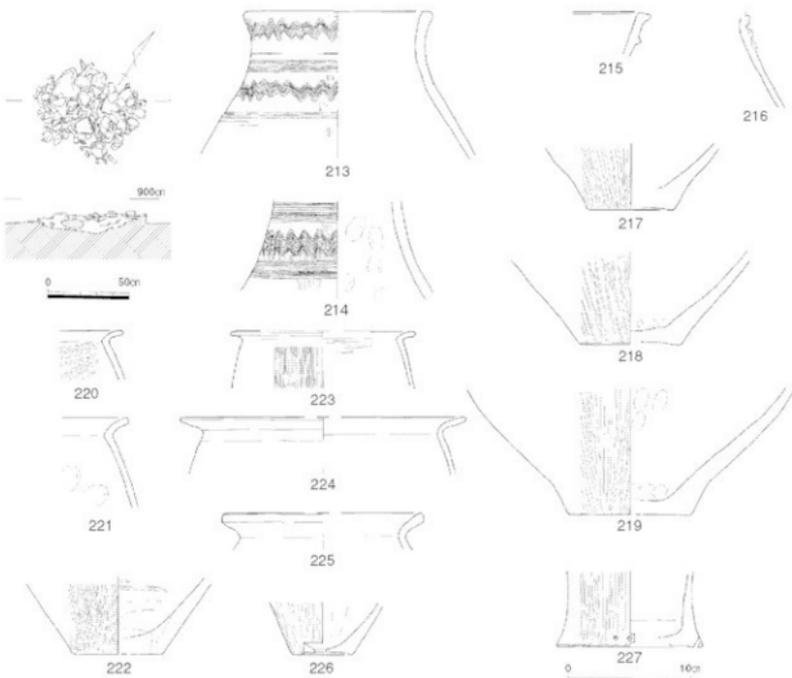
30ⅡOの北東に位置し、土層12の北西で確認した南西-北東に流れる溝。南西隅で取戻し、それより西には延びていない。幅30cmで検出面から底面までの深さは8~10cm。埋土は2層あり、第1層は鈍い黄褐色粘質土、第2層は灰黄褐色粘質土。

出土遺物は少なく、図化できない土器の破片のみ。検出状況から後期の溝であると思われる。(松尾)

## 6 土器溜まり

### 土器溜まり1 (第33・102図)

25ⅡIの東、土器溜まり2の西隣で検出した。南溝手遺跡は北へいくほどに基盤層(鈍い黄褐色粘性砂質土)が高くなる。そのため近世耕作土を除去すると、土器溜まり上面の土器が露出しているという状況であった。土器溜まり1は、長軸68cm×短軸60cmの範囲に土器と共に拳大の礫が密集していた。明確な掘り方はなく、断面において点線で示している範囲は、土器等を除去した後の痕跡に過ぎない。213~227の土器が出土している。中期前葉新相の特徴を示す。(松尾)



第102図 土器溜まり1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土器溜まり2 (第33・103図)

26Ⅱ Iの東、土器溜まり1の東隣で確認した。検出状況は土器溜まり1と同じ。分布範囲は長軸50cm×短軸20cm。

壺228は頸部に櫛描きの直線文と波状文が巡る。229～231は甕。232は口縁端部外面に刻目を配する高杯。

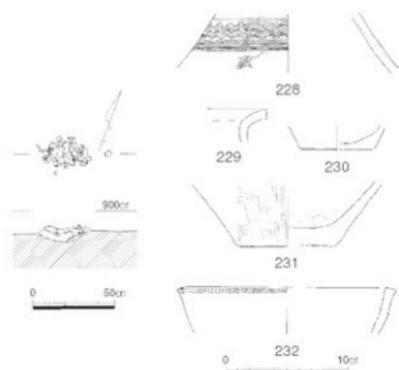
出土する土器の諸特徴から、中期中葉の様相を呈する。(松尾)

## 土器溜まり3 (第33・104図)

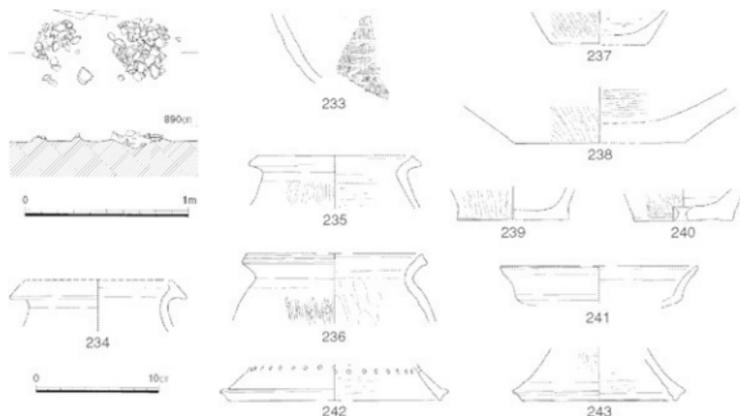
28Ⅱ Iの北西、調査区東端で検出した。土器と礫が集中しているか所は、大きく2つに分かれる。すなわち北側、南側共に長軸40cm×短軸30cmの範囲で分布していた。

検出状況は土器溜まり1・2と同様、近世耕作土直下で検出される黄色味の強い、弥生時代以降の基盤層直上で確認した。

遺物は233～243の土器のみ。234・236・238・242は北側から、233・239～243は南側から出土した。土器の様相から北と南とでは時期差がないと思われる。後期中葉であろう。(松尾)



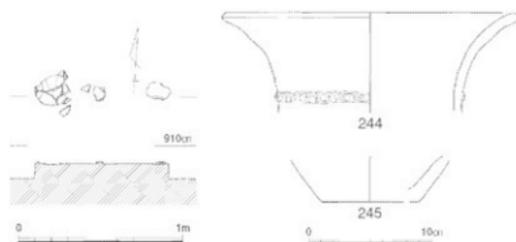
第103図 土器溜まり2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第104図 土器溜まり3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土器溜まり4 (第34・105図)

32Ⅱ Qの北、土塋19の北西で検出した。土器溜まり1～3と同様、明瞭な掘り方は無く、基盤層を掘り下げていたところ、長軸90cm×短軸30cmの範囲に土器が分布していたため、土器溜まりとして報告する。



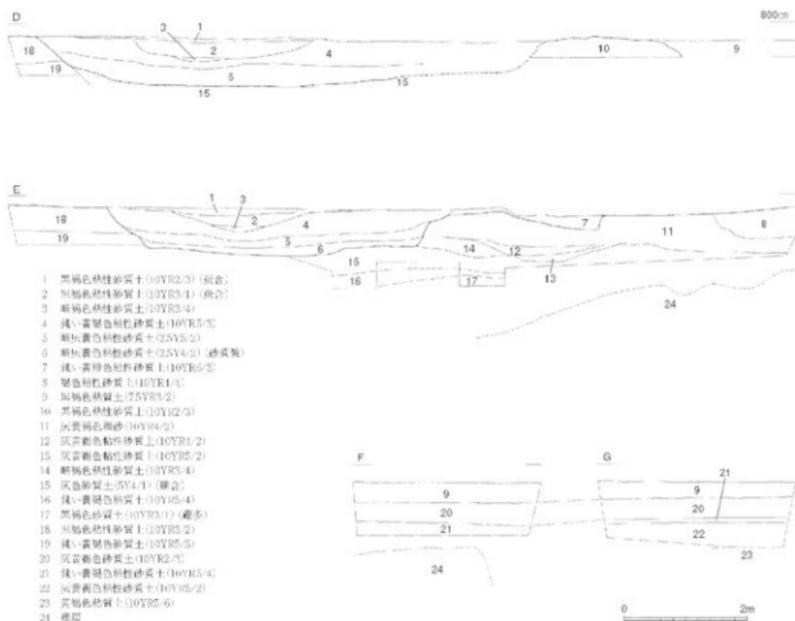
第105図 土器溜まり4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

出土遺物には244・245の土器がある。244は頸部に指頭圧痕文を施した次帯を配し、口縁部が大きく開く壺。口縁部から頸部にかけて1/6程度残存しており、口径は23.4cmを測る。245は壺の底部で1/6程度残存している。土器の様相から前期末の上器溜まりであろう。(松尾)

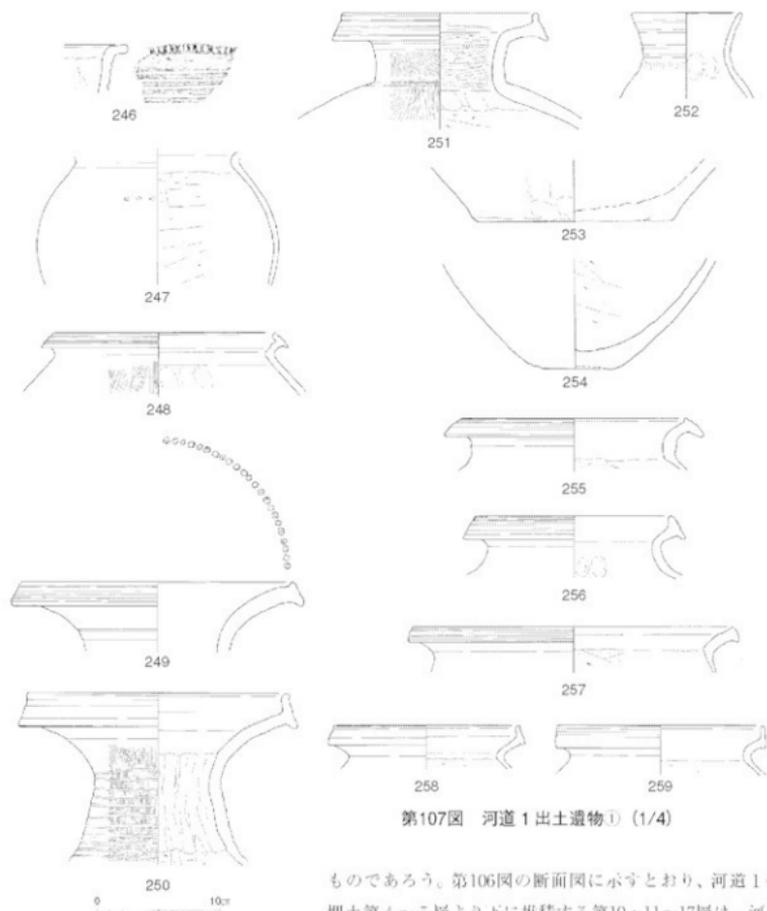
## 7 河道

河道1 (第32・35・106~108図、図版8)

36・38ⅡW・ⅡYにて検出した西から東へと流れる河道で、幅8m・深さ約80cmを測る。河道の南側一部がたわみ状になっているが、深さ10~20cmと浅く、本流からあふれてた水が一時的に溜まった



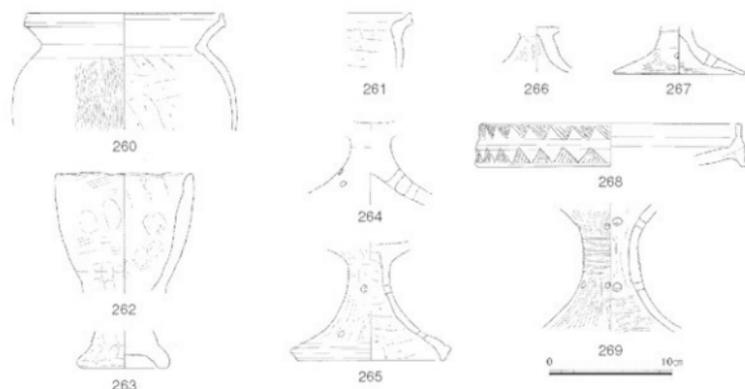
第106図 河道1・2断面図(1/80)



第107図 河道1出土遺物① (1/4)

ものであろう。第106図の断面図に示すとおり、河道1の埋土第4～5層より下に堆積する第10・11～17層は、河原石を含む砂質土と砂との互層で、河道の堆積であると思われる。したがって河道1は東流する旧河道の最終状態を示している。なお第10・11～17層からは土器などの遺物は出土していないが、断面図から洋木遺跡の古墳時代基盤層である第9層が上に堆積しているものと推察された。これら旧河道の下には人頭大の礫層が存在する。この礫層は河道1の南岸から南へ10mの地点で急に深くなる。北側は徐々に深くなり、南溝手遺跡微高地の基盤層である第19層よりも下へ入りこんでいくことを確認している。

河道1からは246～269の土器が出土した。これらの土器は時期により出土層位が異なることはなく、前期後葉の壺246と250～269など後期後葉を示す土器が同じ層から出土している。これら土器の時期幅は、南溝手遺跡の微高地部で展開する集落の動向と同じ傾向を示す。(松尾)



第108図 河道1出土遺物②(1/4)

## 8 柱穴

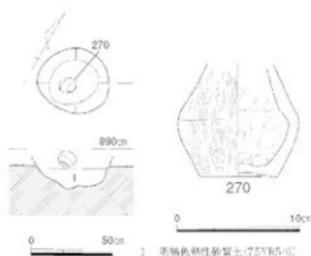
### 柱穴2 (第34・109図)

32II Q北東に位置する。平面形は直径45cmの円形を呈し、断面形は中央が若干窪む碗形を呈する。上器は底面から12cm程度浮いた形で出土していることから、本来の掘り込み面はもう少し上であったと思われる。

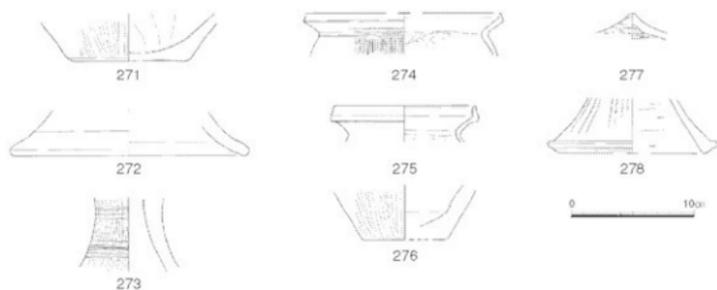
270は口頸部を欠いた壺。土器の特徴から後期の柱穴であると思われる。(松尾)

### 柱穴3～9 (第34・35・110図)

出土している土器から柱穴3は中期中葉。柱穴4は後期前葉。柱穴5は後期前半。柱穴6は後期後半。柱穴8は前期。柱穴9は後期前葉に比定できる。(松尾)



第109図 柱穴2(1/30)・出土遺物(1/4)



第110図 柱穴3～9出土遺物(1/4)

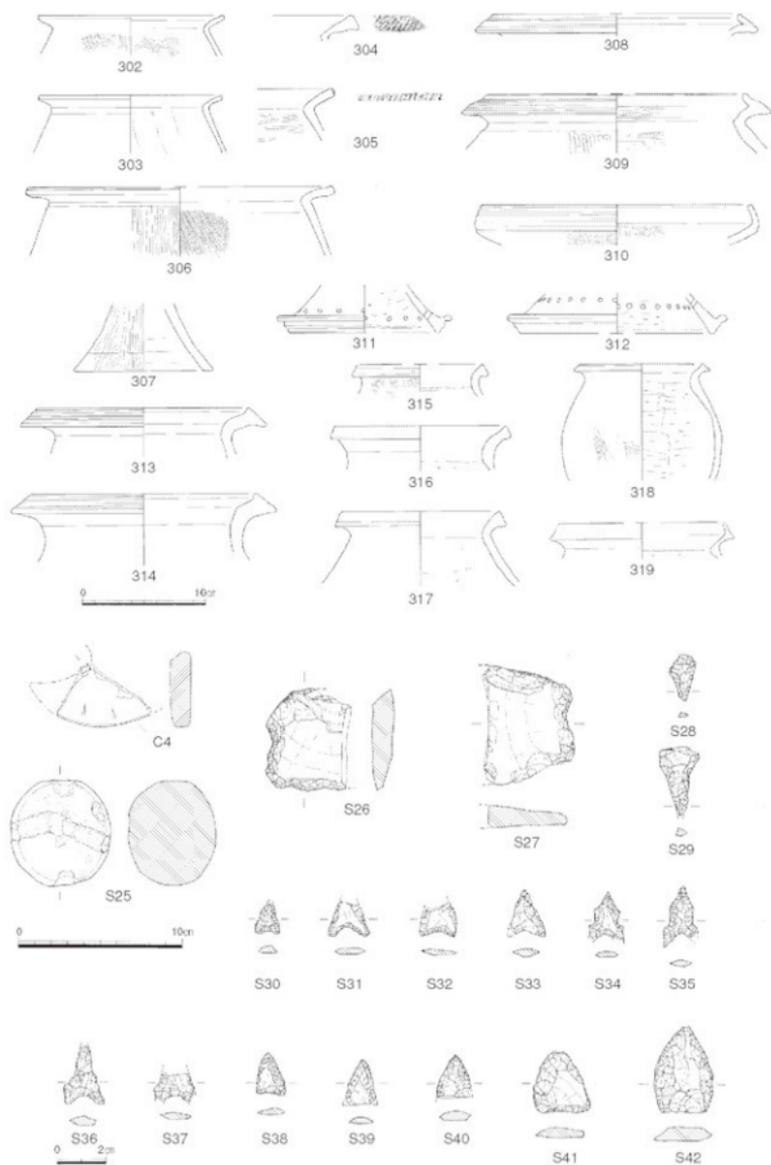
## 9 遺構に伴わない遺物 (第111・112図)

包含層からは弥生時代全般にわたる土器が出土している。前期前半の壺279・280の体部には、ヘラ描き沈線を挟んで上下に重弧文が描かれている。281～289は前期の土器。290～307は中期前半の土器で、290～293の甕には多条の横描き沈線が巡る。294～297は広口の長頸壺。294は口縁部内面に円形刺突を巡らす突帯による加飾が施されている。298は直口壺。299～301は広口壺で、口縁部外面には刻目のある貼付突帯が巡る。302～306は甕。307は高杯の脚部。308～312は中期後葉の土器。313～319は後期の土器である。

C 4 は分銅形上製品の一部と思われる。S 25 は花崗岩製の石錘。S 26～42 はササカイト製の打製石器で、S 26・27 は石包丁。S 28・29 は石錐。S 30～42 は石鎌。 (松尾)



第111図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第112図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3・1/2)

## 第4節 古墳時代～古代の遺構・遺物

## 1 概要

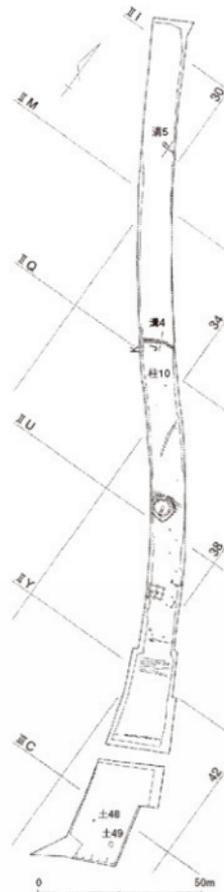
古墳時代から古代にかけての遺構は多くない。南溝手遺跡南端にあたる低位部は、本来東流する旧高梁川の支流である。しかし古墳時代には河道2にその名残を残しているのみで、古代以降は灰黄褐色粘性砂質土（第25図第4～7層）が水平に堆積するいわゆる低位部としての様相を呈している。灰黄褐色粘性砂質土（第7層）を掘り込んで形成している土壇49・溝7など古代に属する遺構が存在するものの、その密度は極めて低い。

微高地に目を転じてみると、竪穴住居や掘立柱建物など集落を構成する遺構が、低位部寄りに建てられていることが分かる。ただし時期を細かく見ていくと、竪穴住居4や溝4など古墳時代初頭に属する遺構は、前段階の弥生時代後期集落とからめて考えた方が流れはスムーズであり、一方古墳時代後期の掘立柱建物1は、国道180B P調査で確認した古墳時代後半期集落における流れの中に位置付ける方が理解しやすい。

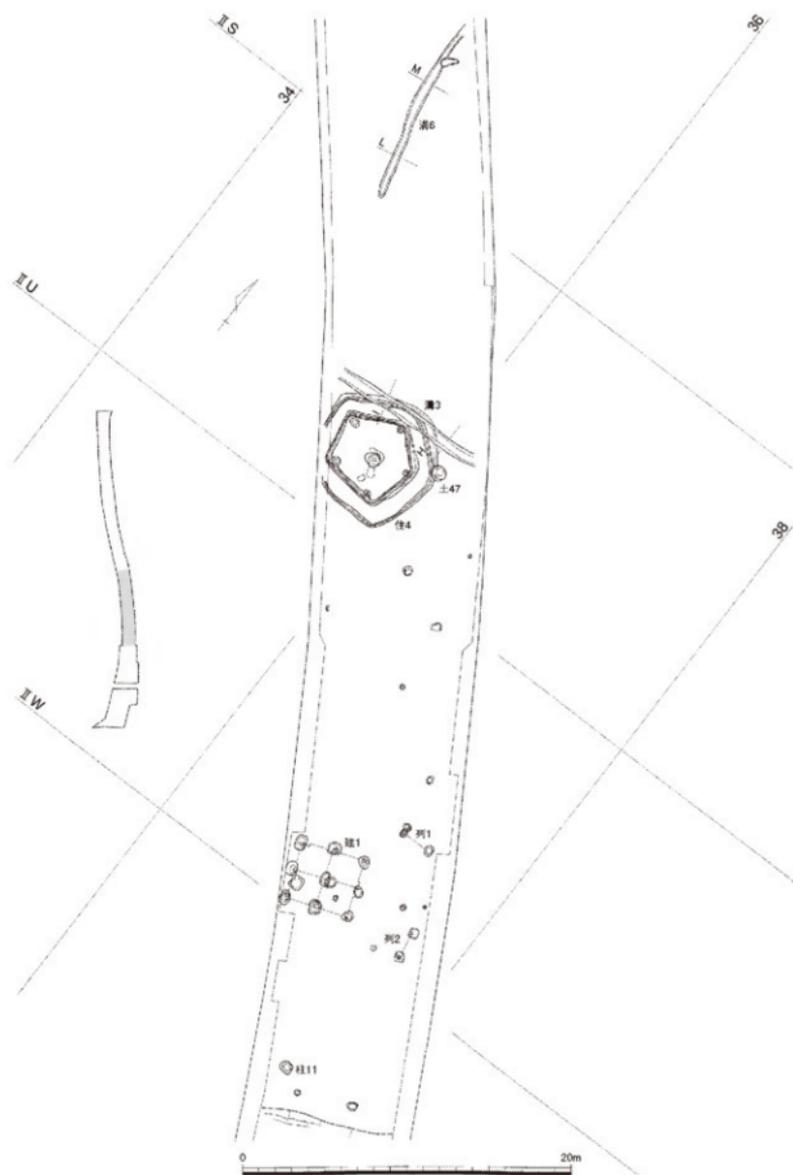
古代には、前述の土壇49・溝7などの他は目立った遺構が無い。ただし低位部の包含層中からは、奈良三彩や緑釉陶器など一般集落では珍しい遺物が出土する。これらの遺物は当遺跡から南西800mに位置する柏寺廃寺（7世紀中葉創建）に由来すると思われる。（松尾）



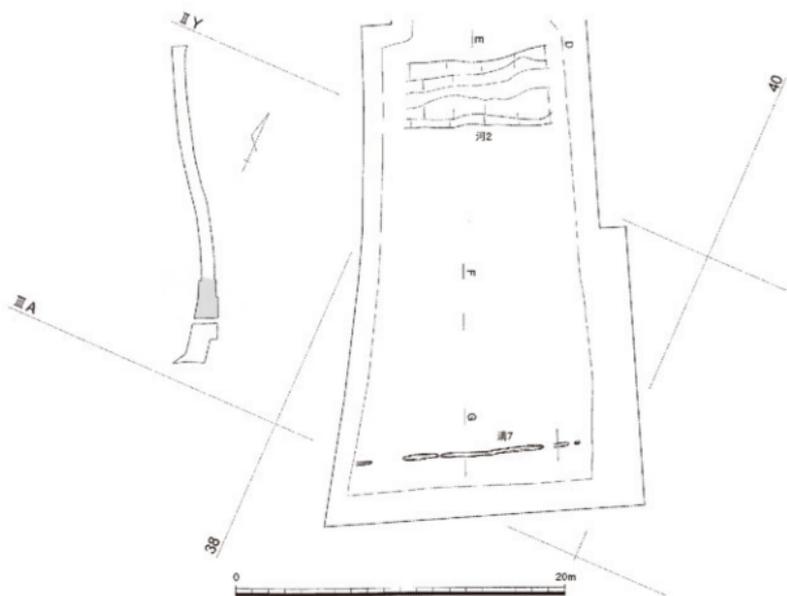
写真10 河道2作業風景（北西から）



第113図 古墳時代～古代遺構全体図（1/1,500）



第114図 古墳時代～古代遺構図① (1/300)



第115図 古墳時代～古代遺構図② (1/300)

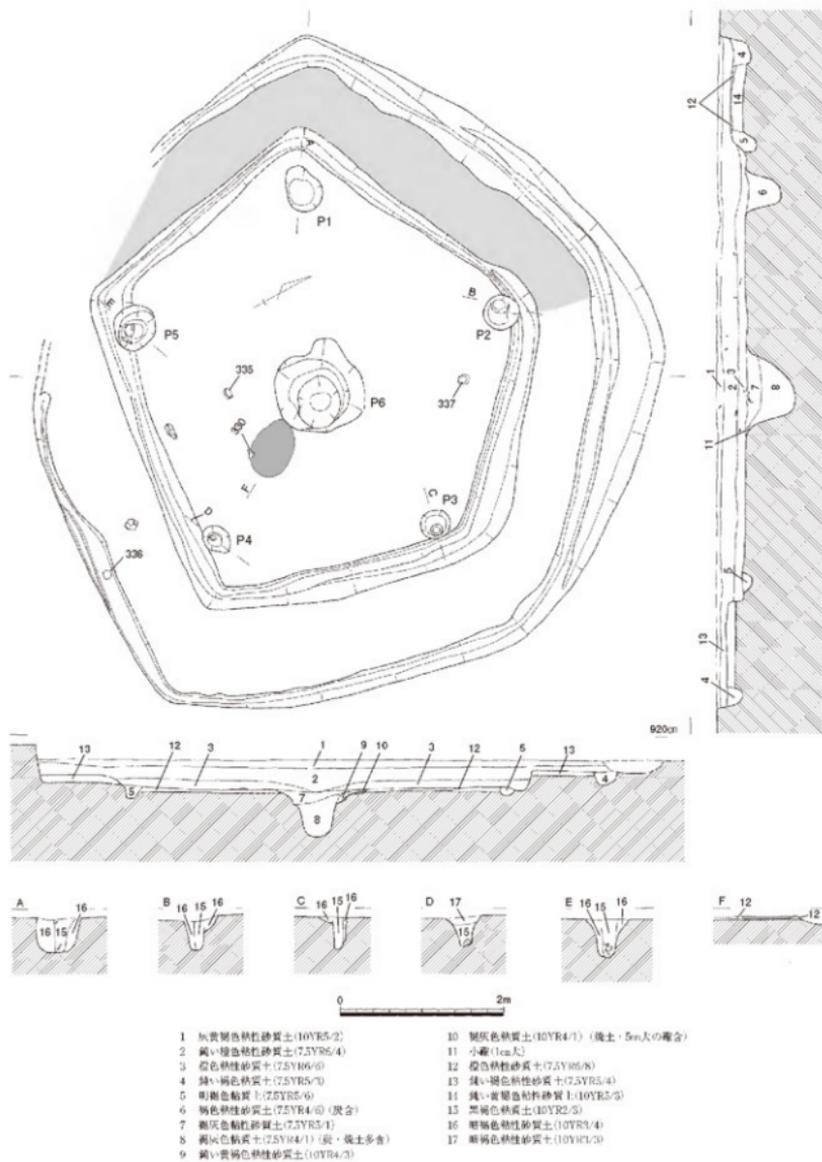
## 2 竪穴住居

### 竪穴住居 4 (第114・116～118図、図版9)

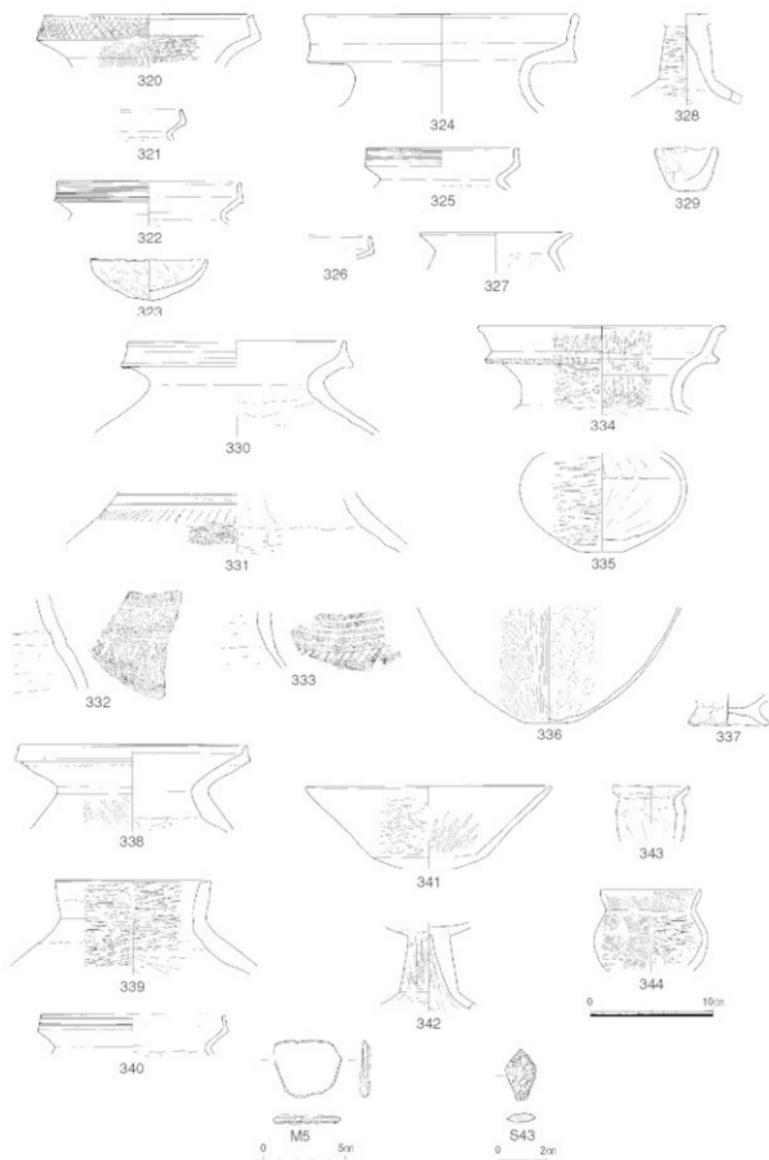
34～36ⅡSで検出し、土壁47と溝3によって北端の一部を破壊されている。検出面から床面までの深さは約40cmであった。平面形は五角形を呈しており、長軸が8.2m、短軸が7.6m、床面積が約43.7㎡という規模を測る。住居内部には壁にそって壁体溝が回り、床面からの比高差約10cmのところに幅約70cm～1m程の高床部が巡っている。トーン部は他の高床部とは土質が異なる場所である。高床部の内側にも壁体溝が巡る。床面は黄色い粘土による貼り床が施されていた。五角形をした床面の隅にそれぞれ5本の主柱穴が配置されている。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形で、柱穴間の距離は2.65～2.9mであった。住居中央に平面の形状が不整形の中央穴P6があり、規模は1.15～1.1m、深さは60cmを測る。中央穴の南東には長軸が約70cm、短軸が約50cmの楕円形をした被熱により赤変した部分が認められた。

遺物は338～344とS43～45とM5が住居の埋土、324～329が高床部埋土内、331とS46がP5、332がP2、320～323が中央穴P6、330が被熱面上、333～337が床面直上からそれぞれ出土している。320は西部瀬戸内系の搬入土器である。胎土に金雲母を含んでおり、岡山県南部の胎土ではない。一方、334も西部瀬戸内系の土器であるが、胎土は岡山県南部である可能性が高い。竪穴住居4は古墳時代初頭まで使用され、その後埋没したと考えられる。

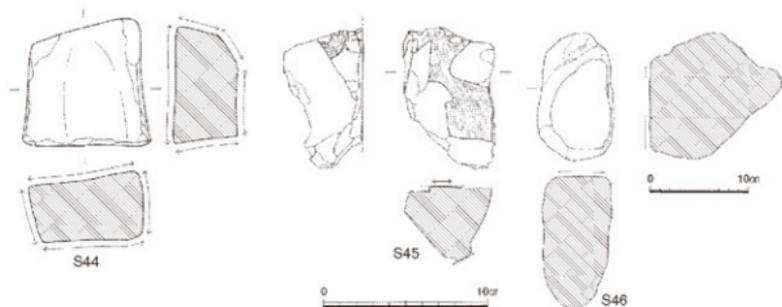
(高山)



第116図 竪穴住居4 (1/60)



第117図 竪穴住居4出土遺物① (1/4・1/3・1/2)



第118図 竪穴住居4出土遺物②(1/3・1/5)

### 3 掘立柱建物

#### 掘立柱建物1 (第114・119図、写真11)

36ⅡUの南端にあり、竪穴住居4から南東へ19m下ったところに位置する。2×2間の総柱建物。今回の調査で唯一検出した古墳時代後期の総柱建物である。柱間距離は桁行が2～1.8mで、梁行が1.85～1.6mを測る。桁行は3.98mで、梁行は3.53mであることから、この建物の平面形はほぼ正方形を呈しているといえる。床面積は14㎡であった。柱穴の掘り方は不揃いで、P4～8は不整隅丸形をしており、P1～3・9は不整な楕円形をした平面形である。掘り方は大きいもので長軸が約90cm、短軸約70cmで、小さいものだと長軸が約70cm、短軸約60cmの規模である。すべての柱穴に柱痕が残っており、柱痕の規模はどの柱穴も約15～20cmの範囲に収まる。



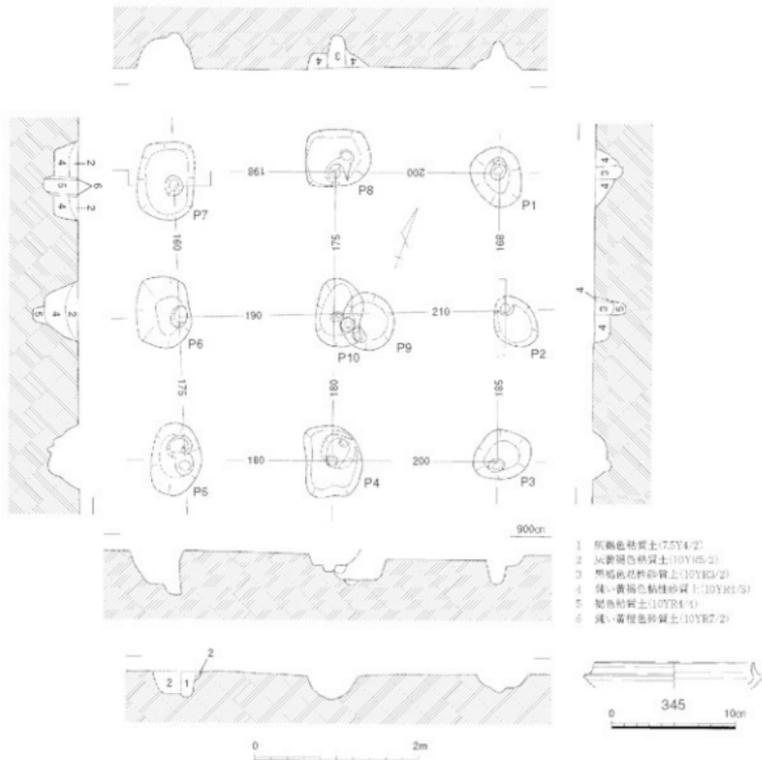
写真11 掘立柱建物1作業風景(北西から)

柱痕を2つもつ柱穴が5つあり、P9にいたっては2つの掘り方が切り合っており、柱痕を3つ確認した。以上のことから、掘立柱建物1は建て替えが行われた可能性が高いと考えられる。

遺物は少なく、時期のわかる遺物は345の須恵器杯身破片のみである。

細片のため、時期の特定はできないが、TK209段階に比定できる。

(高山)



第119図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

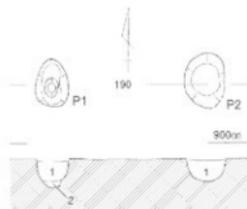
#### 4 柱穴列

##### 柱穴列1 (第114・120図)

36ⅡUの東に位置する柱穴列1は、掘立柱建物1の北にある。規模は1間であるため、全長も柱間距離も1.90mである。主軸はN-90°-Eで、南北ラインに直交する。掘り方の平面形は楕円形を呈している。須恵器高杯脚部346が出土しており、古墳時代後期の遺構と考えられる。(高山)

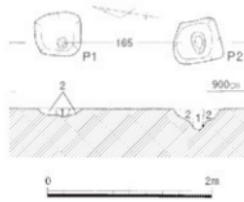
##### 柱穴列2 (第114・121図)

36ⅡUの東端に位置する。1間の柱穴列で、規模は1.65mを測る。主軸はN-10°-Wで、西に振っている。掘り方の平面形は方形を呈している。検出面から底面までの深さが非常に浅い柱穴で、わずかに柱痕が見つかった。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋上等から古墳時代に属する遺構と思われる。(高山)



第120図 柱穴列1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

- 1 褐色粘質土(10YR4/4)  
2 褐色粘質土(10Y10/1)



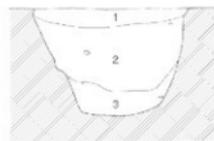
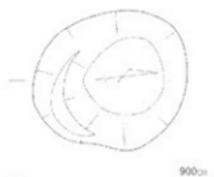
第121図 柱穴列2 (1/60)

- 1 暗褐色粘性砂質土(10Y10/3)  
2 黄褐色粘性砂質土(10Y10/7)

## 5 上墳

土壙47 (第114・122図、図版9)

36ⅡSの南西に位置し、堅穴住居4の一部を破壊している。平面形は不整形形を呈し、長軸は94cm、短軸は85cmを測る。断面形は検出面から約40cm下がったところにテラス状の段をもつ逆台形をしている。須恵器の亮破片347が出土しており、古墳時代後期に属すると考えられる。(高山)



- 1 褐色粘性砂質土(10Y10/1)  
2 褐色粘性砂質土(7.5YR5/1)  
3 褐色粘質土(2.5YR1/1)



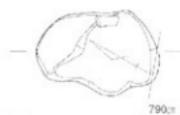
第122図 土壙47 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

土壙48 (第113・123図)

南湾手遺跡の低部位で洋木遺跡からの下がり近く、38ⅢC北東に位置する。平面形は長軸75cm×短軸50cmの不整形形で、断面形は北側に緩やかなテラスをもつ逆台形を呈する。古墳時代から古代の遺物を含む灰黄褐色粘性砂質土(第25図第7層)を切り込んで形成している。

遺物は少なく須恵器高杯片348のみ。TK217型式並行期。

(松尾)



- 1 灰黄色粘土(砂質土)(10YR4/1)



第123図 土壙48 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

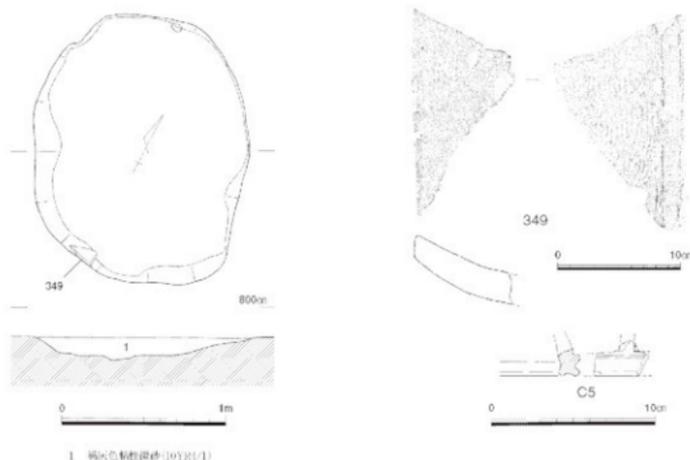
土壙49 (第113・124図)

前述の土壙38の南西、40ⅢCの北西で確認した。平面形は長軸1.63m、短軸1.31mの不整形形を呈する。断面形は緩やかに下がる皿状で、検出面から底面までの深さは14cmを測る。

埋上は土壙48と類似した褐色粘性微砂で、古墳時代から古代の包含層である灰黄褐色粘性砂質土を掘り込んでいた。

遺物は平瓦349と円面硯

C5が出土している。349は凸面がタテ方向の縄タキ、凹面は布日が残る一枚作りの平瓦。出土遺物から8世紀後半以降に埋まった土壌であると思われる。(松尾)



第124図 土壌49 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

## 6 溝

### 溝3 (第114・125図、図版9)

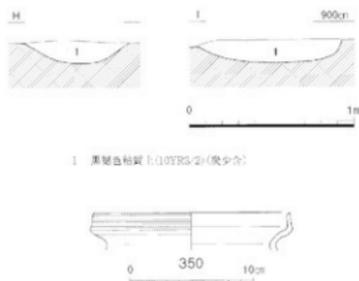
34・36ⅡSに位置し、東西方向へのびる溝である。

竪穴住居4の一部を破壊し、井戸1も一部切っている。溝の規模は、検出面で幅が87cm、深さが14cmを測る。溝底部から検出面にかけて緩やかに立ち上がる断面形を呈す。埋土は1層のみで、土器の破片や炭を多く含み、焼土も少し含んでいた。流水方向は不明である。

遺物は土器の小破片ばかりであった。土師器甕の口縁部破片350が出土しており、古墳時代前期前葉に属すると考えられる。(高山)

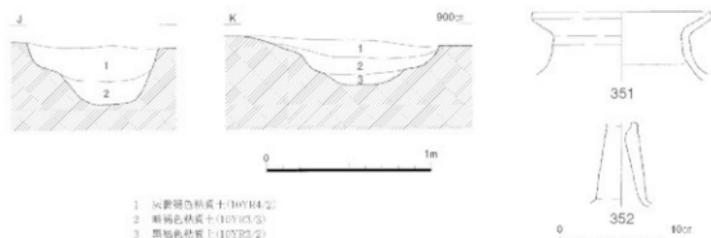
### 溝4 (第113・126図)

32ⅡOの南端に位置し、北側へ弧を描くように調査区を横断する溝。溝の幅は最大1.2mで、検出面から底面までの深さは最深63cmを測る。断面形は南側にテラスを有する逆台形あるいは皿状を呈する。溝底面のレベルより、南西から東へと流れる溝であると考えられる。埋土より土器細片が比較的多く

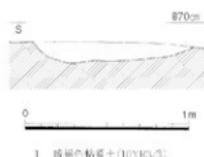


第125図 溝3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

出土した。土師器の壺351や高杯352は其中最も新しい時期の土器で、溝の埋没時期を表す。一方弥生時代後期後葉の上器片も出土しており、掘削時期の一端を示すものと思われる。(松尾)



第126図 溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 暗褐色粘質土 (0YR3/2)



第127図 溝5 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

#### 溝5 (第113・127図)

28ⅡKの東端に位置し、西-東に流れる溝。西端は調査区内に収まっているが、東は調査区外へと延びている。弥生時代後期後半には埋没したと考えられる竪穴住居1を切っている。

幅は最大98cm、断面形は北側が緩やかに立ち上がる逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは13cm。

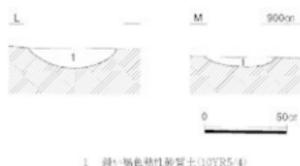
出土遺物は少なく、図化できたのは壺353のみ。古墳時代前期後葉には埋没した溝である。(松尾)

#### 溝6 (第114・128図)

34ⅡQ・ⅡSを北西-南東に調査区を縦断する溝。南端は調査区内で収まっているが、北端は調査区外へ延びている。幅は40~54cm、断面形は検出面から底面までの深さ6~10cmを測る碗形を呈する。土器片が出土しており、古墳時代後期の溝であろう。(松尾)

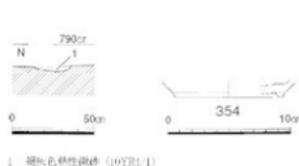
#### 溝7 (第115・129図)

南溝手遺跡の低位部中央、38ⅡY・ⅢAを西-東に調査区を横断する溝。最大幅は22cm、検出面から底面までの深さは3cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。古墳時代から古代にかけての遺物を比較的多く含む灰黄褐色粘性砂質土を切り込んでいる。8世紀後半以降に埋まった溝であろう。(松尾)



1 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR5/4)

第128図 溝6 (1/30)



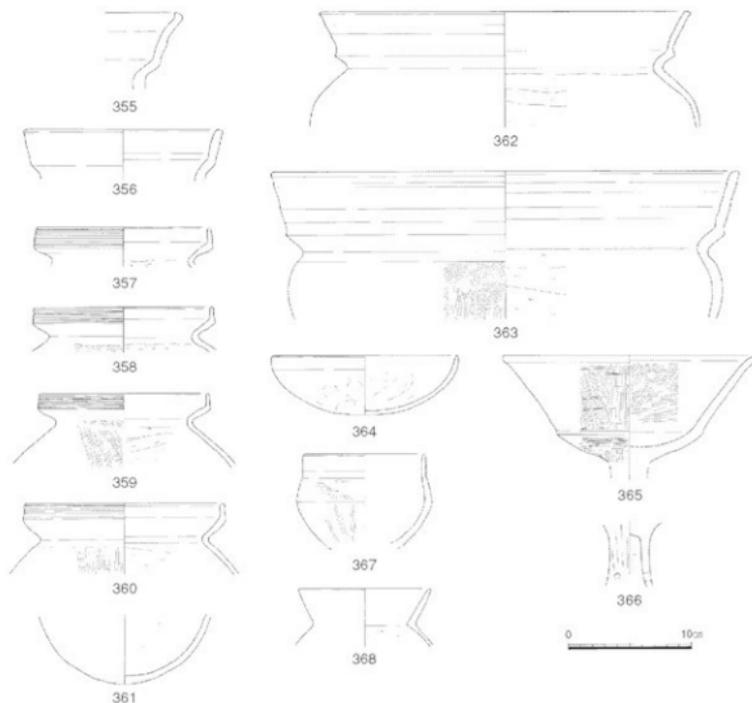
1 暗褐色粘性砂 (10YR1/1)

第129図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

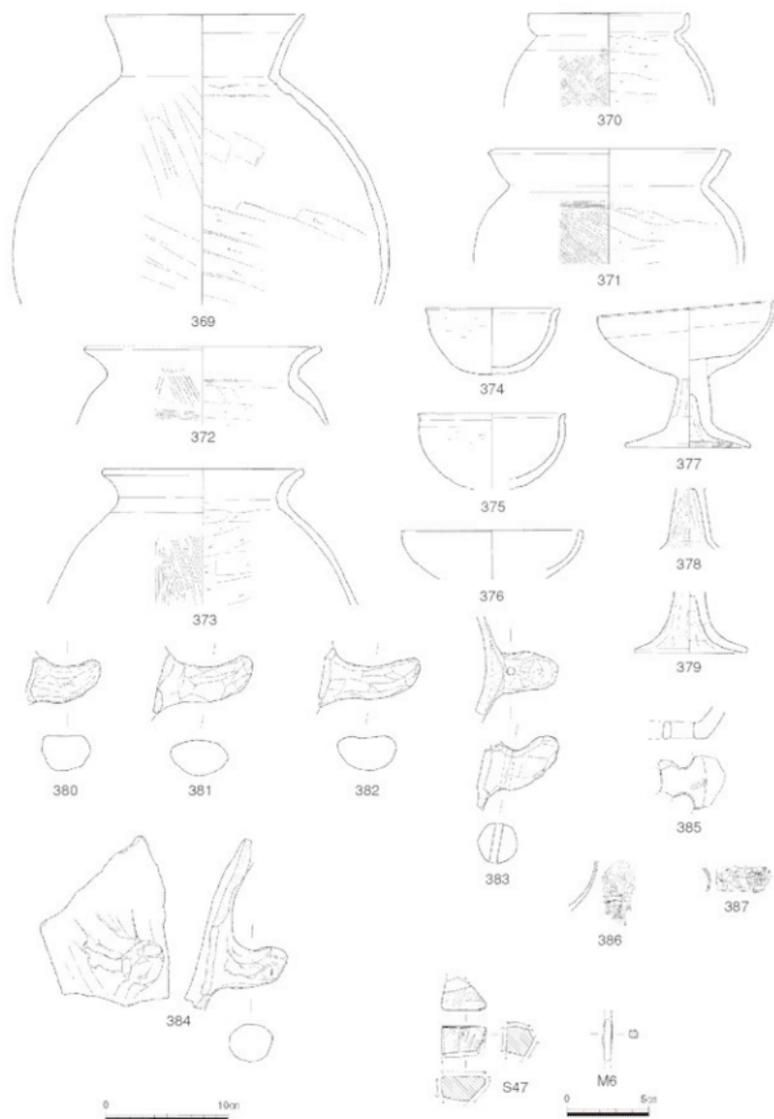
## 7 河道

河道2（第106・115・130～132図、図版10）

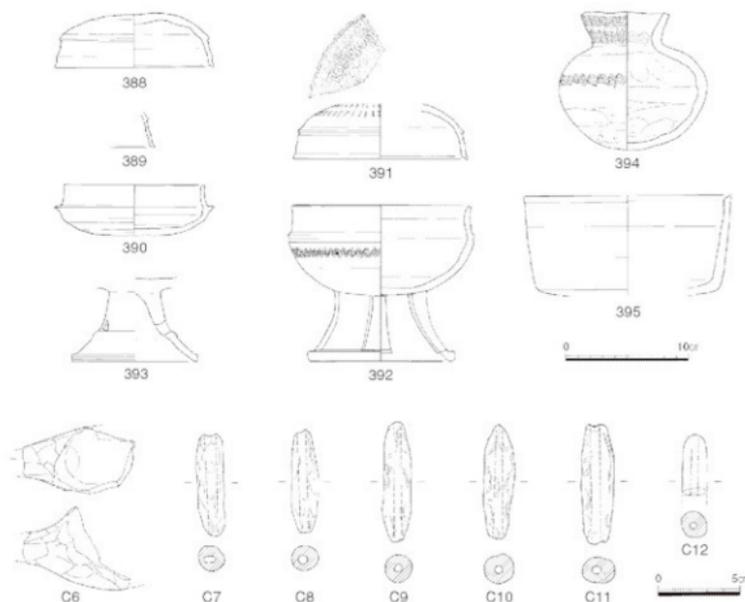
36・38ⅡW・ⅡYにて検出した西から東へと流れる河道で、幅5m・深さ50cmを測る。第106図に断面図を掲載しており、第1～3層が埋土に相当する。埋土はいずれも暗褐色から黒褐色を呈し、炭や土器を多く含む粘性砂質土を呈する。この様な埋土の状況から、河道2は河道1の埋設過程における最終段階の姿を示し、かつ流れがほとんど無い滞水状態であったと推察される。355～371は古墳時代前半期の土器。355・356は二重口縁の甕。357～360は二重口縁の外面に柳描き沈線を巡らす甕。362・363は大形の二重口縁鉢。364は椀形鉢。365・366は高杯。369は直口壺。370・371は口縁が内湾する甕。372～394は古墳時代後半期の土器。372・373は「く」字口縁の甕。374・375は椀形鉢。376～379は椀形の杯部をもつ高杯。380～385は甌。386・387は製塩土器。388～395は須恵器。S47は流紋岩製の砥石。C7～12は棒状穿孔土錘。河道2はおおむね古墳時代前期から後期にかけて徐々に埋設していったものと考えられる。なお図示はしていないがウマの頭骨や下顎骨が出土したことを追記しておく。（松尾）



第130図 河道2 出土遺物①（1/4）



第131图 河道2出土遗物② (1/4·1/3)



第132図 河道2出土遺物② (1/4・1/3)

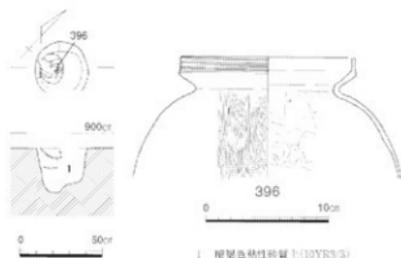
## 8 柱穴

## 柱穴10 (第113・133図)

32 II Q北東で検出した。平面形は直径32cmの円形を呈し、断面は検出面から底面までの深さ28cmを測る筒状。埋土は暗褐色粘性砂質土。

土師器甕396が埋土の上方より出土している。396は口縁部外面に拂描き沈線が巡る。

土器の特徴から前期初頭に埋まった柱穴であると推察される。(松尾)



第133図 柱穴10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 柱穴11 (第114・134図)

36 II Wの北東に位置する。平面形は隅丸方形で長軸66cm、短軸54cmを測る。検出面から底面までの深さは13cm。埋土はにぶい黄褐色土。遺物は397の須恵器杯身が出土している。古墳時代後期TK209型式並行期であろう。(松尾)



第134図 柱穴11出土遺物 (1/4)

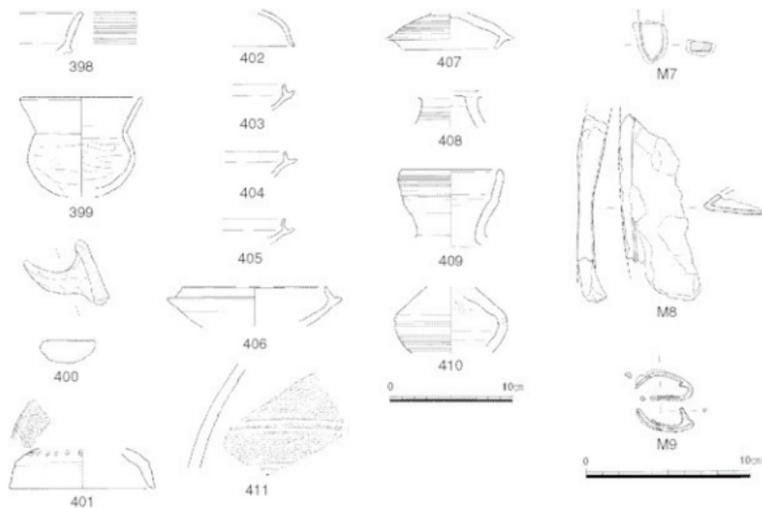
## 9 遺構に伴わない遺物 (第135~137図)

遺構に伴わない遺物として掲載しているものは、低位部第7層(第25図)より出土したものが大半を占める。

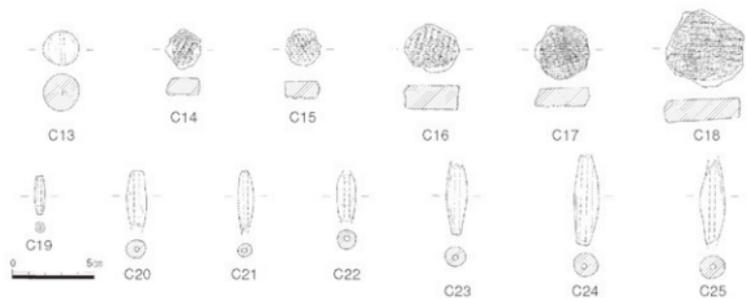
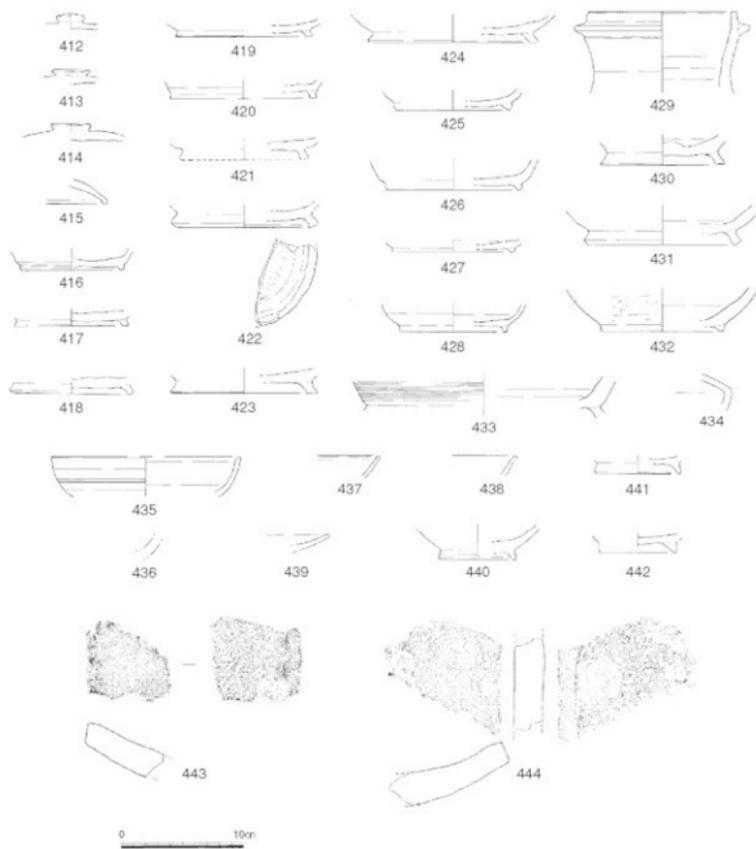
古墳時代の土器である398~410の内、398・399・401が低位部北半から、402~405・407~410が低位部南半から、400・406は微高地から出土した。398~400は土師器。398は二重口縁をもつ甕で内外面共に丹塗り。399は丸底甕。400は甌の把手。401~410は須恵器。401は有蓋高杯の蓋。402~406は杯。407は壺蓋。408は高杯。409は埴瓶。411は甕の口縁部。

412~442は古代の上器で、421・434以外は低位部からの出土。412~434は須恵器。412~415は杯蓋。416~428は杯。422は高台内面を硯として使用している。429~433は壺。434は平瓶。435は丹塗りの土師器杯。436は奈良三彩(8世紀)の甕と推定される破片。437~440は緑釉陶器の椀で、437・439は9世紀中頃の京都産。438は9世紀前葉から中頃のもので京都産。440は9世紀後葉の京都産である。441・442は内黒の黒色土器椀。443・444は一枚作りの平瓦で443は低位部から、444は微高地の北側で出土した。共に丹面には布目が残し、凸面には縄タキがみられる。

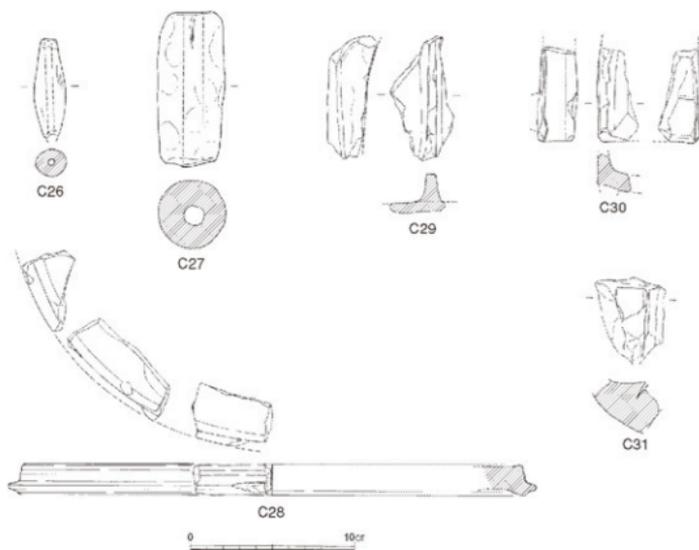
土器以外の遺物としては、金属製品・土製品がある。金属製品M7~9はいずれも低位部からの出土。M8は鋤先と考えられる鉄製品。土製品C13~31は全て低位部から出土している。C13は上玉。C14~18は須恵器甕の破片を転用した円板形土製品。C19~27は上鉢。C28円面硯は同一個体と思われる破片が3点出土している。復元径は約30cmを測る。C29は二面風字硯。C30は風字硯である。C31は胎上や色調がC28と酷似している土製品。硯の一部であると推定されるが、具体的な部位は不明である。(松尾)



第135図 遺構に伴わない遺物① (1/4・1/3)



第136図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)



第137図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)



写真12 38 II Y 低位部作業風景 (南から)

## 第5節 中世～近世の遺構・遺物

## 1 概要

中世になると微高地全域に遺構が存在する。ただし、その密度は南半より北半の方が高い。掘立柱建物4棟や柱穴列・井戸・土塋、そして多数の柱穴や数条の溝が錯綜している状況を検出している。

微高地全体の地形としては、北端で地形が西へと下がることを確認（下がり1）し、その下がり際には溝8・9が堀削されていた。旧河道の名残である下がり2と下がり3に挟まれた低位部は耕作地として利用されていた可能性が高く、耕起に伴う鋤跡と考えられる素掘溝群を検出している。

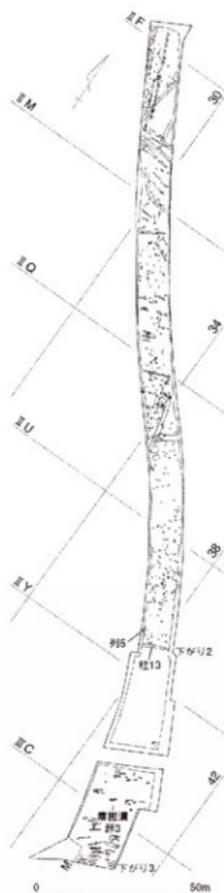
近世は中世に比べると遺構密度が低くなる。掘立柱建物1棟と柱穴列・土塋を確認したのみで、微高地・低位部共にそのほとんどが耕地化していたものと考えられる。

調査区の中程を東西あるいは南北に築かれている畦畔については、現代水田に伴う畦畔として利用されており、それほど古くまで遡り得ないと判断し、第140図に示しているものの、個別遺構としては報告していない。

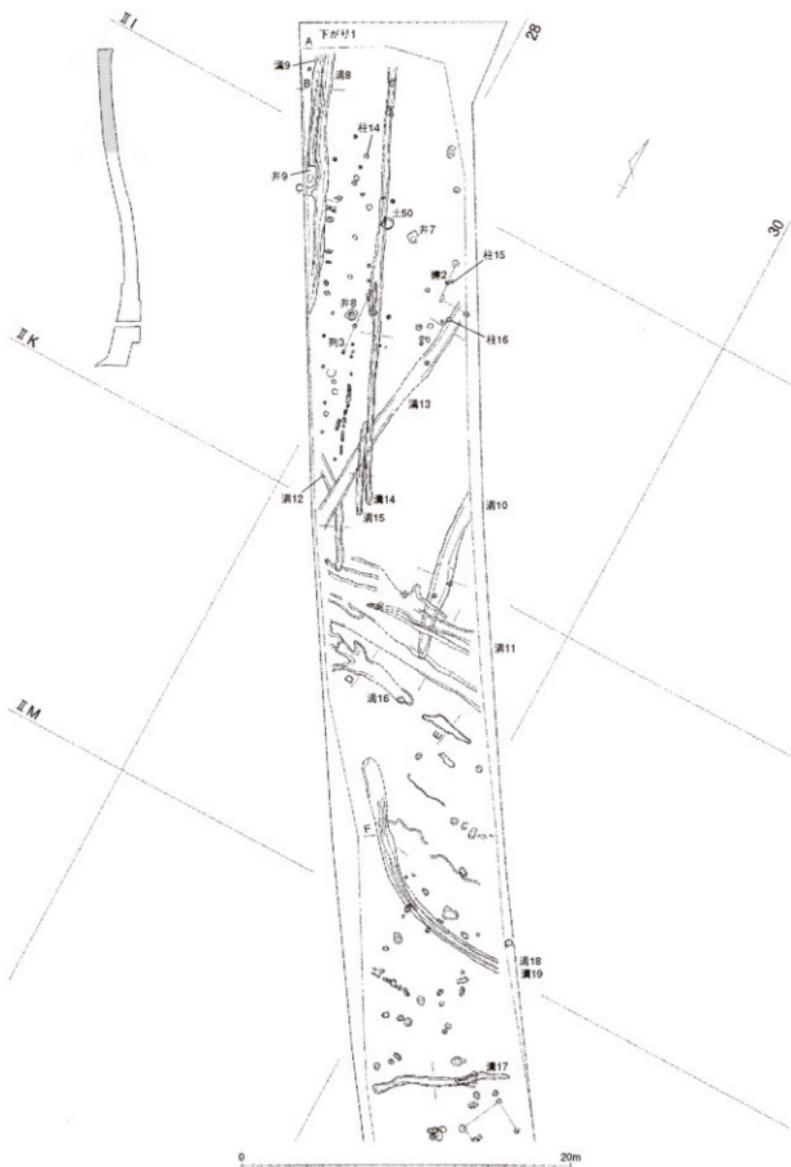
南溝手遺跡の微高地は、比較的安定しているがために中世以降の包含層がほとんど残っていない。これは中世後半以降の大幅な耕地化に伴う削平によるものと考えられ、現在の原風景ともいえる景観がこの頃に作られたといえる。（松尾）



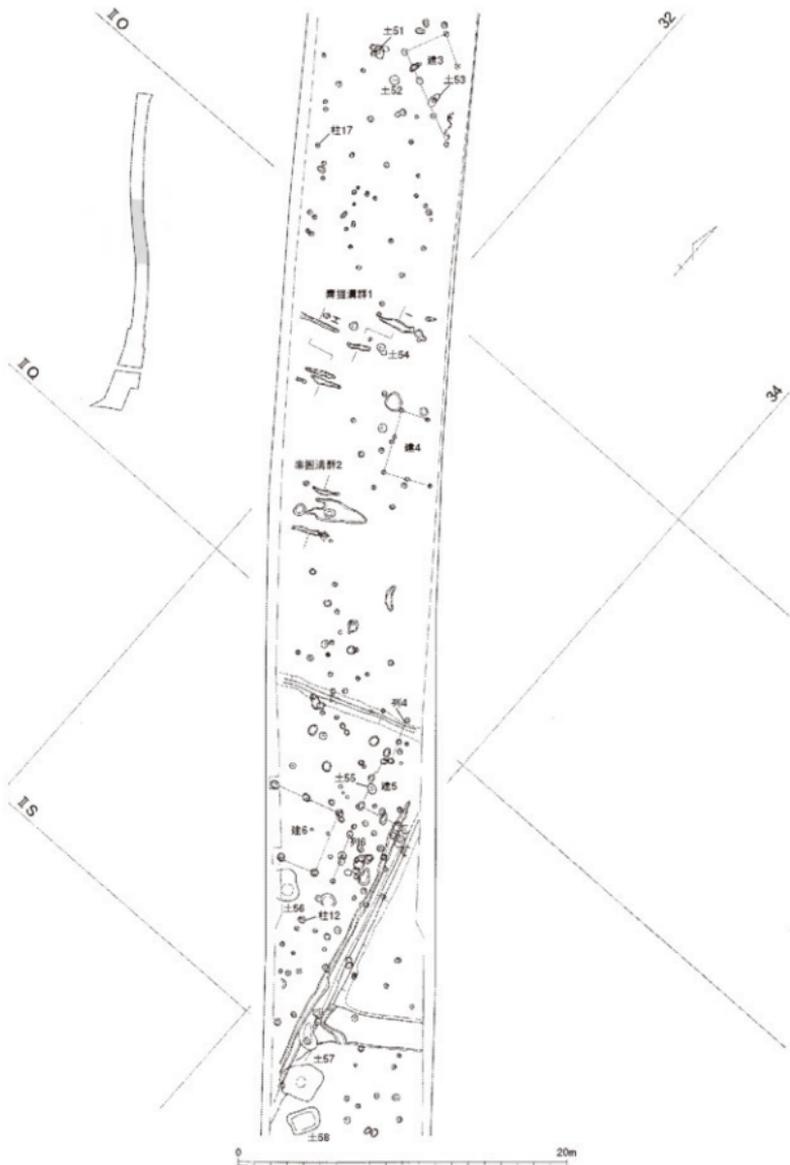
写真13 下がり3作業風景（北から）



第138図 中世～近世遺構全体図 (1/1,500)



第139図 中世～近世遺構図① (1/300)



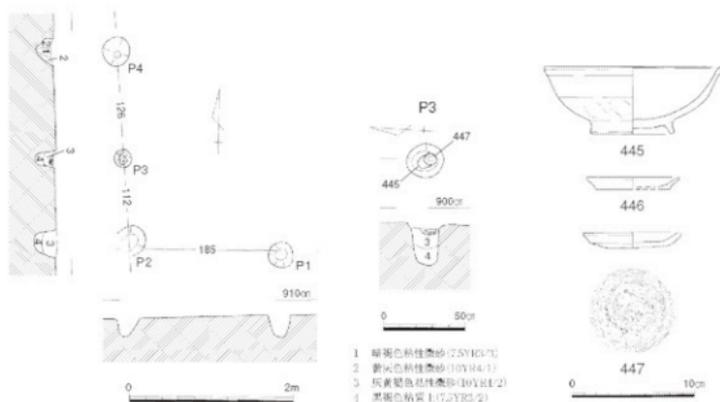
第140図 中世～近世遺構図② (1/300)

## 2 掘立柱建物

## 掘立柱建物2 (第139・141図、図版10)

28Ⅱ I の北西に位置する掘立柱建物。東の大部分が調査区外に伸びているため、全体像は不明であるが、桁行1間以上×梁行2間の東西棟であると思われる。柱間距離は桁行が1.85m、梁行が1.12～1.26mを測る。棟方向はN-90°-W。

P3の埋土上層から土師器皿447と土師器碗445が重なって出土している。土器の出土状況や特徴から、13世紀前半の建物と思われる。(松尾)



第141図 掘立柱建物2 (1/60)・P3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 掘立柱建物3 (第140・142図、図版10・11)

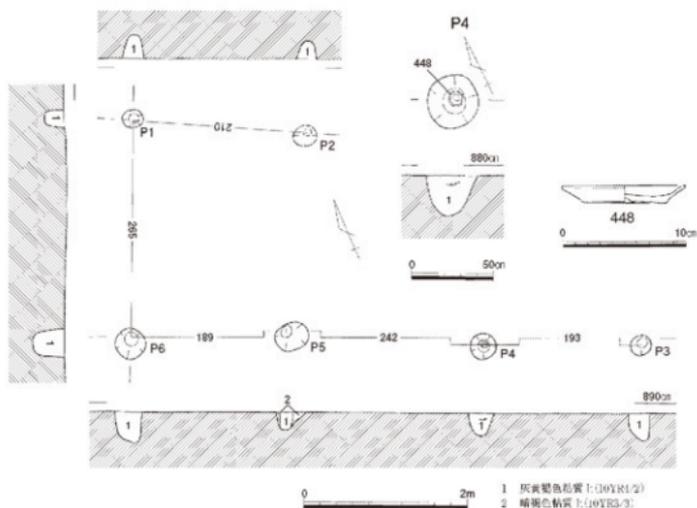
30Ⅱ Mの中央において確認した桁行3間×梁行1間の掘立柱建物。南東側は調査区外へと伸びているものの、桁行は3間で収まるものと思われる。建物の規模は桁行6.24m、梁行2.65mを測る。桁行の柱間距離は1.89～2.42m。棟方向はN-65°-W。柱穴の規模は直径13～22cmで、検出面からの深さは10～20cmを測る。

柱穴の1つであるP4埋土から土師器皿448が出土している。掘立柱建物2とは棟の方向が若干異なるが、ほぼ同時期の建物と考えられる。(松尾)

## 掘立柱建物4 (第140・143図、写真14、図版11)

32Ⅱ Oの北西に位置する桁行2間以上×梁行2間の掘立柱建物で、北東側は調査区外へと伸びている。桁行の柱間距離は1.45～1.7mで、梁行の柱間距離は1.95m前後を測る。棟方向はN-20°-W。柱穴の規模は直径20～30cmで、検出面からの深さは22～40cmを測る。柱穴の埋土は灰黄褐色粘質土、掘り方の埋土は暗褐色粘質土を呈する。

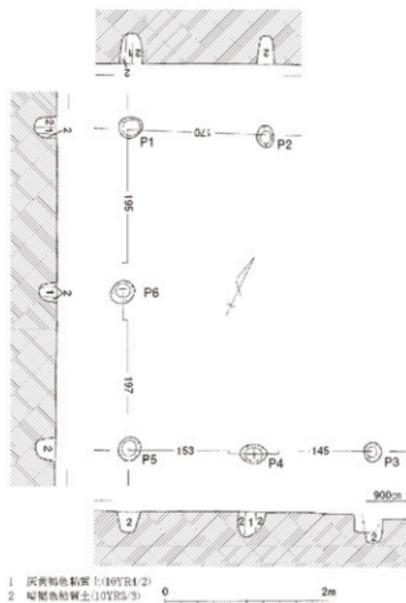
柱穴内からの出土遺物は無く時期を明確にすることは難しいが、検出状況や柱穴埋土などから、掘立柱建物2・3と同時期の建物であると思われる。(松尾)



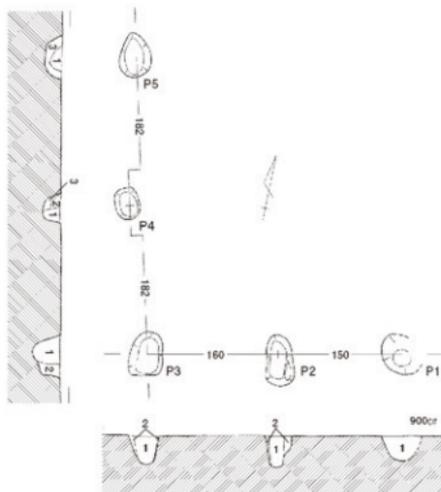
第142図 掘立柱建物3 (1/60)・P4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



写真14 掘立柱建物4周辺(南東から)



第143図 掘立柱建物4 (1/60)



- 1 暗褐色粘粒性砂質土 (10YR5/3)
- 2 黒褐色粘粒性砂質土 (10YR5/2)
- 3 灰青褐色粘粒性砂質土 (10YR4/2) (Mn多量)

第144図 掘立柱建物5 (1/60)

掘立柱建物5 (第140・144図、図版11)

32 II Qの北東に位置する。

調査区外にのびているため、本来の規模は不明であるが、検出できた限りでは2間×2間の規模だった。桁行が3.10m、梁行が3.64mを測り、柱間の距離が桁行で1.5~1.6m、梁行で1.82mあった。棟はN-80°-Eを向く。柱穴の掘り方はどれも不整楕円形を呈しており、規模は長軸が約35~55cm、短軸が約30~40cmの範囲に収まる。

遺物は出土していないが、検出レベルや埋土、周辺の状態等から中世に属する可能性が高い。(高山)

掘立柱建物6 (第140・145図、写真15)

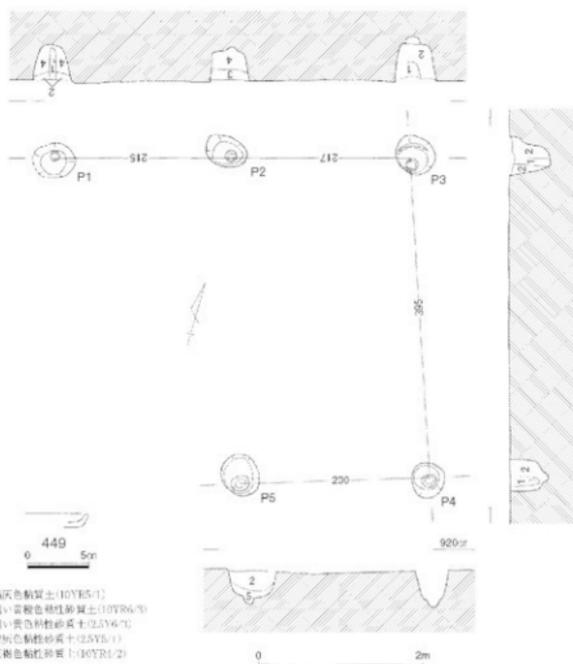
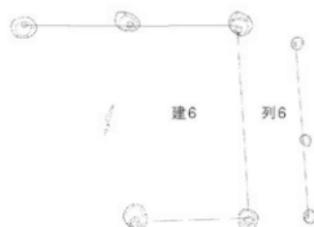
32 II Qに位置し、掘立柱建物5の南にある。棟はN-71°-Eを向く。この建物も調査区外にのびているため本来の規模は不明である。調査できた範囲での規模は2間×1間で、桁行が4.32m、



写真15 掘立柱建物6・柱穴列6 (北西から)

梁行が3.95mを測る。

柱穴掘り方の平面形はほぼ円形を呈すものと楕円形を呈すものに分けられる。規模は約40～50cmの間で、深さも約40～50cmを測る。柱痕から径10cm前後の柱材が使用されたものと考えられる。さらにP4からは柱材片が出土した。近世と思われる。(高山)



第145図 掘立柱建物 6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### 3 柱穴列

#### 柱穴列3 (第139・146図)

26Ⅱ1の東端で検出した柱穴3基からなる柱穴列。全長3.78m、柱間距離は1.8～1.98mを測る。柱穴の規模は直径20cm程度で、検出面からの深さは約25cm。

遺物は、柱穴から上部器皿450が出土している。時期を明確にすることは難しいが、周囲の状況や

埋土等から中世前半であると思われる。

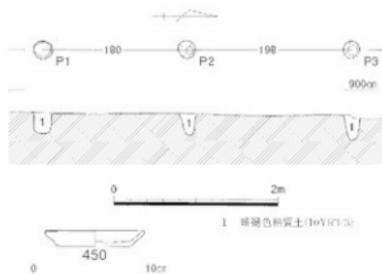
(松尾)

#### 柱穴列4 (第140・147図)

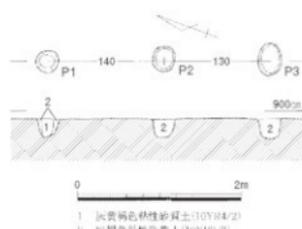
32ⅡQの北東隅で確認した、柱穴3基からなる柱穴列。全長は2.7m、柱間距離は1.3～1.4m。柱穴は直径約30cmの円形あるいは楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。

出土遺物は土器の細片が多く、時期を明確にするのは難しい。検出状況や柱穴埋土から中世の遺構であると考ええる。

(松尾)



第146図 柱穴列3 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第147図 柱穴列4 (1/60)

#### 柱穴列5 (第138・148図)

36ⅡWの東端で検出し、下がり2の縁辺部に位置する。主軸はN-28°-Wを向いていた。規模は3間、全長は2.7mを測る。柱穴掘り方の平面形はほぼ円形である。

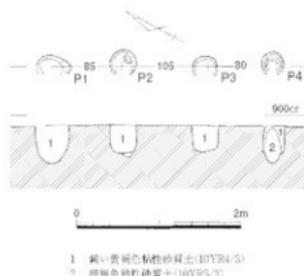
遺物が出土していないため時期の決定が難しい。中世であろう。

(高山)

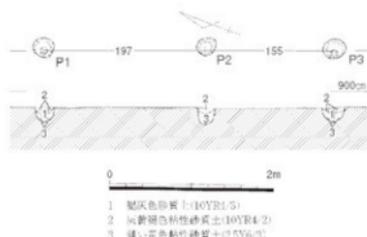
#### 柱穴列6 (第140・149図、写真15)

32ⅡQで検出した柱穴列で、掘立柱建物6の東側1mに位置する。規模は2間、全長は3.52mを測る。建物6の棟方向と一致しており、日隠し堀であったと考えられる。建物6と同時期であろうと思われる。

(高山)



第148図 柱穴列5 (1/60)



第149図 柱穴列6 (1/60)

## 4 井戸

## 井戸7 (第139・150図)

28Ⅱ1の北西に位置する。

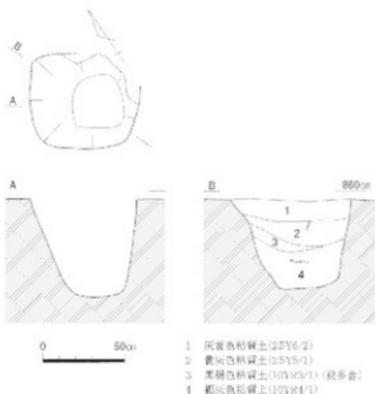
平面形は方形をしており、一辺が約66cmを測る。断面形は、東側の壁がほぼ垂直に立ち上がり、西側の壁は斜めに立ち上がるというややいびつな形をした逆台形を呈していた。検出面からの深さは60cmで、底面の標高は7.95m。埋土は4層からなり、第2層から下の層はグライ化していた。

遺物は土師器碗が出土しており、この遺物から井戸7は13世紀には埋没したと考えられる。(高山)

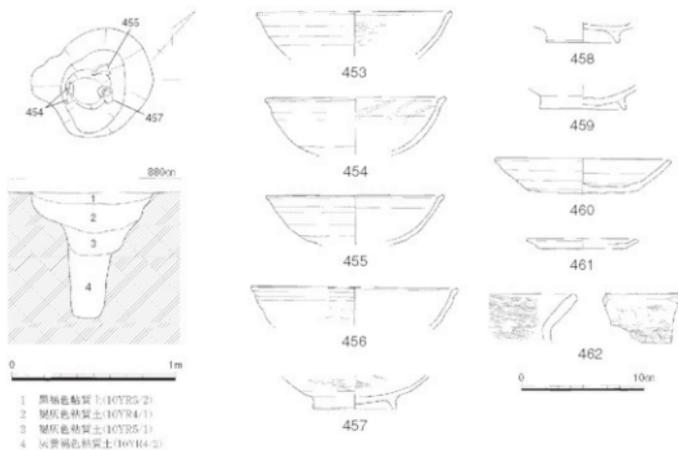
## 井戸8 (第139・151図、図版12)

26Ⅱ1の東端で、柱穴列3の西隣に位置する。平面形は南西の角が出っ張る不整形円形を呈し、長軸75cm×短軸63cmを測る。断面形は上部が碗形に開き、下部が筒状を呈する。井戸枠等の部材は出土していない。

出土遺物は453～462の土師器のみ。



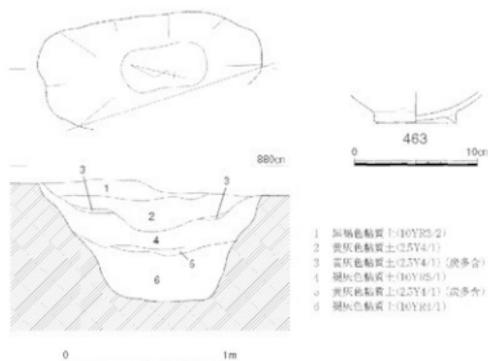
第150図 井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第151図 井戸8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

456・458～460は第1層から、461は第1・2層から、454・455・457は第2層下面から、453は第4層よりそれぞれ出土した。土器の諸特徴から、13世紀初頭には井戸としての機能を終え、埋没したものと考えられる。

(松尾)



第152図 井戸9(1/30)・出土遺物(1/4)

井戸9(第139・152図、図版12)

26ⅡI北東で後述する溝8と溝9を切って構築された井戸。平面形は不整楕円形で長軸1.36m×短軸60cmを測る。断面形は逆台形を呈し検出面から底面までの深さは72cmを測る。埋土は6層に分層でき、第3層と第5層に炭層が見られた。遺物は少なく土器器腕463のみを掲載している。詳細な時期は決めがたいが、溝8・9との切り合い関係や土器の特徴から13世紀前半頃と思われる。

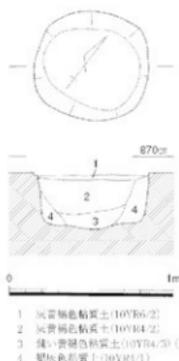
(松尾)

## 5 土壌

土壌50(第139・153図)

26ⅡI北東、溝14に切られて確認した。平面形は長軸70cm×短軸67cmを測る円形を呈する。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。出土遺物は少なく、464・465など土器の細片のみ。詳細な時期は不明であるが、検出状況や土器から中世前半の土壌と思われる。

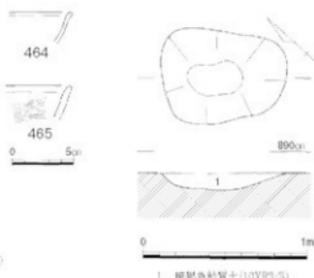
(松尾)



第153図 土壌50(1/30)・出土遺物(1/4)

土壌51(第140・154図)

30ⅡMの北西で、掘立柱建物3の西に位置する。平面形は長軸75cm×短軸54cmの隅丸長方形で、断面形は検出面から底面までの深さが10cmを測る皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質土。



第154図 土壌51(1/30)

出土遺物は無く、時期を明確にするのは難しい。検出状況や埋土などから、中世と思われる。

(松尾)

土壌52(第140・153図)

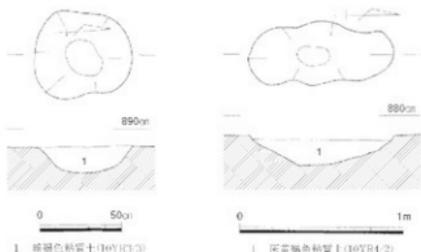
30ⅡMの南西、土壌51の東で掘立柱建物3の南に位置する。平面形は長軸59cm×短軸50cmの不整楕円形

で、断面形は検出面から底面までの深さ16cmを測る皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質土。

出土遺物は無いが、検出状況や埋土から中世と推察される。(松尾)

#### 土壌53 (第140・156図)

30ⅡMの北東で、掘立柱建物3に重複して位置する。平面形は長軸88cm×短軸39cmの不整長方形で、断面形は検出面から底面までの深さ16cmを測る皿状を呈する。



第155図 土壌52 (1/30)

第156図 土壌53 (1/30)

出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、検出状況や埋土から中世と思われる。(松尾)

#### 土壌54 (第140・157図)

30ⅡOの北東隅、赤掘溝群1の東隣に位置する。平面形は長軸72cm×短軸44cmの不整長方形で、断面形は検出面から底面までの深さ21cmの逆台形を呈する。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明。検出状況や埋土から中世と思われる。(松尾)

#### 土壌55 (第140・158図)

32ⅡQの北東で検出し、建物5のP4の南側に位置する。楕円形を呈する平面形をしており、長軸が65cm、短軸が47cmを測り、深さは15cmであった。

肥前系の陶器碗466が出土している。17世紀であろう。(高山)

#### 土壌56 (第140・159図、図版12)

32ⅡQ南東で、掘立柱建物6の南に位置する。南西の一部が調査区外に延びており、平面形は不明瞭であるが、長軸1.9mを測る不整長方形を呈するものと推察される。断面形は検出面から底面までの深さ48cmの椀形。埋土は2層に分層することができ、第2層には拳大の礫が多く充填されていた。なお第2層からは467～477などの遺物も多く出土している。

469は天日茶碗。470

は瓦質土器。472・473

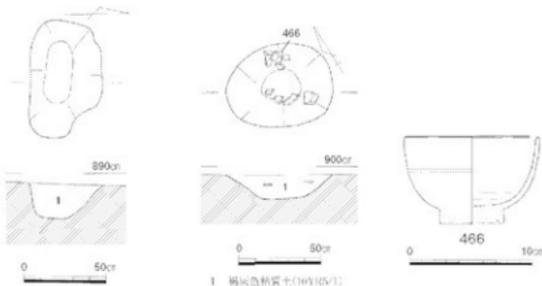
は備前焼。474は左巻きの三巴文軒丸瓦。

475は丸瓦。476・477

は平瓦。475～477は古

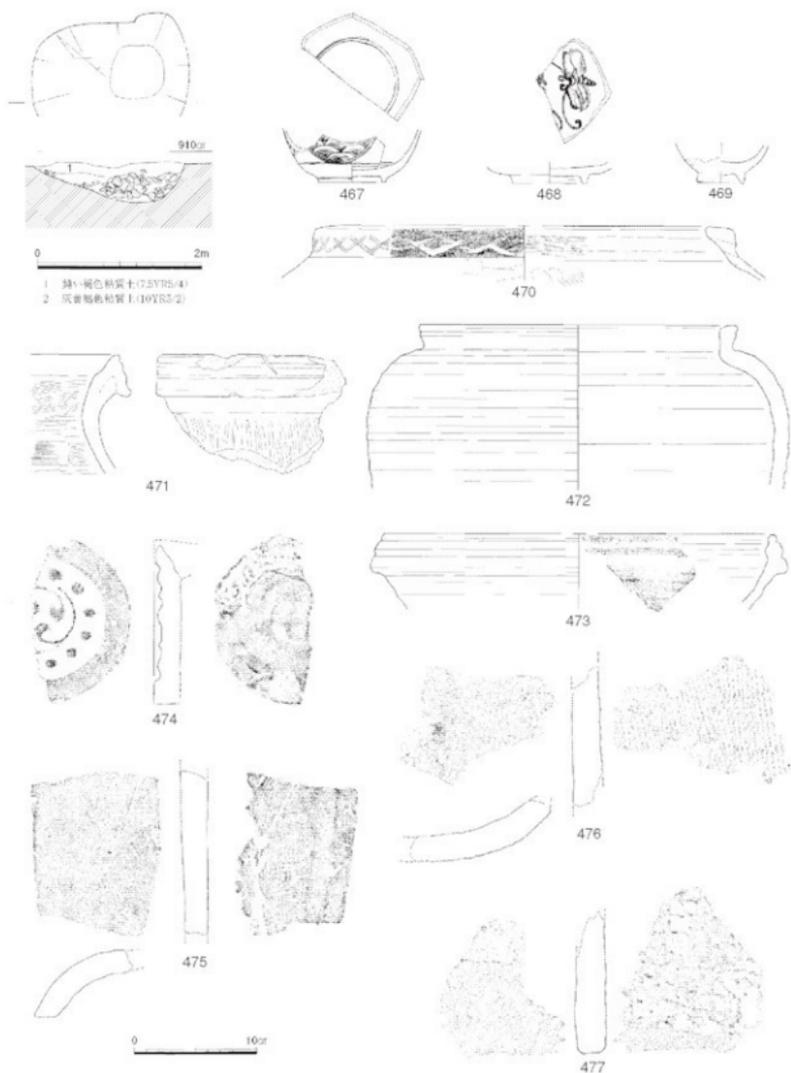
代の瓦であり、何らかの事情により混入したと思われる。

出土遺物により、18世紀後半から19世紀初頭の土壌であると推察される。(松尾)



第157図 土壌54 (1/30)

第158図 土壌55 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第159図 土壙56 (1/60)・出土遺物 (1/4)

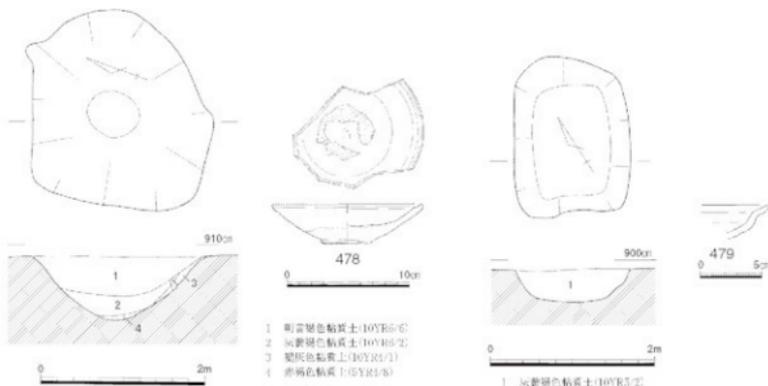
土壙57 (第140・160図、図版13)

34 II Sの北で検出した、平面形が不整形を呈する土壙である。規模は約2.4mを測る。検出面から

の深さが76cmあり、底部から肩口まで緩やかに立ちあがる断面をもつ。478は肥前系の皿で、見込みに砂が残る。17世紀と考えられる。(高山)

#### 土壌58 (第140・161図、図版13)

31ⅡSの北に位置し、土壌57から南へ1mほど南下したところにある。平面形はほぼ長方形をしており、長軸が1.95m、短軸が1.4mで、深さは40cm、底面の標高は8.5mであった。肥前系の皿479が出土している。17世紀に属するだろう。(高山)



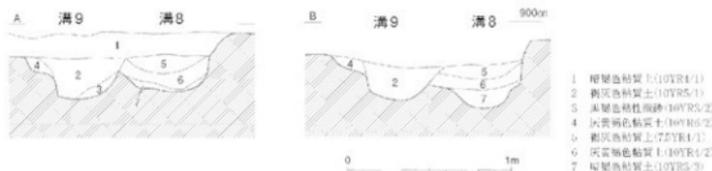
第160図 土壌57 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第161図 土壌58(1/60)・出土遺物(1/4)

## 6 溝

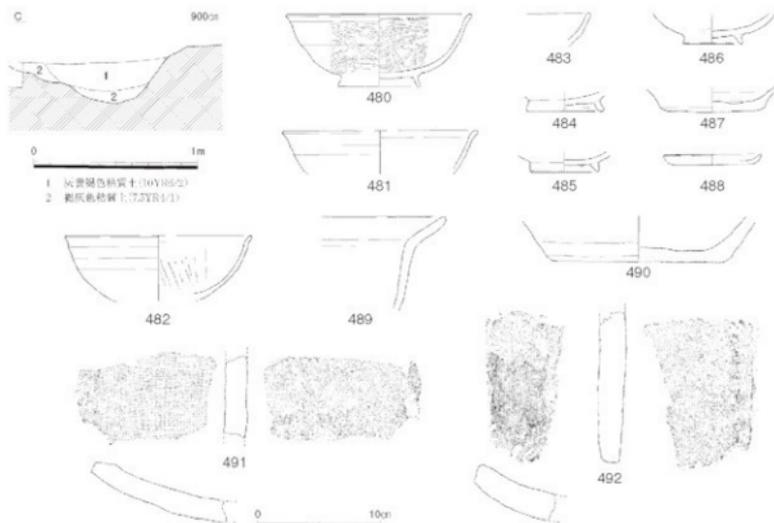
### 溝8・9 (第139・162・163図、図版13)

26ⅡG・ⅡIを北西から南東へ流れる溝。後述する下がり1(第162図第1層)の際に掘削されている。調査区北端の断面観察(第162図)により溝8が古く、溝9が新しいことが分かる。溝9は井戸9が位置するあたりから調査区外へ延びていくと予想される。なお溝8、溝9共に西へ23°程度振っていた。遺物は溝8からの出土が多く、480・481・483～490は溝8から、482・491・492は溝8・9を掘

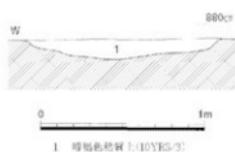


第162図 溝8・9 (1/30)

り下げる際に出土した。土師器碗480は溝8の底に貼り付く様に出土したことから、溝8が機能した時期の一点を示すと思われる。上器の特徴から溝8は11世紀後半に機能し、12世紀後半には溝9も完全に埋没したものと考えられる。(松尾)



第163図 溝8 (1/30)・溝8・9出土遺物 (1/4)



第164図 溝10 (1/30)

溝10 (第139・164図)

28Ⅱ1・ⅡKの中央やや東寄りに掘削された溝で、北側は調査区外へと延びている。幅は1.19m、断面は深さ12cmを測る皿状を呈する。出土遺物は無いが、溝11によって切られていることから、中世前半に属すると思われる。(松尾)

溝11 (第139・165・166図)

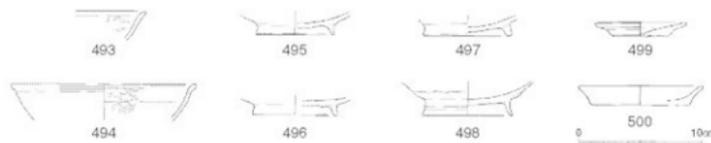
28ⅡKの北端に位置し、幅3.75mで深さは20cmを測る。平面形はいびつで、深さも一定しておらず、底面は凹凸が激しい。



第165図 溝11 (1/30)

人工的な溝というよりは自然のたわみであると思われる。

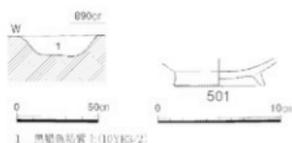
遺物は比較的多くの上器片が出上した。493～498は土師器碗。499・500は土師器皿である。土器の諸特徴から12世紀前半には埋没したものと思われる。(松尾)



第166図 溝11出土遺物(1/4)

#### 溝12(第139・167図)

28Ⅱ I・Ⅱ Kに位置し、やや弧を描くように北西から南東へ掘削されている溝。南端は丸く収まり、北西は調査区外へと延びている。遺物は土師器碗501などの土器片のみ。中世前半であると思われる。(松尾)

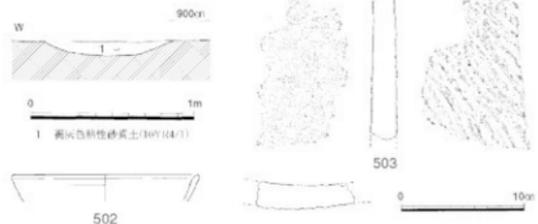


1 黒褐色粘質土(10YR5/2)

第167図 溝12(1/30)・出土遺物(1/4)

#### 溝13(第139・168図)

28Ⅱ Iの西端を北-南に掘削された溝。幅は80cm、断面形は深さ10cmを測る皿状を呈する。検出状況は溝12を切って掘削されており、なおかつ溝14・溝15に切られていた。出土遺物は土器の細片が多く、土師器碗502や平瓦503などが出上している。平瓦503は古代



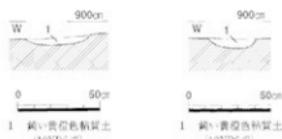
1 黄褐色粘砂質土(10YR7/1)

第168図 溝13(1/30)・出土遺物(1/4)

に属するものであるので、何らかの要因で混入したものと推察される。溝12・14・15、掘立柱建物2との関係などから、13世紀前半には埋没した溝であると思われる。(松尾)

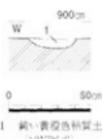
#### 溝14・15(第139・169・170図)

溝14は26・28Ⅱ G・Ⅱ Iを北西-南東に掘削された溝で、溝15は溝14の南端に並行している。検出状況から溝15が古く溝14が新しいと思われるが、実際の時期差は小さいと考える。溝14は南端が丸く収まり、北側は調査区外へと延びている。出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、溝14が溝13を切っていることから、13世紀中頃以降に掘削されたと考える。(松尾)



1 黄褐色粘質土(10YR6/3)

第169図 溝14(1/30)



1 黄褐色粘質土(10YR6/3)

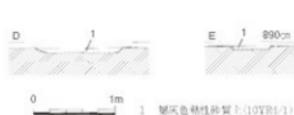
第170図 溝15(1/30)

溝16 (第139・171図)

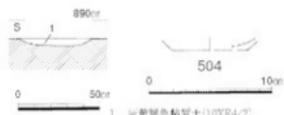
28ⅡK中央やや北寄りで、溝11の南に並行している。溝11と同様に平面形は不整形で断面の深さも3cmと浅く、自然のたわみであると考える。出土遺物は無く時期を明確にすることは難しい。検出状況などから、溝11と同様12世紀前半には埋没したものと考える。(松尾)

溝17 (第139・172図)

30ⅡMの北西で、掘立柱建物3の西隣に位置する。南西-北東に蛇行している。幅44cmで、断面形は深さ5cmの浅い皿状を呈する。遺物の出土は少なく、土師器皿504などの土器片のみ。詳細な時期は不明であるが、検出状況などから中世前半の溝と思われる。(松尾)



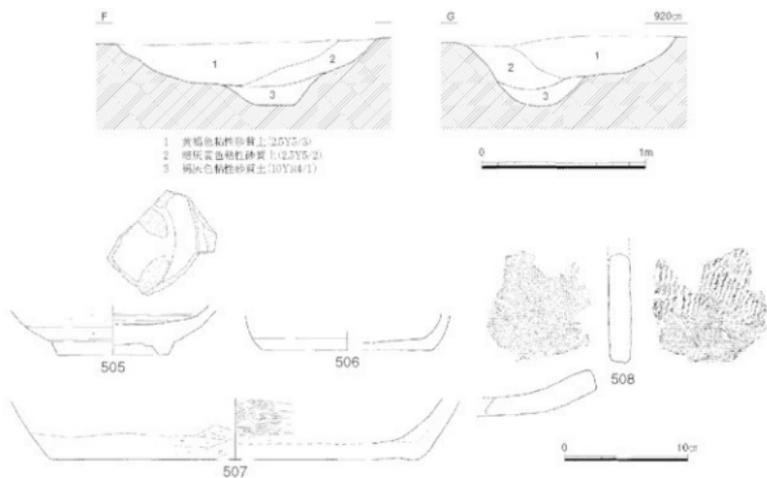
第171図 溝16 (1/60)



第172図 溝17 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝18・19 (第139・173図)

28・30ⅡKに位置し、東-北西に弧を描くように掘削されている溝。北端は丸く収まり、調査区内においてはそれ以上北へ延びていなかったが、対する東端は調査区外へと延びている。第173図の断面図に示している様に第3層が溝18埋上、第1・2層が溝19埋上に相当する。なお溝18・19の流路を踏襲する様に現代用水路が北側に設置されていた。溝19は17世紀代に溝18を踏襲する様に掘削し直したものと思われる。なお溝18の時期は明確ではないが、中世後半まで遡る可能性もある。(松尾)



第173図 溝18・19 (1/30)・溝19出土遺物 (1/4)

## 7 素掘溝群

## 素掘溝群 1 (第140・174図)

30Ⅱ Oの北東隅に位置し、中世包含層である暗褐色粘性砂質土を除去して検出した。幅20～40cmで、深さは2cm程度。埋土は暗褐色粘性砂質土である。5条余りの溝からなるが、後述する素掘溝群2と方向を同じくすることから、一連のものであると考える。耕起に伴う鋤痕の可能性が高い。出土遺物は無く詳細な時期は決めがたいが、検出状況などから中世と思われる。(松尾)



第174図 素掘溝群 1 (1/60)

## 素掘溝群 2 (第140・175図)

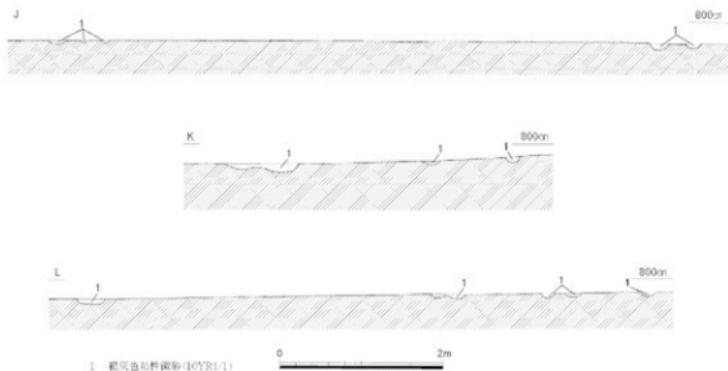
32Ⅱ Oの南西に位置し、素掘溝群1と同様、中世包含層である暗褐色粘性砂質土を除去して検出した。幅20cm～1.1m、深さは2cm程度。埋土は暗褐色粘性砂質土である。時期を明確にすることは難しいが、素掘溝群1と同様、中世と推察される。(松尾)



第175図 素掘溝群 2 (1/60)

## 素掘溝群 3 (第138・176図)

低位部南半にあたる38・40Ⅲ A・Ⅲ Cで確認した。溝の幅は10cm～1m、深さは5～20cm程度。溝の方向は38・40Ⅲ Aの範囲が北東-南西である一方、38・40Ⅲ Cでは西端がより南へ、東端がより北



第176図 素掘溝群 3 (1/60)

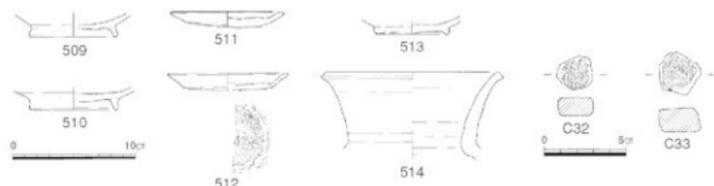
へ角度が振っている。理由としては、自然地形である下がり3の方向に規制を受けていることがあげられる。遺物は少なく哺乳綱日不明の骨片が出上している。時期は古代～中世包含層である褐灰色～灰黄褐色砂質土を除去した後に検出したことから、古代～中世であると思われる。(松尾)

## 8 下がり

### 下がり1 (第139・162・177図)

26ⅡG・ⅡIで検出した地形の下がり1で、下がり際には溝8・9が掘削されている。第162図に掲載している土層断面図第1層が埋土にあたる。西側については調査区外のため判然としない。

遺物は比較的多く、土器509～514や上製品C32・33などが出土した。509・510は土師器甕。511・512は土師器皿で、512の底部にはヘラ切りが観察できる。513は白磁碗。514は須恵器壺。溝8・9との関係から、11世紀後半以降の耕地化に伴うものであると思われる。(松尾)

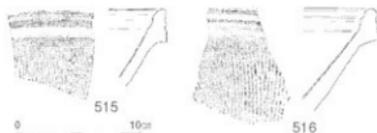


第177図 下がり1出土遺物 (1/4・1/3)

### 下がり2 (第138・178図)

36・38Ⅱに位置し、本来は東流する旧高梁川北岸にあたる。第25図に掲載している土層断面図でも明らかのように、現在の水田面においても約20cm程度の比高差を明瞭に残している。第25図の第4～7層は古代から中世の遺物を含む堆積層で、特に第4～6層は土層間にマンガング粒が多く沈着していた。このことから、第4～6層は中世段階

での水田層である可能性が高いと思われる。備前焼の播鉢である515・516は近世水田層と推察される第3層より出土している。これらのことから、下がり2はその土層がどれほど遡るか明確にし難いが、少なくとも弥生時代前期から現代まで続く地形の下がりであると言える。(松尾)



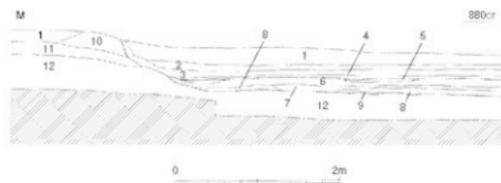
第178図 下がり2出土遺物 (1/4)



第179図 下がり3  
出土遺物 (1/4)

### 下がり3 (第179・180図)

38・40ⅢCに位置し、窪木遺跡の微高地から南溝手遺跡の低位部への下がり1に相当する。前述した下がり2の対岸にあたる。第180図の第2～4層が近世水田層で、第5～9層は中世水田層に相当する。第179図に示している土師器碗517は第5～9層、備前焼灯明皿518は第2～4層、また中世水田層からワシ下顎白歯が出上している。(松尾)



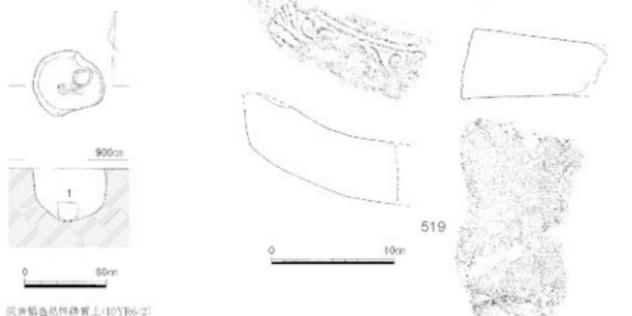
第180図 下がり3 (1/60)

- 1 現代耕作土
- 2 浅い褐色粘性砂質土(75YR7/4)
- 3 浅い黄褐色粘性砂質土(10YR7/2)
- 4 浅い褐色粘性砂質土(7.5YR7/1)
- 5 浅い黄褐色粘性砂質土(10YR7/2)
- 6 灰白色粘紅砂質土(10YR7/1)
- 7 褐色粘紅砂質土(10YR6/1)
- 8 褐色粘紅砂質土(10YR6/1)
- 9 明褐色粘紅砂質土(10YR6/4)
- 10 灰白色粘紅砂質土(10YR7/1) (中層粘重層)
- 11 灰褐色粘紅砂質土(10YR6/2)
- 12 暗褐色粘紅土(10YR4/1) (下へへくはと砂質土)

## 9 柱穴

柱穴12 (第140・181図、図版13)

32ⅡQの南東で土塙56の南東1mに位置する。平面形は直径43cmの不整形形で、断面形は深さ30cmの筒状を呈する。底面から1辺10cm程度の自然石と、軒平瓦519が出土した。



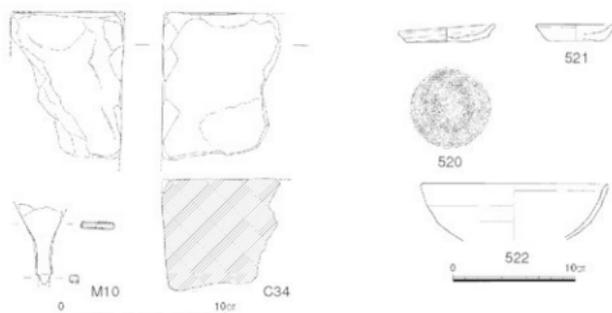
第181図 柱穴12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

519はいわゆる平城宮6663系の均整磨草文。備中国分前寺1類および栢寺廃寺4類と同范。上器の細片や検出状況から中世の柱穴と思われる。(松尾)

柱穴13～17 (第138～140・182図)

微高地で確認した柱穴。柱穴13は36ⅡWの南東で下がり2付近。柱穴14は26Ⅱ1北東、柱穴15・16は28Ⅱ1北西、柱穴17は30ⅡM南西にそれぞれ位置している。磚C34は柱穴13、鉄鎌M10は柱穴15、上師器皿520は柱穴14、上師器皿521は柱穴16、上師器碗522は柱穴17から出土した。

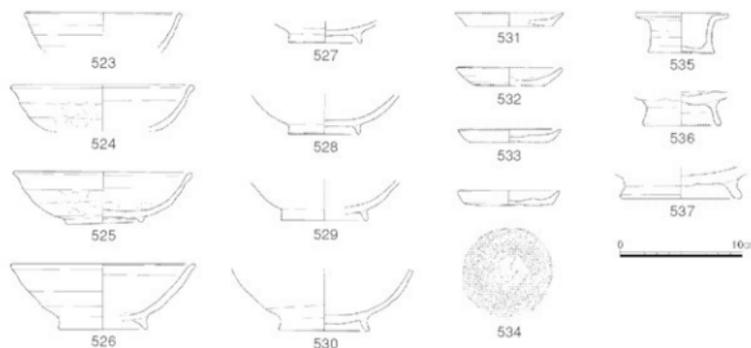
C34は古代まで廻り得る可能性があるが、他の柱穴同様、埋土の状況や出土している土器片などから、柱穴自体は中世以降であると考ええる。(松尾)



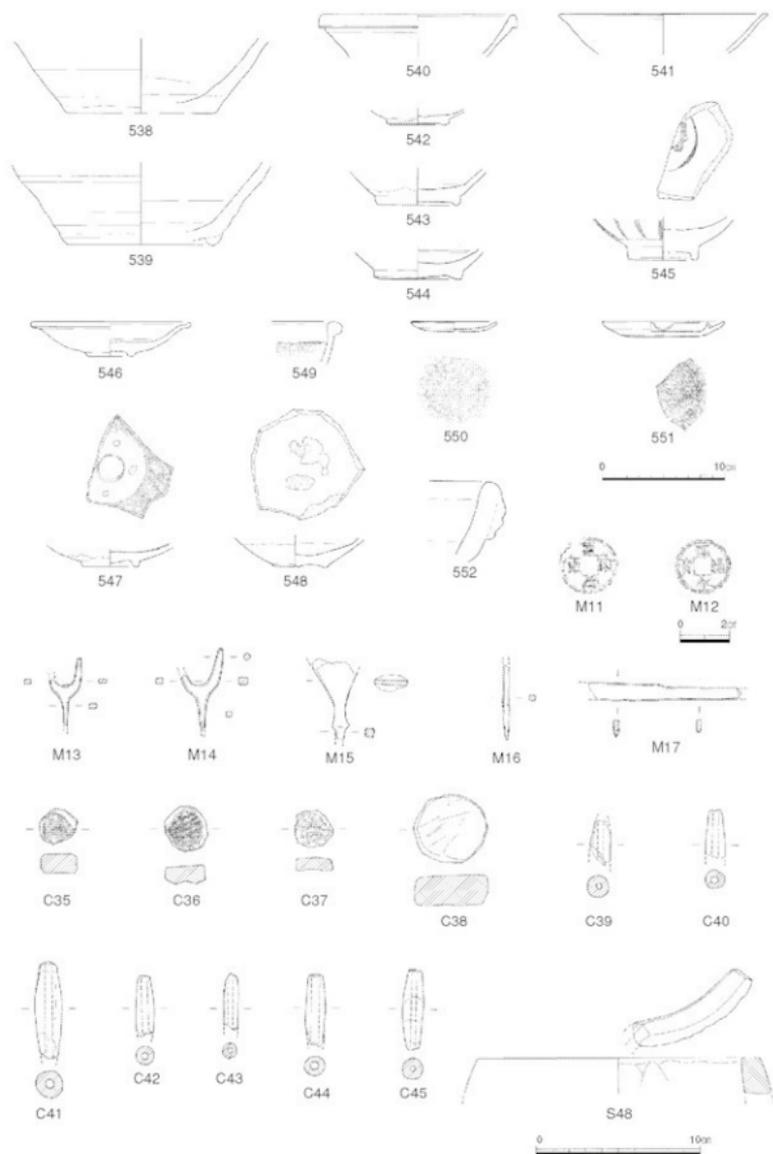
第182図 柱穴13～17出土遺物 (1/3・1/4)

## 10 遺構に伴わない遺物 (第183・184図)

土器の内523～527・529～532・534・536～539・548・550～552は微高地から、528・533・535・540～547・549は低位部から出土している。523～530は上師器碗、531～534は上師器皿、535・536は上師器杯、537は上師器大皿、538～539は須恵器壺、540～544は白磁碗、545は青磁碗、546～549は肥前系陶器皿・鉢、550・551は備前焼灯明皿、552は備前焼大甕である。基本的に中世あるいは近世の包含層より出土し、時期は微高地上に建物や井戸が分布する時期である12世紀から13世紀のものが多く、空白期間において17世紀以降の上器が見られる。上器以外の遺物としてはM11～17の金属器、C35～45の上製品、S48の石製品がある。M13・M15・C37は微高地包含層から、それ以外は低位部からの出土。S48は滑石製の砥石で、石鍋を転用して使用している。(松尾)



第183図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第184図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/2・1/3)

## 第6節 まとめ

今回発掘調査を行った南溝手遺跡は、旧高梁川の支流である河道が調査区の南端を東流している以外は全域が微高地となっており、それは県立大学調査において第4微高地と称されているものに相当すると思われる。以下主に微高地部分における遺構・遺物の変遷を時代順に述べ、まとめたい。

## 縄文時代後期～晩期の遺構・遺物

後期中葉の土器3～33・石器S1～4が包含層中より出土している。この包含層は第25図の第11層に相当し、南へと地形が下がる微高地南端部分では黒褐色土を呈しているものの、北へいくにしたがって黄色味を帯びた褐色土へと変化している。土器3～33や石器S1～4は、そのほとんどが黒褐色土を呈する微高地南端部分より出土した。

晩期の土器34～41は少量ながら微高地全域より出土している。遺構の検出状況は突帯文土器出現前後で異なり、晩期末（沢田式）の上壁1は第25図第9層上面より掘り込まれているが、晩期前半（谷尻式）の柱穴1は第9層を20cm程度面的に掘り下げた際に確認した。なお後期中葉の遺物が出土する第11層およびその上層である第10層の土壌について、フランク・オパール分析を行った。分析結果の詳細は付載に譲るが、稲作が行われていた可能性は低いと判断されている。

## 弥生時代の遺構・遺物

前期の遺構は土壇2～7の単発的な確認にとどまっており、その分布範囲も微高地南半にかたよっている。出土している土器から前期でも前半に遡るものは無く、中葉後半から後葉前半の幅におさまるものと思われる。ただし包含層中からは279・280・289の前半に遡る土器も少量ながら出土した。

中期の遺構は中葉に属する土壇が微高地上に散在している状態で、その密度は低い。中期後葉から後期にかけては、微高地における遺構密度が最も高い時期で、竪穴住居3軒、井戸6基、土壇13基などが、主に微高地南半に集中して分布している。

特記すべき遺物としては、断面形が袋状を呈する土壇45から出土した、直口壺210をあげるができる。算盤形の体部やや上方に焼成後の穿孔があり、それに対称する位置に線刻が見られる。線刻が意味する具体的な対象は不明であるが、人為的に埋め戻された土壇内に意図して投げ込まれた土器の体部へ線刻があるのは偶然でないと思われる。

## 古墳時代～古代の遺構・遺物

古墳時代初頭の遺構である竪穴住居4と溝4は、弥生時代後期集落の流れの中に位置付けるべきであり、溝4は集落域の北限に掘削された溝であると考えられる。竪穴住居4は平面形が1辺7.6～8.2mの五角形を呈し、周囲には高床部が巡っている。床面積は43.7㎡を測り、弥生時代後期の竪穴住居を含めて最も大きい。住居の埋土中からは西部瀬戸内系の壺320や334が出土している。

古代の遺構は全体的に希薄であるものの、調査区南端に位置する低位部から奈良三彩436や緑釉陶器437～440、硯C28～30が出土していて、当時の一般集落とは異なる様相を呈している。これらの遺物は南西約800mに位置し、7世紀中葉に創建された栢寺廃寺に由来するものと推察される。

## 中世～近世の遺構・遺物

中世の遺構は微高地全域に分布し、時期は13世紀前半を中心とする時期である。中世後半以降の大規模な耕地化を経て、現代に至るまで周囲には田畑が広がっていたと思われる。（松尾）

## 第5章 北溝手遺跡

### 第1節 遺跡の概要

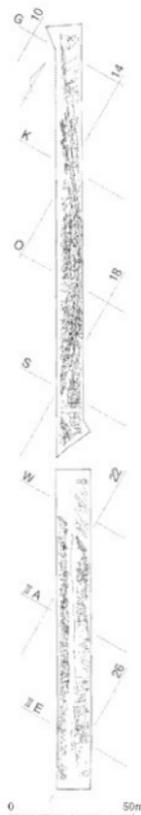
南溝手遺跡の北に繋がる範囲で、総延長310mをこえる。県立大学の西に隣接しており、これまでに行われていた発掘調査や一次調査の成果から、全面に微高地が広がり、弥生時代から近世に至る集落が存在すると予想されていた。調査前の景観は広域な水田地帯の中央で、小規模な道路や農道、水路が縦横に走り、調査対象地内も分断されていたため、発掘調査は幾つかのブロックに分けて実施した（第4図）。

遺跡の基本層序は第186図、第397図、第426図に示している。第186図第17・18層は層序や標高から南溝手遺跡の縄文時代後期包含層と対応する可能性が高いが、遺物は皆無で、直接結びつくかどうかは断定できない。縄文時代晩期の遺構は南溝手遺跡同様に弥生時代遺構面と同一面で確認できた。希薄ではあるが、微高地上に縄文時代晩期突帯文期の生活域が広がるものと想定される。ただし、縄文時代晩期中葉については資料が乏しく、ここでの判断は留保しておきたい。

弥生時代の基盤は南溝手遺跡と同じく黄色味の強い砂で、南溝手遺跡第25図第9層が第186図第15層に、南溝手遺跡第25図第8層の弥生時代包含層が第186図第5層、第397図第15層、第426図第9層に対応する。B区南半からA区北半にかけては包含層は存在せず、中近世耕作土直下で基盤に達する。この状況から、弥生時代以前では遺跡中央が最も高く、弥生時代の遺構はこの部分に特に集中していた。微高地北側では旧河道を利用した水田も確認された。

古墳時代～古代の遺構は極めて少ない。竪穴住居は古墳時代初頭に廃絶した1軒を除いて構築されなくなる。また、旧河道上の水田も古墳時代前期のうちに埋没しているようである。ほかは溝や柵列状遺構しかなく、後世の削平だけでは説明し難い状況である。おそらく古墳時代初めの段階で、それまでに脈々と営まれてきた集落の立地や土地利用の転換を迫られる事象が発生したものと推察される。

中世以降には耕地化が進み、全域に中世～近世の耕作土が堆積している。耕作土下面の標高は調査区南端で南に下がり、南溝手遺跡との境界を成すと思われる。井戸や土壇、たわみ、溝などが検出されたが、掘立柱建物は皆無であった。柱穴や出土遺物も僅少であることから、居住空間としてではなく、主に農地として利用されたと考えられる。（渡邉）



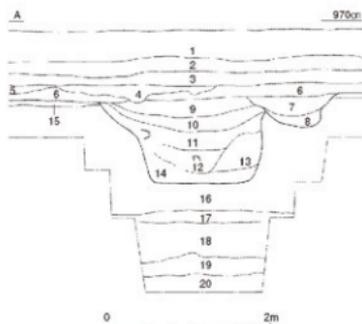
第185図 遺構全体図  
(1/2,000)

## 第2節 縄文時代の遺構・遺物

### 1 概要 (第186~188図)

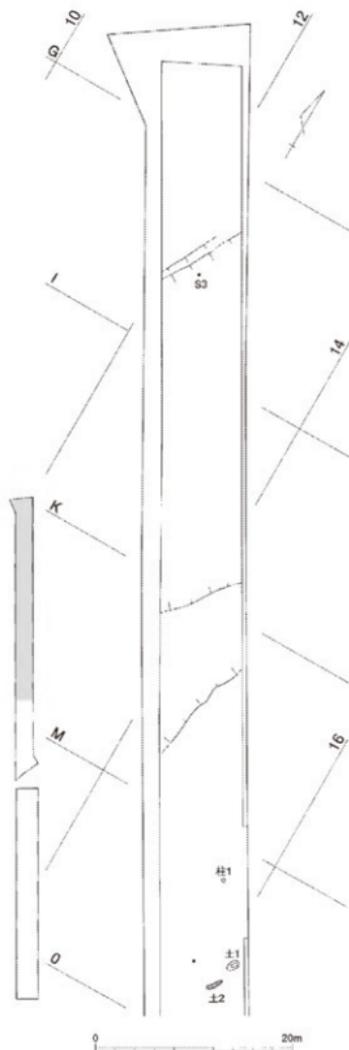
縄文時代の遺構は少なく、土贖3基と柱穴3基を数えるに過ぎない。いずれも北溝手遺跡中央にあたるB区に位置しており、もっとも安定した微高地上に形成されている。また、北溝手遺跡南端のA区西半では弥生時代の基盤となる第186図第15層や第16層上部から土器や石器が少なからず出土している。明確な遺構面としては捉えられなかったが、第16層上面に晩期の生活面が存在する可能性が考えられる。

南溝手遺跡では標高7.6m付近で縄文時代後期の包含層(第25図第11層)が確認されている。北溝手遺跡でも標高7.4~7.7mで黒色粘質土層(第186図第17・18層)を確認したが、遺物は皆無であった。(渡邊)

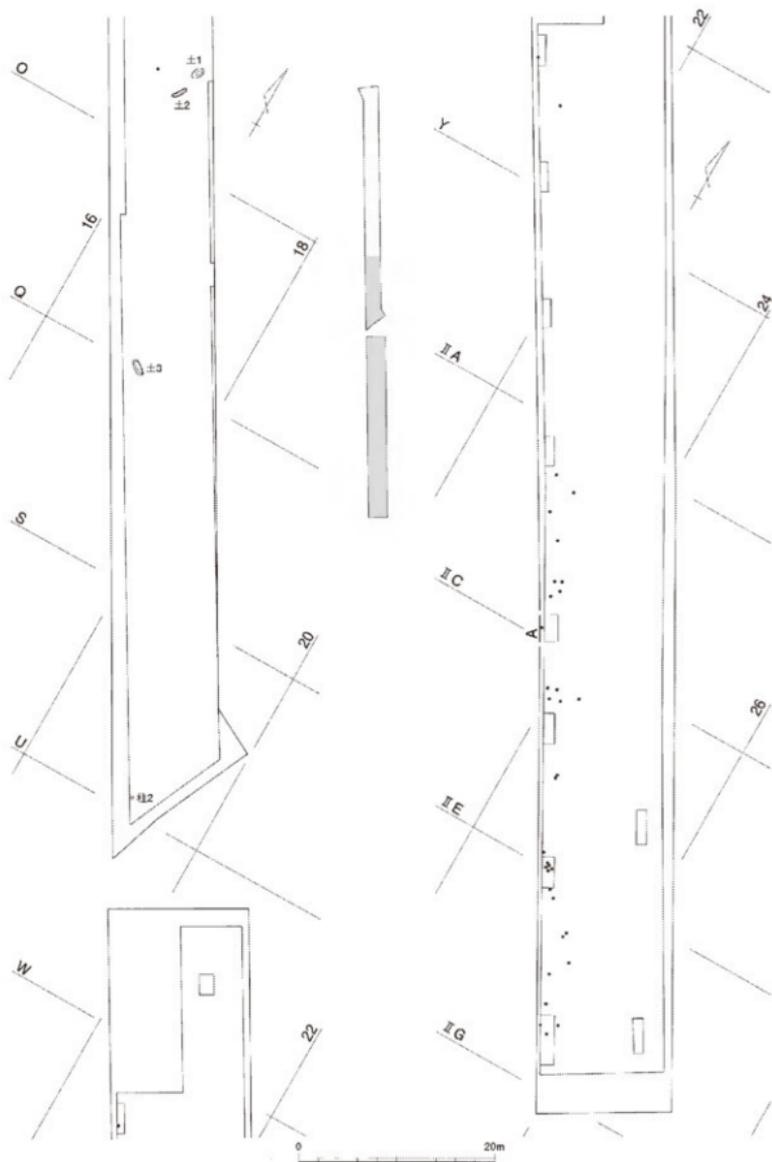


- |                           |                                   |
|---------------------------|-----------------------------------|
| 1 造瓦土                     | 10 鈍い黄褐色粘質砂質土<br>(10YR4/2) - 遺土合) |
| 2 灰代砂存土                   | 11 褐色粘質土(10YR5/1)                 |
| 3 中灰色粘質土(粘土含)             | 12 灰色粘質土(5Y5/1)                   |
| 4 黄灰色粘質土(2.5Y6/1)         | 13 褐色粘質土(2.5YR4/1)                |
| 5 黒褐色粘質土(10YR5/2)         | 14 暗褐色粘質微砂(10YR5/3)               |
| - 灰土包含層                   | 15 鈍い黄褐色粘質微砂<br>(10YR5/4) - 基盤層   |
| 6 鈍い黄褐色粘質砂質土<br>(10YR4/2) | 16 褐色粘質砂質土(10YR5/1)               |
| 7 褐色粘質砂質土(10YR4/4)        | 17 褐色粘質土(10YR4/1)                 |
| (粘土)-清17                  | 18 黒褐色粘質土(10YR5/1)                |
| 8 暗褐色粘質砂質土(10YR5/1)       | 19 黄褐色粘質砂質土(2.5Y4/1)              |
| (黄土少量)-清17                | 20 灰マリアージュ粘質土(7.5Y5/2)            |
| 9 黄褐色粘質砂質土(10YR1/4)       |                                   |
| (粘土含)                     |                                   |

第186図 西壁断面図 (1/60)



第187図 縄文時代遺構図① (1/500)

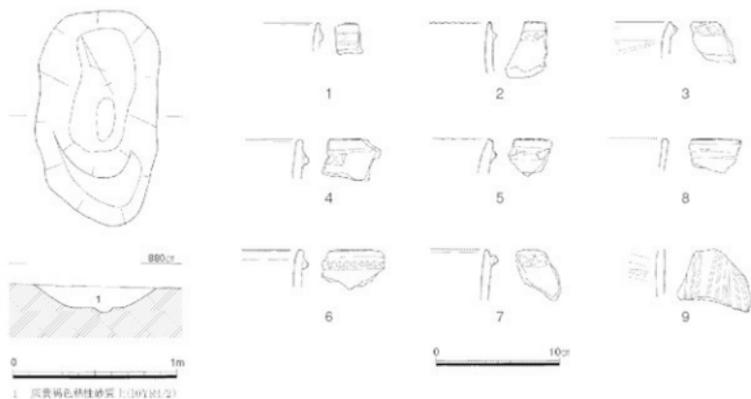


第188図 縄文時代遺構図② (1/500)

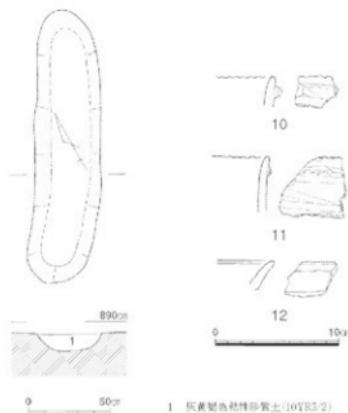
## 2 土坑

### 土坑 1 (第187・189図)

16Mの西端で、後述する土坑2の北に位置する。調査当初は竪穴住居5に伴う土坑であると考えたが、出土する土器片が全て縄文時代晩期に属するものであったため、竪穴住居5とは別遺構として報告する。平面形は長軸1.31m、短軸75cmを測る楕円形を呈する。断面形は南西にテラスを有し、中央には若干の凹みがある。遺物は1～9までの土器片があり、器種は全て深鉢。口唇部のごく近い位置に刻目突帯を有し、外面調整はナデているものが多い。9には断面V字形の条線が施されている。縄文時代晩期後葉であろう。(松尾)



第189図 土坑 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第190図 土坑 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 土坑 2 (第187・190図、図版21)

16Mの西端で土坑2の南に位置する。平面形は長軸1.66m、短軸40cmを測る長楕円形。断面形は検出面から底面までの深さ10cmを測る皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘粒砂質土で土坑1と同じ。

出土遺物は少なく、10～12の土器片のみ。器種は10・11が深鉢で、12が浅鉢。10・11共に丸くおさめた口唇部と貼付突帯上に刻目を施す。外面調整はどちらもナデ。浅鉢である12は、口端部内面に沈線が観察できる。調整は内外面共にナデ。

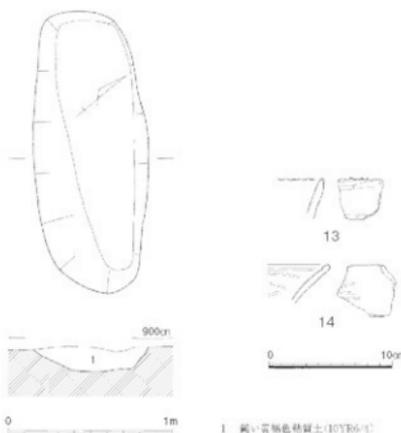
出土した土器の諸特徴から、縄文時代晩期後葉の土坑である。(松尾)

## 土壙3 (第188・191図)

16Oと16Qの境に位置する土壙で、平面形は長軸1.69m、短軸70cmを測る不整長方形。断面形は検出面から底面までの深さ16cmを測る皿状を呈する。

周囲には弥生時代中期の遺構が集中しており、木遺構もそれら弥生時代の遺構を確認していく際に検出している。

出土遺物は少なく土器片のみ。深鉢である13はやや尖った口唇部に刻目を有する。外面はケズリ、内面はナデ調整を行っている。浅鉢である14は口縁端部内面に沈線があり、内外面共にミガキ調整。出土している土器の諸特徴から、縄文時代晩期中葉の土壙である。(松尾)



第191図 土壙3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 3 柱穴

## 柱穴1 (第187・192図)

14Mの北東角に位置する。径38cm、深さ25cmの小規模な柱穴である。竪穴住居3の床面精査中に検出した。第206図に示した、P3とP12の間の柱穴である。埋土は黒褐色粘質微砂で竪穴住居3の柱穴埋土と差はなかったが、平面的な位置から竪穴住居を構成する柱ではないと考えた。ただし、周辺の弥生時代以降の遺構には縄文土器が混在するものが多く、この柱穴もそのような遺構の1つかもしれない。

出土遺物には突帯土器深鉢15と石鏃S1がある。15の口唇部はやや角張り、端部に刻目を施す。突帯上には刻目は確認できなかった。これらの特徴から、突帯土器の中でも古い要素を有しているといえる。(渡辺)

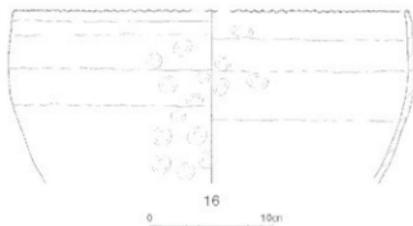


第192図 柱穴1出土遺物 (1/4・1/2)

## 柱穴2 (第188・193図)

18Sの南端で確認した柱穴。弥生時代中期の遺構である竪穴住居17や土壙70と同じく、中近世包含層除去後の黄色上層(縄文時代晩期～弥生時代基盤層)を面的に掘り下げていく際に検出した。

遺物は16の深鉢片が出土したのみ。口唇部に刻目が巡り、外面はナデ調整。縄文時代晩期中葉。(松尾)



第193図 柱穴2出土遺物 (1/4)

4 遺構に伴わない遺物 (第194図・写真16)

17~21は突帯文土器口縁部で、17~20は端部に面を有したり、体部外面に二枚貝条痕を施すなど古い要素を有する。22・23は深鉢体部片、24~29は浅鉢である。29は晩期中葉でも古く位置付けられようか。17は溝30、19は竪穴住居3のP31、20・27・28は竪穴住居3覆土、24は土壇18、18・22・25・29・S2は弥生時代以降の遺構面となる基盤層、26は中世以降包含層から出土している。S3は打製石斧で、遺跡北端の河道1北側斜面で出土した (第187図)。形態および出土状況から縄文時代晩期に比定した。

第4図のドットはA区西半で行った基盤掘り下げ時の縄文時代遺物の出土地点を示している。遺構面~10cmで出土することが多い。基盤は南に緩やかに下がっており、削平を免れた南端に比較的多くの遺物が遺存していたようである。基盤層から出土した土器はローリングを受けておらず、写真16に見るように比較的まとまった状態で出土する土器もあることから、本来は何らかの遺構に伴うものが、基盤に同化して確認できなかった可能性も否定できない。(渡邊)

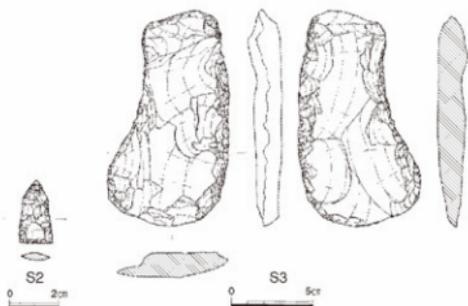
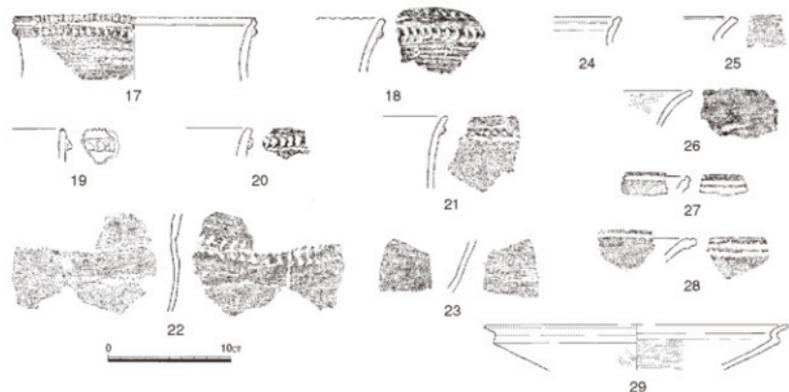


写真16 土器29出土状況(北から)

第194図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3)

## 第3節 弥生時代の遺構・遺物

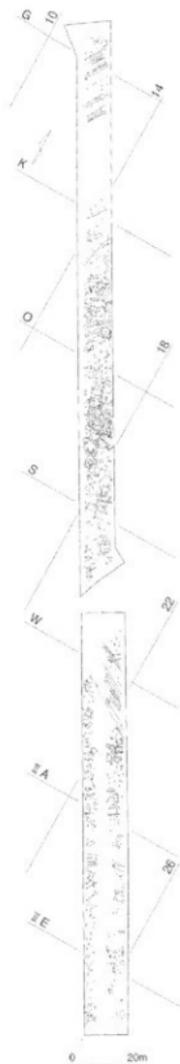
## 1 概要 (第195~200図)

弥生時代の遺構面の標高は8.7~8.8mを測る。中世以降の耕作による削平を著しく受けており、現状ではほぼ平坦であるが、堅穴住居3以北及び溝11より南には耕作土層と基盤層の間に5~10cmの弥生時代包含層が遺存しており、本来は、遺跡中央にあたるB区が最も高く、南北に緩やかに下がる地形であったと思われる。調査区南端部西壁にあたる第186図第5層及び河道南緩斜面の東壁第397図第15層及び北端部北壁第426図第9層が弥生時代包含層とみなされる堆積層である。南北両地点の形成時期が同じかどうかは明らかにし得ないが、確認された限りにおいて、弥生時代中期後半以降の遺構はこの包含層を切り込んで掘削されている。

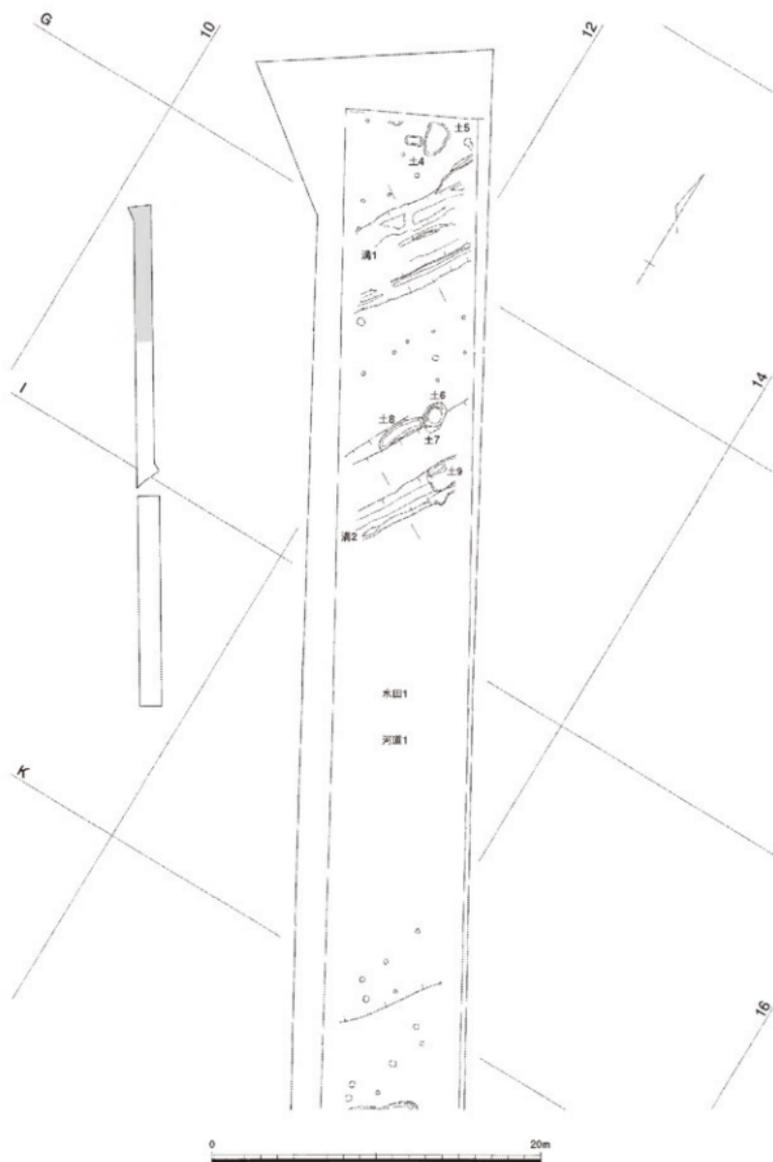
検出された主な遺構は、堅穴住居23軒、掘立柱建物6棟、井戸4基、土壇95基、溝20条、水田、河道などである。

遺構密度が高いのはB区からA区北半で、微高地の最も安定した部分と想定される。A区南半でも堅穴住居や掘立柱建物が確認されているが、南に行くにつれて徐々に遺構が希薄になる。一方、南溝手遺跡北端では北に行くにつれて遺構が希薄となる状況が看取されており、北溝手遺跡側に形成された集落と南溝手遺跡側に形成された集落との境界を成す。一方、河道1を扶んだ北端の微高地でも小規模な土壇と溝を検出したに過ぎない。調査区より北側に広がる微高地の南端にあたり、また別の集落の縁辺部にあたると思われる。

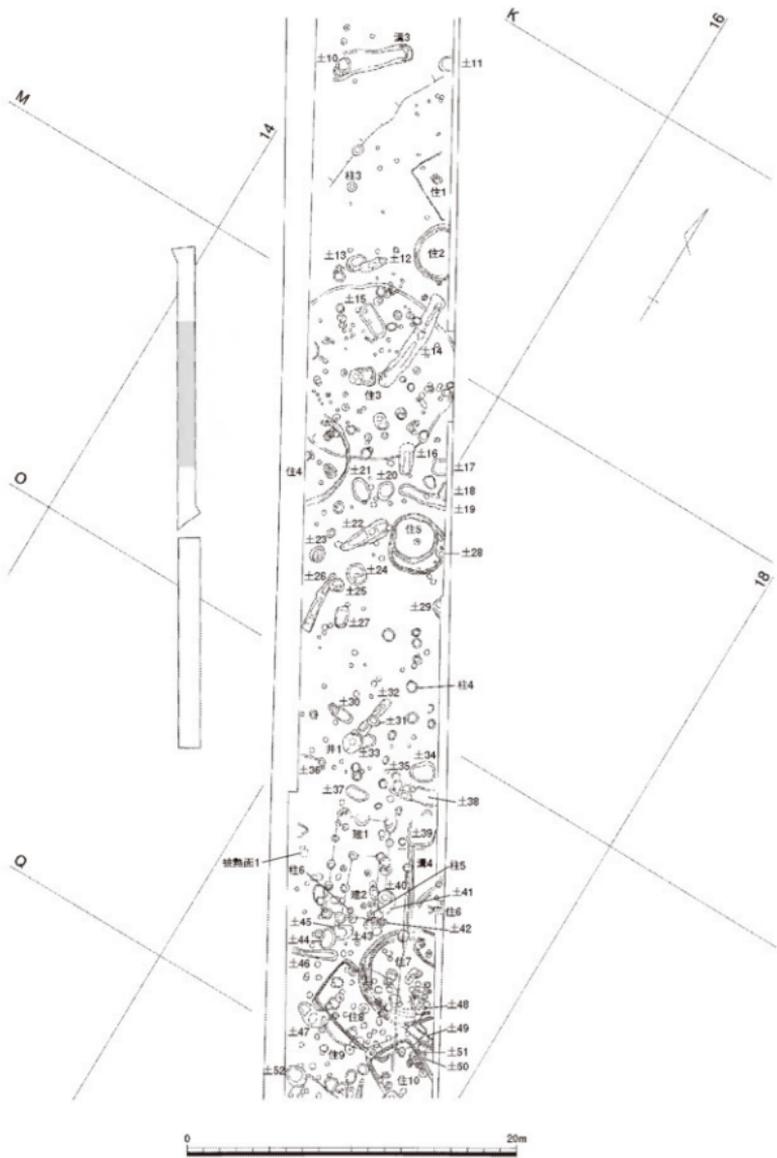
前期は希薄で、堅穴住居は1軒のみである。しかし、同時期の土壇や柱穴がB区南半に広く散在しており、本来はあったものが削平された可能性も考えられる。本遺跡が最も盛行するのは中期前葉~中葉である。当該期の集落の実態はこれまでの周辺での発掘調査では明確にし得ておらず、この度の調査の最大の成果の一つに挙げられよう。ただし、続く中期後半、さらには後期には遺構数が激減する。泉下の弥生時代集落では、時期によって集落中心域が移動することがこれまでにも指摘されており、本遺跡の状況もそのような観点で捉えることが必要であろう。後期末の遺構には、古墳時代初頭に比定される土器を含むものが幾つかある。遺構の存続時期を示すものか、埋没途上の混入か判断しかねるが、弥生時代の遺構として扱った。この期を最後に堅穴住居は構築されなくなる。ここに集落のひとつの画期を求めることができよう。(渡辺)



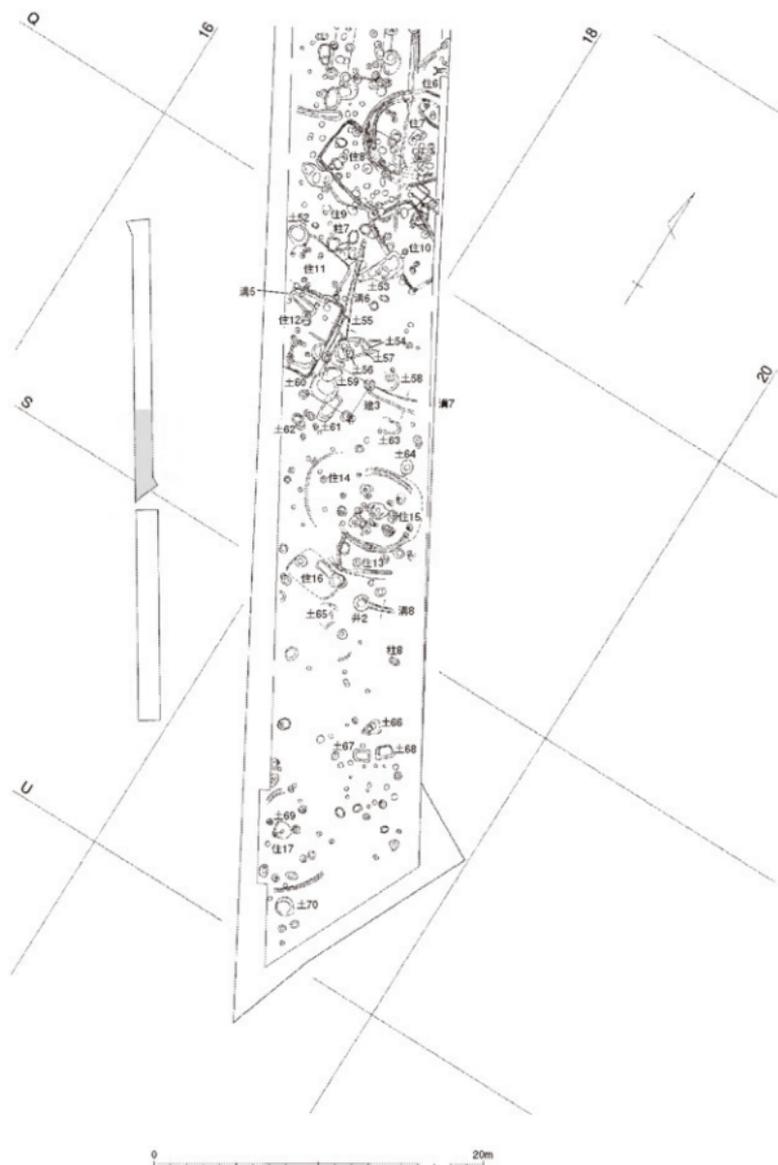
第195図 弥生時代遺構  
全体図 (1/1,500)



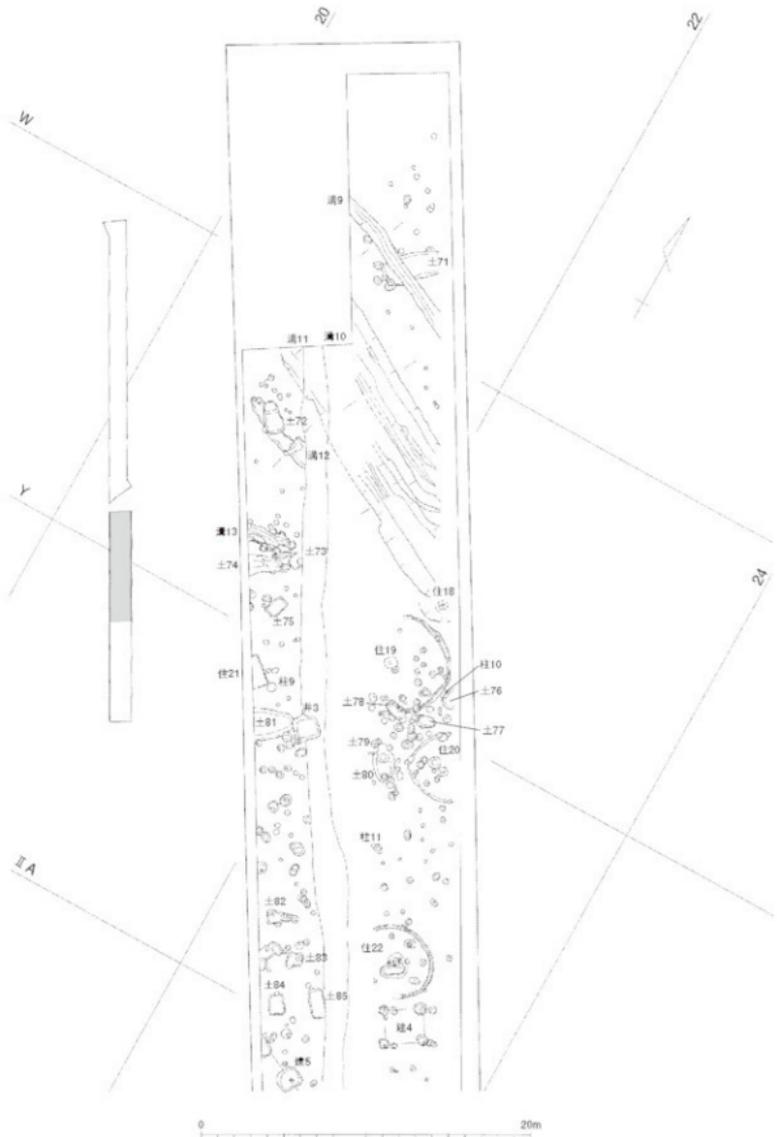
第196図 弥生時代遺構図① (1/300)



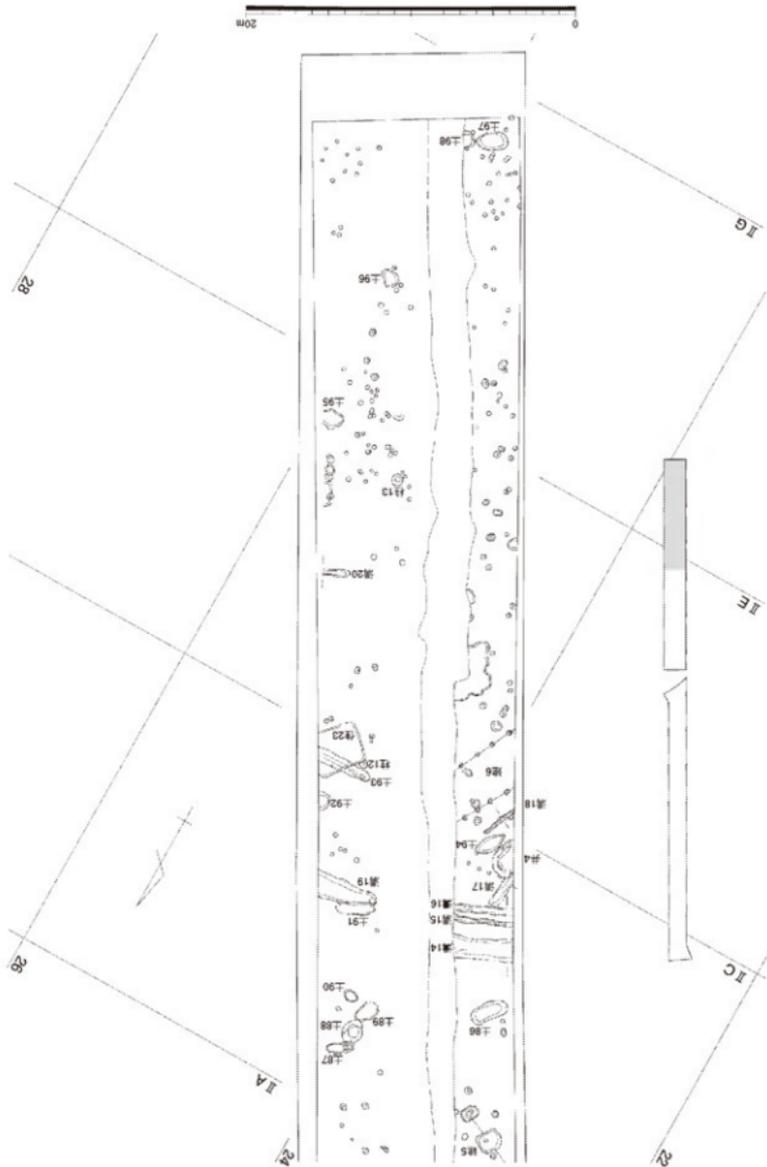
第197図 弥生時代遺構図② (1/300)



第198図 弥生時代遺構図③ (1/300)



第199図 弥生時代遺構図④ (1/300)



第200図 弥生時代遺構図③ (1/300)

## 2 竪穴住居

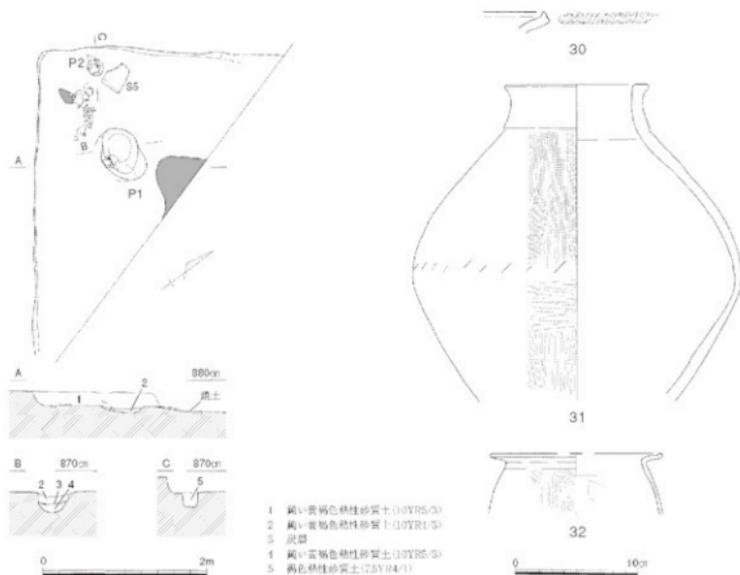
## 竪穴住居 1 (第197・201・202図、図版23)

14K中央に位置する。大部分が調査区外になり、北西角を検出したに過ぎない。残存部では一辺4m弱の方形を呈する。検出面からの深さは16cmで、床面の標高は8.5m前後を測る。P1東側には非常に良く焼け締まった面があり、屋内の火処と考えられる。側溝掘削により削平を受けたが、調査区東壁沿いにおいて厚さ3cm前後の赤く硬化した部分を確認している。P1は主柱穴で、おそらく4本柱であろう。2本重複しており、古い方がA断面第2層に、新しい方がB断面に対応する。新しい方では径43×57cm、床面からの深さ25cmを測る。P2は径20cm、床面からの深さ18cmの小柱穴で、土器除去後に検出したことから、竪穴住居構築以前の柱穴の可能性が高い。

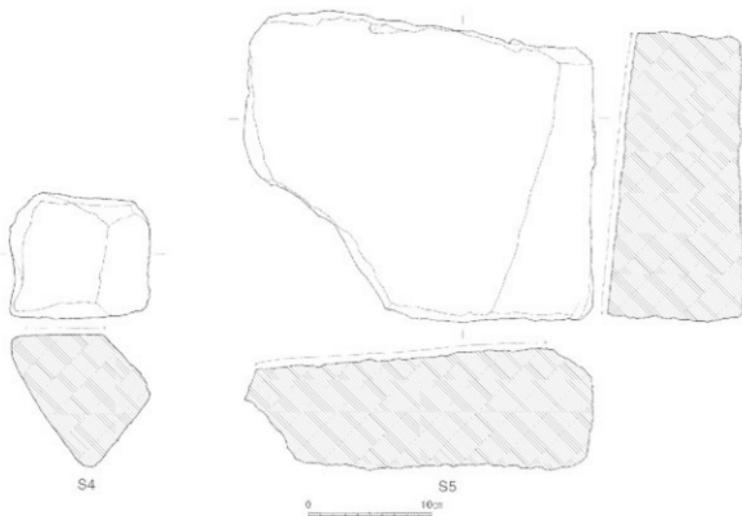
出土遺物には壺30・31、甕32、台石S4・5がある。壺31は口縁部下端に段を有し、体部に貝殻腹縁文を施すなど前期的な要素を残している。しかし壺30は口縁端部を拡張し、甕32も口縁端部に強いヨコナデを施すことから、中期中葉の古い段階に位置付けられよう。(渡邊)

## 竪穴住居 2 (第197・203～205図、図版23)

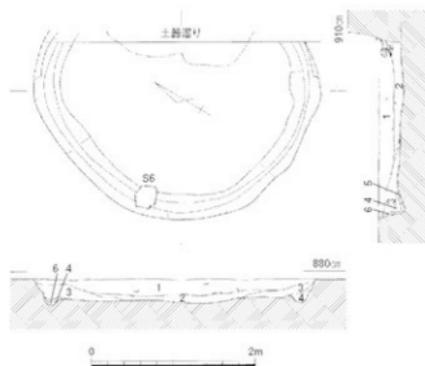
14K中央で、竪穴住居1の南に位置する。東側を側溝で掘削され、約1/3は調査区外となる。径3.5mの円形、もしくは一辺3.2mの円形に近い隅丸方形と想定される。検出面からの深さは30cm前後で、床面の標高は中央部で8.4m、周辺部で8.46mと中央部がやや低い。しかし明瞭な高床部は確認できな



第201図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物① (1/4)



第202図 竪穴住居 1 出土遺物 2 (1/4)

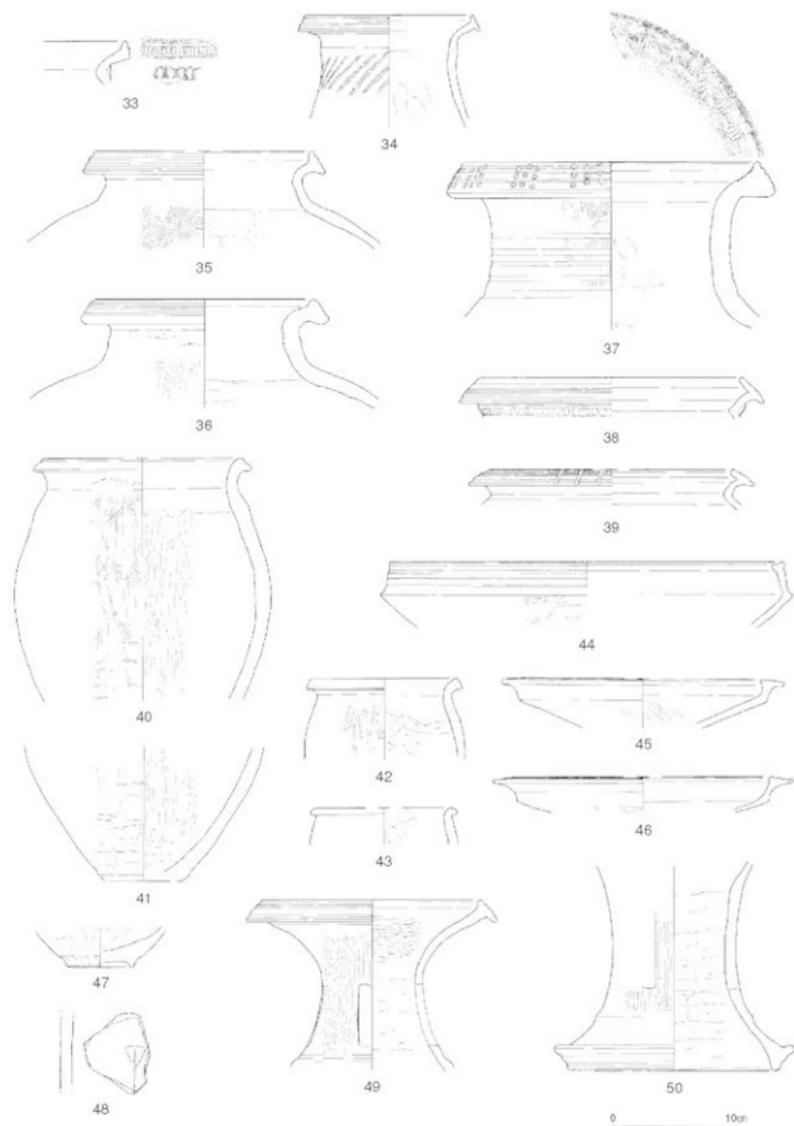


- 1 黒褐色粘質土 (7.2YR3/1) (粘土含)
- 2 黒褐色粘質土 (7.2YR5/2)
- 3 灰褐色粘質土 (7.2YR4/2) (黄色土粘多含)
- 4 黒褐色粘質土 (5YR6/1) (灰・硬土含)
- 5 灰層
- 6 緑灰色粘質土 (10YR4/1)

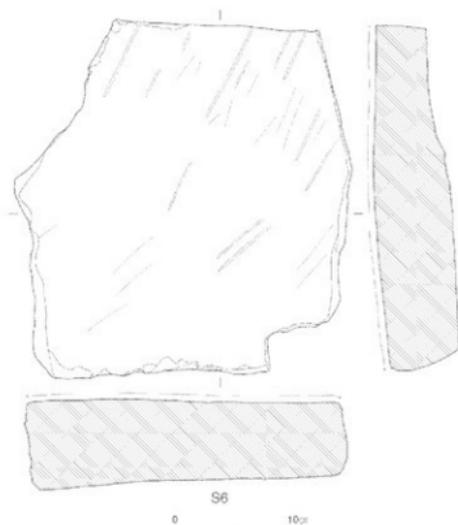
第203図 竪穴住居 2 (1/60)

かった。幅20cm、深さ7cmの壁体溝がめぐる。柱穴はない。

埋土上層にあたる第1・2層はレンズ状の堆積を示し、土器を多く包含していた。特に第1層の東壁寄りでは土器溜まり状を呈していた。図示し得た土器はこの土器溜まり状の部分から出土した土器である。弥生時代中期後葉から後期前葉に位置付けられ、本竪穴住居もこの範疇で捉えられる。壁体溝からは中期末葉の土器が出土しており、中期末葉に廃絶された竪穴住居のくぼみに、後期前葉まで土器が投棄されたものと考えられる。弥生時代中期中葉の甕33は混入であろう。なお、本竪穴住居は基盤上部に薄く堆積した弥生時代包含層を切って構築されている。48には細く、椀のような形の沈線文が



第204図 竪穴住居2出土遺物① (1/4)



第205図 竪穴住居2出土遺物②(1/4・1/2)

描かれていた。

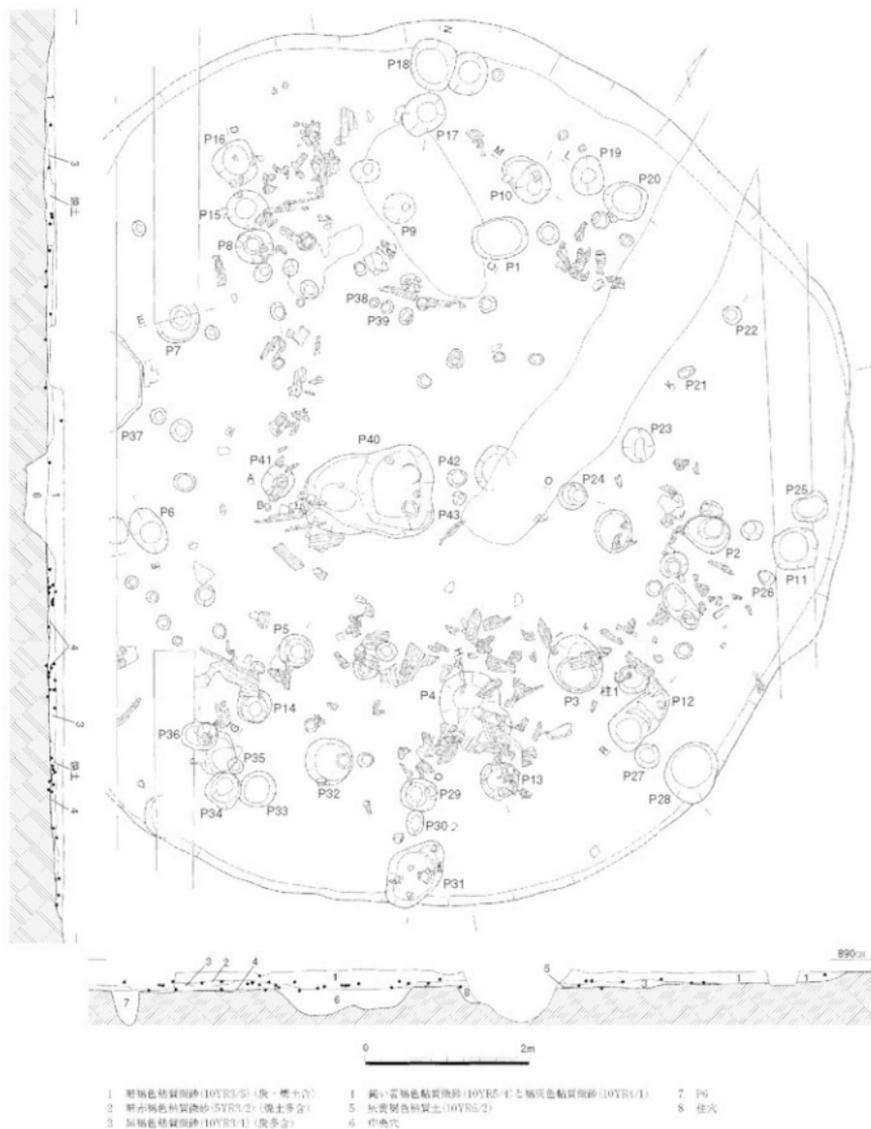
石器のうち台石S6は壁体溝上にはほぼ水平に置かれており、竪穴住居廃絶時に捨て置かれたものと思われる。石鏃S7は土器溜まり状部分から、石鏃S8と楔形石器S10はS6周辺から、楔形石器S9は壁体溝から出土した。(渡邊)



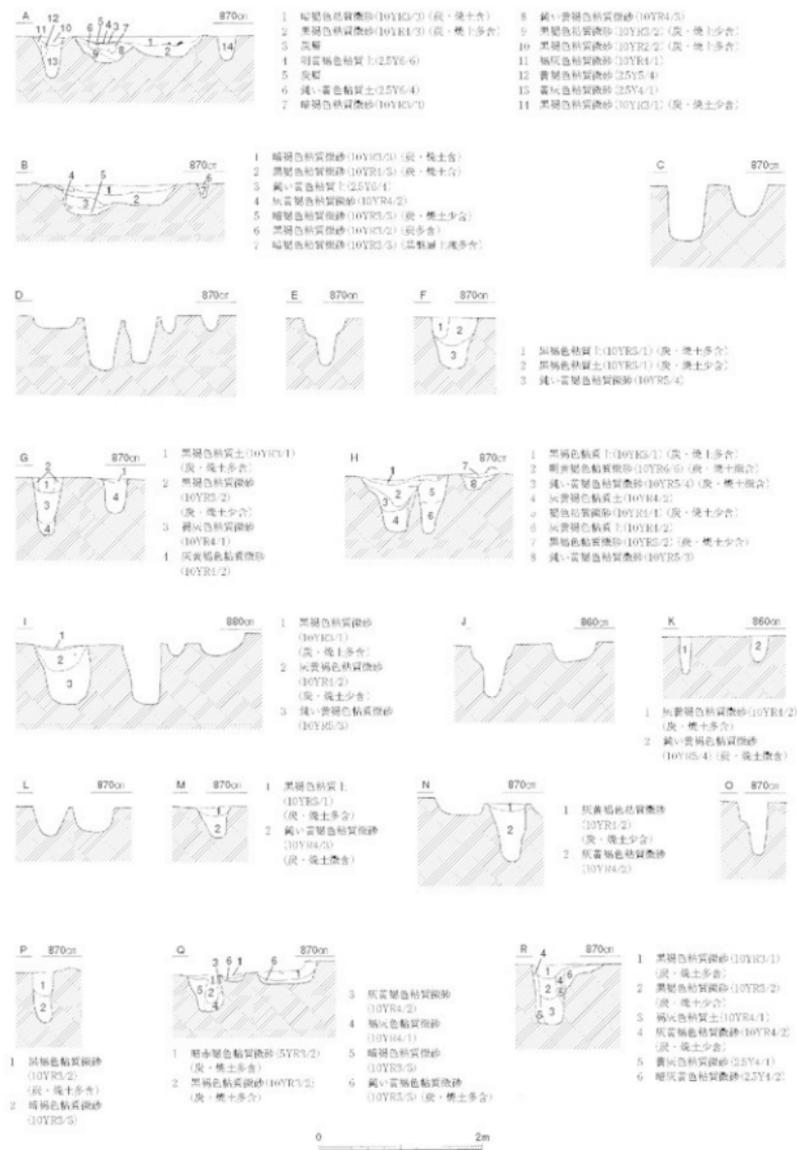
### 竪穴住居3 (第197・206～215図、写真17・18、図版24・25)

14M北東で、竪穴住居2の南に位置する。大形の竪穴住居で、東西両端が調査区外となっているが、南北長から径10.8mの円形に復元される。検出面は包含層より下面で、竪穴住居4や土壇14～16に切られる。検出面からの深さは最大20cmで、床面の標高は8.54～8.6mである。埋土には炭・焼土を大量に含み、炭化材も大量に遺存していることから焼失住居と考えられる。炭化材は、床面に接するものもあれば少し浮いた状態のものもあった。また比較的小片が散在しており、柱穴の上に重複するものもあった。焼土も同様の状態で、屋根材が焼け落ちたままの状態を保持しているとは想定できず、焼失後の片付け等、二次的に竪穴住居内に投棄されたものと考えられる。

竪穴住居の断面は浅い皿状を呈し、壁体溝は確認できなかった。県下の前期竪穴住居では後半期に比定される総社市山津田遺跡例と矢掛町清水谷遺跡例以外は壁体溝が確認されていないことから、前半期段階では本来壁体溝を必要としない構造であった可能性が高い。中央やや西寄りには土壇があり、中央穴と考えられる(P40)。中央穴P40の東西軸延長上両側には小柱穴P41・42があり、いわゆる松葉草型住居の範疇で捉えられる。中央穴の断面を第207図A・Bに示す。最上面は竪穴住居最下層に対応する炭・焼土を多く含んだ層で覆われているが、第2層と第3層以下では切り合いが認められる。また平面に図示した土器がB断面第2層上面で出土したことから、中央穴には新古2段階あると考えられる。各段階の規模を残存部で測ると、古段階では径約85cmの不整形円形を呈し、床面からの深さ37cm、底面の標高8.21mで、新段階では東西1.56m、南北1.0mの楕円形を呈し、床面からの深さ25cm、底面の標高8.29mとなる。中央穴P40の出土遺物を第208図に示す。壺53は古段階底、壺56は新段階西端第2層上面から出土した。厳密に時期を比定できる資料はないが、壺の口縁部の屈曲が弱く、



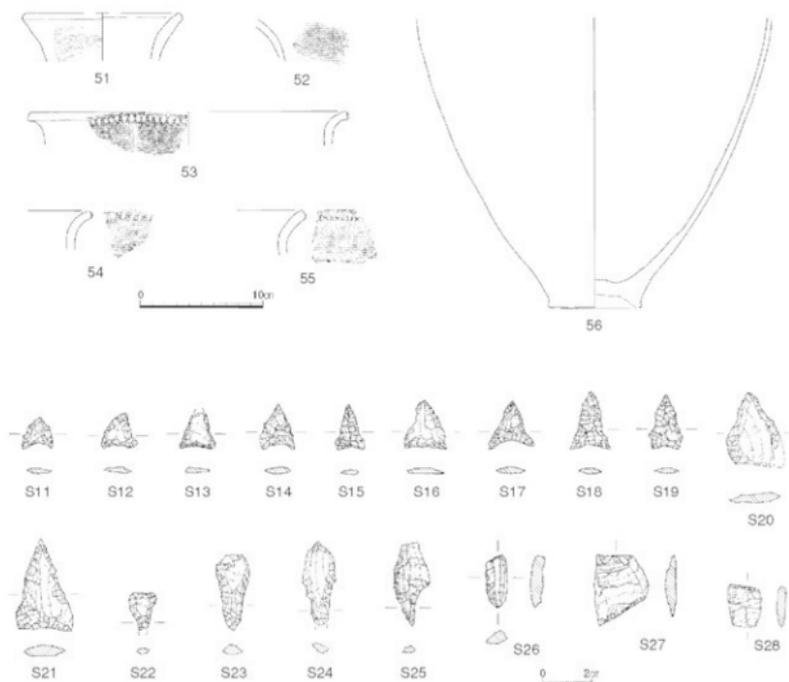
第206図 竪穴住居 3 (1/60)



第207圖 墜穴住居3 断面圖 (1/60)

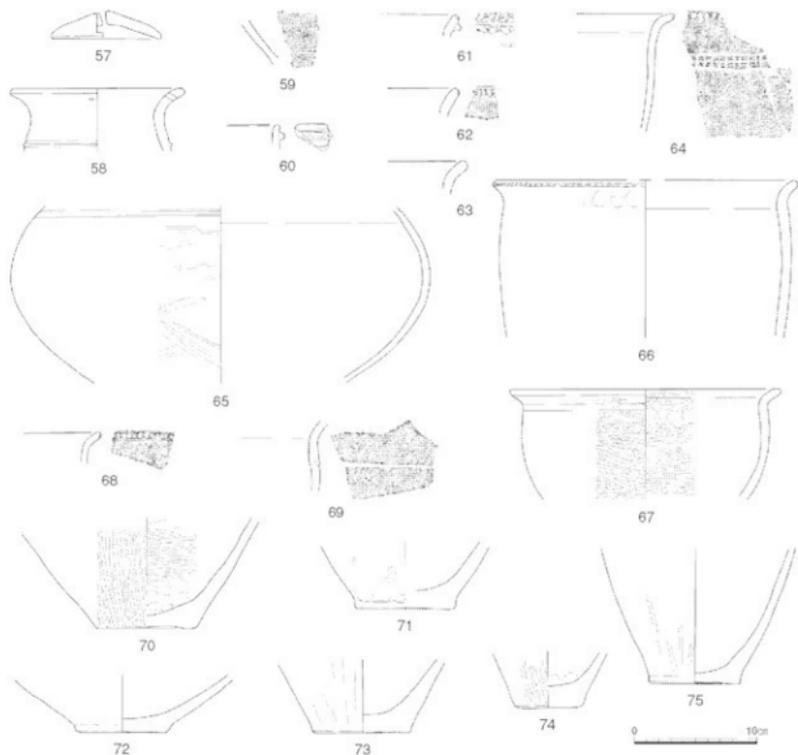
あまり剛も張らない形態から新しくは位置付けられない。土器のほかには石鏃35点、石錐11点、楔形石器8点、メノウ片などが出土している。サヌカイトのチップ・フレークを含めた出土総重量は111351gを計る。石鏃・石錐は多様な形態で、一定の傾向や規則性は認められない。

柱穴は径10cm前後から径60cmをこえるものまで、大小様々な規模の穴が90基以上検出された。そのうち遺物を出土したものに柱穴番号を付している。なお、縄文時代晩期の土器・石器のみを出土した柱穴は縄文時代晩期の柱穴1として報告した。ほかにも土器の出土が無い柱穴については、縄文時代晩期柱穴の可能性もある。主柱穴は、深さや並びから、中央穴を中心に環状に巡るP1～9と想定した。これらの柱穴は検出面からの深さが57～75cmと比較的深く、埋土に炭・焼土を含み、床面で容易に検出できたものである。底面の標高は7.8～7.9m前後を測る。なお、P9は土壇15底面で検出された柱穴である。また、土壇14に削平されたP1～2間にも主柱穴が存在していたと考えられる。各柱間は1.2～2.2mとバラツキがあるが、やや東西に長い楕円を描くように巡る。さらにその外側に、P11～12・29・36、P16～17・19が同心円状に巡っている。外側の柱穴群は、中央穴の新古段階に対応し、拡張に伴い新設された柱穴の可能性も考えられる。しかし、P5は被熱により壁面が赤変していたこと、P36には構造材と思われる径20cmの丸太材が炭化して遺存していた（写真17左下）ことから、焼

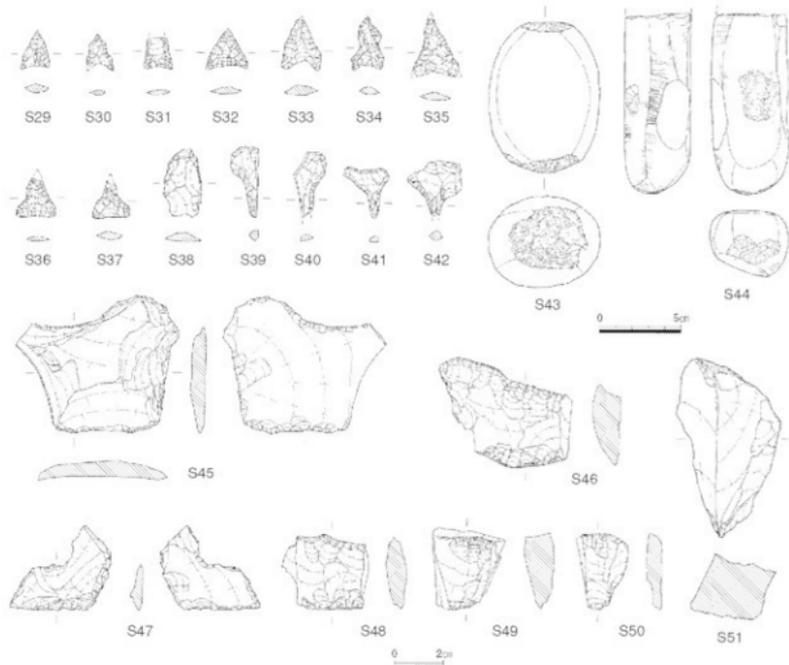


第208図 竪穴住居3出土遺物① (1/4・1/2)

失時点では両者とも上屋を支える主柱穴として機能していた蓋然性が高い。また、径10.8mにかかる上屋構造をP1～9だけでは支えきれないのではなかろうか。このような観点から、拡張に伴って内側から外側に主柱穴が移動したのではなく、当初から2巡する構造であったと考えておきたい。径10cm前後の小柱穴はこれら2重に巡らされた主柱穴の周囲に分布しており、主柱穴に伴う支柱の可能性もある。さらに、P3→27、P4→13、P5→36、P8→16のように複数の柱穴が放射状に並んでおり、全ての柱が同時期に併存していたとはいえないが、主柱もしくは垂木を補助する働きを担っていたと推察される。ただし、壁体に重複するP18・28・31などは深さ25cmと浅く、他の柱とは異なる性格を想定した方がよいであろう。柱穴の出土遺物を第209・210図に示す。土器のみ出土した柱穴は5基、石器のみ出土した柱穴は9基、両者とも出土した柱穴は5基ある。柱穴から出土した土器には壺蓋57、段の部分に細い突帯を貼り付けた壺58、段の上下をくぼめて擬突帯を削り出し、格子状に沈線を加えた甕64、突帯文の系譜を引く甕60・61などがある。比較的古い様相をとどめ、前期中葉でも古



第209図 竪穴住居3出土遺物②(1/4)



第210図 竪穴住居3出土遺物③ (1/2・1/3)

い段階に位置付けられよう。柱穴から出土した石器には石鏃18点、石錐5点、スクレイパー4点、楔形石器12点、敲石2点などがある。特にP4から多く、比較的多くのメノウ片も出土した。またP14からは楔形石器S49のほか、石鏃1点、楔形石器3点が出上している。S49は板状の素材剥片の形状をとどめている。P31上面の76・77・79は床面出土として第212図に掲載した。

埋土中の出土遺物の取り上げは、可能な限り混入を排除すること、また原位置を確認することに努めた。また、県立大学建設に伴い発掘調査された南溝子遺跡では玉作りに関連する遺物が出上していることから、ここでも同様に玉作りが行われた可能性を念頭に置き調査にあたった。そこでまず土層観察用に十字に土手を設定し、炭化材・焼土検出面までを上層として取り上げた。この段階で炭化材・焼土の上出状況を記録している。その後、炭化材検出面以下を下層、さらに床に接している土器を床面として取り上げた。下層以下については50cm単位のグリッドを設定(第211図、写真17)し、各区毎に床面までの土を採集し、土壌水洗による遺物収集を行った。床面の遺物については別個平面図に座標値と標高を記録しながら取り上げ、廃棄時の状況を捉えられるよう努めた。第206図は炭化材・焼土検出面で記録した図と床面での検出状況を合成して作図したものである。また掘り進めていく過程で完形もしくは大形の遺物が出上った場合は、トータルステーションを用いて座標を記録しながら

取り上げており、第206図の断面図に垂直分布をドットで示している。第212図に床面出土器を、第213図上段に下層出土器、下段に上層出土器を、第214～215図には上製品と石製品を掲載している。



写真17 作業風景 (南西から)

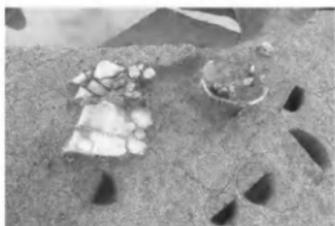
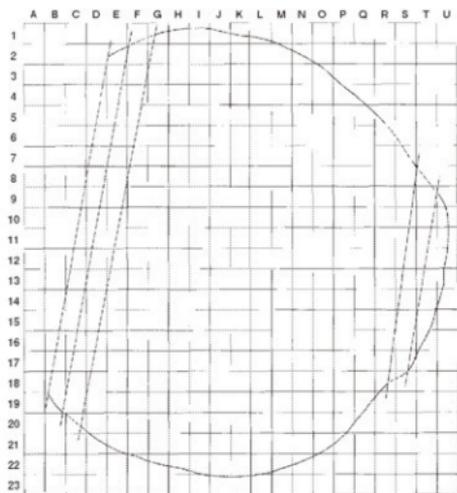


写真18 土器80・84出土状況 (南から)



第211図 竅穴住居3 グリッド設定図 (1/120)

石器のうちS70・76・98・107～110は床面出土である。管玉S52、赤彩文のあるS53は下層の土壌水洗により採集した。扁平片刃石斧S106は第1層から出土しており、混入の可能性は否定しきれない。用途不明棒状土製品C1は上層、円板形土製品C2は下層から出土した。

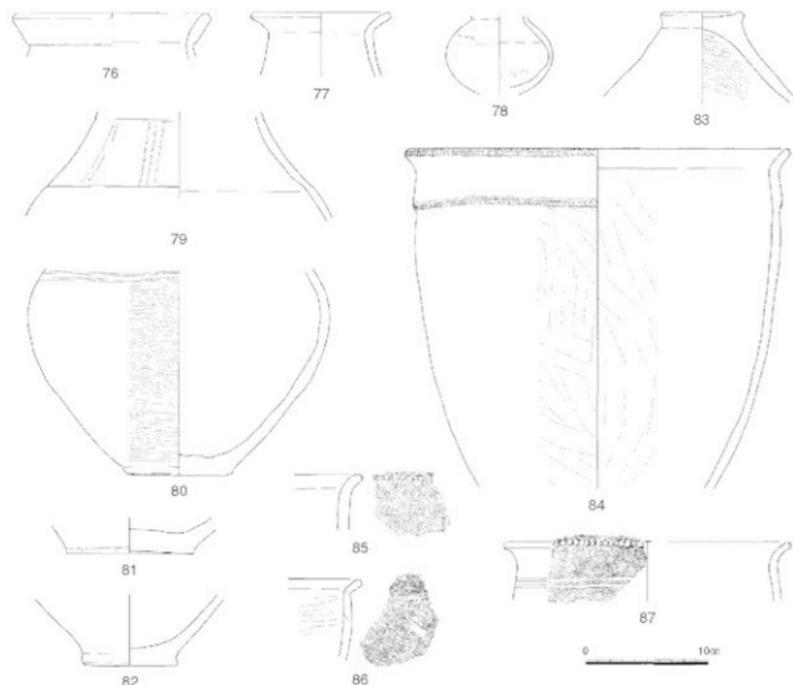
土器はテンバコにして約5箱あるが、ほとんどが細片で図化しうるものは少ない。そのうち壺80・甕84は、床面に土層で潰れた状態で出土している(写真18)。甕84の口縁部は緩やかな如意状に開き、段に刻目を施すなど古い様相をとどめる。上層からも最古段階に位置付けられる甕が出土したが、沈線をもつ甕127・128も出土しており、中央穴や床面出土遺物と比較して、新しい様相の土器を含む。

柱穴出土を除いた石器のうち、石鏃271点、石鏃71点、楔形石器82点、スクレイパー9点、扁平片刃石斧1点、台石3点、磨製石斧2点などが出土している。

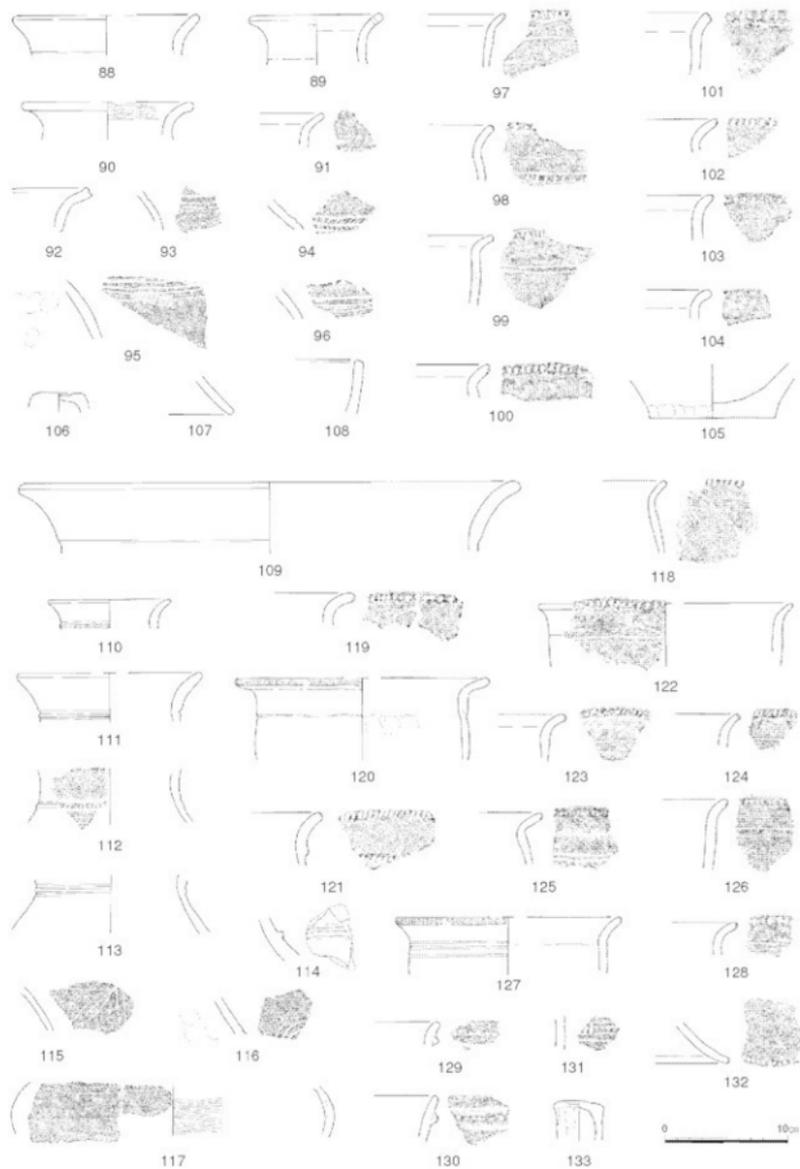
サヌカイトのチップ・フレイクや石器素材となりうる剥片は大量に出土し、サヌカイトの総重量は約9.8kgを計る。石器の詳細については第6章第3節に譲るが、幾つか特殊な石器についてここで触れておく。S53は石英安山岩の自然礫を利用したもので、穿孔がある。おそらく、石材含有鉱物が自然に欠落して小さな空洞ができ、その部分を人為的に広げたものと考えられる。穿孔部を中心に赤色顔料を塗布して文様を施しているが、表面全体にも顔料が飛散している。顔料の成分についてはベンガラとの鑑定結果を

得ている（付載6参照）。穿孔内面上部には擦痕が認められることから、紐孔と考えられる。S105は砧化木製で、両側縁に敲打による抉りが見られる。何らかの基部を成形しようとしていた可能性がある。玉作り関連として、玉の穿孔道具であるメノウ製の錐やメノウのチップ、玉の素材となりうる軟質石材の剥片も出土している。ただし、この軟質石材の剥片の形状は、南溝手遺跡出土の緑色凝灰岩剥片のような板状の剥片は認められない。また材質は粘板岩と同定されており、当住居から出土した管玉とは直接的に結びつかない。一方、メノウ製の錐には、南溝手遺跡同様の針状や米粒状を呈するものがあり、回転痕を有するものもあった。実測図は図示していないが、写真や顕微鏡写真を掲載した（図版47）。玉の研磨に使われる筋砥石などの道具類は確認できなかったが、メノウ片には錐を作る際に発生する剥片が含まれることからメノウ製の錐を作っていたことは明確で、堅穴住居内で玉作りを行っていた蓋然性は高いと考えられる。

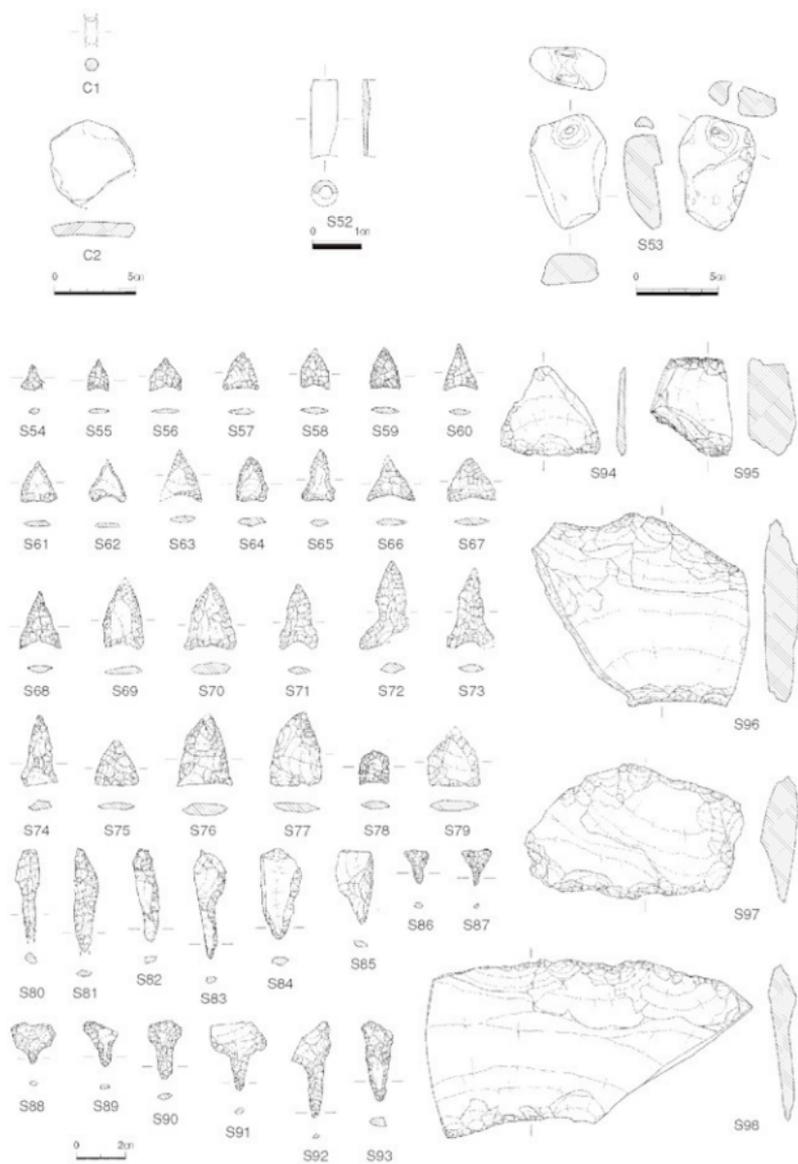
なおP36の炭化材と中央穴出土の炭化材についてはAMSによる実年代測定を試みた。分析方法や2000年問題、分析機器による誤差を憂慮して2社に分析を委託した。分析資料はほぼ同一箇所から採取している。詳細は付載4・5に譲るが、P36の炭化材については、1社から $2,560 \pm 30$ 年、他社から $2,390 \pm 25$ 年という測定結果を得ている。（渡邊）



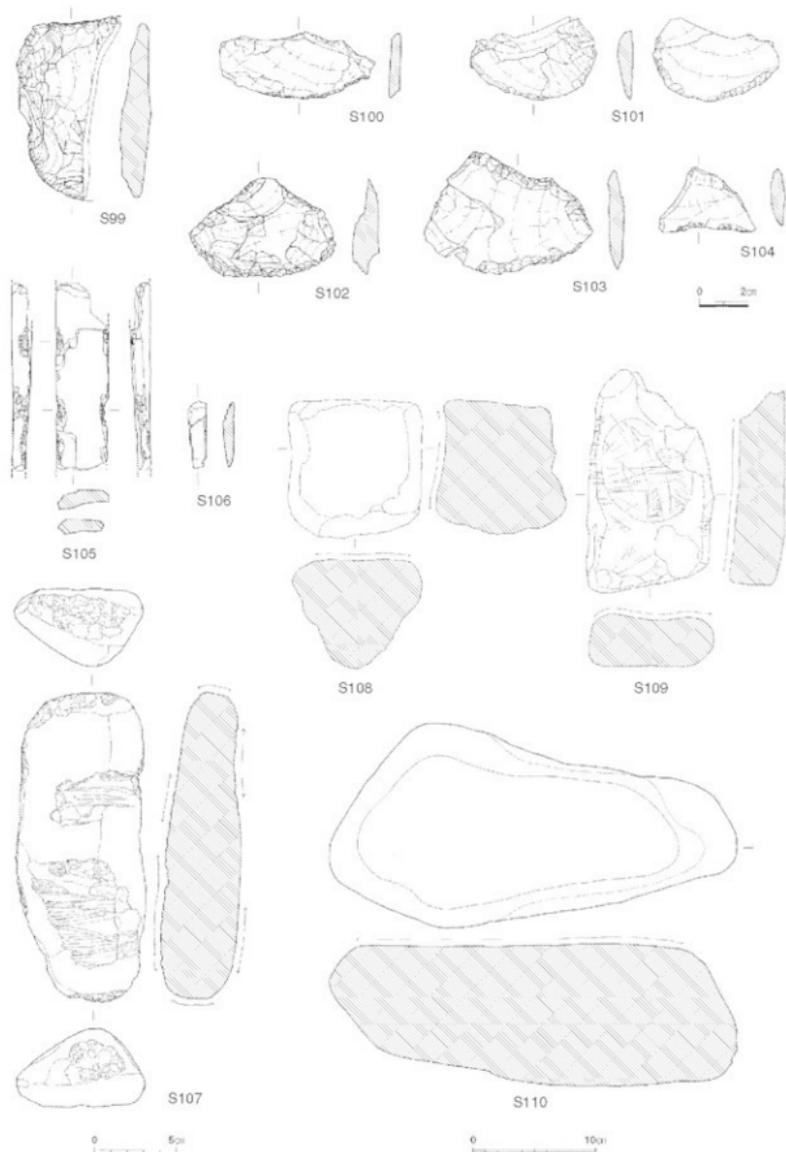
第212図 堅穴住居3 出土遺物④ (1/4)



第213図 竪穴住居3出土遺物⑤(1/4)



第214図 竪穴住居3出土遺物⑥ (1/3・1/1・1/3・1/2)



第215圖 竪穴住居3出土遺物⑦ (1/2・1/3・1/4)

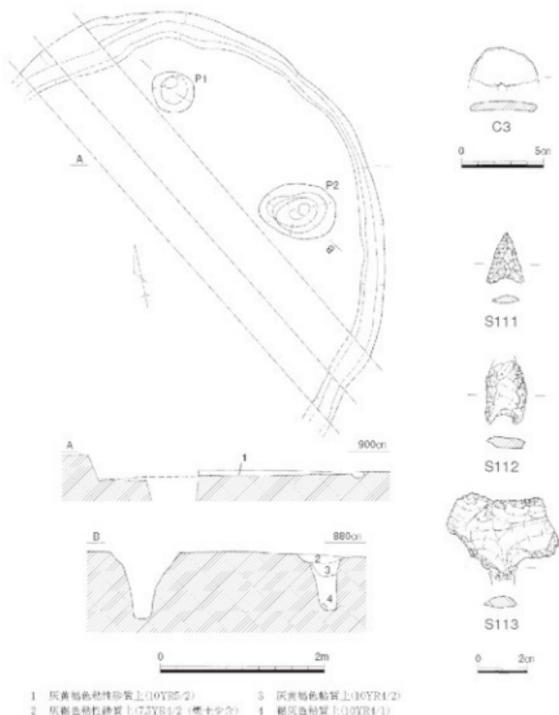
#### 竪穴住居 4 (第197・216図、図版25)

14M中央で、西側約1/2が調査区外となる。径5.7mの円形と想定される。竪穴住居3の南端に一部重複しており、本竪穴住居床面において、竪穴住居3の輪郭が視認できた。床面はほぼ平らで、標高は8.7mを測る。竪穴住居1～3と比較して20～30cm高く、検出面から非常に浅い。そのため、当初は主柱穴となるP2を独立した土坑と誤認していた。P1は径50cmの円形で、深さ67cm、P2は92×66cmの楕円形で、深さ80cmと深い。また壁沿いには幅35cm、深さ5cmの壁体溝がめぐる。被熱面や中央穴は確認できなかった。

出土遺物には図示した土製紡錘車C3、石鎌S111・112、石錐S113の他に土器細片がある。櫛描き文を施した壺や口縁端部の拡張の少ない甕の細片があり、中期前半に位置付けられる。(渡邉)

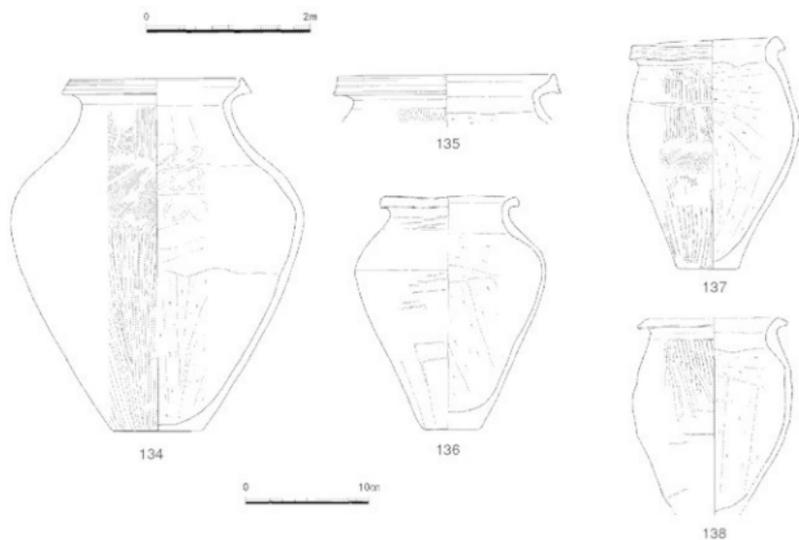
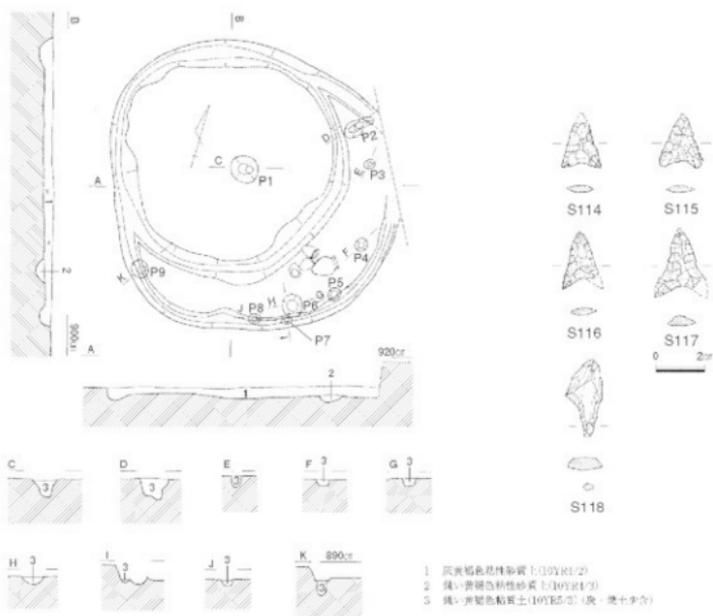
#### 竪穴住居 5 (第197・217図、図版26)

14・16Mに位置する平面形が円形を呈する竪穴住居。幅20～30cm、深さ5cm程度の壁体溝が二重に巡ることから、直径約2.8mから直径3.52mへと一度建て替えが行われたと考えられる。なお建て替えに伴う新たな床面の成形などは認められなかった。住居内にはP1～9までの柱穴を確認したが、P1以外はいずれも規模が小さく積極的に主柱穴とする理由がない。P1は直径約30cm、深さ20cmを測り、初期住居のほぼ中心に位置するため、それに伴う主柱穴と思われる。また建て替え後の住居に対しては中心からやや北西にずれているものの、他に柱穴が見あたらないため建て替え後も引き続き同じ位置に柱が立っていたと考えたい。遺物は土器134～138や石鎌S114～117・石錐S118がある。134・136～138は建て替え後の住居南東隅からまともに出土した。特に136～138はいずれも形や作り方が酷似しており、当時この地域で一般的に使用されていた甕形土器に比べると稚拙な印象を受け



1 灰青釉色粘土印管上(10YR5/2) 2 灰青釉色粘土印管上(10YR4/2)  
3 灰青釉色粘土印管上(7.5YR5/2) (横寸五分) 4 靑灰釉色粘土印管上(10YR4/1)

第216図 竪穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/2)



第217圖 豎穴住居 5 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

る。土器の諸特徴から弥生時代後期初頭には廃絶したものと考えられ、住居の規模や簡易的な上層構造を予測させる点などから、副次的な建物であった可能性を指摘しておきたい。(松尾)

#### 竪穴住居6 (第197・218・219図、写真19)

160中央やや東寄りで検出した竪穴住居で、後述する竪穴住居7と溝4により南西側が削平を受け

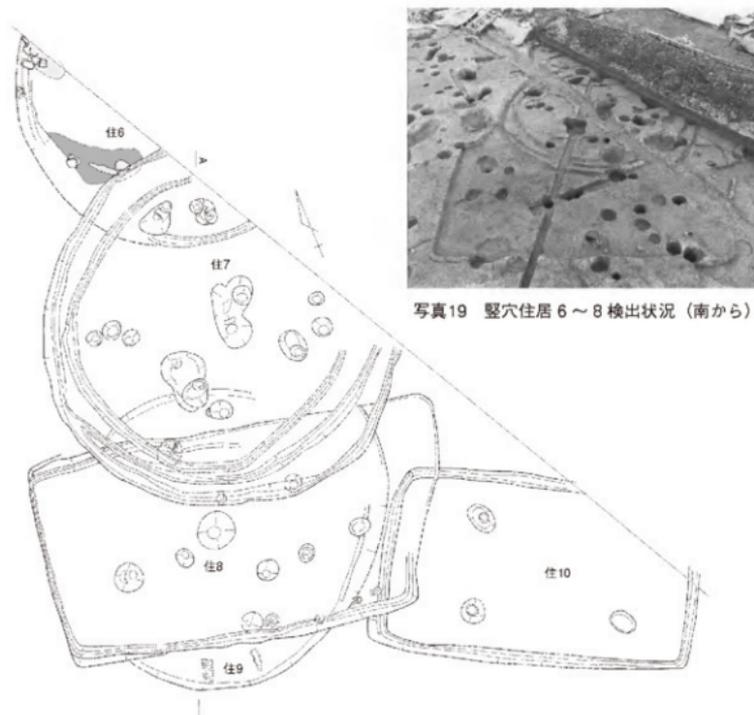
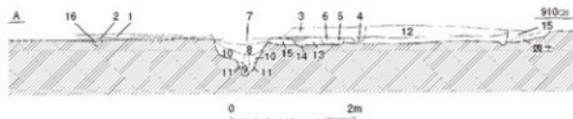
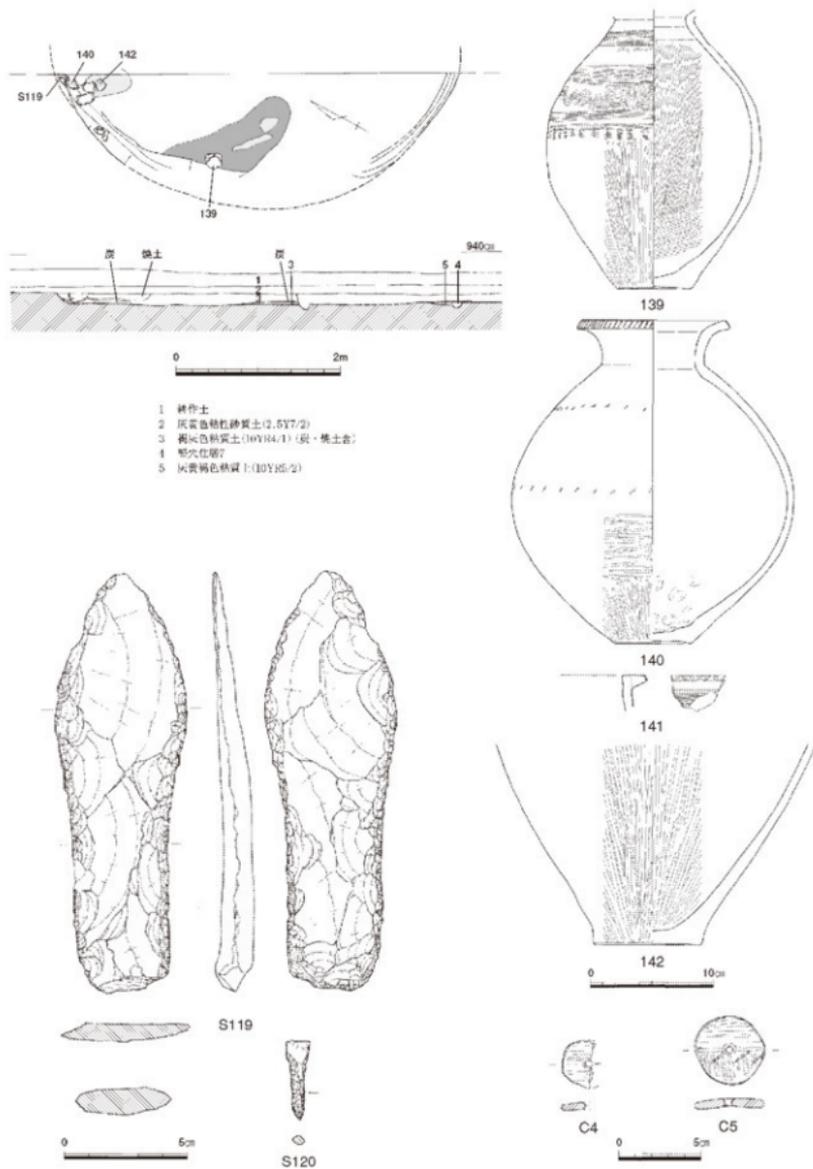


写真19 竪穴住居6～8検出状況(南から)



- |                          |                               |                    |
|--------------------------|-------------------------------|--------------------|
| 1 灰青色粘質土(10YR5/2)        | 7 灰褐色粘質土(7.5YR5/2)(炭・焼土含)     | 15 黄褐色粘質土(10YR5/3) |
| 2 灰青色粘質土(10YR6/2)        | 8 灰青色粘質土(10YR5/2)(炭・焼土含)      | 14 黄褐色粘質土(10YR5/3) |
| 3 黄・黄褐色粘質土(10YR6/5)(焼土含) | 9 黄褐色粘質土(10YR4/1)(炭多含)        | 15 黄褐色粘質土(10YR5/4) |
| 4 黄褐色粘質土(10YR5/1)        | 10 黄褐色粘質土(7.5YR5/1)(蒸籠跡・土塊多含) | 16 黄褐色粘質土(10YR5/3) |
| 5 黄褐色粘質土(10YR5/1)        | 11 黄褐色粘質土(10YR5/1)(蒸籠跡・土塊多含)  |                    |
| 6 黄褐色粘質土(10YR5/1)        | 12 灰褐色粘質土(7.5YR5/2)           |                    |

第218図 竪穴住居6～10(1/80)



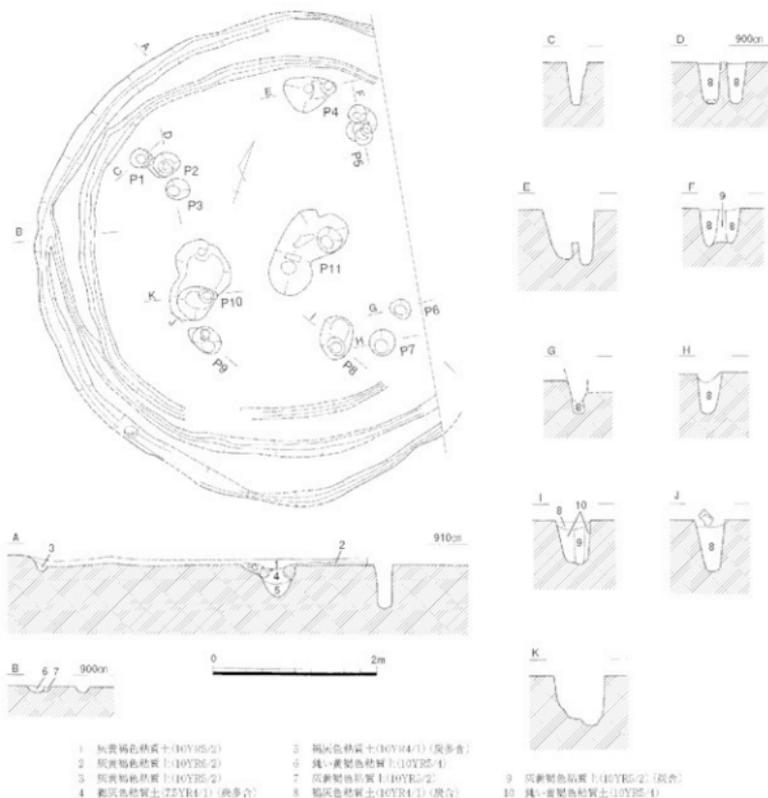
第219圖 堅穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

しており、東側約3分の2が調査区外へと延びている。そのため全体を伺い知ることは難しく、また支柱穴の確認もできていない。平面形は直径約49mを測る円形を呈すると推測され、周囲には幅10～30cmで深さ10cm程度の壁体溝が巡る。床面の標高は88mで、炭や焼土を含む褐灰色粘質土により埋まっていた。住居西端の床面は著しく被然していて、その上には炭化材が散在している。また調査区東端の住居北西隅では床面上に厚さ4cmの炭が堆積し、その上には土器140・142や石楡状石器S119があったかも1か所に片付けられたようにまとまって出土した。

遺物は土器139～142、土製紡錘車C4・5、楡状石器S119や石錐S120が出土している。遺物の出土状況等から、不要になった木材や土器などを住居内の数カ所にまとめた後に火を放った様子を推測することができる。弥生時代中期前葉に放棄された住居であると思われる。(松尾)

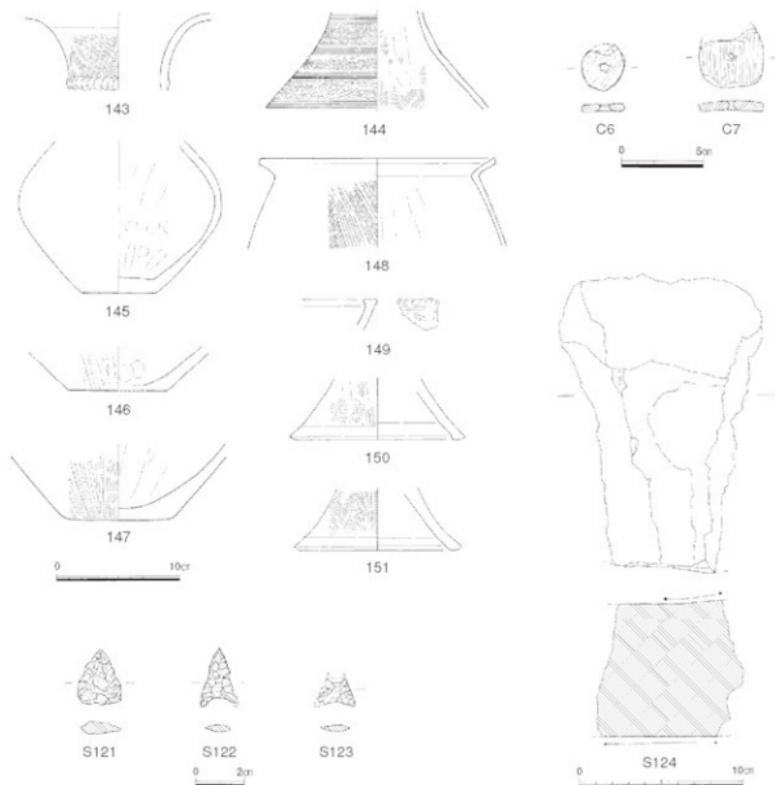
竪穴住居7(第197・218・220・221岡、写真19、図版26)

160中央南東寄りで確認した円形の竪穴住居で、竪穴住居6・8・9を切って検出していることが



第220図 竪穴住居7(1/60)

ら、密集して見つかった5軒の住居のうち最も新しい時期の住居である。平面形は直径6mの円形を呈し、住居周囲には幅10~30cm、深さ20cm程度の壁体溝が三重に巡る。主柱穴はP1~10が該当し、P1~3、P4・5、P6~8、P9・10が4か所にまとまっていることから、4本柱により屋根が支えられている構造で、少なくとも2回の改築が行われたことが分かる。なお壁体溝の断面観察により内側から外側の壁体溝へと、改築の度に住居が拡張していく様子を推察することができた。床面の標高は8.7m付近で、改築に伴う床面の貼り直しなどは認められない。P11は中央穴と考えられ、平面形は長軸1.19m×短軸67cmの不整形を呈し、深さは45cmを測る。埋土には炭や10cm程度の礫を含む。P11は当初からこの様な平面形を呈していたとは考えられず、数回の掘り直しを経た最終的な形であると思われる。遺物は上器143~151、上製紡錘車C6・7、石鏃S121~123、細粒花崗岩製の白石S124がある。143・146はP11、149はP8、150はP5、145は最も外周を巡る壁体溝埋土上面、144・147・148・151は埋土中から出土。弥生時代中期中葉には埋没した住居である。(松尾)

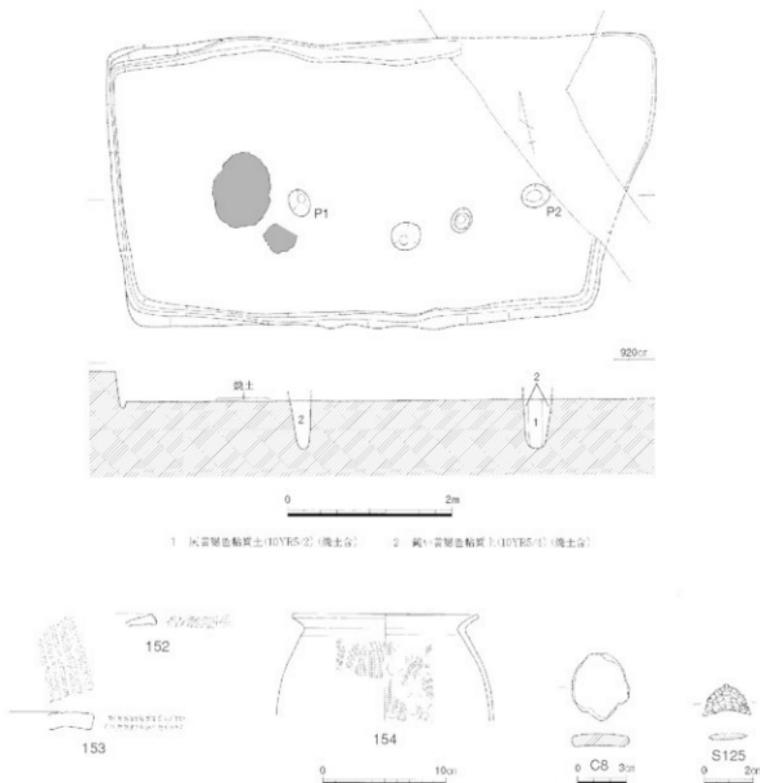


第221図 壁穴住居7出土遺物(1/4・1/2・1/3)

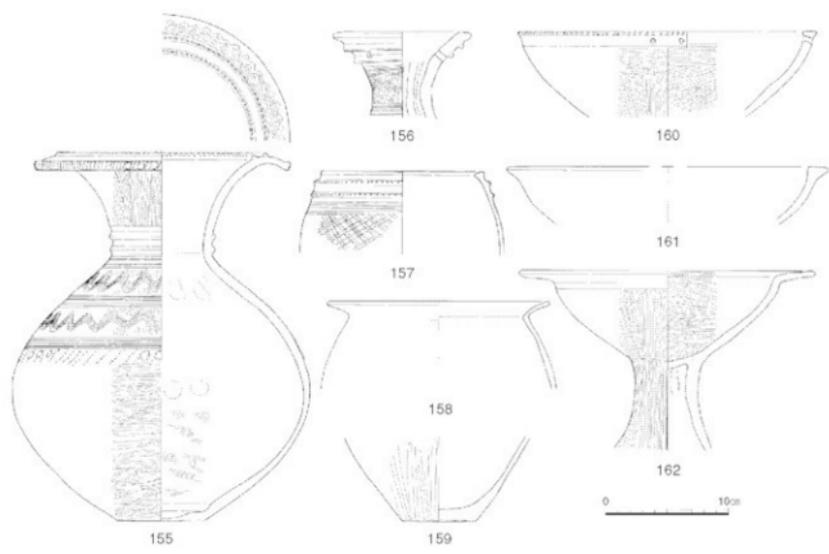
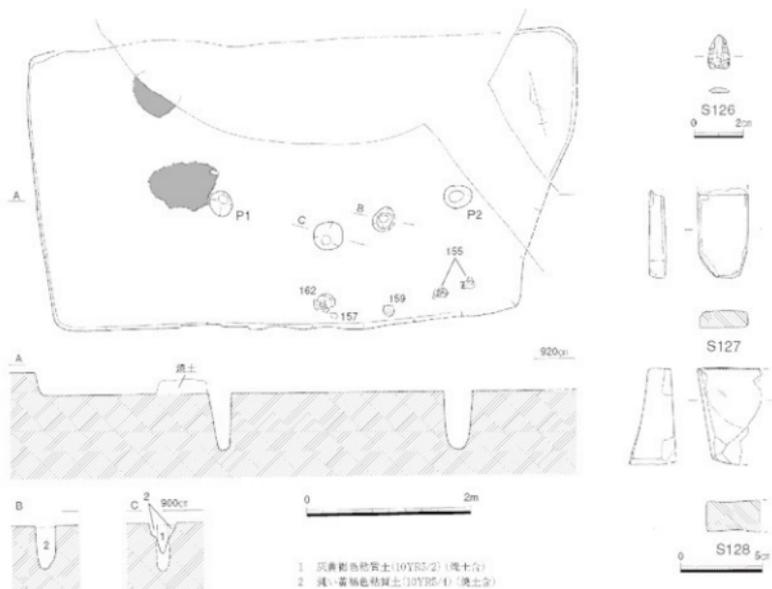
### 竪穴住居 8 (第197・218・222・223図、写真19)

160南端で検出した住居で、竪穴住居7や溝4により北および東側が削平を受け、後述する竪穴住居9・10を切って建てられていることを確認している。なお第218図の断面図第13層下面と第12層下面が床面に相当することから、それぞれを古・新に分けて報告する。

竪穴住居8古は平面形が長軸6.4m×短軸3.48mを測る北東隅が外へ張り出すびつな長方形を呈している。住居の周囲には幅10～30cmで深さ5～10cmの壁体溝が巡るが、北東隅の張り出し部分については確認できなかった。床面の標高は8.72mで、基盤層である黄褐色土を掘り下げて平坦に成形している。支柱穴はP1とP2が相当し、共に平面形が30×21cmの円形で深さは60cmを測る。P1の東側と南西側の2か所に被熱面を確認した。遺物には土器152～154、円板形土製品C8、石鏃S125があり、いずれも床面から出土している。153は壺の口縁部で、端部の平坦面と口縁部内面にヘラ状工具による施文が行われている。



第222図 竪穴住居8古(1/60)・出土遺物(1/4・1/3・1/2)



第223图 竪穴住居 8 新 (1/60) · 出土遺物 (1/2 · 1/3 · 1/4)

竪穴住居8新は平面形が竪穴住居8古と同じであるものの、周囲には壁体溝が見られない。床面の標高は8.82mで、古段階の床面上に10cm程度の鈍い黄褐色土を盛り上げて新たな床面を作っていた。主柱穴は古段階同様P1とP2が相当する。

遺物は土器155~162で、155・157・159・162は住居南東隅の床面上から、156・158・160・161は埋土中からの出土。土器以外では石鏃S126や流紋岩製砥石S127・128がある。土器の特徴から弥生時代中期前葉から中葉にかけての住居であると思われる。(松尾)

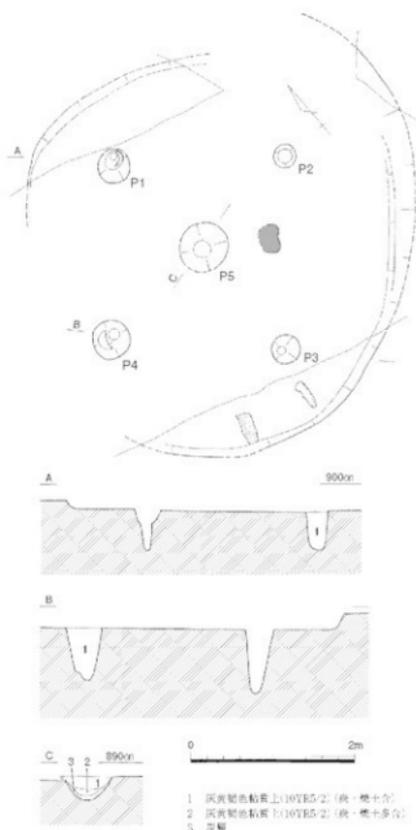
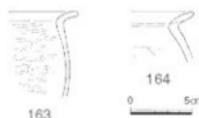
#### 竪穴住居9 (第197・218・224図)

160南端で検出した住居で、床面の大部分が竪穴住居7・8により削平を受けていた。このため住居の北あるいは東については検出ラインを示しており、元々のプランが図示できているのは南西部のみである。現状の平面形は直径約4.8mの円形を呈し、南西部に残る炭化材や、壁面から床面にかけて堆積している焼土の存在から焼失住居であると思われる。床面の標高は8.6m、基盤層である黄褐色土を掘り下げて平坦に成形しているのみで、貼り床などは見られない。主柱穴はP1からP4で、掘り方の直径は26~50cmの円形、深さは50~74cmを測る。P5は中央穴と思われ、平面形が51.3×50.7cmの円形、断面形は楕円形を呈し、深さは32cmを測る。また底面には厚さ4cm程度の炭が堆積していた。P5の東約50cmには長軸34cm×短軸20cmの範囲に被熱面が認められる。出土遺物は163・164の上器のみ。いずれも埋土中からの出土で、甕の口縁部から体部にかけての破片資料である。

土器の特徴や検出状況等から弥生時代中期前葉には埋没した住居であると推察される。(松尾)

#### 竪穴住居10 (第197・218・225図)

160・Qで検出した住居で、竪穴住居8により西側の一部が削平を受け、北東部は調査区外へと延びている。平面形は

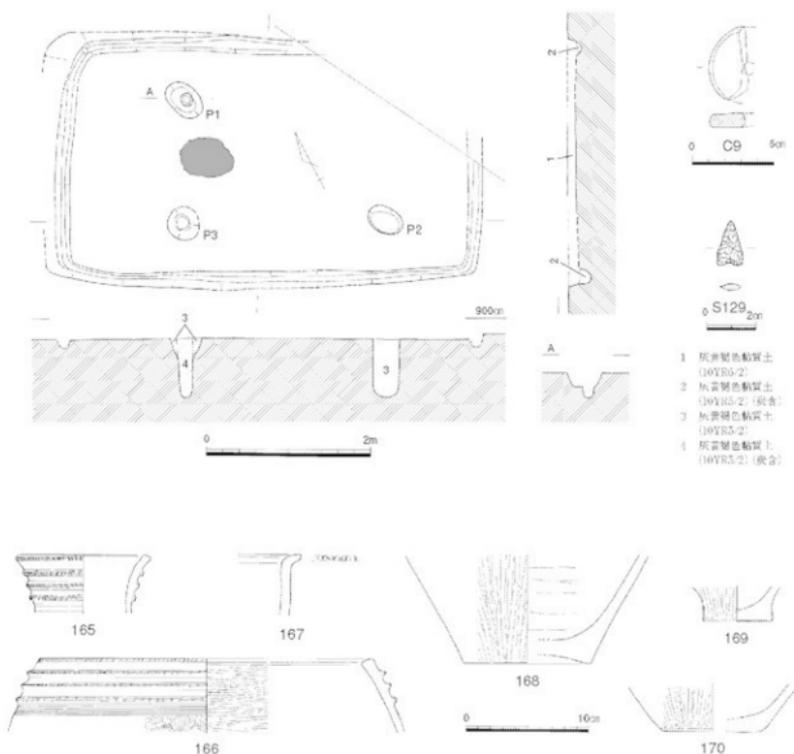


第224図 竪穴住居9 (1/60)・出土遺物 (1/4)

長軸5.4m、短軸3.06mの長方形を呈する。住居の周囲には幅8～20cm、深さ12cmの壁溝が巡る。床面の標高は8.67mで、竪穴住居8古の床面よりも5cm程低い。主柱穴はP1～3を確認している。主柱穴の平面形は30～50cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは30～78cmを測る。本来は4本柱であると思われ、北西隅に関しては数度の精査を試みたが、調査区東辺に沿って掘削している側溝の影響もあり確認には至らなかった。P1の南側では床面が40×30cmの範囲で焼熱した箇所が認められた。

出土遺物には土器165～170、上製紡錘車C9、石鏃S129がある。170のみが壁体溝埋土からの出土である以外は、全て住居埋土中からの出土である。※165や深い椀形を呈する166の特徴から、弥生時代中期中葉古段階には埋没した住居であると思われる。

今回の調査では弥生時代中期前葉から中葉にかけての住居を多く検出したが、総じて平面形が円形を呈する住居よりも方形あるいは長方形を呈する住居の主柱穴を確認するのが困難であった。住居の床面を面的に確認した後に、幾度かの精査を試みた結果検出できた例がほとんどである。(松尾)



第225図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/2・1/4)

## 竪穴住居11（第198・226・227図、図版26）

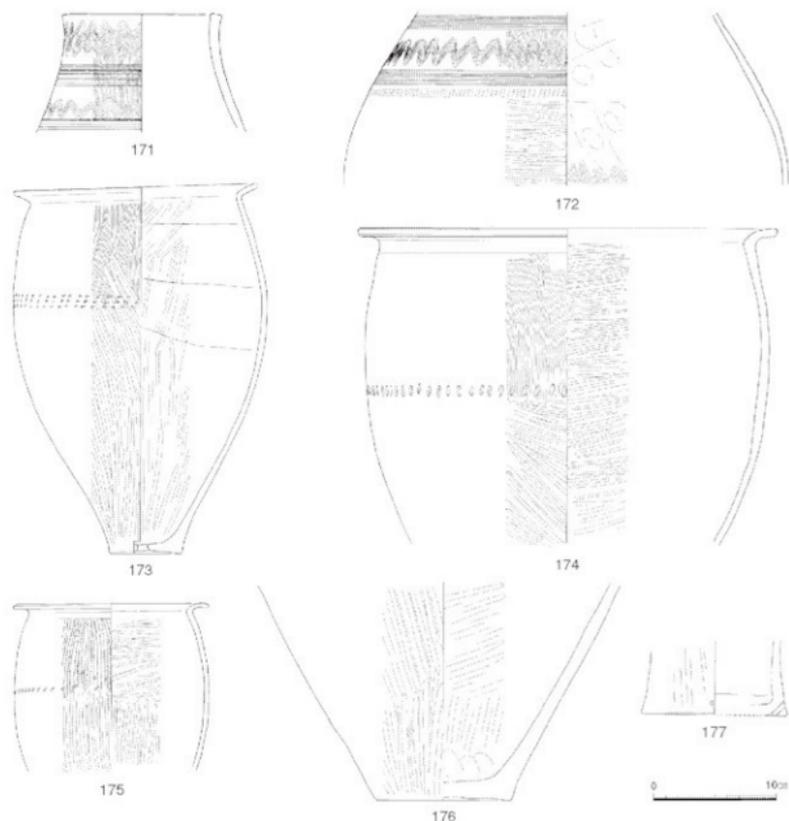
16Q北端で確認した住居で、後述する竪穴住居12により南辺が削平を受け、南西隅は調査区外へと延びていた。平面形は長軸3.66mで短軸の残存長が3.08mを測る東西に長い長方形を呈している。床面の標高は8.68mで、検出面から床面までの深さは20cm程度であった。第226図左上に掲載している図面は遺物の出土状況を示しており、いずれも住居床面より8～10cm程度浮いた状態で確認した。図示している遺物の内、土器171～173・175・176と上製品C10が該当し、甕173は破片が3か所に分かれて分布している様子が分かる。主柱穴はP1とP2の2個で、平面形はP1が直径28cm、P2が直径32cmの円形を呈し、深さは42～50cmを測る。

遺物は土器171～177、上製品C10、石鏃S130がある。171は無頸壺、172も壺の部体でいずれの外



第226図 竪穴住居11 (1/60)・出土遺物① (1/3・1/2)

面にも飾描き沈線による文様が巡っている。また出土地点も同じであることから、同一固体である可能性が高い。上製品C10は下端部が欠けているために本来の形は明らかでない。全体的にヘラミガキ調整が行われ、その後先端の尖った工具による刺突文が施されている。これら遺物の廃棄が行われた弥生時代中期中葉古段階には、竪穴住居としての役割は終わっていたと考えられる。(松尾)



第227図 竪穴住居11出土遺物② (1/4)

竪穴住居12 (第198・228回、写真20、図版27)

16Q北東で竪穴住居11南端を切って検出した。西側一端が調査区外へ延びているが、平面形は長軸5m、短軸3.4mを測る南北に長い長方形を呈する。周囲には幅約20cmで深さ10cm程度の壁体溝が巡る。床面の標高は8.66mで、検出面から床面までの深さは10~15cmを測る。主柱穴はP1とP2の2個があり、P1は平面形が直径54cmの円形で深さは56cm、P2は平面形が直径48cmの不整形形で深さ

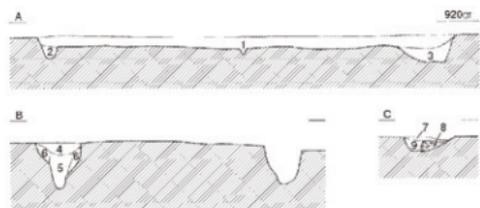
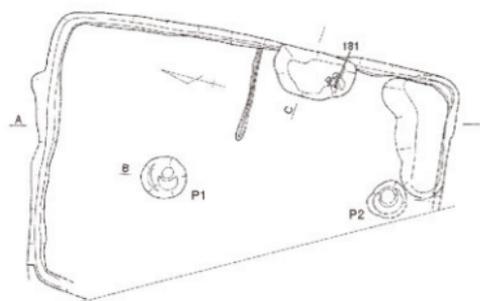
は46cmを測る。住居東辺を巡る壁体溝の中央からは幅6cmで深さ8cm、全長1.12mの細い溝が住居中央に向かって真っ直ぐ延びていた。具体的な機能は明らかでないが、住居内の間仕切りとしての役割を担っていたとも推察される。その溝から20cm南の住居東辺に、平面形が長軸96cm、短軸58cmの不整長方形を早ずる土壌を確認した。この土壌埋土には4~14cmの円礫が含まれており、土壌南壁が立ち上がった所から出土した高杯脚部181の下にも礫が認められた。床面を確認した後に全体を掘り下げた際、住居南東隅で長さ1.5m、幅50~94cm、深さ16cmの溝を検出した。住居と同一方向に掘削されていたため、住居の下部構造と考えたい。

出土土器から弥生時代後期末葉の住居と考えられる。

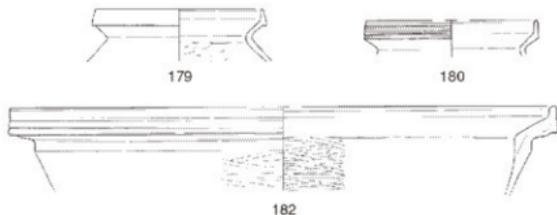
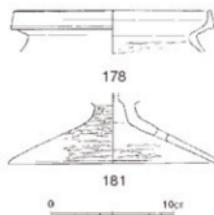
(松尾)



写真20 方形土坑検出状況(南から)



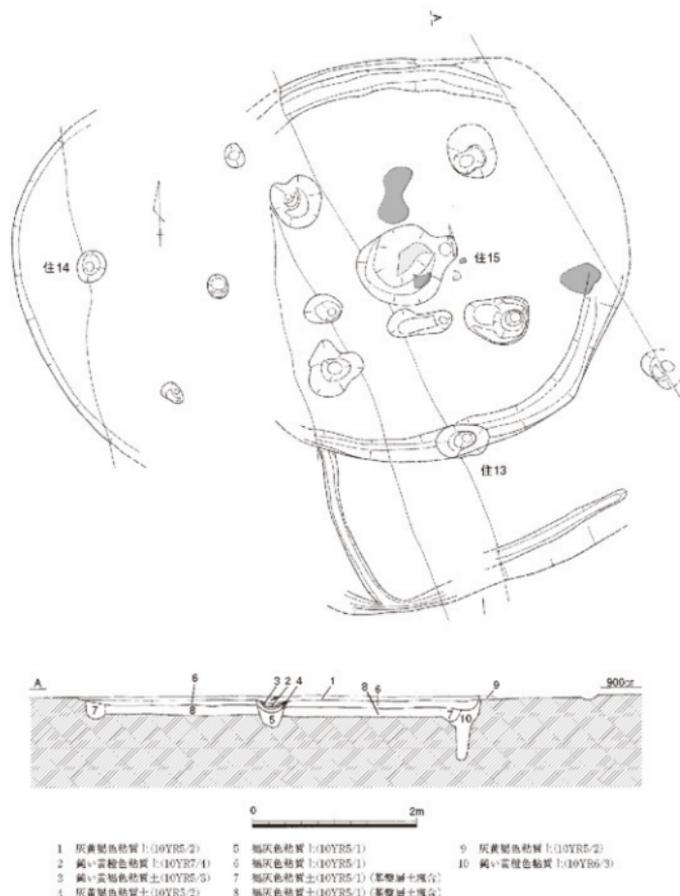
- |                               |                               |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 褐色粘粒砂質土(10YR5/1)            | 6 黄褐色粘粒砂質土(10YR5/4) (土壌層上層多量) |
| 2 灰褐色粘質土(7.5YR5/2)            | 7 暗褐色粘粒砂質土(10YR5/3) (炭・炭土含)   |
| 3 黄褐色粘粒砂質土(10YR5/4)           | 8 灰褐色粘粒砂質土(10YR4/2) (円礫含)     |
| 4 暗褐色粘粒砂質土(10YR5/3)           | 9 暗褐色粘粒砂質土(10YR5/4)           |
| 5 暗褐色粘粒砂質土(10YR5/1) (土壌層上層多量) |                               |



第228図 竪穴住居12 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

## 竪穴住居13 (第198・229・230図、図版27)

18Q南西に位置する。後述する竪穴住居15により北側は削平を受け、北西側は調査区外へと延びている。そのため全体を把握するのは難しいが、平面形は長軸4.6m以上で短軸2.2m以上の東西に長い長方形を呈すると推察される。住居の周囲には幅20cm、深さ5cm程度の壁体溝が巡っていたと思われるが、南辺の東端については調査上の制約もあり、そのまま真っ直ぐに東へ延びているのが判然としない。また南西隅からは北西方向へと延びる別方向の壁体溝を確認しているものの、本住居との関係は明らかにできなかった。床面の標高は8.8mで、竪穴住居14・15よりも若干低い。支柱穴はP1とP2の2個が該当する。P1の平面形は長軸62cm、短軸38cmの楕円形を呈し、深さは44cmを測る。P2は



第229図 竪穴住居13~15 (1/60)

北西側が調査区外へ延びているため詳細は明らかでないが、平面形は幅46cm以上の不整形形で、深さは42cm。P1とP2の柱間距離は2.6mを測る。

出土遺物は無く詳細な時期は不明であるが、竪穴住居15との切り合い関係から弥生時代中期後葉以前としておきたい。(松尾)

#### 竪穴住居14 (第198・229・231図、図版27)

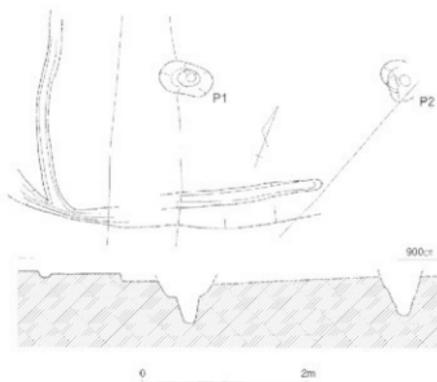
16・18Qに位置し、住居中心部は中世の溝46により削平を受けている。また主柱穴の切り合い関係から、後述する竪穴住居15よりも古い住居であることを確認した。以上の理由から床面が

残存していたのは西側の一部分だけであり、この少ない情報から周囲には壁体溝が巡っていないこと、平面形が直径約4.6mの円形を呈することを推測できる。主柱穴はP1からP4までの4本柱を想定することが可能で、平面形は長軸25・50cmの不整形円形を呈し、深さは40～64cmを測る。P5は平面形が長軸30cmで短軸22cmの楕円形を呈し、深さは26cm。その位置から住居の中央穴に相当すると思われる。

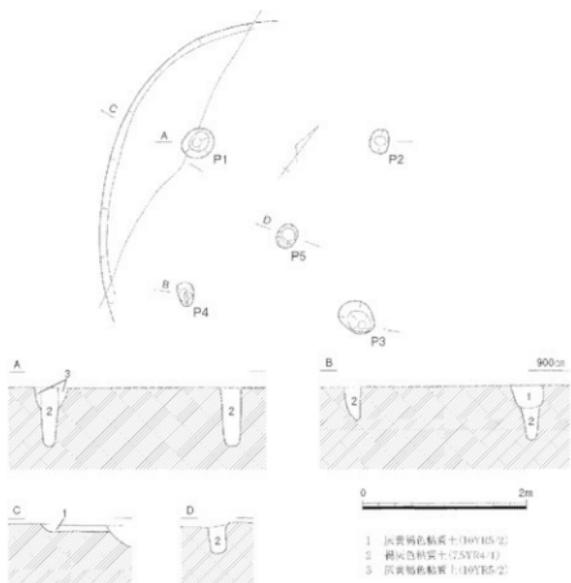
出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。竪穴住居13と同様の理由で弥生時代中期後葉以前としておきたい。(松尾)

#### 竪穴住居15 (第198・229・232図、図版27)

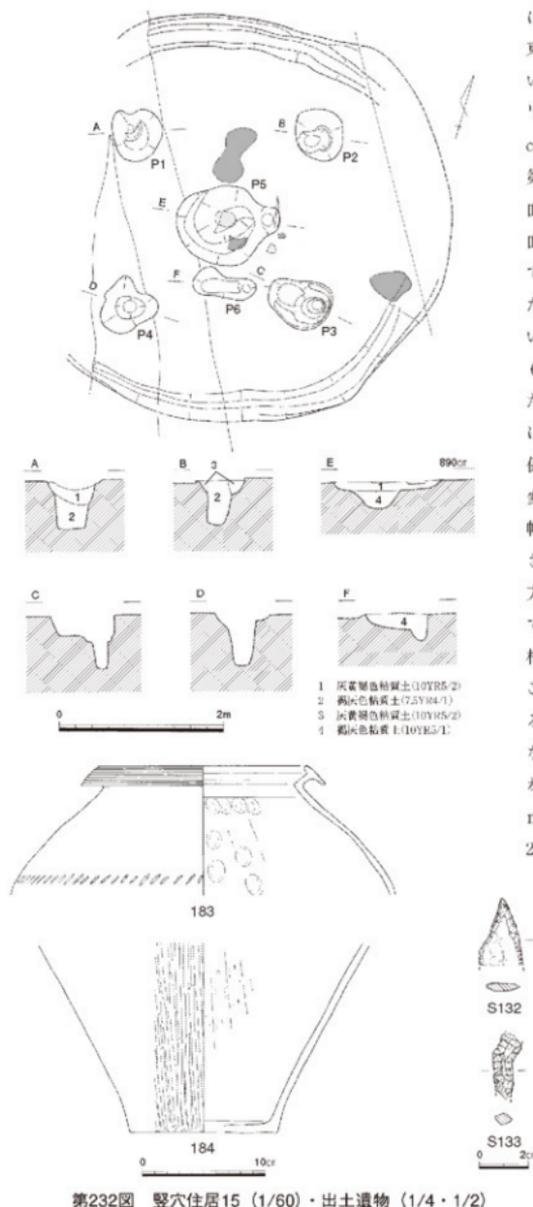
18Q南西に位置し、切り合い関係から竪穴住居13・14より新しい住居であることを確認している。西側の一部



第230図 竪穴住居13 (1/60)



第231図 竪穴住居14 (1/60)



第232図 竪穴住居15 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

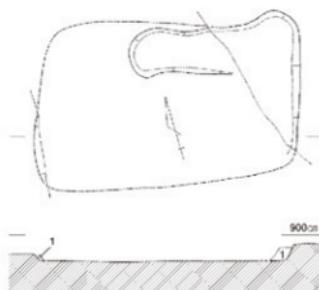
は中世の溝46により削平を受け、東側の一部は調査区外へと延びている。平面形は直径4.9mの円形を呈すると思われ、周囲には幅約30cm、深さ約20cmの壁溝が巡る。第229図の断面図からは第8層下面、第6層下面、第1層下面の3面に床面を想定することが可能で、床面の貼り直しが二度行われたと考えられる。なお第229図あるいは第232図で示した平面図は第6層下面を床面として利用していた際の状況を示している。支柱穴はP1～4の4基で、この位置関係は床面の貼り直しが行われても変わらない。P1～4の平面形は幅60～80cmの不整形形を呈し、深さは約60cmを測る。支柱穴の掘り方平面がこの様にいびつな形をしているのは、床面を貼り直す際に柱の建て直しも同時に行っていることが理由の1つであると思われるが、断面観察では明らかにし得なかった。P5・6は中央穴と思われる。P5の平面形は長軸1.22m×短軸1mの不整形形で、深さは24cmを測る。三面ある床面毎に掘り直して使用しているようで、埋土中には焼土や炭を多く含んでいた。P6は第6層下面を床面としている際に掘り込まれており、平面形は長軸80cm×短軸22cmの長楕円形を呈し、深さは最も深い部分で26cmを測る。

出土遺物は土器183・

184、石器 S 132・133がある。堦183は第1層下面上で P 2埋上上面より、184は P 5埋上中、S 132は P 2埋上中、S 133は住居埋土中よりそれぞれ出土している。弥生時代中期後葉には埋没した住居である。(松尾) 竪穴住居16 (第198・233図)

18Q南西に位置し竪穴住居13南西に近接する。平面の大部分が中世の溝46により大幅な削平を受けているため、東辺から北辺にかけての一部と、西辺一部分の確認にとどまる。平面形は長軸3.2m×推定短軸1.9mの東西に長い不整形長方形、断面形は比較的平坦な底面から斜め上方に立ち上がる壁面を有する。調査当初は土壙という認識で調査を行ったが、規模や平坦な底面をもつことなどから本項に含めた。いわゆる竪穴状遺構と称されるものであろう。弥生時代中期後葉。(松尾) 竪穴住居17 (第198・234・235図)

18S中央南寄りで確認した竪穴住居で、東側は中世溝46により削平を受け、西側は調査区外へと延びてい

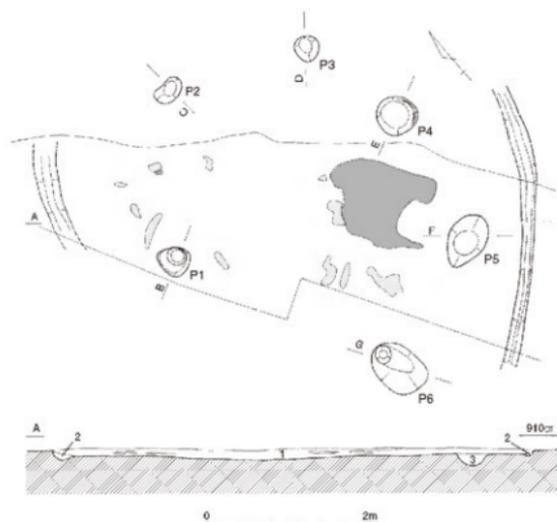


0 2m

1 褐色粘質土(10YR4/1) (赤褐色土層含)



第233図 竪穴住居16(1/60)・出土遺物(1/4)



1 褐色粘質土(10YR4/1) (炭・焼土多含)

2 褐色粘質土(10YR5/3)

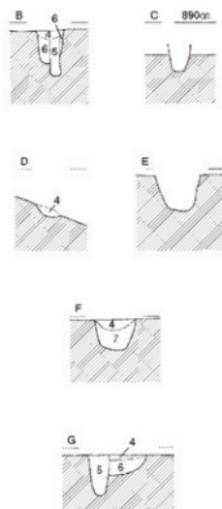
3 灰黄褐色粘質土(10YR3/2)

4 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) (炭・焼土含)

5 黄灰色粘質土(2.5Y4/1)

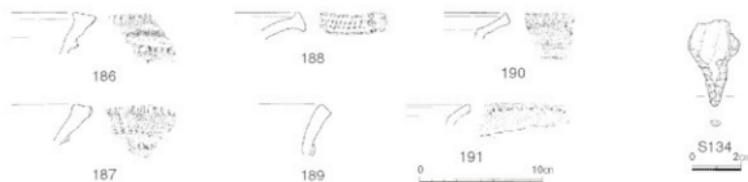
6 黄灰色粘質土(10YR4/1)

7 褐色粘質土(10YR5/1)



第234図 竪穴住居17 (1/60)

る。そのため全体をうかがうことは難しいが、平面形が長軸5.8mの円形を呈すると思われる。周囲には幅14~25cmで深さ5cm程度の壁体溝が巡る。床面上には焼土や炭が散在しているものの、焼失住居とするには量的に少ない感がある。P1~5は主柱穴に比定できる柱穴で、平面形は長軸30~70cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは40~60cmを測る。主柱穴の並びを見ると本来6本柱であったと思われる、若干南にずれた位置で検出したP6をその候補として掲載した。出土遺物は土器186~191、石鏃S134がある。188はP5、191はP1、他の遺物は埋土中からの出土。弥生時代中期後葉の上壊69に切られていることを考慮し、弥生時代中期中葉には埋没した住居と推察する。(松尾)



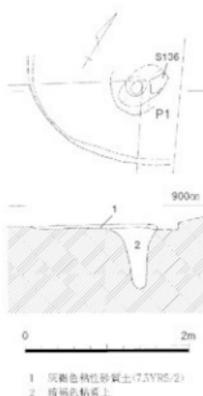
第235図 竪穴住居17出土遺物 (1/4・1/2)

竪穴住居18 (第199・236・237図)

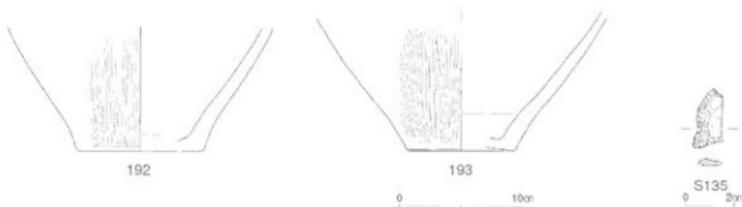
22W南西に位置する。東側の大部分が調査区外となるうえ、北側を溝11に切られているためごく一部しか検出できていないが、円形もしくは隅丸方形を呈する竪穴住居の南西角と考えられる。壁体溝はなく、浅い皿状の断面形である。検出面からの深さは6cm、床面の標高は8.72mを測る。主柱穴と思われる柱穴を1基のみ確認した。70×60cmの楕円形を呈し、深さは70cmである。

出土遺物は少なく、図がし得たものは底部192・193、石鏃S135、台石S136のみである。192・193には被熱が認められる。台石S136は窪んだ面を上にして、ほぼ水平な状態で出土した。

時期を特定できる遺物はないが、包含層より下面で検出されたこと、土器の内面にヘラケズリを施していないことから、弥生時代中期前半まで遡ると考えられる。(波邊)



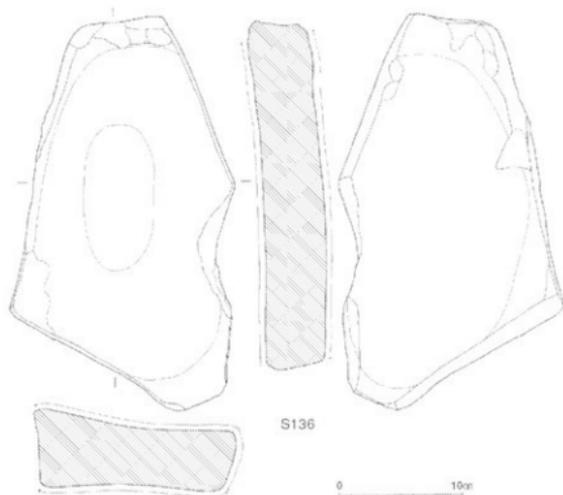
- 1 灰褐色粘土質硬土(7.3YR5/2)
- 2 褐色粘土



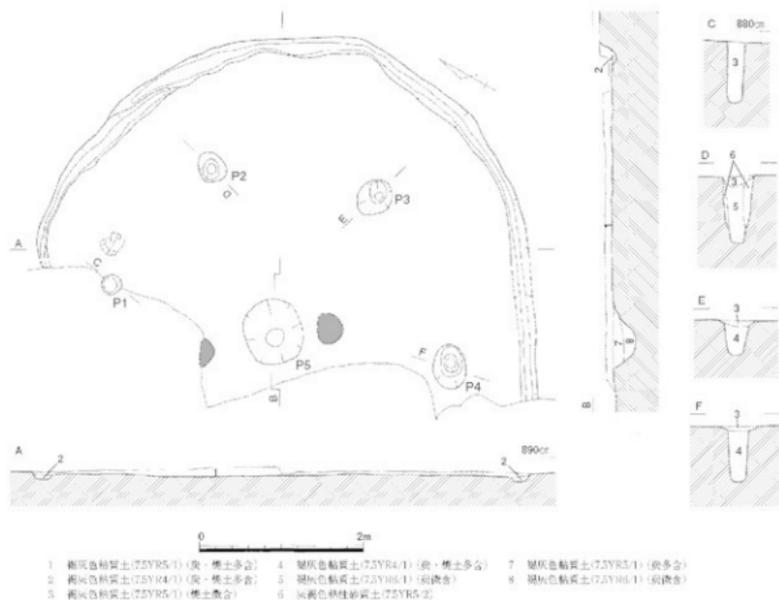
第236図 竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

竪穴住居19 (第199・238～240図、図版27)

22W南西角で、竪穴住居18の南に位置する。西半を近世以降の遺構に削平されている。またP4北側は土壌78に切られる。残存部から径6m前後の円形を呈すると思われる。検出面からの深さ10cm、床面の標高は8.64～8.7mである。埋土に炭・焼土を多く含んでいた。壁沿いに幅20～30cm、深さ5cmの壁体溝が巡る。



第237図 竪穴住居18出土遺物② (1/4)



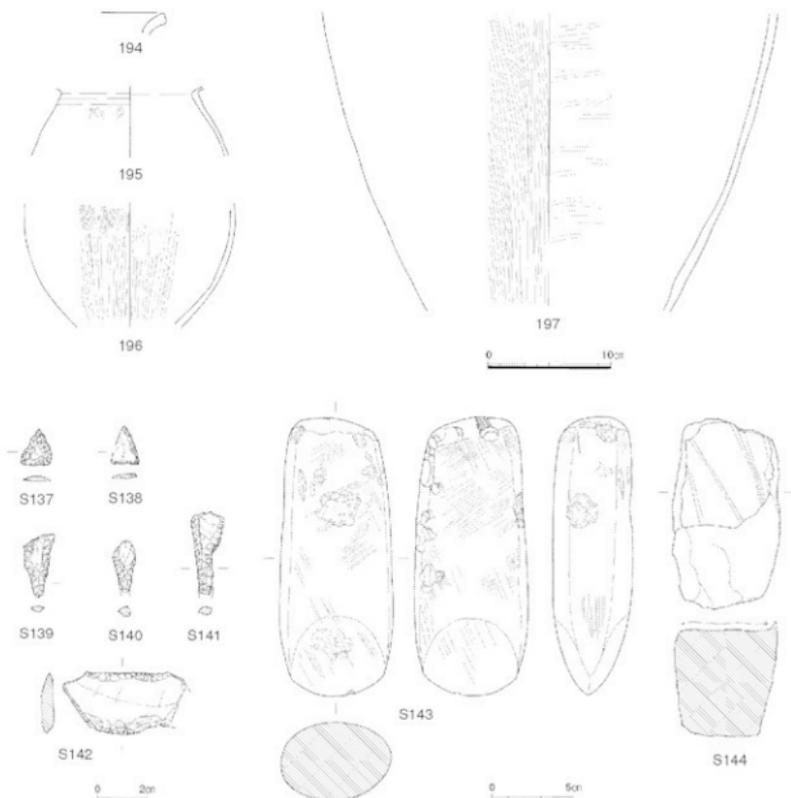
- |                             |                             |                          |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------------|
| 1 黄灰色粘質土(7.2YR5/1) (炭・焼土多量) | 4 黄灰色粘質土(7.2YR4/1) (炭・焼土多量) | 7 黄灰色粘質土(7.2YR3/1) (炭多量) |
| 2 黄灰色粘質土(7.2YR4/1) (炭・焼土多量) | 3 黄灰色粘質土(7.2YR6/1) (炭多量)    | 8 黄灰色粘質土(7.2YR6/1) (炭多量) |
| 5 黄灰色粘質土(7.2YR5/1) (焼土多量)   | 6 黄褐色粘質土(7.2YR5/2)          |                          |

第238図 竪穴住居19 (1/60)

現存する主柱穴P1～4は約2m間隔に整然と配置されており、その間隔を用いると6本柱に復元できる。径25～30cm、深さはP3で45cm、ほかは75cm前後を測る。中央には80×70cm、深さ28cmのP5があり、中央穴とみなされる。P5上層は炭を多く含み、両側には赤く焼け縮まった面があった。

出土遺物のうち甕197はP1東側床面、大型蛤刃石斧S143はP2北側壁体溝内から出土している。ほかは埋土中からの出土である。土器は少なく、細片のみであった。壺194、甕195～197がある。石器は石鏃S137・138、石錐S139～141、スクレイパーS142、大型蛤刃石斧S143、砥石S144などあり、土器と比較して出土量が多く、器種も豊富な感を受ける。出土土器は弥生時代中期中葉の古い様相を示す。調査区東壁断面で本遺構上面が弥生時代包含層に被覆されている状況が確認されており、層序からも矛盾はない。しかし、竪穴住居18と時期差を想定し難いが、両竪穴住居は30cm弱しか離れておらず、併存していたとは考えにくい。

(渡邊)



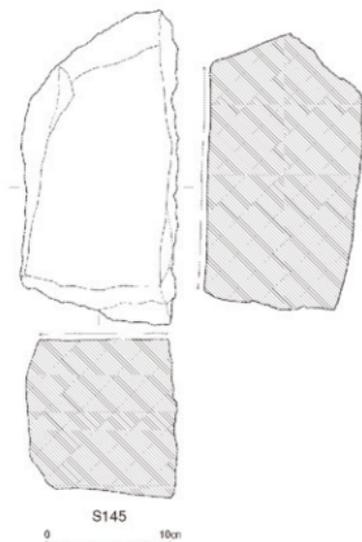
第239図 竪穴住居19出土遺物① (1/4・1/2・1/3)

## 竪穴住居20（第199・211図）

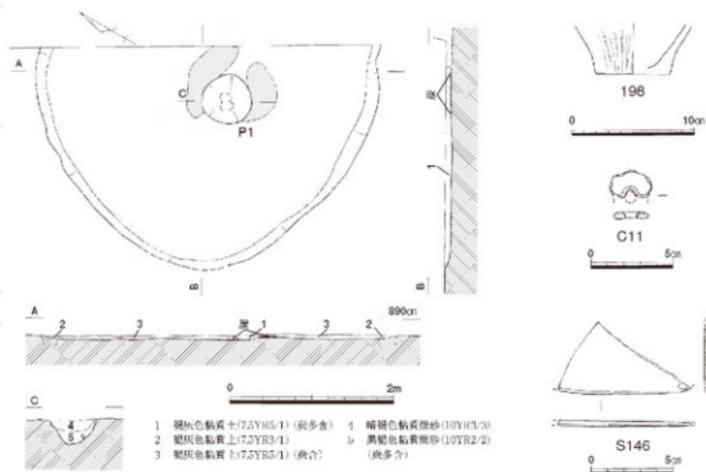
22Y北西で、竪穴住居19の南東に位置する。東半は調査区外となる。残存部から径4.2mの円形に復元される。検出面からの深さは5cmで、床面の標高は8.6~8.65mを測る。壁は皿状に立ち上がり、壁体溝は確認されなかった。P1は径60cm、深さ32cmの土窟で、位置的には中央穴と考えられる。第1層については、竪穴住居埋没の過程で、中央穴上部の窪みに落ち込んだ上と考えておきたい。中央穴下層は炭を多く含み、周辺の床面にも炭が堆積していた。断面形状から、柱穴とは考え難い。ほかに主柱穴は確認できず、無主柱の可能性が高い。

出土遺物には、図示したほか高杯脚部や櫛描き文土器片がある。S146は紅麻片岩製の石鏃であるが、紅麻片岩は県下では産出せず、玉作りの材料や技術と共に他地域からもたらされたものと思われる。

本竪穴住居も包含層より下位で検出されることから、弥生時代中期前半に遡り、竪穴住居19と併存していた可能性もある。（渡邊）



第240図 竪穴住居19出土遺物②（1/4）



第241図 竪穴住居20（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）

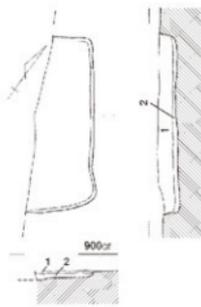
竪穴住居21 (第199・242図)

20Y北東で、竪穴住居19の北西に位置する。弥生時代包含層を切り込み、上部を中世以降の耕作土で削平されている。西側大部分が調査区外となり全容は不明だが、残存部で南北2.15m、深さ24cmを測る方形もしくは長方形の竪穴住居である。床面の標高は874mである。壁は直立気味に立ち上がるが、壁体溝は確認されなかった。また支柱穴も伴っていないことから、おそらく竪穴住居16のような小型の長方形竪穴状遺構に類するものであろう。

時期を示す遺物は出土していないが、包含層との層序関係から弥生時代中期後半と考えられる。(渡邊)

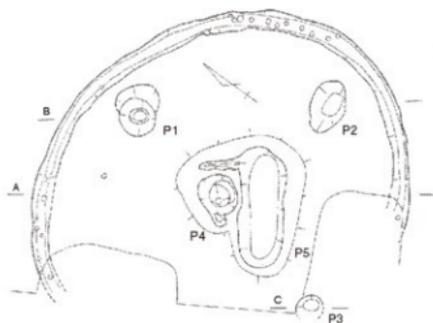
竪穴住居22 (第199・243・244図、写真21・22、図版28)

22Y南東で、竪穴住居20の南に離れて位置する。南側を近世の土壌などに削平されているが、径約4.6mの円形を呈するとみられる。支柱穴はP1～3の3本検出できたが、本来は4本柱であったと考



- 1 褐色粘粒砂質土(10YR4/4)
- 2 鈍い黄褐色粘粒砂質土(10YR4/7)

第242図 竪穴住居21 (1/60)



- 1 褐色粘粒砂質土(7.5YR5/1)
- 2 褐色粘粒砂質土(7.5YR4/1)
- 3 褐色粘粒砂質土(7.5YR4/1)
- 4 灰色砂質土
- 5 灰褐色粘粒砂質土(7.5YR5/2)
- 6 黄色土壌層
- 7 黄色粘粒砂質土

第243図 竪穴住居22 (1/60)



写真21 東側壁体溝内小穴列  
検出状況 (南から)



写真22 P4・5 検出状況 (南西から)

えられる。いずれも径30~40cmの円形で、最も深いP1で深さ62cmを測る。幅20cm、深さ7cm前後の壁体溝が巡る。壁体溝底面の一部で径5cm前後の杭状の小穴を検出した。壁体の構造物材の痕跡の可能性がある。第243図第4層は灰色がかかった均質な粘質土層で貼り床と考えられる。一方、第6層下面は凹凸があり、壁体溝も第6層上面から掘削されていることから、整地層と考えられる。貼り床上面の標高は8.7m、第6層下面の標高は8.63mを測る。中央穴はP4で、東側に長楕円形の土壇P5を伴う。いわゆる1C(いちまる)上層である。P4は径約50cm、深さ32cmの円形。P5は南北1.48m×東西55cm、深さ8cmの長楕円形を呈し、底面の標高は8.6mである。P4・5周囲は2~4cm程度土手状に高くなっている。P4南及びP5北西角からは細く浅い筋状の溝が延びているが、排水溝か間仕切りか判別できない。

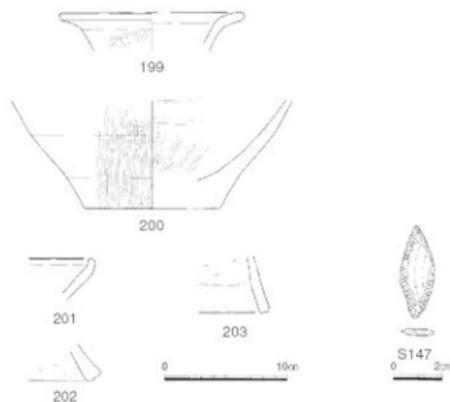
出土した土器は少なく、細片のみである。壺200はP3から出土した。

包含層との関係は確認できていないが、土器にヘラケズリが施されていることから弥生時代中期中葉でも後半に位置付けられよう。(渡邊)

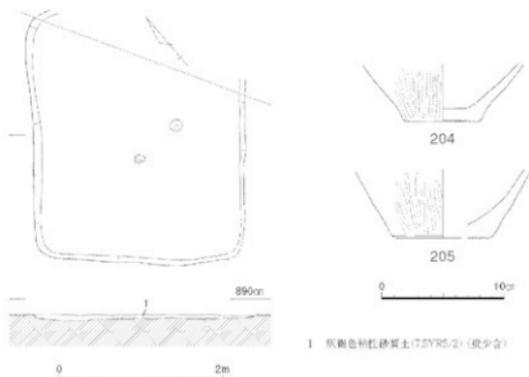
#### 竪穴住居23(第198・245図, 図版28)

24ⅡA南端中央から24ⅡC北端中央に位置する。東側の一部が調査区外となるが、東西2.56m、南北2.9m以上の長方形と想定される。包含層より下位で検出された。検出面からの深さは6cmで、床面の標高は8.62~8.66mである。壁体溝や柱穴は検出できなかった。竪穴住居21同様の小型の長方形竪穴住居遺構と考えられる。

壺204・205が床面よりやや浮いた状態で出土した。図示したほか鎖状突帯片や櫛描き文片が出土しており、中期中葉でも古い段階に位置付けられる。(渡邊)



第244図 竪穴住居22出土遺物(1/4・1/2)

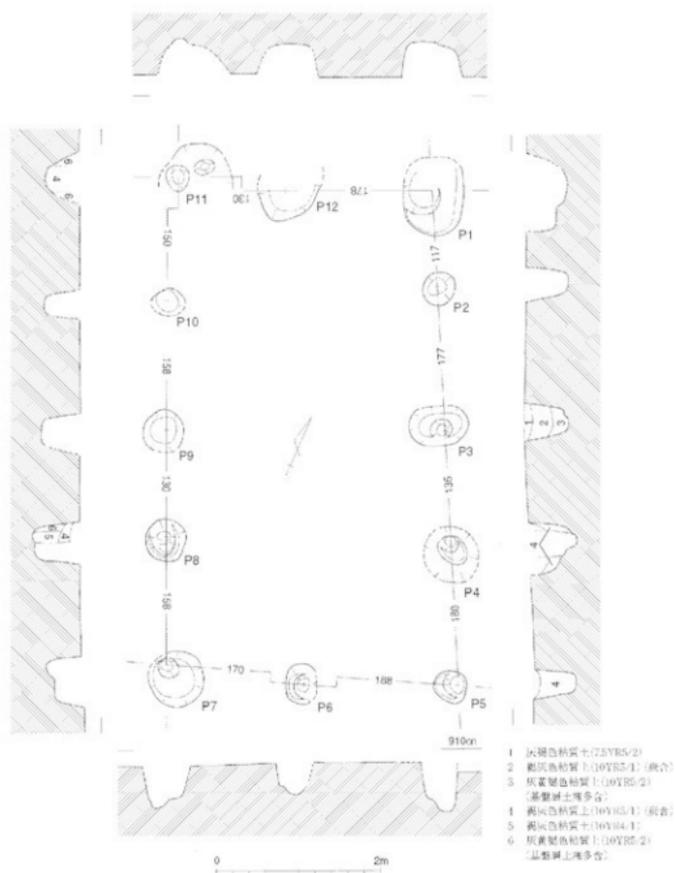


第245図 竪穴住居23(1/60)・出土遺物(1/4)

### 3 掘立柱建物

#### 掘立柱建物1 (第197・246・247図、図版28)

160中央西寄りで確認した桁行4間×梁行2間の掘立柱建物。桁行6.09m×梁行3.5mで、床面積は21.31㎡を測る。棟方向はN-25°-W。柱穴の掘り方は円形あるいは楕円形を呈し、規模も長軸40~70cmと様々である。特に梁行北辺の柱穴については、調査の都合上設定した側溝底面においてかろうじて確認したため、平面形が判然としない。柱穴掘り方の断面形は逆台形を呈しているものが多く、検



第246図 掘立柱建物1 (1/60)

出面からの深さは50~80cm、特記すべき点としては梁行中央に位置する柱穴掘り方の深さが他の柱穴に比べて浅いことである。柱間距離は桁行が1.15~1.8m、梁行が1.3~1.8mを測る。出土遺物には土器206~208があり、206はP12から、208はP7からそれぞれ出土した。

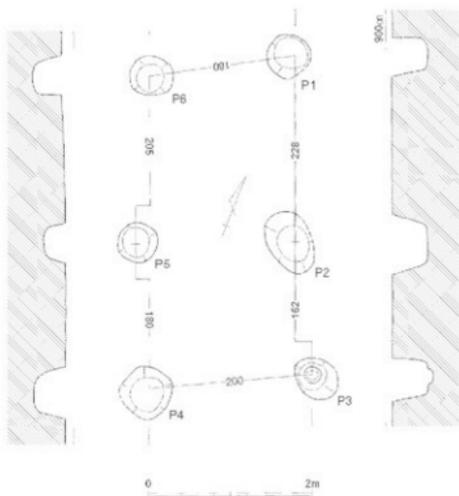
土器の諸特徴や弥生時代後期末の土壌40により上面を削平されていることから、弥生時代中期末の建物であろう。(松尾)



第247図 掘立柱建物1出土遺物(1/4)

#### 掘立柱建物2 (第197・248図、図版28)

16O中央西寄りで確認し、掘立柱建物1の東辺に沿うように位置している。桁行3.9×梁行1.8~2mで床面積7.8㎡を測る、2×1間の建物である。柱間距離は桁行が1.62~2.28m、梁行が1.8~2m。棟方向はN-21°-Wで、掘立柱建物1とほぼ同じ方向を示す。柱穴の掘り方平面は長軸50~80cmの円形あるいは楕円形、断面形は検出面からの深さ20~60cmを測る逆台形を呈する。唯一柱痕を確認できたP3から、柱直径が30cm程度であったことを推測することができる。出土遺物は皆無であるため時期を明らかにすることは難しいが、P2・3が掘立柱建物1のP4・5により削平を受けていることや、P3が弥生時代中期前半の土壌42を切っている点などから、弥生時代中期後葉の建物であると推察される。(松尾)

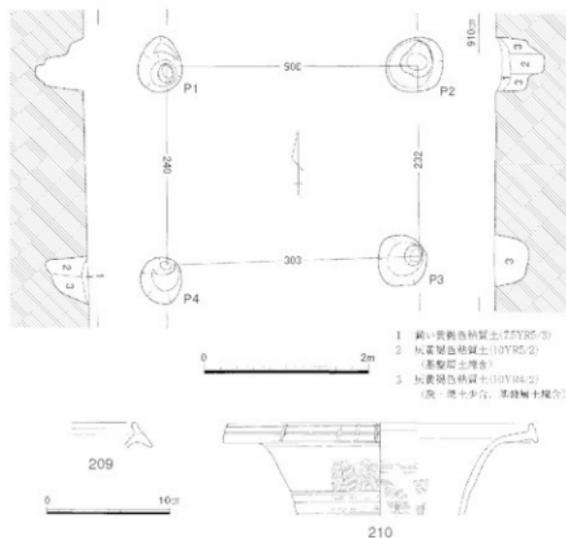


第248図 掘立柱建物2(1/60)

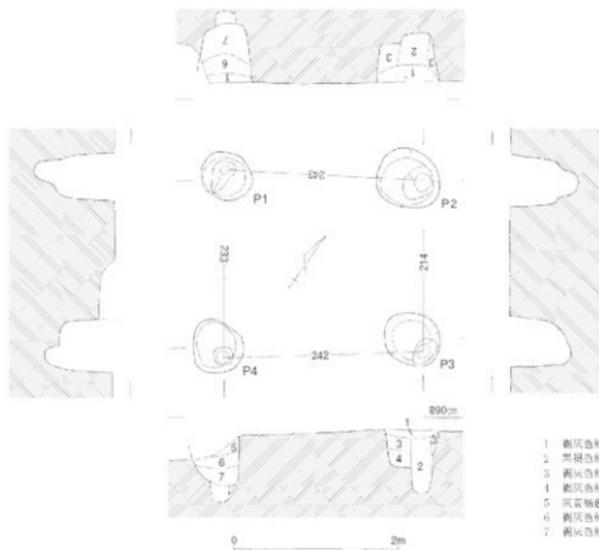
#### 掘立柱建物3 (第198・249図、図版29)

16Q東端に位置し、堅穴住居12の東側に隣接する1×1間の掘立柱建物。規模は桁行3.05m×梁行2.4mを測り、床面積は7.32㎡。柱掘り方の平面形は幅50~70cmの円形あるいは楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは40~60cm程度。柱穴のなかには柱痕の認められるものがあり、そのことから柱の規模は直径20cm程度であったと思われる。

出土遺物には土器209・210がある。209はP3から、210はP4からそれぞれ出土している。209・210共に壺の破片資料であり、210は上下に肥厚した口縁部に凹線と棒状浮文が、頸部にも凹線が巡る。これら柱穴から出土する土器の諸特徴と、近接する土壌59(弥生時代中期中葉)・土壌61(弥生時代中期前葉)・溝7(弥生時代前期後葉)を本遺構が切っているという検出状況から、弥生時代中期末の建物であると推察される。(松尾)



第249図 掘立柱建物3 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第250図 掘立柱建物4 (1/60)

掘立柱建物4 (第190・250図、図版29)

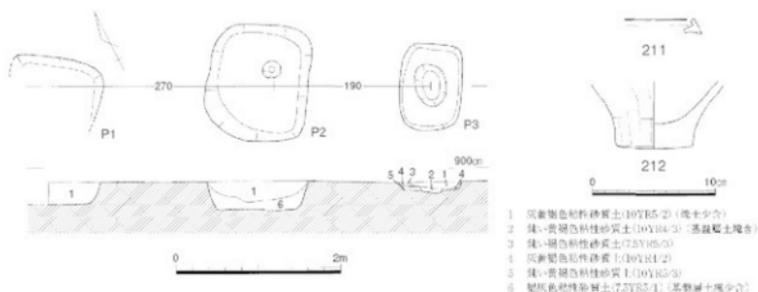
22Y南東で、堅穴住居22の南に位置する1×1間の建物である。平面形は東西にやや長い長方形を呈す。柱穴はいずれも径60cmを超え、掘り方断面も台形の比較的大形である。柱痕も明瞭に遺存しており、柱痕の径は20～40cm、最も深いもので深さ85cmを測る。

出土した土器は細片で、弥生時代中期としかいえない。一方、当建物と同様の規模、平面形を有し、同様の柱穴で構成される建物が県立大学建設に伴い調査された南溝手遺跡で確認されており、このタイプの建物が弥生時代中期後葉～後期前葉に位置付けられている。掘立柱建物3もこのタイプに類し、中期末葉の遺物が出土していることから、当建物の時期もこの範疇におさまるであろう。(波邊)

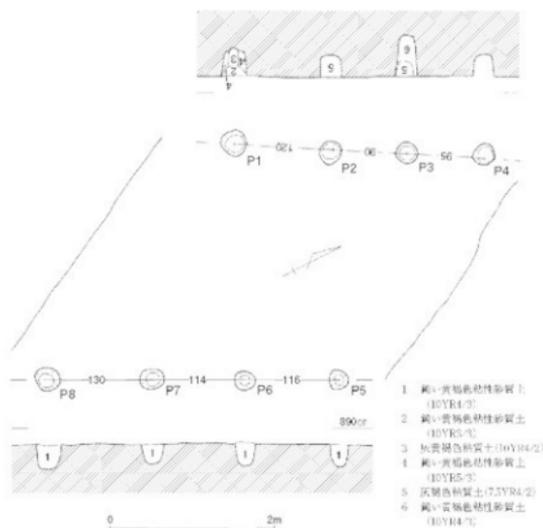
## 掘立柱建物5 (第199・251図)

22ⅡA北端中央で、掘立柱建物4の南西に位置する。検出当初は北東側にある上層85も当建物に含めていたが、主軸方向が一致せず、対応する柱穴も確認できなかったことから分離した。最終的に検出できたのはこの3本のみで、南西に身舎が延びる可能性がある。柱穴はいずれも隅丸長方形で、底面は平らである。P1は残存長1.05m、深さ26cm、P2は1.45×1.2m、深さ35cm、P3は1.06×0.75m、深さ12cmを測る。P2・3では柱痕も確認した。

P2から212が、P3から211が出土しており、弥生時代中期後葉に比定される。(渡邊)



第251図 掘立柱建物5 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第252図 掘立柱建物6 (1/60)

## 掘立柱建物6 (第200・252図、図版29)

22ⅡC北東角から24ⅡC北西にかけて位置する。調査当初はP1～4とP5～8の2つの柱穴列と捉えていたが、主軸がほぼ並行し、柱穴の規模に大差がないことから掘立柱建物とした。南側は調査区外、北側は現代の水路に切られ、全容は不明である。柱穴は径25cm前後の円形で、最も深いP3で深さ50cmを測る。

弥生時代中期前半の土器細片が出土しているが、後述する溝18と主軸が並行することから、同時期の可能性がある。(渡邊)

## 4 井戸

### 井戸1 (第197・253～261図、写真23、図版30)

160北西に位置し、後述する土坑32の南端を切って検出した。平面形は長軸1.27m×短軸1.2mの北端に若干の張り出しを有する不整形形。断面形は漏斗状を呈し、地表面での掘り方長軸が1.27mであるのに対して底面の直径は約70cmと狭く、大人が一人入って作業をすることができる最低限のスペースしか無い。検出面から底面までの深さは1.74mを測り、底面の標高は7.06m。今回調査した弥生時代の井戸では最も掘削深度が深い。

当初は第1～4層埋上からなる上層(平面長軸1.06m、深さ54cm)であると認識して調査を行った。第4層白色粘土上面において土器溜まりを確認・記録(第253図左)し終え、白色粘土の堆積状況を確認するため遺構中央でトレンチを設定し断ち削りを行ったところ、第5層の炭層および土器を含む第6層を確認した。このため井戸である可能性を認識しながら第6・7層の調査を実施したところ、埋土中からおびただしい数の土器が出土し、特に第7層ではその傾向が顕著であった。また第7層下部を掘削中は湧水が認められたため、底面付近から出土したいくつかの完形土器については出土層位を確認しながら直ちに持ち上げざるをえず、出土状況の実測や写真撮影等は行えなかった。

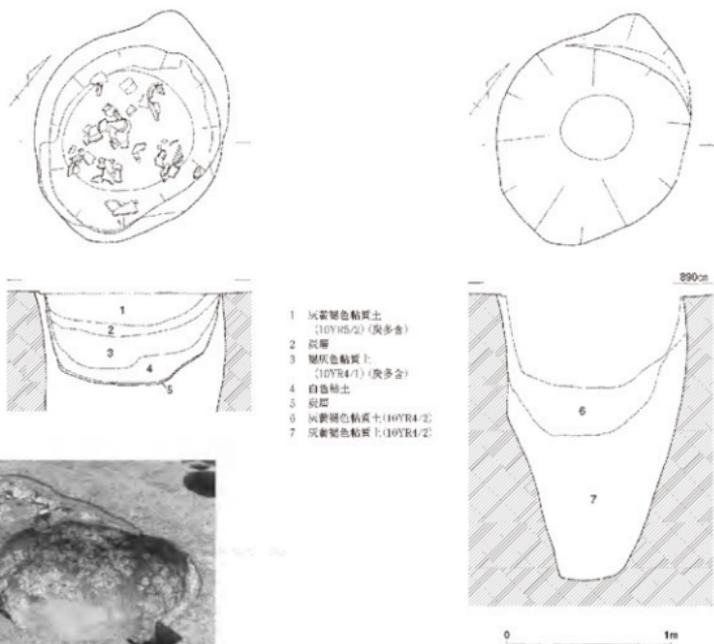


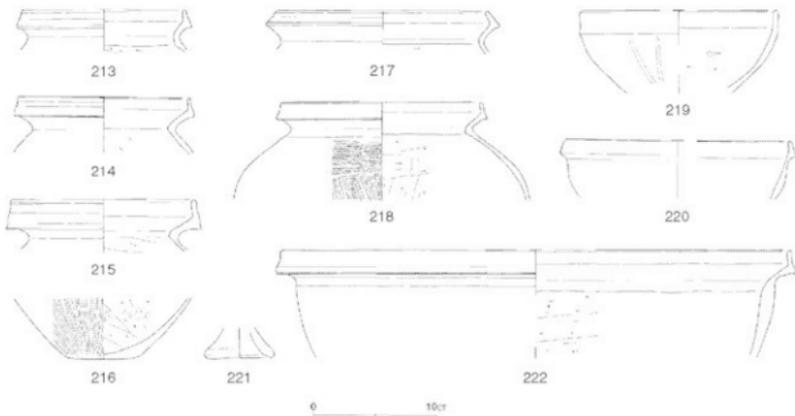
写真23 白色粘土検出状況(西から)

第253図 井戸1 (1/30)

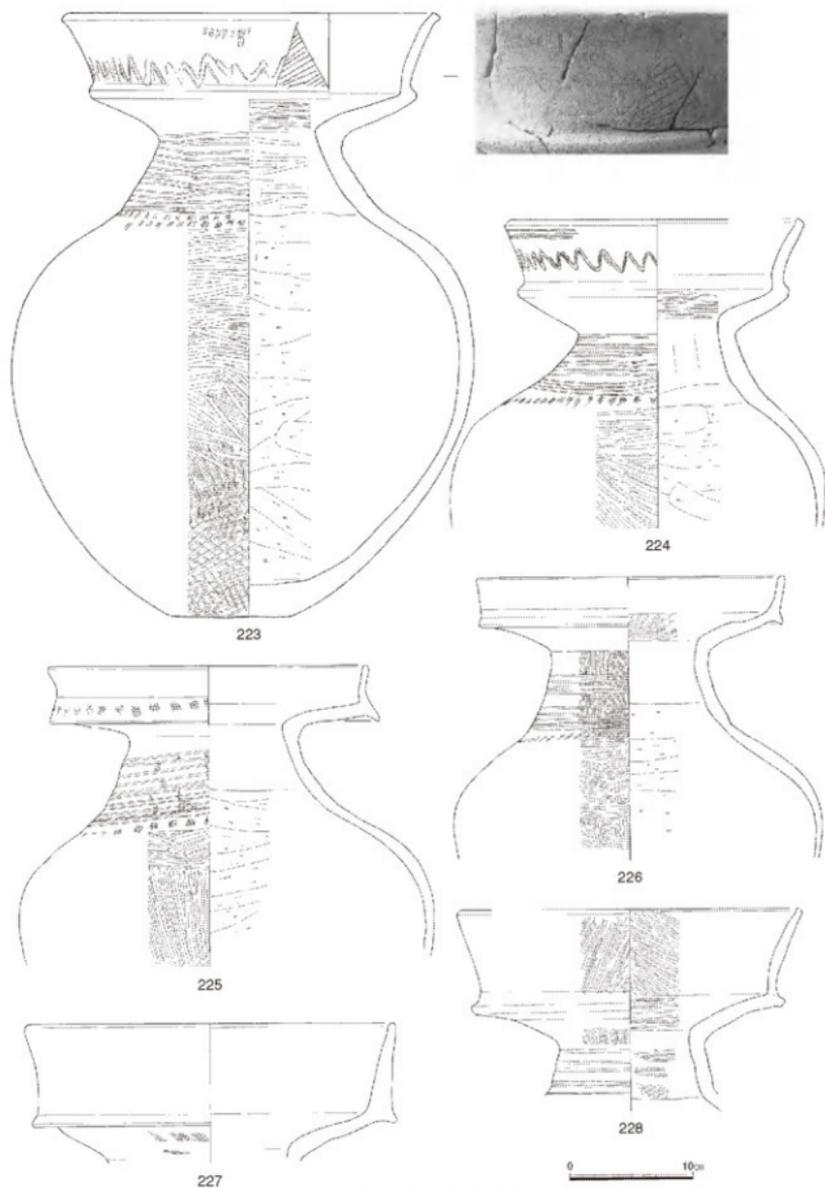
以上の様な状況から井戸の埋設過程を推察すると、井戸としての使用を終えた後に多量の土器（定形・破片）が投棄され、第6・7層埋土と共に埋没。その後第4層白色粘土により底面と壁面を成形し直してから再び土器（破片のみ）を投棄した後程なくして埋没したものであると思われる。なお第6層上面で第4層と井戸壁面間には、土器破片が斜め方向に堆積している状態を確認した。通常の堆積ではなく、第1～4層埋土の重みで第6層が沈んでいる可能性も考えられよう。また第2層及び第5層である炭層は、井戸内への土器投棄と共に井戸埋没過程における一定の規則として存在している可能性を指摘できる。出土遺物の多くは土器であり、第254～261図に掲載している。第254図掲載の土器は第4層である白色粘土層よりも上層から出土し、第253図左にその出土状況を図示した。その他第255図以下には第6・7層より出土した土器を載せている。土器以外の遺物としてカナムグラの種子が45個体認められた。種子は最下層である第7層下面から出土した燧260の内から出土したもので、その詳細については付載で詳しく述べられている。なお種子の放射線炭素年代測定も同時に行っており、それによると $2,015 \pm 46$  B P という年代が提示された。また第4層白色粘土について鉱物分析を行ったところその組成はカオリン鉱物が主であり、主に花崗岩に由来した堆積物である可能性が高いとの結果が出ている。この白色粘土については南溝手遺跡掘立柱建物1柱穴内においても確認し、同一産地に由来するとの分析結果であった。なお分析は行っていないものの、北溝手遺跡土壇33・40・48（いずれも弥生時代後期末葉）からも類似した白色粘土が出土している。

二重口縁をもつ壺223～231は口縁部外面に櫛状工具による波状文や鋸歯文が施され、頸部に櫛描沈線（223～226・228）が巡る。223の底部にはヘラミガキ調整前のタケキ痕が明瞭に観察できる。壺（235～276）のほとんどは二重口縁を有するものの、「く」字状口縁の燧267も認められる。

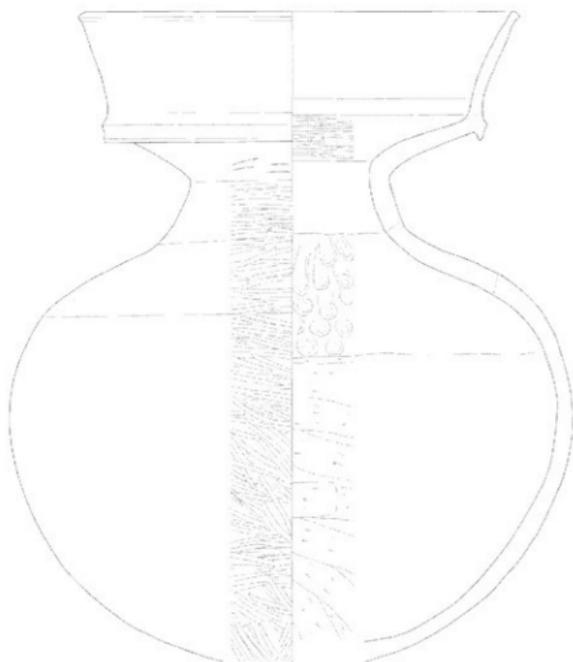
高杯277～296の脚部には4方向に円孔が施されている。その他鉢297～321、製塩土器322～333が出土した。第4層（白色粘土）よりも上層では壺の出土が無いものの、下層との時期差は認められない。弥生時代後期末葉における土器の一括資料として有効な一群である。（松尾）



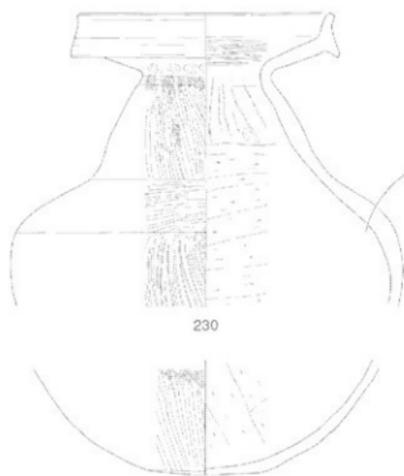
第254図 井戸1出土遺物①(1/4)



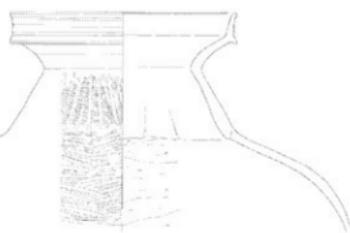
第255図 井戸1出土遺物②(1/4)



229



230



231



233

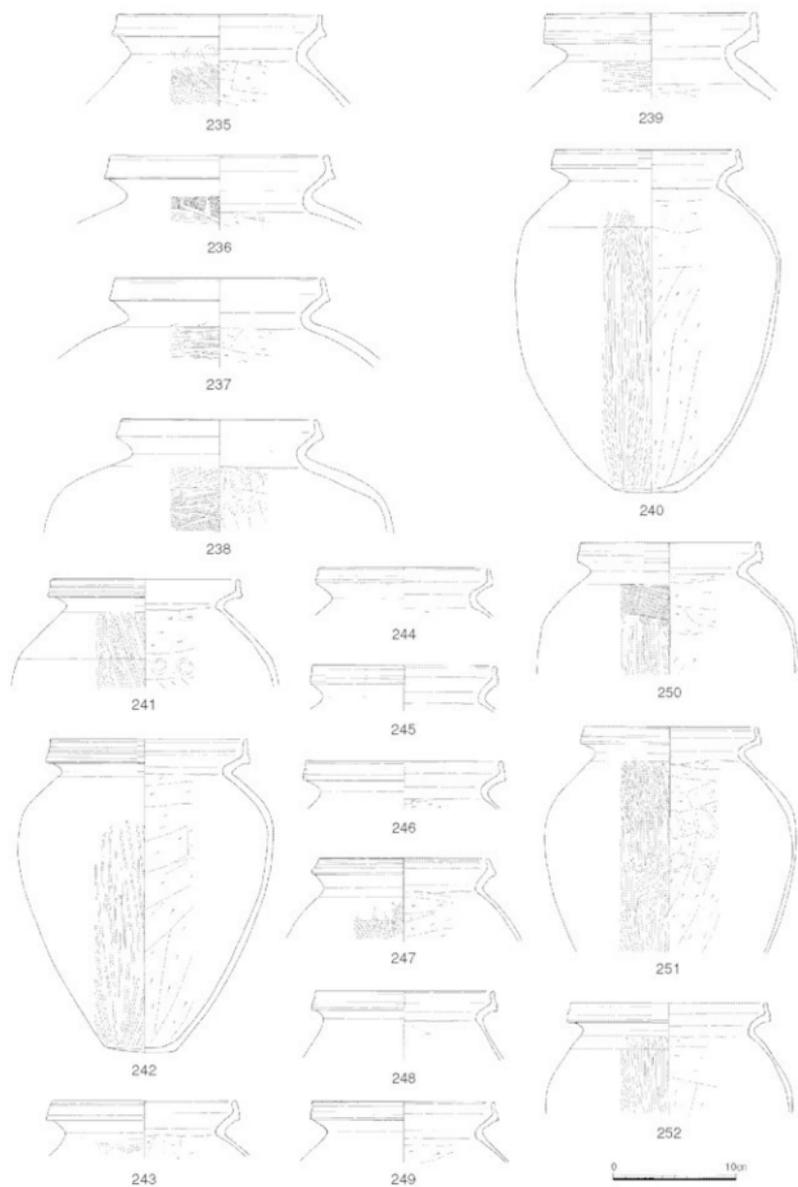


234

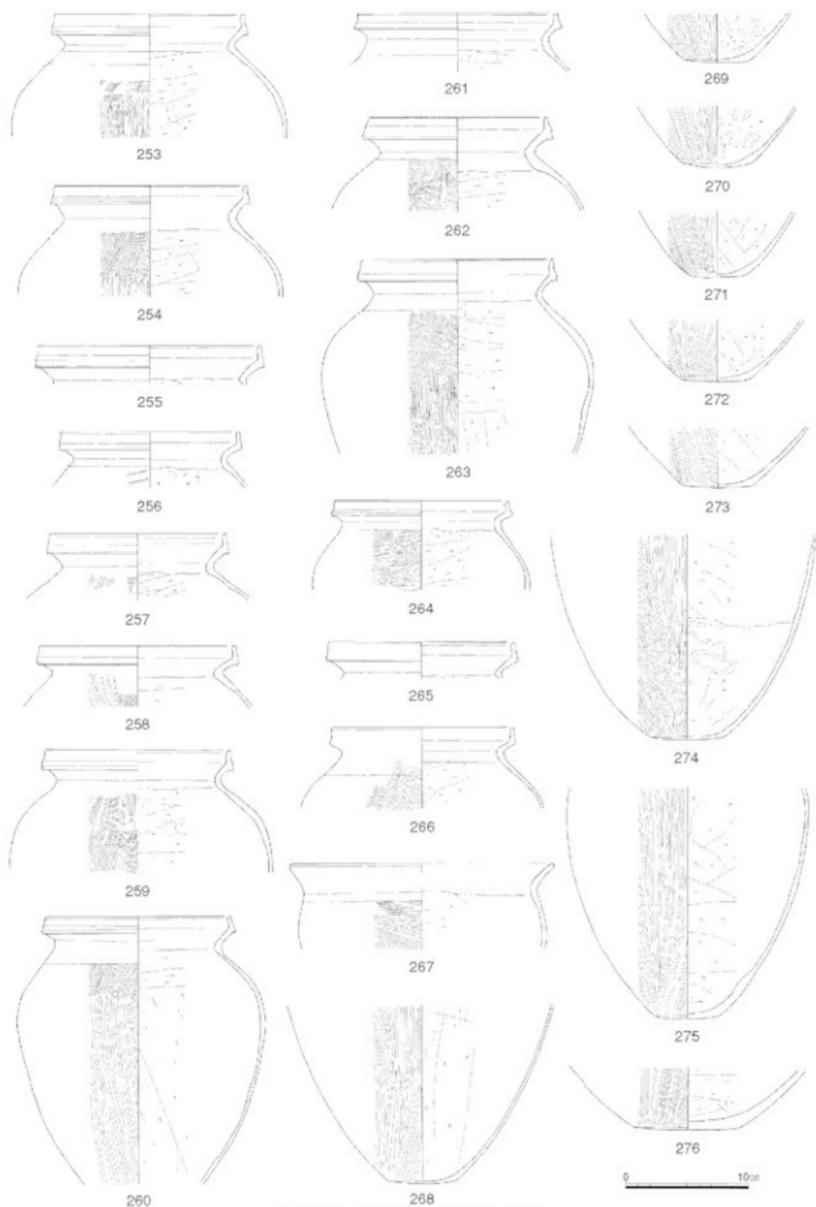
0 10cm

232

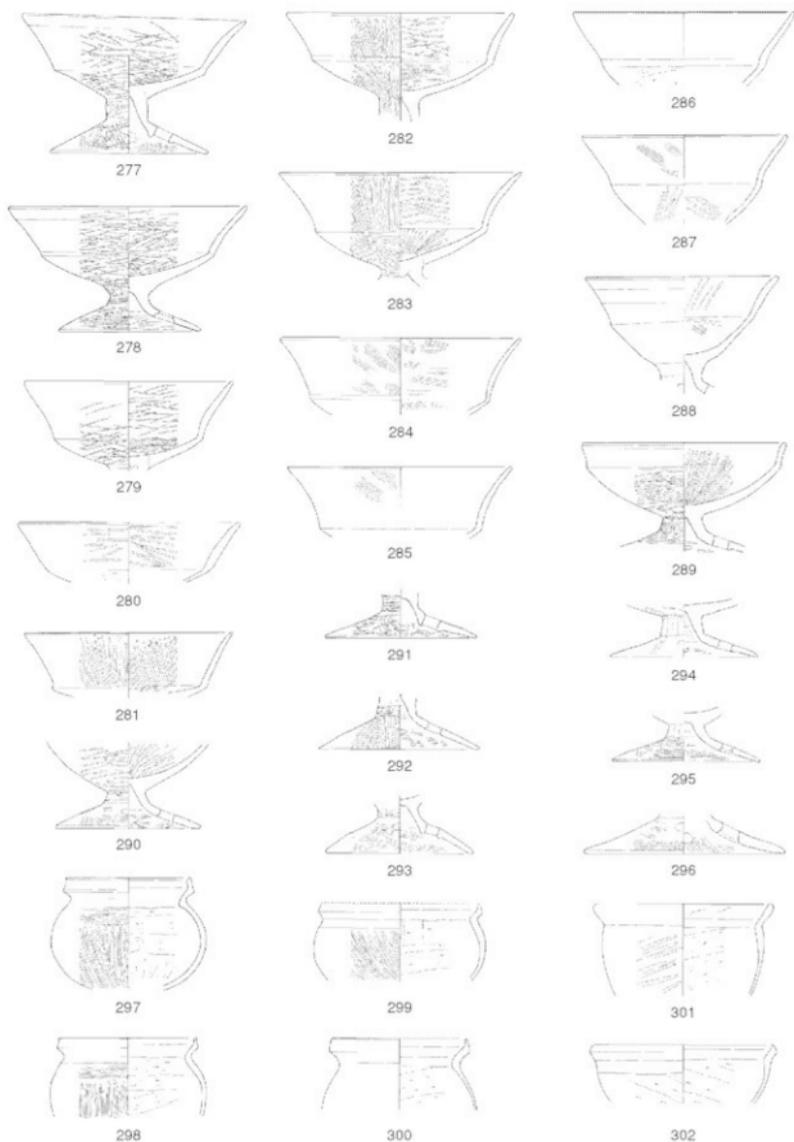
第256図 井戸1出土遺物③ (1/4)



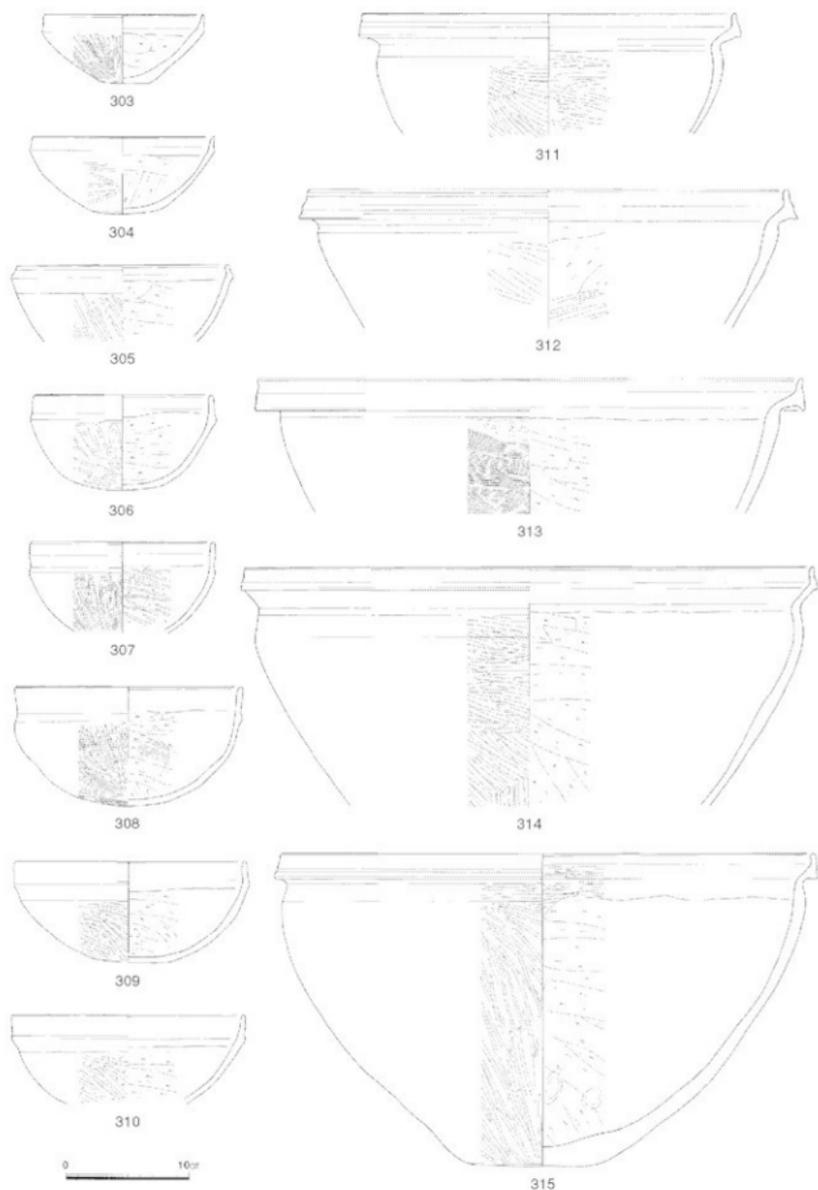
第257図 井戸1出土遺物④ (1/4)



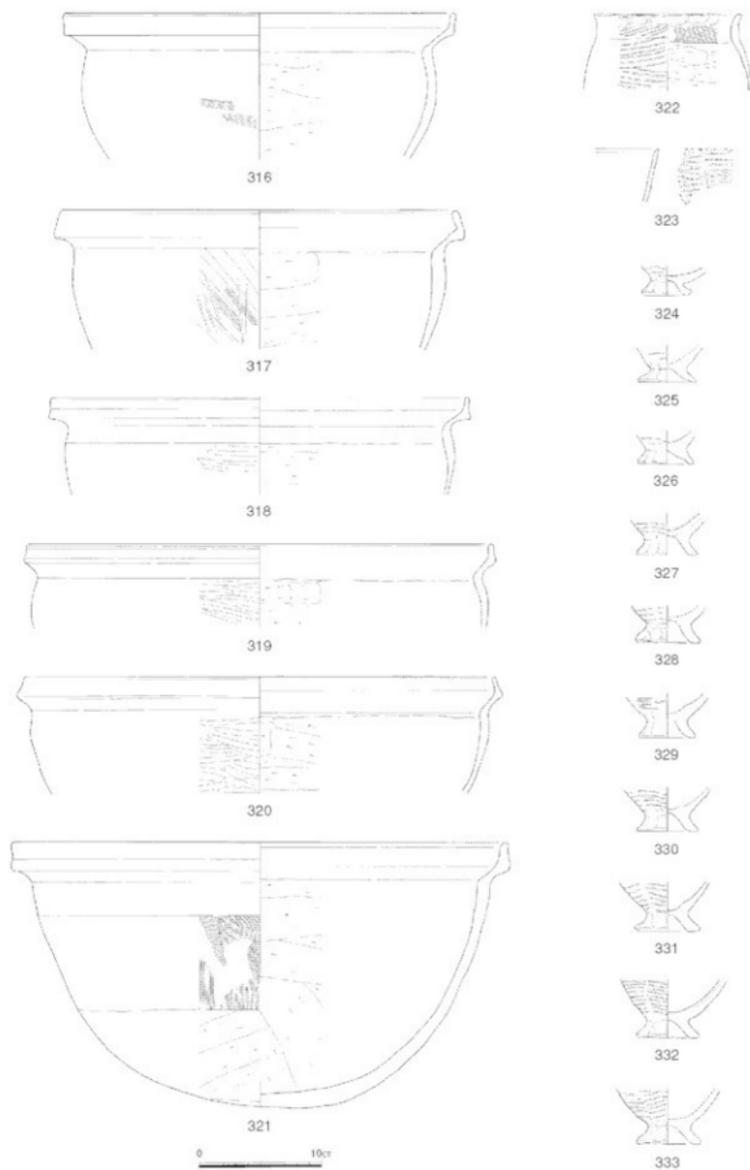
第258図 井戸1出土遺物⑤ (1/4)



第259図 井戸1出土遺物⑥ (1/4)



第260図 井戸1出土遺物⑦(1/4)

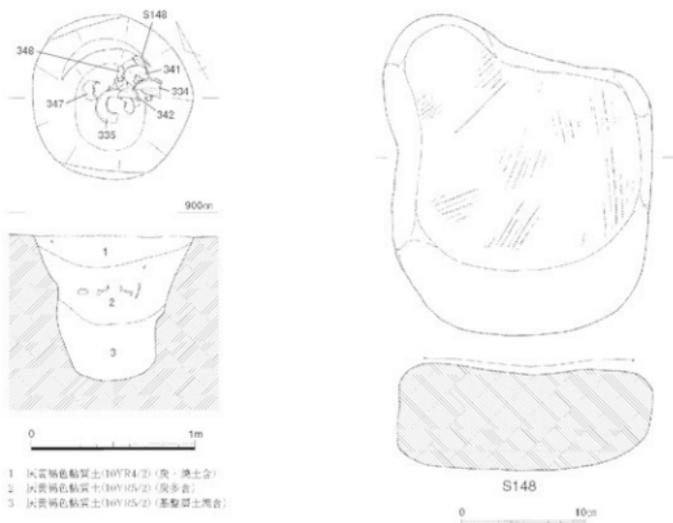


第261図 井戸1出土遺物⑧ (1/4)

## 井戸2 (第198・262・263図、図版30)

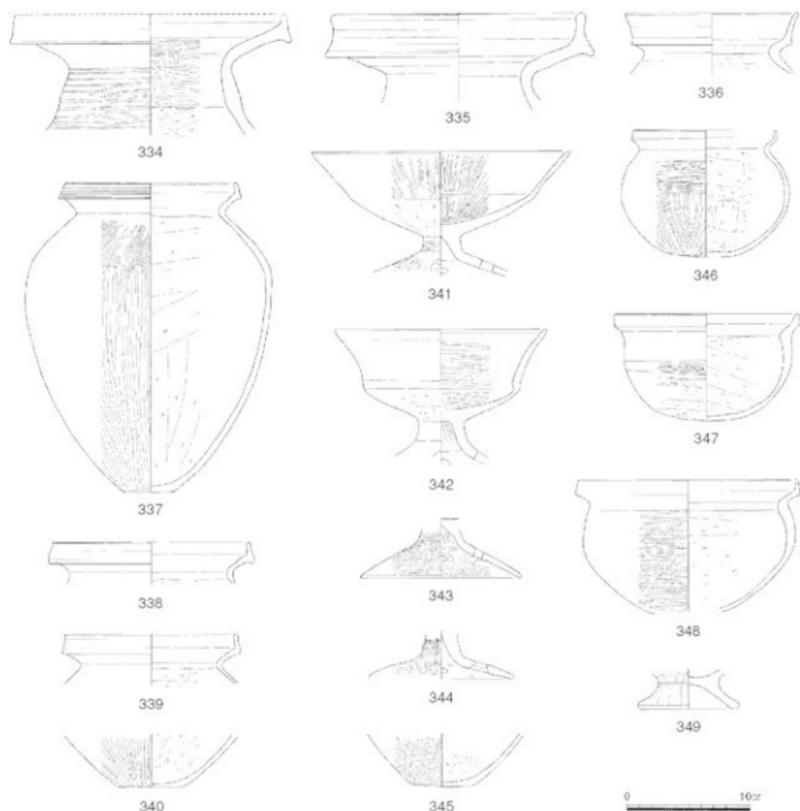
18Q南端やや西寄り、後述する溝8(弥生時代中期末)を切って検出した。平面形は長軸98cm×短軸94cmの円形を呈し、断面は底面からややオーバーハング気味に斜めへ立ち上がる壁面を有する。検出面から底面までの深さは89cm。底面の標高は7.97mと井戸1に比べ90cm程度高い位置で掘削が終了している。埋土は1〜3層に分層することが可能であり、第3層(灰黄褐色粘質土)に基盤層土がブロック状に含まれていることから、故意に埋め戻された可能性を指摘できる。その第3層中からは完形の甕337や鉢346、細粒花崗岩製の台石S148が出土した。第2層中からは比較的多くの土器が出土し、その状況を第262図に示している。壺334・335、高杯341・342、鉢347・348、脚部349が該当する。その他図示はしていないが第2層中からは甕338・339、高杯343が出土した。埋土中には土器や石器以外に炭や焼土が多く含まれており、それは第1・2層中において顕著であった。なお第1層中からの遺物出土は極めて少なく、あったとしても土器細片がほとんどである。

出土した土器については第263図に掲載しており、出土層位については前述した通りである。334・335は壺で、口縁端部が下方、特に上方へ大きく立ち上がり、334の「ハ」の字に開いた頸部にはヘラ描沈線が巡る。336〜340は甕。336は外方へ大きく開く口縁部を有する甕で、いわゆる山陰系であると思われる。337〜339は上方へ立ち上がる二重口縁をもつ甕で、337の口縁端部には凹線が巡る。341〜344は高杯。杯部が大きく開く341や深い杯部を有する342などがある。脚部は短い脚柱部から大きく開く裾部を有し、4方向に円孔が認められる。346〜348は鉢。小形の甕ともいえる346の他、二重口縁を有する347・348がある。土器の特徴とその出土状況から掘削時期は明確でないが、弥生時代後期末葉に埋め戻され、井戸としての機能を失ったものと看取される。(松尾)



- 1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) (灰・焼土含)
- 2 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) (灰多含)
- 3 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) (基盤層土混含)

第262図 井戸2 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第263図 井戸2出土遺物② (1/4)

井戸3 (第199・264図、写真24、図版31)

22軸線上、Y交点よりやや南に下がったところに位置する。用水路により東側上面を削平されており、当初は長方形の土塼として認識していた。ところが、予想以上に深く、また東側へも広がりを見せたので、用水路の底をさぐって精査したところ、方形の井戸であることが判明した。用水路底面の標高は8.4mであるが、通常の弥生時代の上塼でこの深さまで達しているものはあまりない。井戸の規模は上面で南北1.7m×東西1.59m、底面で南北13cm×東西50cmで、方形を呈している。検出面からの深さは1.24mで、底面の標高は7.59mを測る。壁面の傾斜は中段よりやや上で変化し、これより下は急傾斜となっている。埋土は5層に分かれ、最上層には基盤層に由来する黄色土塊を含んでいた。第4・5層はグライ化が著しい。

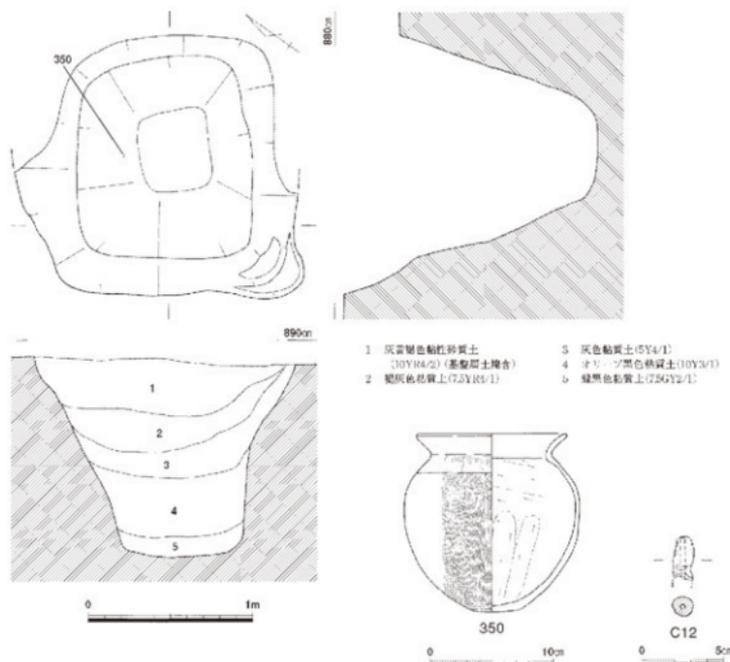
出土遺物は、図示した以外は土器細片のみで、少ない。一方、甕350は完形品で、第3層底で出土

した(写真24)。第3層と第4層の境と、先述した壁面傾斜角の変換点が一致している。また上質も第3層を境に粘性に差があり、第4・5層では非常に脆弱であることから、第3層以上と以下では埋没時期に差があると考えられる。井戸埋没後に土填として使われた可能性もある。

井戸の掘削時期は明らかにしないが、弥生時代後期末葉の段階で土器が投棄され埋没したと考えられる。(波邊)



写真24 土器350出土状況 (南東から)



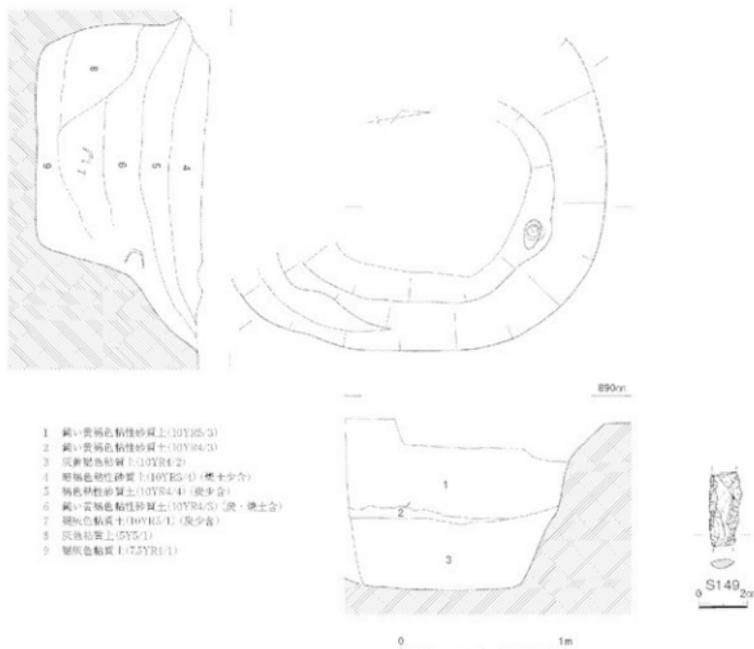
第264図 井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

井戸4 (第200・265・266図、図版31)

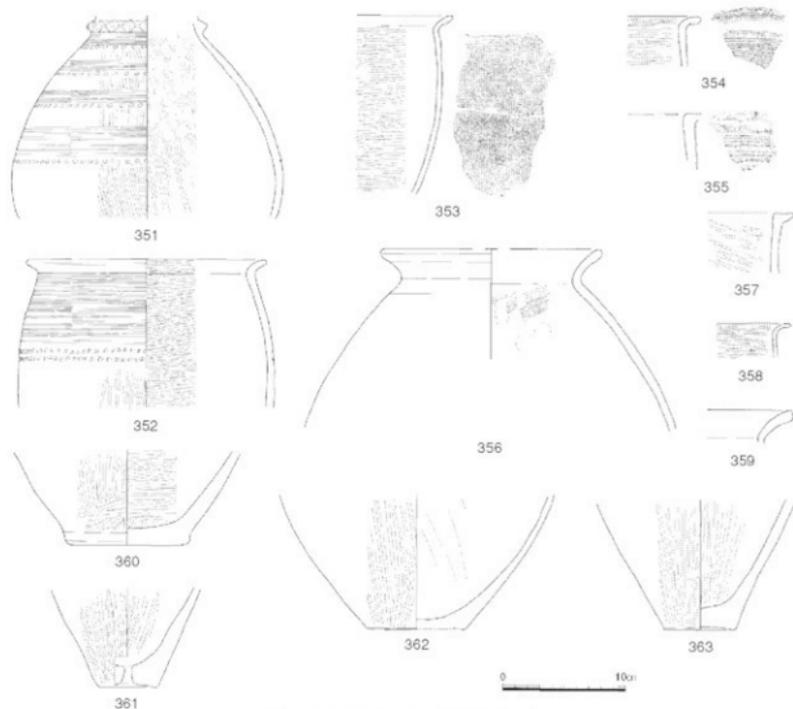
22ⅡA南東に位置する。西側が調査区外となるため全容は明らかでないが、やや隅丸方形に近い円形を呈する。残存部最大長で2.5mを測る。隅丸方形と想定するならば、一辺2.3m前後と推定される。検出面での標高は8.75mである。底面はほぼ平らで、検出面からの深さ1.01m、底面の標高7.73mを測る。埋土は東西断面では6層に分かれ、南北断面の第1層が第4・5層に、第2層が第6層に、第3層が第7・9層に対応する。なお、第2図の第8～13層が当井戸であり、上面を弥生時代包含層に覆

われている。壁面は平らな底面より直線的に外方に立ち上がるが、掘り方中で屈曲し、南東側ではテラス状の面を成していた。また北側はテラスが明瞭ではないが、小穴を検出した。径20~30cm、深さ6cmの楕円形を呈す。小穴上面は井戸検出面から約70cm下で、深さから、井戸掘削以前や埋没後に掘削された遺構とは考え難く、井戸に伴う施設と考えられる。井戸の上屋を想定したが、井戸検出面ではそれらしき柱穴は見受けられなかった。また、井戸南側にもこの小穴と対になる小穴が存在しているかもしれないが、調査区外となるため、確認できなかった。

比較的多くの遺物が出土しており、土器のうち351・357・362が東西断面第4・5層、361が東西断面第6層、352・353・354・356・360が東西断面第7層から出土している。壺、甕共に外面には櫛描き直線文、内面にはヨコ方向のヘラミガキを多用する。351・352は沈線下に刺突も認められる。甕の口縁部は、断面三角形の端部を有する357、逆し字形の355、如意状の352、両者の中間的な354、「く」字形の356・359など多様である。353・354は口縁先端を折り返して、端部を丸くまとめている。359は口縁端部がやや肥厚している。胴部も直線的な357、口縁部から底部にすぼまる353、やや膨らむ352など差があるが、出土層位による傾向は取られない。甕356は弥生時代中期前葉新段階に出現する広口壺の一群とみなした方が良いであろうか。弥生時代中期前葉に埋没したと考えられる。(波邊)



第265図 井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/2)



第266図 井戸4出土遺物② (1/4)

## 5 土塙

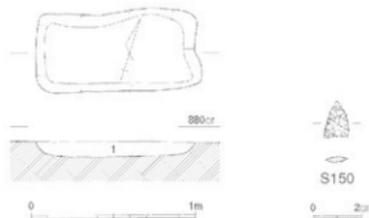
## 土塙4 (第196・267図)

10E南東、調査区の北端に位置する。東西97cm、南北47cmの長方形を呈す。検出面からの深さは10cm、底面の標高は862mを測る。底面はほぼ水平で、壁体は底面から緩やかに弧を描くように立ち上がる。平面形が比較的整った長方形であったため、土塙墓と想定して調査を進めたが、この想定を裏付けるような状況は確認できなかった。

土器細片が出土しており、弥生時代中期末葉に位置付けられる。(渡邊)

## 土塙5 (第196・268図、図版31)

10E南東で、土塙4の東に位置する。南北2.08m、東西1.24mの不整形な土塙である。底面も凹

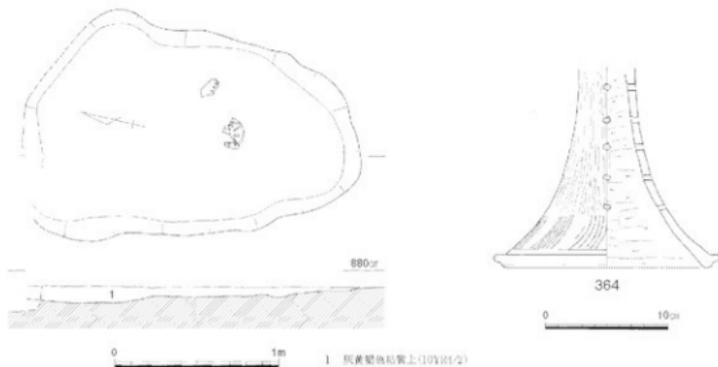


1 灰青褐色粘砂質土(10YR5/2)

第267図 土塙4 (1/30)・出土遺物 (1/2)

凸が激しく、最も深い北側で検出面からの深さ10cm、底面の標高8.6mを測り、南に次第に浅くなっている。壁体の立ち上がりは弱い。

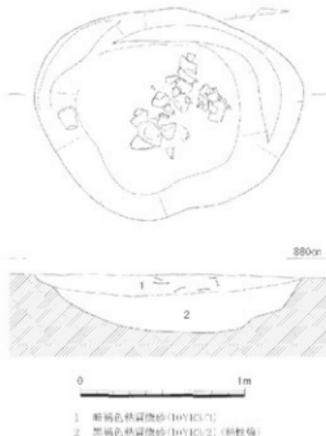
土壌内中央部で、底面に接して高杯脚部364が出土した。ほかは細片のみしかない。時期は弥生時代後期初頭に位置付けられる。(渡邊)



第268図 土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

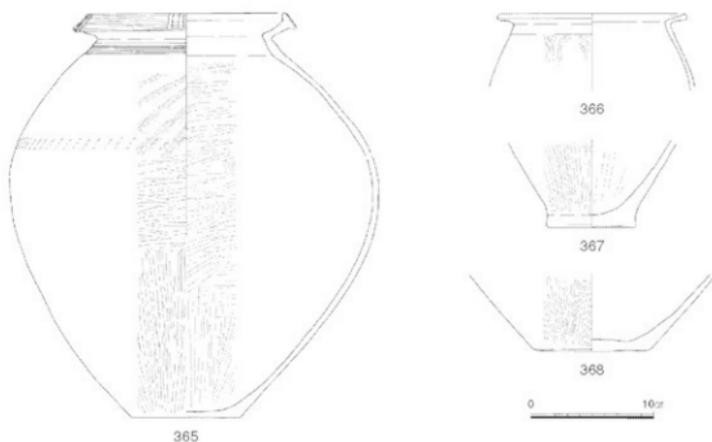
土壌 6 (第196・269・270図、図版32)

12G北西で、微高地南端の下がり際に位置する。南北1.64m、東西1.25mの不整形形で、検出面からの深さ37cm、底面の標高は8.34mである。底面は平らでなく、碗形に中央部が深くなっている。検出面から25cm前後下がったところで、北側と西側にテラス状の段を有す。ただし、当初は後述する土壌7がほぼ同一場所に重複していることに気が付いていなかったため、土壌7まで掘削が及んだ可能性は否定できない。



第269図 土壌 6 (1/30)

埋上は2層に分かれ、下層は黒く、比較的粘質が強かった。土器の多くは上層である第1層から出土している。比較的多くの土器片が出土しているが、図化し得たのは壺365・368、甕366・367のみである。壺365は屈曲した口縁部から強く胴部が張り出す割りには器高の低い、壺甕折衷とも言うべき器形で、頸部に櫛描き直線文を、肩部には櫛描きの斜格子文を施し、肩部下端には櫛状工具による刺突列点文を施す。甕366の口縁部の屈曲も強く、口縁端部はやや上方に引き上がりを見せる。また壺甕共に底部内面はクテ方向のヘラミガキを施している。弥生時代中期中葉でも新しい段階に位置付けられよう。(渡邊)

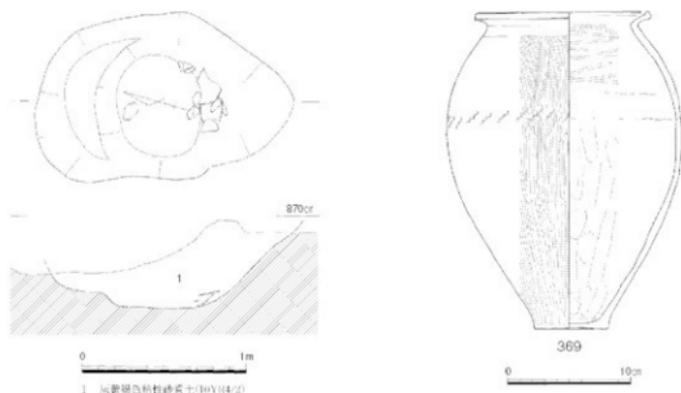


第270図 土壌6出土遺物 (1/4)

## 土壌7 (第196・271図)

土壌6とはほぼ重複し、土壌6完掘後に検出した。不整楕円形で、底面の標高は8.14mを測る。

図示した壺369は底面でも出土した。このほか、凹線文を施した壺や、高杯脚部などがある。弥生時代中期中葉の新しい段階に位置付けられ、土壌6との時期差は顕著に認められない。(波邊)



第271図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壌8 (第196・272図)

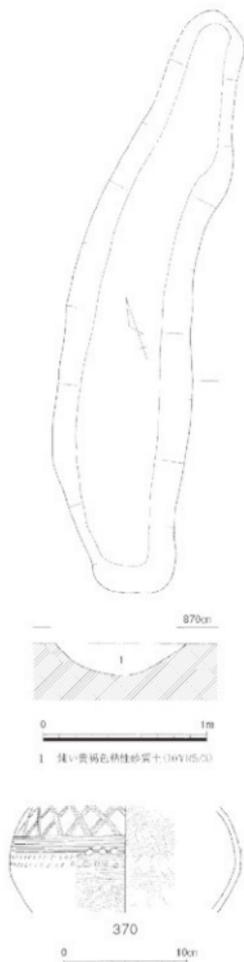
12G西端中央で、土壌7の南西に位置する。微高地下がりにはほぼ並行し、長さ3mをこえる溝状の遺構であるが、いわゆる舟形土壌の可能性を想定して、土壌を含めた。ただし、底面は平らでなく、

断面形状からも舟形土壇である可能性は低い。底面の標高は840mである。

上壇6に北端を削平されており、出土遺物からも弥生時代中期中葉に位置付けられる。  
土壇9（第196・273図）

12G北西で、土壇7の南に位置する。上部は水田1とした堆積層で覆われている。ほぼ水平な底面から、壁体が直角近く急に立ち上がる。底面の標高は7.71mである。埋土は基盤土をブロック状に含むと互層を成しており、人為的に埋められた状況を示す。

時期の特定できる出土遺物はないが、溝2を切っていることから、弥生時代中期後半と考えられる。（渡邊）



第272図 土壇8 (1/30)・出土遺物(1/4)



第273図 土壇9 (1/30)

## 土壙10 (第197・274図)

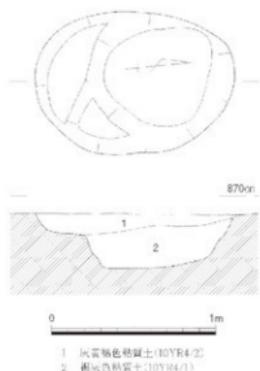
14K北西で、微高地北緩斜面に位置する。溝3を切って掘削されている。上面で南北1.21m、東西86cmの楕円形を呈するが、検出面からの深さ13cmのところまで南側が一段下がる。底面はほぼ平らで、標高8.25mを測る。壘体は断面台形に立ち上がる。

出土遺物は土器細片のみであるが、頸部に鎖状突帯を有する広口壺や体部下半にヘラケズリを施した甕などがある。溝3との関係から、弥生時代中期中葉に位置付けられる。(渡邊)

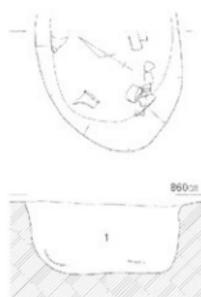
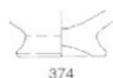
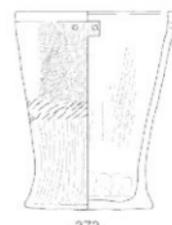
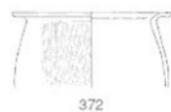
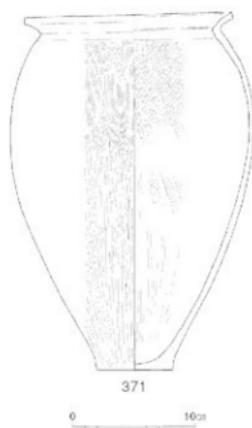
## 土壙11 (第197・275図)

土壙10の東で、同様に微高地北緩斜面に位置する。東半は調査区外となり全容は不明である。径1m程度と小さいが、壁体が底面より直立気味に立ち上がる、しっかりした土壙である。底面はほぼ平らで、標高は8.16mを測る。

比較的多くの土器が底面近くより出土した。甕371・372、ジョッキ形土器373、台付鉢374などがあるが、壺は出土していない。時期は弥生時代中期中葉に比定される。(渡邊)



第274図 土壙10 (1/30)

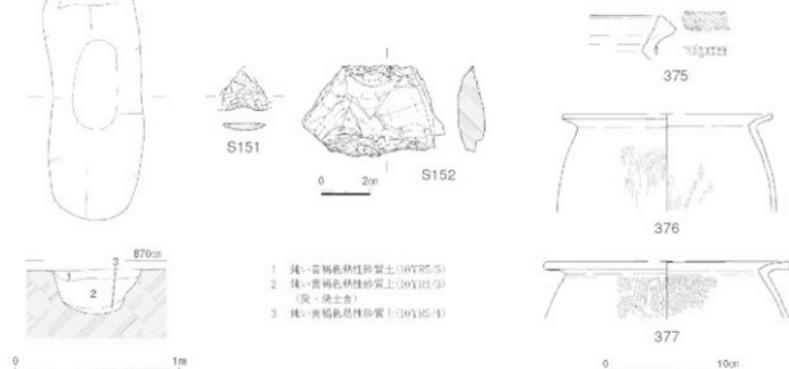
1 浅い黄褐色粘土印画土(10YR6/3)  
(炭・焼土含)

第275図 土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

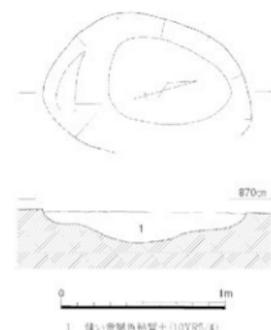
## 土壙12 (第197・276図)

14K南西で、堅穴住居3の北に位置する。土壙13を切っている。南北1.79m、東西54cmの長楕円形で、検出面からの深さは27cm、底面の標高は8.38mである。検出面から約10cm下がったところで、北端に段を有す。南側への立ち上がりは緩やかであるが、東西両側は比較的急で、断面台形を呈する。埋土は3層に分けられ、第2層には炭・焼土を含む。

出土遺物には壺375、甕376・377、石鉢S151、楔形石器S152などがある。壺375の口縁端部は肥厚し、端面に拵描きの斜格子文を施す。弥生時代中期中葉に位置付けられる。(渡邊)



第276図 土壌12 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)



第277図 土壌13 (1/30)

#### 土壌13 (第197・277図)

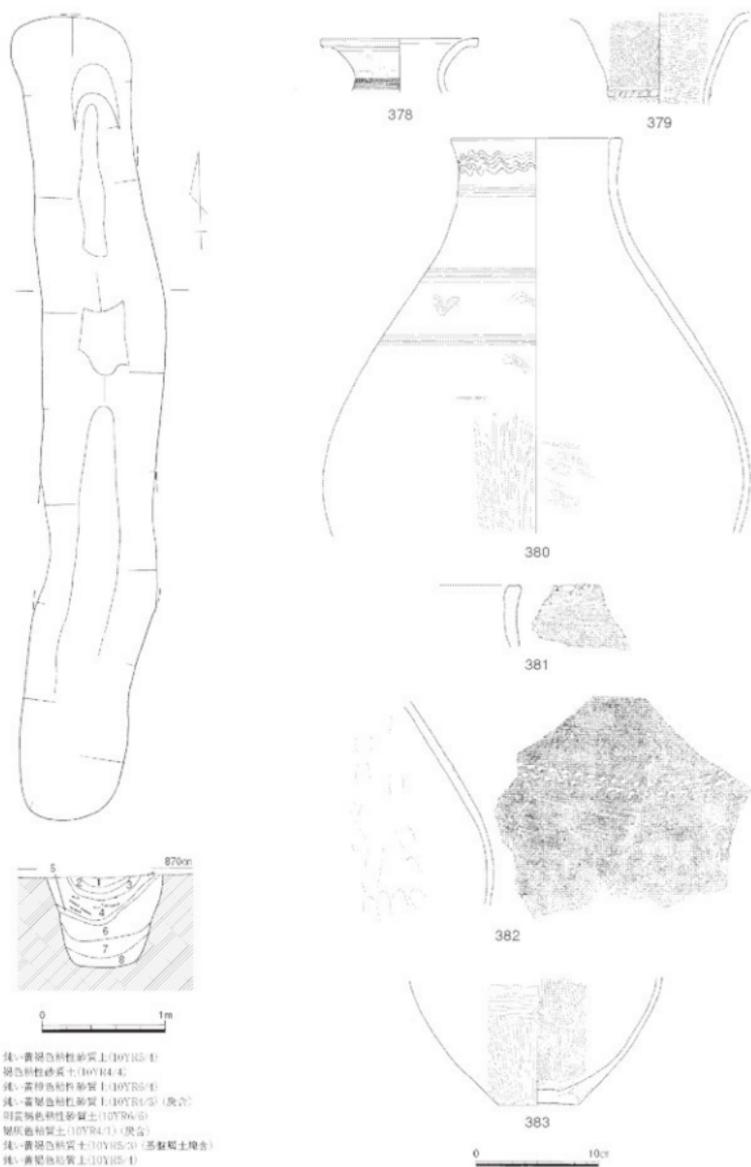
土壌12の西に位置し、北端の一部を土壌12に切られる。南北1.25m、東西90cmの不整形円形を呈する。底面は中央がやや深く、平らでない。検出面からの深さは19cm、底面の標高は最も深いところで8.44mを測る。

弥生時代中期中葉の亮細片が出土している。(渡邊)

#### 土壌14 (第197・278～280図、図版32)

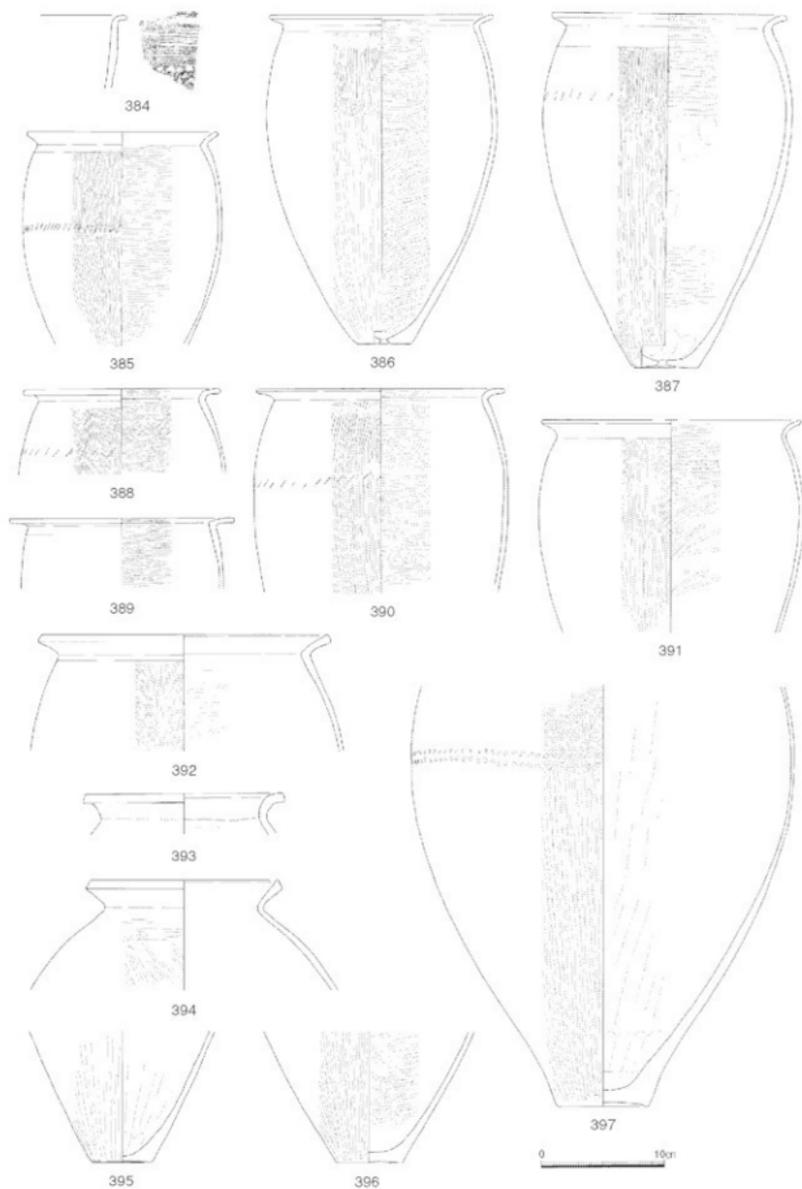
土壌12の南東に位置し、竪穴住居3の北東部を切る。長さ3.27m、幅95cmの、南北に長大な遺構である。最も深いところで、検出面からの深さ90cm、底面の標高7.74mを測る。断面は台形を呈し、壁体は直線的に立ち上がる。長軸側の両端が急峻に立ち上がることから、溝ではなく、舟形土壌と認識している。底面は平らでなく、北端及び中央やや北寄りに一

段高い部分を有し、2基の長楕円形の土壌が重なったようにも見受けられる。北端と中央部の段の標高はほぼ同じで、7.88～7.85mである。北側の規模は長1.2m、南側は長1.8mで、底面の標高は北側で7.74m、南側で7.8mと、南側が少し高い。長軸側には土層断面を設けなかったため、北側と南側の堆積状況の違いなどについては検証できていない。短軸断面では埋土は8層に分かれ、第4層には特に土器が多く、炭も含まれていた。第7層には基盤土に由来する土がブロック状に混在していることから、人為的に埋められた可能性がある。特に第4層では上圧で潰れた状態で土器が出土しており、埋没の過程で人為的に投棄されたものと考えられる。第1～3層は土壌埋没後のくぼみに自然に形成さ



- 1 黄褐色粘状砂質土(0YR5/1)
- 2 褐色粘状砂質土(10YR4/4)
- 3 黄褐色粘状砂質土(10YR5/4)
- 4 黄褐色粘状砂質土(10YR4/5) (黄赤)
- 5 黄褐色粘状砂質土(10YR6/5)
- 6 灰褐色粘質土(10YR4/1) (黄赤)
- 7 黄褐色粘質土(10YR5/3) (赤褐色粘土塊)
- 8 黄褐色粘質土(10YR5/1)

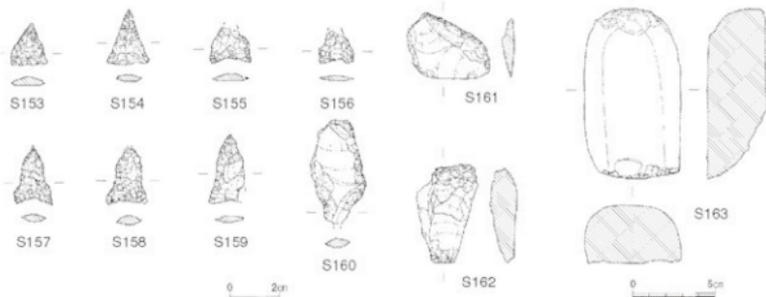
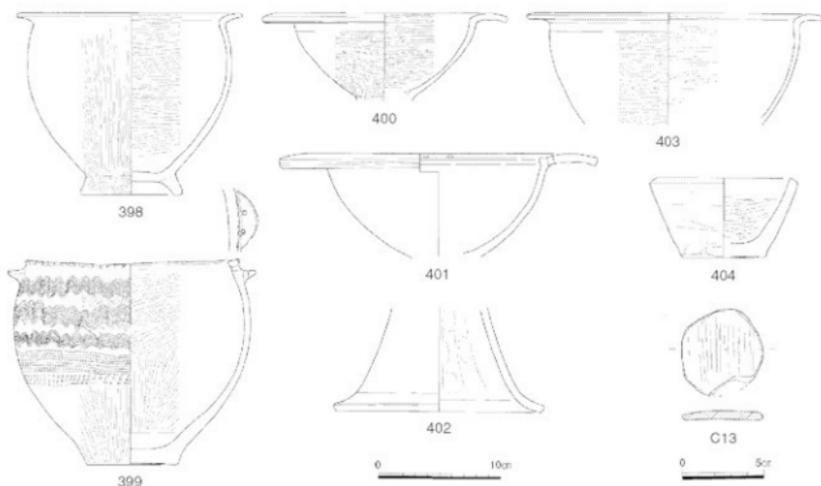
第278図 土壌14 (1/40)・出土遺物① (1/4)



第279图 土壤14出土遺物② (1/4)

れた堆積層である。

全体を層位毎に掘り進められたわけではないが、おおむね第4層に対応する層位から出土した土器は383・387・389・393・394・398・402・403で、399はそれより下位で出土した。土器には壺・甕・台付鉢・把手付鉢・小型の鉢・高杯、石器には鉄・錐・楔形石器・敲石、円板形土製品など多様な器種がみられる。敲石 S 163は大型蛤刃石斧の基部を再利用している。土器には櫛描き文を多用し、胴下半内面にヨコ方向のヘラミガキを施すものが多い。頸部の長い広口壺379や口縁部が逆し字形甕384もある。一方、甕388は胴部が張り、392は口縁端部が上方へ拡張されているなど新しい要素も認められる。394は広口壺に含めた。弥生時代中期前葉の新段階に位置付けられよう。(渡邊)



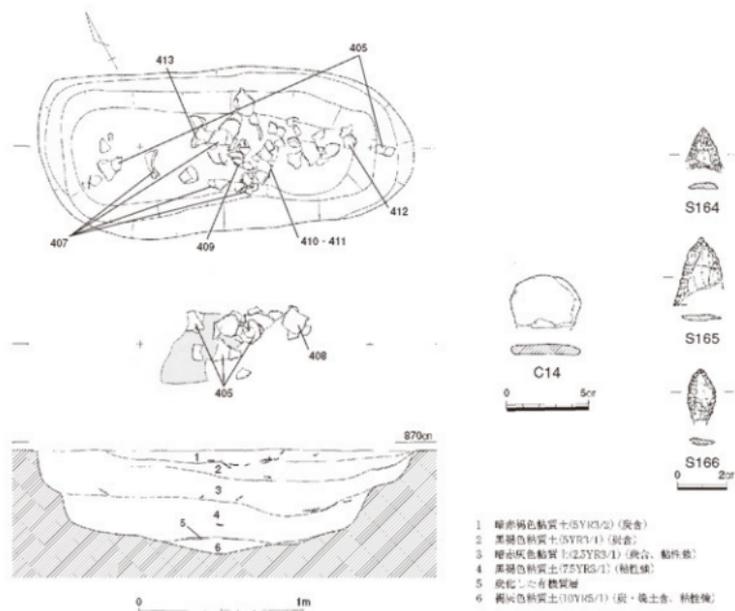
第280図 土壙14出土遺物③ (1/4・1/2・1/3)

## 土壙15 (第197・281・282図、図版33)

土壙14の西に位置する。堅穴住居上面で検出された。上面は、長さ2.28m、幅1mの東西に長い楕円形を呈する。断面は階段状に2層掘りになっており、中段では長さ1.91m、幅60～80cmの隅丸長方形を呈する。中段の上面は標高8.4～8.45mである。底面中央部にくぼみがあるが、第4・5層下面はほぼ平らで、標高8.1～8.15mを測る。平面形や掘り方の特徴から土壙墓と考えている。木棺痕跡は検出できなかったが、第5層の炭層は棺底の存在を想起させる。

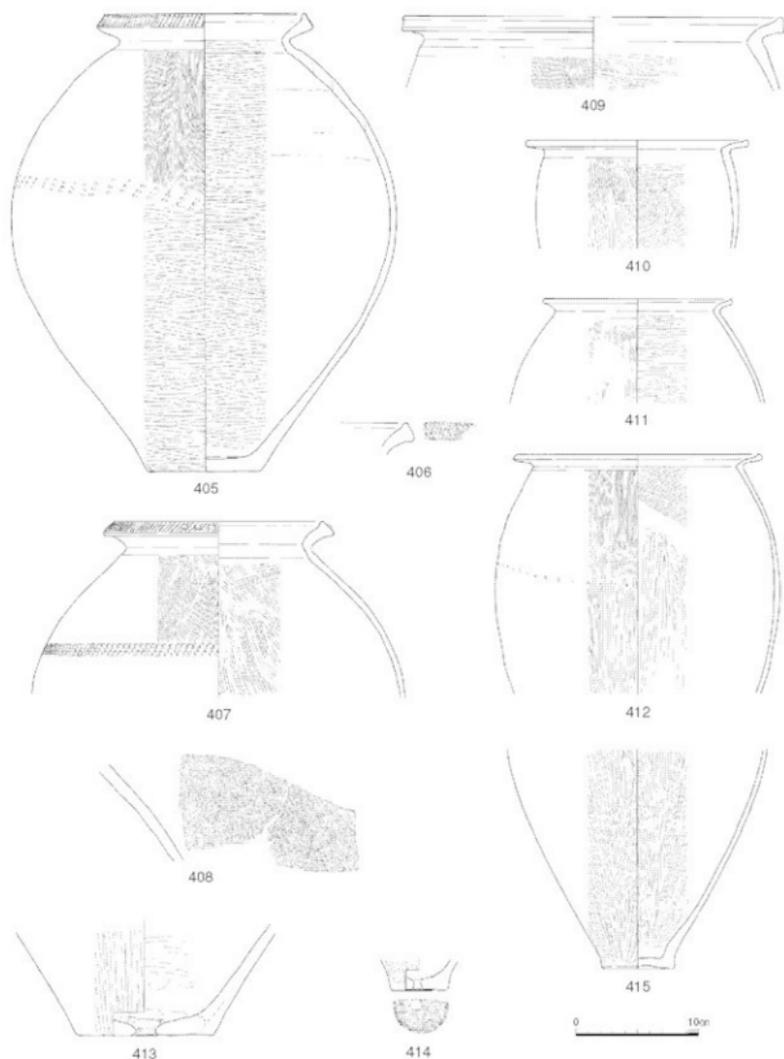
出土遺物は多く、壺、甕、壺形土器、石鏃、石錐、円板形土製品などがある。特に第3層より上方での出土が多かったが、第4層下面からもまとまって出土している。第281図の上段は前者の、下段は後者の出土状況を示している。しかし、壺405のように上層と下層で接合する資料もあることから、下層の土器は上部から落ち込んだ可能性もある。平面的にも壙内に散在する破片が接合していることから、破片の状態で壙内に投棄されたものとみられる。

広口壺405～407は口縁端部を肥厚させ、端面に刺突文ないしは櫛描き文を施す。施文には、405では碗状工具、407では貝殻腹縁を利用している。甕は胴部のあまり張らない410や胴部下半に横方向のミガキを施す413といった古い様相をがずものと、口縁端部を少し上方に拡張させる411・412といった新しい様相を示す2相がある。ただし、胴部内面下半のヘラケズリは認められず、弥生時代中期中葉でも古い段階に位置付けられよう。(渡邊)



第281図 土壙15 (1/30)・出土遺物① (1/3・1/2)

- 1 緑褐色粘質土(SYK3/2) (夾金)
- 2 黒褐色粘質土(SYR3/1) (夾金)
- 3 緑褐色粘質土(2SYR3/1) (夾金、動物糞)
- 4 黒褐色粘質土(7SYR3/1) (粘粒膜)
- 5 炭化した有機質層
- 6 黄褐色粘質土(10YR5/1) (灰・炭土、粘粒膜)



第282図 土壙15出土遺物② (1/4)

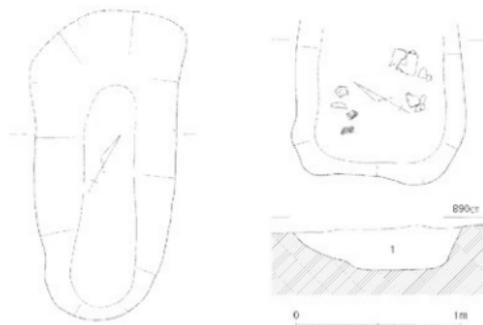
土壙16 (第197・283図)

14M北東で、土壙14の南に位置する。堅穴住居3に一部重複し、検出面では堅穴住居3との切り合いを明らかにできず、土壙北半の形状を捉えることができなかった。検出面からの深さ13cm、底面の

標高は8.62mを測る。弥生時代中期前半の遺物が出土しており、竪穴住居3より新しい。(波邊)

土壌17(第197・284図、図版33・34)

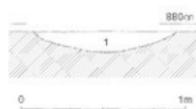
土壌16の東に位置する。東側は調査区外となるため全容は不明であるが、平面は長方形、断面は台



形を呈している。上面は弥生時代包含層に被覆されている。検出面からの深さ23cm、底面の標高は8.52mを測る。埋土には基盤土をブロック状に含んでいた。

出土上器には台付鉢416、甕417、ジョッキ形土器418のほか、櫛描き文を施した壺もある。弥生時代中期前半に比定され、当微高地の上の中期土壌群の中でも古く位置付けられる。(波邊)

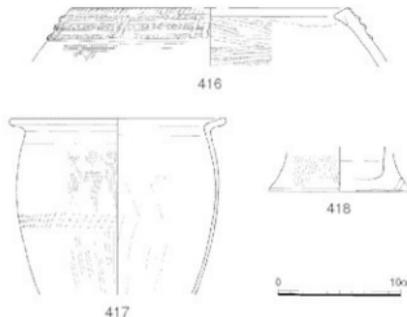
1 灰層色粘土質土(7.0YR5/2)(残土台、基盤層十層合)



1 灰黄褐色粘土質土(7.0YR5/2)(残土台)



第283図 土壌16(1/30)・  
出土遺物(1/2)



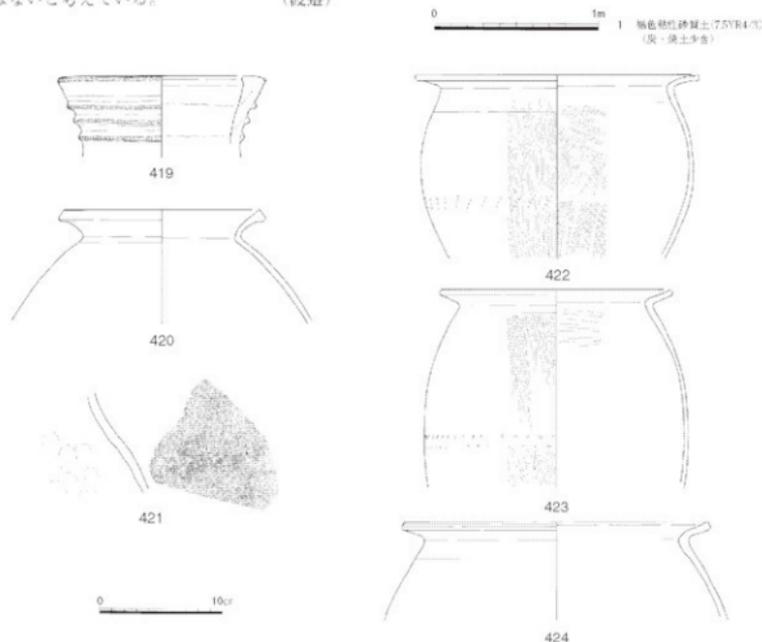
第284図 土壌17(1/30)・出土遺物(1/4)

土壌18(第197・285図、図版33・34)

土壌17の南に位置する。東側は調査区外となり、全容は不明である。また土壌19と南東部が重複し、土壌19に切られている。残存部での平面、断面共に不整形だが、検出面からは34cmと比較的深く、土器も多く出土している。残存部での規模は、長さ1.2mをこえ、底面の標高は8.36mである。微高地から河道部に至る斜面上に堆積した弥生包含層は土壌17と土壌18の間から北へ堆積しており、当土壌と包含層の関係は確認できなかった。埋土は単層であるが、第285図断面では、土器が埋土中程に堆積している状況が看取される。平面的にもまとまっているが、いずれも破片の状態で、完形に復元できたものはない。

出土土器には壺419~421、甕422~424などがある。頸部を刻日突帯で加飾する壺419は、口縁部が直立よりは外方へ開き、上端面も内方へ拡張している。広口壺420は口縁部端面が下方へも肥厚を見

せる。甕423は胴部の張りも弱く、口縁部端面も丸く取めているが、甕424は胴部が張り、口縁部も強いヨコナデを施している。口縁部は面を成し、凹線状の窪みを有している。摩滅のため、胴部下半でのヘラケズリの有無は確認できていない。弥生時代中期中葉の範疇で捉えられる。また切り合いから土城19より古く位置付けられるが、土器の様相に矛盾はないと考えている。(渡邊)

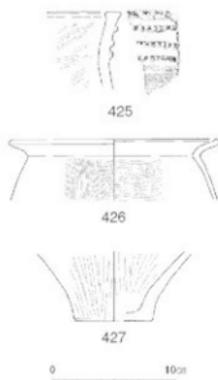
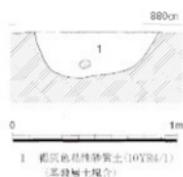
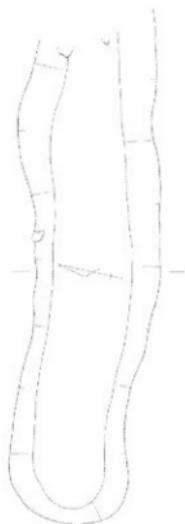


第285図 土城18(1/30)・出土遺物(1/4)

#### 土城19(第197・286図、図版34)

土城18の南に位置し、土城18を切っている。東側は調査区外となる。長さ3mをこえる長大な遺構である。溝の可能性もあるが、壁体の立ち上がりが急で、断面も台形を呈していることから、土城14のような舟形土城と考えた。上部に弥生包含層はなく、中世耕作土で被覆されていた。調査区東壁で確認された規模は深さ50cm、幅1mを測る。底面の標高は8.47mである。

出土遺物には図示したほか、上げ底の底部片もある。甕426の口縁部は少し上方へ立ち上がる。土器の様相と切り合いから、弥生時代中期中葉で、土城18より新しく位置付けられる。(渡邊)



第286図 土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌20 (第197・287図)

14Mの東端で竪穴住居3の南に位置し、平面形は長軸1.2m、短軸96cmを測る不整楕円形を呈する。断面形は検出面からの深さ10cmを測る皿形。

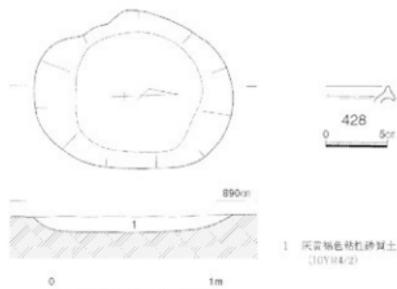
出土遺物は少なく428の変形土器口縁部破片のみ。

土器の諸特徴から弥生時代中期後葉には埋没した土壌であると考えられる。(松尾)

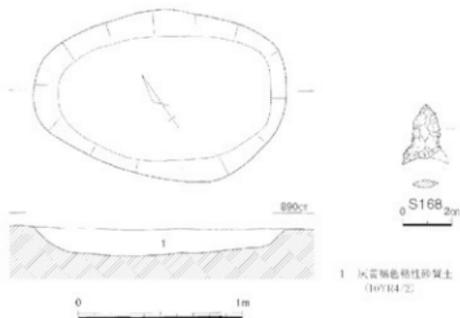
土壌21 (第197・288図)

14Mの東端で前述した土壌20の西隣に位置する。平面形は長軸1.54m、短軸1.04mを測る楕円形を呈する。断面形は検出面からの深さ16cmを測る皿形。

出土遺物は少なく、石鏃S168の他は土器の細片のみ。詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期であろう。(松尾)



第287図 土壌20 (1/30)・出土遺物 (1/4)

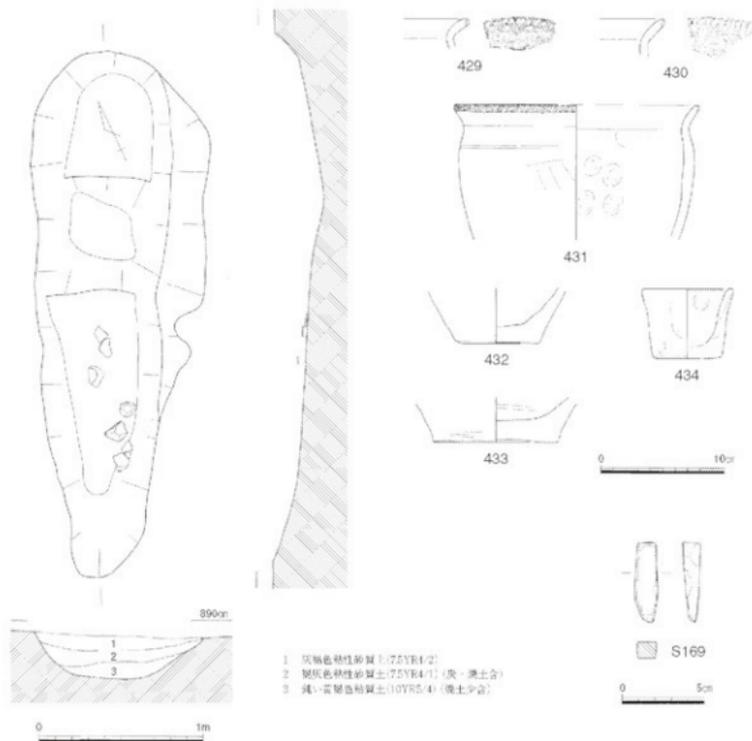


第288図 土壌21 (1/30)・出土遺物 (1/2)

## 土壌22 (第197・289図)

14Mの東端に位置し、竪穴住居5の西に隣接して確認した。平面形は長さ3.22m、幅1.04mを測る南北に細長い不整形円形。断面形は緩やかに立ち上がる逆台形を呈し、北と南にそれぞれテラスを有し、中央やや北寄りに一段凹んでいる箇所がある。検出面からの深さは26cmを測る。埋土は3層に分層でき、第2・3層埋土には炭や焼土を含んでいた。出土遺物の多くは南側のテラス上面から出土している。

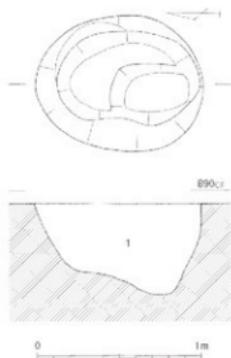
遺物には429～434の土器や、S169の泥質ホルンフェルス製の柱状片刃石斧がある。429～431は緩く外反する口縁部端に刻目を巡らす甕。431の甕には屈曲部にヘラ挿きの沈線が1条認められる。出土遺物から弥生時代前期後葉には埋没した土壌であると思われる。(松尾)



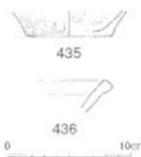
第289図 土壌22 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

## 土壌23 (第197・290図)

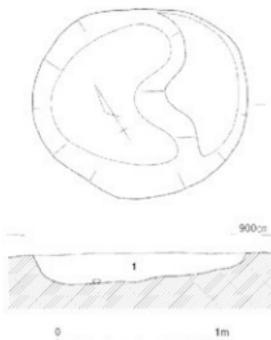
14Mの南東で土壌22の南西に位置する。平面形は長軸1.02m、短軸82cmを測る楕円形を呈する。断面形は検出面から底面までの深さ56cmを測り、南側が一段深くなっている。埋土は単層で炭が少量含



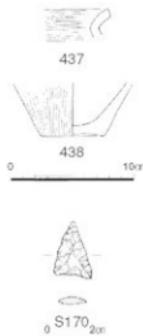
第290図 土壌23 (1/30)・出土遺物 (1/4)



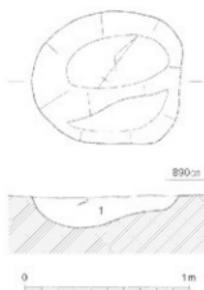
1 灰黄色粘質土(HOYR1.1) (炭少含)



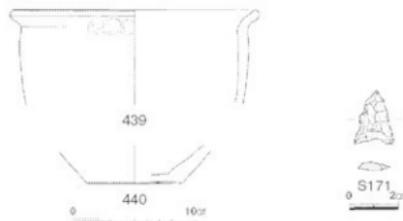
第291図 土壌24 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



1 灰黄褐色粘質土(HOYR2.2) (炭・焼土少含)



第292図 土壌25 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



1 灰黄褐色粘質土(HOYR2.2) (炭・焼土少含)

まれていた。

遺物は435・436の土器細片のみ。詳細な時期は不明であるが、弥生時代中期の土壌であろう。(松尾)

土壌24 (第197・291図)

14Mの南東端で土壌22の南東に位置する。平面形は長軸1.31m、短軸1.16mを測る楕円形を呈する。断面形は東側にテラスを有し、西側が一段深くなる。深さは検出面から底面まで18cmを測る。

遺物は437・438の土器片と石鍬S170が出上している。

出土遺物等から弥生時代中期中葉には埋没した土壌であろう。(松尾)

土壌25 (第197・292図)

14Mの南東隅で土壌24の南隣、後述する土壌26の北端一部を切って確認した。平面形は長軸90cm、短軸80cmを測る不整形円形を呈する。断面形は東にテラスを有し、北西側に深くなる。深さは検出面から底面までの深さ18cm。

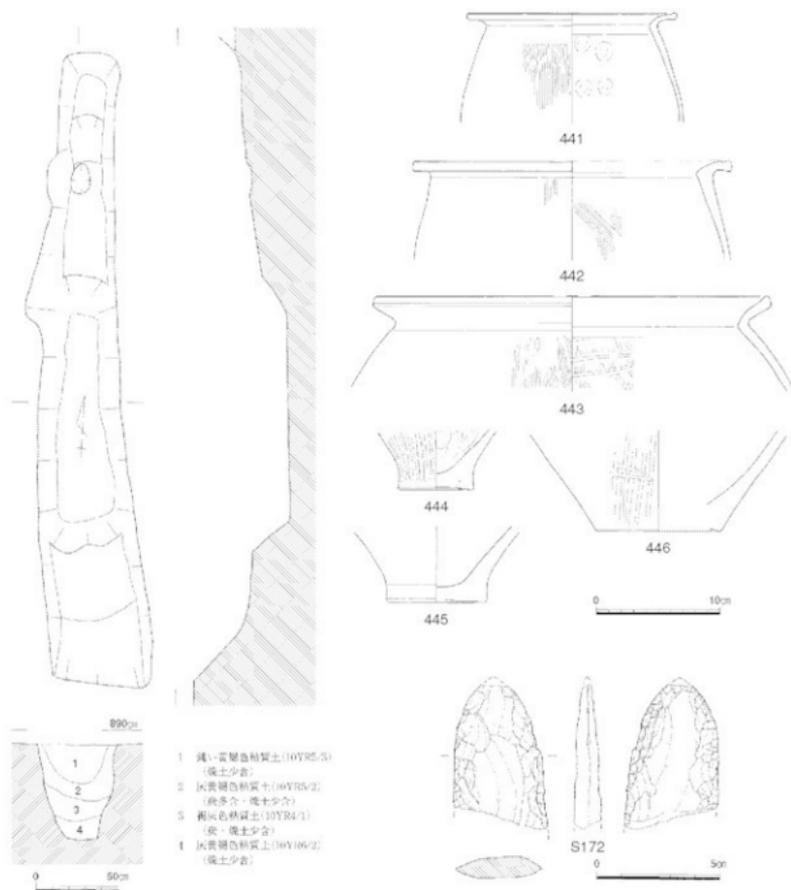
出土遺物には土器439・440、石鍬S171がある。

検出状況や出土遺物などから、弥生時代中期前半には埋没した土壌であると思われる。(松尾)

## 土壙26 (第197・293図)

14Mの南東隅に位置し、土壙25と北端の一部が重なっており、本遺構の方が古いという認識で調査を進めた。平面形は長さ3.86m、幅約50cmを測る南北に長い溝状を呈している。断面形は北側に2段、南側に1段のテラスを有し、中央やや南寄りに逆台形に窪んだ箇所がある。最も深い底面は検出面からの深さ58cmを測る。いわゆる舟形土壙であると考えられる。

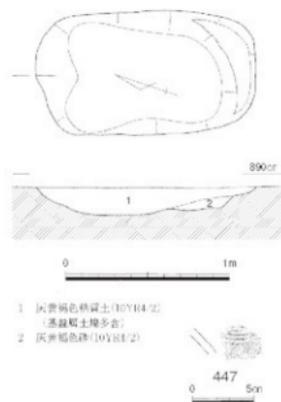
遺物は上器441~446、槍状石器S172が出土した。441~443は甕で口縁部をヨコナデし、端部には若干の面をもつ。444・445は甕底部。検出状況や遺物の諸特徴などから、弥生時代中期中葉には埋没した土壙であると思われる。(松尾)



第293図 土壙26 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壌27 (第197・294図)

14M南東隅で検出し、土壌26の東隣に位置する。平面形は長軸1.34m、短軸75cmを測る隅丸方形を呈する。断面形は南東隅にテラスを有し、底面へと緩やかに下がる。検出面から底面までの深さは17cmを測る。



第294図 土壌27 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

出土遺物はヘラ描き沈線文を有する甕の体部片のみ。弥生時代前期の土壌である。(松尾)

土壌28 (第197・295図)

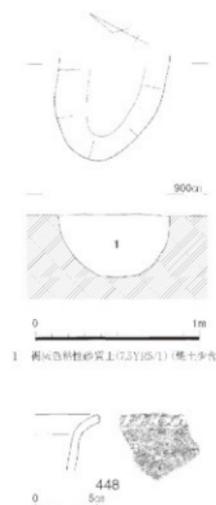
16M西端で竅穴住居5の東隣に位置する。土壌の東側は調査区外に延びているため、全体をうかがうことはできない。残存長約60cm、幅68cmを測る。断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さ38cmを測る。遺物は448の土器のみ。448は甕の口縁部から体部上半にかけての破片で、口縁端部に刻目が巡る。弥生時代前期後葉であろう。(松尾)

土壌29 (第197・296図)

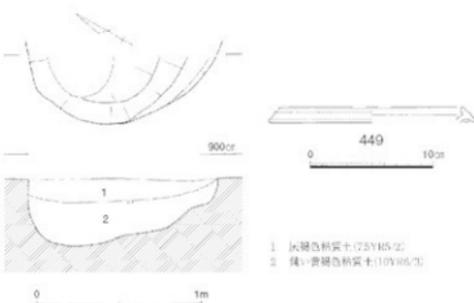
16M南西に位置し、東側の約半分が調査区外に延びている。全体をうかがうことはできないが、最も残存している長さは1.11mを測る。断面形は南側の底面が凸凹しており、北端が最も深い。検出面から底面までの深さは41cmを測る。遺物は449の上器片のみ。甕の口縁部破片から弥生時代中期末には埋没した土壌であると思われる。(松尾)

土壌30 (第197・297図)

16O北西で、後述する土壌32の西に位置する。平面形は長軸1.7m、短軸74cmを測る不整形長方形を呈する。断面形は西端が一段低くなり、壁面は上方に向かって緩やかに立ち上がる。検出面から底面までの深さは28cmを測る。埋土は上下2層に分層することができ、どちらの埋土にも炭片が含まれて



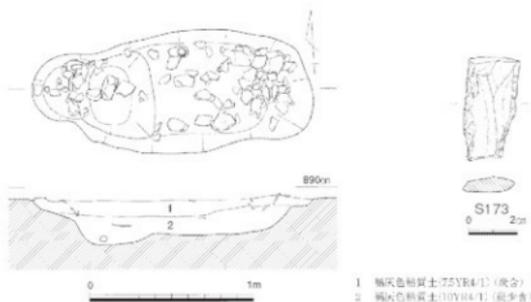
第295図 土壌28 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)



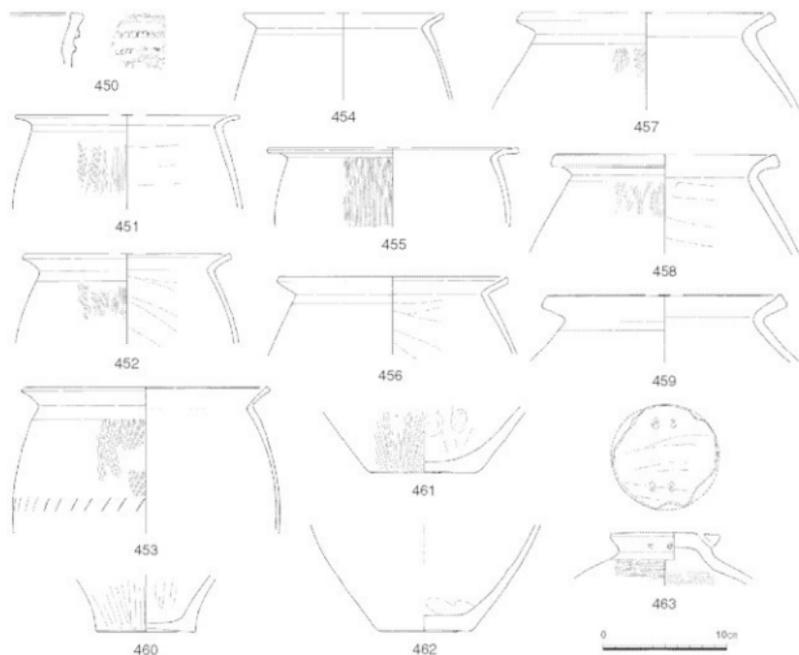
第296図 土壌29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

いた。遺物は第1層中あるいは第2層上半からの出土が多く、底面付近からの出土は少ない。いずれも細かく割れた土器が多く、完形に復元できたものは皆無であった。450は頸部に貼付突起帯を巡らす短頸壺。451～459は強いヨコナデにより口縁部を「く」字に成形する甕。口縁端部を丸くおさめるものや端部に面を有するものなどバリエーションがある。調整は体部外面上半がタテハケ、内面はナデを行っているものが多い。土器以外の遺物としては、槍状石器S173がある。

弥生時代中期中葉の古相段階の土器と共に、埋没した土壌であると考えられる。(松尾)



1 黒灰色粘質土(75YR4/1) (成合)  
2 褐色粘質土(10YR4/1) (粘土層)



第297図 土城30 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

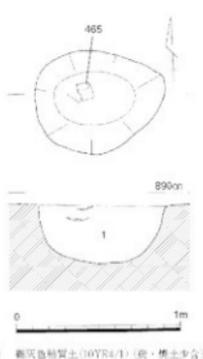
土壙31 (第197・298図)

16O北西で、後述する土壙32中央を切って検出した土壙である。平面形は長軸79cm、短軸64cmを測る不整楕円形を呈する。断面形は平坦な底面から上部へ急角度で壁面が立ち上がっていた。検出面から底面までの深さは35cmを測る。遺物は土器破片のみで、いずれも埋土上半より出土した。弥生時代中期後半には埋没した土壙であると思われる。(松尾)

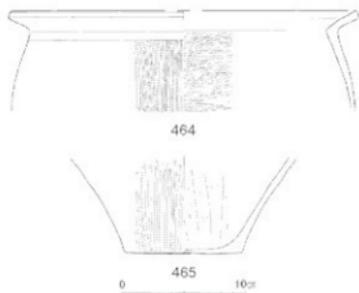
土壙32 (第197・299・300図)

16M・O北西に位置し、土壙31や後述する土壙33に切られていることを確認している。平面形は長軸2.8m、短軸50cmを測る溝状を呈していた。断面形は2段に落ち込んでおり、北端にテラスを有す。検出面から底面までの深さは64cmを測る、いわゆる舟形土壙と呼ばれる遺構である。

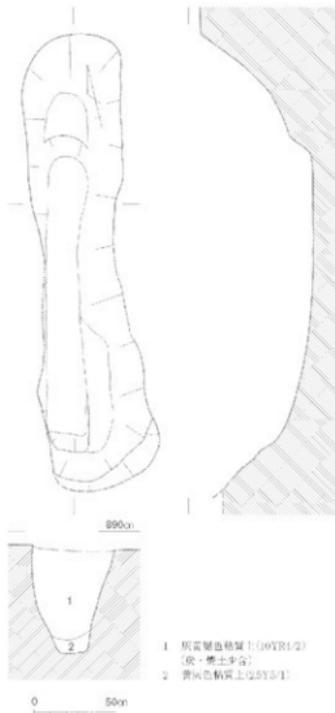
出土土器466～478は底面より浮いた状態で出土しており、完形に復元できるものは皆無であった。466～476は甕で、口縁端部を丸くおさめた466があるものの、467～473の口縁端部はいずれも肥厚し、面をもっている。473の口縁部には棒状浮文がみられ、頸部には指頭瓦痕文突起帯が巡る。478は高杯の脚部である。弥生時代中期中葉の土器と共に埋没した土壙であろう。(松尾)



1 新灰色粘質土(00YR4/1) (松・橋土多会)

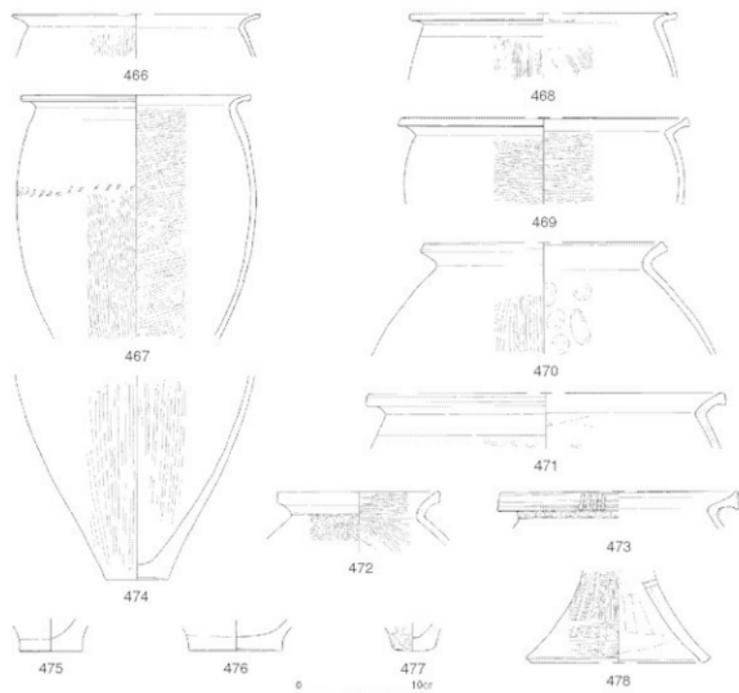


第298図 土壙31 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰黄色粘質土(00YR1/2)  
(松・橋土多会)  
2 黄灰色粘質土(2.5Y5/1)

第299図 土壙32 (1/30)



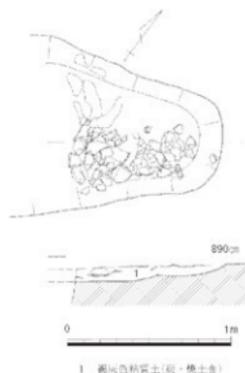
第300図 土壌32出土遺物 (1/4)

## 土壌33 (第197・301・302図)

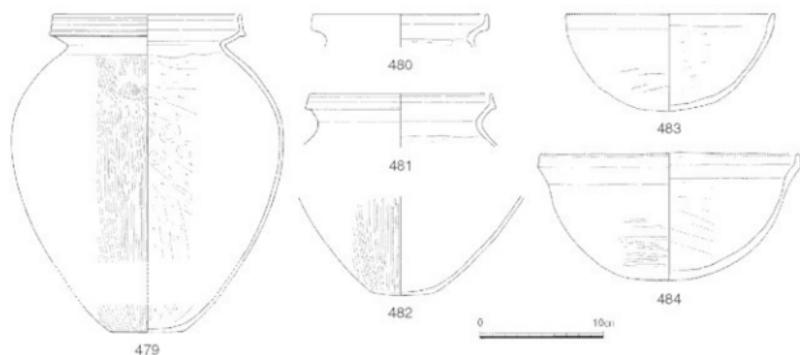
160北西に位置し、西側は井戸1の東に隣接して確認した。平面形全体をうかがうことはできないが、残存長1.12m、最大幅1.08mを測る。南西にやや開き気味の不整長方形で、断面形は検出面から底面までの深さ8cmを測る皿形。埋上上半からは細かく割れた土器が出土し、北西側には井戸1に見られる白色粘土塊が分布していた。

遺物は479～484などの土器片のみ。479～482は甕。483・484は鉢である。479～481は二重口縁をもつ甕。483は碗形、484は二重口縁で、内面は斜め方向にヘラケズリを行う。

土器の諸特徴から、井戸1とはほぼ同じ時期であり、機能等の特定は出来なかったものの、井戸1に付属する施設と考えることもできるのではなかろうか。弥生時代後期末。(松尾)



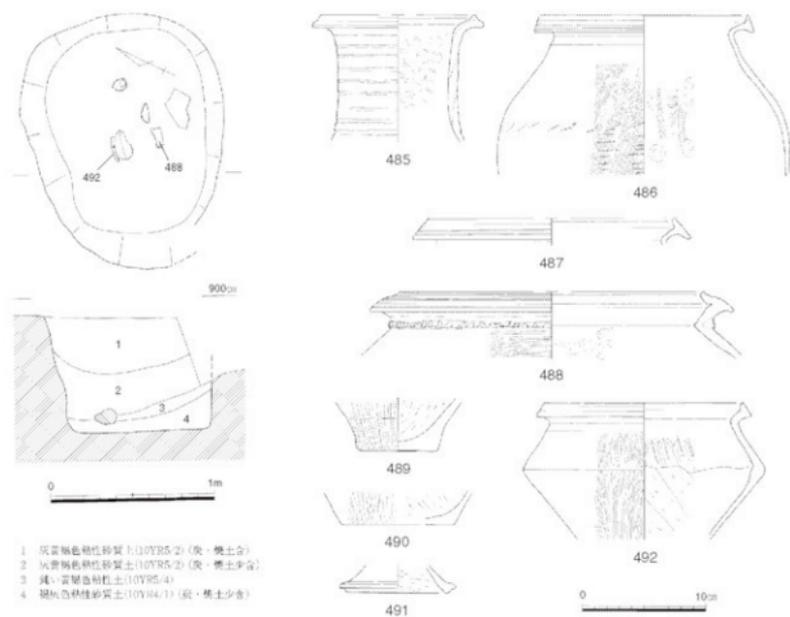
第301図 土壌33 (1/30)



第302図 土壙33出土遺物 (1/4)

土壙34 (第197・303図)

160北端に位置する土壙で、東側の一部が側溝により切られている。平面形は長軸1.56m、短軸1.1mを測る不整楕円形。断面形は逆台形を呈し、平坦な底面から壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面



第303図 土壙34 (1/30)・出土遺物 (1/4)

から底面までの深さは70cmを測る。

出土遺物の多くは埋上第3層上面より出土した。485は頸部にヘラ描沈線を巡らす長頸壺。486～490は甕。486～488は上下に拡張した口縁部に凹線文が巡る。486の体部にはハケ調整前のタタキが観察できた。491は肥厚した端部を有する高杯の脚部。492は台付鉢。土器の特徴から、弥生時代後期初頭の土器である。(松尾)

#### 土壙35 (第197・304図)

16O北端に位置し、土壙34の南西で確認した。北半分を側溝や後世の遺構により切られており、平面形は不明であるが、最大幅は50cmを測る。断面形は平坦な底面からやや斜めに壁面が立ち上がり、検出面から底面までの深さは31cmを測る。詳細な時期は不明。弥生時代の遺構である。(松尾)

#### 土壙36 (第197・305図)

16O北西に位置する土壙で、調査の都合上掘削した側溝により西側と南側の状況は不明である。最大幅は1.2m、検出面から底面までの深さは11cmを測る。

出土遺物は少なく、493の甕など小破片のみ。弥生時代後期の土器であろう。(松尾)

#### 土壙37 (第197・306・307図)

16O北西で、土壙35と土壙36の中間に位置する。平面形は長軸1.37m、短軸79cmを測る楕円形。底面は中心から東側が平坦であるが、西側は上方に向かってやや傾斜している。壁面はほぼ垂直であり、検出面から底面までの深さは44cmを測る。

第306図に図示しているのは、埋上の第3層上面あるいは第2層中から出土した土器の出土状況である。なお土壙底面からの土器出土は認められなかった。

出土遺物には494～500の土器がある。広口壺494は上下に拡張した口縁部外面に凹線・円形浮文・棒状浮文が巡り、内面には櫛描波状文が施



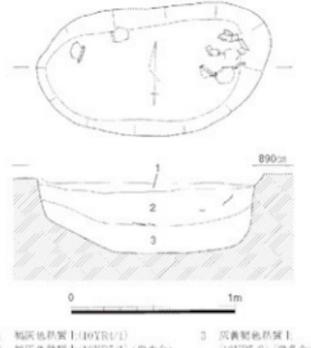
1 褐色粘板土(75YR5/1)

第304図 土壙35 (1/30)



1 灰青褐色粘板土(10YR3.2)(灰多含)

第305図 土壙36 (1/30)・出土遺物 (1/4)

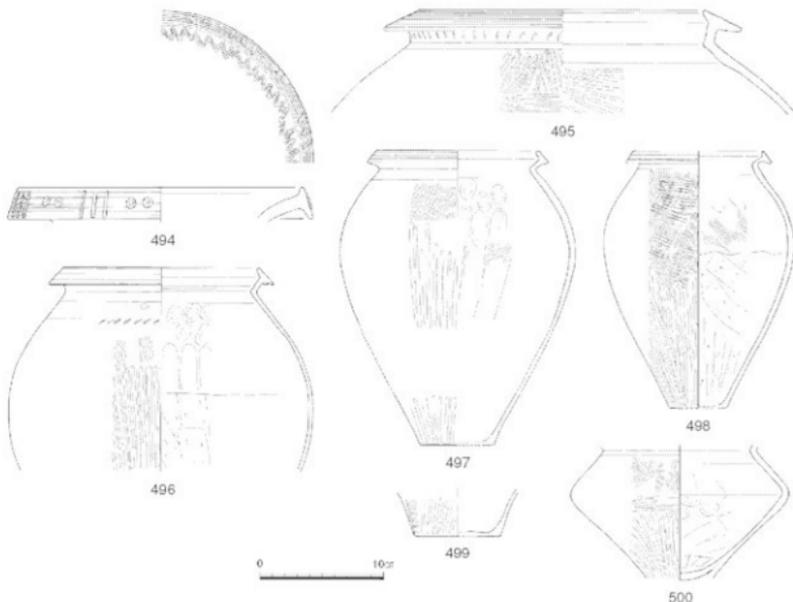


1 褐色粘板土(10YR1/1) 3 灰青褐色粘板土(10YR3.2)(灰多含)

2 褐色粘板土(10YR3.1)(灰多含)

第306図 土壙37 (1/30)

される。甕496～498は上方あるいは上下に拡張した口縁部外面に凹線を巡らせ、体部内面下半のヘラケズリが顕著である。弥生時代中期末に埋没した土壌である。(松尾)



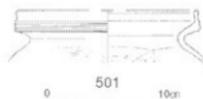
第307図 土壌37出土遺物 (1/4)

土壌38 (第197・308図)

160北端で、土壌34・土壌35の南西に位置する。東側の一部が側溝により切られているが、長軸推定2.4m、短軸96cmを測る長方形を呈すると思われる。断面形は検出面から底面までの深さ36cmを測る逆台形で、埋土第2層と第4層の間に薄い炭層が堆積している。甕501が出土していることなどから、弥生時代後期後葉の土壌であると推察される。(松尾)



第308図 土壌38 (1/60)・出土遺物 (1/4)

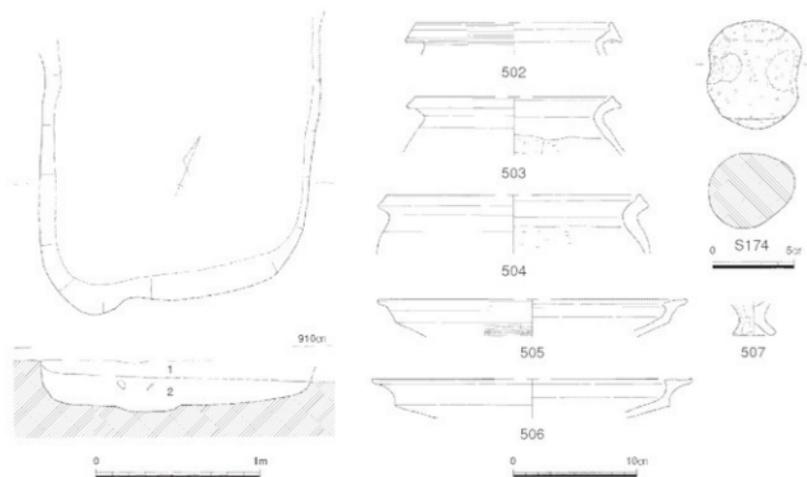


- 1 縄文青褐色砂器土甕(10YR6/5)
- 2 縄文青褐色胎質土(10YR5/2)(嵌合)
- 3 炭層
- 4 縄文青褐色胎質土(10YR6/3)  
(基盤部土層内)

土壌39 (第197・309図)

160北寄りで検出した土壌で、後述する溝14を切って確認した。平面形は北端が側溝により切られているため明確でないが、長軸1.7m以上、短軸1.65mで、隅丸方形を呈するものと思われる。断面形は中央部に若干の凹凸が見られるものの、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物には502～507の土器や石器S174が出土

した。口縁部を上下に拡張する502や口縁部の拡張が少ない503・504などの甕、505・506の肥厚・拡張した口縁端面に凹線を巡らす高杯やミニチュア507などがある。S 174は斑状流紋岩製の石鐘。弥生時代後期前葉には埋没した土壌である。(松尾)

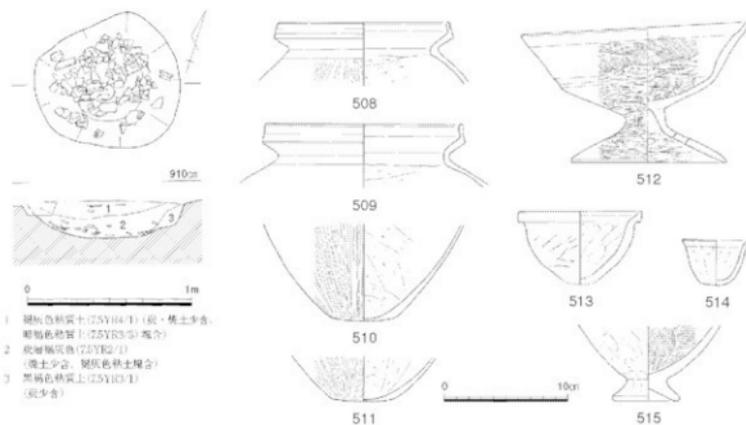


1 赤黄褐色粘状砂質土(10YR5-2) 2 褐色粘状土(7.5YR5-1)

第309図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

#### 土壌40 (第197・310図)

160の中央で、後述する土壌41を切って検出した。平面形は長軸90cm、短軸83cmを測る不整形長方形



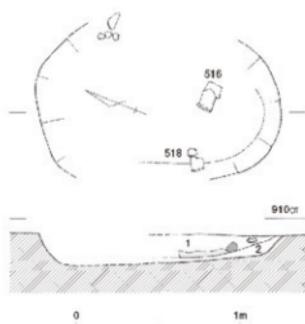
1 褐色粘状土(2.5YR5-1) (粘・焼土少含)  
 2 赤黄褐色粘土(2.5YR5-2) (粘少含)  
 3 黒褐色粘状土(2.5YR3-1) (粘少含)

第310図 土壌40 (1/30)・出土遺物 (1/4)

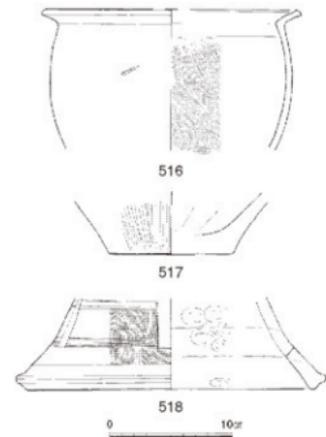
で、断面形は底面に凹凸があるややいびつな皿状を呈している。埋土は3層に分層することができ、第2層である炭層中から多くの上器片や井戸1・土壌33で認められた様な白色粘土塊が出土した。出土遺物の多くは508～515の上器片である。508・509は口縁が上方に大きく直立した甕で、508には門線が、509にはヨコナデが顕著に認められる。510・511は甕底部。512は外反した口縁にやや深い杯部を有した高杯で、脚部には4方向に門孔が認められる。513は鉢、514はミニチュア鉢、515は台付鉢である。弥生時代後期末の上層である。(松尾)

土壌41 (第197・311図)

160中央で、土壌40により中央やや北寄りを切られていた。平面形は明らかにしがたいが、長軸1.48m、短軸推定95cmを測る楕円形を呈すると推察される。断面形は検出面から底面までの深さ16cmを測る皿状。埋土は上下2層に分層することができ、土器は第2層上面から多く出土している。なお、第1層中には炭や焼土が多く含まれていた。



1 灰青褐色粘質土(10YR5/2) (灰・焼土多量)  
2 黄い黄褐色粘質土(10YR5/4)



第311図 土壌41 (1/30)・出土遺物 (1/4)

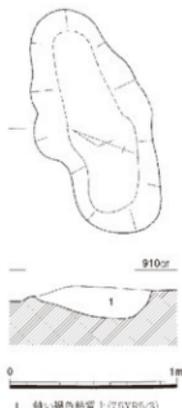
出土土器には甕516や器台518などがある。弥生時代中期後葉占段階には埋没した土壌であろう。(松尾)

土壌42 (第197・312図)

160中央、上層40・41の南に位置し、掘立柱建物1や掘立柱建物2の柱穴により東側の一部が壊されている。平面形は長軸1.4m、短軸71cmを測る不整形円形で、断面形は南に傾斜する底面とそこから上方に立ち上がる壁面を観察することができる。弥生時代中期前半の土壌であると思われる。(松尾)

土壌43 (第197・313図)

160中央で、土壌42の南を切っていることを確認して検出した。平面形は長軸57cm、短軸50cmを測る不整形円形。遺物が検出面よりやや浮いた形で出土しているため掘り方は不明瞭であり、埋土も確認できていない。

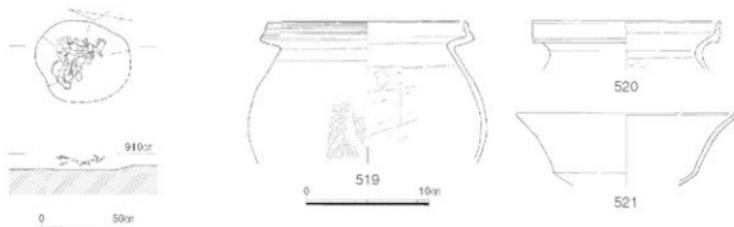


第312図 土壌42 (1/30)

出土遺物は土器のみで、いずれも細かく割れた破片ばかりであった。そのため完形に復元できたものではなく、上器519～521はその内でも実測に耐えうる

もののみを掲載している。

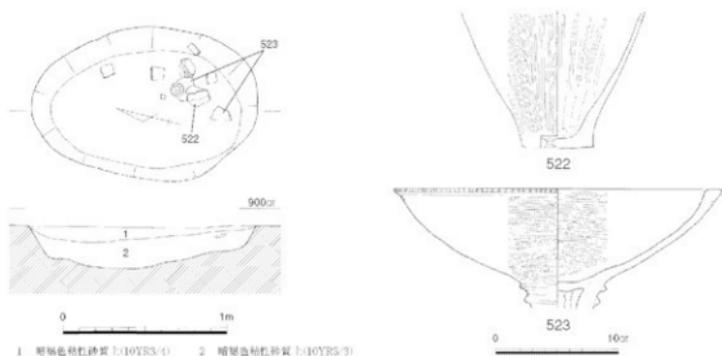
519・520は二重口縁を有する甕で、外面はタテハケ調整を内面はヘラケズリが顕著である。521は外反する口縁に深い杯部をもつ高杯。弥生時代後期末の土壌である。(松尾)



第313図 土壌43 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 土壌44 (第197・314図)

160中央やや南西寄りで見出した土壌で、後述する土壌45や土壌46を切って検出した。平面形は長軸1.38m、短軸94cmを測る楕円形。断面形は凸凹している底面からやや傾斜をもって立ち上がる壁面を有する。埋上は上下2層に分層でき、図示した遺物の上出状況は第2層上面で確認したものである。出土遺物は土器のみで、甕底部522は底部穿孔が認められ、内外面共にていねいなタテ方向のヘラミガキを行う。高杯523は口縁部を水平に肥厚させ、端部には刻目が、杯部から脚部への屈曲部には貼付突帯が巡る。杯部内外面共にていねいなヨコ方向のヘラミガキを行っている。弥生時代中期中葉には埋没した土壌である。(松尾)



第314図 土壌44 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 土壌45 (第197・315図)

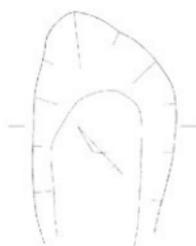
160中央南西寄りに位置し、土壌44により南西部を壊されている。平面形は残存長1.6m、幅82cmを測る不整楕円形を呈する。断面形は楕形を呈し、検出面から底面までの深さは16cmを測る。出土遺物

は土器524～526、石甌S175がある。弥生時代中期前半の土壌であろう。

(松尾)

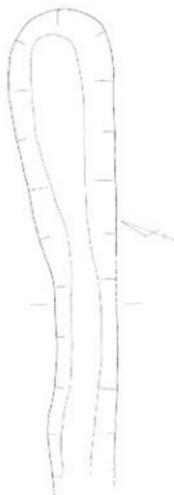
土壌46 (第197・316図)

160中央南西寄りで検出し、土壌44により一部切られていることを確認している。西側は調査区外へ延びているため全体形は不明であるが、残存長2.82mで幅は39cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは28cm。いわゆる舟形土壌と称される遺構である。



0 1m

1 褐色粘質砂土(73YR4/1) (微少含)



遺物は土器527・528や石甌S176が出土している。弥生時代前期後葉の遺構である。

(松尾)

土壌47 (第197・317図)

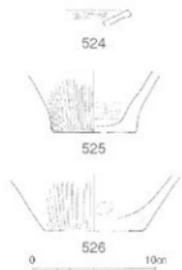
160南端で、竪穴住居8・9に隣接していた。平面形は長軸2.05m、短軸1.05mを測る不整楕円形。断面形は東西それぞれにテラスを有し、最も低い部分で検出面からの深さが24cmを測る楕形を呈する。

出土遺物は529～532の土器のみであった。529は短く外反する口縁部に、大きく横へ張る体部を有する甕。外面には体部上半に1条沈線が巡る。内外面共に細かい横方向のヘラミガキ調整を行っている。弥生時代前期後葉には埋没した土壌である。

(松尾)

土壌48 (第197・318図)

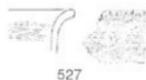
160南東で、竪穴住居7を切って検出した。平面形は長軸92cm、短軸75cmの不整楕円形で、断面は東西それぞれのテラスから緩やかに底面へと下がっている。検出面から底面までは36cmを測る。



0 10cm



1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)



527



0 10cm

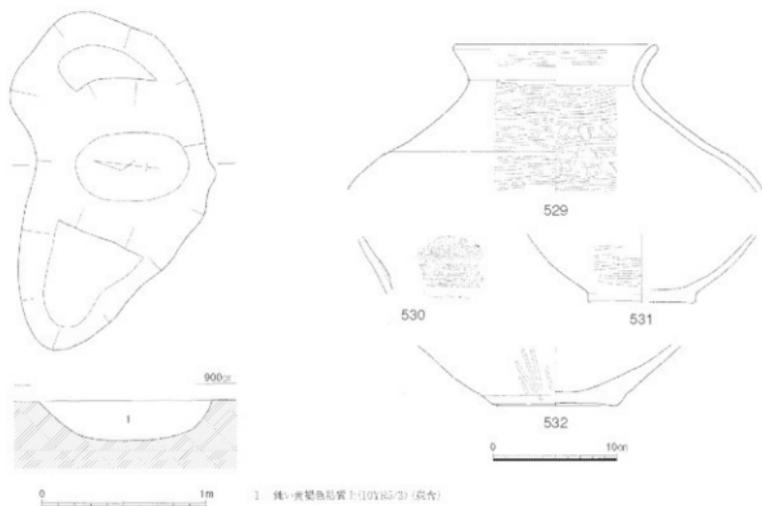


0 S176 2cm

第315図 土壌45 (1/30)・  
出土遺物 (1/4・1/2)

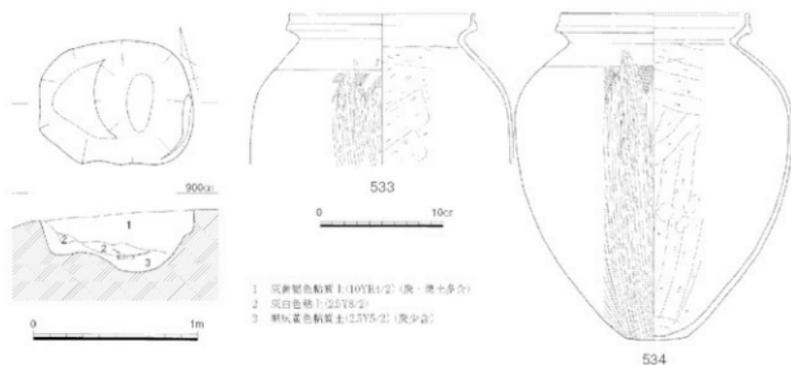
第316図 土壌46 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

遺物には二重口縁を有する甕533・534があり、第2層(灰白色粘土)下部より出土した。この灰白色粘土は井戸1や土壌33において認められたものと酷似している。弥生時代後期末。(松尾)



1 灰白色粘質土(10YR5/2) (灰合)

第317図 土壌47 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰白色粘質土(10YR5/2) (灰・黄土多含)  
2 灰白色粘土(2.5YR4/2)  
3 黒灰色粘質土(2.5Y3/2) (灰少含)

第318図 土壌48 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 土壌49 (第197・319図)

160南東に位置し、竪穴住居8の一部を切って検出している。東側は調査区外へ延びており、西端は古代の溝である溝21により壊されていた。平面は残存長2.2m、幅65cm、断面形は検出面から底面までの深さ13cmを測る逆台形を呈する。いわゆる舟形土壌と称される遺構である。土器535～539は底面

よりやや浮いた状態で出土した。土器の他には石錐S177がある。

検出状況や土器の特徴などから、弥生時代中期中葉には埋没したものと思われる。(松尾)



1 尻尾褐色粘質土(10YR5/2)

第319図 土壌49 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壌50(第197・320図)

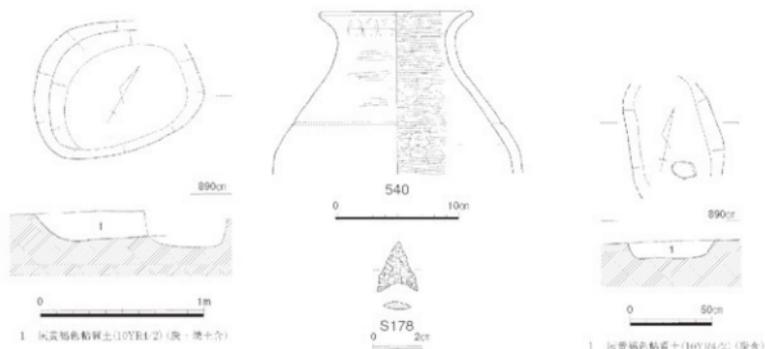
160南東に位置し、竪穴住居10によって切られていることを確認している。北側の一部は後世の柱穴により壊されていた。平面形は長軸1.01m、短軸82cmの不整形。断面形は検出面から底面までの深さ18cmを測り、平坦な底面から上方に向かって緩やかに傾斜している。

遺物は少ないが、壺540や石錐S178が出土している。弥生時代前期中葉の土壌である。

(松尾)

土壌51 (第197・321図)

160南東に位置し、竪穴住居10や土壌49によって切られていることを確認している。周囲には遺構が密集していたため全体の形を明らかにし難いが、平面形は幅54cmを測る楕円形を呈すると思われる。詳細な時期は不明であるが、検出状況から弥生時代の遺構であることは間違いない。(松尾)



1 尻尾褐色粘質土(10YR5/2) (黄・黄土合)

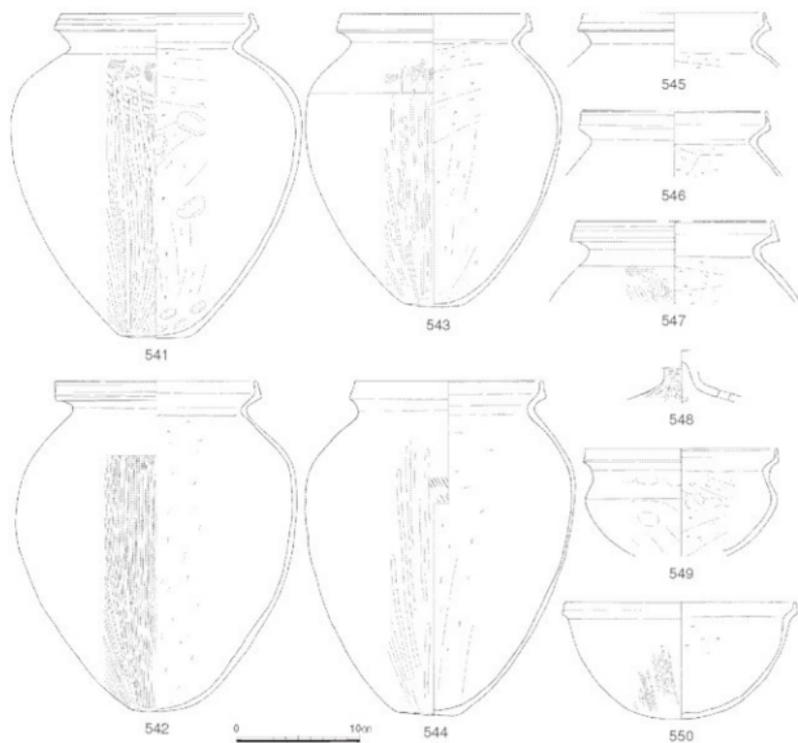
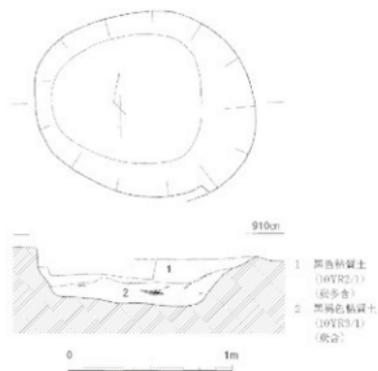
第320図 土壌50 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

1 尻尾褐色粘質土(10YR5/2) (黄土)

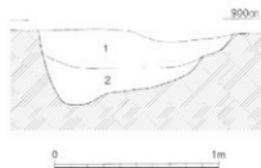
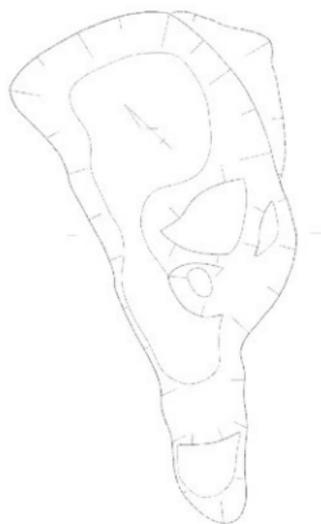
第321図 土壌51 (1/30)

## 土壙52 (第197・322図)

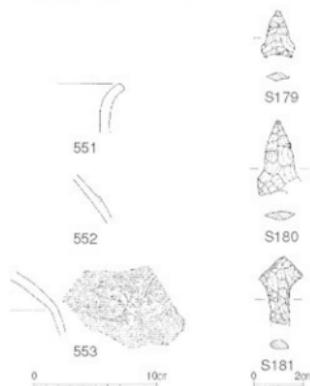
16Q北端で、竪穴住居11北西を切って検出した。西半分が側溝内で検出されたものの、平面形は長軸1.33m、短軸1.14mの楕円形。断面形は底面が平坦で、西壁が直角気味に東壁がやや緩やかに立ち上がった逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは28cmを測る。埋土は2層に分層することができ、どちらの埋土にも炭が含まれていた。遺物は541～550の土器のみ。いずれも第2層中および第2層上面より出土している。土器の特徴から弥生時代後期末。(松尾)



第322図 土壙52 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰青褐色粘質土(10YR5/2) (灰青)  
2 黄い重粘褐色粘質土(10YR5/5) (黄い)



第323図 土壌53 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壌53 (第198・323図)

16Q北東で検出し、北端が溝21によって切られていた。平面形は長軸3.1m、短軸1.2mで、北端が広く南西が狭まる不整形を呈し、断面は所々にテラスを有するもの、比較的西側が深く、最も深い部分で検出面から底面までの深さは45cmを測る。

いわゆる舟形土壌と呼ばれる遺構であると思われる。遺物は少なく、551～553の土器片やS179～181の石器がある。上器は頸部や体部に段を有するもの(551・552)や、体部にヘラ描きの重弧文を配するもの(553)がある。弥生時代前期前半には埋没した土壌であろう。(松尾)

土壌54 (第198・324図)

16Q北東に位置し、後述する土壌57を切って検出した。平面形は長軸93cm、短軸53cmの不整形円形で、断面形は検出面から底面までの深さ12cmを測る逆台形を呈している。

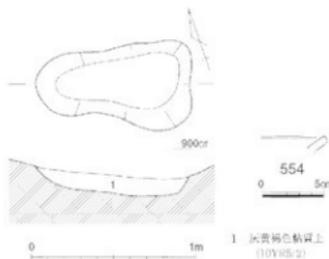
出土遺物は土器小片のみで、堯554が唯一図化できた。出上土器の諸特徴から弥生時代中期中葉には埋没した土壌であると考えられる。(松尾)

土壌55 (第198・325図)

16Q北東で後世の遺構により上半部を壊されている。後述する溝6を切って検出した。

平面形は長軸1.33m、短軸50cmの不整形円形。断面形は底面までの深さ9cmが残存し、筒形を呈すると思われる。

出土遺物は少なく土器小片のみ。弥生時代後期の上層である。(松尾)



第324図 土壌54 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壙56 (第198・326図)

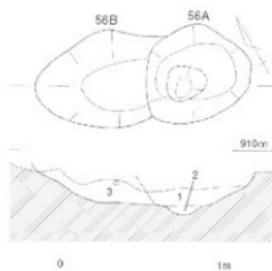
16Q北東で後述する土壙57を掘り上げた後に検出した。当初1つの遺構として認識していたが、断面観察から、2つの土壙(56A・B)が重なっており、AがBを切っていることを確認している。平面形は56Aが長軸63cm、短軸61cmの不整形形、56Bが長軸66cm以上、短軸60cmの不整形形を呈する。断面形は56Bが逆台形。56Aは東壁が緩やかに西壁が急に立ち上がり、中央やや西寄り有一段深くなっていた。遺物は土器小片555・556のみ。弥生時代前期後半である。(松尾)

## 土壙57 (第198・327図)

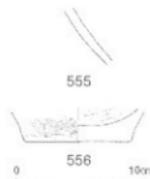
16Q北東で土壙55と古代の溝6に切られていることを確認している。特に北東端は溝6に壊されているため全体形は不明。平面形は残存長軸2.8m、短軸1.27mの溝状を呈し、断面形は検出面から底面までの深さ28cmを測る皿形。遺物は557~559の土器片。甕557は口縁端部刻目、体部にヘラ描き沈線を施す。559は壺蓋。弥生時代前期後半。(松尾)

## 土壙58 (第198・328図)

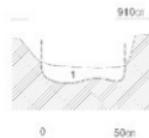
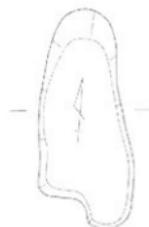
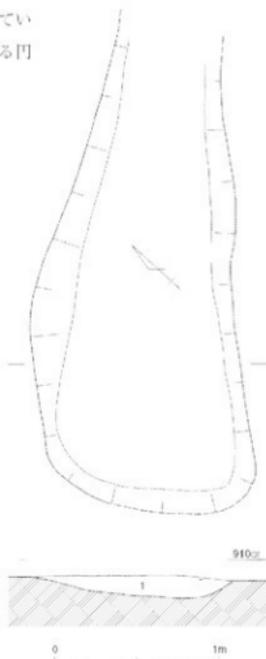
16Qと18Qの境で土壙57の東に位置する。西半分が後世の柱穴と溝6により壊されているもの、平面形は残存直径1.08mを測る円



- 1 緑灰色粘質土(7JY104-1) (産・粘土多含)
- 2 灰黄色粘質土(10YR5/2)
- 3 黄灰色粘質土(7JY5/1) (産・粘土多含)



第326図 土壙56(1/30)・出土遺物(1/4)



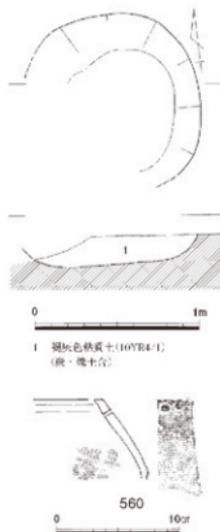
- 1 灰黄色粘質土(10YR5/2)

第327図 土壙57(1/30)・出土遺物(1/4)

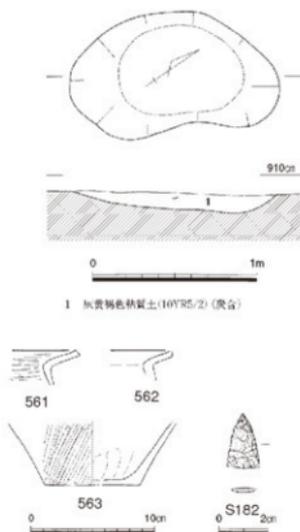


- 1 灰黄色粘質土(10YR4/2)

第327図 土壙57(1/30)・出土遺物(1/4)



第328図 土壙58 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)



第329図 土壙59 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

形であると推察される。断面形は検出面から底面までの深さ28cmを測る逆台形を呈する。遺物は少なくとも土器小片のみ。無頸壺560は肩部外面に円形浮文が巡り円孔が1つ残存している。弥生時代中期中葉の土壙である。(松尾)

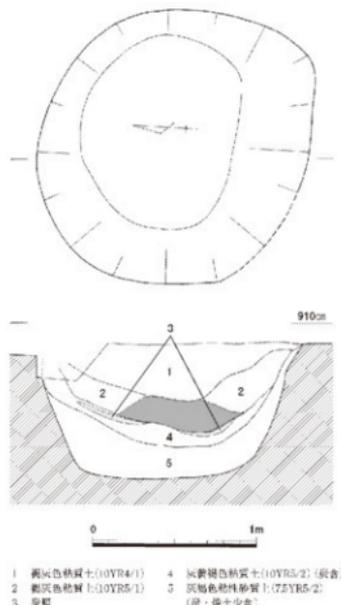
土壙59 (第198・329図)

16Q東端で、後述する土壙60の北東端を切って検出している。平面形は長軸1.25m、短軸70cmの不整形円形。断面は検出面から底面までの深さ11cmを測り、壁面北東側がやや急に南西側は緩やかに立ち上がっている。埋上は灰黄褐色粘質土で炭を含んでいた。

遺物は土器片561～563、石鏃S182がある。甕561は口縁部と体部上半内外面に横方向のヘラミガキ調整を行っている。弥生時代中期中葉の土壙である。(松尾)

土壙60 (第198・330・331図)

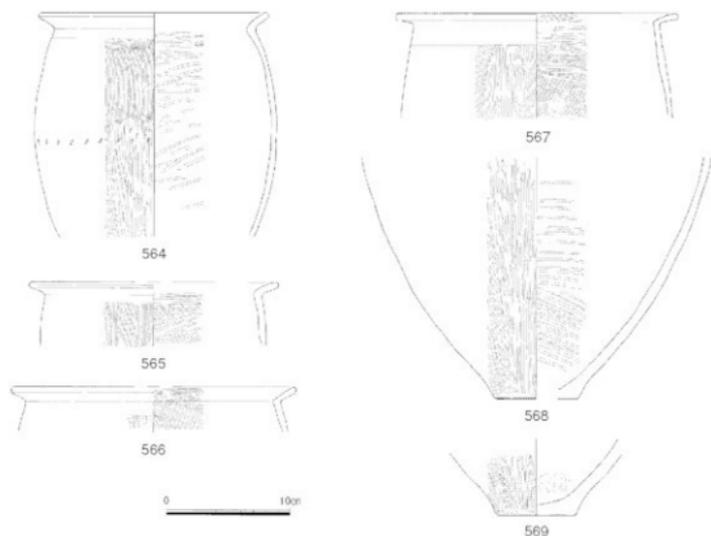
16Q東端に位置し、北東端は土壙59により切られていた。平面形は長軸98cm、短軸94cmの不整形円形を呈している。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは89cmを測る。埋上は5層に分層することができ、第2層中には焼土塊が多く含まれ、第2層下面に



第330図 土壙60 (1/30)

は炭層（第3層）が薄く堆積していた。

出土遺物は564～569の上器があり、いずれも第2層以下から出土している。甕564～567は口縁部をヨコナデし、体部外面上半をタテハケ、下半はタテ方向のヘラミガキ、体部内面はヨコハケのちヨコ方向のヘラミガキを行っている。564体部外面には刺突文が巡る。土器の諸特徴から弥生時代中期中葉古段階に埋没した土壌であると推察される。（松尾）

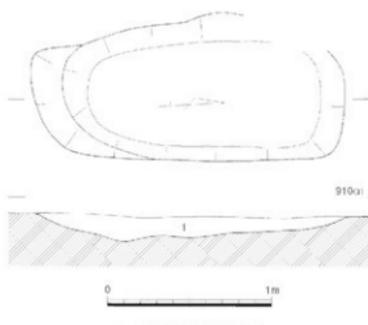


第331図 土壌60出土遺物（1/4）

#### 土壌61（第198・332・333図）

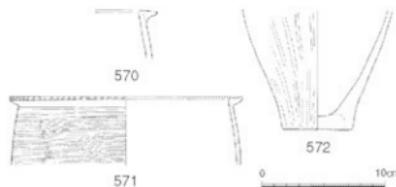
16Q東端で、北西の一部を土壌60により壊されていることを確認している。平面形は長軸1.9m、短軸90cmを測る不整形長方形。断面は底面にやや凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がる。検出面から底面までの深さは16cmを測る。

遺物は570～572の上器片が出土した。甕570・571は逆L字状口縁をもつ。571の口縁端部には刻目が巡り、体部外面上半には櫛描沈線が施されている。572の外面にはタテ方向のヘラミガキが行われている。弥生時代中期前葉の土壌である。（松尾）

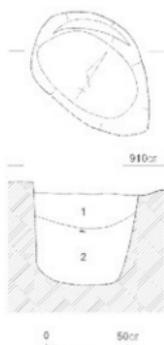


1 灰青褐色粘質土(10YR6/2)

第332図 土壌61（1/30）

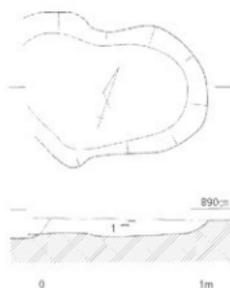


第333図 土壌61出土遺物 (1/4)

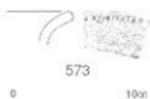


- 1 灰黄色粘質土 (0YR5/2) (粘土)  
2 黒灰色粘質土 (10YR4/1) (粘土)

第334図 土壌62 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 黒灰色粘質土 (10YR5/1) (粘土)



土壌62 (第198・331図)

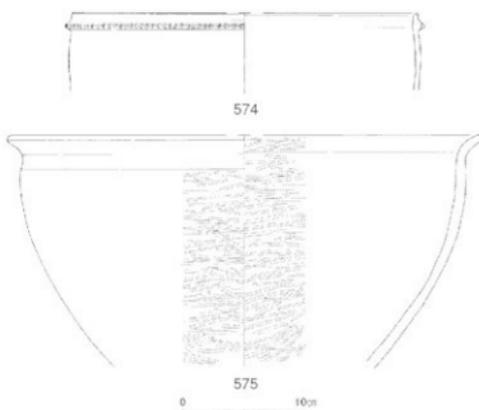
16Q東端で土壌61の南西に位置する。南東隅をトレンチにより壊されているものの、平面形は長軸70cm、短軸65cmを測る不整楕円形を呈する。断面形は筒形で、検出面から底面までの深さは56cmを測る。埋土は上下2層に分層することができ、どちらの埋土にも炭が含まれていた。

遺物は少なく、甕の口縁部破片573のみを図化することができた。口縁端部に刻目が巡っている。弥生時代前期後半の土壌である。(松尾)

土壌63 (第198・335図)

18Q西端に位置し、西側を古代の溝により壊されている。平面形は残存長軸1.1m、短軸77cmを測る不整楕円形。断面はやや凹凸のある底面から緩やかに上方へ上がる壁面を有する。検出面から底面までの深さは11cmを測る。

遺物は土器のみの出土。574は口縁端部や下に刻目突帯が巡る。胎土などから弥生時代のものであると思われる。575は内外面にていねいな横方向のヘラミガキ調整を行った鉢。土器の諸特徴から弥生時代前期の土壌であると推察される。(松尾)

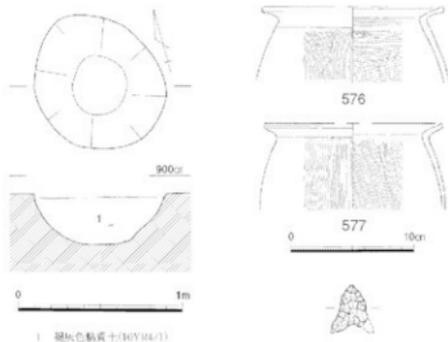


第335図 土壌63 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壌64 (第198・336図)

18Q西端で、堅穴住居15の北に隣接する。平面形は直径80cmの円形。断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さは29cmを測る。

遺物は上器576・577や石鏡S183が出土している。堯576・577は体部外面タテハケ、内面は576が横方向のヘラミガキを行ない、口縁端部はやや肥厚している。弥生時代中期中葉古段階の土壌であろう。(松尾)



第336図 土壌64 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

## 土壌65 (第198・337図)

18S北西隅で検出した土壌で、東側を溝21に、西側は溝46にそれぞれ壊されており、長軸1.6m、短軸65cmがかるうじて残存していた。底面はやや凹凸があり、北側へいくほどに深くなる。検出面から底面までの深さは16cmを測る。弥生時代の遺構である。(松尾)

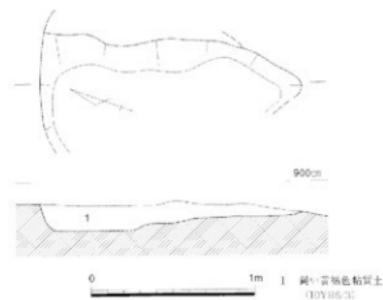
## 土壌66 (第198・338図)

18S中央北寄りに位置し、後述する土壌67・68の北側で検出した。西側は中世の溝45により壊されているため、本来の平面形は不明。残存している平面形は長軸1.16m、短軸82cmの不整楕円形を呈している。断面は中央部に落ち込みがあり、検出面から底面までの深さは27cmを測る。

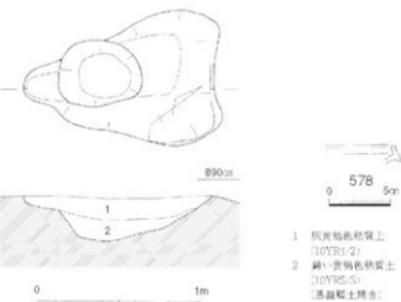
出土遺物は少なく、図化できたのは堯578のみ。弥生時代中期末から後期初頭にかけての土壌である。(松尾)

## 土壌67 (第198・339図)

18S中央やや北寄りに位置し、土壌66の南側で検出した。平面形は長軸1.05m、短軸69cmを測る隅丸長方形。断面は平坦な底面から緩やかに上方へ上がる壁面を有し、検出面から底面までの深さは13cmを測る。出土遺物は上器のみで、いずれ

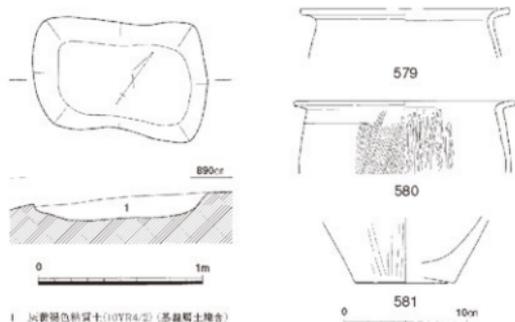


第337図 土壌65 (1/30)



第338図 土壌66 (1/30)・出土遺物 (1/4)

も破片であった。579・580は堿上半部の破片。口縁部は強いヨコナデを行っている。弥生時代中期中葉の上廣であろう。



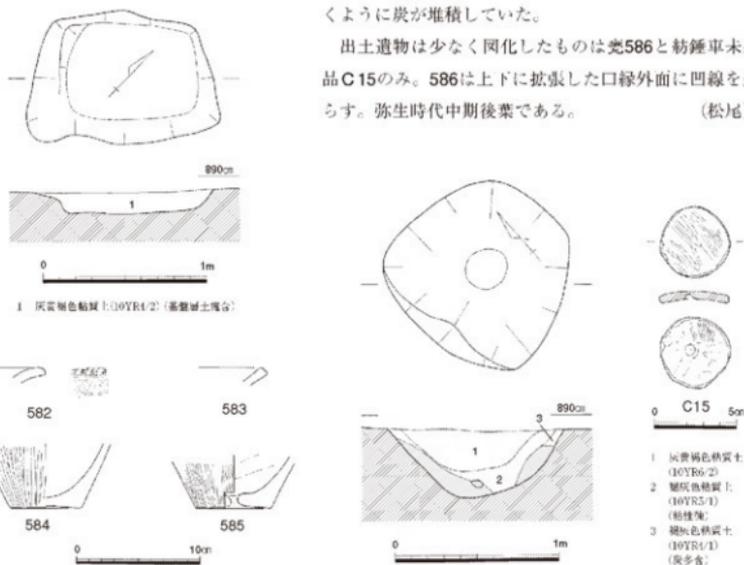
1 灰青褐色粘質土(10YR4/2) (基盤層土埋合)

第339図 土壇67 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壇69 (第198・341・342図)

18S中央やや南西寄り、堅穴住居17を切って検出した。平面形は長軸1.05m、短軸1.04mの隅丸方形。断面は壁面が急角度で落ち込み、底面へと至っている。検出面から底面までの深さは42cmを測る。埋土中には多くの炭が含まれており、特に底面に貼り付くように炭が堆積していた。

出土遺物は少なく同化したものは堿586と紡錘車未製品C15のみ。586は上下に拡張した口縁外面に凹縁を巡らす。弥生時代中期中後葉である。



第340図 土壇68 (1/30)・出土遺物 (1/4)

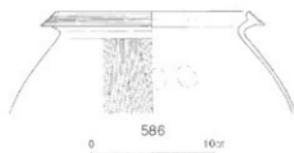
第341図 土壇69 (1/30)・出土遺物① (1/3)

## 土壙70 (第198・343図)

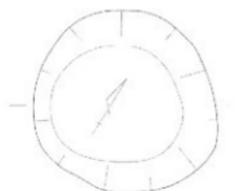
18S南端に位置し、堅穴住居17の南東に位置している。平面形は直径1.11mの円形。断面は平坦な底面からはほぼ垂直に立ち上がる壁面を有する。検出面から底面までの深さは43cmを測る。埋土は4層に分層することができ、底面に堆積する第4層には炭や焼土が多く含まれていた。出土遺物は少なく土器片の他は哺乳綱目不明骨がある。587は堯の口縁部破片で、やや肥厚した口縁端部は平坦な面をもっている。弥生時代中期中葉新段階には埋没した土壙であると思われる。(松尾)

## 土壙71 (第199・344・345図)

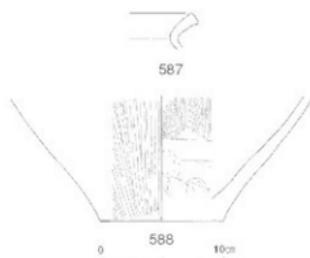
A区北端にあたる20C南東に位置し、溝9に切られる。長さ3.7m、幅1.6mをこえる長大な遺構であ



第342図 土壙69出土遺物② (1/4)



- |                       |                              |
|-----------------------|------------------------------|
| 1 黄・黄褐色粘質土 (10YR6/4)  | 3 灰褐色粘粒砂質土 (10YR5/1)         |
| 2 灰黄褐色粘粒砂質土 (10YR6/2) | 4 灰褐色粘質土 (10YR4/1) (炭多量、焼土含) |



第343図 土壙70 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- |                             |
|-----------------------------|
| 1 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) (炭・焼土含) |
|-----------------------------|

第344図 土壙71 (1/30)

る。底面はほぼ平らで、壁体は緩やかに立ち上がる。底面の標高は8.7mを測る。

細片ながらも土器が出土しており、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

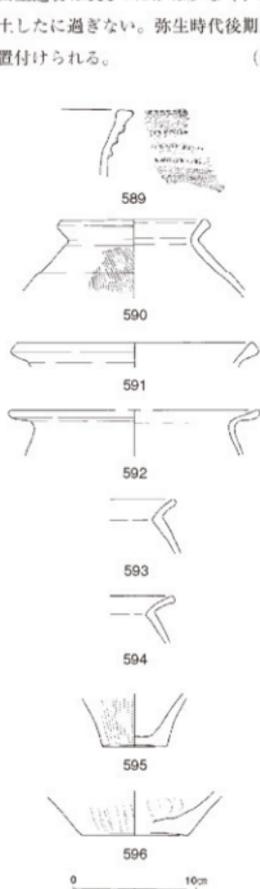
(渡邊)

土壌72 (第199・346図、図版34)

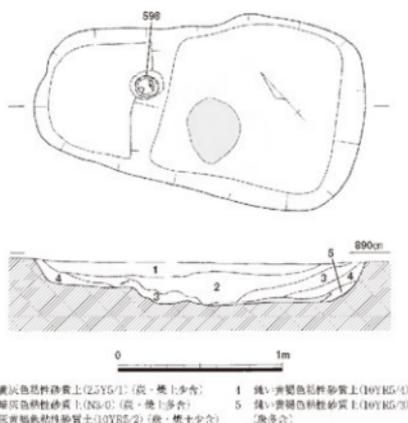
20W中央部に位置する。長さ2.45m、幅1.42mの隅の丸い不整長方形を呈す。西側に底面より10cmほど高いテラス状の面を持ち、甕598はこのテラス面に接して立位で出土した。底部の破片はなく、元から図示した上半部のみ据え置かれたものとみられる。土壌の形状及び土器の出土状況から土壌墓の可能性もある。テラス面での標高は8.7m、底面の標高は8.58mである。底面には炭・焼土が面的に堆積していた。

出土遺物は598のほかは少なく、細片が出土したに過ぎない。弥生時代後期末葉に位置付けられる。

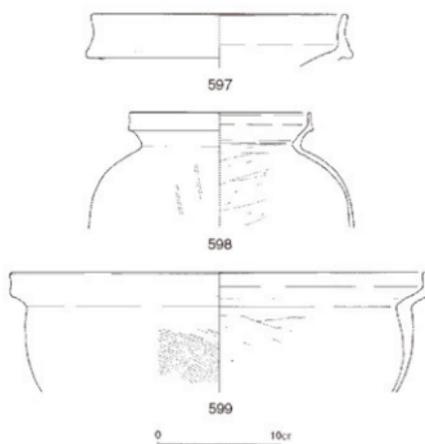
(渡邊)



第345図 土壌71出土遺物 (1/4)



- 1 黄灰色粘粒砂質土(2.5Y5/1)(炭・焼土少々)
- 2 暗灰色粘粒砂質土(N8-0)(炭・焼土多量)
- 3 灰黄褐色粘粒砂質土(10YR5/2)(炭・焼土少々)
- 4 黄褐色粘粒砂質土(10YR5/4)
- 5 黄褐色粘粒砂質土(10YR5/3)(炭多量)



第346図 土壌72 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壙73 (第199・347図)

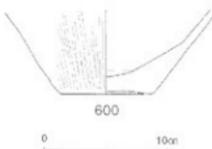
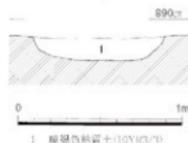
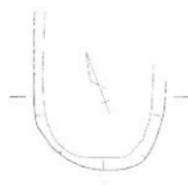
20W南東で、土壙72の南に位置する。東半を用水路に削平されているが長さ1.15m、幅1m以上の楕円形を呈すると思われる。底面はほぼ平らで、標高は8.65mである。

図示した壺底部600のほか櫛描き波状文の壺片が出土している。弥生時代中期前半に遡るであろう。(渡邊)

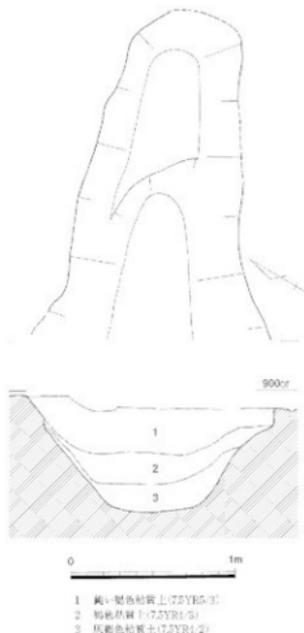
## 土壙74 (第199・348図)

20W南東で、土壙72の西に隣接する。西側は調査区外となるが、東西に長い溝状の遺構である。西半が階段状に一段下がり、深い部分での長軸上での高低差がないこと、横断面が台形を呈することから土壙と認定した。底面の標高は8.25mである。

細片ではあるが図化し得る土器が比較的多く出土している。図がしたほか、櫛描き波状文の壺、櫛描き沈線文の甕も出土している。601・602は無頸壺としているが台付鉢との判別が難しい。甕605の口縁端部は上方に拡張される新しい様相を示すが、弥生時代中期前半の範疇で捉えられよう。(渡邊)

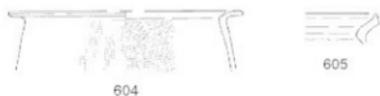
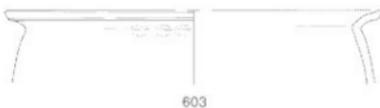
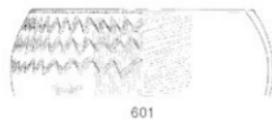


第347図 土壙73(1/30)・出土遺物(1/4)



- 1 黄褐色粘質土(7ZYR5-3)
- 2 灰褐色粘土(7ZYR1-5)
- 3 灰褐色粘質土(7ZYR1-2)

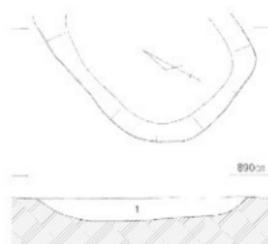
第348図 土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4)





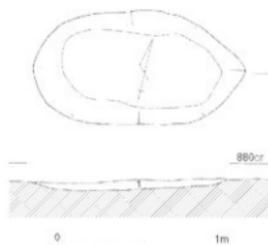
- 1 黒褐色粘質土(10YR3/2)  
2 灰黄色粘質土(10YR5/2)

第349図 土壌75 (1/30)



- 1 灰褐色粘粒砂質土(7.5YR4/2) (混・硬土層)

第350図 土壌76 (1/30)



- 1 灰褐色粘質砂層(10YR3/2)

第351図 土壌77 (1/30)

土壌75 (第199・349図)

20W南東で、土壌74の南に位置する。南北1.3m、東西85cmの長方形を呈す。検出面からの深さは12cm、底面の標高は8.68mである。底面はほぼ平らで、壁体は緩やかに上方に立ち上がる。出土遺物は皆無で、時期の特定はできないが、埋土の状況から弥生時代中期の遺構と考えられる。(渡邊)

土壌76 (第199・350図)

22W南西で、竪穴住居19の東に位置する。東半が調査区外となるが、幅98cmの長方形を呈すると思われる。底面はほぼ平らで、標高は8.62mである。弥生包含層より下位である。

出土遺物は土器細片がわずかしかないが、検出状況と合わせて、弥生時代中期前半に位置付けられる。(渡邊)

土壌77 (第199・351図)

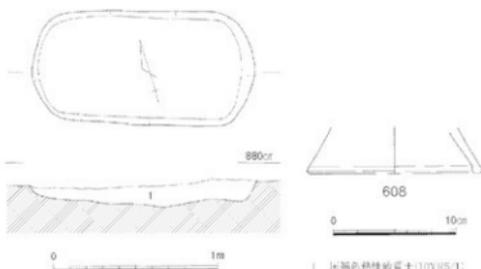
22W南端で、土壌76の南に位置する。長楕円形を呈するが、本来は土壌78のような長方形が崩れた可能性もある。底面の標高は8.63mである。

時期を示す出土遺物はないが、土壌79と同じ埋土であり、同じ時期に埋没したと考えられる。(渡邊)

土壌78 (第199・352図、図版34)

22Y北端で、土壌77の西に隣接する。竪穴住居19を切って掘削されている。東西1.35m、南北69cmで、短辺側がやや膨らんでいるが、長方形を呈する。断面も直立気味に立ち上がる。底面の標高は8.53mである。

出土遺物は少なく、図示した土器は高杯脚部608のみである。弥生時代中期中葉に比定され、切り合いから竪穴住居19より新しく位置付けられる。(渡邊)



- 1 灰褐色粘粒砂質土(10YR3/2) (混・硬土層)

第352図 土壌78 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壌79 (第199・353図)

22Y北西で、土壌78の南に位置する。西側を中近世の遺構に削平されるが、径90cm前後の不整形円形を呈すると考えられる。一方、土壌80を切って掘削されている。

弥生時代中期に比定される土器細片が出土している。

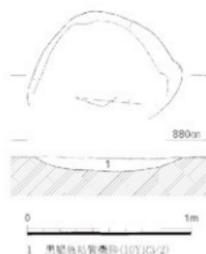
(渡邊)

## 土壌80 (第199・354図)

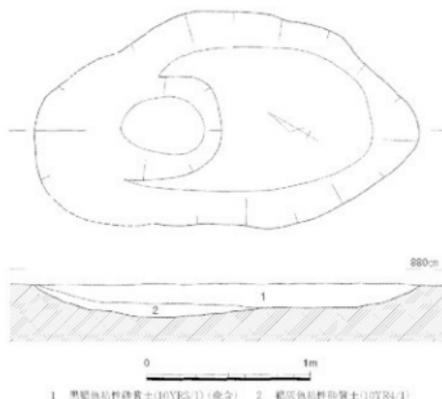
土壌79の南に位置し、北端を土壌79に切られている。南北2.35m、東西1.3mの楕円形を呈するが、北端がやや突出し、北半は埋土も2層に分かれる。底面の標高も北側は8.45m、南側は8.56mと差があることから、2基の遺構が斬り合っている可能性がある。

櫛描き文を施す土器細片などが出土しており、弥生時代中期前半に埋没したと考えられる。

(渡邊)



第353図 土壌79 (1/30)



第354図 土壌80 (1/30)

## 土壌81 (第199・355図)

20Y北東で、竪穴住居21の南に位置し、井戸3に東端を削平されている。上部は弥生包含層が堆積していた。西側は調査区外となり全容は不明であるが、東西長2.5m、南北幅2.14mの長楕円形を呈する。底面には凹凸が少なく、長軸上の東へ向かっては緩やかに上方へ傾斜する。短軸上では南北両端とも直立気味に強く立ち上がる。底面の標高は最も深い所で8.48mである。埋土に炭を含み、第4層には焼土も多く含まれていた。

出土土器は、櫛描き波状文の壺609・610、口縁端部断面が三角形の甕614、内面にヨコ方向のミガキを施す甕615など弥生時代中期でも古い様相を示し、中期前半に位置付けられる。

(渡邊)

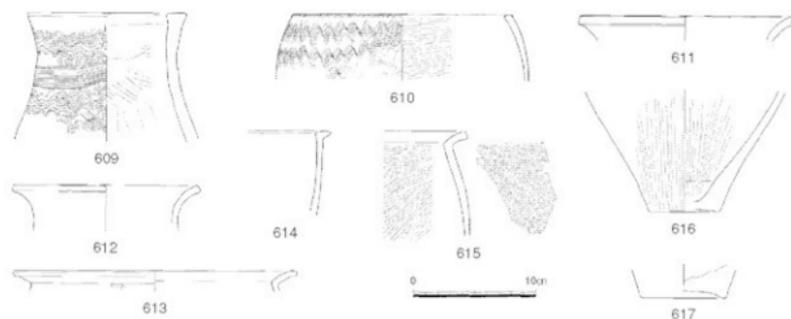
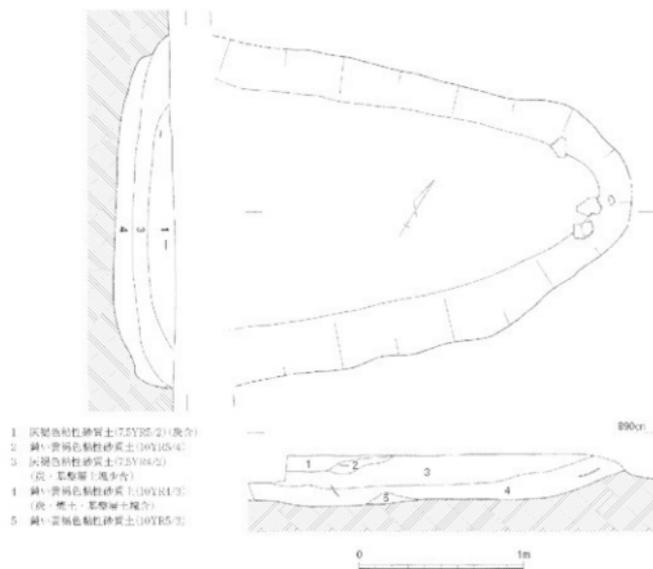
## 土壌82 (第199・356図)

22Y南西で、土壌76～80の一群とは10m以上南に離れている。一辺1m前後の不整形方形を呈する。底面もあまり平らではない。埋土は弥生時代中期の遺構とは異なり、基盤土とよく似た黄色系の埋土で、検出が困難であった。時期を示す遺物が出土していないが、後述する土壌83と埋土が同じであることから、弥生時代前期に遡ると考えられる。

(渡邊)

## 土壌83 (第199・357図)

22Y南西で、土壌82の南東に位置する。一辺1m前後の不整形方形で、北東角は柱穴が重複している。



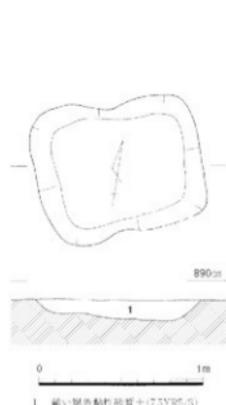
第355図 土壙81 (1/30)・出土遺物 (1/4)

埋上は土壙82と同じく、基盤との区別のし難い上であった。底はほぼ平らであるが、緩やかに傾斜している。底面の標高は8.62～8.65mを測る。

土壙上面で土器が破片の状態で出土している。甕**618**は沈線を3条施す。**619**は貼付突帯を有する如意状口縁の甕である。弥生時代前期中葉から後半に位置付けられる。(渡邊)

土壙84 (第199・358図)

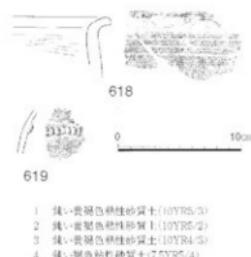
22Y南西で、土壙83の南西に位置する。南北1.27m、東西95cmの長方形を呈す。底面は平らで、壁



第356図 土壇82 (1/30)



第357図 土壇83 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 黄い褐色粘粒砂質土(7.5YR5/3)
- 2 黄い褐色粘粒砂質土(10YR5/2)
- 3 黄い褐色粘粒砂質土(10YR4/5)
- 4 黄い褐色粘粒砂質土(7.5YR5/4)

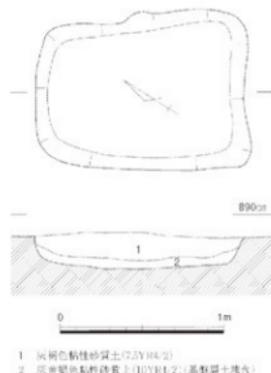
体は箱形に立ち上がる。底面の標高は8.6mである。埋土は2層に分かれ、第2層には基盤土がブロック状に混在していた。

土器細片がわずかに出土したのみであるが、弥生時代中期後半以降に位置付けられる。後述する土壇85と主軸が一致する状況から、土壇85と同時期の可能性も考えられる。(渡邊)

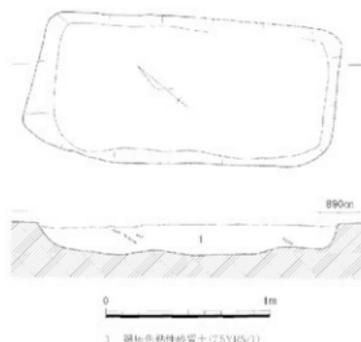
土壇85 (第199・359・360図)

22Y南西で、土壇84の東に位置する。土壇84と長軸がほぼ並行している。南東角部が現代の用水路により削平されているが、南北1.84m、東西90cmの長方形を呈する。底面に若干の凹凸があるが、壁体は直立気味に立ち上がる。底面の標高は8.64mである。

出土した土器は破片ばかりであるが、壺620や鉢621が出土しており、弥生時代後期前葉に比定される。(渡邊)



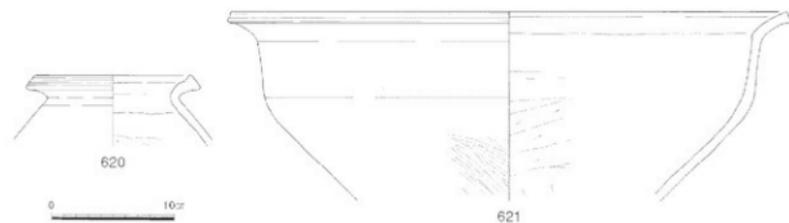
第358図 土壇84 (1/30)



第359図 土壇85 (1/30)

- 1 黄褐色粘粒砂質土(7.5YR4/2)
- 2 黄褐色粘粒砂質土(10YR4/2) (基盤土塊在)

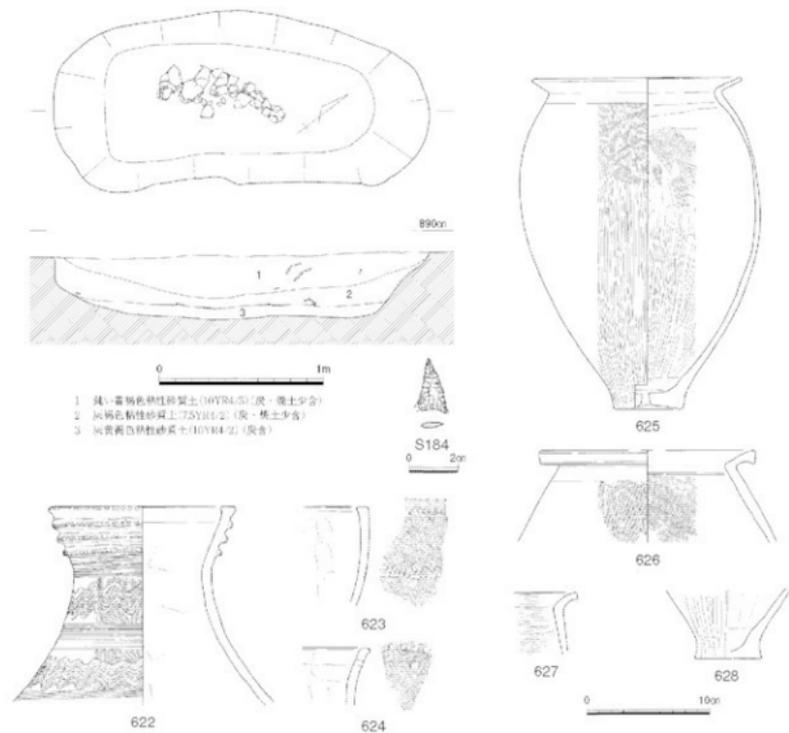
- 1 黄褐色粘粒砂質土(7.5YR5/1)



第360図 土壌85出土遺物 (1/4)

土壌86 (第200・361図、図版35)

22ⅡA中央で、掘立柱建物5の南に位置する。南北2.29m、東西1.02mの長楕円形を呈する。底面近くでは東辺が直線的で、直角に長辺側へ曲がることから、本来は長方形を呈していたと考えられる。



第361図 土壌86 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

壁体も東側は箱形に立ち上がる。検出面からの深さは約50cmで、底面の標高は8.38mである。

土壌平面図に図示した出土状況は第2層下面での出土状況である。第2層下面はほぼ平らで、標高8.45mである。土圧でこの面に押し潰されたような状態が看取される。第3層は出土遺物がほとんどない。

出土遺物には壺622～624、甕625～628、石甌S184などがある。図示した出土遺物のうち、壺622は第1層断面に図示したもので、胴部以下を欠くが、口頸部は完形である。弥生時代中期中葉と考えられる。(渡邊) 土壌87(第200・362図)

22ⅡA北東で、4つの土壌が群在するうちの北端の土壌である。土壌88に南西端を切られている。全長約1.6mの不整形円形の土壌として検出したが、断面の状況から、2つの土壌の可能性が高い。西側の底面の標高は8.55m、東側の底面の標高は8.62mである。

弥生時代中期に比定される土器が出土しており、切り合いから中期中葉に遡る可能性がある。(渡邊) 土壌88(第200・363図)

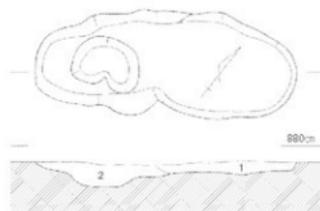
土壌87の南に接する。南側が少し張り出しているが、本来は一辺1.2m前後の方形を呈すると思われる。断面も南側に段差がある。検出面からの深さ27cm、底面の標高8.43mを測る。

出土遺物には土器、石器がある。S185は自然礫を利用した敲石である。土器の様相には弥生時代中期前葉と、後期前葉の2者が認められるが、土壌87と土壌89を切って掘削されており、古い遺物がこれらの土壌から混入した可能性も考えられる。約1m南には後期前半の土壌90があり、同じ頃に埋没したと考えられる。(渡邊)

土壌89(第200・364図)

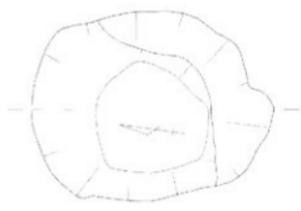
土壌88の南に位置する。北端は土壌88に、南端は中世のたわみ4に切られる。残存長1.5m、幅95cmの不整形円形を呈す。検出面からの深さも3cmと浅い、たわみ状の遺構である。底面の標高は8.75mである。

時期を示す出土遺物もないが、埋土の状況から弥生時代の遺構と考えられ、土壌88との切り合いから、弥生時代中期中葉以前の可能性もある。(渡邊)

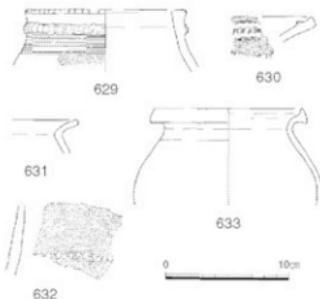


1 灰褐色粘土質土(75YR5/2)(黄・黄土系)  
2 黒灰粘土質砂質土(75YR5/1)(黄・黄土系)

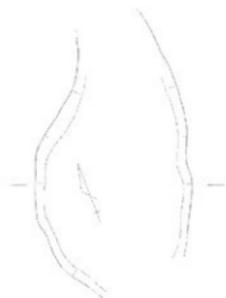
第362図 土壌87(1/30)



1 灰褐色粘土質土(75YR5/2)  
(黄・黄土系)  
2 黄褐色粘土質砂質土  
(10YR5/3)  
3 炭瓦  
4 灰褐色粘土質土  
(10YR5/2)



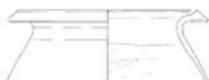
第363図 土壌88(1/30)・  
出土遺物(1/3・1/4)



第364図 土壌89 (1/30)



634



635



第365図 土壌90 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

土壌90 (第200・365図)

24ⅡA北西で、土壌89の東に位置する。南側を中世のたわみ4に削平される。径70cm前後の円形に復元される。検出に困難を極めたため残存状況は良くないが、壺体が台形に立ち上がるしかりした土壌と考えられる。底面の標高は8.42mである。

出土遺物は土器細片がわずかであるが、壺634・635から弥生時代後前半に位置付けられる。(渡邊)

土壌91 (第200・366図)

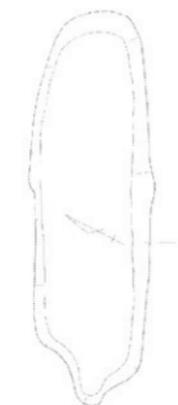
24ⅡA西中央で、土壌90の南に位置する。長さ2.4mをこえる溝状の遺構である。検出面からの深さも10cm足らずと浅く、溝底の痕跡の可能性もある。底面の標高は8.51mである。

細片ではあるが土器が出土している。壺636には凹線が施されており、弥生時代中期後葉に位置付けられる。(渡邊)

土壌92 (第200・367図)

24ⅡA北西で、整穴住居23の北に位置する。東側が調査区外となるが、径1m前後の不整形を呈すると思われる。底面の標高は8.61mである。包含層より下位で検出される。

図示し得なかったが弥生時代中期中葉に比定される土器細片が出土しており、包含層との層序関係からも、中期前半に遡る可能性がある。(渡邊)



636



第366図 土壌91 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)



第367図 土壌92 (1/30)

土壙93（第200・368図、図版35）

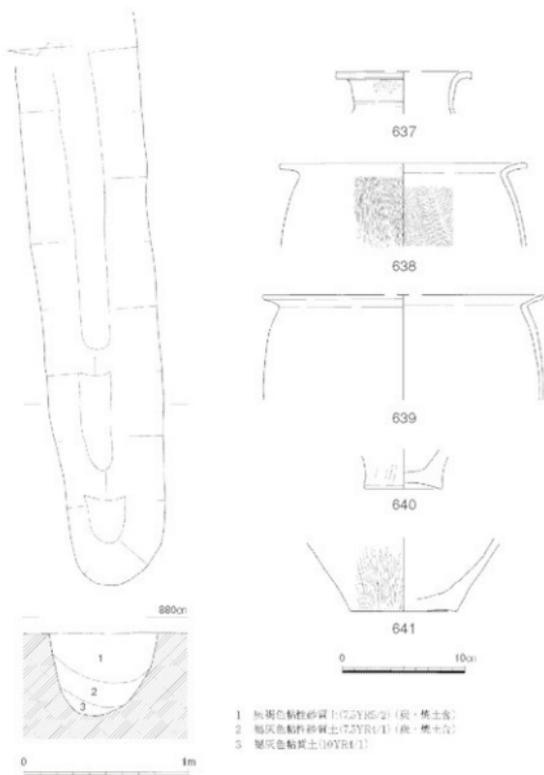
土壙92の南に位置する。西端は中世の溝56に削平され、東半上面には竪穴住居23が重複している。また東側が調査区外となるため全容は不明だが、東西長3.5mを超える長大な遺構である。溝状を呈するが、西端が階段状を成す形状から舟形土壙の可能性を考え、ここに含めた。幅は67cm、検出面からの深さは50cmで、断面はU字状を呈す。底面の標高は8.2mである。埋上には炭・焼土を多く含み、最下層は粘質の強い土であった。

出土遺物は上器細片のみで、壺637、甕638～641が図示できた。弥生時代中期前葉の新しい段階から中葉の古い段階に比定される。切り合いから竪穴住居23よりは古く、中期前半の中で埋没したと考えられる。（渡邊）

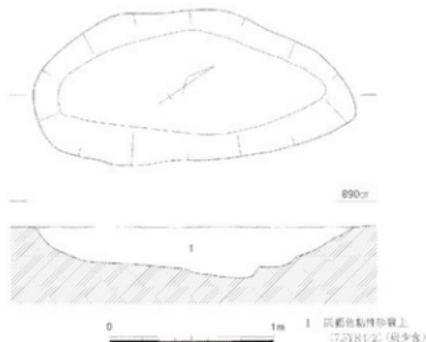
土壙94（第200・369図）

22ⅡA南東で、井戸4の東に位置する。南北1.93m、東西92cmで、両端がすぼまった楕円形を呈する。底面は凹凸があり、最も深い所で標高8.44mを測る。壁体は皿状に緩やかに立ち上がる。埋上には炭が少し含まれていた。

出土遺物は土器細片がわずかである。弥生時代中期前半と考えられる櫛描き文を施した壺片が出土している。また主軸が土壙86と一致しており、同時期の可能性も考えられる。（渡邊）



第368図 土壙93 (1/30)・出土遺物 (1/4)

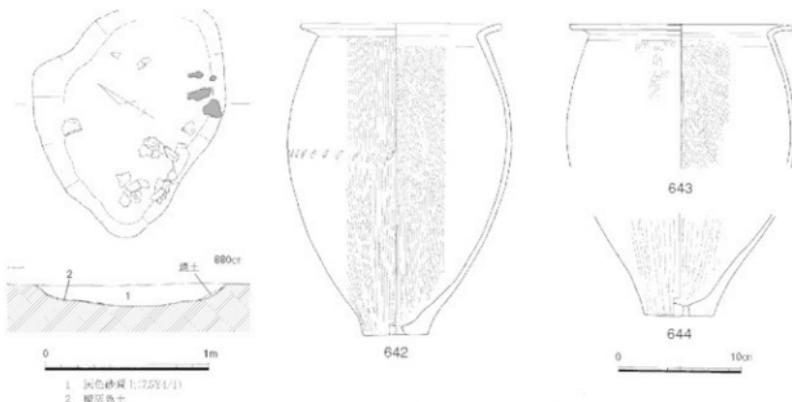


第369図 土壙94 (1/30)

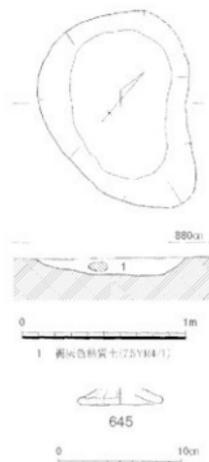
土壙95 (第200・370図)

24ⅡC南東に位置する。東端を調査区東側溝で削平されたが、南北1.17m、東西1.4m以上の不整形を呈す。検出面からの深さは10~13cmと浅いが比較的多くの土器が出土した。また西壁寄りには焼土も底面に散っていた。底面は平らでなく、最も深い所で標高8.56mを測る。

土器は細片のみである。642~644では胴部が少し張り、内面も縦方向の調整を基調とするが、口縁端部の拡張がわずかで、古相をとどめる。弥生時代中期中葉に位置付けられる。(渡邊)



第370図 土壙95 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第371図 土壙96 (1/30)・  
出土遺物 (1/4)

土壙96 (第200・371図)

26ⅡE北西で、土壙95の南に位置する。南北1.25m、東西90cmの不整形を呈する。検出面からの深さも浅く、底面も傾斜している。最も深い所で標高8.6mを測る。

土器細片がわずかに出土している。645は指頭圧痕が明瞭に残る脚台部。時期の特定できる遺物はないが、土器内面にヘラケズリが認められないことから、弥生時代中期前半に遡る可能性がある。(渡邊)

土壙97 (第200・372図)

24ⅡE南東で、調査区南端に位置する。東半上部は古代の溝31に削平されている。東西1.96m、南北1.08mの楕円形を呈する。検出面からの深さは56cmと深く、断面も台形を呈する。埋土は4層に分かれ、第2層は炭を多く含んでいた。最下層には有機質に富んだ黒色の粘土が堆積していた。底面の標高は8.31mである。

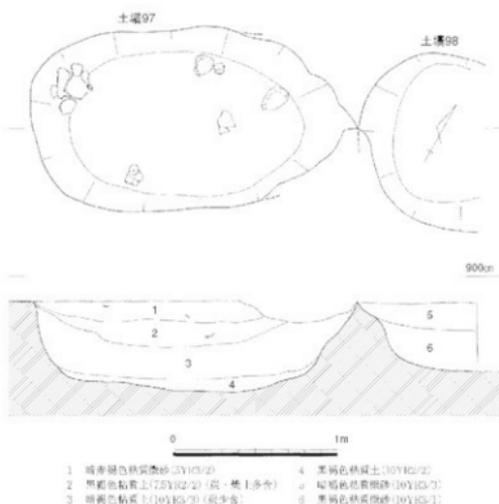
土器は主に第3層から出土している。いずれも細片の状態、自然礫も混在していることから、埋没の段階で流れこんだものと考えられる。甕646~648、甕底部に焼成後穿孔した649などがある。弥生時代中期中葉に位置付けられる。(渡邊)

## 土壌98 (第200・372図)

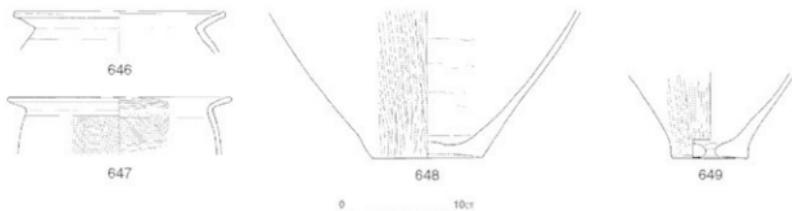
土壌97の東に隣接する。東半は現代用水路に削平されて不明だが、径1.1m前後の円形を呈すると思われる。検出面からの深さは42cmで、底面の標高は8.42mである。断面形は土壌97と良く似た台形を呈すとみられる。

わずかではあるが土器細片が出土した。口縁部上面及び内面にヨコ方向のヘラミガキを施す甕がある。弥生時代中期中葉で、土壌97と同じ頃に埋没したと考えられる。

(渡邊)



- |                             |                   |
|-----------------------------|-------------------|
| 1 褐色黒色粘質土(20YR5/2)          | 4 黒褐色粘質土(10YR5/2) |
| 2 黒褐色粘質土(2.5YR5/2) (炭・骨1多含) | 5 暗褐色粘質土(10YR5/3) |
| 3 暗褐色粘質土(10YR5/3) (炭少量)     | 6 黒褐色粘質土(10YR5/1) |



第372図 土壌97・98 (1/30)・土壌97出土遺物 (1/4)

## 6 被熱面

## 被熱面1 (第197・373図)

160西で掘立柱建物1の西側に位置する。北西部分を後世のピットにより壊されていた。長軸47cm、短軸37cmを測る範囲が被熱により赤変しており、特に中心部分の44×27cmの範囲はベース面が強く焼け焦げ、周囲よりも一段白っぽく変化していた。被熱影響を見るため断面観察を行ったが、特に粘土等を貼り付けている様子は見られなかった。

竪穴住居に伴う火処の可能性も考慮し周囲を精査したが、住居のプランや柱穴等は確認していない。出土遺物は全くなく所属時期は明確にできないが、周囲の状況等から弥生時代の遺構であると思われる。(松尾)



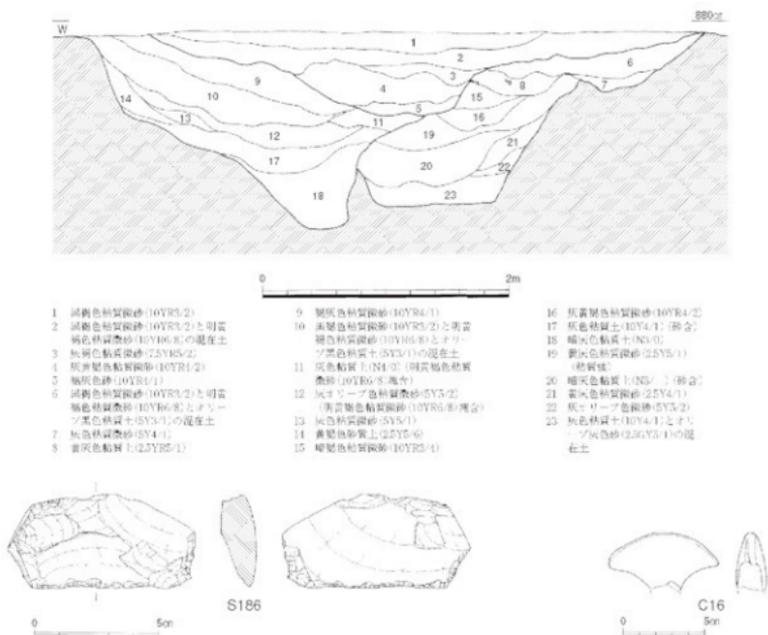
第373図 被熱面1 (1/30)

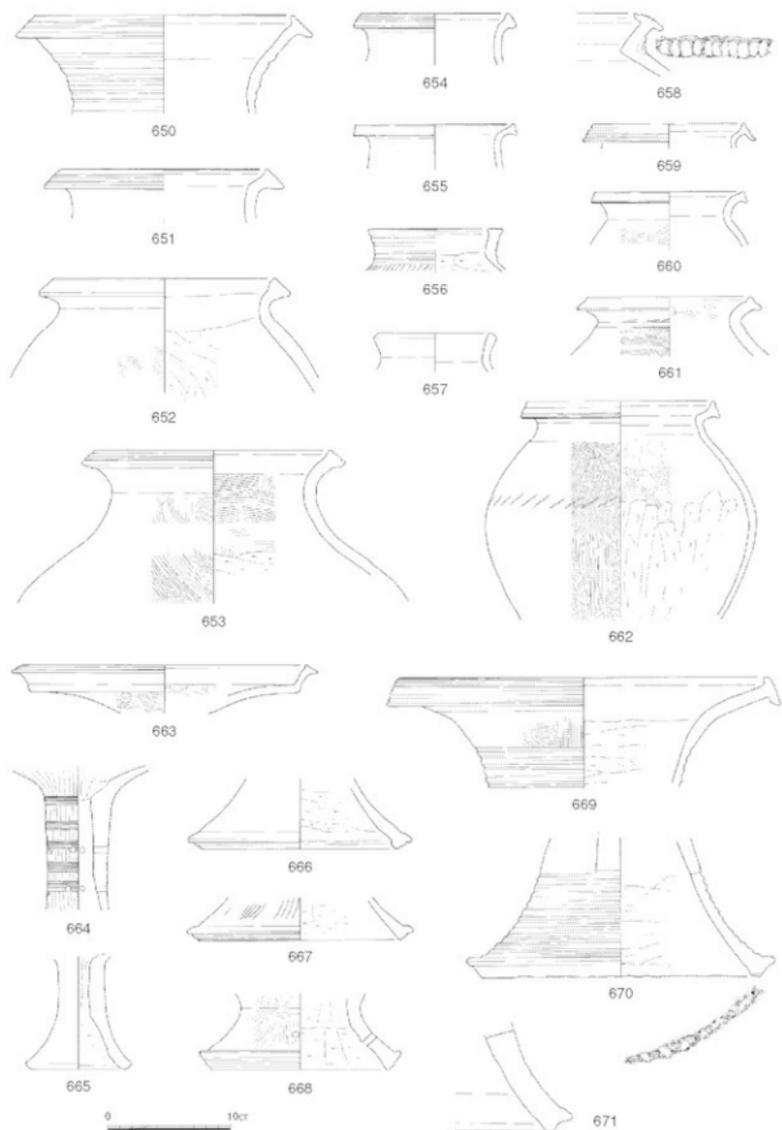
## 7 溝

## 溝1 (第196・374～377図、図版35・36)

10E南東から10G北東にかけて、調査区北端に位置する流路である。底面の高低差から、流走方向は東から西と想定される。検出上面での幅は5mをこえる大規模なもので、検出面からの深さは1.5mをこえる。第374図の土層断面では複数の流路が重複した状況が看取され、底面の状況からも南北2条の流路が認められる。最も古い段階の溝は南側の流路で第20～23層に対応し、上面幅1.5m、底面の標高7.28mを測る。次に北側に平行して流路が掘削される。第17・18層に対応し、上面幅2.2m、底面の標高7.1mを測る。第19層以上は粘質微砂や砂と基盤土をブロック状に多く混在した土が入り組んで堆積しており、先の2つの流路の痕跡に自然に土砂が堆積する、人為的に埋められるなどして埋没し、またその過程で小規模な流れができたりを繰り返して、このような形状に至ったと想定される。北西端肩口には土器が一括して投棄されており、土器溜まり状を呈していた。なお第7層は東側壁沿いテラス状部上面で検出された溝状部分に対応する。このような大規模な水路が、微高地肩口に地形に沿って掘削されている状況から、集落の基幹的な水路であったと推察される。

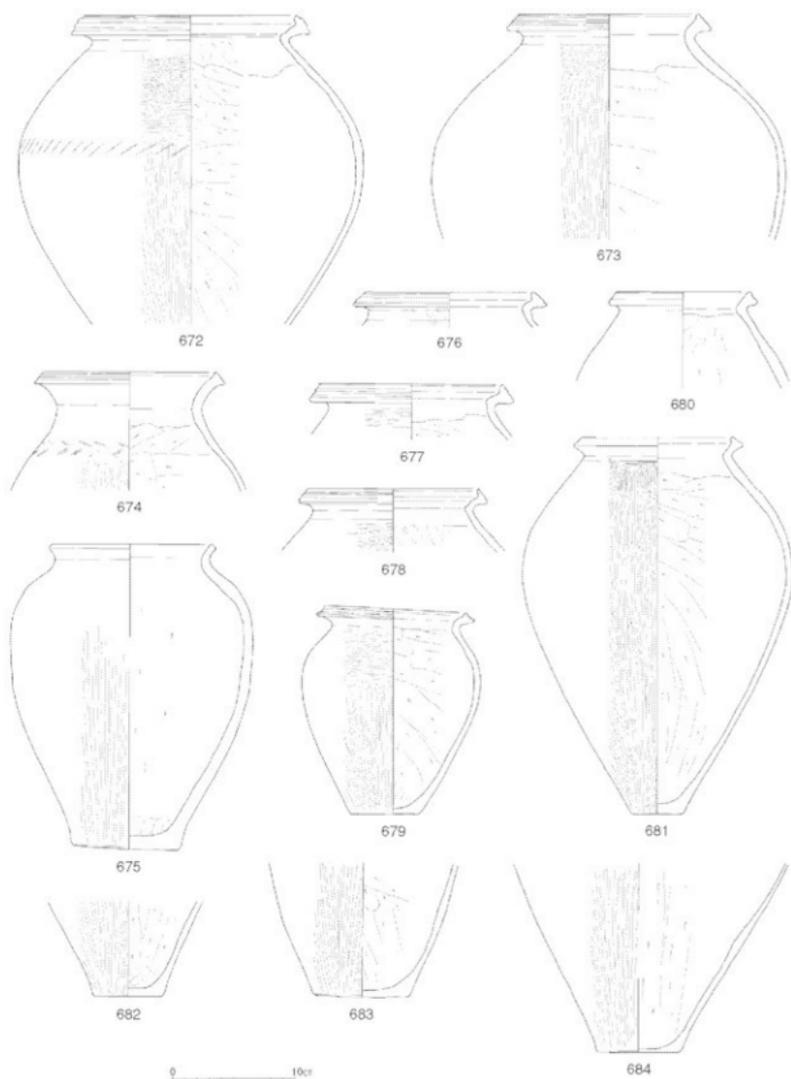
第375図は溝内から、第376・377図は土器溜まり状部分から出土した土器である。調査時点では南北の溝を明確に分離することができなかったが、第17・18・20～23層を下層とし、溝底近くのグライ化





第375図 溝1出土遺物② (1/4)

した粘質土層内を最下層として取り上げている。655・657・659・661・662・668は下層、651・653・656・664・669は最下層から出土した。弥生時代中期末葉～後期初頭の幅があるが、最下層からも後



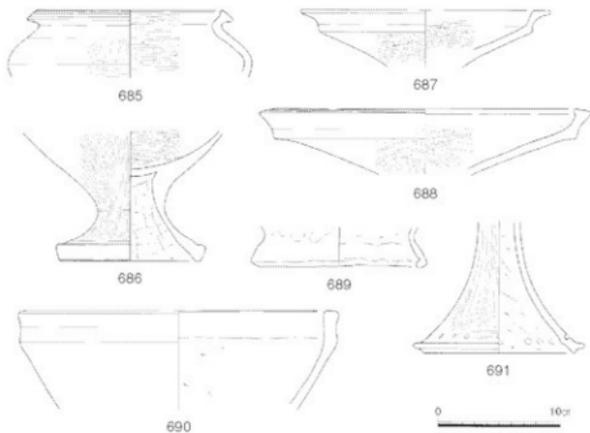
第376図 溝1出土遺物③ (1/4)

期の土器が出土するなど、土器の様相と層位は一致していない。また南北の溝の時期も明確でないが、比較的短期間のうちに埋没し、後期前葉には完全に機能を停止していたと考えられる。(渡邊)

## 溝2 (第196・378図)

12G南西で、溝1より11m南、微高地肩口よりやや南に下がった斜面に、斜面と並行に流走する。河道の肩口からは北(内側)へ2m離れている。幅1.65m、深さ24cmで、底面の標高は8.0mである。位置的な状況から、後述する水田1に関連する水路の可能性がある。

出土土器から、弥生時代後期後葉に位置付けられる。(渡邊)



第377図 溝1出土遺物④ (1/4)

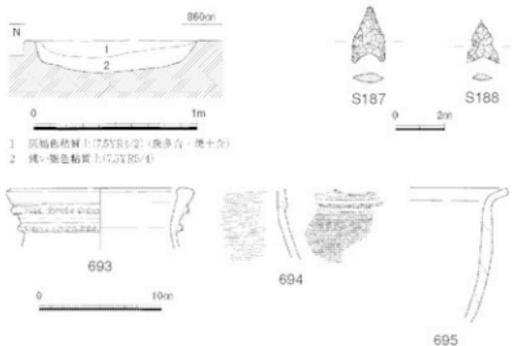


第378図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 溝3 (第197・379図)

14K北西で、河道の南側の北向き緩斜面に位置する。西端を上層10に切れ、さらに西は調査区外へ延びる。幅99cm、深さ20cm弱で、底面の標高は8.31mである。埋土上層には炭・焼土が多く含まれていた。

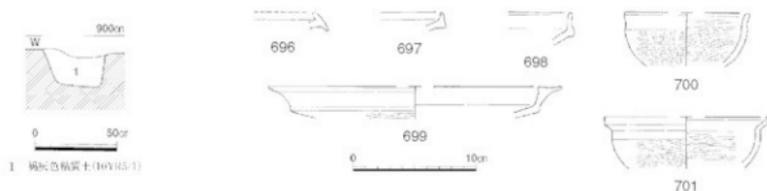
出土遺物は土器、石器がある。土器は細片がわずかだが、弥生時代前期後葉と中期中葉の2層が認められる。新しい土器は上層10からの混入の可能性も考えられる。(渡邊)



第379図 溝3 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

溝4 (第197・380図)

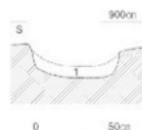
16Oの北西から南東にかけて掘削されている溝。弥生時代中期の竪穴住居群を切っていたが、竪穴住居埋土との違いが明瞭ではなく、南東側については明確なプランを検出しきれていない。北西端は土層39により切られており、それより北側には延びていないものと思われる。出土遺物には土器があり若干の時間幅がある。弥生時代中期末葉を掘削時期と考えたい。(松尾)



第380図 溝4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝5 (第198・381図)

16Q北東に位置する。竪穴住居12の床面を除去し、下部構造を確認する際に検出した。当初竪穴住居12に伴う遺構であると考えたが、住居平面に対して若干南へ振っていたことと、出土する土器の帰属時期から竪穴住居12に先行する溝であると認識している。平面形は長さ2m、幅66cmを測り、断面は平坦な底面からほぼ直角に立ち上がる壁面を有する。弥生時代中期末葉。(松尾)



1 褐色粘土(7.5YR4/1)

溝6 (第198・382図)

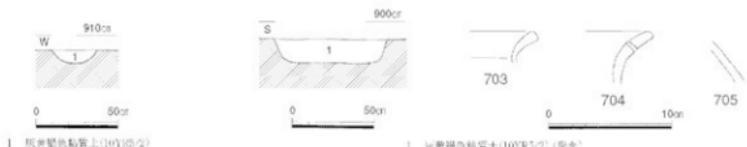
16Q北東に位置し、北西から南に向かって掘削されている溝。幅27cmで、断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さは17cmを測る。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、検出状況等から弥生時代中期後半の溝であると思われる。(松尾)



第381図 溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝7 (第198・383図)

16・18Qに位置し東側は調査区外へと延びている。西端は掘立柱建物3を構成する柱穴により壊されていることを確認している。幅67cmで、断面は平坦な底面から垂直に立ち上がる壁面を有し、検出面から底面までの深さは14cmを測る。出土遺物は703~705の上器細片のみ。掘削時期は明らかでないが、弥生時代前期後葉には埋設した溝であると推察される。(松尾)



第382図 溝6 (1/30)

第383図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 溝8 (第198・384図)

18Q南端に位置し、東側は古墳時代の溝23に、西側は井戸2により壊されている。そのため全体形は不明であるが、西あるいは東へと続いている可能性は低い。幅26cm、断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さは5cmと浅い。堯706などから弥生時代中期末葉には埋没した溝であると思われる。(松尾)

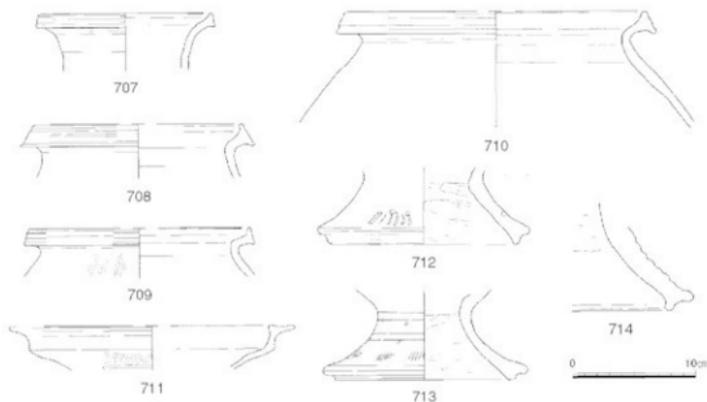
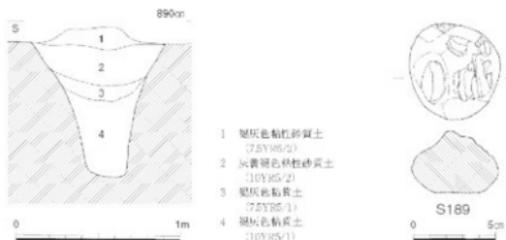


第384図 溝8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 溝9 (第199・385図、図版36)

20J南東で、A区北端に東西方向に3条の溝9～11が並行しているが、北溝手遺跡中央部の微高地が南へ下がり始める傾斜変換点に位置し、溝の方向が微高地の傾斜と並行することから、微高地を取り巻くように配置された水路と想定される。溝9はそのうち最も北側、すなわち微高地中心部寄りに位置する溝で、残存部の長さは10mをこえる。埋土上面で土器が多く出土し、その部分を残しながら周囲の掘り下げ及び検出を行ったため、断面図中央が高くなっている。上面での幅は83cm、底面の幅23cmと狭いが、検出面から90cmを超える深さがあり、断面形がV字に近い台形を呈するしっかりした形状を有する。底面の標高は7.95mである。

整理箱(テンバコ)にして2箱分の遺物が出土した。弥生時代中期後葉～後期前葉の幅が認められる。遺跡北端の溝1と同じ頃に埋没したと考えられる。(渡邊)

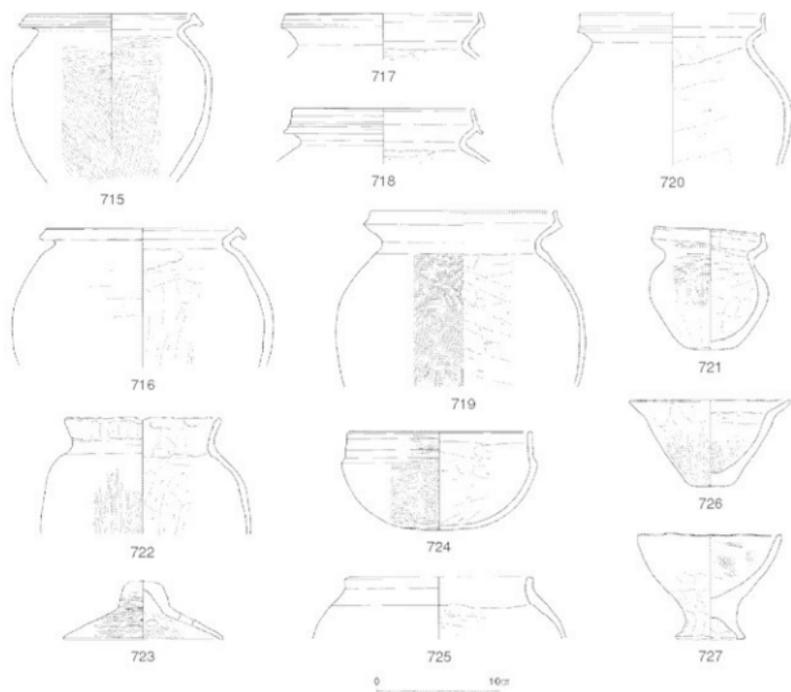
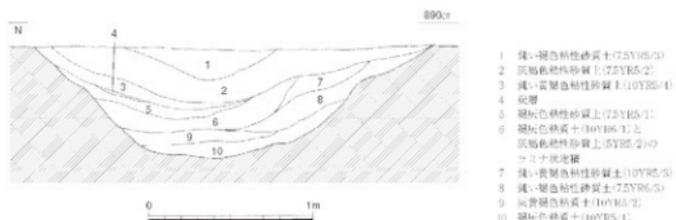


第385図 溝9 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

溝10 (第199・386・387岡、岡版36)

溝9の約2m南に並行する。上面の幅は2.43m、検出面からの深さ67cm、底面の標高8.07mを測る。断面は台形に近い。第6層以上と第8層以下に大きく分かれる。特に第6層は水性堆積を示し、埋没の過程で掘り直され、一時期水が流れていたと推察される。溝底近くには粘質土が堆積していた。

出土遺物は整理箱(テンバコ)にして2箱あり、図示した土器・石器のほか、弥生時代中期後葉の



第386図 溝10 (1/30)・出土遺物① (1/4)

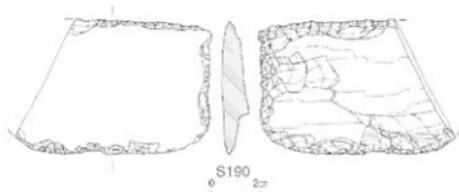
器台片も出土している。混入した可能性が高い。溝9埋没後に掘削され、最も新しい土器の様相から弥生時代後期後葉には埋没したと考えられる。溝9埋没後に同様の機能の水路を大規模に構築し直したものと想定される。(渡邊)

#### 溝11 (第199・388・389図、図版36)

溝10の60cm南に位置する。西端

は古墳時代の柵列状遺構3に切られ、東端は弥生時代中期中葉の竪穴住居18を切っている。上面の幅2.4~2.5m、検出面からの深さ50cm、底面の海拔高8.16mを測る。上面規模は溝10と大差ないが、10cm程度浅く、断面も湾曲した底面から壁体が弧を描くように緩やかに立ち上がり、台形を呈していない。溝底近くには粗砂が堆積し、摩滅した土器細片を多く包含していた。

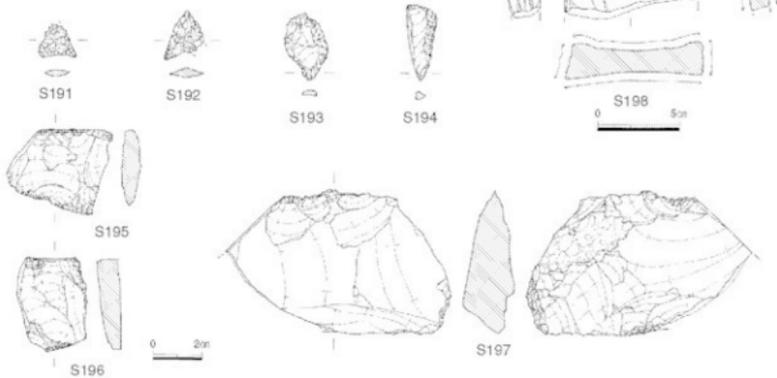
土器の出土量は多く、整理箱にして9箱を数える。石器も比較的多く出土した。砥石S198は折損面以外全て使用痕が認められる。特に図示した側面と上面には筋状の研磨溝が認められ、玉の研磨に用いられた可能性が高い。土器は弥生時代後期後葉のものが主体を占め、古墳時代初頭の櫛描き沈線



第387図 溝10出土遺物② (1/2)

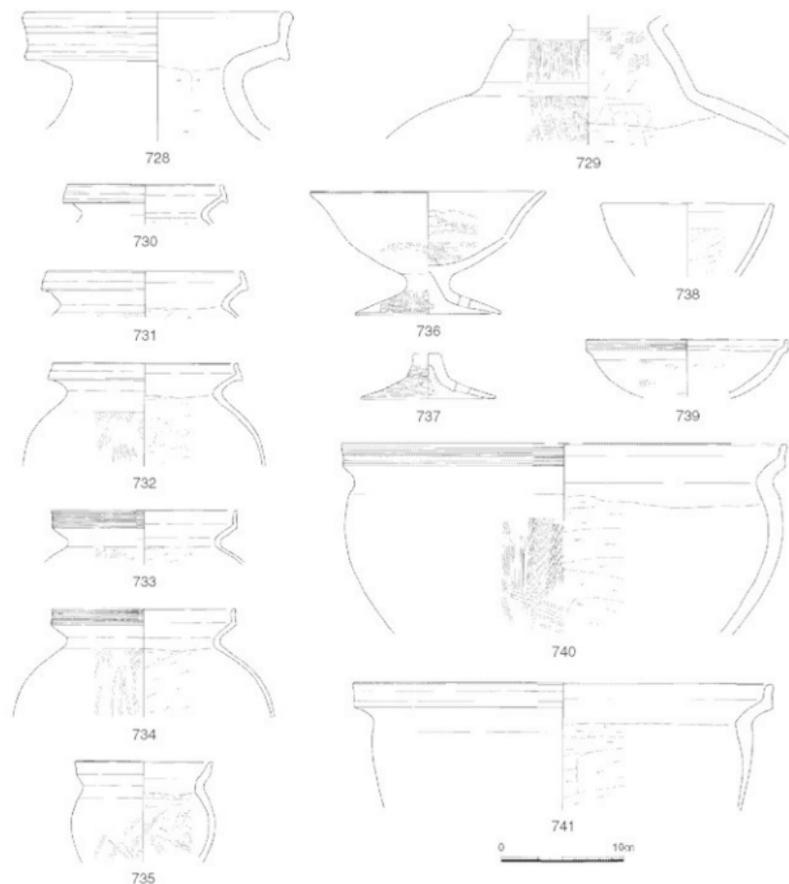


- 1 褐色粘板土 (7.5YR4/1)
- 2 黄褐色粘板土 (7.5YR5/3)
- 3 黄褐色粘板土 (7.5YR6/4)
- 4 灰褐色粘板土 (7.5YR5/2)
- 5 灰褐色粘板土 (7.5YR4/2)

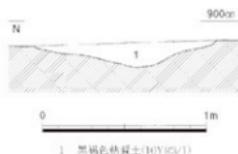


第388図 溝11 (1/30)・出土遺物① (1/2・1/3)

の堿733・734も含まれる。井戸1とよく似た様相を示す。位置関係と土器の様相から、溝10が機能を停止した後に開削され、古墳時代初頭には埋没したものと考えられる。(渡邊)



第389図 溝11出土遺物② (1/4)



第390図 溝12 (1/30)

溝12 (第199・390図)

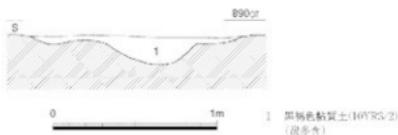
20W中央で、溝11の南に位置する。溝11にはば並行する。東端は現代の用水路により削平され、西半は土城72に切られる。平面は不整形で、検出面からの深さも16cmと浅い。底面も凹凸が激しい。底面の標高は8.7~8.8mである。

弥生時代中期前半の土器細片が出土している。(渡邊)

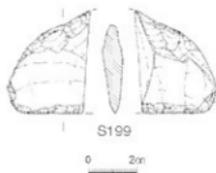
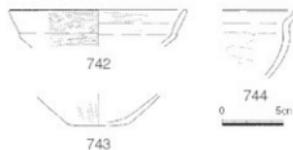
## 溝13 (第190・391図)

20W中央やや南で、溝12の南に位置する。西は調査区外となる。最大幅1.26mを測る。底面には幾条も筋が付き、壁面の立ち上がりも弱い。底面の標高は、最も深い部分で8.63mである。埋土には炭が多く混在し、遺存状態が悪い割には比較的多くの土器片を包含していた。

出土土器の様相から、弥生時代後期後葉には埋没したと考えられる。(渡邊)



第391図 溝13 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



## 溝14~16 (第200・392図)

22 II A南東で、井戸4の北側に位置する。西は調査区外に延び、東端は現代の用水路に削平される。また上面には古墳時代の溝27~29が重複しているため、本来の幅をとどめていなかった。底面の標高は溝14が8.5m、溝15が8.56m、溝16が8.6mと高低差があり、時期差を反映している可能性がある。

出土遺物はわずかだが、各溝から弥生時代中期の土器が出土している。溝14から凹線文を有する口縁部片が出土しており、弥生時代中期後半には埋没したと考えられる。(渡邊)

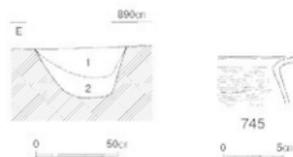


第392図 溝14~16 (1/30)

## 溝17 (第200・393図)

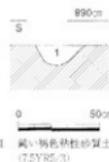
22 II A南東で、溝16の南に位置する。南西側は調査区外となる。上面幅は55cmと狭いが、深さ30cmを超え、断面U字形のしっかりした溝である。底面の標高は8.45mである。第186図第7・8層が本遺構埋土にあたる。

図示したほか櫛描き文壺片も出土している。切り合いから井戸4より新しく、弥生時代中期前半のうちに埋没したと位置付けられる。(渡邊)



- 1 褐色粘粒砂質土(10YR4/4) (炭否)
- 2 暗褐色粘粒砂質土(10YR3/4) (炭土少量)

第393図 溝17 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第394図 溝18(1/30)

## 溝18(第200・394図)

22ⅡC北東で、井14の南に位置する。南西は調査区外に延びる。幅30cm、深さ14cmの細い溝である。底面の標高は8.6m。埋上から弥生時代の遺構と位置付けたが、出土遺物は皆無で時期不明である。弥生包含層上面から掘り込まれており、中期後半以降に開削されたと想定される。(渡邊)

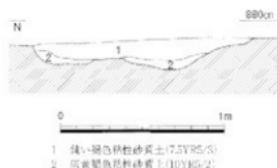
## 溝19(第200・395図)

24ⅡA西半中央に位置する。最大幅1.5mのたわみ状を呈する遺構である。底面は凹凸があるが、8.6~8.65mを測る。凹縁土器片が出土しており、弥生時代中期後半に位置付けられる。溝14~15のいずれかと同一流路である可能性も考えられる。(渡邊)

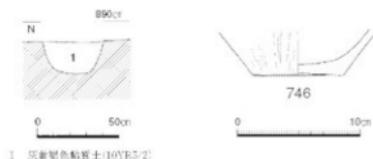
## 溝20(第200・396図)

24ⅡC東半中央に位置する。東側は調査区外に延びる。幅36cm、深さ20cm足らずの小規模な遺構であるが、壁体は急に立ち上がり、断面は台形を呈する。底面の標高は8.52mを測る。

弥生時代包含層より下位にあり、土器の様相からも弥生時代中期前半に位置付けられる。(渡邊)



第395図 溝19(1/30)



第396図 溝20(1/30)・出土遺物(1/4)

## 8 水田

## 水田1(第196・397図)

北清手遺跡の北端に位置する。調査時点で明確な水田として捉えていたわけではないが、プラント・オパール分析の結果を受けて、河道上部の堆積層を水田層と認識するに至った。第397図第9層に対応し、河道の埋没過程で営まれた水田と想定される。第8層は後述する水田2にあたり、水田範囲は水田2より北6m、南8~9m狭い。第9層から出土した土器の抽出ができず、出土遺物から時期の特定はできないが、層序関係から弥生時代中期~後期の範疇で捉えられる。(渡邊)

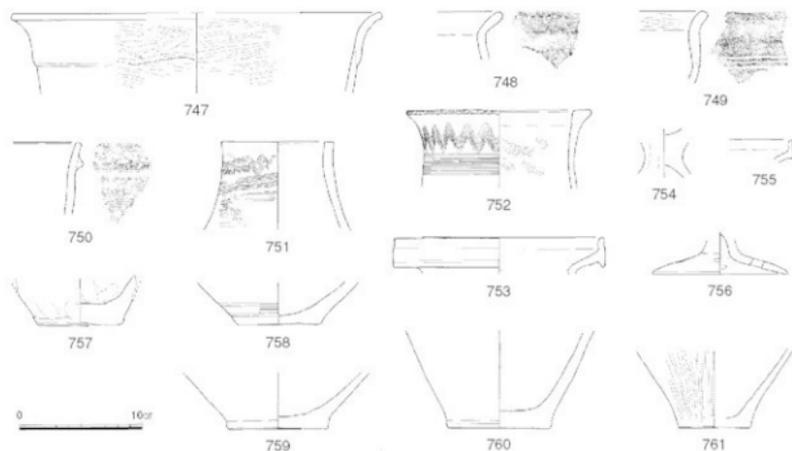
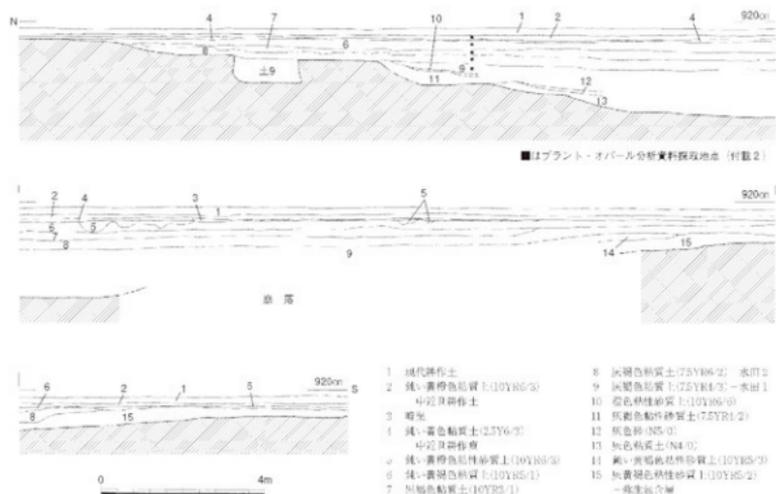
## 9 河道

## 河道1(第196・397・398図)

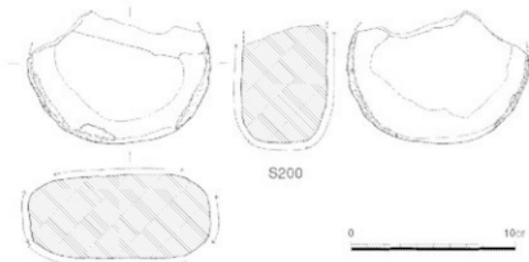
水田1の下部に位置する。幅25m、深さ2mをこえる大規模な河道で、底面の標高は6.9m以下である。調査途上で調査区全体が崩壊したため、堆積状況を詳細に検討することができず、断面図も未定である。第397図の第10~14層が河道堆積層に、第15層は微高地斜面部に堆積した弥生包含層にあたるが、両者の前後関係は確認できなかった。河道の調査は作業効率を優先し、4か所に試掘坑を設けて堆積状況を確認した後、南北両斜面を基盤まで掘削し、河道中央については重機を使用した。重機掘

削時の出土物はほとんど無く、図示した土器は試掘坑及び斜面部で出土したものである。

第9層以下から出土したと考えられる土器は747・748・751・752・754・757・758・760で、弥生時代前期～中期前半の土器が主体を成す。一方、南側の屑口では弥生時代後期後葉の753・756が出土し、



第397図 河道1(1/120)・出土遺物①(1/4)



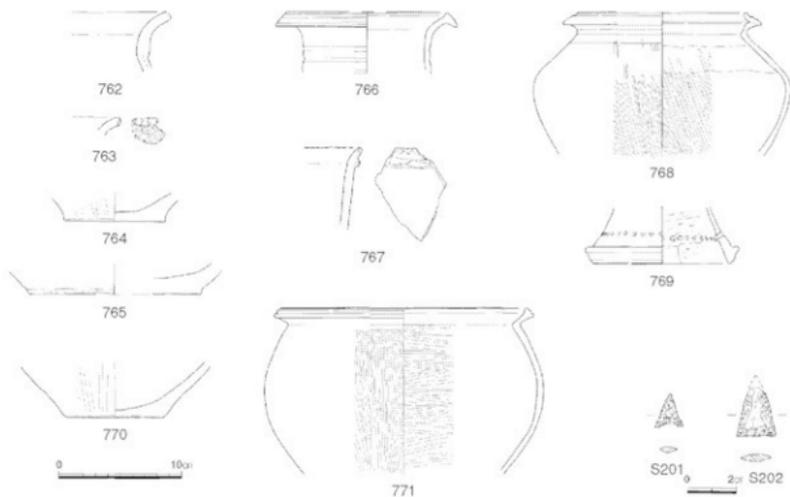
第398図 河道1出土遺物② (1/3)

これは第8層出土と考  
えて矛盾がない。また南側  
斜面部では749・750・  
755・759・761が出土し、  
そのうち弥生時代前期～  
中期の上器は第15層の弥  
生包含層の堆積時期の一  
端を示すものと推察され  
る。北側斜面でも弥生時  
代前期の土器が出土して  
いる。(渡邊)

## 10 柱穴

柱穴3～13 (第197～200・399・400図)

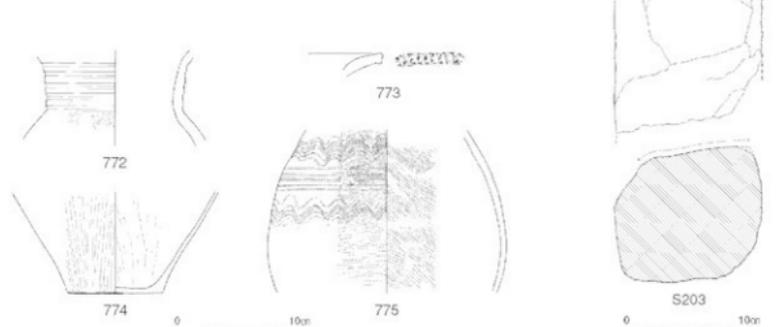
出土遺物や埋土から弥生時代とみなされる小穴は多く、特に遺構の集中する微高地中央部で密に検出されている。しかし、平面形や大きさ、深さにはバラツキがあり、一概に全てが柱とは位置付けられない。ここでは時期を示す上器の出上した小穴を柱穴として取り上げた。また、石器しか出土していない小穴については、埋土の状況から弥生時代である蓋然性が高いものを取り上げた。762～765が柱穴3、766が柱穴4、S201が柱穴5、S202が柱穴6、767が柱穴7、768・769が柱穴8、770が柱穴9、771が柱穴10、772・773が柱穴11、S203が柱穴12、774・775が柱穴13から出土した。いずれ



第399図 柱穴出土遺物① (1/4・1/2)

も周辺の遺構の時期と同様の時期に比定される。

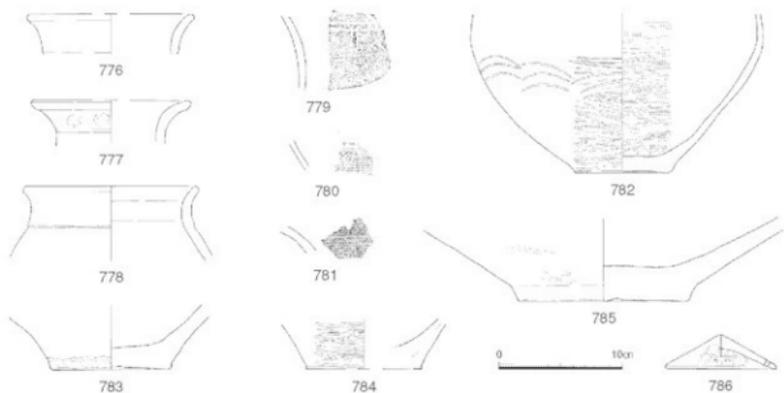
竪穴住居3の北に位置する柱穴3は弥生時代前期中葉に比定される土器が複数出土している。柱穴12は竪穴住居23の北西角に接する。S203は台石で、土器が出土していないため時期不明であるが、竪穴住居23に付随する施設の可能性もある。(渡邊)



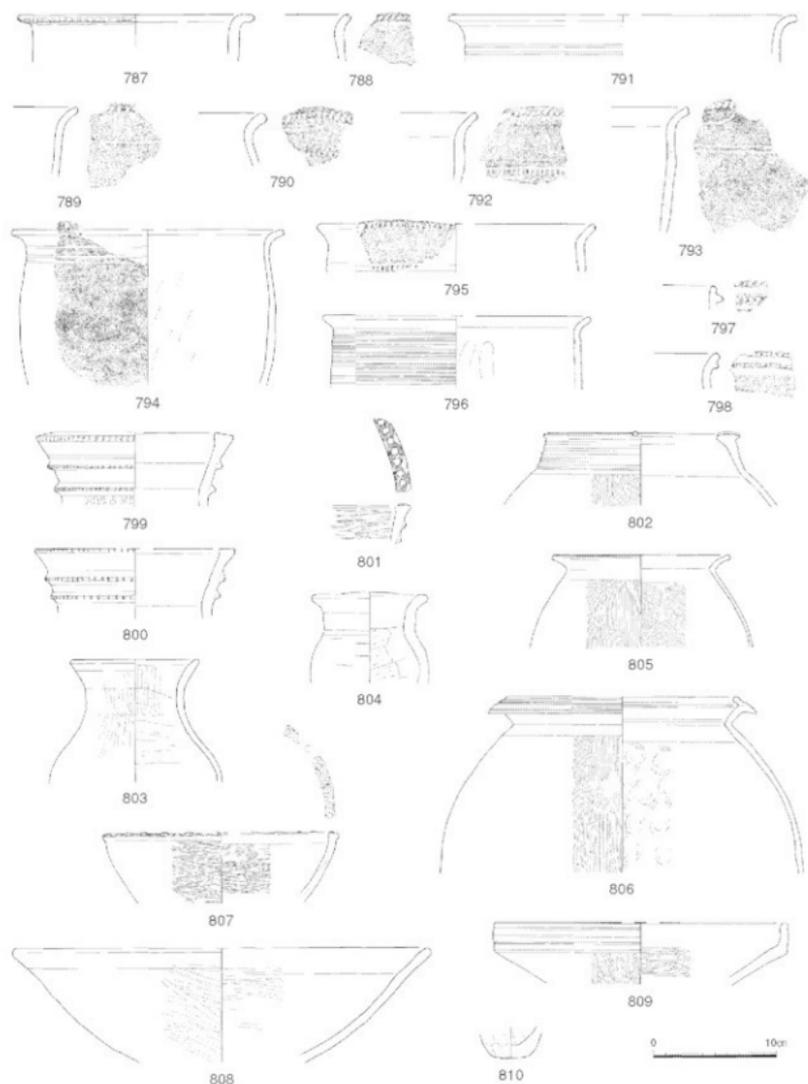
第400図 柱穴出土遺物② (1/4)

## 11 遺構に伴わない遺物 (第401~404図)

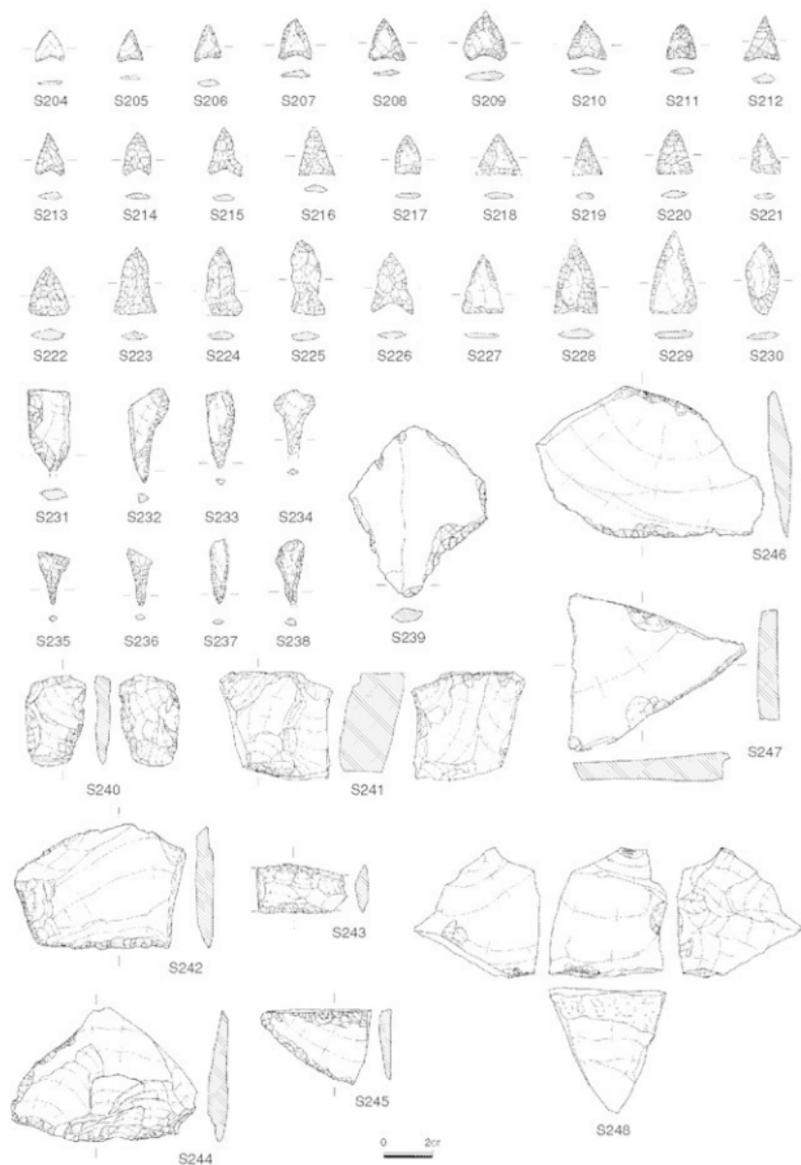
ここで取り上げる遺物は出土遺構や層位が不明確なもの、後世の遺構に混入したもので、ある程度器形が復元され、時期を比定しうる土器、形態から弥生時代に属すると考えられる石製品、特殊な土製品及び金属製品を掲載した。前期の上器は壺776~785、蓋786、甕787~798がある。口縁部に段を



第401図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第402図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第403図 遺構に伴わない遺物③ (1/2)

有す壺と、沈線3条までの甕が主で、前期中葉頃の様相を示す。また刻日突帯を有する甕もこの段階に伴うと考えられる。827は溝11から出土した。肩部より上は欠くが下半は完存しており、摩滅も少ない。周辺に当該期の遺構が本来は存在していたのであろう。中期の土器は壺799～803、甕804～806、高杯807～809である。前期中葉と末葉のものが多く、遺跡の盛行期と重なる。

石製品は鉄S204～230、錐S231～239、スクレイパーS242～246、素材剥片S247、石核S241・248、磨製石斧S249、打製石斧S250、錘S251、敲石S252などがある。S240はサヌカイト製だが、先端部片面にヨコ方向の研磨痕を有す。加工石斧的な用途が想定される。石鉄は主要剥離面を大きく残すものが多い。石核S248は塊状だが、当遺跡で用いられる素材剥片はS241・247の板状を呈するタイプが主で、稀少である。弥生時代前期の竪穴住居3からも板状の素材片が数点出土している。

土製紡錘車C18～20は弥生時代中期の土器片を転用している。B区南半で採集された。前期の遺物はB区北半から、中期の遺物はB区南半に出土が偏る傾向が看取される。各地点で構築される遺構の時期を反映したものと推察される。分銅形土製品C17は水田3として後述する大規模なアゼ内から出土した。弧線が刺突列点で表現され、端面は無文である。弥生時代後期のタイプではなからうか。土錘C21は遺跡南端の弥生包含層から出土した。銅鉄M1は中世の溝46に混入していた。(波邊)



第404図 遺構に伴わない遺物④ (1/3・1/2)

## 第4節 古墳時代～古代の遺構・遺物

## 1 概要 (第406・407図)

古墳時代に入ると、遺構数は激減し、堅穴住居12や井戸1が弥生時代後期末葉から古墳時代初頭にかけて廃絶したのを最後に、人々の居住を直接的に示す遺構は微高地上に営まれなくなる。同様に、弥生時代以来河道上部に作られてきた水田も古墳時代前期の中で廃棄されるようである。続く古墳時代中期に位置付けられた遺構は皆無で、ここで一度集落は途絶える。再び遺構が見られるようになるのは古墳時代後期以降で、小規模な溝や欄状遺構が散見される。ただしこれらの遺構から出土した土器は細片で、量も少なく、確実に遺構の時期を示すものとは言い難い。古代では土城1基と溝が確認されたのみである。遺構の希薄さに比例するように、出土遺物も少なく、後世の削平が著しいことも要因の一つと想定されるが、この時期、拠点を他に移したと考えた方が自然であろう。

溝21の流走方向は古墳時代以前の溝のように地形に沿った方向でも、方位と合致する方向でもなく、現代の地割りに近く、当地域の条里制施行を考える上で興味深い。(渡邊)

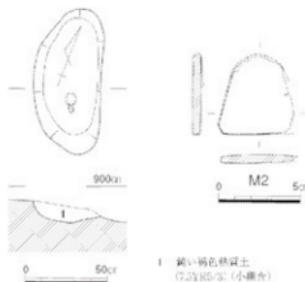
## 2 土壌

## 土壌99 (第405・407図)

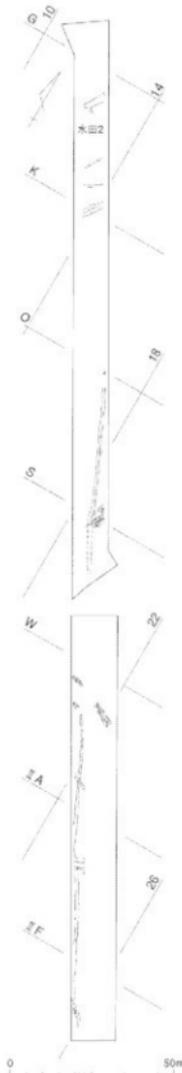
160北端で検出した。東端が後世の溝により削平を受けているものの、平面形は長軸89cm、短軸41cmの楕円形。断面形はやや凹凸のある底面から上方へ向かって直角気味に立ち上がる壁面を有する碗形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。埋土は単層で鈍い褐色粘質土である。

遺物は、底面から板状鉄製品M2やウマ土顎白歯Rが出土している。

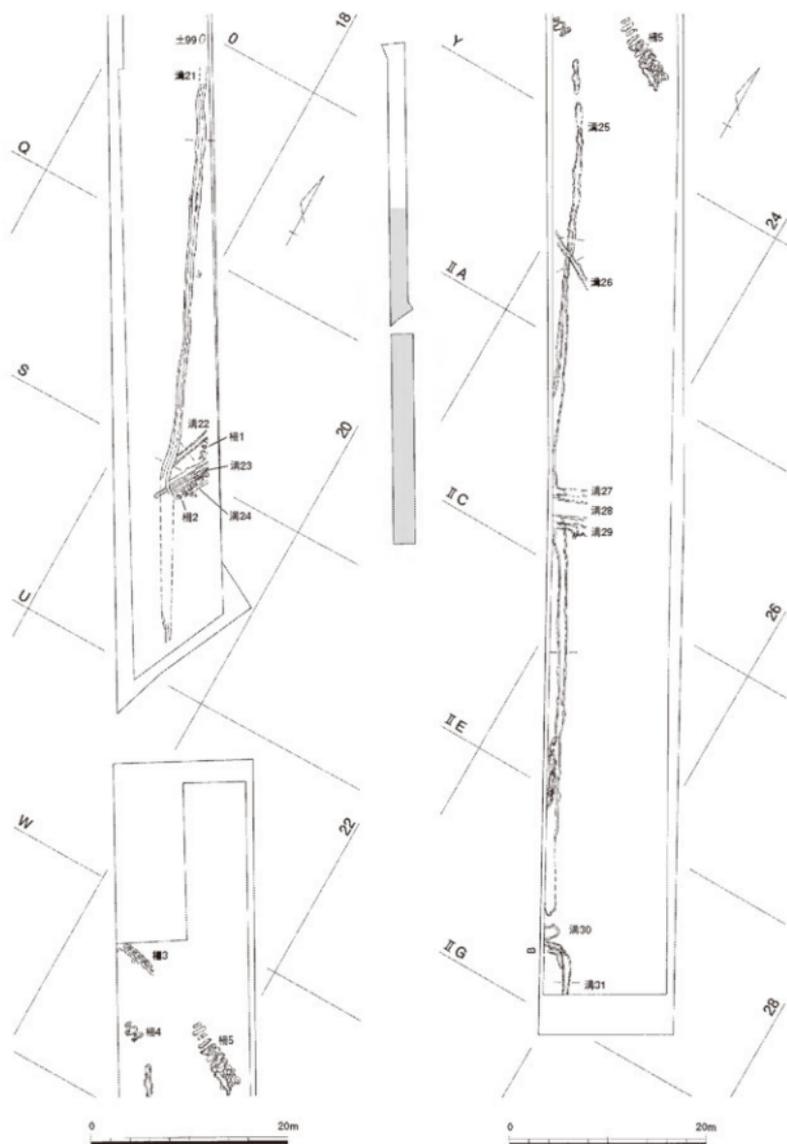
出土遺物から明確な時期を知ることは出来ないが、検出状況や埋土などから古代であると思われる。(松尾)



第405図 土壌99 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第406図 古墳時代～古代遺構全体図 (1/1,500)

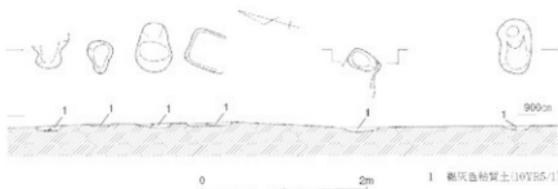


第407図 古墳時代～古代遺構図 (1/500)

## 3 柵列状遺構

## 柵列状遺構 1 (第407・408図、図版36)

18Qで検出した遺構で、周囲には古墳時代の溝22～24あるいは後述する柵列状遺構2を確認している。平面形が長軸40～60cm、短軸25～40cmの不整楕円形、断面は約3cm程度の浅い掘り込みが北西から南東にかけて6基並んでいた。いずれも埋土は褐灰色粘質土である。検出した場所は溝が錯綜していることもあり、必ずしも切り合い関係を明確にしたうえで掘り下げたとは言いがたい。出土している土器片などから柵列状遺構2と同時期であると推察される。(松尾)

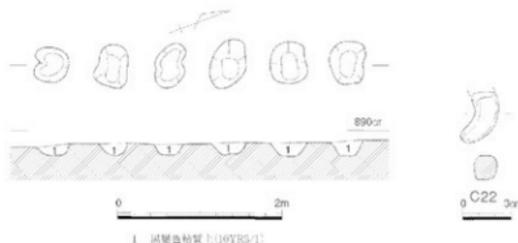


第408図 柵列状遺構 1 (1/60)

## 柵列状遺構 2 (第407・409図、図版36)

18S・Qで検出した。平面形は長軸45～60cm、短軸35～45cmの不整楕円形、断面形は深さ20cmの逆台形を呈する掘り込みが北から南にかけて6基並んでいた。北側は調査区外のため、南側は中世の溝による削平のためそれ以上延びるかどうかは明らかでない。埋土はいずれも黒褐色粘質土。断面観察の結果、後述する溝24の埋土を切って形成されていることを確認している。

出土遺物は土製品C22の他、若干の土器片が出土している。遺構の時期は古墳時代後期であると思われる。(松尾)

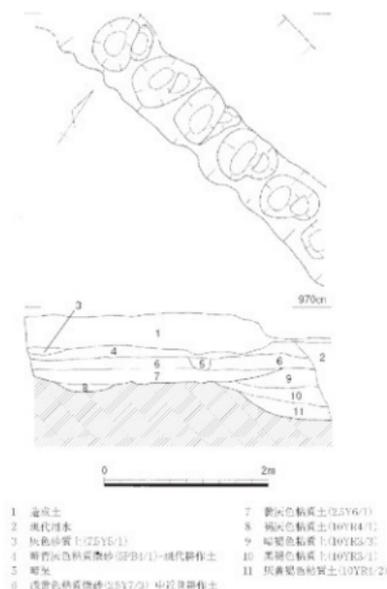


第409図 柵列状遺構 2 (1/60)・出土遺物 (1/3)

## 柵列状遺構 3 (第407・410図、図版37)

20W北西で、A区の北端に位置する。弥生時代の溝群とはほぼ並行し、残存長4.8mを測る。第410図の断面はA区北壁の堆積状況で、第7・8層が当遺構埋土にあたる。第6層は中世以降の耕作土、第9～11層は溝11に対応する。上面は幅2m程度の皿状のたわみ状を呈し(第7層)、底面南壁沿いに径30～70cm、深さ10～15cmの柱穴状の窪み(第8層)が並んでいる。底面の標高は8.65mである。

出土土器はわずかであるが、底から古墳時代後期と思われる須恵器細片が出土している。(渡邊)

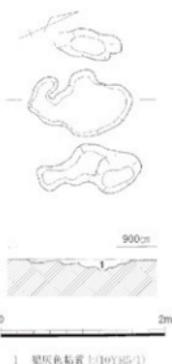


第410図 柵列状遺構 3 (1/60)

柵列状遺構 5 (第407・412図)

柵列状遺構 3・4の東に位置する。残存長約 8 m 検出した。長さ 1.5 m、幅 50~60 cm の不整形な長楕円形の窪みが 11 基、30 cm 間隔で東西方向に並ぶ。柵列状遺構 4 同様に、小柱状の窪みが複数連結して一つの単位を成している。さらに東側 5 基の南端には東西方向の溝が付設されている。底面の標高は 8.65 m である。

古墳時代後期の須置器細片が出土しており、柵列状遺構 3 と同時期の可能性が高いが、窪みの形状や主軸方向が異なることから、同一のものとは考えがたい。(渡邊)

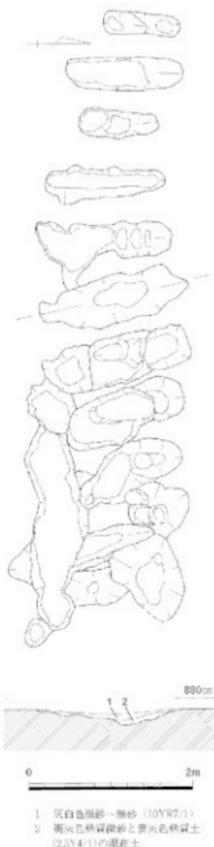


第411図 柵列状遺構 4 (1/60)

柵列状遺構 4 (第407・411図)

柵列状遺構 3 から南に 4~5 m 離れて位置する。小柱穴を連結させたような不整形な窪みが 3 基東西方向に並ぶのみである。底面の標高は 8.72 m と浅い。

時期を示す遺物は出土していないが、埋上の状況や柵列状遺構 5 との共通点から、併存していた可能性がある。(渡邊)



第412図 柵列状遺構 5 (1/60)

## 4 溝

## 溝21 (第407・413図)

160～18Sにかけて調査区を縦断するように検出した溝で、北西～南東に掘削されているもの、18S北端で東へ若干屈曲している。南側の一部(18S)が中近世の溝により削平を受けているが18S南東端で続きを確認しており、調査区外へと延びている可能性が高い。ただし、南側の調査区(20U)では検出しておらず後世の削平を受けているものと考えられ、時期や方向などから20W東端から現れる溝25につながる可能性が高いと推察される。幅は60cmから1.1m、深さは25cm程度。

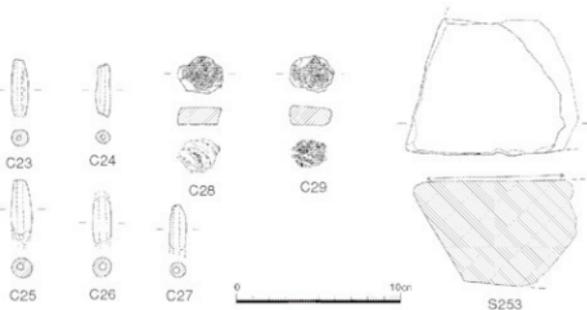
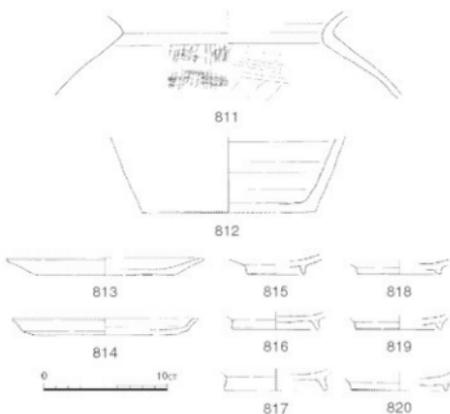
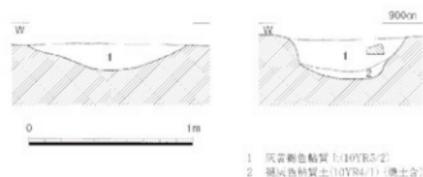
底面の標高にはあまり高低差がなく、いずれの方向へと流れていたのかは不明。

比較的多くの上器811～820、上製品C23～29、砥石S253が出土した。土器の特徴から10世紀代に機能し、埋没したものと考える。(松尾)

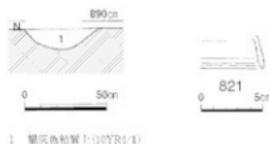
## 溝22 (第407・414図)

18Q南端で確認した溝で、北東側は調査区外へ南西端は溝22や中近世溝により削平を受けている。幅は57cm、断面形は楕円形を呈し、底面までの深さは13cmを測る。埋土は単層で褐灰色粘質土。

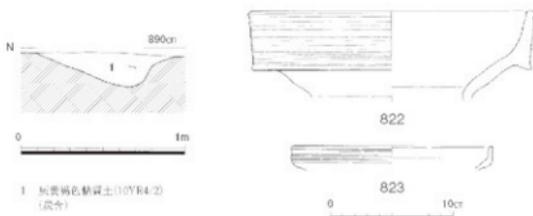
遺物は少なく須恵器杯蓋821のみ。土器の特徴などから古墳時代後期の溝であると推察される。(松尾)



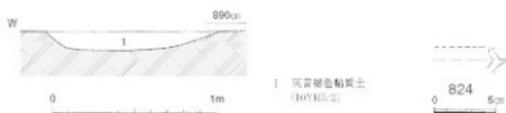
第413図 溝21 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



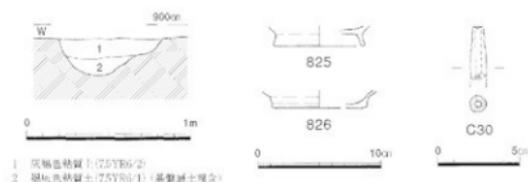
第414図 溝22(1/30)・出土遺物(1/4)



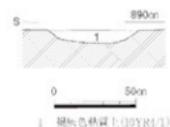
第415図 溝23(1/30)・出土遺物(1/4)



第416図 溝24(1/30)・出土遺物(1/4)



第417図 溝25(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)



第418図 溝26(1/30)

## 溝23(第407・415図)

18Qで確認した溝で、北東側は調査区外へ延びており、南西側は溝22や中近世の溝に、東肩は溝24により削平を受けていた。幅は86cm、断面は西側にテラスを有し東肩は緩やかに底面へと下がっている。最も深い底面までの深さは21cmを測る。出土遺物には822・823の土器がある。古墳時代前期前葉の溝であろう。(松尾)

## 溝24(第407・416図)

18 S北端で確認した。溝22・23同様、北東側は調査区外へ南西側は溝22や中近世の溝により削平を受けている。また欄状遺構2によって切られていることを確認した。幅は1.07m、断面形は平坦な底面から緩やかに立ち上がる壁面を有し、底面までの深さは12cmを測る。須恵器杯身824から古墳時代後期の溝である。(松尾)

## 溝25(第407・417図、図版37)

遺跡南半にあたるA区を縦走る溝である。中世以降の耕作土直下で検出される。幅、深さとも一定でないが、南に行くにつれ深さを増し、幅も広がっている。第417図に示した位置での底面の標高は8.68mである。

出土遺物は少ないが、須恵器細片及び腕825やヘラ切りの杯826が出土し、10世紀後半に位置付けられる。溝21と一連の溝である可能性も想定される。(波邊)

## 溝26(第407・418図)

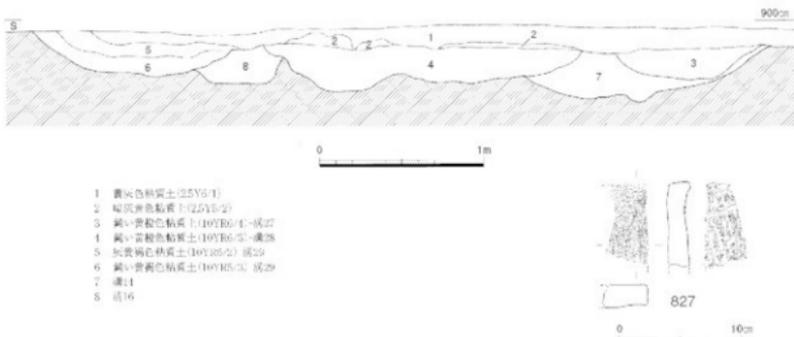
22 Y西半中央に位置する。東は現代用水路に削平され、西は調査区外に延びる。弥生包含層より上面で検出した。溝25には切られている。幅55cm、深さ8cmと小規模で、底面の標高は8.77mである。

弥生時代以前の土器しか出土していないが、埋土の土質が欄列状遺構と同じ灰色味の強い粘質土であることから、古墳時代後期に属する可能性が高いと考えられる。(渡邊)

## 溝27～29 (第407・419図)

21ⅡA南東に位置する3条並行する溝群である。北から、溝27、溝28、溝29とした。東は現代用水路に削平され、西は調査区外へ延びる。弥生時代の溝14～16とはほぼ重複し、西半上面は溝25が切る。第419図第1・2層が溝25に、第7・8層が弥生時代後期の溝に対応する。規模は、溝27が幅90cm、底面の標高8.64m、溝28が幅2m、底面の標高8.56m、溝29が幅1.2m、底面の標高8.65mである。

溝28からは古墳時代前期の土師器、溝29からは平安時代の須恵器片や瓦827が出土したが、混入の可能性もあり、3条の溝の時期を示すかどうか判断しかねる。(渡邊)

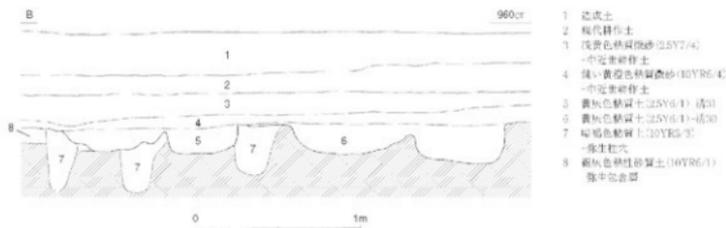


第419図 溝27～29 (1/30)・溝29出土遺物 (1/4)

## 溝30・31 (第407・420図)

24ⅡE南東で、北溝手遺跡の南端に位置する。溝30は東西に長いわみ状を呈し、溝31は弧を描く。耕作土直下で検出された。底面は平らでなく、標高は溝30が8.75～8.8m、溝31が8.8mである。

図示し得なかったが、溝31から平安時代の須恵器細片が出土した。溝30は溝31と埋土が共通し、同時期に埋没したと考えている。溝25の延長上にあり、何らかの関連があるかもしれない。(渡邊)



第420図 溝30・31 (1/30)

## 5 水田

### 水田2 (第406・421図)

河道上部に営まれた水田で、第397図第8層にあたる。範囲は水田1より南北共に5～6m広がり、微高地縁辺を削り出して水田域の拡大を図った状況が看取される。上面で畦畔痕跡と思われる帯上に鉄分が凝集した部分を検出した。帯の方向は平行でなく、複数の水田面が存在した可能性もある。

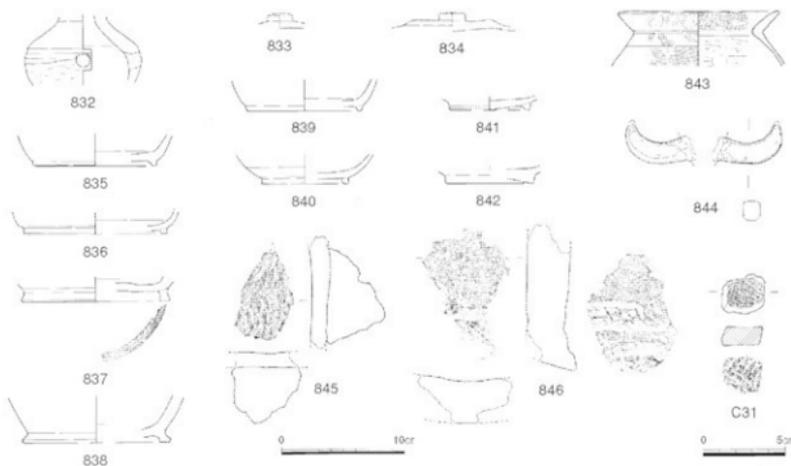
出土土器は細片がわずかで、弥生土器も混入しているが、古墳時代後期～平安時代の土器を包含する第7層との境から発829が出土しており、古墳時代初頭に埋没したと考えられる。(渡邊)



第421図 水田2出土遺物 (1/4)

### 6 遺構に伴わない遺物 (第422図)

古墳時代～古代に属する遺物の出土量は、遺構の希薄さに対応するかのよう非常に少ない。いずれも摩滅は著しくないものの、細片で、遺物からは近くに居住域を想定しがたい。古墳時代後期の須恵器、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦、須恵器破片を転用した円板形土製品などが出土している。845は古墳時代の須恵器破片で、外面に窯壁が付着している。842は削り出しの平高台を有する京都産の緑釉陶器で9世紀後半に比定される。(渡邊)



第422図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

## 第5節 中世～近世の遺構・遺物

## 1 概要 (第423～426図、写真25)

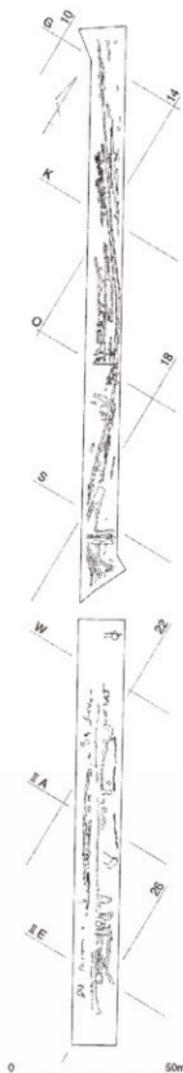
中世以降には、全面に用水路と思われる溝や素掘溝群が展開し、大規模な畦畔状遺構も構築されるなど、着実に耕地化が進んだ状況が窺取される。確実に中世に遡る遺構は土壌7基のほか素掘溝群や溝、たわみだけと少ない。近世も同様で、井戸9基と土壌11基、溝数条などに過ぎない。掘立柱建物は皆無で、窪木遺跡や南溝手遺跡とは趣が異なる。なお、近世の井戸とした遺構は土壌との判別が難しい。曲物の痕跡を井筒と認識したが、棺の可能性もあり、そうであるならば土壌墓としなければならない。しかし、同時期の上墳墓より規模が格段に大きく、底板が確認されなかったこと、副葬品が出土しなかったことから、いわゆる「野井戸」と呼ばれる施設と考えた。中近世の土壌や溝の多くも耕作に伴う施設であろう。

中近世の遺構は微高地全面を覆う中世以降の耕作土層除去後に検出される。第426図に調査区北端の堆積状況を示す。第3層が中世～近世耕作土層、第4・5層が水田3の畦畔状遺構、第6・7層が素掘溝群や溝、第8層が弥生時代の遺構、第9層が弥生包含層にあたる。他地点では第186図第3層、第397図第2層、第410図第6層、第420図第3・4層が耕作土層にあたる。耕作土層下面の標高は約8.8～8.9mとはほぼ平坦であるが、南端10mの範囲で南に下がっており、南溝手遺跡との間に低位部が存在する可能性がある。

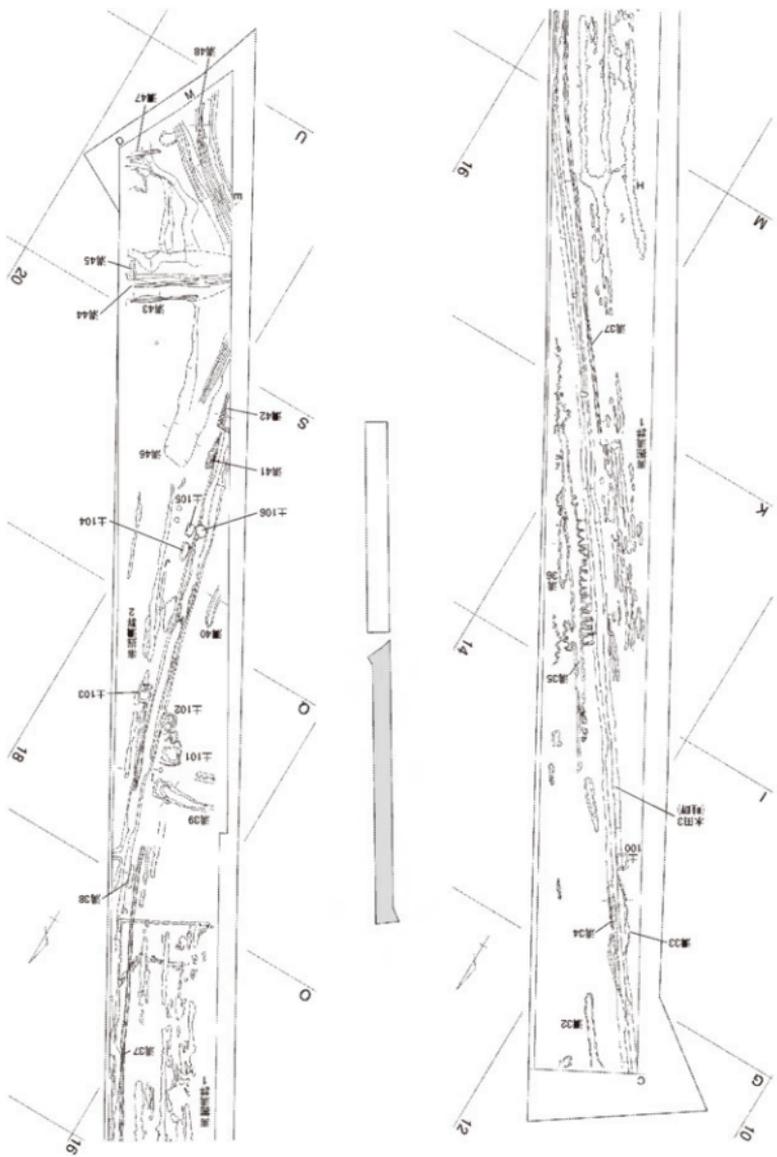
条里については、溝等の方向に現代の地割りに近い傾向が窺えるが、条里の施行を積極的に裏付ける状況は確認できなかった。(渡邊)



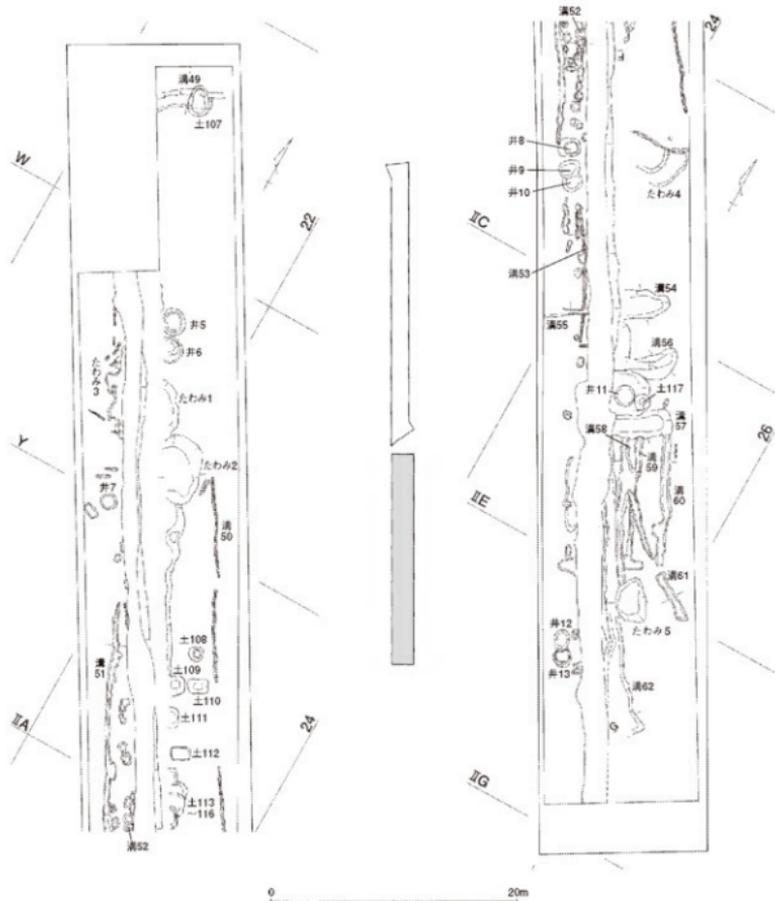
写真25 B区南半中世～近世全景 (北から)



第423図 中世～近世遺構全体図 (1/1,500)



第24図 中世～近世遺構図① (1/400)



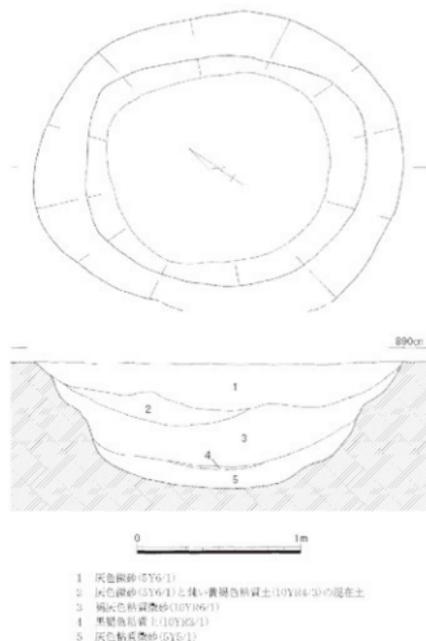
第425図 中世～近世遺構② (1/400)



- |                     |                              |                               |
|---------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 造成立土              | 4 灰褐色粘質土(7.5YR6/2) 水田3輪      | 8 灰黄褐色粘粒砂質土(10YR6/2)          |
| 2 灰代砂作土             | 5 鈍い黄緑色粘質微砂 (10YR6/4) - 水田3輪 | 9 灰褐色粘粒砂質土(7.5YR4/2) - 一部生包含層 |
| 3 鈍い黄褐色粘質土(10YR6/4) | 6 鈍い黄褐色粘質土(10YR6/2) 遺構底      |                               |
| 中近世耕作土              | 7 灰黄褐色粘質土(10YR6/2) 溝底        |                               |

第426図 調査区北壁断面図 (1/60)

## 2 井戸



第427図 井戸5 (1/30)

井戸上部では桶の一部と思われる板材も出土している。第428図第4層が桶を埋置した痕跡と思われる。底面はほぼ平らで、標高7.99mである。調査時点では湧水が激しく、放置しておくとうすぐ水が満ちる状況であった。

おはじきと俗に言われる、土器片を転用した円板形土製品C32のほか、染付や備前焼灯明皿などの陶磁器細片が出土している。18世紀以降に位置付けられる。(渡邊)

## 井戸7 (第425・429図、図版38)

20Y北東に位置する。径1.3m前後の円形を呈し、検出面からの深さは95cm、底面の標高は7.95mを測る。底面は中央が窪むが、壁体はほぼ直立し、断面はひ字状を呈する。上面より50cmほど掘り下げた標高8.35m前後で、桶のタガが環状に検出された。タガの内径は98cmである。埋上は4層に分かれ、最下層にはグライ化した粘質土が堆積していた。第2・3層には基盤土が塊状に混在する。

図示した灰釉陶器847は近世後半に位置付けられるが、印判手や刷毛目唐津も出土しており、幕末以降に埋没したと想定される。(渡邊)

## 井戸8 (第425・430図)

22II A南東に位置する。上面は東西1.81m、南北1.55mの方形を呈するが、標高8.6m前後で環状のタ

## 井戸5 (第425・427図、図版38)

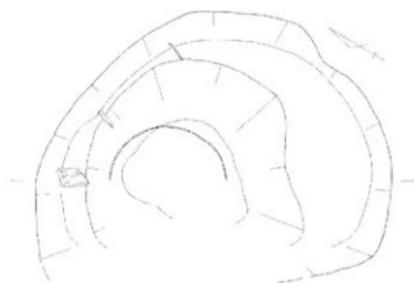
20W北東に位置する。西側を現代用水路に削平されるが長径2.24mの楕円形を呈する。検出面からの深さは76cmで、底面の標高は8.04mである。底面は平らでなく、壁体も直線的ではないが、平面規模の大きさから深さから井戸とした。

埋土は5層に分かれ、第2層はブロック状の粘土塊が混在し、人為的に埋められた状況を示す。最上層は近世耕作土と同質の土が堆積していた。

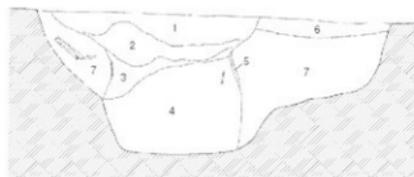
磁器はないが、備前焼片が出土している。近世に位置付けられる。(渡邊)

## 井戸6 (第425・428図、図版38)

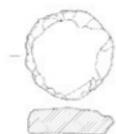
井戸5の南に隣接して掘削される。西半を現代用水路で削平されているが、直径2mを超える不整形円形を呈すると考えられる。上面より30cm程掘り下げた段階で、竹皮とみられる繊維の多い木質が環状に検出された。断面の堆積状況と合わせて、曲物を締めるタガが遺存したものと推察される。環状の径は約70cmを測る。



B90cr

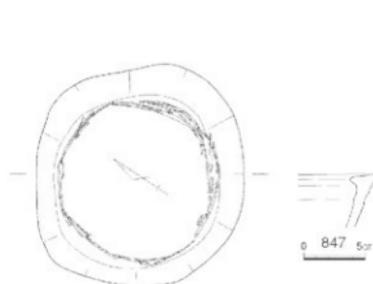


- 1 灰色微砂(SY6-1)
- 2 灰色粘粒砂質土(2SY5-1)
- 3 紫灰色粘質土(10YR5-1)
- 4 灰白色粘質土(7SY5-2)
- 5 暗青灰色粘質土(5PB4-1)(粘粒多)
- 6 灰色微砂(SY6-1)と黄褐色粘質土(10YR4-2)の混在土
- 7 黄褐色粘質微砂(2SY3-1)

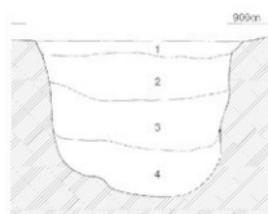
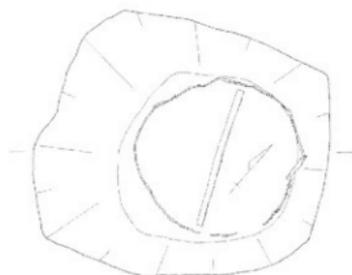


C32

第428図 井戸6(1/30)・出土遺物(1/3)

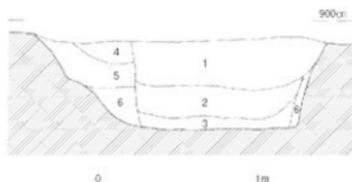


0 847 5cm



- 1 黄褐色粘質土(2SY106-3)
- 2 紫灰色粘質土(5G5-1)(茶葉餅土混在)
- 3 暗青灰色粘質土(5PB4-1)
- 4 赤褐色粘質土(5YR4-1)

第429図 井戸7(1/30)・出土遺物(1/4)



- 1 黄褐色粘質土(10YR5-2)
- 2 灰白色粘質土(10YR5-2)(粘粒減少)
- 3 灰色シルト質微砂(SY4-1)
- 4 黄褐色粘質土(10YR4-2)
- 5 灰色粘質土(2SY6-1)の混在土
- 6 灰色粘質土(5A-6)と黄褐色粘質土(N2,6)の混在土

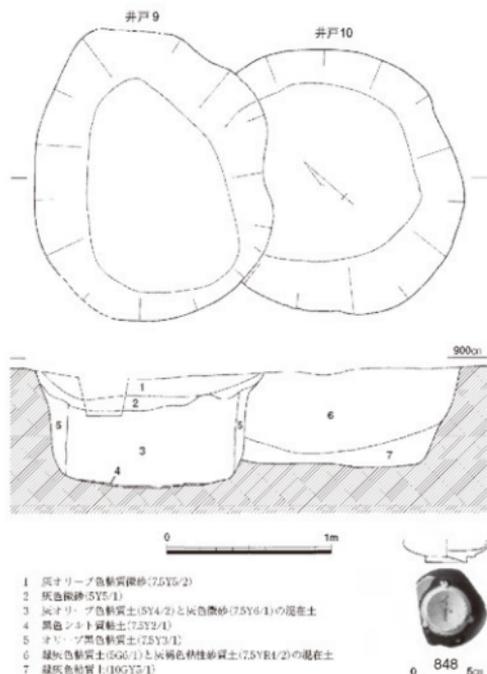
第430図 井戸8(1/30)

ガを抽出した。タガの内径は95～98cmである。底面はほぼ平らで標高は8.34mである。最下層はシルト質の微砂が堆積しており、内部に水が溜まった状態があったことを示唆している。底面の底中央からは長さ87cm、幅4cmの細長い板材が出土した。

図示していないが乗付や妬器、瓦が出土しており、幕末以降に埋没したと位置付けられる。また、釘の可能性のある鉄器細片も出土している。(渡邊)

井戸9・10 (第425・431図)

井戸8の南に位置する。南北に2基並んでおり、北が井戸9、南が井戸10である。井戸9が新しい。井戸9は1.4×1.24mの楕円形を呈し、底面の標高8.19mである。第1～5層が埋土にあたり、第1・2層は耕作土層と同質、第3層が桶の痕跡にあたる。桶は径約1mに復元される。



- 1 灰オリーブ色粘質微砂(7S15/2)
- 2 灰色粘砂(5Y5/1)
- 3 灰オリーブ色粘質土(5Y4/2)と灰色微砂(7S16/1)の混在土
- 4 黒色シキト質粘土(7S2/1)
- 5 オリーブ黒色粘質土(7S3/1)
- 6 緑灰色粘質土(5G5/1)と灰褐色粘性砂質土(7S18/2)の混在土
- 7 緑灰色粘質土(10GY5/1)

第431図 井戸9・10 (1/30)・井戸9出土物 (1/4)

出土遺物には平安時代に遡る須恵器や緑釉陶器842が混入していた。青磁香炉848から幕末以降に位置付けられる。

井戸10は径1.7m前後の円形を呈すると想定される。底面の標高は8.33mで、井戸9より高い。第6層は砂質土と粘質土が混在する土で、人為的に埋められた可能性がある。何らかの理由で使用を止め、井戸9を掘り直したと推察される。

詳細な時期を示す遺物は出上していないが、近世以降に掘削され、井戸9に先行する。(渡邊)井戸11 (第425・432図)

24ⅡC中央北寄りで、たわみ状の溝の中間に位置する。1.94×1.75mのやや南北に長い円形を呈し、底面の標高は8.04mである。第1・2層が桶の痕跡で、径90cmを測る。第2層下面は掘り方底より約15cm上方に浮いている。第6層が堆積した後には桶が置かれたと推察される。

第2層下面の標高は8.2mで、底面に木質痕跡は認められなかった。

肥前陶器849が出土しており、18世紀以降に埋没したと考えられる。

(渡邊)

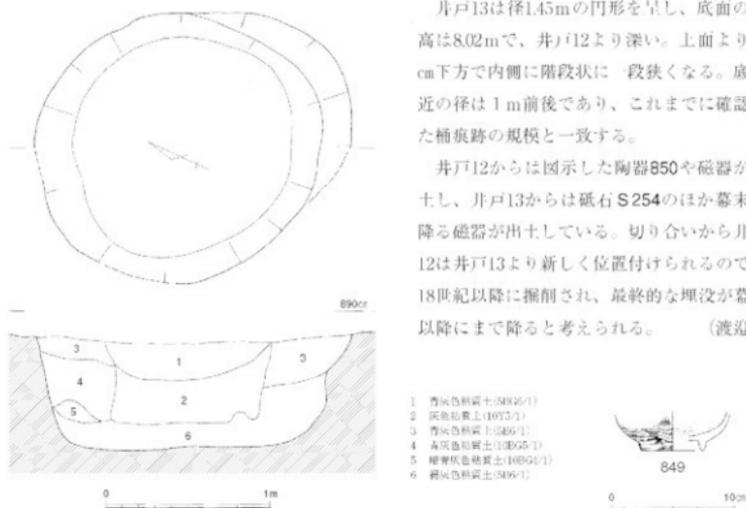
井戸12・13 (第425・433図、国版38)

24ⅡE北東に位置する。南北に2基並んでおり、北が井戸12、南が井戸13である。井戸9・10同様、連続して掘削された2基の井戸とみられる。井戸12が新しい。第1～4層は両方の井戸上面に堆積しており、両者埋没後にできた大きな窪みに堆積した土と考えられる。第1層は近世耕作土と同質で、第2・3層には弥生包含層あるいは遺構埋土に由来する土塊と、基盤層土塊が混在していた。

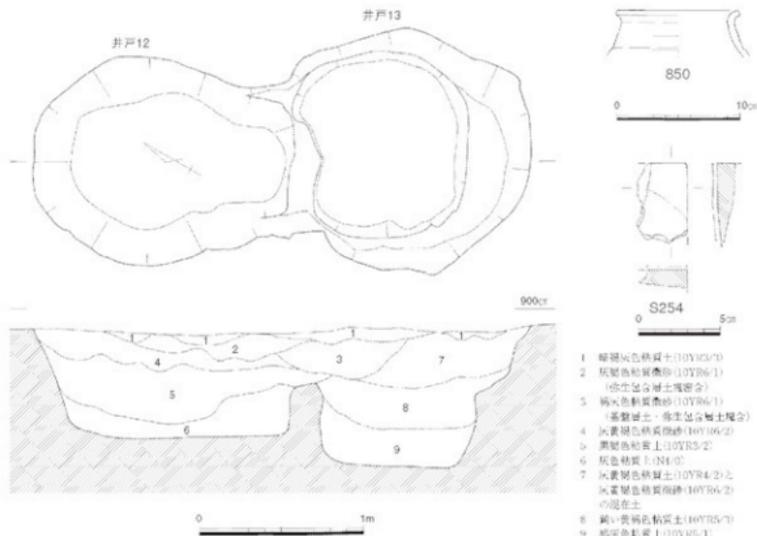
井戸12は1.75×1.26mの不整形な楕円形を呈し、底面の標高は8.2mを測る。底面は平らで断面台形を呈する。桶の痕跡は確認できなかった。

井戸13は径1.45mの円形を呈し、底面の標高は8.02mで、井戸12より深い。上面より40cm下方で内側に階段状に一段狭くなる。底付近の径は1m前後であり、これまでに確認した桶痕跡の規模と一致する。

井戸12からは図示した陶器850や磁器が出土し、井戸13からは紙石S254のほか幕末以降の磁器が出土している。切り合いから井戸12は井戸13より新しく位置付けられるので、18世紀以降に掘削され、最終的な埋没が幕末以降にまで降ると考えられる。(渡邊)

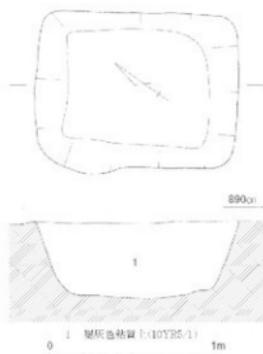


第432図 井戸11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

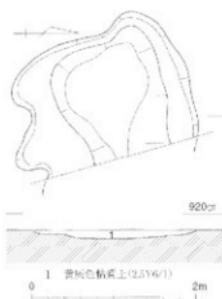


第433図 井戸12・13 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

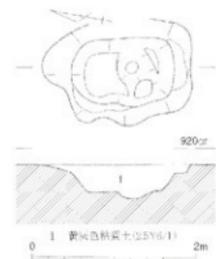
## 3 土城



第434図 土城100 (1/30)



第435図 土城101 (1/60)



第436図 土城102 (1/60)

## 土城100 (第424・434図・図版39)

10G東端中央に位置する。水田3とした畔状の高まり除去後に検出した。125×95cmの長方形を呈し、断面も壁体が直立に近い箱形の形状を有す。底面の標高は8.34mである。

出土遺物はわずかだが炬器を含み、埋土から近世以降に位置付けられるが、水田3よりは古い。(渡邊)

## 土城101 (第424・435図)

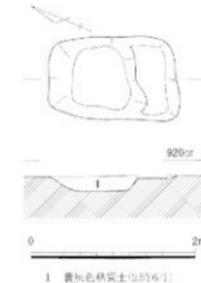
16O中央に位置し、東側は現代水田に伴う暗渠により壊されている。平面形は長軸2.3mの不整長方形を呈し、断面形は深さ10cmの浅い皿状。出土遺物は無く、遺構の性格や時期の詳細は不明であるが、周囲に分布する土城102・103と埋土が同じであることや、水田3に伴う畦に沿うように掘削されていることから、耕作に伴うものであろう。時期は18世紀以降であると思われる。(松尾)

## 土城102 (第424・436図)

16O中央で土城101の南に位置する。平面形は長軸1.8m、短軸約1.25mを測る不整長方形。断面は底面に凹凸があり、最も深い部分で検出面から42cmを測る。土城の四隅には直径5cm程の杭が打ち込まれていた。時期は土城101と同時期である。(松尾)

## 土城103 (第424・437図)

16O南東寄り、土城101・102とは水田3に伴う畦をはさんだ東側に位置する。平面形は長軸1.55m、短軸1mの長方形で、断面は南側にテラスを有し、底部の最も深い部分で検出面から20cmを測る。時期は土城101・102と同時期。(松尾)



第437図 土城103 (1/60)

## 土城104 (第424・438図)

16Q北東で検出した土城で、水田3に伴う畦に沿うように掘削されていた。平面形は長軸1.5m、短軸63cmの不整長方形。断面はやや凹凸のある底面から緩やかに上がっている。検出面から底面までの深さは16cmを測る。検出状況

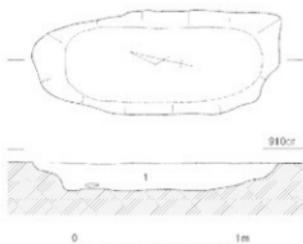
等から水田3の耕作に伴う土壌であると考えられる。出土遺物は土器細片のみ。中世後半以降に掘削されたものと推察される。

(松尾)

## 土壌105 (第424・439図)

16Q北東で、土壌104の南に位置している。平面形は長軸1m、短軸54cmの不整形長方形。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは16cmを測る。出土遺物は少なく土器細片のみ。埋土や検出状況等から土壌104と同時期で、性格も同じ土壌であると思われる。

(松尾)



1 黄い赤褐色粘質土(10YR7/2)

第338図 土壌104 (1/30)

## 土壌106 (第424・440図、図版39)

16Q北東で、土壌105の西に位置している。水田3に伴う畦を除去した後に検出した。平面形は長軸1.11m、短軸87cmの楕円形。断面は東側に一段深く落ち込んでいるか所があり、底面は凹凸がある。検出面から底面の最も深い部分までは14cmを測る。埋土中には2～12cm大の自然石が含まれており、南半分に集中していた。これら自然石の他は土器の細片が出土したのみで、詳細な時期を明らかにすることはできないが、検出状況から水田3に先行する時期、中世前半であると思われる。

(松尾)

## 土壌107 (第425・441図)

20J北西で、A区の北端に位置する。溝49下面で検出した。南北2.45m、東西1.7mの不整形円形を呈し、底面の標高は8.27mである。溝49と同質の上で埋没し、溝に伴う可能性もある。

砥石S255のほか、細片ではあるが土師質土器椀も出土した。13世紀代に比定されるが、溝49からは13世紀末～14世紀前半に比定される土師器椀が出土しており、矛盾はなく、13世紀のうちに埋没したと想定される。

(渡邊)

## 土壌108 (第425・442図、図版39)

22Y中央やや北寄りに位置する。上面は不整形だが、底面近くは一辺70cm弱の方形を呈する。底面の標高は8.58mである。

出土土器は細片のみで時期不明だが、土壌111最上層と同じ埋土が堆積しており、同じ頃に埋没したと考えられる。

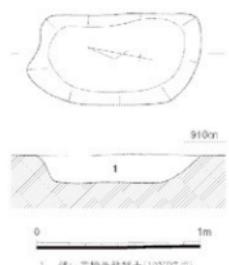
(渡邊)

## 土壌109 (第425・443図、図版39)

22Y中央で、土壌108の南に位置する。南北1.64mを超える不整形方形を呈すが、底面は一辺70～80cmの方形を呈す。底面の標高は8.38mである。

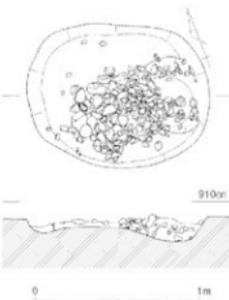
磁器細片が出土しており、近世と考えられる。土壌110と埋土が同じで、同時期に埋没した可能性がある。

(渡邊)



1 黄い赤褐色粘質土(10YR7/2)

第339図 土壌105 (1/30)



1 黄い赤褐色粘質土(10YR7/2)

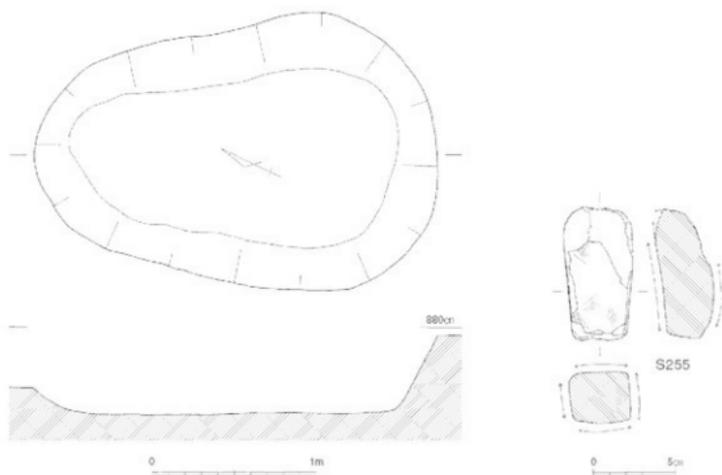
第440図 土壌106 (1/30)

土壙110 (第425・444図、図版39)

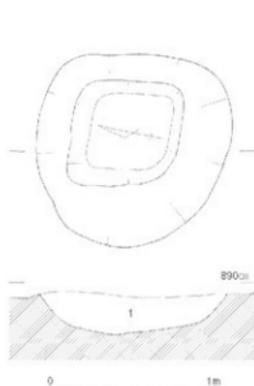
土壙109の東に位置する。東西1.67m、南北1.16mの長方形で、底面の標高は8.22m。壁体がほぼ直立する箱形の形状を有す。第1・2層は砂質土と粘土塊が混在し、人為的に埋められたとみられる。

肥前陶器片が出土しており、18世紀以降に埋没したと考えられる。

(渡邊)

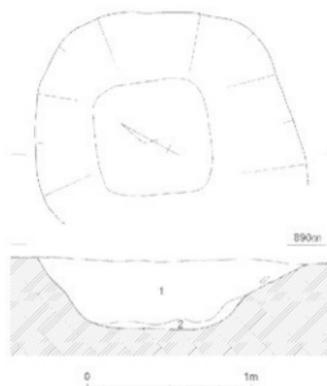


第441図 土壙107 (1/30)・出土遺物 (1/3)



1 黒灰色粘質細砂 (ZSY6-1)  
(黒灰色粘質土 (ZSYR4-1) 埋没部)

第442図 土壙108 (1/30)



1 黒灰色粘質土 (ZSYR-1) と 灰色粘質細砂 (ZSY6-1) の混在土  
2 灰色シルト (ZSY5-1)

第443図 土壙109 (1/30)

## 土壌111 (第425・445図、図版39)

土壌110の南に位置する。南北1.68mの長方形で、主軸方向が土壌110にはば直交する。底面の標高は826mである。壁体はやや湾曲しているが、箱形に近い形状を有す。埋土は混在した土で、人為的に埋められた状況を示す。

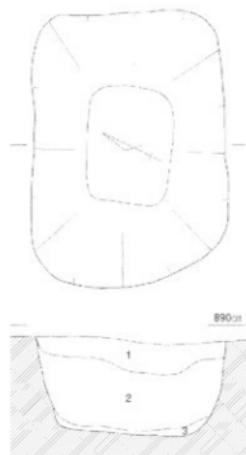
詳細な時期は不明だが陶磁器細片が出土しており、近世の範疇で捉えられる。(渡邊)

## 土壌112 (第425・446図、図版39)

土壌111の南に位置する。東西1.58m、南北1.02mの長方形を呈す。主軸方向は土壌110に平行する。深さ22cmと浅いが、壁体は直立しており、本来は箱形の形状を有していたと想定される。底面の標高は858mである。

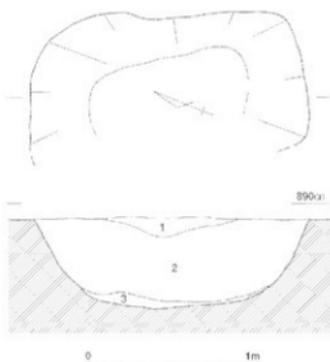
時期を特定しうる遺物は出土していないが、埋土は土壌111の第2層と同じで、土壌111と同じ頃に人為的に埋められた可能性が高い。

土壌110～112は良く似た規模・形状を有し、埋土もブロック状の土塊が混在する共通性がある。また、それぞれの主軸方向も直交もしくは平行しており、無関係ではないと考えられる。これらの状況から、3基は共通の機能を有し、計画的に配置されたものと推察される。(渡邊)



- 0 1m
- 1 黒灰色粘質土(7.5YR4/1)と灰色粘質土(7.5Y6/1)の混在土
  - 2 黒灰色粘質土(7.5YR4/1)と黄褐色粘質土(5Y7/5)の混在土
  - 3 灰色粘質土(7.5Y5/1)

第444図 土壌110 (1/30)



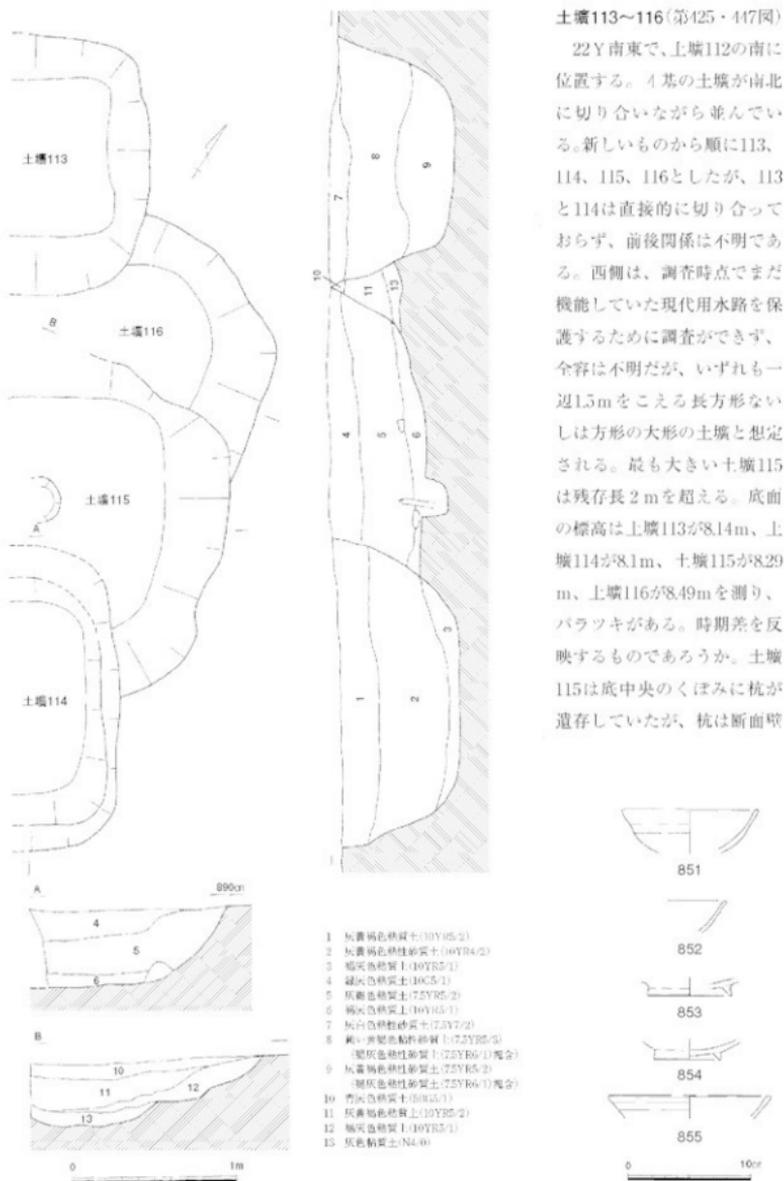
- 0 1m
- 1 黄灰色粘質砂(2.5Y6/1)・黒灰色(7.5Y4/1)粘質土(褐色)
  - 2 黒灰色粘質土(7.5YR4/1)と灰色粘質砂(7.5Y6/1)と黄褐色粘質砂(5Y7/5)の混在土
  - 3 灰色粘質土(7.5Y5/1)

第445図 土壌111 (1/30)



- 0 1m
- 1 黒灰色粘質土(7.5YR4/1)と灰色粘質砂(7.5Y6/1)と黄褐色粘質砂(5Y7/5)の混在土

第446図 土壌112 (1/30)



第447図 土壙113~116 (1/30)・土壙115・116出土遺物 (1/4)

土壙113~116(第425・447図)

22Y南東で、土壙112の南に位置する。4基の土壙が南北に切り合いながら並んでいる。新しいものから順に113、114、115、116としたが、113と114は直接的に切り合っておらず、前後関係は不明である。西側は、調査時点でまだ機能していた現代水路を保護するために調査ができず、全容は不明だが、いずれも一辺1.5mをこえる長方形ないしは方形の大形の土壙と想定される。最も大きい土壙115は残存長2mを超える。底面の標高は土壙113が8.14m、土壙114が8.1m、土壙115が8.29m、土壙116が8.49mを測り、バラツキがある。時期差を反映するものであろうか。土壙115は底中央のくぼみに杭が遺存していたが、杭は断面壁

にむかって斜めに打ち込まれており、用水路に伴う可能性もある。

上層115から851～854が、上層116から855が出土した。13世紀中頃～後半に比定される。土層113・114から時期を示す土器はないが、陶磁器を含んでいないことから、中世後半のうちに埋没したと考えられる。(渡邊)

#### 土層117 (第425・448図)

24ⅡC北西で、井戸11の東に隣接する。径1.24mの不整形円形を呈す。U字形の断面形状を有し、最も深い所で底面の標高は8.32mである。上部は砂で埋没していた。

埋土から中世に属する可能性が高いと考えた。

(渡邊)

## 4 溝

#### 溝32 (第424図)

10E南東で、遺跡北端に位置する。第426図第7層が溝埋上にあたる。上部幅1m、深さ8cm、底面の標高8.7mを測る。素掘溝群と同じ上で埋没しており、耕作に伴う溝と考えられる。(渡邊)

#### 溝33・34 (第424・449図)

10G北西に位置する。水田3とした畦畔状遺構の下で検出した。溝33は幅1.16m、底面の標高8.66m、溝34は幅20cm、底面の標高8.59mである。耕作土と同様の土で埋没していた。耕作に伴う溝と考えられる。(渡邊)

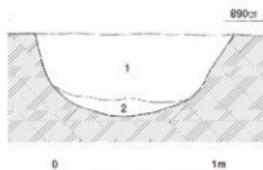
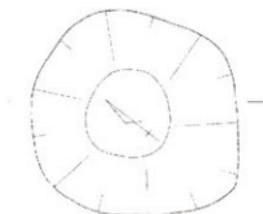
#### 溝35 (第424・450図、写真26)

12G北西から14Ⅰ南西にかけて検出された溝で、南北長28m、幅1m前後、深さ4cm、底面の標高は8.65mを測る。西側に、約1m間隔で櫛の歯状に短く突出する溝が付随する(写真26)。畑作に伴う畝状遺構とも考えたが明確にはできなかった。

古代の土器片や瓦が混在するが、堆積状況や埋土より、中世に位置付けられる。(渡邊)

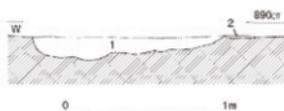
#### 溝36 (第424・450図)

12Ⅰ北東で、溝35の東に隣接し、一部重複する。幅60cm、深さ4cm、底面の標高は8.65mである。短



1 灰色砂質土(10Y5/1) 2 灰色粘質土(N6/0)

第448図 土層117 (1/30)



1 褐色粘質黄砂層(7.5YR6/1)・明黄砂土(埋土)・溝32  
2 灰黄色粘質微砂(2.5Y6/2) 溝34

第449図 溝33・34 (1/30)



1 褐色粘質微砂(7.5YR6/1)・溝35  
2 黄灰色粘質微砂(10YR6/2)・溝36

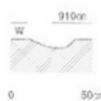
第450図 溝35・36 (1/30)



写真26 溝35 (南東から)

く途切れ気味で、底面も凹凸があり、耕作痕の一部とみられる。第397図第5層が当遺構埋土にあたる。

時期を示す遺物は出土していないが、堆積状況や埋土から、中世に属すると考えられる。(渡邊)

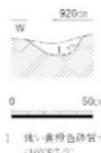


第451図 溝37(1/30)

溝37 (第421・451図)

14K～16Qにかけて調査区を縦断するように検出した溝で、水田3に伴う畦の西側を並行して掘削されている。幅は27cm、断面形は碗形を呈し、検出面から底面までの深さは6cmを測る。

埋土や出土遺物等から水田3の最終段階に伴うものであると考える。掘削時期は明らかでないが、近世以降であろう。(松尾)



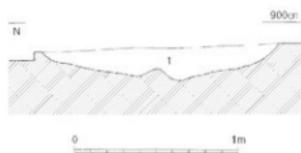
第452図 溝38(1/30)

溝38 (第421・452図)

16M・Oで、水田3に伴う畦および溝37に並行して掘削された溝。全長2m、幅11cmで、断面は深さ11cmを測る碗形を呈する。埋土や検出状況等から、水田3の最終段階に伴い、溝37とほぼ同じ時期であると思われる。(松尾)

溝39 (第421・453図)

16O西側で確認し、西端は調査区外へ延びている。中近世耕作土である鈍い黄褐色粘質土を除去した後に検出した。幅は最も広い部分で1.45m、断面は凹凸のある底面から緩やかに壁が立ち上がり、深さは20cmを測る。出土遺物は土器細片のみ。埋土等から中世後半には埋没した溝であろう。(松尾)



1 鈍い黄褐色粘質土(2.5Y7/2) (底面に黄褐色粘質土層)

第453図 溝39(1/30)

溝40 (第424・454図)

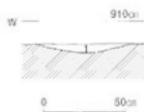
16Q北側で検出した溝で、南側は調査区外へと延びている。幅は66cmで、断面形は浅い皿形を呈し、検出面から底面までの深さは6cmを測る。土器の細片が出土している。中世であろう。(松尾)

溝41 (第421・455図)

16Q南東で確認した溝で、検出状況や埋土等は溝40と似ている。幅は48cm、深さは検出面から底面まで10cmを測る。断面形は碗形を呈している。上述した理由から、中世の溝であると推察される。(松尾)

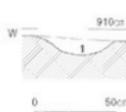
溝42 (第424・456図)

16Q南東隅で確認した。南側は調査区外へと延びており、水田3に伴う畦に並行して掘削されているものの、北端で西へ直角に曲がる。幅34cm、深さ9cm。検出状況等から中世。(松尾)



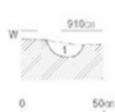
1 浅い黄褐色粘質土(10YR6/3)

第454図 溝40(1/30)



1 浅い黄褐色粘質土(10YR7/3)

第455図 溝41(1/30)



1 灰白色粘質砂質土(10YR8/2)

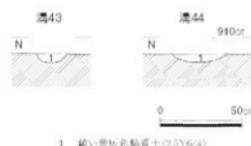
第456図 溝42(1/30)

## 溝43 (第424・457図)

18S北端に位置し、調査区を横断する溝。後述する溝45が埋没した後に掘削されている。幅19cm、深さ6cmを測り、断面形は碗形を呈する。並行して掘削されている溝44との間に現代暗渠が埋設されており、方向は同じ。このことから水田3の耕作に伴う溝で、掘削時期は18世紀以降であると考えられる。(松尾)

## 溝44 (第424・457図)

18S北端に位置し、溝43に並行して掘削されている溝。幅34cm、深さは5cmを測り、断面形は碗形を呈する。溝43と同様の理由により、掘削時期は18世紀以降であると思われる。(松尾)

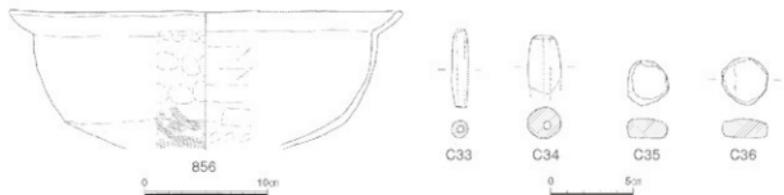
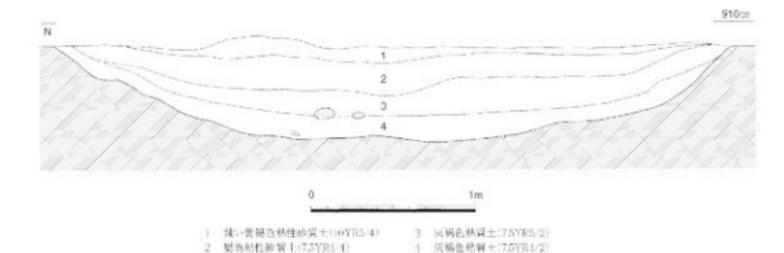


第457図 溝43・44 (1/30)

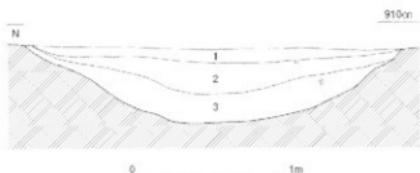
## 溝45・46 (第424・458・459図)

溝45は18S北端に位置し、調査区を横断するように掘削されている。調査当初は溝46と同一の溝であるとの認識で掘り下げを行ったが、掘り下げ後に調査区西壁(第461図)を精査したところ、溝46埋没後に掘削されていることを確認した。溝の幅は東端で4.1m、西端で2.2m、検出面から底面までの深さは40～54cmを測る。なお、溝の幅が西へ行くほどに狭くなり、底面の高さが高くなることから、路線西端のそう遠くない地点で溝が終結していると思われ、底面の標高からは南西～北東に向けての流水があったものと推察される。

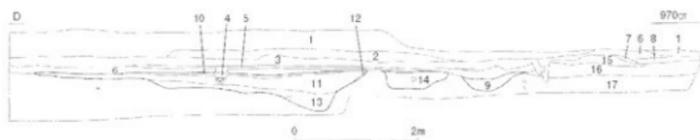
溝46は18Q・Sに位置し、北～南に掘削されているものの、途中で北西～南東に屈曲し、そのまま路線外へと延びている。溝の幅は2.4～5.4m、検出面から底面までの深さは42～64cmを測る。底面の標高からは北から屈曲部を経て南東に向けて流水があったものと推察される。ただし、溝の底面で観察



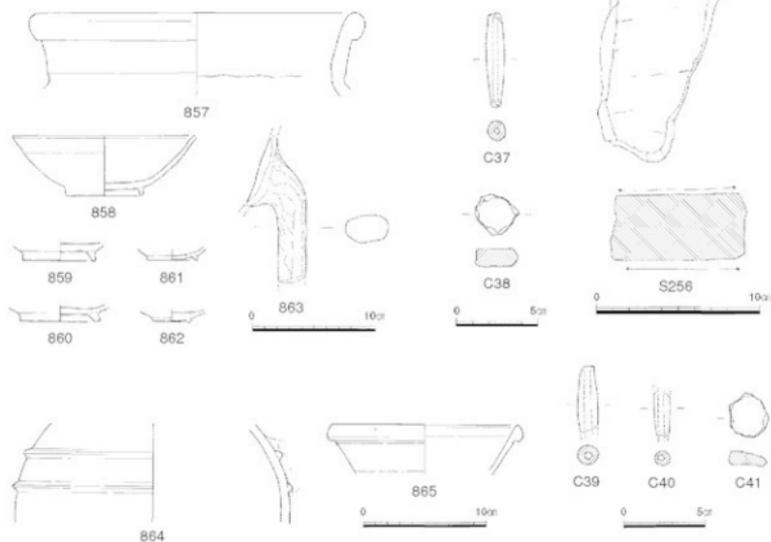
第458図 溝45 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 黄褐色粘質土(10YR5/6) 3 黄褐色粘質土(10YR5/1)(粘性強)  
2 黄褐色粘質土(10YR5/5)



- 1 塩土  
2 灰色砂泥粘質土(5Y6/1) 粘性土  
3 黄褐色粘質土(10Y5/1) 粘性土  
4 砂土  
5 黄褐色粘質土(10Y5/6)  
6 黄褐色粘質土(10Y5/6)  
7 黄褐色粘質土(10Y5/2)  
8 灰色粘質土(5Y6/1)  
9 黄褐色粘質土(7.5YR5/1) 粘性強  
10 黄褐色粘質土(10YR5/6) 粘性強  
11 黄褐色粘質土(10YR5/2) 粘性強  
12 黄褐色粘質土(10Y5/2) 粘性強  
13 黄褐色粘質土(10Y5/1) 粘性強  
14 黄褐色粘質土(10Y5/2) 粘性強  
15 黄褐色粘質土(7.5YR5/1)  
16 黄褐色粘質土(10YR5/6)  
17 黄褐色粘質土(10YR5/4)



第459図 溝46 (1/30・1/80)・溝45・46出土遺物 (1/4・1/3)

できた著しい鉄分の沈着は、水位の上下が頻繁に起きていたことを物語っている。

溝の掘削時期は明らかにし難いが、溝46は13世紀後半から14世紀初頭にかけて徐々に埋没し、その後溝45が掘削されたものの、程なく埋まり役目を終えたものと思われる。(松尾)

## 溝47 (第424・460図)

18S東端で、溝46掘り下げ後に確認、北東-南西に掘削された溝。幅は34cmを測り、断面は底面から壁面が直角気味に立ち上がるものの、南壁は途中で緩やかに傾斜する。検出面から底面までの深さは26cm。検出状況から溝46に先行するものと思われる。中世前半であろう。(松尾)



1 褐色粘板質土(10YR5/1)

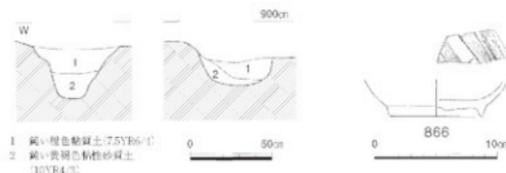
第460図 溝47 (1/30)

## 溝48 (第424・461図)

18S南半に位置する溝。水田3に伴う畦に並行して掘削されている。断面観察(第459・461図)の結果、溝46埋没後に掘削されたものと推察された。溝の規模は幅34cm、深さ26cmを測るが、底面から10cm程度掘り込んだか所が3か所認められる。掘り込みの規模は長さ1.4～2m、幅は30～35cm程度。具体的な機能を断定することはできないが、水田耕作に伴う溝であろう。

出土遺物は866のみ。幕末以降のものと思われ、少なくとも平成元年頃までは水田として利用されていた水田3の変遷を考える上で重要である。

(松尾)



1 褐色粘板質土(7.5YR5/1)

2 褐色粘板質土(10YR5/2)

10YR4/3

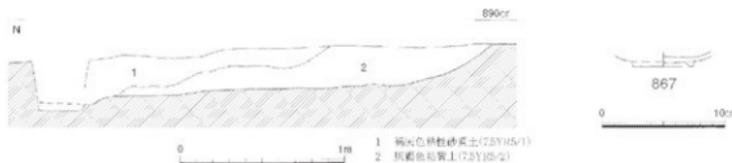
1 浅黄褐色粘板質土(10YR5/4) 中世前半層  
2 褐色粘板土(7.5YR5/1) (粘板層上層) - 溝46  
3 浅黄褐色粘板土(10YR5/3) 溝454 灰黄色粘板質土(10YR5/2) 溝45  
5 褐色粘板土(10YR5/1) (粘板層) - 溝45  
6 浅黄褐色粘板土(10YR5/3) 溝457 褐色粘板土(10YR5/1) 溝45  
8 浅黄褐色粘板土(10YR5/2) - 溝45  
9 灰黄色粘板土(10YR5/2) 溝45

第461図 溝48 (1/30・1/80)・出土遺物 (1/4)

## 溝49 (第425・462図)

20U北西に位置し、土壌107埋没後に掘削された溝である。残存部で幅2.8mと広く、たわみの一部かもしれない。底面は北に向かって緩やかに下がり、北端で標高8.38mである。

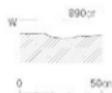
上師器輪867が出土しており、13世紀後半に位置付けられ、溝45・46と一連の可能性がある。(渡邊)



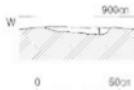
1 褐色粘板質土(7.5YR5/1)

2 灰黄色粘板土(7.5YR5/2)

第462図 溝49 (1/30)・出土遺物 (1/4)

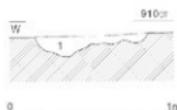


第463図 溝50 (1/30)



1 灰黄色粘質砂土(10YR6/2)

第464図 溝51 (1/30)



1 黄い黄色粘質微砂(2.5Y6/4)

第465図 溝52 (1/30)



1 黄い黄色粘質微砂(2.5Y6/4)

第466図 溝53 (1/30)

溝50 (第425・463図)

22W南西から24II A北西にかけて直線的に伸び、調査区に平行する溝である。幅20cm、深さ2cmと浅く、底面の標高は8.77cmである。

時期を示す遺物は出土していないが、埋土より中世に属する可能性が高いと考えられる。(渡邊)

溝51 (第425・464図)

22Y南西から22II A南東にかけて伸びる溝で、若干蛇行気味であるが、溝50にほぼ並行する。幅40cm、深さ3cm、底面の標高8.8mを測る。

白色～灰色味の強い粘質土で埋没していることから中世に属すると考えられ、溝50と同じ頃に位置付けられよう。(渡邊)

溝52 (第425・465図)

溝51の東に位置する。22Y南西から22II A北東にかけて不整形円形の柱状遺構が15基以上南北に並んで検出された。深さは一律でなく、22II A北端では一つの溝で繋がる状況も認められたことから、底面に凹凸のある溝の上部が削平され、底面近くの痕跡が遺存していると考えた。凸凹は起耕に伴う可能性がある。

時期を示す遺物はないが、黄色味の強い砂で埋没していることから、近世に位置付けられる。(渡邊)

溝53 (第425・466図)

22II A南東から24II C北西にかけて検出された。全長11mで、東へ張り出すようにやや湾曲する。幅23cm、底面の標高は8.95mを測る。

埋土から近世に属すると考えられる。(渡邊)

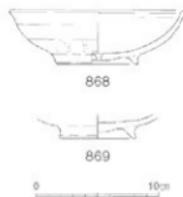
溝54 (第425・467図)

24II A南西に位置する。幅2.3mの東西に長いたわみ状の遺構である。深さは20cmで、底面の標高は8.4mである。底面には若干の凹凸があるが、ほぼ平坦である。現代用水路擁壁保護のために西端を調査しておらず、溝62との関係は不明である。

土師器碗868・869が出土した。868の底部には穿孔がある。12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。(渡邊)



1 黄い黄色粘質土上(10YR6/2) 3 灰黄色粘質土上(10YR6/1)  
2 黄灰色粘質砂土(10YR5/1)



第467図 溝54 (1/30)・出土遺物 (1/4)

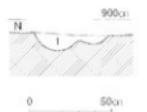
## 溝55 (第425・468図)

24ⅡC 南西に位置する。幅45cm、深さ10cm、底面の標高8.8mである。平安時代の溝25を横断する。早鳥式と呼ばれる土師器碗細片が出土し、中世に位置付けられる。(渡邊)

## 溝56 (第425・469図)

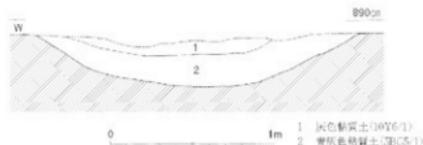
24ⅡC 北西で、溝54の南に位置する。幅2mをこえるたわみ状の遺構で、底面は大きく湾曲する。深さ30cm、底面の標高8.5mを測る。

出土遺物は皆無で、時期の特定はできないが、最上層が溝57と同じ埋土であることから、同じ頃に埋没したと考えられる。(渡邊)



1 厚灰青色粘質陶片 (25Y3/2)

第468図 溝55 (1/30)

1 灰色粘質土 (10Y6/1)  
2 黄灰色粘質土 (2R5/1)

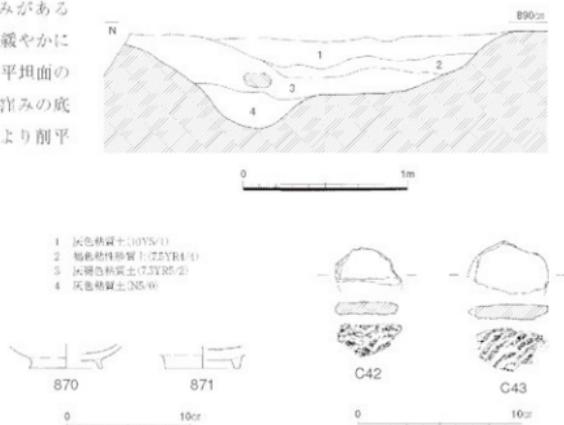
第469図 溝56 (1/30)

## 溝57 (第425・470図)

溝56の南に位置し、溝56に平行する。北側の一部を井戸11に伴うたわみに切られる。溝56と良く似た平面形を有し、幅2.4mを測る。断面図では北側の一部に窪みがあるが、底には平坦面を有し、緩やかに壁体が外方へ立ち上がる。平坦面の標高は8.46mで、最も深い窪みの底は8.24mである。用水路により削平されて断定できないが、南北方向の溝62に取り付く可能性がある。

土師器碗870、白磁

871、中世須恵器壺片を転用したおぼじきC42・43などが出土している。13世紀中頃～後半に比定され、溝62と同じ頃に埋没したと想定される。(渡邊)

1 灰色粘質土 (10Y5/1)  
2 粘板状性粘質土 (25YR4/0)  
3 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2)  
4 灰色粘質土 (2N5/0)

第470図 溝57 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

## 溝58 (第425・471図)

24ⅡC 中央から南東に位置する。溝57から南に延びる3本の小溝の一つである。南端はたわみ5と繋がるようにも見える。溝62とは並走する。幅80cm、深さ14cm、底面の標高は8.55mである。

土師器小皿872が出土しており、13世紀代に位置付けられる。(渡邊)

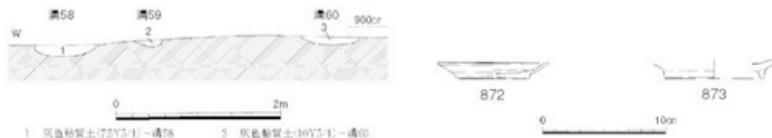
溝59 (第425・471図)

溝58の東に位置する。南端はたわみ5の手前でT字状に東西に広がる。幅40cm、深さ8cm、底面の標高8.65mである。溝59とはH字状に接する部分があり、一連の施設である可能性がある。(渡邊)

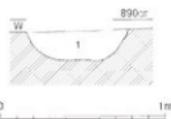
溝60 (第425・471図)

溝59の東に位置する。北端は丸く収まる。幅72cm、深さ10cm、底面の標高8.78mである。

土師器碗873が出土しており、13世紀後半に位置付けられる。(渡邊)



第471図 溝58～60 (1/60)・溝58・60出土遺物 (1/4)



第472図 溝61 (1/30)

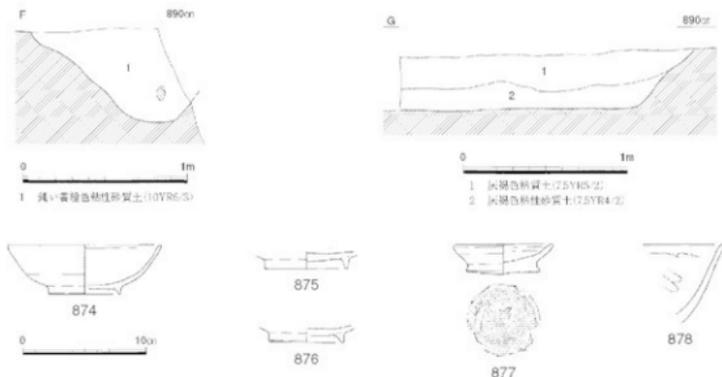
溝61 (第425・472図)

24ⅡC南東で、溝58と溝59の接点から溝60の南側にかけて斜行する。溝59調査後に検出した。幅62cm、深さ18cm、底面の標高8.65mで、U字に近い断面形を有す。方向から時期が異なると推察されるが、切り合いは未確認で、前後関係は明確でない。黄色味の強い砂質土で埋没していることから、近世に降る可能性もある。(渡邊)

溝62 (第425・473図)

溝57南側から26ⅡE西端にかけて検出した。大部分が用水路と重複し、南端を検出することとどまる。北半は深さ55cmで、断面V字に近い台形の溝だが、南に行くにつれ底が高くなり、南端は2mをこえる幅広いたわみ状を呈す。底面の標高は北部で8.28m、南端で8.38mである。

土師器碗874～876、小皿877、白磁878が出土し、13世紀中頃～後半に位置付けられる。(渡邊)



第473図 溝62 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 5 素掘溝群

## 素掘溝群 1 (第424・474図)

B区中央の微高地上で、12Mから14Mを中心とした南北方向の素掘溝群である。北端と南端は浅く細い溝が密な間隔で並走し、鋤痕と想定されるが、中央付近では50cmを超える幅広い2～3条の溝として捉えられる。別遺構の可能性もあるが、耕作に伴う溝には間違いないであろう。このような溝の埋土は第426図の第6層に対応し、水田化される以前の畑作に伴うものと考えられる。(渡邊)

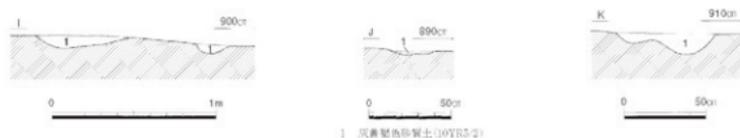


第474図 素掘溝群 1 (1/60)

## 素掘溝群 2 (第424・475図)

16O・Qで検出した素掘溝群 2は、水田3に伴う畦を除去した後に検出し、N-25°-Wの方向に掘削されていた。幅は20～60cm、断面形は碗形を呈するものが多く、深さは2～10cm程度。

出土遺物は無く明確な時期を示すことは難しいが、水田3畦が構築される以前の耕作に伴う溝であると思われ、ここでは中世としておきたい。(松尾)



第475図 素掘溝群 2 (1/30)

## 6 水田

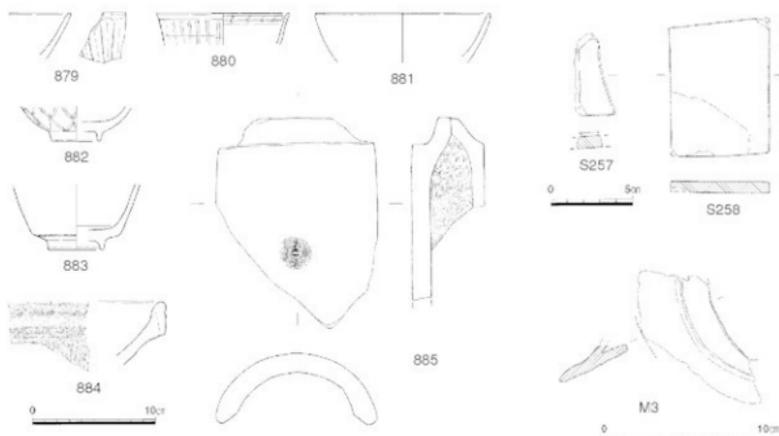
## 水田 3 (第424・476・477図)

10E～18Qにかけて検出した畦に伴う。畦の規模は確認か所によって若干異なるが、幅20cm～1mで高さは20～40cmを測る。16Oより南側では中世から近世にかけての耕作土を盛り上げて畦を構築し



第476図 水田 3 (1/60)

ている（第476図右）ものの、北側については弥生時代の包含層を削るにより畦を成形して（第476図左）いた。畦は幾度かの修繕・改築を繰り返して利用されており、少なくとも平成元年頃までは水田として機能していたと思われる。出土遺物は幕末以降のものが大半で、嘉永年間には溝手村が北と南とに分かれた際にこの畦を境界の目印としたようである。なお溝46が畦に沿って掘削されていることから、その成立時期を中世後半まで遡らせることも可能であると推察される。（松尾）

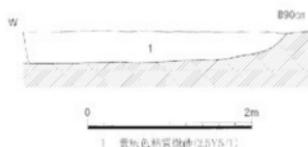


第477図 水田3出土遺物 (1/4・1/3)

## 7 たわみ



第478図 たわみ1 (1/30)



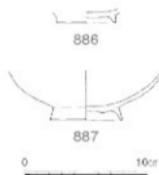
第479図 たわみ2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### たわみ1 (第425・478図)

20W南東に位置する。大部分を用水路のため調査できていないが、たわみ2と類似した遺構であると推定される。検出面からの深さ12cmで、断面は浅い皿状を呈す。底面の標高は8.71mである。たわみ2と同じ埋土であることから、同じ頃に埋没したと考えられる。（渡邊）

### たわみ2 (第425・479図)

たわみ1の南に位置する。残存部で南北5.7m、東西3.5mを超える大規模なたわみで、深さ38cm、底面の標高8.65mである。用水路のため西側の調査がで



きなかったが、南端から南へ溝状の遺構が延びている。堆積状況から両者が一連の遺構と捉えられ、水溜とそれに伴う水路の可能性が考えられる。溝の先端は近世の土層109に削平されている。

土師器碗**886・887**が出土しており、13世紀中頃に位置付けられる。(渡邊)

#### たわみ3 (第425・480図)

20W中央で、用水路の西側に位置する。上面は不整形で、底面も凹凸が激しい。東に向かって、低くなり、最も深い所で、底面の標高は8.75mを測る。

出土した土器には平安時代の須恵器片があり、古代以降としか言えないが、埋上から中世と考えた。位置からたわみ1の西端の可能性もある。

(渡邊)

#### たわみ4 (第425・481図)

24ⅡA北西に位置する。幅2.5mをこえる大規模なたわみで、検出面からの深さも約40cmある。底面の標高は8.33mである。

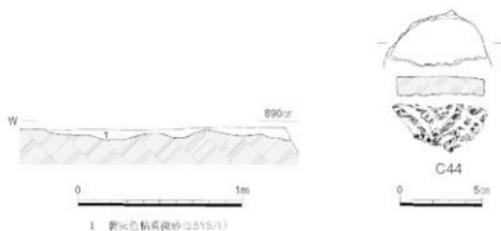
時期を示す遺物は出上していないが、灰色味があった粘質微砂で埋没しており、中世と考えた。(渡邊)

#### たわみ5 (第425・482図)

24ⅡC南東から24ⅡE北東に位置する。南北3.6m、東西2.4mの不整形のたわみで、検出面からの深さ38cm、底面の標高8.38mである。西端は溝62を切っている。溝58の南端がこのたわみと一体化して検出されている。

東播系須恵器**888**と土師器碗**889**が出土しており、13世紀後半に比定される。土器の様相は溝57・62とほぼ同時期であるが、切り合いから溝62より新しく位置付けられる。

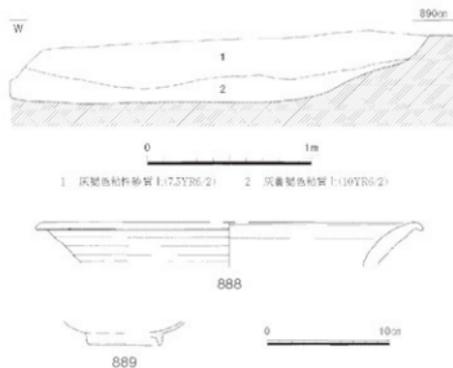
(渡邊)



第480図 たわみ3 (1/30)・出土遺物 (1/3)



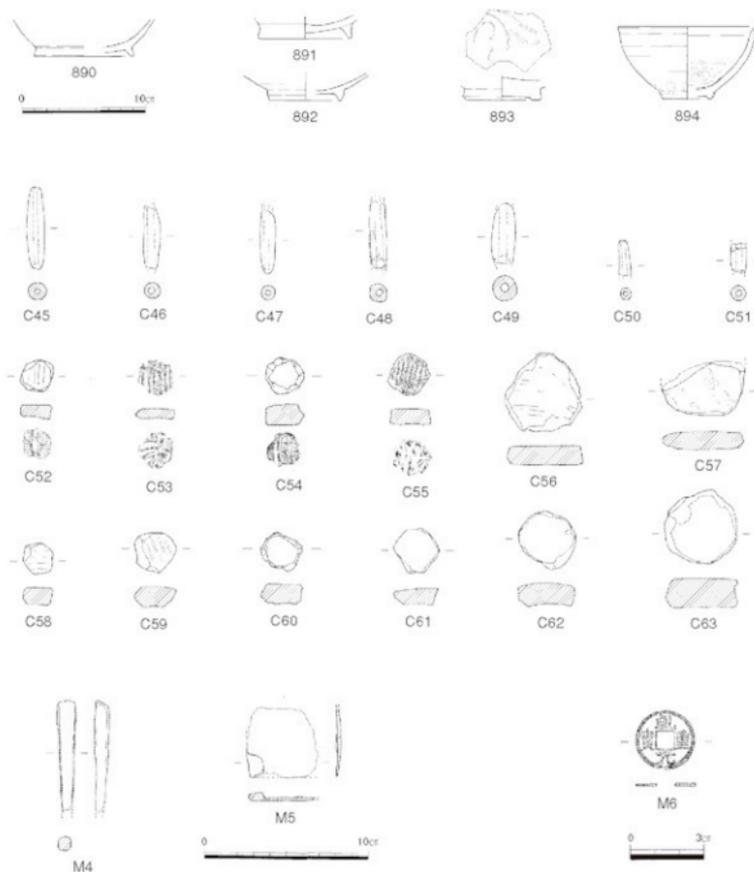
第481図 たわみ4 (1/30)



第482図 たわみ5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 8 遺構に伴わない遺物 (第483図)

遺跡全面に堆積している耕作土層や多時期の遺構に混在していたり、側溝など出土地点の明確でない中世～近世の遺物をここに掲載している。いわゆる「早島式土器」と呼ばれる中世の土師器碗が多かったが、細片であり、図示できたものはわずかである。美濃天日894は22ⅡA北東の土塙114南側に設けたトレンチから出土している。用水路裏込めに混入したものである。上製品は時期を比定し難いが、土鍾については細身の形状を、おぼじきは材質が中世須恵器や備前焼片を利用したものを図示している。鉄器・古銭は中世～近世包含層から出土したものである。(渡邊)



第483図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

## 第6節 まとめ

北溝手遺跡はほぼ全面が微高地にあたり、弥生時代を中心に縄文時代～近世の遺構が確認された。

検出できた主な遺構は竪穴住居23軒、掘立柱建物6棟、井戸13基、土塙117基、溝、素掘溝群、横列状遺構などで、北端部では河道と河道埋没過程で利用された水田も検出された。弥生時代中期前葉～中葉に集中し、本遺跡の盛行期と言うことができる。なお本遺跡は岡山県立大学に伴い発掘調査された南溝手遺跡（以下、県大南溝手遺跡と称する）の西に隣接しており、位置関係や堆積状況、標高からみて同じ微高地に占地していると想定され、本遺跡河道1も県大南溝手遺跡河道1と同一と考えられる。以下、各時代の状況を振り返り、集落の変遷を概観していきたい。

### 縄文時代の遺構・遺物

最も古い遺構は晩期中葉の土塙3である。弥生時代の遺構と同一面で検出されたが、これまでの発掘調査では晩期中葉の遺構は縄文時代晩期～弥生時代基盤層を10cm程度掘り下げたレベルで検出されており、上部が削平された結果と考えた方が妥当であろう。このような状況から、被熱面1も縄文時代に遡る可能性がある。続く晩期後葉の土塙も2基のみと少ない。しかし、後世の遺構や包含層への混在ではあるが土器の出土量は増加しており、集落の発展が認められる。なお、後期については南溝手遺跡の包含層とほぼ同一レベルで同様の黒色土層を確認したが、遺構・遺物は皆無であった。

### 弥生時代の遺構・遺物

前期の主な遺構は竪穴住居1軒（竪穴住居3）、土塙13基、溝1条で、B区南半に密である。筆者の編年観では全て前期中葉の範囲に収まり、県大南溝手遺跡と並行する時期に位置付けられる。竪穴住居3は河道1に向けて北側に緩やかに傾斜する面で検出されたが、微高地頂部でないため逆に削平を免れた結果とみられ、本来はまだ他に竪穴住居が存在していた可能性もある。竪穴住居3の規模は復元径10.8mを測り、県下では同期最大であるが、県大南溝手遺跡竪穴住居3とはほぼ同規模で、集落内で突出するわけではない。また玉作り関連遺物が出土したが、県大南溝手遺跡竪穴住居2でも玉作りが行われており、専業工房としての特殊な構造ともみなし難い。しかし、赤色顔料で彩色を施された石製品S53が出土しており、この点からは居住していた人物に特別な側面を見出すことができよう。

中期の主な遺構は竪穴住居19軒、掘立柱建物5棟、土塙63基、溝19条である。時期の細分可能な限りにおいて、竪穴住居は前葉2軒、中葉11軒、後葉5軒、土塙は前葉6基、中葉32基、後葉7基となり、中葉が突出して多く、本遺跡の盛行期とみなされる。また中葉の出土遺物は質・量とも比較的豊富で、分銅形土製品の祖形の可能性のあるC10や紅崖片岩製石鋸S20などもあり、集落の内的発展や対外交流の活発さを物語っている。一方、掘立柱建物では中期中葉以前に遡るものはない。おそらく全て中期後葉～後期前葉に属すると考えられ、竪穴住居検出数の増減とは対照的な傾向である。また竪穴住居の平面形は前期～中期前葉までは円形しか見られないが、中期中葉には方形が出現し、中葉～後葉には円形と方形（小型長方形竪穴状遺構も含む）がほぼ同率となるなど、中期中葉を境として集落構造の変化を見出すことができよう。

さて、いわゆる舟形土塙については、本遺跡の調査区は幅11m程度と狭く溝との分離が困難なため、今回は特に項を設けなかった。ただし溝状遺構の中でも側壁が比較的急に立ち上がるものを土塙として扱っており、その中からあえて舟形土塙として抽出するならば、土塙14・19・22・26・32・46・49・

53・93が挙げられる。全て中期前半以前に位置付けられる。墓として積極的に認める根拠に乏しいが、上層14・22・26・32・53など端部にテラス上の段を設けるものがあり、通常の上層や溝とは異なる特徴を有するものが含まれる。また土層14・26では底面の形状から複数の舟形土層が連続していると考えられる。一方、形状や遺物の出土状況から墓の可能性が高いと考えられる土層15・30があり、向者とも墓と考えるなら、その差が何に起因するのか定かではなく、今後の検討課題としたい。

後期の主な遺構は前葉の堅穴住居2軒、上層6基、後葉の堅穴住居1軒、上層7基と少ない。一方井戸は、遺構密度の最も高い中期前葉～中葉では堅穴住居13軒に対し1基しかないのに、後期後葉では3基に増加している。このように堅穴住居に対して井戸が多く設けられる現象は弥生時代後期後葉～古墳時代前期の畿南平野に立地する集落遺跡で比較的多く見受けられる。井戸は生活用水や手工業用水の確保のためと考えられているが、それだけでは堅穴住居に対する掘削数の卓越は説明し難い。特に井戸1からは大形の二重口縁甕を含む大量の土器の投棄を伴う祭祀が行われ、またその埋没過程が本遺跡最期の堅穴住居12と軌を一にすることは、弥生集落の終焉に際して井戸の掘削と廃棄が特殊な役割を担っていたことを示唆しているのではなかろうか。また特筆すべき遺構として溝1・9・10・11が挙げられる。溝1・10・11は幅2mを超える大規模な溝で、溝9は幅は狭いが深く断面台形を呈しており、集落の主要な用水路とみられる。

#### 古墳時代～古代の遺構・遺物

古墳時代前期までの土器を含む堅穴住居12及び井戸1のほか、溝や水田も前期の中で埋没をし、以降目立った遺構は構築されなくなる。後期には柵列状遺構が掘削されるが、居住域としては放棄されたようである。平安時代に至っても小規模な土層が1基と溝が散見されるのみである。遺物の出土量も少ない。10世紀代の溝21と溝25は、出土遺物に時期差があるがおそらく同一流路と考えられる溝である。古墳時代に属すると思われる溝が調査区に対しておむね直交ないしは斜行するのに対し、B区南平からA区全域にかけて南北方向に延びており、この間に土地利用の転換が図られたと想定される。またこれ以降掘削される溝や畦も南北方向を指向しており、この段階での転換を踏襲したものと考えられる。ただし、この方向性は厳密には現代の地割りととは合致せず、条里とも整合してない。

#### 中世～近世の遺構・遺物

微高地上全面に溝や素掘溝が掘削されるが掘立柱建物はなく、全域が耕作地として利用されていたと考えられる。溝のうち溝43～48は水路と考えられる溝で、東西方向に走る溝43～45を境に北側は素掘溝群、南側は土層や井戸が中心に広がっており、耕作の主体が異なる可能性が示唆される。

さて、ここで井戸について触れておきたい。本報告で分類した遺構は掘り方の規模が1mをこえ、深さも比較的深く、中に桶を埋設した痕跡を有するものである。墓や単純な土層の可能性も否定できないが、鏡方正樹氏のいうところの「野井戸」<sup>16</sup>の可能性が高いと結論付けた。野井戸は「水田灌漑用の保水施設」で18～19世紀に出現するとされており、本報告の井戸との時期的な矛盾はない。ただし岡山平野での報告例は少なく、また大阪平野や奈良盆地と同様の状況下にあったかどうか定かでないが、ここで「野井戸」の可能性に言及し、今後の検討課題として提起しておきたい。

#### 註

<sup>16</sup> 鏡方正樹「井戸の考古学」『ものが語る歴史』8 同成社 2003

## 第6章 総括

### 第1節 遺跡の概要

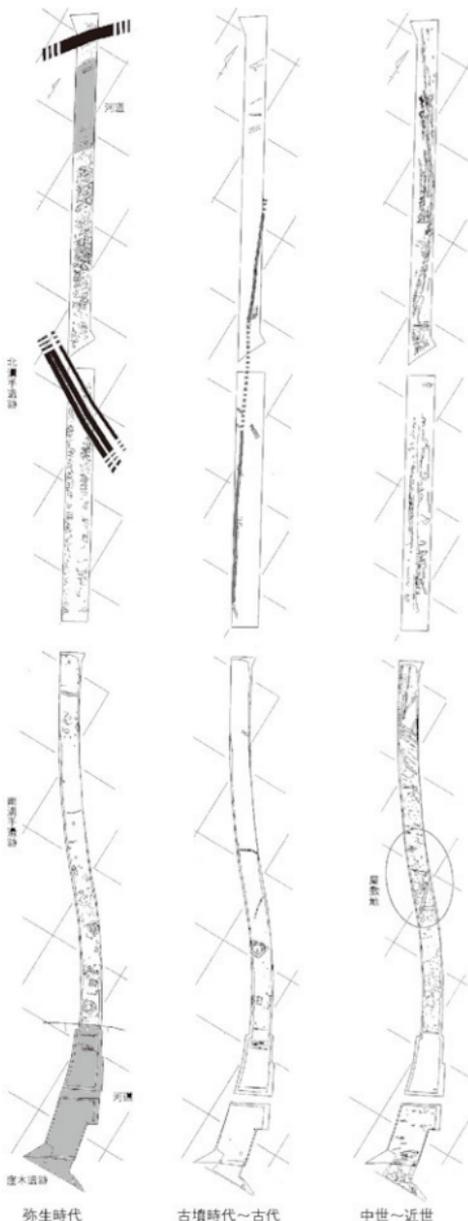
#### 1 はじめに

現行の遺跡名は、現在の字を以て付しているため、調査地内には窪木遺跡、南溝手遺跡、北溝手遺跡の3遺跡が存在する形となっている。しかし、遺跡名は本来の集落を限るものではなく、遺跡の性格を反映するものでもない。特に弥生時代においては北溝手遺跡と南溝手遺跡は一体の集落であり、さらには岡山県立大学構内に存在する南溝手遺跡・窪木遺跡とも不可分な集落遺跡である。そこで、まずは今回報告する3遺跡の動向を総合して概観した後、これまでの調査成果も合わせて、集落の全体像を明らかにしていきたい。なお、国道180号バイパスに伴い発掘調査された遺跡には「180号」を、県立大学建設に伴い発掘調査された遺跡には「県大」を遺跡名に冠して呼称することとする。

#### 2 調査の概要

今回発掘調査された中で最も古い遺物は、南溝手遺跡の包含層から出土した縄文時代後期中葉の上器である。類似する堆積層が北溝手遺跡でも確認されたが、遺物の出土は皆無であった。南側は急激に下がり、窪木遺跡では堆積層の存在すら確認できていない。県立大学構内でも広範囲におたって黒色土層の分布が認められたが、遺物は局所的にしか出土しないことから、縄文時代後期の段階で微高地が安定し始めたが、その利用は限定的であったとみられる。また、県大窪木遺跡では長良山裾の斜面堆積中から同時期の遺物が出土していることから、旧来通り山側に生活基盤を置く集団と、沖積地へ進出を始めた集団が共存する姿を垣間見ることができよう。以後も沖積化は進行し、後期包含層の上部には1m近く黄色の土砂が堆積している。縄文時代晩期～弥生時代の遺構はこの黄色土層を基盤としており、この段階で沖積化が一段落し、定着に向けて本格的に平野部での活動を開始したと推察される。

竪穴住居は、弥生時代前期中葉に比定される北溝手遺跡竪穴住居3が初現となる。以降、着実に弥生時代集落は発展を見せるが、特に遺構が集中する地点は北溝手遺跡の中央部と南溝手遺跡の南半部に偏在する。しかし遺構の形成時期は異なり、北溝手遺跡では中期の、南溝手遺跡では後期の遺構が主体を占める。竪穴住居の分布からみた集落の動向については後に譲るが、集落の中心域が時期によって変動していくことを指摘しておきたい。なお、両遺跡間の遺構が粗な範囲については、遺構が密集する地点が河道に向けて緩やかに傾斜する部分にあっている点から、逆に高所であったため後世に削平されてしまった可能性もある。一方、窪木遺跡では弥生時代以前の遺構は見つかっていない。窪木遺跡の基盤は、縄文時代後期から形成された黄色土層とは異なり、粗砂～砂礫層で構成される。180号路線内の調査では河道や基盤となる礫層内から弥生時代中期の上器が出土することから、窪木遺跡以南では微高地の形成が遅く、居住地としての利用も遅れたためと推測される。



なお、今回舟形土塼の分類は行わなかったが、第5章で先述したとおり前期～中期前葉に属する土塼には、その可能性のある遺構が含まれている。分布は上記の遺構密集部分と重複しており、今回墓としての評価も避けているが、もし墓であるならば、墓域として独立していないことが指摘できる。また、南溝手遺跡堅穴住居3北側に中期末葉～後期前葉に属する井戸と土塼が群在しているが、形態や堆積状況から井戸2～6と土塼23・39・45は袋状土塼とみられ、貯蔵穴の可能性が高い。

古墳時代では、南溝手遺跡中央より北に日立った遺構はなく、堅穴住居や井戸、水田が埋没する古墳時代前期を以て集落が放棄されたと言っても過言ではなかろう。しばらくの間、日立った遺構が形成されず、人々の営みが感じられないが、江見正己氏<sup>①</sup>が指摘しているように一帯が後背湿地化したことがその一因として挙げられる。後期後半段階になると、南溝手遺跡南端に掘立柱建物が唐突に出現する。やや大形の掘り方を有する総柱の建物で、調査地の南には7世紀の掘立柱建物群からなる特異な集落形態を有する180号窪木遺跡が接しており、180号窪木遺跡と一連の現象として理解しておきたい。古代では、南溝手遺跡と窪木遺跡間の河道から奈良三彩や緑釉陶器、硯など特殊な遺物が出土しているが、やはり南に存在する他遺跡からの流入と考えられ、古墳時代以降、地域の拠点が南に移った傍証と考えられる。

中世では窪木遺跡から南溝手遺跡に

第484図 遺跡変遷図 (1/2,500)

かけて13世紀を中心とした掘立柱建物や柱穴が多く見られる。一方、南溝手遺跡南端の低位部上面や北溝手遺跡では、柔掘溝群や耕作に伴う土壌、溝が検出されており、窪木遺跡・南溝手遺跡が居住地として、北溝手遺跡が耕作地として利用された状況が看取される。近世には南溝手遺跡中央部に屋敷地が形成されており、耕作地の中に屋敷地が点在する、農村集落の景観が成立していたと想定される。

### 3 弥生時代の集落について

ここでは弥生時代竪穴住居の分布に主眼を置き、集落の変遷をみていきたい。

前期の竪穴住居が構築される範囲は、南は旧河道、北は後背湿地に限られた、南北300m×東西400mの範囲：Aに及ぶ。Aは、突帯文期の遺構分布範囲とも重複しており、平野部内の最も安定した場所と考えられる。前期中葉の竪穴住居は8軒あるが、低位部や河道を挟んだ各微高地上に50m以上の距離を置いて点在する状況は、同じ前期中葉に環濠集落を形成する百間川沢田遺跡とは大きく異なる。また竪穴住居はそれぞれ平面形状が異なっており、個々の竪穴住居が各微高地単位で独立しながらも広い空間＝領域を共有し、その結び付きは緩やかであったと推察される。

前後葉の竪穴住居はなく、中期前葉に集落を形成し始めたのは前期とは違う集団であった可能性は高い。中期前葉では北溝手遺跡：Bと原大南溝手遺跡：C、原大窪木遺跡：Dの3地点に集住が認められるが、中央の微高地上には竪穴住居は見られず、前期と立地が大きく異なっている。各地点とも2～3軒の竪穴住居からなる単位集団が小さな領域を形成した状況が看取される。前期中葉は前段階からの領域を踏襲しており、継続的な発展とみなすことができる。とりわけBでは竪穴住居が急増し、複数の単位集団がやや広い領域を形成するようになる。一方、C・Dでは竪穴住居は減少しており、Bに集約されたかのようにも見える。中期後葉には遺構数が急増すると共に分布範囲も広がり、平野中央部に再び竪穴住居が構築されるようになる。基本的に各微高地毎にまとまりを形成しているが、特に集住が認められるのは原大南溝手遺跡：Eで、集落の中心域がBからEへ移ったとみなすことができよう。後期前半では拡大傾向及び集住性はさらに強まるが、遺構密集地は前段階から少しずれている。中心域も新たに利用するようになった原大窪木遺跡：Kに形成され、意図的に生活空間＝領域を変えていた可能性が指摘できる。後期後葉は、竪穴住居1軒が縁辺部に点在するのみとなり、古墳時代前期には溝や水田も埋没し、集落は放棄される。

以上のような状況から、前期では個々の竪穴住居が独立していたが、中期前葉には小さな単位集団が形成され、各集団が等質的に集落を構成するようになり、さらに前期中葉には複数の単位集団から成る中心的な集団が出現し、周辺に配置された複数の1～2程度の単位集団から成る小集団と有機的に結びついて、一定の地域を包括するような集落域が形成されたと想定される。すなわち個々の集団が集落を独自に営むのではなく、強く結びついてムラを構成していたと考えられ、変化の画期を前期中葉に求めることができる。中期後葉～後期前半にかけては遺構数が急激に増加し、最盛期を迎える。この段階では小集団数が増加するだけでなく、中心的な集団の拡大かつ集住性の高まりがみられ、さらなる画期を認めることができる。後期後半には単位集団が形成可能な程の竪穴住居はみられず、これまでの集落は解体されたように思われる。

中期後半における遺跡数の増加は丘陵部に限った現象ではなく、広く吉備全体に認められる現象で、当集落が中期後半に飛躍的に拡大する動きもその流れの中で理解できよう。また中期後半の大きな変化の一つに、掘立柱建物の急増と方形竪穴住居の出現を挙げることができる。掘立柱建物は県北



や泉南丘陵上の集落では一定数建てられるが、泉南平野部で一集落内に多数が存在するのは百間川今谷遺跡<sup>2)</sup>のみで、他の遺跡ではあったとしても少ない<sup>3)</sup>。泉大南溝手遺跡では掘立柱建物のみが占める領域も形成されており、当遺跡群の性格の一端を現す特異な状況とみなされよう。重根弘和氏は中期後半に起こる変化を「他地域との交流により情報を得た人々が、人口増加に伴い、新しい生活様式を選択した結果」<sup>4)</sup>と説くが、当集落の状況はまさしくその見解に合致しており、外部からの人口の流入が想起される。この時期、北溝手遺跡溝1・9など大規模な幹線水路が開削されており、人口増に応じるべく生産力の向上を図った証と考えられまいだろうか。またこの時期には貯蔵穴が多く掘削されているが、これもまた増加した人口を支える食糧の確保のためと考えられ、掘立柱建物の中には長期的な食料保存の場である「高床倉」も含まれていた可能性がある。なお、南溝手遺跡南端とN、Kの貯蔵穴群では堅穴住居が近接して1軒存在している。貯蔵穴の管理のために意図的に配置された可能性を指摘しておく。

後期後葉には集落が解体されたと考えられるが、足守川を南に下った高塚遺跡や津寺遺跡周辺の遺跡群では、この時期逆に堅穴住居数が急増し、古墳時代前期には津寺遺跡に集約されていく。このような現象については江見正己氏が「単に一微高地（ムラ）内で理解されるのではなく、少なくとも足守川下流域一帯を統括する政治的な要因から集集体への何らかの移動の働きかけがなされた」<sup>5)</sup>結果と指摘しているが、より上流にあたる当地域一帯にもその作用が及んでいたと想定できないであろうか。なぜ当集落が放棄され津寺遺跡周辺に移住したのか、明確な答えは出せないが、中期後半に起こった人口増もその要因の一つに想起される。服部平野内の水田は比較的狭小で、生産力には限界があったと思われる。また地形的にも河川の影響を受けやすく、耕作地を放棄せざるを得ない状況に陥った可能性も高い。逆に、沖積化の進行に伴い足守川下流域にはより広大な平野部が形成され、他地域との交流にも海が近く利便性が高いなど、優位な条件の整った南の土地に、その拠点を移していったのではなかろうか。今後、こういった観点から集落の動向を見直し、弥生社会の実像を明らかにできるよう取り組んでいきたい。

(渡邊)

## 註

- 1) 江見正己「南溝手遺跡・崖木遺跡 第5章第6節「備中国賀陽郡服部郷國」からみえてきたこと」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』岡山県教育委員会 2008
- 2) 「百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会 1982
- 3) 拠点集落である高塚遺跡でも堅穴住居106軒に対して5棟、津寺遺跡でも87軒に対して7棟しか確認されていない。「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』岡山県教育委員会 2000、「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会 1991 ほか
- 4) 重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学。上巻 古代古備研究会 2002
- 5) 江見正己「高塚遺跡 第3章第4節まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』岡山県教育委員会 2000

## 第2節 南溝手遺跡五角形住居について

### 1 はじめに

南溝手遺跡で確認した堅穴住居4は平面形が五角形を呈する古墳時代初頭の住居である。弥生時代から古墳時代における堅穴住居の平面形は、円形・方形・隅丸方形などを中心とし、一部多角形が存在する。このような平面形の違いは、建築構造（つくり）と居住形態（すまいかた）の一部を反映し、相互に影響を与えている<sup>1)</sup>と予想されている。

ここでは少数ながら存在する多角形住居に焦点をあて、岡山県内における類例から当遺跡における五角形住居について若干の考察を行いたい。

### 2 岡山県内における多角形住居

#### 平面形態

岡山県内における多角形住居は表5の通りで、現在までのところ23遺跡・35軒を数える。その形態は五角形から八角形と様々であるが、比較的六角形が多く次いで五角形、七あるいは八角形を呈するものはごく少数である。

#### 分布と変遷

初現は弥生時代中期後葉で5遺跡・6軒が存在する。しかしながら明瞭な多角形を呈しているのは只穀山遺跡（岡山市）や矢部堀越遺跡（倉敷市）の2例に過ぎず、他は一部のみの検出あるいは多角形とはいえ不明瞭なものが多い。弥生時代後期では中葉以前と後葉以降で検出数における明瞭な差が現れる。すなわち後期中葉以前では大田松山久保遺跡（津山市）・小原遺跡（津山市）・天神坂遺跡（岡山市）の3遺跡・3軒のみであったものが、後期後葉以降になると6遺跡・9軒に増加する。続く古墳時代では前期初頭から前半に集中し、7遺跡・10軒となっている。なお古墳時代後半の斎富遺跡（赤磐市）堅穴住居67や、8世紀代の今岡中山遺跡（美作市）堅穴住居3は、不明瞭な多角形であったり、一部のみの検出であったりと不確定な部分を多く含んでいる。

#### 立地

初現期の弥生時代中期後葉では県南の遺跡にのみ見られ、平野部と丘陵・山頂部それぞれに立地している。弥生時代後期になると県北でも多角形住居が出現し、その立地は丘陵部を中心とする。対して県南では平野部に立地するものが大多数を占め、丘陵部の遺跡は極少数しか認められない。古墳時代になると県南で、かつ平野部に立地する遺跡にのみ認められる。

#### 規模と構造

多角形住居の規模は調査の都合上一部のみの確認となっている例が多い。全体が明瞭な多角形住居の床面積は19.5～43.7㎡まで存在する。弥生時代中期後葉から後期の一般的な堅穴住居の床面積は10～30㎡の範囲内に収まるとされていることから、同時期における多角形住居の床面積を比較するとその範囲内か若干大形のものが多いことに気付く。また古墳時代前期においては、一般的な堅穴住居の床面積が20㎡程度<sup>2)</sup>とされており、それと比較すると多角形住居はいずれも大形に属する。

主柱穴の数は基本的に平面形態における角の数に対応する。ただし例外もいくつか存在しその多くは平面形が明瞭な多角形をなしていないことが多い。

表5 岡山市内の多角形住居一覧

遺跡名	所在地	遺構名	形状 (角数)	柱穴 数	床面積 (㎡)	時期	備考	文献
百間川遺跡	岡山市中区津基	竪穴住居 8	6	6	無	30.15	弥生時代中期後半	岡報告208 2007
根敷遺跡	岡山市北区大内田	1649住居址	6	7	無	54.6	弥生時代中期後半	岡報告55 1987
只船山遺跡	岡山市南区宮前2カ	2号住居跡	6	6	無	28	弥生時代中期後半	岡報告104 1996
津寺遺跡	岡山市北区津寺	竪穴住居21	多角形	(2)	無	—	弥生時代中期後半	
		竪穴住居22	多角形	(1)	無	—	弥生時代中期後半	
丸尾塚遺跡	赤松市丸尾	E1102	6	6	無	30	弥生時代中期後半	岡報告82 1993
大内松山大内遺跡	津山市大内	作居 2	5	5	無	22	弥生時代前期	岡報告129 1988
小塚遺跡	津山市高平原	住居跡 3	7	7	無	(80)	弥生時代後期前半	津山市報告38 1991
天神塚遺跡	岡山市北区大内田	162住居址	6	6~7	無	34.81	弥生時代後期中	岡報告55 1983
武与遺跡	岡山市美作町	4号住居	—	(5)	—	—	弥生時代後期	岡報告7 1975
小中遺跡	勝大町遺	竪穴住居 5	5	6	無	22	弥生時代後期	
		竪穴住居 9	6	6	無	—	弥生時代後期	岡報告117 1997
		竪穴住居21	多角形	4~7	無	(56)	弥生時代後期	
向新遺跡	津山市大塚	S 1115	5	5	有	39	弥生時代後期	津山市報告29 1989
伊海堂岡田遺跡	岡山市北区伊海町	竪穴住居 4	多角形	4	無	(1285)	弥生時代後期後半	岡報告125 1998
		竪穴住居11	6	4	無	19.5	弥生時代後期後半	社穴内遺構 岡報告188 2005
段杉遺跡	淡口郡勝方町池原上	竪穴住居	多角形	8以上	無	—	弥生時代後期後半	岡報告132 1988
西古田北遺跡	津山市西古田	住居跡34	5	5	無	37	弥生時代後期後半	津山市報告38 1997
高塚遺跡	岡山市北区高塚	竪穴住居77A~C	6	6	無→有	27.9~32.7	弥生時代後期後半	
		竪穴住居79A	5	(4)	有	25.4	弥生時代後期後半	岡報告150 2000
高平谷遺跡	岡崎市上野代	13号住居址	6or 5	—	無	—	弥生時代後期末	岡報告15 1977
高丁遺跡	岡山市東区竹原	竪穴住居 7	6	6	有	(58)	弥生時代後期末	
		竪穴住居 8	6	6	有	36	弥生時代後期末	西国系土器 岡報告123 1988
白川沢田遺跡	岡山市中区沢田	竪穴住居 5	5	5	無	31	古墳時代初葉	岡報告5 1983
津寺遺跡	岡山市北区津寺	竪穴住居106	5or 6	(4)	有	—	古墳時代初葉	東海系土器 岡報告104 1996
		竪穴住居139	5	5	無	28.6	古墳時代初葉	岡報告116 1997
高塚手遺跡	岡崎市高塚手	竪穴住居 4	5	5	有	43.7	古墳時代初葉	西国系土器 本報告
金井戸新田遺跡	岡崎市新田	E 6	6	6	無	39	古墳時代初葉	岡報告104 1996
藤町遺跡	岡山市中区藤町	7号住居跡	6	(5)	有	—	古墳時代前期	社穴内遺構 岡報告1 1972
津寺遺跡	岡山市北区津寺	竪穴住居 41	5	5	有	22.6	古墳時代前期	
		竪穴住居101	5.7	(1)	有	—	古墳時代前期	岡報告104 1996
		竪穴住居176	6or 5	4	無	—	古墳時代前半	
高塚遺跡	岡崎市高塚	竪穴住居176	6	6	無	28.5	古墳時代前半	岡報告105 1996
		竪穴住居167	多角形 <sup>1)</sup>	—	無	—	古墳時代前半	
今岡中山遺跡	美和町今岡	竪穴住居 3	多角形	(4)	無	—	8世紀代	岡報告213 2008

\*本文中「<sup>1)</sup>本報告」は岡山市歴史文化財発掘調査報告書、「<sup>2)</sup>新誌古年報」は岡崎市歴史文化財発掘調査年報、「津山市報告」は津山市歴史文化財発掘調査報告書を指す。

弥生時代後期後半から岡山市において見られる屋内高床部との関係については、その盛行時期が一致するため、特に弥生時代後期末から古墳時代初葉における多角形住居内に高床部がつく例は多い。ただし全ての多角形住居内に高床部が付設するわけではない。

### 3 南溝手遺跡五角形住居（堅穴住居4）について

堅穴住居4の詳細については第4章において詳しく述べられている。ここではその特徴と、堅穴住居4と関連があると思われる堅穴住居2（弥生時代後期末）についてまとめておきたい。

堅穴住居4は平面形が長軸で8.2m、短軸で7.6mの五角形を早し床面積は43.7㎡を測る。住居内部には壁面に沿って壁体溝が走り、その内側には幅70cm～1m程度の盛土による高床部が付設されている。高床部の内面に沿っても壁体溝が巡っていた。主柱穴は5本で高床部内側の各角で確認している。住居中央には平面形が不整形を呈する中央穴が掘り込まれており、その埋土から西部瀬戸内系の壺320が出土している。その他の外來系土器としては壺334が認められる。この堅穴住居4の北約5m離れた場所に位置している堅穴住居2は、堅穴住居4の直前あるいは一部重複した時期に機能している住居である。堅穴住居2（床面積30.6㎡）には古・新の2時期が認められ、改築によって住居内部の高床部の形状および主柱穴の数に変化している。すなわち古段階には平面形が直径6.4mの円形を早し、その内側に付設した高床部（地山ケズリ出し）内面も円形を呈しており、主柱穴は4本。次の新段階になると平面形は変わらないが、高床部（盛土）内面の形状が不明瞭な六角形に変化し、その各角に主柱穴が6本確認できた。なお外來系土器などの目立った遺物は特に認められない。

### 4 おわりに

岡山県内で確認できた多角形住居を集成したところ、以下の様にまとめることができる。①弥生時代中期後葉、県南（平野部、丘陵・山頂部）において出現。②弥生時代後期前葉になると県北でも確認できる。③弥生時代後期までは平野部・丘陵部ともに見られるが、古墳時代になると県南でかつ平野部に位置する遺跡のみ見られる。④弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて盛行し、その時期は高床部のそれに重なる。⑤おおむね大形の住居に属する。

これら多角形住居の諸特徴から南溝手遺跡における堅穴住居4を見ると、多角形住居が最も盛行する時期に建てられ、県内の多角形住居では最大床面積を有することが分かる。堅穴の平面形と屋内高床部の内面形は共に五角形を呈しており、一見高床部内面の平面形態が堅穴の平面形に影響を及ぼしている様にも見える。しかし堅穴住居2新の様に高床部内面形は六角形であるのにも関わらず、堅穴平面形は円形であるなど、一概に高床部と堅穴平面形の関連を論じるのは難しい。<sup>12</sup>

多角形住居は大形住居として分類されることが多く、今回の作業でも再確認することができた。弥生時代全般において堅穴住居の大形化は多柱化をもって行われたとされている。5本以上の柱穴によって建てられる多角形住居は必然的に大形化を指向したものであり、円形住居との違いは堅穴の周壁が板材などの直線的な部材によって形作られた点にある。<sup>13</sup> (松尾)

### 註

- ① 合田茂伸・合田幸美「大和・河内の住居」『邪馬台国時代の古備と大和』資料集 香芝市教育委員会 2002
- ② 重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学』上巻 古代古備研究会 2002
- ③ 堅穴平面形と高床部内面の形状が異なる堅穴住居は、他に黒木美穂遺跡堅穴住居6（県報古86 1993）などがある。
- ④ 福島孝行「平面多角形の堅穴住居の検討」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅧ 1999

### 第3節 北溝手遺跡竪穴住居3出土石製品について

弥生時代前期中葉の竪穴住居3の埋土中から、石器616点、装身具2点と残核・素材剥片を含めた多数の剥片・破片が出土した。出土品は、炭化材の上下で分層して取り上げ、下層土と柱穴などの遺構埋土は水洗選別を行い採取した。ここでは、住居内出土の石製品についてみていく。

#### 器種組成と石器の概要

表6に住居内から出土したすべての石製品の数量を示した。

剥片石器・石製品では、ササカイト製のものが圧倒的に多く、剥片・破片などを含めて総重量約9810gが出土している。生産具としての石鎌が324点、次いで加工具の楔形石器102点、石錐87点が続く。石鎌は、完成品の完形品・欠損品が264点、非成品（失敗品）・未成品が60点ある。三角形鎌が主体で、若干五角形鎌がある。形態による大きさの差はみられないが、三角形鎌は片面に主要剥離面を大きく残すものが多い。楔形石器は、側面に顕著な階段状剥離があり、その対辺にツブレが認められるものを認定した。ただし、階段状剥離だけかツブレしか残っていないものは、剥片に含めているので、実際の点数は多くなるといえる。打面は線打面S27・48と面打面S26・28・49・50の2者がほぼ同率でみられる。ササカイト製の石錐は、欠損品が多く全形のは少ない。棒状のものS80～82、広いつまみと短い錐部を持つものS25・84・85、つまみを作り出して長い錐部をもつものS22～24・83・86～93がある。これに対してメノウ製の石錐（針）は、米粒状の先端に径1mm弱の短い錐部を作り出している。

礫石器は少なく、台石4点と敲石3点（S43・44・107）がある。敲石は、いずれも先端部に鑄状の敲打痕が残るが、棒状のS44・107には全面に敲打痕と主として側面に線状の使用痕が残る。

#### 出土状況について

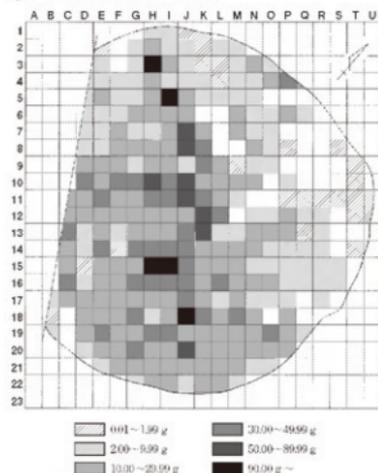
第486図に埋上下層と床面での剥片石器・石製品の石材別出土分布状況を示した。住居北側が希薄に見えるのは、後世の遺構による攪乱の影響が大きいことを先に断っておく。

ササカイト製品は、石器と剥片・破片がある。剥片は、5cm未満のものが多く自然面を残すものもある。破片は、鑄状の薄片が圧倒的に多くみられることから、細部調整時に発生したものと考えられる。中央南部分に集中しながら、広く全体で出土する。東西2か所のピークのうち、西側のピークは、調査時にP40の西側床面で破片が比較的多く確認されていることと、壁寄りに集中的にみられることから、住居内での作業後の片づけに伴う一括廃棄と考えられる。これに対して、東側のピーク

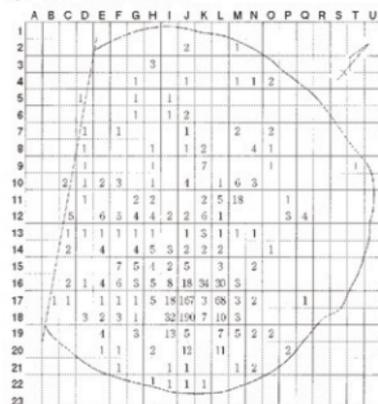
表6 竪穴住居3出土石製品の組成

材質	ササカイト								燧石	台石	礫石	新製石	装身具	メノウ		ガラス質 破砕片		軟質石材			
	敲	宿	産	核	打面剥離面 付剥片	スクレム 剥片	R.F. U.P.	不明						装身 具・珠	総重量 (g) *剥片 ・破片 含む	破片	核	破片 (重量 (g))	破片 (重量 (g))	破片 (重量 (g))	破片 (重量 (g))
埋土(東面)	271	1	71	82	1	9	50	2	17	8,072.41	1	3	2	2	905	21	44.57	324	35.44	45	16.47
P4	2		1	1						44.76					60	15	10.51				
その他(毎穴)	16		1	11		4	1	1	1	579.11		2			1		0.21				
P40(中央穴)	33		11	8			1			1,113.51					46		2.19	14	0.68	1	0.01
合計	334	1	87	102	1	13	41	3	18	9,899.92	1	3	4	2	1,072	34	57.51	338	36.12	46	16.48

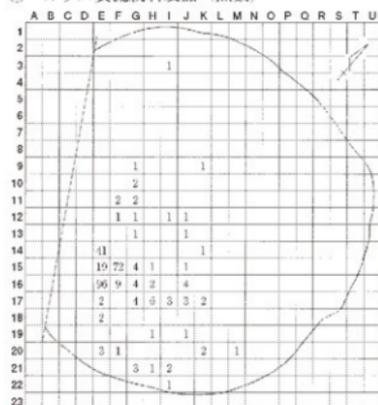
① サスカイト製品 (重量)



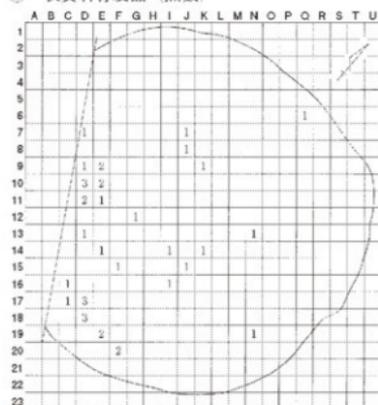
② メノウ製品 (点数)



③ ガラス質流紋岩製品 (点数)



④ 軟質石材製品 (点数)



第486図 竪穴住居3石材別出土分布 (1/150)

は、中央寄りに広くみられることから住居外からの搬入の結果を反映していると推察される。

メノウ製品は、鱗状や米粒状の碎片と錐(針)がある。いずれも10mm前後であることと、乳白色または透明で調整痕或使用痕が観察しにくいので、碎片の中には錐が含まれている可能性がある。分布状況は、サスカイト製品と同様住居全体に広く出土し、中央東寄りの柱穴P4周辺のJ17・18に顕著

に集中する。中央穴P40やP4からもメノウ片が出土することから、住居内での作業時に出た碎片等をここにまとめて廃棄する意図があったものと考えられる。P4については、支柱穴と考えているが、柱穴内埋土のどの深度にメノウ片が含まれていたのかは未確認である。このため、石器製作に関連した穴への廃棄なのか、柱脚の床上への廃棄なのかは明確でない。

ガラス質流紋岩製品<sup>1)</sup>はすべて碎片で、0.1g前後のものが主体である。硬質で鋭利な破面になる特質があるが、石英の結晶が多くみられるため、定形的な剥片採取は困難と推察される。このため、岡山県内での出土例<sup>2)</sup>をみると、塊状のものを敲石（ハンマー）にするか、大形剥片を簡単に調整したスクレイパーや使用痕のある剥片のみみられるのみである。本遺跡ではこの石材の石器は出土していないが、碎片だけが出土することから、敲石に使用した際の破片であろう。柱穴P5周辺に集中的に出土することから、P5を意識して廃棄していると考えられる。また、P40内からも14点出土するが、この周辺では希薄な分布であることから、穴の埋没過程での流入と考えるよりも、穴が機能している時に混入したと判断したほうがよいだろう。

軟質石材製品は碎片のみで、0.05g前後が主体である。当初は管玉S52と同じ緑色凝灰岩と考えていたが、同定の結果異なることが判明した。しかし、碎片に明確な敲打痕は認められないものの、破面に顕著な磨減が認められない薄片であることと、柱穴P6-7間と南壁際に集中的に出土することから、何らかの製品を作った際の碎片と考えられる。

#### まとめ

以上、壑穴住居3から出土した石製品について概観した。出土した石製品は、石器の製作・再加工の作業による産物である。これらの製品は、床面付近で出土することと住居が機能していた際に開口していたP40の埋土中からも多量に出土することから、住居内で石器製作が行われていたことは間違いない。特にメノウ製品と軟質石材製品は、下層埋土または床面と柱穴からしか出土していないことと、柱穴付近または壁際に集中的に廃棄された状況が看取されることから、ここで玉製作に関わる作業が行われていたといえる。それに対してサスカイト製品は、集中的に廃棄された状況も見て取れるが、住居内に広く廃棄されている。仮にすべてのものがこの住居内での作業による産物であるならば、十分な作業空間が確保できないうえ、したがって、サスカイト製品については、住居機能が終わった後も廃棄場所として利用されていたと考えたほうがよいだろう。このことは、焼失後の上層埋土中からも下層埋土と大差ない数の石器片が出土することからも類推できる。

この調査で、住居と床面の遺構の埋土を水洗選別することによって、多数の微細な石製品が採集できた。特にメノウ製品は、通常の調査方法では見過ごしてしまう可能性が高く、大きな成果といえる。東に近接した県立大学調査<sup>3)</sup>の南溝手遺跡でも同時期の壑穴住居で玉製作関連の遺物やサスカイト片が出土している。今回の報告では、遺物の比較検討ができなかったが、この地域の石器生産や玉製作の様相を考えていくうえで、遺跡間での遺物の比較検討は重要になるだろう。

#### 註

- (1) 硬度から石英流紋岩に分類される場合もあるが、分類は困難なので、今回はガラス質流紋岩に分類する。
- (2) 岡山県下の弥生時代遺跡では、岡山市 百開川今谷遺跡（中期）でハンマー、岡山市 塩納成遺跡（中期中葉）でハンマー・スクレイパーなど、小田郡矢野町清水谷遺跡（前期後葉）でハンマーが出土している。
- (3) 「南溝手遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、100 岡山県教育委員会 1995

## 第4節 漁撈具について

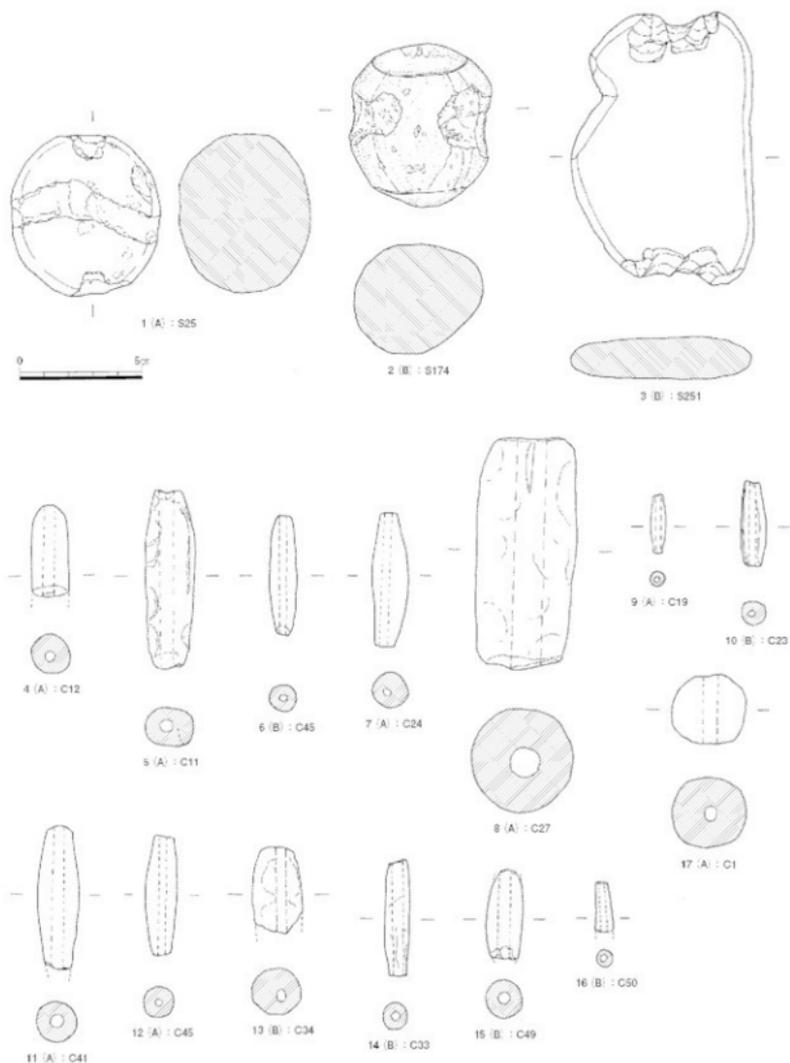
本書で掲載されている遺跡の中で、南溝手遺跡は36・38ⅡW・ⅡYに東流する河道1・2が存在している。また南側の菅木遺跡との境には中世以降の低位部が展開し、河道1・2以前の旧河道が存在していたと考えられる。また集落が展開する弥生時代中期から後期にかけての岡山県内の海岸線は、現在よりも奥まった位置にあり、中世以降の干拓に至るまで、海へのアプローチは容易であったと考えられる。そのため今回の調査では北溝手・南溝手の2遺跡から、少数ではあるが漁撈具を出土しており、漁撈活動の存在をうかがうことができる。本節では出土した漁撈具から北溝手・南溝手遺跡における漁撈活動の内容を明らかにしたい。

まず本調査区から出土した漁撈具は、大きく分けると石鍾と土鍾の2種類が確認されている(表7)。そしてそれらの出土した時期は、弥生時代後期、古代、中世、近世の4段階に分けることができる。

種類別に見ていくと、石鍾は有溝石鍾が出土しており、時期も弥生時代後期段階のみである。有溝石鍾は調査区の中では南溝手・北溝手遺跡の包含層から各1点のみ出土している(第487図1・2)。南溝手遺跡出土の有溝石鍾は花崗岩製の円礫が用いられ、その形状は平面がほぼ正円から楕円形、断面もほぼ正円から楕円形を呈している。また横位に敲打による施溝がみられ、縦位にも若干溝を巡らそうとした痕跡がみられる。北溝手遺跡出土の有溝石鍾は斑状流紋岩が用いられ、形状は正面断面ともに楕円形を呈している。溝の位置は、横位にのみ施溝するものである。大きさは南溝手遺跡のものとはほぼ同じ法量である。県内での有溝石鍾の出土例は津島遺跡・百間川原尾島遺跡・奥坂遺跡・雄町遺跡・足守川加茂遺跡・鹿田遺跡・上東遺跡など、県内の主だった弥生集落遺跡(表8)の、特に当時の海岸線に近接している遺跡から出土している。そのなかで一番多いタイプは縦位に施溝するもので、県内の有溝石鍾を出土している遺跡のほとんどから出土している。このような形状はいわゆる瀬戸内型の有溝石鍾と呼ばれるもので、弥生時代後期を中心として、瀬戸内海沿岸地域で展開する最もポピュラーな有溝石鍾である。しかし今回出土した有溝石鍾は、それとは施溝方向の異なる型式である。おそらく岡山県内で有溝石鍾が導入される中期末から後期の前半には北部九州から導入された形状、つまり施溝方向が縦横に巡るものをそのまま踏襲するが、後期末になると比較的点数が増え、有溝石鍾の施溝の位置も多様化するなかで現れたものであると考えられる。北溝手遺跡で出土した横位に溝を巡らせるタイプは百間川原尾島遺跡や上東遺跡など、当時の沿岸部の遺跡や、津山市の草加部

表7 南溝手遺跡・北溝手遺跡出土鍾の分類

遺跡名	時期	有溝石鍾	打欠石鍾	管状土鍾		球状土鍾
				孔径が0.5cmより大きなもの	孔径が0.5cm以下	
南溝手	弥生時代後期	1		4	3	1
	古代				8	
	中世			1	6	
北溝手	弥生時代後期	1	1		1	
	古代				5	
	中世			1	6	
	近世			1	2	



1 (A) : S25

2 (B) : S174

3 (B) : S251

4 (A) : C12

5 (A) : C11

6 (B) : C45

7 (A) : C24

8 (A) : C27

9 (A) : C19

10 (B) : C23

17 (A) : C1

11 (A) : C41

12 (A) : C45

13 (B) : C34

14 (B) : C33

15 (B) : C49

16 (B) : C50

1・2 : 有溝石錘

4～16 : 管状十錘

(A) : 南満手遺跡

3 : 打欠石錘

17 : 環状十錘

(B) : 北満手遺跡

第487図 南満手遺跡・北満手遺跡から出土した錘 (1/2)

表8 岡山県内の主な石鍾・土鍾出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	低位に溝のあるもの	窪地に溝のあるもの	傾斜に溝のあるもの	段縁に溝のあるもの	打欠石鍾	管状土鍾
1 津島	岡山市北区	弥生前期	○				○	●
2 黒坂	岡山市北区西原	弥生前期	○				○	
3 天神坂	岡山市北区八音町	弥生前期	○				○	
4 屋宇津加茂A	岡山市北区加茂	弥生前期後半	○	○			○	
5 屋宇津加茂B	岡山市北区加茂	弥生前期	●				○	○
6 加茂駅前	岡山市北区加茂	弥生前期	○				○	○
7 廣田	岡山市北区廣田町	弥生中期	○	○			○	○
		古墳前期	○					●
8 津寺	岡山市北区津寺	弥生中期	○				○	
		弥生前期	○				○	
		古墳前期	○	○			○	●
9 百間川原尾島	岡山市中区原尾島	弥生前期	●		○		●	○
		古墳前期						○
10 百間川末田	岡山市中区末田	弥生前期末～古墳前期	○	○			○	○
11 百間川沢田	岡山市中区沢田	古墳前期	○				○	○
12 百間川今谷	岡山市中区今谷	弥生中期後半～後期	○				○	○
13 百間川藤巻	岡山市中区藤巻	弥生前期	○				○	○
14 藤原	岡山市中区藤原	弥生前期	○				○	○
15 廣下	岡山市東区廣下	弥生前期	○				○	○
		古墳前期	○					●
16 西溝手	岡山市西溝手	弥生前期			○	○	○	○
17 北溝手	岡山市北溝手	弥生前期			○	○	○	○
18 草加部稲荷	津山市草加部	弥生前期後半			○			
19 山形地蔵	津山市山形	弥生前期		○				
20 足守町尖部遺跡	倉敷市尖部	弥生前期後半	○					
21 上水	倉敷市上水	弥生前期	○		○			○
22 藤山貝塚	倉敷市藤山	弥生中期後半			○			○
23 山形山	倉敷市山形	弥生前期後半	○					
24 馬屋	赤松市馬屋新屋敷	弥生前期後半					○	
25 川木山	赤松市川木山	弥生中期後半			○			○
26 段津	岡口市段津	弥生前期	○				○	
27 竹林寺大土留	岡口市竹林寺	弥生前期	○				○	○

○：10点未満

●：10点以上

稲荷遺跡や山形福田遺跡など内陸部の遺跡でも出土している。しかし南溝手遺跡で出土した縦溝に溝を巡らせる九州型石鍾の痕跡が色濃く残るタイプは県内では上東遺跡に若干みられる程度である。岡山県内での有溝石鍾の出現時期は弥生時代中期頃であるが、その多くは弥生時代の後期段階に集中する。そして後期末、遅くとも古墳時代の初頭に姿を消す。瀬戸内全体では弥生時代の前期から見られるが、岡山県内においては、それぞれ後期を中心としているもので、北溝手・南溝手遺跡で出土した有溝石鍾の種類とは出現時期に差はない。県内の主な遺跡で隆盛する中心時期に同じく導入して、用途としては、鍾以外に漁撈具としての出土は見られないため、推測するしかないが、おそらく延縄のような釣針を用いたものや、袋網の一部に使われていたのではないかと考えられる。有溝石鍾の点数は1点ずつではあるが、過年度の調査でも1点の有溝石鍾が出土しており、当時、集落において小規模な延縄漁や釣漁、そして網漁を行っていたのではないかと考えられる。

その他の石鍾として平らな安山岩の端部を打ち欠いた打欠石鍾が1点出土している（第487図3）。表8を見てもらってもわかるように、岡山県内においても、津島遺跡・百間川原尾島遺跡・奥坂遺跡・鹿田遺跡・上東遺跡など有溝石鍾を出土している遺跡においてセット関係のように確認することができる。時期的にも弥生時代中期～古墳時代初頭まで幅広く存在している。打欠石鍾、あるいは切日石鍾と呼ばれるタイプの石鍾は、時代幅が広く、分類等もなされてない。今回出土した打欠石鍾は遺構に伴うものではないため、おそらくは弥生時代後期段階のものであると考えられるが、はっきりはしない。しかし用途という面では、有溝石鍾と同様、あるいはそれを補完するような役割を担っていたのではないかと考えられる。

そして弥生時代の土鍾は管状土鍾と球状土鍾が出土している。その形状は、管状土鍾は長さ5cm前後の軸断面が紡錘型ないし長方形で、側面に丸みを帯び、中心軸状に単孔を施している（第487図4～

6)。また1点だけではあるが、堅穴住居から出土した球状土鍾（第487図17）は、その形状は和田晴吾氏の分類で管状土鍾①類とされているもので、断面平面ともに円形で、中央に孔を通してある。よく間違えられる土玉よりも比較的大型で孔径も大きい。管状土鍾は真鍋篤行氏の管状土鍾の孔径が0.5cm以上か、あるいは未満かという点から魚網の種類を大別する方法②を採用すると、南溝手・北溝手遺跡では、孔径が0.5cm未満と小さく、細長い形状をしたもの（第487図6など）である刺網系と、孔径が0.5cm以上の袋網系の両方が確認され、また袋網系には1点だけだが、津守遺跡や百間川原尾島遺跡などでも出土している大型のもの（第487図8）も確認されている。刺網系はやや不整形を呈したものが多く、いまだ明確な量産化の兆しは確認されていない。そして全体的に焼成は粗いものになっている。出土状況はほとんどが包含層、あるいは溝の埋上に散在しており、集中した状態で確認されているわけではないため、石鍾と合わせて、土鍾は集落内に全生業においてそれほど大きなウェイトを置かれた生業具であったと言えないだろう。そのほかの岡山県内での管状土鍾の出土例は有溝石鍾を出土している遺跡でも大量に確認されており、時期的にも有溝石鍾に併存しているものもある。しかし資料数が増し、画期となるのは弥生時代の後期末から古墳時代にかけてである。これは瀬戸内海地域全般に見られ、有溝石鍾と管状土鍾が併存する関係から、製作が比較的平易で、量産もしやすい小型の管状土鍾に取って代わられる流れを北溝手・南溝手遺跡も踏襲するようである。

以上のことから本調査区における弥生時代の漁撈活動は、あくまで主体となる生業とはまだ言えないものの、メインとなる農耕の補助的な役割で、粗製の管状土鍾を装着した袋網（地曳網・船曳網）や刺網を用いて、小規模な網漁を行っていたと考えられる。1点だけ出土している球状土鍾は民俗例から考えると袋網の一部として用いられていたと考えられる。それに加えて、出土数が少ないが、有溝石鍾を用いた延縄を用いた延縄漁や手釣りのような釣漁も行われていたのではないかと考えられる。

古代の包含層においても数点の管状土鍾が確認されている（第487図7・9・10）。この時代の土鍾は刺網系の管状土鍾のみで、前段階のものに比べて形状に規格化がみられ、おおよそ成形された紡錘状の外形を呈したものが多くなる。しかし本調査区内より出土したものの中には、この段階でも粗製のものが確認されているため、若干の量産化は見られるものの、古墳時代以降も比較的平易な漁業に従事していたと考えられる。

中世段階には北溝手・南溝手両遺跡から土鍾が出土しており、漁撈具の種類は管状土鍾（第487図11～14）のみ確認されている。形状としては先述した袋網系と刺網系の2種類で、点数的には袋網系2点、刺網系12点と、刺網系の管状土鍾が比較的多く確認されている。しかし弥生時代の確認されている大型の管状土鍾はこの段階では出土していない。点数では弥生時代のものより多いが、出土した場所はどちらも弥生時代同様、基本的には包含層が中心で、集積した状況では出土していない。この時期の県内で出土する土鍾の多くは管状土鍾で、その形状も、前段階よりも画一化が進み、網漁の鍾としての規格化が窺い知れるようになる。出土数も圧倒的に増し、複数でまとまって出土するようになるため、それと比べると本調査区の管状土鍾の出上量は少ない。そのため本調査区においては中世段階に至り、ある程度規格化した漁撈具を用いているものの、漁撈活動における劇的な変化を今回出土資料のみでは見てとることはできない。

近世段階では北溝手遺跡にのみ、3点だけ出土している。しかし本調査区は全面にわたって、近世以降の耕作によって削平されている。そのため当時の周辺地域で、漁業が行われていたかどうかを判断することはできない。そのため近世以降も中世と比較的と同様の漁業を行っていたのではないかと推

測するに留める。

最後に漁獲対象と絡めて考えていきたい。本調査区において、漁獲対象の直接的な断片材料である動物遺存体は出土していない。そのうえ弥生時代の漁撈具の点数も少なく、先述したように、小規模な網漁の展開が考えられる程度のことしか想定できない。そのため当時の漁獲対象魚は周辺の遺跡から推測するしかない。いくつか例をあげてみると、岡山県内の遺跡では、百間川原尾島遺跡ではサメやマダイ、奥坂遺跡ではダツ・スズキ・クロダイ・ニベ・フグ・ハモ・エイ・マハタ・マゴチ、上東遺跡ではマダイ・スズキ・クロダイなどが確認されている。同じ県内でそれほど魚種の内容が変わるとは考えられないので、本調査区においても、管状土鍾を用いた刺網系の網漁を中心にマダイ・クロダイ・スズキなどを獲得していたのではないかと想定できる。そしてそれは管状土鍾など漁撈具の組成が劇的に変化しないために、古代まで同様の状況が続いていたと考えられる。それ以降、北溝手・南溝手遺跡の中世段階において、どのような漁を行い、何を獲っていたのだろうか。まず考古資料から判断すると、出土している管状土鍾から袋網系と刺網系両方を用いた網漁が行われていたと考えられる。しかし大型の土鍾の点数が少ないため、多くは弥生時代や古代と同様に刺網系の網を用いていたと考えられる。また先述したように、動物遺存体が確認されていないため、直接的に何を獲り、消費していたかは確認できないが、当時の文献資料からそれを読み取ることができる。中世段階の物流を知る上で重要な史料であり、船の積み荷について記載された『兵庫北関入船納帳』<sup>16)</sup>によると、当時の備前や備中から積み込まれた海産物は海老・塩鯛・干鯛・小鯛・鯛（マイワシ・ウルメイワシ・カタクチイワシなどを一括して指す）などとなっている（表9）。このことから漁獲物が、当時の岡山では自ら消費するだけではなく、中央に対しての交易品として扱われていたことがうかがえる。つまり当時の北溝手・南溝手・窪木遺跡周辺の網漁もそのような漁獲物を対象としたものであったと考えられる。そして小型の管状土鍾では海岸部や河口域や浅瀬において、刺網系の瀬根網や建網、袋網系の地曳網、また海老籠のような小型の陥穽具などを用いた網漁を行い、比較的大型の袋網は沖合での船曳網、さらに鯛網のような大型の巻網を用いて、鯛や鯛、海老などを漁獲していたのではないかと考えられる。

上のことから、本調査区における漁撈活動は、弥生時代においては北溝手遺跡と南溝手遺跡では自身の食糧獲得のため、小規模な網漁を始めていたと考えられる。そのような漁業はおそらく古代まで続いていたと考えられる。しかし中世以降になると、北溝手・南溝手・窪木遺跡が含まれる特に調査区の南側において、白らの食糧確保のためだけではなく、消費地に向けての商品漁獲物獲得を目的として営まれた、比較的大規模の網漁を展開していったと考えられる。（白木）

表9 兵庫北関入船納帳に記載されている漁獲物の積み荷

	備前				備中		
	牛窓	八浜	番田	日々	下津井	地嶋	笠岡
海老	90	7	30			23	
いか	12						
ふく					15		
塩鯛	52					6	
干鯛	10						2
小鯛				18	18		
鯛	390						

\* 数値の単位は籠は石、それ以外は駄（籠は1駄につき）、馬1頭に消費されることのできる単位

## 註

- (1) 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』平凡社 1982
- 分類上のe類は管状上錘の中に含まれているが外形の特徴から球状上錘と称することに。現状でも、形状を同じくする玉玉と球状上錘の境界がかなりあいまいになっており、出土状況や孔径の大きさなどで推測していくしかない。しかし錘としての球形というものは、現在においても土製や鉛製の丸型錘として、網の結節部や釣漁のカブラ用沈子として比較的ポピュラーなものである。そのため管状上錘と同じように、球状上錘も存在していたと考えるのはそれほど無理なことではない。
- (2) 真鍋篤行 付論「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書』(I) 瀬戸内海歴史民俗資料館 1992
- ここでは孔径の数値を3乗にした値を0.25以下と0.25超と示している。つまりは孔径が0.5cmを境界にして、管状上錘の用途を当てはめている。今回はそれを踏襲して検討することとする。
- (3) 文安二年(1445年)の一年間における兵庫北関(東大寺が管掌)を通過した船舶の積荷に対する関税の課税台帳。船種類、積荷の内容と積載量、関税額、入港日、船頭、問丸が入港日別に簡条書きで記されており、中世後期の瀬戸内海における船舶運航や商品流通の構造を知る上で最重要の史料となっている。入港船の船籍地は瀬戸内海東部を中心に瀬戸内海全域と土佐東部におよび、積載物の中には魚介類に関する記載もあり、当時の漁獲物がどのように扱われていたかを知る上でも重要な資料といえる。

## 参考文献

- 乗松真也「備讃瀬戸の古墳時代漁業生産体制」『古墳時代の海人集団を再検討する—「海の生産用具」から20年—』発表要旨集 瀬城文化財研究会 2007
- 富岡直人「百間川米田遺跡出土動物遺存体の分析」『百間川米田遺跡4』岡山県瀬城文化財発掘調査報告 164 国土交通省岡山河川工務事務所 岡山県教育委員会 2002
- 真鍋篤行「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館 1995
- 「瀬戸内地方の刺漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9号 瀬戸内海歴史民俗資料館 1996
- 白木 亨「上錘について」『中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡』岡山県瀬城文化財発掘調査報告 211 岡山県教育委員会 2009
- 林屋辰三郎編「史料」『兵庫北関入松納帳』中央公論美術出版1981

## 付載1 南溝手遺跡のプラント・オパール

株式会社バレオ・ラボ 鈴木 茂・米田恭子

### 1. はじめに

岡山県総社市南溝手ほかに所在する南溝手遺跡において、一般県道服部停車場線道路改築に伴う発掘調査が行われた。この発掘調査に際して、縄文時代後期包含層とその上位層から土壌試料が採取された。以下に、この土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果・考察を示す。

### 2. 試料と分析方法

分析用試料は、南溝手遺跡C区の南区（2地点：4試料）、中区（2地点：4試料）、北区（1地点：2試料）の5地点の2層準（縄文時代後期包含層の第25回第11層とその上位の第10層）より採取された10試料である。これら10試料については南側地点より順に試料番号1～10を付し、奇数が10層試料、偶数が11層試料を示している（表1）。また、これら試料の土層について、10層試料が黒褐色のシルト、11層試料が黒褐色の粘土質シルトである。プラント・オパール分析はこれら10試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

### 3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表1）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、試料1より2,400個のイネのプラント・オパールが検出された。最も多く得られたのは

表1 試料1g当りのプラント・オパール個数

試料番号	試料採取地点	層位	イネ (個/g)	ネギ科節類 (個/g)	クマザサ属類 (個/g)	他のタケ類 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	南区南側	10層	2,400	28,200	16,500	8,200	0	2,400	0	9,400
2		11層	0	27,900	11,200	32,400	0	2,200	1,100	11,200
3	南区北側	10層	0	29,000	13,300	31,400	0	2,400	0	8,500
4		11層	0	25,900	15,300	25,900	1,200	1,200	1,200	14,100
5	中区南側	10層	0	31,500	10,100	22,500	0	0	1,100	6,800
6		11層	0	15,100	10,400	17,400	0	0	0	9,300
7	中区北側	10層	0	24,600	25,800	27,000	1,200	1,200	0	12,900
8		11層	0	39,900	15,300	23,500	0	2,300	0	5,900
9	北区	10層	0	29,700	7,100	4,700	0	0	0	7,100
10		11層	0	44,400	5,800	19,900	0	1,200	1,200	9,400

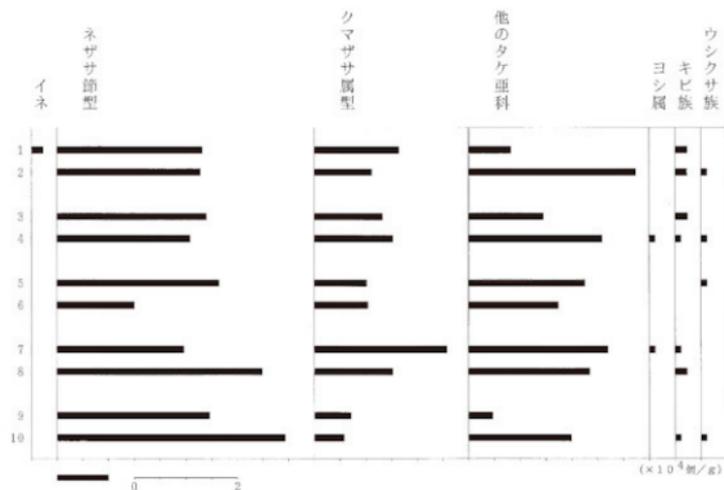


図1 南溝手遺跡のプラント・オパール分布図

ネザサ節型で、約150,000個～約44,000個を示している。次いで他のタケ亜科が多く、個数的には20,000個前後が検出されている。クマザサ属型も比較的多く、多くの試料で10,000個以上の検出個数を示している。その他、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族が若干検出されている。

#### 4. 稲作について

上記したように、10層より採取された試料1よりイネのプラント・オパールが検出されている。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料1 g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。南溝手遺跡の試料1では2,400個と、この5,000個には達していないことから稲作が行われていた可能性は低いと検出個数からは判断されよう。検出された要因としては、植物の根や土壌微生物などの攪乱により上位層から落ち込んできたことなどが考えられよう。また一方で、少ないとは言えイネのプラント・オパールが検出されていることから、10層準における稲作については、検出された遺構や遺物、花粉分析等、多方面からの検討の上、判断されることが望まれよう。

下位の11層準試料についてはイネのプラント・オパールがまったく得られていないことから、南溝手遺跡C区の11層準、すなわち縄文時代後期において稲作が行われていた可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。

#### 5. 遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型について、このネザサ節型のササ類(ケネザサ、ゴキダケなど)

は遺跡周辺の空き地や周辺丘陵部に成立していた森林の林縁部などの日の当たる開けたところに生育していたと推測され、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）とともに草地を形成していたとみられる。また、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下の草の存在で生育していたとみられる。

ヨシを代表とするヨシ属が若干検出されており、遺跡周辺においてこのヨシ属が生育できる湿地や地下水位の高い所の存在が推測される。また、キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明であるが、現生標本観察から雑草類の可能性が高いと思われる。

なお、比較的多く検出されている他のタケ亜科については、マダケ属と似た形態を有していると思われるが、同定には至っておらず不明である。

## 引用文献

藤原宏志「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田跡探索—」『考古学ジャーナル』27号、2-7、1981

図版1 南溝手遺跡のプラント・オパール



1：イネNo.1、2：ネザサ節型No.1、3：クマザサ属型No.7、  
4：他のタケ亜科No.10、5：ウシクサ族No.5、6：キビ族（側  
面）No.8、7：ヨシ属No.4

（a：前面、b：側面）

## 付載2 北溝手遺跡の河道堆積物における稲作の検討

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、旧河道での稲作に関する情報を得るために植物珪酸体分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、C区東壁で確認された微高地間の河道1堆積物である第397岡第9層、およびその上位に堆積する第8・7・6・2層の各層準から塊状試料（試料番号1～5）として採取された5点である。これら分析層準のうち、第2層（試料1）が中世～近世の耕作土層（水田）、第7層が古墳時代～古代の遺物包含層、第9層が縄文時代～弥生時代の旧河道堆積物とされる。また、第8層上面では畦畔らしき痕跡が確認されている。試料の岩質は、極細粒砂質泥からなり、第7層はやや高植に富む。

### 2. 分析方法

各試料について、乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させた後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定、計数する。

分析の際には、プレパラート作製に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

分析結果は、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と、層位分布図として示す。その際、各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各種類の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、100個/g未満は「<100」で表示する。

### 3. 結果

結果を表2、図1に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるが、概して植物珪酸体含量密度は低い。また、産出する植物珪酸体は保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量密度は層位的に変化する。第9層（試料5）では、約2,800個/gであるが、第6層（試料4）では約400個/gに減少し、第7層（試料3）で約5,000個/gと増加する。第6層（試料2）では約1,200個/gと減少し、第2層（試料1）で約1,000個/gとなる。

栽培植物のイネ属は、調査を行った全層準から、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出する。ただし、その含量密度は極めて低く、最も高い値を示した第7層（試料3）で短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともに200個/g程度であり、その他の層準の試料では100個/g未満である。

イネ属以外の種類では、メダケ属（メダケ節）を含むタケ亜科、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などが、わずかあるいは稀に産出する。

#### 4. 考察

今回の調査地点における植物珪酸体の産状は、上記したように層準によって異なっていた。植物珪酸体の産状と調査層準の層相を比較すると、腐植の集積が認められる第7層や旧河道堆積物である第9層で含量密度が高くなっている。このことは各層における産状の差異が、各層の堆積環境の違いに起因していることを示唆する。すなわち、第7層のように腐植の集積する土壌生成が進行している層準は、堆積層の形成期間が長く、堆積物中に取り込まれる植物珪酸体含量も多くなる。このような層相解析に基づく化石群集の形成過程（タフオノミー）を踏まえた、分析結果の解釈を行うことが大切である。今回の場合、現地調査を実施していないので、分析試料の層相に基づいて検討する。

第9層（試料5）は、縄文時代～弥生時代の旧河道を充填する堆積物で、やや擾乱されている細粒砂質泥からなる。本層上位に累重する第8層も細粒砂質泥からなるが、第9層に比較して擾乱の程度が小さく、淘汰も良い。層相から放棄流路の堆積相とみられ、土壌生成の進行が認められないことから短期間に形成された堆積物の可能性が高い。第9～8層で珪酸体の含量密度が低かったが、このような堆積環境と関係している可能性がある。また、栽培種のイネ属も産出するが、含量密度は100個/g以下と著しく低く、著しい擾乱の痕跡が確認されないことから、第8層で稲作が行われた可能性を積極的に支持することは現状では難しい。ただし、岡山平野の津島遺跡など弥生時代前期の水田跡での植物珪酸体分析結果の集成から、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個/g程度にとどまる分析結果が多いことが指摘されている（辻本ほか、2007）。この点を踏まえると、当時の調査地点周辺では稲作が行われていた可能性もある。

第7層（試料3）は腐植の集積する著しく擾乱された極細粒砂質泥からなり、当時の調査地点は土壌生成が進行する状況にあったことが推定される。植物珪酸体含量密度が高くなるのは、このような堆積環境に起因すると判断される。本層からも栽培種のイネ属の植物珪酸体が産出する。含量密度は今回の調査層準の中では最も高いが、200個/gと低密度である。これらのことから、本層形成期には調査地点が耕作地として利用された時期を挟んでいる可能性もあるが、古墳時代～古代の遺物を包含

表1. 東壁の植物珪酸体含量

種 類	層位・試料番号				
	第2層	第6層	第7層	第8層	第9層
	1	2	3	4	5
イネ科葉部細胞珪酸体					
イネ族イネ属	<100	<100	200	—	<100
メダケ属メダケ節	—	<100	<100	—	<100
タケ亜科	<100	100	1,900	100	1,300
ヨシ属	—	<100	300	—	100
イチゴツナギ亜科	—	—	100	—	<100
不明	100	200	900	<100	600
イネ科葉身細胞珪酸体					
イネ族イネ属	—	<100	200	<100	<100
メダケ属メダケ節	—	—	<100	—	—
タケ亜科	200	200	300	<100	<100
ヨシ属	—	—	<100	—	<100
不明	500	500	800	200	500
合 計					
イネ科葉部細胞珪酸体	300	500	3,500	200	2,100
イネ科葉身細胞珪酸体	700	800	1,500	200	700
総 計	1,000	1,200	5,000	400	2,800

数値は含量密度（個/g）を示し、10の位で丸めた値として示す（100単位に示る）。合計に各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。<100は100個/g未満を示す。

することを踏まえると、当該期に資材として持ち込まれたイネ属が周辺から流入している可能性も考えられる。

第6層および中世～近世耕作土層（水田）とされる第2層は擾乱された極細粒砂質泥からなる。イネ属は検出されるが、いずれの層準も含量密度は低かった。稲作が行われた可能性を積極的に支持することは難しい。

イネ属の他に検出された種類からは、埋没河道の周辺の高燥な場所にメダケ属（メダケ節）を含むタケ亜科などが生育して、流路内やその集水域にはヨシ属やイチゴツナギ亜科などが生育していた可能性が考えられる。

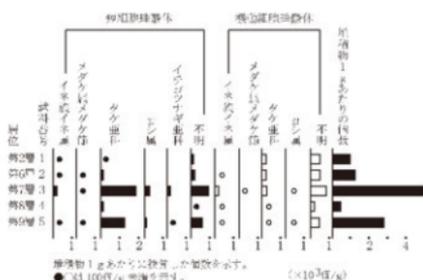
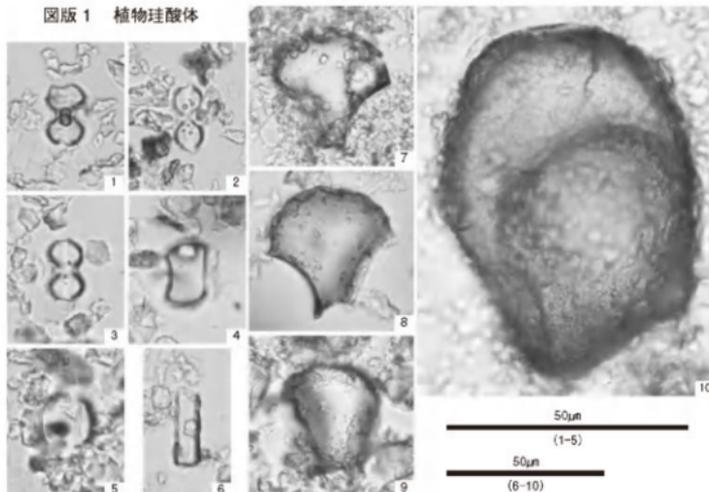


図1 東壁の植物珪酸体含量の層位的変化

#### 引用文献

- 辻本裕也・辻 康男・伊藤良水・堀内誠示・田中義文・高橋 敦・松元美由紀・馬場健司・池島・福万寺遺跡の古環境変遷2。『關大阪府文化財センター調査報告書第158集 池島・福万遺跡3』, 397-473, 2007
- 近藤 隼『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会, 387, 2010
- 西木豊弘編『新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ』, 185, 華山園 2007

図版1 植物珪酸体



1. イネ科稲類珪酸体 (1: 東壁第2層)
2. イネ科稲類珪酸体 (2: 東壁第6層)
3. イネ科稲類珪酸体 (3: 東壁第7層)
4. メダケ科メダケ節珪酸体 (5: 東壁第9層)
6. イチゴツナギ科イチゴツナギ珪酸体 (5: 東壁第9層)
7. イネ属短粒直柱状珪酸体 (1: 東壁第2層)
8. イネ属短粒直柱状珪酸体 (3: 東壁第7層)
9. メダケ節直粒直柱状珪酸体 (3: 東壁第7層)
10. ヨシ属短粒直柱状珪酸体 (3: 東壁第7層)

## 付載3 北溝手遺跡竪穴住居3出土炭化材の樹種同定

株式会社バレオ・ラボ 黒沼保子

### 1. はじめに

北溝手遺跡は総社市北溝手の沖積平野部に所在し、窪木・南溝手遺跡の弥生時代前期集落の西部分にあたる遺跡である。ここでは、竪穴住居3 P36から出土した柱材Aの樹種同定結果を報告する。なお、同じ試料を用いてAMS法による年代測定を行っており、弥生時代前期に相当する結果が得られている（放射性炭素年代測定の報告参照）。

### 2. 方法

手あるいはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料を作製した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子製製 JSM-5000LV型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

### 3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のニレ属であった。以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、顕微鏡写真を図版に示す。

#### (1) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版 1 a-1 c

年輪界が観察できなかったが、大型の道管が早材部に数列並び、晩材部では徐々に径を減じた小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、3～5列幅程度である。

ニレ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、アキニレ、ハルニレ、オヒヨウの3種がある。

### 4. まとめ

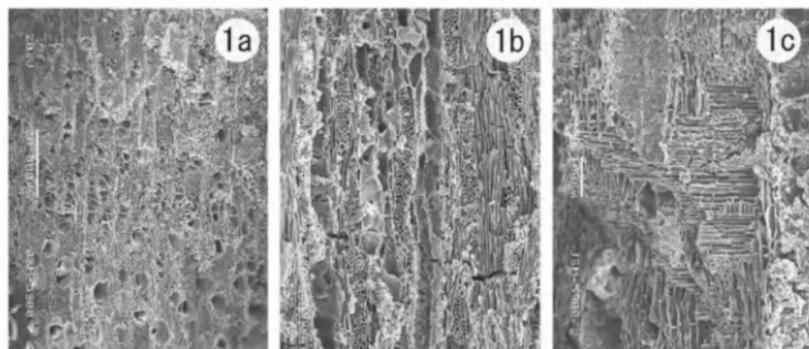
ニレ属のうち、ハルニレとオヒヨウは温帯から暖帯の山地に、アキニレは本州中部以西の荒地や川沿いに生育する傾向がある。ニレ属の材は全般に、硬さ中庸からやや重硬でやや粘り気があるが、狂いが出やすく保存性もよくない。また、ハルニレとオヒヨウは強靱な樹皮の繊維を利用して布や縄を作るのに利用される。

山陽・四国地方の弥生時代における施設材・建築材は、ヒノキ属・コウヤマキなどの針葉樹とアカガシ亜属の分割材、シイノキ属・コナラ属・クリ・ヤマグワ・サクラ属などの広葉樹丸太が使用されている（山田，2003）。ニレ属の使用例はまだ少ないが、比較的大木になることから、柱材としても有用であったと思われる。

### 引用文献

山田昌久「山陽・四国・近畿地方の木・繊維製品」『考古資料大観』第8巻、182-190、小学館、2003

図版 1 北溝手遺跡竪穴住居 3 出土炭化材の顕微鏡写真



1 a 1 c. ニレ属 (a: 横断面、b: 縦断面、c: 放射断面)

## 付載4 北溝手遺跡堅穴住居3 出土炭化材の放射性炭素年代測定 I

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

### 1. はじめに

北溝手遺跡は総社市北溝手の沖積平野部に所在し、窪木・南溝手遺跡の弥生時代前期集落の西部分にあたる遺跡である。ここでは、堅穴住居3から出土した炭化した柱材および炭化材片について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は、堅穴住居3から出土した炭化材2点である。試料AはP36トから出土した柱材で、円柱状に遺存しており、残っている中で最も外側の年輪から採取された（PLD-17395）。試料Bは試料Aと同じ堅穴住居跡の中央穴P40から出土した炭化材片である。試料Bは部位不明であった（PLD-17396）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS；NEC製 1.5SDII）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17395	試料A 遺構：堅穴住居3 四位：P36上 その他：柱材	試料の種類：炭化材（ニレ属） 試料の性状：最外年輪以外で樹皮に近い部分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、硫酸：1.2N）
PLD-17396	試料B 遺構：堅穴住居3 四位：中央穴（P40） 遺物No.119	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、硫酸：1.2N）

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正周年代 (yrBP±1 $\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP±1 $\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-17395 〔試料A〕	-26.59±0.16	2392±24	2390±25	508BC(50.9%)439BC 420BC(17.3%)402BC	705BC(1.4%)695BC 539BC(94.0%)397BC
PLD-17396 〔試料B〕	-23.00±0.21	2418±22	2420±20	512BC(68.2%)412BC	731BC(9.8%)691BC 660BC(1.4%)652BC 545BC(84.2%)403BC

#### 4. 考察

竪穴住居3の柱穴上から出土した柱材である試料A（PLD-17395）は、1 $\sigma$ 暦年代範囲（確率68.2%）において508-439 cal BC（50.9%）および420-402 cal BC（17.3%）、2 $\sigma$ 暦年代範囲（確率95.4%）において705-695 cal BC（1.4%）および539-397 cal BC（94.0%）の範囲を示した。竪穴住居3の中央穴内から出土した炭化材片である試料B（PLD-17396）は、1 $\sigma$ 暦年代範囲において512-412 cal BC（68.2%）、2 $\sigma$ 暦年代範囲において731-691 cal BC（9.8%）、660-652 cal BC（1.4%）、545-403 cal BC（84.2%）の範囲を示した。今回の結果は、較正曲線が平坦で暦年代範囲が絞り込みにくい「2400年問題」に該当する範囲である。

九州北部における弥生土器型式と $^{14}\text{C}$ 年代および暦年代との対応関係（藤尾、2007・2009）に照らすと、弥生時代前期の板付Ⅱa～Ⅱb式に並行する時期にあたる。

また、木材を $^{14}\text{C}$ 年代測定した場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料Aの柱材については、最外年輪ではないが、円柱状に遺存しており、その中で最も外側が採取されているため、最外年輪に近い部位と考えられる。そのため、試料Aについては古木効果を考慮せずとも問題はないだろう。一方、試料Bの炭化材片については、小破片であったために部位が不明である。試料Bについては古木効果の影響により、枯死・伐採年より古い年代が出ている可能性を考慮した方がよい。

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

藤尾慎一郎「九州における弥生時代中期の開始年代」『新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ』, 45-51. 西本豊弘編 雄山閣 2007

藤尾慎一郎「弥生時代の実年代」『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』, 9-51. 西本豊弘編 雄山閣 2009

春成秀爾「近畿・中国の実年代」『弥生時代の実年代』, 20-33 春成秀爾・今村峯雄編 学生社 2004

小林謙一「近畿地方以東の地域への拡散」『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』, 55-82. 西本豊弘編 雄山閣 2009

小林青樹「中国・四国地方における年代測定の成果」『新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年代』, 94-96. 西本豊弘編 雄山閣 2006

中村俊夫「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の<sup>14</sup>C年代』, 3-20. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編 日本第四紀学会 2000

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

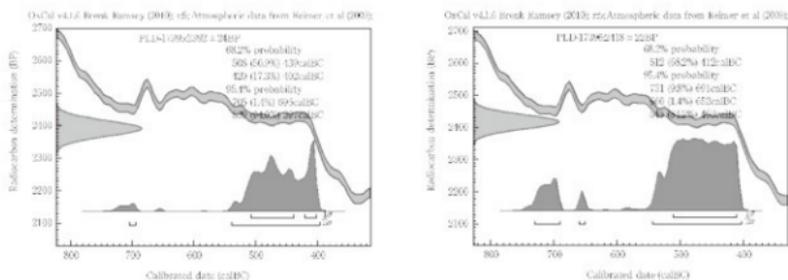


図1 暦年較正結果

## 付載5 北溝手遺跡竪穴住居3 出土炭化材の放射性炭素年代測定II

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、弥生時代前期中葉前半と考えられる北溝手遺跡竪穴住居3の構築年代に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定（AMS法）を実施する。

### 1. 試料

測定試料は、弥生時代前期中葉と推定される竪穴住居3より出土した炭化材2点（試料a・b）である。試料aはP36、試料bは中央穴P40に落ち込んだ木材が炭化したものである。

### 2. 分析方法

炭化材に付着している土壌や根など目的物と異なる年代を持つものは、ピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と鉛箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma：68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

なお、暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ と2 $\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する

範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また表中の相対比とは、 $\sigma$ や $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### 3. 結果

放射性炭素年代測定結果および暦年校正結果を表1に示す。

表1 放射性炭素年代測定及び暦年校正結果

試料名・埋蔵層	検出器(種類)	測定方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦正年代 BP	暦年校正結果				Code No.			
						測定	cal AD/BC	cal BC	相対比				
弥生中前期 土柱 土柱	蛍光法	AAA	2710 $\pm$ 30	-22.10 $\pm$ 6.02	2,550 $\pm$ 30 (2,576 $\pm$ 26)	$\sigma$	cal DC 756	-	cal DC 750	cal BP 2,745	-	2,708	0.817
							cal BC 982	-	cal BC 970	cal BP 2,652	-	2,619	0.883
							cal DC 891	-	cal DC 718	cal BP 2,750	-	2,607	0.883
							cal DC 888	-	cal DC 665	cal BP 2,617	-	2,614	0.169
							cal DC 643	-	cal DC 580	cal BP 2,592	-	2,538	0.154
cal DC 586	-	cal BC 557	cal BP 2,529	-	2,566	0.039							
弥生中前期 土柱	蛍光法	AAA	2,380 $\pm$ 30	-17.85 $\pm$ 6.75	2,400 $\pm$ 30 (2,454 $\pm$ 28)	$\sigma$	cal BC 760	-	cal DC 735	cal BP 2,709	-	2,684	0.170
							cal DC 696	-	cal DC 682	cal BP 2,639	-	2,631	0.052
							cal BC 671	-	cal BC 602	cal BP 2,639	-	2,611	0.020
							cal DC 646	-	cal DC 546	cal BP 2,598	-	2,495	0.218
							cal BC 777	-	cal BC 511	cal BP 2,729	-	2,693	1.000

- 1) 検出方法は、放射線-アナログ地理-熱地理 (AAA検出器)。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を採用了。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。発見した試料は、測定誤差(測定値の8%)が入る範囲に全年代帯に検出された。
- 3) 暦年校正結果には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。暦年の計算には、補正年代の範囲内に示した九の前の値を使用。年代値は、1桁目を丸めるのが原則だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやりにくく、暦年校正年代値は1桁目を丸めていない。相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、暦年校正の真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

### 4. 考察

弥生時代前期中葉とされる竪穴住居3より出土した炭化した柱材、および中央穴内に落ち込んでいた炭化材の補正年代値は、各々2560 $\pm$ 30yBP、2490 $\pm$ 30yBPを示し、暦年代 ( $2\sigma$ の確率1位の値) ではcal BC 801-748、cal BC 777-514を示した。本地域を含む瀬戸内東部地域の弥生時代前期の実年代は、土器付着物の放射性炭素年代測定による校正年代から、cal BC 3～7世紀と推定されている(西本福, 2007)。今回の測定対象が炭化材であるため、得られた年代値は残存部位の年代を示しており、実際の伐採年より古い年代を示していることを考慮する必要がある。これらのことから、今回の炭化材の年代値は、出土遺物から推定される年代と同調的な年代値を示していると判断される。

### 引用文献

西本弘福「新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ」、185、藤山園 2007

## 付載6 北溝手遺跡竪穴住居3 出上赤色彩文石製品の顔料素材推定

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

北溝手遺跡は、これまでに行われた発掘調査の結果、弥生時代から中世にわたる遺構・遺物が確認されている。この度、県道服部停車場線道路改築に伴う発掘調査が行われ、弥生時代前期の竪穴住居3から赤色に彩色された石製品が出土した。そこで、赤色顔料の素材を推定するために蛍光X線分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、弥生時代前期の竪穴住居3から出土した赤色彩文石製品1点（S53）である。穿孔がみられ、また一面が打ち割られる。

### 2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置、株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 $\mu$ mまたは10 $\mu$ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いので、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA（自動設定による）、ビーム径100 $\mu$ m、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定した。定量分析については、標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・パラメータ）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。定量値の誤差は大きく、注意を要する。また、顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

### 3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。測定の結果、鉄（Fe）、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）を中心に、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）などが検出された。また、顕微鏡観察により得られた画像を図2に示す。

### 4. 考察

赤色顔料と考えられるものとして、朱（水銀朱）、鉛丹、ベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれる。鉛丹は四酸化二鉛（Pb<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）である。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（III）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬、2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 $\mu$ mのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田、1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬、1998）。

試料からは、水銀や鉛は検出されなかった。このことから、水銀朱や鉛丹は使用されていないと判断される。鉄が多く検出され、赤い発色は鉄(Ⅲ)による発色と推定でき、顔料としてはベンガラに相当するとみられる。

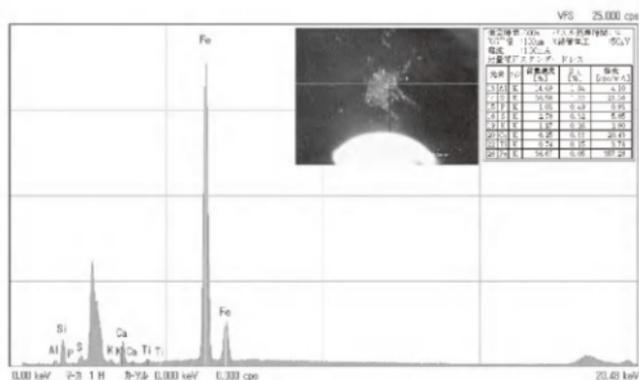


図1 蛍光X線分析結果

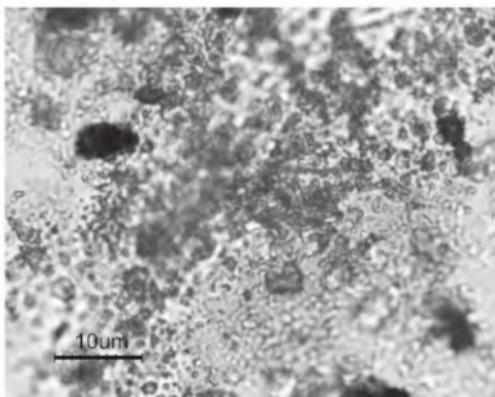


図2 顕微鏡観察結果

#### 引用文献

- 成瀬正和 | 縄文時代の赤色顔料「赤彩土器」[考古学ジャーナル] 438, 10-14. ニューサイエンス社 1998  
 成瀬正和 | 正倉院宝物に用いられた無機顔料 [正倉院紀要] 26, 13-61. 宮内庁正倉院事務所 2004  
 岡田文男 | バイブ状ベンガラ粒子の復元 [日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集], 38-39. 1997

## 付載7 北溝手遺跡井戸1 出土種子の識別報告

東京大学総合研究博物館 人類先史部門 松谷暁子

### 1 はじめに

北溝手遺跡井戸1の中から約45粒出土した種子は、直径3-4ミリの円形-楕円形で、一端が少しとがっている。出土状況から、弥生時代後期の一つの土器からこぼれたと推定され、弥生時代の人々が何らかの用途に利用した植物と考えられるが、イネやムギ類などの穀類ではなく、ソバやマメ類でもない。最初、小西猛朗先生から出土種子8点の写真が送られてきたが、その写真を見た当時の筆者には、植物名は判断できなかった。その後、出土種子のうちの5粒が小西先生から筆者の下に送付され、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察を行った結果、カナムグラと識別されたので報告する。

### 2 実体顕微鏡による観察

先のとがっている方が上、少し幅広い方が下と考えられ、縫合線で二分されるように見うけられる。表面の保存状態は様々で、No.1、No.2と名づけた種子は保存が良いが、No.3は、裏表とも、ところどころ表面がはがれている。No.4は、さらに広範囲に表面が剥がれている上、形もいびつである。No.5は表面の破損がもっとも広範囲に及んでおり、下部が破損している。外形の保存が良いNo.1-No.3は、高さが幅よりやや大きく、アサ種実と類似しているが、No.4とNo.5は、高さより幅のほうが広く、カナムグラに似ている。(図版I:1-5)。クワ科のアサとカナムグラの種実は、低湿地遺跡から伴出することが多い(登原1984、南木1989他)。筆者も米泉遺跡(松谷1989)や新保田中村前遺跡(松谷1993)などで報告しているが、出土カナムグラには、特徴的なハート型のへそが存在することが多い(図版I-6)。しかし、北溝手遺跡出土種子には、この特徴的なへそが観察されず、角度によってはアサ種実にも類似して見えるものがあり、外形が変形している場合も考慮し、走査型電子顕微鏡(SEM)による表面などの観察を試みることにした。

### 3 走査型電子顕微鏡(SEM)による観察

出土試料は、アルミニウムの試料台に、カーボン両面テープを接着した上に載せ、白金パラジウムを300秒蒸着し、東京大学総合研究博物館所蔵の走査型電子顕微鏡(HLS-2250型)を使用し、加速電圧10kvで観察をおこなった。

最初に、表面の保存が良好なNo.1とNo.2の表面を観察したところ、特徴的な組織が見出されなかったが、表面が最も多く剥がれているNo.5から、細胞の輪郭がジグザグ状の細胞からなる、独特の組織が広範囲にわたって観察された(図版II-13)。No.3とNo.4からも、類似の組織が見出された。(図版II-11、12)。No.1とNo.2も、最初の試料を裏返して観察したところ、両面テープに接着していた表面の表面が剥がれNo.3、No.4、No.5と同様の特徴を示す組織が観察された(図版II-9、10)。ジグザグ状の細胞の大きさには多少の変異があるが、長さ25-30ミクロン、幅10-15ミクロンの長方形または円形で鋸歯が顕著である。細胞の鋸歯の数は12-15個くらい。また、細胞の内面は一面に細かい孔が認められる。従って、これらの5粒は、同じ種であると想定された。ハート型のへそが残り、外形が

らカナムグラと考えられる他遺跡出土種子の観察でも同様の組織が観察された（写真14）。

#### 4 カナムグラ果実との比較

2010年10月中旬、熟したカナムグラの実を野外で採取して観察したところ、果実の外形は、北清手遺跡出土種子に類似していた。しかし、遺跡出土カナムグラと異なり、表面全体に脈状の線が存在しており、ハート型のへそは観察されない（図版Ⅰ-8）。

一方、実体顕微鏡で撮影した北清手遺跡出土種子を詳細に観察すると、No.2とNo.5の表面に部分的に脈状の線が残っていることが確認された。

次に、現生のカナムグラ果実の表面をピンセットで剥がしたところ、ハート型のへそが観察された（図版Ⅰ-7）。そこで、北清手遺跡出土種子も外皮を剥がせばハート型のへそが認められるに違いないと思われ、No.4を例にとり、ピンセットで外の果皮を剥がしてゆくと、ハート型のへそが現れた。従って、北清手遺跡出土種子は、5点とも、カナムグラの果実であると判断される。また、5粒のなかで最も破損が強いNo.5の画像を見直したところ、ハート型が崩れた形態のへそが露出していることが認められた。

このように、北清手遺跡出土種子は、他の多くの遺跡出土カナムグラと異なり、憂から剥がれ落ちた現生のカナムグラ果実（種子）と同じ状態のものが多い。クワ科なので、周辺の土壌を採取してとげなどの珪酸体が検出できれば、葉や茎も残存していたことが推察されるかもしれない。

ところで、カナムグラの果実をSEMで観察したところ、表面にも明瞭な文様がある（図版Ⅱ-16）が、この模様は、北清手遺跡出土種子には観察されていない。一方、ピンセットで物理的に表面を剥がした現生カナムグラ粒で観察される組織には、ジグザグ模様が見られるが、北清手遺跡出土種子と比較すると、少し異なる形態をしている。すなわち、細胞の大きさはより大きくて鋸歯が粗く、鋸歯の数は7-8個で、出土種子より少ないほか、細胞の中の細かい孔状構造はまったく見られない（図版Ⅱ-15）。

しかし、米泉遺跡出土カナムグラや、山形県の押出遺跡出土種子で、ハート型のへそからカナムグラ種子と判断された種子が手元に残っており、その表面をSEMで観察したところ、北清手遺跡出土種子ときわめて類似した構造が見出された（図版Ⅱ-14）。従って、実体顕微鏡およびSEMによる観察の結果、北清手遺跡出土種子は、カナムグラの果実であり、表面の脈構造が残っており、ハート型のへそが露出していない状態のカナムグラ果実であるという点が、従来多くの低湿地遺跡で出土したカナムグラと異なる。現生のカナムグラ果実と比較すると、実体顕微鏡レベルではほとんど同じであるが、SEMで表面構造を観察すると、現生の種実とは形態がかなり異なる。現生のカナムグラの果実の表面が土壌に埋もれている過程で、表皮細胞の表面に物理的ならびに化学的变化を受け、米泉遺跡や押出遺跡から出土した種子に観察されるジグザグ細胞からなる構造が露出したものと判断される。現生のカナムグラ果実を、過酸化水素および水酸化カリウムで処理（それぞれ2日間つけ置き）しても、出土粒に見られるのと同じジグザグ形態の細胞組織には変化が認められなかった。もっと強い硫酸などを試せばあるいは出土粒と同じ形態が見られたかもしれないが、確認するには至っていない。このことを考慮すると、北清手遺跡出土種子は、現生のものとは状態が異なり、縄文・弥生時代の低湿地遺跡出土のものと同じ状態であるといえる。

## 5 考察

北溝手遺跡(井戸1)から出土した植物がこのカナムグラだけであり、近くの上器に包含されていたという推定がなされ、この種子の存在が単に当時の植生を示すだけではなく、人間に利用されていた植物と考えられることは、きわめて興味深い。今日食用に用いられることはないが、民間薬では果穂を健胃薬に利用(木村・木村1981)との記述があり、薬用植物の一つに含まれる。また、薬用のほかに救荒植物として葉や茎をゆでて食用に利用されたという(伊沢1980)。岡山県の他の遺跡からも、多数のカナムグラが出土している。特に、鹿田遺跡の井戸6(平安時代)からは、401粒と破片655点ときわめて多数の出土が報告され(古環境研究所2007)、弥生時代の南方(済生会)遺跡の貝層からは、17粒と破片が104点識別されている(新山2007)。岡山県以外でも、カナムグラ種子の出土は多く、縄文晩期の佐賀県畑畑遺跡からは532粒のほか、破片418と多数のカナムグラが出土している(渡辺・粉川1982)。

筆者の経験でも、群馬県弥生時代の新保田中村前遺跡では河川跡から多数のカナムグラ種実が出土しており、特に上層の中からは、カナムグラだけが117点も出土しており(松谷1993)、それ以来何らかの用途に利用された有用植物物なのではないかという疑いが残っていた。ただし、つる植物であるカナムグラには、きわめて多数の果実が実るので、現在でも一面に繁茂しているカナムグラを日にすると、一度に多数の粒を採取するのは容易であろうし、採取時に落下する果実の量もかなり多いことが推測される。このため、カナムグラ種子が多数出土した場合も、古植生を示すと考えられることが多かったが、京都府桑畑下遺跡の報告(西田1975)では、アカメガシワ、カラスザンショウなどとともにカナムグラも、「用途が予想しにくいものとして、植物利用の民俗例からさらに検討を加える必要があるだろう」と記され、報告された写真を見ると、北溝手遺跡出土種子と同じく、へそが現れていない状態の果実であることは興味深い。

北溝手遺跡井戸1から出土した45粒は、鹿田遺跡の井戸からの出土数などに比較すれば、特別多いとはいえないが、上器の中に入っていたものとする、たまたま遺跡近辺に生育していたことを示すだけのものではなく、弥生人が意図的に採取し、何らかの用途に用いていたことが示唆され、きわめて興味深い事例になるであろう。そのためには、出土種子弥生時代のものかどうか、年代の確認が必要と考えられる。

カナムグラの識別はSEMによる観察を行わなくても、外形から十分に可能である(小林他2008)。しかし、将来、土器に付着した炭化物など外形からの判断が困難な場合、北溝手遺跡出土種子から見出されたのと類似のジグザグ構造を参考にカナムグラが識別される例が増えれば、古代人によるカナムグラの利用が、より明らかになるものと期待される。

## 謝辞

出土粒5点を送ってくださり、また、岡山県の遺跡から出土したカナムグラについての文献をご教示いただいた元九州大学教授小西猛郎先生に感謝いたします。

また、東京大学総合研究博物館所蔵の走査型電子顕微鏡(日立S225型)の操作は、総合研究博物館技術補佐員吉谷美子さんによることを記し感謝の意を表します。

## 引用文献

- 伊沢凡人「原色版日本薬用植物事典」誠文堂新光社、1980
- 等原安夫「烏浜貝塚（第6、7次発掘）出土のアサ種実の同定について」（付：80R2、3区ベルト出土のゴボウリョクトウ、ソルマメ、キハタなどの同定）『烏浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1』福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館、80-89、1984
- 小林真生子・百原新・津津進・柳澤清一・岡本東三「千葉県津ノ島遺跡から出土した縄文時代早期のアサ果実」『植生史研究』16巻1号、11-18、2008
- 古環境研究所「鹿田遺跡における種実同定」『鹿田遺跡、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210、32-41、2007
- 新山雅広「南方（済生会）遺跡から出土した大型植物化石2」『南方（済生会）遺跡2-介護老人保健施設たちばな苑建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会、50-57、2007
- 西田正規「植物種子の同定」『京都府舞鶴市桑飼ノ遺跡発掘調査報告書』平安博物館、244-249、図版388-393、1975
- 松谷聡子「米泉遺跡出土植物遺残」『金沢市米泉遺跡、石川県立埋蔵文化財センター、297-304、1989
- 松谷聡子「新保田中村前遺跡出土植物遺残」『新保田中村前遺跡Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査事業発掘調査報告書151集、175-184、1993
- 南木隆彦「米泉遺跡出土大型植物化石」『金沢市米泉遺跡、石川県立埋蔵文化財センター、279-296、1989
- 渡辺誠・粉川昭平「菜畑遺跡の大型植物化石」『菜畑遺跡の調査-佐賀県唐津市における初期稲作-分析・考察編』唐津市教育委員会、467-473、1982
- 木村康一・木村孟淳『原色日本薬用植物図鑑全改訂新版』保育社、1981

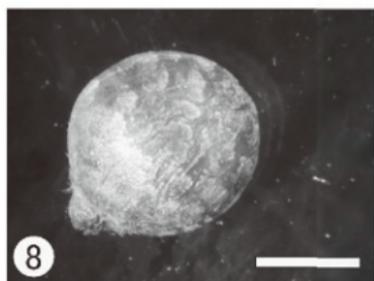
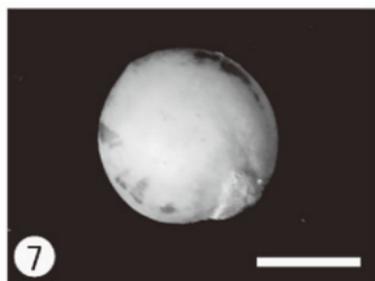
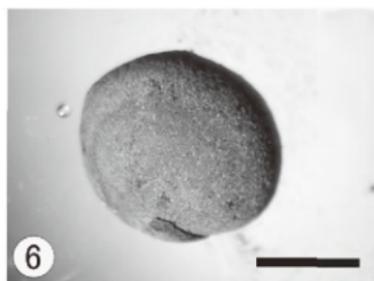
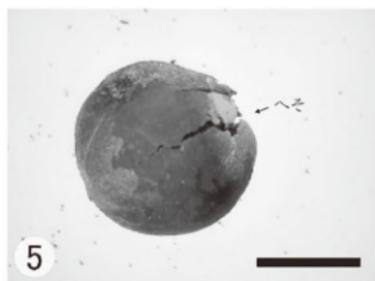
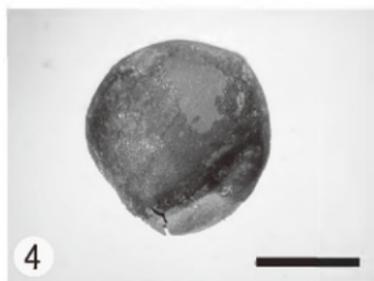
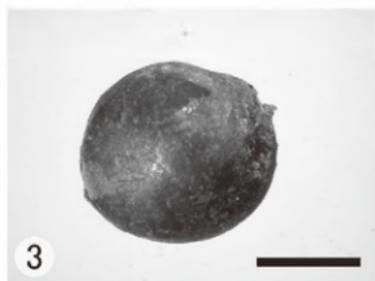
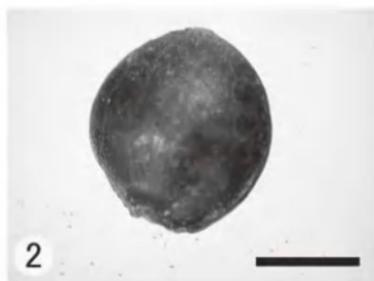
### 図版Ⅰ 北溝手遺跡出土種子5点および米泉遺跡出土または現生カナムグラ（実体顕微鏡写真）

- 1 北溝手1の外形
- 2 北溝手2の外形
- 3 北溝手3の外形
- 4 北溝手4の外形
- 5 北溝手5の外形
- 6 米泉遺跡出土カナムグラ種子
- 7 現生カナムグラ種子（群馬県上野村2010年10月16日採取）
- 8 現生カナムグラ果実（群馬県上野村2010年10月16日採取）

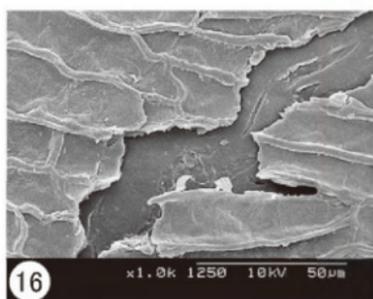
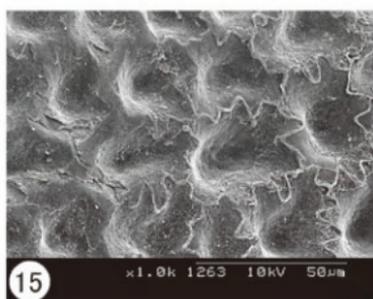
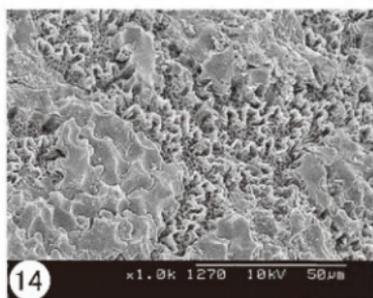
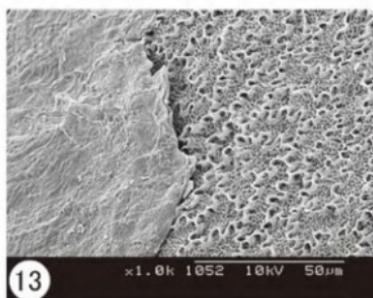
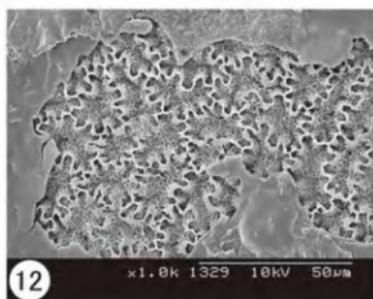
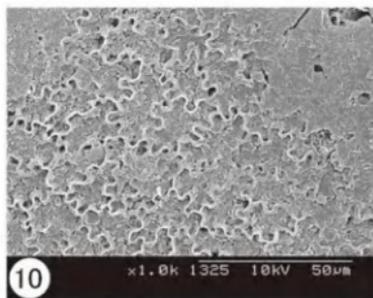
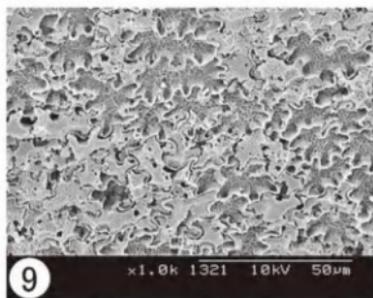
### 図版Ⅱ 北溝手遺跡出土種子、山形県押出遺跡出土、現生カナムグラ果実と種子（SEM写真）

- 9 北溝手1の表面で観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 10 北溝手2の表面で観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 11 北溝手3の表面で観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 12 北溝手4の表面で観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 13 北溝手5の表面で観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 14 押出遺跡出土カナムグラで観察されたジグザグ状細胞からなる組織
- 15 現生カナムグラ種子表面の観察像
- 16 現生カナムグラ果実表面の観察像

图版 I



图版 II





## 窪木遺跡遺構一覽表

### 掘立柱建物

遺構名	地層名	規模	柱間距離 (m)		柱幅 (cm)	溝幅 (cm)	溝深 (m)	礎石	備考
			幅	高					
掘立柱建物1	新渡川遺跡	3×1	245-190	275-250	600	270	18.75	N-70°E	13世紀前半
掘立柱建物2	新渡川遺跡	3×1	300-190	395-278	602	388	25.88	N-70°E	13世紀前半

### 柱穴列

遺構名	地層名	掘削	長さ (m)	柱間距離 (cm)	方向		掘削方	土層	備考
					N°-E°-W	掘			
柱穴列1	新渡川	2層	4.38	225-213	N-68°E	掘	掘削	中柱穴列	
柱穴列2	新渡川	4層	3.0	216	N-72°E	掘	掘削	中柱穴列	

### 土壇墓

遺構名	地層名	平面形	東西方向 (m)		南北方向 (m)		長さ (m)	土層		時期	備考
			幅	厚	幅	厚		N°-E°-W	掘		
土壇墓1	10層C	四角形	0.81		0.91		3	N-72°E	掘	二層木九層	
土壇墓2	10層C						19		掘	二層木九層	二層木、二層土層の一部 (土層4層、土層5層)

### 土壇

遺構名	地層名	平面形	長さ (m)	幅 (m)	土層	長さ (m)	幅 (m)	時期	備考
土壇1	10層C	長方形	0.8	0.72	掘	0.6	0.6	18	10層
土壇2	10層C	正方形	0.8	1.15	掘	0.8	1.0	18.4	10層
土壇3	10層C	正方形	0.8	0.75	掘	0.6	0.6	18.6	10層
土壇4	10層C	正方形	0.8	0.79	掘	0.6	0.6	18.6	10層
土壇5	10層C	正方形	0.8	0.91	掘	0.6	1.1	18.2	10層

## 窪木遺跡遺物観察表

### 土器

埋蔵層	遺構名	種類	数量	計測値 (cm)			色澤	形状、寸法・特徴	備考	
				口徑	口径	高さ				
1	下宇太穴遺跡出土土器	土器	1	15.7	15.0	2.3	灰(10YR6/1)			
2		土器	1	15.7	15.0	2.3	灰(N4-0)			
3		土器	1	15.1	15.7	2.3	灰(5YR6/8)			
4		土器	1	15.7	15.7	2.3	灰(5YR6/8)			
5		土器	1	17.1	16.0	2.3	灰(5YR6/8)			
6		土器	1	12.5	13.1	2.3	灰(5YR6/8)			
7		遺構に付かない遺物	土器	1	12.5	13.1	2.3	灰(5YR6/8)		
8			土器	1	12.5	13.1	2.3	灰(N6-0)		
9			土器	1	12.5	13.1	2.3	灰(5YR6/8)		
10		掘立柱建物2	土器	1	15.0	15.0	2.3	灰(5YR6/8)		
11	土器		1	15.0	15.0	2.3	灰(5YR6/8)			
12	土壇5	土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
13		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
14		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
15		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
16		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
17	遺構に付かない遺物	土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
18		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(N5-0)			
19		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
20		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			
21		土器	1	14.2	14.2	2.3	灰(5YR6/8)			

### 土製品

埋蔵層	遺構名	材質	計測値 (cm)		長さ (cm)	色澤	時期	備考
			長さ	口径				
C1	遺構に付かない遺物	土	12.6	10.1	3.1	4.0	13世紀前半(10YR4/3)	中柱

## 金屬製品

遺物番号	埋藏位置	部材	材質	寸法(mm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M1	平穴住居5出土遺物	環	鉄	135.8	25	2.5	(34.7)	平塚住居	
M2	平穴住居2	環	鉄	25.6			(3.8)	山口	不審遺物

## 南満手遺跡遺構一覧表

### 竪穴住居

遺構名	方位名	平面形	基柱 (m)	窓柱 (m)	穴間幅 (m)	併せ 溝幅 (m)	土 厚 (m)	柱礎部厚 (m)	穴間穴 (m)			築 土 層	遺 構 層	時期	備考	
									形状	長×短	深さ					
竪穴住居1	280K	横丸形	350	-	-	80.3	-	-	-	-	-	-	木	竪穴	弥生前期後半	
竪穴住居2	241S	円	600	300	300	800	4	220-290	-	-	-	-	木	竪穴	弥生前期後半	
竪穴住居2-1	241S	円	600	300	300	808	6	240-210	不整	135×80	10-30	20-35	木	竪穴	弥生前期後半	
竪穴住居2-2	263W	円	1070	650	28.9	830	5	215-160	不整	30-20	24	24	木	竪穴	弥生前期後半	
竪穴住居2-3	263W	円	640	634	30.9	840	5	275-220	不整	107×85	40	40	木	竪穴	弥生前期後半	
竪穴住居4	34-東15S	円	820	700	43.7	850	5	200-255	平面形	115-110	60	60	木	木	弥生前期	

### 掘立柱建物

遺構名	方位名	規模	柱間距離 (cm)		柱径 (cm)	柱径 (cm)	間幅 (cm)	柱方向	築期	備考
			前	後						
掘立柱建物1	263U	2×2	200-180	185-160	398	353	14	N-70°-E	六層	竪柱
掘立柱建物2	281I	1×2	(180)	(126-112)	185	220	-	N-99°-W	13世紀前半	
掘立柱建物3	263M	(3×1)	(242-180)	265	624	267	-	N-65°-W	13世紀前半	
掘立柱建物4	263O	(3×2)	(176-145)	(165-197)	302	298	-	N-25°-W	13世紀前半	
掘立柱建物5	263Q	(2×2)	(190-130)	182	310	281	-	N 14° W	14	
掘立柱建物6	263Q	(2×1)	(210-215)	295	370	385	-	N 71° E	14	

### 柱穴列

遺構名	方位名	規模	長さ (cm)	柱間距離 (cm)	方向		柱径	時期	備考
					N°-E°-W	傾き			
柱穴列1	263U	1層	190	100	N-60°-E	円形	70	弥生前期	
柱穴列2	263U	1層	167	165	N-16°-W	円形	70	弥生	
柱穴列3	263I	2層	278	168-180	N 0°	円形	70	13世紀半	
柱穴列4	263Q	2層	279	140-130	N-20°-W	円形	70	14世紀	
柱穴列5	263W	2層	226	165-80	N-20°-W	円形	70	14世紀	
柱穴列6	263Q	2層	350	197-155	N-24°-W	円形	70	14世紀	

### 井戸

遺構名	方位名	下面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	底面距離 (cm)	時期	備考
井戸1	241S	不整形円形	100	90	93	777	777	弥生前期後半
井戸2	263U	不整形円形	150	147	91	790	790	弥生前期後半
井戸3	263I	横円形		(122)	62	808	808	弥生前期後半
井戸4	263U	横丸形	136		(112)	(78)	(78)	弥生前期後半
井戸5	263U	円形	177	170	107	770	770	弥生前期後半
井戸6	263U	円形	130	149	74	777	777	弥生前期後半
井戸7	263I	方形	60	60	60	705	705	13世紀
井戸8	263I	不整形円形	75	63	71	705	705	13世紀後半
井戸9	263I	不整形円形	130	60	72	709	709	13世紀後半

### 土牆

遺構名	方位名	平面形	厚さ (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	底面距離 (cm)	時期	備考
土牆1	263S	横円形	重さ	-	-	14	869	869	弥生文化層
土牆2	263U	不整形円形	重さ	83	80	16	853	853	弥生の文化層
土牆3	263U	横丸形	重さ	157	124	16	863	863	弥生の文化層
土牆4	241S	不整形円形	重さ	196	52	18	827	827	弥生の期
土牆5	263U	不整形円形	重さ	287	45	(33)	842	842	弥生の文化層
土牆6	263U	-	重さ	-	31	2	847	847	弥生
土牆7	263W	横円形	重さ	167	-	15	866	866	弥生の文化層
土牆8	263G	不整形円形	重さ	114	71	30	849	849	弥生前期後半
土牆9	263G	不整形円形	重さ	156	-	25	813	813	弥生前期後半

遺物名	遺址名	平面形	断面形	土層 (cm)	土層 (cm)	深さ (cm)	出土標高 (cm)	時期	備考
土層10	25BQ	塊瓦片形	蓋a	45	44	10	850	弥生	
土層11	25BQ	塊瓦片形	蓋e	125	58	20	815	弥生~前期古墳	
土層12	25~26BQ	塊瓦片形	蓋a	(150)		18	850	弥生	
土層13	26BQ	塊瓦片形	蓋a	107	86	15	842	弥生?	
土層14	26BQ	塊瓦片形	蓋a	122	63	16	842	弥生?	
土層15	26BQ	片形	蓋a	111	55	17	839	弥生?	
土層16	26BQ	片形	蓋a	73	72	20	842	弥生?	
土層17	26BQ・27BQ	塊瓦片形	蓋a	133	80	19	850	弥生	
土層18	26BQ	不整形片形	蓋a	114		20	879	弥生	
土層19	26BQ	不整形片形	蓋e	-	155	23	863	弥生~前期古墳	
土層20	26BQ	不整形片形	蓋e	280	-	28	853	弥生~前期古墳	
土層21	26BS	片形	蓋a	96	44	10	811	弥生~前期古墳	
土層22	26BQ	不整形片形	蓋a	216	175	18	850	弥生?~前期古墳	
土層23	26BQ	片形	蓋e	125	123	26	833	弥生~前期古墳	
土層24	28B1・28BK	塊瓦片形	蓋a	103	-	14	845	弥生	
土層25	28B1	不整形片形	蓋a	50	47	21	824	弥生~前期古墳	
土層26	28B1・28BK	塊瓦片形	蓋a	122	100	22	851	弥生~前期古墳	
土層27	28BK	塊瓦片形	蓋a	76	85	21	835	弥生	
土層28	28BK	不整形片形	蓋b	107	56	8	851	弥生	
土層29	28BK	塊瓦片形	蓋e	71	-	28	842	弥生	
土層30	28・29BQ	不整形片形	蓋a	213	150	44	817	弥生~前期古墳	
土層31	29BQ	塊瓦片形	蓋a	145	80	17	878	弥生	
土層32	29BQ	不整形片形	蓋a	77	62	22	857	弥生~前期古墳	
土層33	29BS	不整形片形	蓋e	140	67	(34)	825	弥生~前期古墳	
土層34	29BS	塊瓦片形	蓋a	-	-	11	874	弥生~前期古墳	
土層35	29BS	不整形片形	蓋a	104	85	15	836	弥生	
土層36	29BS	不整形片形	蓋a	127	178	17	837	弥生	
土層37	29BS	不整形片形	蓋a	104	-	22	837	弥生~前期古墳	
土層38	29BL	塊瓦片形	蓋a	112	-	40	829	弥生	
土層39	29BL	不整形片形	蓋a	127	(120)	80	791	弥生~前期古墳~前期古墳	
土層40	29BL	片形	蓋b	151	127	26	794	弥生	
土層41	29BL	片形	蓋e	124	138	69	787	弥生~前期古墳	
土層42	29BL	片形	蓋a	94	90	28	822	弥生	
土層43	29BL	片形	蓋a	142	142	23	836	弥生	
土層44	29BL	不整形片形	蓋a	150	123	9	843	弥生~前期古墳	
土層45	29BL	不整形片形	蓋a	70	74	27	873	弥生~前期古墳	
土層46	28BQ	塊瓦片形	蓋a	(105)	(75)	25	795	弥生~前期古墳	奈良遺跡
土層47	29BS	不整形片形	蓋a	94	85	66	821	古墳前期	
土層48	28BC	不整形片形	蓋b	75	50	9	841	古墳前期	
土層49	40BC	不整形片形	蓋e	163	131	14	797	古墳前期	
土層50	26B1	片形	蓋e	70	47	34	825	弥生?	
土層51	29BS	塊瓦片形	蓋a	75	54	10	867	弥生	
土層52	29BS	不整形片形	蓋a	50	50	16	852	弥生	
土層53	29BS	不整形片形	蓋e	88	39	(36)	830	弥生	
土層54	29BQ	不整形片形	蓋a	72	44	21	862	弥生	
土層55	29BQ	塊瓦片形	蓋a	65	47	15	800	弥生	
土層56	29BQ	不整形片形	蓋a	(100)	-	25	835	弥生?~前期古墳	
土層57	29BS	不整形片形	蓋e	180	120	20	818	弥生	
土層58	29BS	片形	蓋a	105	100	20	830	弥生	

## 南溝手遺跡遺物観察表

### 土器

遺物番号	採取遺物名	項目	詳細	寸法 (cm)			出所	時期、年代の目安	備考
				口径	底径	容量			
1	土器1	縄文土器	高杯	27.6		(11.5)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生・弥生前期古墳	
2	土器1	縄文土器	高杯	27.3		(11.1)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
3		縄文土器	高杯			(2.4)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
4		縄文土器	高杯			(3.1)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
5		縄文土器	高杯			(2.8)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
6		縄文土器	高杯			(3.0)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
7		縄文土器	高杯			(2.8)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
8	縄文土器	縄文土器	高杯			(3.0)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
9		縄文土器	高杯			(2.8)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
10		縄文土器	高杯			(3.7)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
11		縄文土器	高杯			(4.7)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
12		縄文土器	高杯			(1.4)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
13		縄文土器	高杯			(3.3)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	
14		縄文土器	高杯			(3.0)	北沢・平重・10YR7.5/2	弥生	

司書 番号	司書 種別	科目	資料	資料数 (冊)			色紙	形式・形式の特典など	備考	
				口見	巻込	封袋				
15	通達に依りて い成致	蘭文上巻	活版			150	蘭文(DY01(1))	外・巻末高書		
16		蘭文上巻	活版			339	仁心>梅(DY05②)			
17		蘭文上巻	活版			170	蘭文(DY01(1))	外・巻末高書		
18		蘭文上巻	活版			281	仁心>梅(DY05②)	外・蘭文		
19		蘭文上巻	活版			181	蘭文(DY03(1))	外・蘭文		
20		蘭文上巻	活版			180	蘭文(DY06(1))	外・蘭文		
21		蘭文上巻	活版			330	蘭文(DY01(1))	外・蘭文		
22		蘭文上巻	活版			5(2)	民局(DY04②)	外・蘭文		
23		蘭文上巻	活版			2(6)	民(DY04)	外・蘭文・表紙		
24		蘭文上巻	活版			4(4)	民局(DY05②)	外・蘭文・表紙		
25		蘭文上巻	活版			2(4)	仁心>梅(DY05②)			
25		蘭文上巻	活版			3(5)	仁心>梅(DY01(1))	外・巻末高書		
26		蘭文上巻	活版			3(7)	仁心>梅(DY05②)			
28		蘭文上巻	活版			5(8)	仁心>梅(DY05②)			
29		蘭文上巻	活版			5(2)	仁心>梅(DY05②)	外・巻末高書		
30		蘭文上巻	活版			6(9)	民局(DY05②)	外・巻末高書		
31		蘭文上巻	活版			7(2)	民局(DY05②)	外・高書		
32		蘭文上巻	活版			3(4)	蘭文(DY04(1))	外・蘭文・表紙		
33		蘭文上巻	活	198		5(8)	仁心>梅(DY05②)	表紙付巻		
34		蘭文上巻	活版			4(5)	仁心>梅(DY06③)	外・二枚書表紙		
35		蘭文上巻	活版			1(1)	和蘭(DY08②)			
36		蘭文上巻	活版			5(9)	蘭文(DY03(1))			
37		蘭文上巻	活版			6(9)	仁心>梅(DY05②)			
38		蘭文上巻	活版			4(5)	民局(DY05②)	外・表紙		
39		蘭文上巻	活版			3(5)	仁心>梅(DY05②)	外・和・封筒表紙		
40		蘭文上巻	活版			3(6)	和蘭(DY07②)	外・和書・封筒表紙		
41		蘭文上巻	活版			3(7)	和蘭(DY05②)	外・和書表紙・封筒		
42		蘭文上巻	活版			3(8)	仁心>梅(DY07②)	外・和書表紙・封筒		
43		蘭文上巻	書		58	32	81	通達巻(DY08①)		
44		蘭文上巻	書				2(3)	仁心>梅(DY07②)		
45		蘭文上巻	書		130		130	仁心>梅(DY08①)		
45		蘭文上巻	書		113		113	和(DY08①)		
47		蘭文上巻	書		148		148	和(DY07④)	外・和書	
48		蘭文上巻	書		178		178	和(DY05⑥)	外・蘭文	
49		蘭文上巻	書				3(8)	仁心>梅(DY06④)	外・蘭文・和書	
50		蘭文上巻	書			118	335	仁心>梅(DY07②)	外・和書	
51		蘭文上巻	書		170		164	和蘭(DY08④)		
52		蘭文上巻	書				1(8)	和(DY07①)		
53	蘭文上巻	書				3(9)	民局(DY04②)			
54	蘭文上巻	書				112	蘭(DY06④)			
55	蘭文上巻	書		138		138	仁心>梅(DY08①)			
56	蘭文上巻	書		138		2(6)	通達巻(DY08①)			
57	蘭文上巻	書		154		153	仁心>梅(DY08①)			
58	蘭文上巻	書		178		174	仁心>梅(DY06②)			
59	蘭文上巻	書		164		148	和蘭(DY08①)			
60	蘭文上巻	書			13	93	蘭文(DY01(1))			
61	蘭文上巻	書		88	19	58	和(DY07①)			
62	蘭文上巻	書				3(6)	仁心>梅(DY07②)			
63	蘭文上巻	書		188		185	蘭(DY06①)			
64	蘭文上巻	書		174		144	和蘭(DY05⑥)	外・和・二枚書		
65	蘭文上巻	書		134		132	仁心>梅(DY06④)	外・表紙・和書		
66	蘭文上巻	書		136		136	和(DY07④)			
67	蘭文上巻	書			126	25	和(DY08①)	外・和書・表紙		
68	蘭文上巻	書		188		188	蘭(DY07④)	外・表紙		
69	蘭文上巻	書		60	35	112	仁心>梅(DY07④)	外・蘭文		
70	蘭文上巻	書		140		142	仁心>梅(DY08①)	外・和書		
71	蘭文上巻	書		122		181	仁心>梅(DY08①)	外・和書		
72	蘭文上巻	書			50	54	通達巻(DY08①)	外・蘭文		
73	蘭文上巻	書		216		168	蘭(DY07④)	外・表紙		
74	蘭文上巻	書			68	73	仁心>梅(DY05④)			
75	蘭文上巻	書			76	38	仁心>梅(DY07④)	外・蘭文		
76	蘭文上巻	書			82	82	仁心>梅(DY08①)			
77	蘭文上巻	書		232		193	仁心>梅(DY08④)			
78	蘭文上巻	書			102	121	蘭(DY07④)			
79	蘭文上巻	書				1(7)	蘭(DY06④)	外・表紙・和書		
80	蘭文上巻	書				2(8)	仁心>梅(DY05②)			
81	蘭文上巻	書				2(5)	和(DY06④)	外・和書表紙高		
82	蘭文上巻	書		148		78	蘭(DY06①)			
83	蘭文上巻	書				5(8)	蘭(DY06①)	外・通達上巻		
84	蘭文上巻	書		120		145	和蘭(DY05⑥)	外・通達上巻		
85	蘭文上巻	書				142	和蘭(DY03①)	外・和書		
86	蘭文上巻	書		131	62	258	仁心>梅(DY07②)			
87	蘭文上巻	書			95	130	和(DY08①)	外・蘭文		

河橋番号	河川名称	河川	管村	計数量 (m)			色別	型別、主な用途等	備註
				口尺	長さ	貯留			
88	戸产2	赤川上流	赤		7.0	(100)	LSA-板(2)YB7(2)	内、欄干等	
89		赤川上流	赤		7.0	(22)	LSA-板(2)YB7(2)		
90	戸产3	赤川上流	赤	5.2	5.0	37	积石(18)等		
91		赤川上流	赤			(8)	積石(VR7)等	内、噴流防護	
92		赤川上流	赤	24.0		(195)	LSA-管(2)YB7(2)	内、沈砂、排水	
93		赤川上流	赤	18.8		(55)	積石(VR7)等	内、沈砂	
94		赤川上流	赤			(22)	丸籠壁(1)B5(2)		
95		赤川上流	赤	(11)		(57)	LSA-管(2)YB7(4)	内、田舎、排水	
96	戸产4	赤川上流	赤	9.6		(7)	LSA-管(2)YB7(2)	内、田舎	
97		赤川上流	赤	(11)		(13)	積石(VR6)等	内、田舎	
98		赤川上流	赤	18.0	10.2	20.2	LSA-管(2)YB6(3)	内、田舎、内、排水	
99		赤川上流	赤			(5)	积石(B5)	内、沈砂、排水	
100		赤川上流	赤			(5)	LSA-管(2)YB7(2)		
101		赤川上流	赤			(3)	積石(VR7)等	内、田舎、排水	
102	戸产5	赤川上流	赤			(3)	LSA-管(2)YB6(2)		
103		赤川上流	赤			(7)	LSA-管(2)YB6(2)		
104		赤川上流	赤		7.8	(21)	积石(B5)等	内、田舎	
105		赤川上流	赤		6.0	(3)	LSA-管(2)YB6(2)		
106		赤川上流	赤	4.8		(8)	積石(VR6)等		
107	戸产6	赤川上流	赤	(7)		(3)	LSA-管(2)YB7(2)		
108		赤川上流	赤			(1)	丸籠壁(1)B1(2)	内、沈砂、排水	
109		赤川上流	赤			(8)	赤石(VR1)等	内、沈砂、排水	
110	土俵2	赤川上流	赤	(1)		(8)	積石(VR7)等	内、沈砂、排水	
111		赤川上流	赤			(5)	LSA-管(2)YB7(2)	内、沈砂	
112		赤川上流	赤			(4)	LSA-管(2)YB6(2)	内、沈砂、排水	
113	土俵3	赤川上流	赤	22.0		(10)	積石(VR1)等	内、排水、排水	
114		赤川上流	赤	16.8		(15)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水、排水	
115		赤川上流	赤	19.8		(15)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
116	土俵7	赤川上流	赤			(8)	積石(B5)等		
117		赤川上流	赤	0.6		(5)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
118		赤川上流	赤	(0)		(7)	LSA-板(2)YB7(2)	内、排水	
119		赤川上流	赤	17.4		(5)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
120		赤川上流	赤	(1)		(8)	LSA-管(2)YB6(2)		
121		赤川上流	赤	19.0		(8)	LSA-管(2)YB6(2)		
122	土俵8	赤川上流	赤	(7)		(2)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
123		赤川上流	赤	16.4		(15)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
124		赤川上流	赤	11.0		(3)	積石(VR1)等		
125		赤川上流	赤			(5)	LSA-管(2)YB6(2)		
126		赤川上流	赤			(3)	LSA-管(2)YB6(2)		
127		赤川上流	赤	5.5		(6)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
128		赤川上流	赤	(1)		(5)	丸籠壁(1)B5(2)		
129		赤川上流	赤	10.0	5.1	(5)	丸籠壁(1)B4(2)		
130		赤川上流	赤	10.3		(7)	積石(B5)等		
131	土俵9	赤川上流	赤	5.9		(2)	LSA-管(2)YB6(2)		
132	土俵11	赤川上流	赤	10.0		(8)	LSA-管(2)YB7(2)	内、田舎	
133		赤川上流	赤	13.4		(5)	LSA-管(2)YB7(2)	内、排水	
134		赤川上流	赤			(5)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
135		赤川上流	赤			(7)	積石(VR1)等	内、排水	
136		赤川上流	赤	6.3		(4)	LSA-管(2)YB6(2)		
137		赤川上流	赤			(8)	積石(VR6)等		
138		赤川上流	赤	(7)		(4)	LSA-管(2)YB6(2)		
139		赤川上流	赤	17.8		(5)	LSA-管(2)YB6(2)		
140		赤川上流	赤	17.0		(5)	LSA-管(2)YB6(2)		
141		赤川上流	赤	16.6		(5)	LSA-管(2)YB6(2)		
142	土俵19	赤川上流	赤	17.2		(8)	LSA-管(2)YB6(2)		
143		赤川上流	赤	17.0		(5)	LSA-管(2)YB4(2)		
144		赤川上流	赤	(2)		(7)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
145		赤川上流	赤			(2)	赤石(VR1)等	内、排水	
146		赤川上流	赤	5.8		(4)	LSA-管(2)YB6(2)		
147		赤川上流	赤	4.2		(3)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
148		赤川上流	赤	5.4		(7)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎	
149		赤川上流	赤			(5)	丸籠壁(1)B5(2)		
150		赤川上流	赤	26.3		(6)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎、排水	
151		赤川上流	赤			(3)	赤石(VR1)等	内、噴流防護	
152		赤川上流	赤			(5)	LSA-管(2)YB6(2)	内、噴流防護、排水	
153		赤川上流	赤			(2)	積石(VR1)等	内、排水	
154		赤川上流	赤	(1)		(2)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
155	土俵20	赤川上流	赤	15.8		(6)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
156		赤川上流	赤		7.0	(8)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
157		赤川上流	赤	12.7		(4)	LSA-管(2)YB6(2)	内、排水	
158		赤川上流	赤	10.0		(8)	LSA-管(2)YB6(2)	内、田舎、排水	
159		赤川上流	赤	6.0		(6)	積石(VR1)等	内、排水	
160		赤川上流	赤			(7)	積石(B5)等	内、田舎	

分類 書名	分類 種別	種別	計量値 (cm)			色紙	型紙、手紙、封筒など	備考
			口広	高さ	厚さ			
161	和装	巻	122		62	綴(75)H4(1)		
162	和装	巻	121		61	外装綴(3)H5(2)	外・洗綴下、封筒文、保存書	
163	和装	巻	138		67	綴(25)H6(8)	外・内綴	
164	和装	巻	164		70	綴(30)綴(7)H5(5)		
165	和装	巻	164		70	綴(30)綴(7)H5(5)		
166	和装	巻	148		61	綴(10)H4(1)		
167	和装	巻	182		65	綴(30)綴(5)H5(1)		
168	和装	巻	178		63	綴(6)綴(3)H3(1)		
169	和装	巻	154		70	綴(7)H6(6)		
170	和装	巻	148		60	綴(4)綴(2)H5(5)	外・綴紙・内綴	
171	和装	巻	174		75	綴(30)綴(7)H6(7)		
172	和装	巻	228		67	外装綴(3)H5(2)	外・内綴	
173	和装	巻	266		64	綴(7)H6(6)		
174	和装	巻	396		66	綴(4)綴(2)H5(4)		
175	和装	巻		5.3	137	綴(4)綴(7)H7(7)		
176	和装	巻		5.3	125	綴(30)綴(7)H5(5)		
177	和装	巻		5.3	150	綴(30)綴(7)H5(5)		
178	和装	巻		5.3	150	綴(30)綴(7)H5(5)	外・口広	
179	和装	巻		5.6	170	綴(30)綴(4)H6(7)		
180	和装	巻		6.0	160	綴(4)綴(5)H5(6)		
181	和装	巻	136	8.1	7.0	綴(10)H4(2)		
182	和装	巻	161		130	綴(3)H5(5)	外・表紙、封筒文、巻紙	
183	和装	巻	176		66	綴(30)綴(4)H6(7)	外・口広、字孔	
184	和装	巻			87	綴(30)綴(7)H6(7)	外・綴紙	
185	和装	巻		144	143	綴(30)綴(7)H5(5)	外・口広、字孔	
186	和装	巻		121	150	綴(4)綴(7)H5(5)	外・口広	
187	和装	巻			132	外装綴(3)H5(2)	外・綴紙・巻紙	
188	和装	巻		5.0	65	綴(4)綴(5)H5(6)		
189	和装	巻			135	綴(30)綴(7)H5(5)	外・内綴	
190	和装	巻			136	綴(30)綴(4)H6(7)	外・洗綴	
191	和装	巻			120	綴(4)綴(2)	外・綴紙	
192	和装	巻	165		60	外装綴(3)H5(2)		
193	和装	巻			120	綴(30)綴(7)H5(5)	外・内綴	
194	和装	巻		6.0	130	綴(30)綴(7)H7(7)	外・綴紙	
195	和装	巻		11.3	180	綴(30)綴(7)H7(7)	外・洗綴・綴紙	
196	和装	巻		15.2	132	綴(3)H7(7)		
197	和装	巻		15.8	137	綴(3)H8(8)		
198	和装	巻		15.8	110	綴(3)H8(8)		
199	和装	巻			171	綴(7)H6(6)		
200	和装	巻	168		63	綴(30)綴(7)H5(5)		
201	和装	巻	122		61	綴(30)綴(7)H5(5)		
202	和装	巻	134		47	綴(3)H6(6)	外・内綴	
203	和装	巻	148		63	綴(3)H7(7)	外・内綴・綴紙	
204	和装	巻		5.8	120	綴(30)綴(7)H6(7)		
205	和装	巻	106	4.6	158	綴(3)H6(6)		
206	和装	巻			131	綴(3)H7(7)		
207	和装	巻		128	137	綴(3)H7(7)	外・内綴文、種懸紙・巻紙、巻下紙	
208	和装	巻		31	132	綴(4)綴(5)H5(1)		
209	和装	巻			66	綴(7)H7(7)	外・内綴	
210	和装	巻	74	6.1	110	綴(7)H6(6)	外・洗綴・綴紙・綴下紙・綴紙・字孔	
211	和装	巻			120	綴(30)綴(7)H7(7)		
212	和装	巻			122	綴(30)綴(7)H5(5)		
213	和装	巻	112		120	綴(4)綴(5)H5(5)	外・綴紙・巻紙	
214	和装	巻			80	綴(4)綴(5)H5(5)	外・綴紙・巻紙	
215	和装	巻			137	綴(7)H6(6)	外・口広、綴紙・巻紙	
216	和装	巻			130	綴(4)綴(5)H4(2)	外・綴紙・巻紙	
217	和装	巻		7.0	60	綴(4)綴(1)H3(1)		
218	和装	巻		8.0	70	綴(30)綴(7)H5(5)		
219	和装	巻		6.6	110	綴(30)綴(7)H6(6)		
220	和装	巻			140	綴(30)綴(7)H7(7)	外・綴紙	
221	和装	巻			73	綴(7)H6(6)		
222	和装	巻		7.0	63	綴(4)綴(1)H3(1)		
223	和装	巻	144		140	綴(30)綴(7)H6(6)		
224	和装	巻	126		140	綴(4)綴(5)H5(5)		
225	和装	巻	150		130	綴(30)綴(7)H6(6)		
226	和装	巻		1.8	143	綴(7)H6(6)	外・綴紙・字孔	
227	和装	綴紙・巻紙		11.0	61	綴(30)綴(7)H5(5)	外・綴紙	
228	和装	綴紙			140	綴(30)綴(7)H7(7)	外・綴紙・巻紙・綴紙	
229	和装	綴紙			130	綴(30)綴(7)H7(7)		
230	和装	綴紙		5.8	120	綴(30)綴(7)H5(5)		
231	和装	綴紙		8.0	63	綴(30)綴(7)H6(6)		
232	和装	綴紙	162		130	外装綴(3)H5(2)	外・口広	
233	和装	綴紙			130	綴(30)綴(7)H7(7)	外・洗綴	

河川番号	河川名称	河川	管轄	計測地点 (km)			色別	基肥、水質汚濁検査等	備考
				河口	中流	下流			
231	上野川上り 3	砂川上流	美	11.0		5.0	川上(兼)103107(2)		
232		砂川中流	美	12.0		5.0	明神足(2)5105(5)		
233		砂川上流	美	11.0		5.0	八重足(2)105(2)		
237		砂川中流	美		7.5	2.0	民二尾(2)096(2)		
238		砂川上流	美		13.8	4.5	藤(2)06(5)		
239		砂川中流	美		5.0	2.5	川上(兼)5105(3)		
210		砂川上流	美		7.0	2.0	藤(2)06(5)	汚、臭、	
211		砂川上流	美	15.0		3.0	藤(2)06(5)		
242		砂川中流	山		17.0	2.0	川上(兼)103107(3)	汚、臭、	
243		砂川上流	美		12.0	4.0	水尾(2)08(3)		
244	上野川上り 4	砂川上流	美	23.1		8.0	藤(2)06(5)	汚、臭、水質汚濁、	
245		砂川上流	美		7.8	3.7	川上(兼)103106(2)		
246		砂川中流	美			4.0	川上(兼)103106(4)	汚、臭、水質汚濁、	
247		砂川中流	美			10.0	川上(兼)103107(3)		
248		砂川上流	美	17.0		5.1	水尾(2)08(3)	汚、臭、水質汚濁、	
219	砂川中流	美	22.0		5.0	砂川(兼)5105(6)	汚、臭、水質汚濁、		
250	砂川上流	美	21.0		11.0	川上(兼)103107(5)	汚、臭、		
251	砂川中流	山	15.0		0.5	民向(2)078(2)	汚、臭、		
252	砂川中流	山	8.0		6.0	藤(2)06(6)	汚、臭、		
253	砂川上流	美		15.0	5.0	砂川(兼)5105(5)			
254	砂川上流	美		6.3	0.0	明神足(2)5105(5)	汚、臭、		
255	砂川上流	美	18.0		1.0	藤(2)06(5)	汚、臭、		
256	砂川中流	美	15.0		5.1	藤(2)06(6)	汚、臭、水質汚濁、		
257	砂川中流	美	25.0		3.0	川上(兼)103106(3)	汚、臭、		
258	砂川上流	美	15.0		3.5	川上(兼)5107(4)			
259	砂川上流	美	16.0		1.0	藤(2)06(5)	汚、臭、		
260	砂川上流	美	15.0		0.5	川上(兼)103107(2)	汚、臭、		
261	砂川中流	美			1.5	八重足(2)105(2)			
262	砂川上流	山	10.0		0.7	藤(2)06(5)			
263	砂川中流	山		6.0	3.1	川上(兼)103107(2)			
264	砂川上流	高		0.5	0.5	川上(兼)103106(7)	汚、臭、水質汚濁、		
265	砂川上流	高		11.8	0.0	藤(2)06(6)	汚、臭、水質汚濁、		
266	砂川中流	山			3.7	赤川(2)05(5)	汚、臭、水質汚濁、		
267	砂川中流	山		19.1	3.0	藤(2)06(6)	汚、臭、水質汚濁、		
268	砂川上流	山	20.0		3.0	民向(2)078(2)	汚、臭、水質汚濁、		
269	砂川上流	高		12.0	1.0	川上(兼)103107(4)	汚、臭、水質汚濁、		
270	松尾川	砂川上流	山	6.3		0.2	川上(兼)103106(3)		
271		砂川中流	山		5.0	3.0	藤(2)06(5)		
272		砂川中流	山		18.8	3.0	藤(2)06(6)		
273	松尾川	砂川上流	山		6.0	川上(兼)5107(4)	汚、臭、		
274	松尾川	砂川上流	山	15.0		3.0	川上(兼)103106(4)		
275	松尾川	砂川中流	美	11.4		3.0	民向(2)078(1)		
276	松尾川	砂川中流	山		6.8	1.5	川上(兼)103106(3)		
277	松尾川	砂川上流	山		2.1	川上(兼)5107(4)			
278	松尾川	砂川上流	山	11.0		4.5	川上(兼)103107(3)	汚、臭、水質汚濁、	
279	砂川上流	山	12.0		11.0	藤(2)06(5)	汚、臭、水質汚濁、		
280	砂川中流	山			3.0	川上(兼)103106(3)	汚、臭、水質汚濁、		
281	砂川上流	山	13.0		3.5	川上(兼)103107(2)	汚、臭、		
282	砂川中流	山			3.7	藤(2)06(6)	汚、臭、		
283	砂川中流	山			3.5	川上(兼)103106(3)	汚、臭、		
284	砂川上流	美			3.5	民二尾(2)096(4)	汚、臭、		
285	砂川上流	美			1.5	藤(2)06(1)	汚、臭、		
286	砂川上流	山			3.2	藤(2)06(3)	汚、臭、		
287	砂川中流	美			3.0	川上(兼)103107(4)	汚、臭、		
288	砂川上流	美			6.0	川上(兼)103107(4)	汚、臭、		
289	砂川上流	美	10.0		5.0	川上(兼)103107(3)	汚、臭、水質汚濁、		
290	砂川上流	美			2.0	八重足(2)105(2)	汚、臭、水質汚濁、		
291	砂川上流	美			1.0	藤(2)06(6)	汚、臭、水質汚濁、		
292	砂川中流	山			4.0	藤(2)06(5)	汚、臭、水質汚濁、		
293	砂川上流	美			5.5	砂川(兼)5105(5)	汚、臭、水質汚濁、		
294	砂川上流	山	10.0		1.0	砂川(兼)5105(6)	汚、臭、水質汚濁、		
295	砂川上流	山			2.1	明神足(2)5105(5)	汚、臭、水質汚濁、		
296	砂川中流	山		18.3	3.0	藤(2)06(6)	汚、臭、		
297	砂川中流	山		25.8	3.2	川上(兼)103106(3)	汚、臭、		
298	砂川上流	山	11.0		7.0	川上(兼)103106(4)	汚、臭、水質汚濁、		
299	砂川上流	山	11.0		4.0	砂川(兼)5105(6)	汚、臭、水質汚濁、		
300	砂川上流	山	15.0		1.2	川上(兼)103106(3)	汚、臭、水質汚濁、		
301	砂川中流	山		18.2	3.3	砂川(兼)5105(6)	汚、臭、水質汚濁、		
302	砂川中流	山		15.0	3.3	藤(2)06(4)	汚、臭、水質汚濁、		
303	砂川上流	山		14.8	4.7	川上(兼)103106(4)	汚、臭、		
304	砂川上流	山			2.1	川上(兼)5107(3)	汚、臭、		
305	砂川上流	山			1.0	藤(2)06(6)	汚、臭、		
306	砂川中流	山		21.0	3.0	川上(兼)103107(3)	汚、臭、		

河川 番号	河川名称	河川 名称	管轄	計測地点 (km)			色別	形状、断面特徴等	備考
				河口	直線	貯留			
307	渡瀬川(河川 事務所)	砂川上流	濁川		11.0	5.0	LS0-兼子103102-2		
308		砂川上流	山	20.0		1.0	PS0-兼子2	汚-田舎	
309		砂川上流	濁川	21.0		1.0	LS0-兼子2SV85-2	汚-田舎	
310		砂川上流	濁川	21.8		0.3	LS2SV86-6	汚-田舎	
311		砂川上流	濁川		12.0	0.0	LS0-兼子2SV86-6	汚-田舎、浅し	
312		砂川上流	濁川		15.4	0.3	LS0-兼子2SV87-2	汚-兼子、浅し	
313		砂川上流	濁川	17.0		1.0	PS088-8	汚-浅瀬	
314		砂川上流	濁川	18.1		0.5	LS0-兼子2SV87-2	汚-浅瀬	
315		砂川上流	濁川	10.0		0.5	LS0-兼子2SV87-2	汚-浅瀬	
316		砂川上流	濁川	14.0		0.0	LS086-6		
317		砂川上流	濁川	12.8		0.2	LS0-兼子2SV87-2	汚-兼子	
318		砂川上流	濁川	10.0		0.5	PS088-8		
319		砂川上流	濁川	13.4		0.0	LS0-兼子2SV86-6		
320		土井谷	濁川	16.8		14.0	LS0-兼子2SV87-6	汚-明国文、新橋子文	河川事務所
321		土井谷	濁川			0.0	LS0-兼子2SV85-4		
322		土井谷	濁川	11.8		0.5	LS0-兼子2SV85-4	汚-明国文、新橋子文	
323		土井谷	濁川	9.1		3.4	LS0-兼子2SV85-4	汚-新橋子文	
324		砂川上流	濁川	21.6		0.1	LS087-7		
325		土井谷	濁川	15.0		0.5	LS0-兼子2SV85-4	汚-明国文、新橋子文	
326		土井谷	濁川			0.5	LS087-7		
327	土井谷	濁川	12.2		0.0	LS0-兼子103102-2	汚-土		
328	土井谷	濁川			7.0	PS088-8	汚-浅し		
329	砂川上流	濁川	5.0	2.0	3.5	PS089-9	汚-土、土		
330	砂川上流	濁川	17.4		7.7	PS089-9	汚-田舎		
331	砂川上流	濁川			0.0	LS088-8			
332	砂川上流	濁川	7.0		0.5	LS0-兼子2SV85-4	汚-浅瀬、新国文		
333	砂川上流	濁川			1.0	LS0-兼子2SV87-2	汚-浅瀬、新国文		
334	砂川上流	濁川	20.0		7.0	LS0-兼子2SV85-4	汚-兼子	河川事務所	
335	砂川上流	濁川	2.0	0.1	0.1	PS089-9	汚-田舎		
336	砂川上流	濁川	3.8	0.4	0.4	LS0-兼子2SV85-4			
337	砂川上流	濁川		6.1	2.0	PS088-8			
338	砂川上流	濁川	18.1		7.0	PS088-8	汚-田舎		
339	砂川上流	濁川	12.0		7.0	LS0-兼子2SV85-4			
340	土井谷	濁川	15.0		0.4	LS0-兼子2SV85-4	汚-明国文、新橋子文		
341	土井谷	濁川	19.8		0.7	LS086-6			
342	砂川上流	濁川			7.0	LS0-兼子2SV85-4	汚-浅し		
343	砂川上流	濁川	6.0		1.0	LS0-兼子103102-2	汚-土		
344	土井谷	濁川	8.0		0.7	PS089-9			
345	砂川上流(河川事務所)	濁川	12.0		0.1	PS089-9			
346	砂川上流(河川事務所)	濁川			0.7	PS089-9			
347	土井谷	濁川			0.0	PS089-9			
348	土井谷	濁川			1.0	PS089-9			
349	土井谷	濁川	17.0	0.0	0.0	PS089-9			
350	河川事務所	濁川	15.8		0.0	LS0-兼子2SV85-4	汚-明国文、新橋子文		
351	河川事務所	濁川	14.0		0.5	LS0-兼子2SV87-6			
352	河川事務所	濁川			0.0	LS089-9			
353	河川事務所	濁川	15.0		4.0	PS089-9	汚-兼子		
354	河川事務所	濁川			8.8	PS089-9			
355	河川事務所	濁川			0.0	LS0-兼子2SV86-6			
356	河川事務所	濁川	15.4		4.0	LS0-兼子2SV87-6			
357	河川事務所	濁川	14.0		0.0	LS0-兼子2SV85-4	汚-明国文、新橋子文		
358	河川事務所	濁川	11.1		0.7	LS0-兼子103102-2	汚-明国文、新橋子文		
359	河川事務所	濁川	13.0		0.0	LS0-兼子103102-2	汚-明国文、新橋子文		
360	河川事務所	濁川	16.0		0.7	LS0-兼子2SV87-6	汚-明国文、新橋子文		
361	河川事務所	濁川			14.0	PS087-7			
362	河川事務所	濁川	20.4		0.5	LS0-兼子2SV86-6			
363	河川事務所	濁川	27.0		12.0	LS0-兼子103102-2			
364	河川事務所	濁川	15.6		1.8	LS0-兼子2SV85-4			
365	河川事務所	濁川	20.4		0.0	LS086-6			
366	河川事務所	濁川			0.4	LS0-兼子2SV85-4	汚-浅し		
367	河川事務所	濁川	9.0		7.0	LS0-兼子2SV86-6			
368	河川事務所	濁川	10.0		1.7	PS088-8			
369	河川事務所	濁川	15.8		21.7	LS0-兼子2SV87-6			
370	河川事務所	濁川	12.8		7.0	LS0-兼子2SV86-6			
371	河川事務所	濁川	18.4		0.0	LS088-8	汚-兼子		
372	河川事務所	濁川	18.7		0.4	LS089-9			
373	河川事務所	濁川	10.0		11.0	LS0-兼子103102-2			
374	河川事務所	濁川	10.7		5.3	LS087-7	汚-兼子		
375	河川事務所	濁川	11.7		0.0	LS087-7			
376	河川事務所	濁川	14.2		0.0	LS086-6			
377	河川事務所	濁川	14.3	10.1	11.3	LS086-6			
378	河川事務所	濁川			0.1	PS088-8			
379	河川事務所	濁川		9.0	0.0	PS089-9			

河川番号	河川名称	河川	管村	計測地点 (km)			色相	方位、流量、水温等	備考
				口	流量	浮遊			
280	戸川	上村	飯	16.00	10(12)	黒(11)	川口・兼子(10)106(2)		
281		土井	飯	17.20	10(17)	黒(12)	川口108(2)		
282		上村	飯	17.80	10(17)	黒(10)	川口・兼子(10)107(2)		
283		土井	飯	16.00	10(12)	黒(13)	川口(10)107(2)		
284		上村	飯			(13)	川口106(2)		
285		上村	飯			(2)	川口・兼子(10)106(2)	川口106(2)	
286		上村	飯(部)			(10)	川口(10)107(1)	川口・兼子	
287		上村	飯(部)			(2)	川口(10)108(2)	川口・兼子	
288		深心	飯	15.8	4.3	黄(12)15(1)	川口(10)107(1)	川口・兼子	
289		加藤	飯			(2)	川口105(2)		
290		加藤	飯			(1)	川口105(2)		
291		加藤	飯	11.6		(15)	川口105(2)	川口・兼子	
292		加藤	飯	14.4	11.6	15.7	川口106(2)	川口・兼子	
293		加藤	飯			(6)	川口107(2)	川口・兼子	
294		加藤	飯	6.3		11.2	川口107(2)	川口・兼子	
295		加藤	飯	16.8		(8)	川口(10)106(1)		
296		上村	飯	15.0		(2)	川口・兼子(10)106(1)	川口・兼子	
297		加藤	飯			(2)	川口104(2)		
298		上村	飯			(4)	川口(10)105(2)	川口・兼子	
299		上村	飯	9.8		(8)	川口106(2)		
300		上村	飯	15.1	10(13)	1.8	川口(10)107(1)	川口・兼子	
301		加藤	飯			(2)	川口105(2)	川口・兼子	
302		加藤	飯			(4)	川口107(2)	川口・兼子	
303		加藤	飯			(2)	川口106(2)	川口・兼子	
304		加藤	飯			(2)	川口107(2)	川口・兼子	
305		加藤	飯			(2)	川口105(2)	川口・兼子	
306		加藤	飯	(11.6)		(2)	川口(10)107(1)		
307		加藤	飯	7.4		(3)	川口105(2)	川口・兼子	
308		加藤	飯			(2)	川口106(2)	川口・兼子	
309		加藤	飯	8.0		(6)	川口(10)107(1)	川口・兼子	
310		加藤	飯			(5)	川口105(2)	川口・兼子	
311		加藤	飯			(8)	川口105(2)	川口・兼子	
312		加藤	飯			(1)	川口105(2)	川口・兼子	
313		加藤	飯			(4)	川口106(2)	川口・兼子	
314		加藤	飯			(3)	川口106(2)	川口・兼子	
315	加藤	飯			(1)	川口105(2)	川口・兼子		
316	加藤	飯	8.0	1.7	4.0	川口(10)107(1)			
317	加藤	飯	9.2	1.2	1.0	川口(10)107(1)			
318	加藤	飯	6.0	1.5	1.0	川口106(2)			
319	加藤	飯	11.0	1.5	1.0	川口106(2)			
320	加藤	飯			(1)	川口106(2)			
321	加藤	飯	11.8	1.5	1.0	川口(10)107(1)			
322	加藤	飯			(1)	川口106(2)			
323	加藤	飯	11.8	2.0	1.0	川口105(2)	川口・兼子		
324	加藤	飯	13.4	2.0	1.0	川口(10)107(1)			
325	加藤	飯	9.2	1.7	1.0	川口105(2)			
326	加藤	飯	10.6	2.0	1.0	川口(10)108(2)			
327	加藤	飯	9.8	1.0	1.0	川口(10)105(1)			
328	加藤	飯	8.7	2.1	1.0	川口106(2)			
329	加藤	飯	12.0		(6)	川口(10)107(1)			
330	加藤	飯	9.8	2.0	1.0	川口106(2)			
331	加藤	飯	12.9	2.0	1.0	川口107(2)			
332	加藤	飯	9.2	2.0	1.0	川口106(2)			
333	加藤	飯			(5)	川口(10)107(1)	川口・兼子		
334	加藤	飯			(3)	川口105(2)			
335	上村	飯	(15.3)		(3)	川口(10)105(2)	川口・兼子		
336	上村	飯			(1)	川口(10)107(1)	川口・兼子		
337	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
338	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
339	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
340	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
341	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
342	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
343	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
344	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
345	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
346	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
347	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
348	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
349	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
350	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
351	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		
352	上村	飯			(1)	川口(10)108(1)	川口・兼子		

収録 番号	収録番組名	形式	種別	収録時間 (分)			色別	番組・放送日時等	備考
				口説	巻戻	封筒			
452	新井 8	土曜朝	現	15:40		3:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
453		土曜朝	現	15:40		3:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
454		土曜朝	現	15:4		3:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
455		土曜朝	現	15:40		3:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
456		土曜朝	現	16:40		3:00	17:40 (VHS-2)	西ノミヤコ	
457		土曜朝	現		6:0	2:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
458		土曜朝	現		5:7	1:40	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
459		土曜朝	現		6:8	2:00	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ	
460		土曜朝	現		15:2	9:2	20:0	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ
461		土曜朝	現		18:7	7:0	9:8	16:00 (VHS-2)	西ノミヤコ
462	戸内 9	土曜朝	現			4:00	16:00 (VHS-2)		
463		土曜朝	現		6:1	2:50	16:00 (VHS-2)		
464		土曜朝	現			2:50	16:00 (VHS-2)		
465		土曜朝	現			2:50	16:00 (VHS-2)		
466		土曜朝	現		10:8	5:0	7:2	16:00 (VHS-2)	
467		土曜朝	現		5:4	4:30	16:00 (VHS-2)		
468		土曜朝	現		6:0	4:30	16:00 (VHS-2)		
469		土曜朝	現		3:7	3:30	16:00 (VHS-2)		
470		土曜朝	現		30:6	14:0	16:00 (VHS-2)		
471		土曜朝	現			0:40	16:00 (VHS-2)		
472	土曜 5	土曜朝	現	26:0		13:0	16:00 (VHS-2)		
473		土曜朝	現	31:0		8:20	16:00 (VHS-2)		
474		土曜朝	現	10:0	8:0	1:0	16:00 (VHS-2)		
475		土曜朝	現	10:30	8:20	10:7	16:00 (VHS-2)		
476		土曜朝	現	11:4	8:20	10:7	16:00 (VHS-2)		
477		土曜朝	現	11:7	8:20	10:7	16:00 (VHS-2)		
478		土曜朝	現	12:1	11	32	16:00 (VHS-2)		
479		土曜朝	現			2:40	16:00 (VHS-2)		
480		土曜朝	現	14:0	6:0	5:0	16:00 (VHS-2)		
481		土曜朝	現	15:40		3:00	16:00 (VHS-2)		
482	土曜朝	現	15:40		3:00	16:00 (VHS-2)			
483	土曜朝	現			2:20	16:00 (VHS-2)			
484	土曜朝	現		6:0	1:40	16:00 (VHS-2)			
485	土曜朝	現		5:4	1:7	16:00 (VHS-2)			
486	土曜朝	現		4:7	2:50	16:00 (VHS-2)			
487	土曜朝	現		8:6	2:31	16:00 (VHS-2)			
488	土曜朝	現		7:9	6:7	16:00 (VHS-2)			
489	土曜朝	現			3:50	16:00 (VHS-2)			
490	土曜朝	現		14:1	3:7	16:00 (VHS-2)			
491	土曜朝	現		11:0	8:10	16:00 (VHS-2)			
492	土曜朝	現		12:4	8:20	16:00 (VHS-2)			
493	土曜 1	土曜朝	現			2:30	16:00 (VHS-2)		
494		土曜朝	現	14:8		3:00	16:00 (VHS-2)		
495		土曜朝	現	6:0	1:0	16:00 (VHS-2)			
496		土曜朝	現	6:6	1:5	16:00 (VHS-2)			
497		土曜朝	現	7:8	1:7	16:00 (VHS-2)			
498		土曜朝	現		7:2	2:30	16:00 (VHS-2)		
499		土曜朝	現	7:40	4:1	1:1	16:00 (VHS-2)		
500		土曜朝	現	9:8	7:1	1:6	16:00 (VHS-2)		
501		土曜朝	現		7:9	2:5	16:00 (VHS-2)		
502		土曜朝	現		15:1	2:1	16:00 (VHS-2)		
503	土曜 2	土曜朝	現	13:0	8:0	3:00	16:00 (VHS-2)		
504		土曜朝	現		6:0	1:0	16:00 (VHS-2)		
505		土曜朝	現		9:0	1:0	16:00 (VHS-2)		
506		土曜朝	現		13:8	3:00	16:00 (VHS-2)		
507		土曜朝	現		20:0	5:0	16:00 (VHS-2)		
508		土曜朝	現		10:4	8:0	16:00 (VHS-2)		
509		土曜朝	現		6:9	2:0	16:00 (VHS-2)		
510		土曜朝	現		6:8	1:0	16:00 (VHS-2)		
511		土曜朝	現		8:7	2:4	16:00 (VHS-2)		
512		土曜朝	現		9:6	7:2	14	16:00 (VHS-2)	
513	土曜 3	土曜朝	現		6:0	1:0	16:00 (VHS-2)		
514		土曜朝	現	11:0		7:1	16:00 (VHS-2)		
515		土曜朝	現		6:2	2:0	16:00 (VHS-2)		
516		土曜朝	現		8:40	3:0	16:00 (VHS-2)		
517		土曜朝	現		6:0	1:0	16:00 (VHS-2)		
518		土曜朝	現		11:40	1:3	16:00 (VHS-2)		
519		土曜朝	現		10:30	1:0	16:00 (VHS-2)		
520		土曜朝	現		7:6	6:5	9:5	16:00 (VHS-2)	
521		土曜朝	現		16:0	14:0	1:3	16:00 (VHS-2)	
522		土曜朝	現		15:0	14:5	16:00 (VHS-2)		
523	土曜 4	土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
524		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
525		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
526		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
527		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
528		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
529		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
530		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
531		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		
532		土曜朝	現			3:00	16:00 (VHS-2)		

河川番号	河川名称	河川	管轄	計測値 (mm)			色相	水位、流量の特長など	備考
				口圧	流量	浮葉			
325	道東川管内 川流部	上沖原	滝	158	7.0	34	(L)色(黄)103(17.2)	河ノコナリ	
327		土俵原	滝	58	1.0		濃濁(103)85(2)		
328		上沖原	滝	58	1.0		(L)色(黄)103(17.2)		
329		土俵原	滝	7.0	0.3		(L)色(黄)103(17.2)	河ノコナリ	
330		土俵原	滝	7.1	0.1		(L)色(黄)103(17.2)		
331		土俵原	川	8.6	6.8	11	濁(25)86(2)		
332		上沖原	川	8.1	5.1	1.9	(L)色(黄)103(17.2)		
333		上沖原	川	8.2	6.3	14	(L)色(黄)103(17.2)	河ノコナリ	
334		土俵原	川	8.0	7.3	1.0	(L)色(黄)103(17.2)	河ノコナリ	
335		土俵原	川	7.4	5.3	3.3	(L)色(黄)103(17.2)		
336		土俵原	川		6.0	2.8	(L)色(黄)103(17.2)		
337		上沖原	川		5.5	2.5	(L)色(黄)103(17.2)		
338		土俵原	川		10.0	6.8	(L)色(黄)103(17.2)		
339		土俵原	川		11.0	6.8	(L)色(黄)103(17.2)	河ノコナリ	
340		土俵原	川		15.8		(L)色(黄)103(17.2)		
341		土俵原	川		17.6		(L)色(黄)103(17.2)	濁(103)75(2)	
342		土俵原	川		5.0	1.3		濁(103)75(2)	
343		土俵原	川		6.6	1.8		濁(103)75(2)	
344		土俵原	川		6.7	2.6		濁(103)75(2)	
345		土俵原	川		5.6	1.5		濁(103)75(2)	
346	土俵原	川		12.6	3.8	2.8	濁(103)75(2)		
347	土俵原	川		4.5	1.3		濁(103)75(2)	濁(103)75(2)	
348	土俵原	川		4.4	2.6		濁(103)75(2)	濁(103)75(2)	
349	土俵原	川					濁(103)75(2)	濁(103)75(2)	
350	土俵原	川		6.8	4.3	9.8	(L)色(黄)103(17.2)	濁(103)75(2)	
351	土俵原	川		9.7	7.0	1.3	(L)色(黄)103(17.2)	濁(103)75(2)	
352	土俵原	川					(L)色(黄)103(17.2)	濁(103)75(2)	

## 石製品

河川番号	河川名称	管轄	石種	計測値 (mm)			重量 (g)	時期	備考	
				長さ	幅	高さ				
S 1	道東川管内 川流部	土俵原	河原石	84.0	40.6	16.0	6672	河文		
S 2		石俵原	河原石	95.0	40.6	11.0	5293			
S 3		土俵原	河原石	100.0	40.6	16.0	7843			
S 4		土俵原	河原石	114.6	53.6	19.5	13126			
S 5		土俵原	河原石	17.0	14.6	2.5	642		河文	
S 6		土俵原	河原石	106.6	57.6	13.0	12427		河文	
S 7		土俵原	河原石	133.5	108.6	20.0	35930		河文	
S 8		土俵原	河原石	19.3	17.6	4.0	1128		河文	
S 9		土俵原	河原石	15.0	12.0	3.0	939		河文	
S 10		土俵原	河原石	20.0	14.3	2.0	650		河文	
S 11		土俵原	河原石	22.0	16.0	2.5	1102		河文	
S 12		土俵原	河原石	33.5	15.6	4.2	2229		河文	
S 13		土俵原	河原石	19.0	13.0	2.5	613		河文	
S 14		土俵原	河原石	16.5	15.0	2.5	658		河文	
S 15		土俵原	河原石	21.6	18.0	3.5	937		河文	
S 16	土俵原	河原石	17.5	13.0	2.3	654	河文			
S 17	土俵原	河原石	22.2	14.5	5.5	1130	河文			
S 18	土俵原	河原石	31.0	16.0	5.5	2291	河文			
S 19	土俵原	河原石	95.6	47.5	7.0	3875	河文			
S 20	土俵原	河原石	94.6	79.0	5.5	8392	河文			
S 21	土俵原	河原石	82.0	80.0	5.0	6517	河文			
S 22	土俵原	河原石	23.0	15.0	3.0	678	河文			
S 23	土俵原	河原石	32.0	18.0	11.0	1867	河文			
S 24	土俵原	河原石	35.0	43.0	5.0	1931	河文			
S 25	土俵原	河原石	63.6	61.0	5.0	2730	河文			
S 26	土俵原	河原石	34.5	42.0	5.0	1828	河文			
S 27	土俵原	河原石	37.0	48.5	5.5	1993	河文			
S 28	土俵原	河原石	19.0	11.0	4.0	682	河文			
S 29	土俵原	河原石	28.6	16.5	8.0	1135	河文			
S 30	土俵原	河原石	12.0	10.0	2.5	633	河文			
S 31	土俵原	河原石	18.5	13.0	2.5	654	河文			
S 32	土俵原	河原石	11.0	15.0	2.5	650	河文			
S 33	土俵原	河原石	19.0	11.0	2.5	652	河文			
S 34	土俵原	河原石	19.5	14.5	2.5	651	河文			
S 35	土俵原	河原石	24.5	14.0	3.0	656	河文			
S 36	土俵原	河原石	23.0	16.5	4.0	683	河文			
S 37	土俵原	河原石	11.5	16.3	2.0	652	河文			
S 38	土俵原	河原石	17.0	7.0	3.0	660	河文			
S 39	土俵原	河原石	18.5	12.0	2.5	654	河文			

河川番号	河川名称	部材	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	時期	備考
				幅×高	幅×厚	最大厚			
S10	環境にやさしい河物	紙	セロファン	(175)	(3.3)	49	(3.0)		
S11		紙	セロファン	250	230	59	304	水成石	
S12		紙	セロファン	(335)	240	69	(502)		
S13		紙	セロファン	210	150	35	986		
S14	屋外(埋)	紙	紙(内:紙製)	780	780	440	40302		
S15		紙	紙製(ポリプロピレン)	800	552	470	21566	自治体	
S16	河川2	紙	紙製(厚紙)	1290	780	1300	78858		
S17		紙	紙製(薄)	(190)	270	(300)	(1000)		
S18	環境にやさしい河物	紙	厚紙	70	22	15	6296	河川	

## 土製品

河川番号	河川名称	部材	計測値 (mm)			重量 (g)	色目	時期	備考
			幅×高	幅×厚	最大厚				
C1	屋外(埋)	土(土)	280	308	120	5.0	2113	河川(河川)	河川(河川)
C2		土(土)	(200)	100	7.4		(205)	河川(河川)	河川(河川)
C3	土(土)	土(土)	338		42	3.9	529	河川(河川)	河川(河川)
C4		環境にやさしい河物	土(土)	(400)	(405)	135	(215)	河川(河川)	河川(河川)
C5	土(土)	土(土)	22		12		河川(河川)	河川(河川)	
C6		土(土)	60.3	40.8	41.2		(474)	河川(河川)	河川(河川)
C7	河川2	土(土)	921	15.7		1.9	1525	河川(河川)	河川(河川)
C8		土(土)	62.4	15.5		0.3	1558	河川(河川)	河川(河川)
C9	河川2	土(土)	73.8	18.6	4.4-5.0	20.9	1610	河川(河川)	河川(河川)
C10		土(土)	69.6	19.3	4.3-5.0	22.6	1610	河川(河川)	河川(河川)
C11	河川2	土(土)	73.4	20.3	5.9-6.5	25.6	1610	河川(河川)	河川(河川)
C12		土(土)	(8.7)	15.0		1.1	(308)	河川(河川)	河川(河川)
C13	河川2	土(土)	22.2	22.3	100	0.1	981	河川(河川)	河川(河川)
C14		河川(河川)	24.6		10.7		6.46	河川(河川)	河川(河川)
C15	河川2	河川(河川)	22.1		10.5		5.87	河川(河川)	河川(河川)
C16		河川(河川)	33.1		15.0		17.82	河川(河川)	河川(河川)
C17	河川2	河川(河川)	30.5		12.0		13.02	河川(河川)	河川(河川)
C18		河川(河川)	47.6		13.7		40.56	河川(河川)	河川(河川)
C19	河川2	土(土)	23.4	6.0		2.5	0.89	河川(河川)	河川(河川)
C20		土(土)	(34.8)	12.7		2.0-4.0	(426)	河川(河川)	河川(河川)
C21	環境にやさしい河物	土(土)	(8.3)	9.1		2.0	(117)	河川(河川)	河川(河川)
C22		土(土)	26.0	12.2		3.0	(179)	河川(河川)	河川(河川)
C23	河川2	土(土)	(50.2)	12.8		3.9	(582)	河川(河川)	河川(河川)
C24		土(土)	54.9	15.2		3.3	1283	河川(河川)	河川(河川)
C25	河川2	土(土)	(50.2)	15.6		3.3	(927)	河川(河川)	河川(河川)
C26		土(土)	80.2	19.1		4.1	1736	河川(河川)	河川(河川)
C27	河川2	土(土)	93.2	11.9		11.9	187.43	河川(河川)	河川(河川)
C28		河川(河川)						河川(河川)	河川(河川)
C29	河川2	河川(河川)	76.0	26.0	23.0		河川(河川)	河川(河川)	
C30		河川(河川)	57.0	24.0	20.0		河川(河川)	河川(河川)	
C31	河川2	河川(河川)	53.0	13.0	31.0		河川(河川)	河川(河川)	
C32		河川(河川)	31.0		16.7		3.40	河川(河川)	河川(河川)
C33	河川2	河川(河川)	28.2		13.8		10.80	河川(河川)	河川(河川)
C34		河川(河川)	30.3	71.1	69.4		475.61	河川(河川)	河川(河川)
C35	河川2	河川(河川)	24.1		11.6		6.99	河川(河川)	河川(河川)
C36		河川(河川)	27.0		12.5		10.35	河川(河川)	河川(河川)
C37	河川2	河川(河川)	23.7		7.5		3.20	河川(河川)	河川(河川)
C38		河川(河川)	41.4		18.5		687.2	河川(河川)	河川(河川)
C39	環境にやさしい河物	土(土)	(27.5)	(33.5)		3.3	(100)	河川(河川)	河川(河川)
C40		土(土)	(27.7)	12.1		4.5	(142)	河川(河川)	河川(河川)
C41	河川2	土(土)	58.4	17.3		5.2	(126)	河川(河川)	河川(河川)
C42		土(土)	(27.2)	11.0		3.9	(110)	河川(河川)	河川(河川)
C43	河川2	土(土)	(25.8)	9.5		3.8	(110)	河川(河川)	河川(河川)
C44		土(土)	44.1	12.7		4.7	(160)	河川(河川)	河川(河川)
C45	環境にやさしい河物	土(土)					8.60	河川(河川)	河川(河川)

## 金属製品

河川番号	河川名称	部材	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	時期	備考
				幅×高	幅×厚	最大厚			
M1	屋外(埋)	鋼	鋼	(25.0)	11.0	4.2	(172)		
M2		鋼	鋼	(28.7)	6.9	4.4	(200)	橋脚(河川)	
M3	土(土)	鋼	鋼	(20.4)	29.4	3.0	(210)		
M4		鋼	鋼	31.8	22.5	3.2		橋脚(河川)	
M5	屋外(埋)	鋼	鋼	40.7	34.4	3.0	1374	河川(河川)	
M6	河川2	鋼	鋼	(25.8)	5.5	5.2	(120)		
M7	環境にやさしい河物	鋼	鋼	(26.0)	31.2	3.1	(210)	河川	

洞窟番号	洞窟名称	壁材	材質	幅 (mm)			口幅 (寸)	時期	備考
				最大幅	最大幅	最大厚			
M8	遺物に付かない遺跡	粘土	鉄	1116	1285	15.8	53(16)	中層	
M9		アサシ真	磚	1315	13.1	4.7	19(6)		
M10	元穴13	鉄	鉄	119.6	2132	132	39(12)	中層	
M11	鉄	磚	23.4	-	-	10(3)	空中光景		
M12	鉄	磚	22.7	-	-	238	奥穴ノ壁		
M13	鉄	鉄	142.6	1580	5.0	122	壁ノ		
M14	遺跡に付かない遺跡	鉄	鉄	150.2	2410	5.0	1128		壁ノ
M15		鉄	鉄	150.5	2243	3.0	1065		壁ノ
M16		土	鉄	145.7	4.3	4.1	17.1		
M17		刀丁	鉄	122.5	10.8	3.8	19(6)		

## 北満手遺跡遺構一覽表

### 竪穴住居

遺跡名	地区名	平面形	長径 (m)	短径 (m)	瓦葺部 (m)	瓦葺部厚 (m)	柱	柱間距 (m)	中央穴 (cm)			方形土壘		築土厚 (cm)	築土高 (cm)	時期	備考	
									形式	長×短	壁厚	長×短	壁厚					
竪穴住居1	14K	方?	-	18.25	817	11	-	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期前半
竪穴住居2	14K	正方形	326	-	186(1)	814	11	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居3	14K-M	円	1680	-	165(3)	854	10	270×125	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期前半
竪穴住居4	14K	円?	1370	-	116(7)	870	10	225	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居5	14-16M	円	382	-	116(3)	867	11	-	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居6	16D	円?	1190	-	1189	878	-	-	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居7	16D	円	600	-	1137	881	1	270×210	瓦葺部	110×51	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居8	16D	長方	1879	1318	1215	872	2	385	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居9	16D	円	1482	-	866	4	230×205	円	51×51	20	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居10	16D-Q	長方	546	316	1246	874	10	345×150	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居11	18Q	長方	1391	1127	1127	892	2	277	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居12	18Q	長方	1100	1132	890	2	276	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居13	18Q	円?	-	-	890	10	1280	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居14	16-18Q	円	-	-	893	4	230×110	円?	32×32	20	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居15	18Q	円	490	-	895	4	230×210	瓦葺部	120×100	20	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居16	18Q	長方	319	1187	-	891	9	-	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居17	18S	円?	188	-	891	6	275×140	円	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居18	20W	円?	-	-	871	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	武志中期後半
竪穴住居19	22W	円?	625	-	1945	864	16	230×195	瓦葺部	181×171	28	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居20	22Y	正方形?	400	-	1828	865	14	140	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居21	20Y	長方	215	-	871	14	-	-	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居22	22Y	円	458	-	1133	870	10	210×240	瓦葺部	148×105, 56×48	8, 20	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半
竪穴住居23	24A-B-C	方?	1200	256	1640	862	14	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	武志中期後半

### 掘立柱建物

遺跡名	地区名	規模	打設距離 (cm)		柱ノ (m)	柱ノ (m)	間隔 (m)	柱方向 N→S・E→W	時期	備考
			前	後						
掘立柱建物1	16C	4×2	180-117	180-130	600	350	21.31	N-25°-W	武志中期前半	
掘立柱建物2	16C	2×1	228-192	200-180	300	200	7.80	N 21° W	武志中期後半	
掘立柱建物3	16C	1×1	305-303	246-232	305	246	7.32	N 90° E	武志中期後半	
掘立柱建物4	22Y	1×1	243-242	233-234	243	233	5.67	N 59° E	武志中期後半	掘立柱建物1-3の延長
掘立柱建物5	22B A	2×1	270-190	-	-	-	-	-	武志中期後半	
掘立柱建物6	22-24B C	3×1	130-90	-	-	-	-	N 27° E	武志中期後半	

### 井戸

埋藏遺跡名	地区名	平面形	直径 (m)	掘径 (m)	深さ (m)	掘深距離 (m)	時期	備考
井戸1	16C	小円形	122	120	171	706	武志中期前半	
井戸2	18Q	円形	98	94	80	757	武志中期後半	
井戸3	20-22Y	正方形	170	160	124	710	武志中期後半	
井戸4	22B A	正方形	250	180	101	773	武志中期後半	
井戸5	20W	円形	224	180	75	804	江戸	
井戸6	20W	小円形	216	-	85	790	江戸	掘
井戸7	20Y	円形	131	128	65	702	掘	掘
井戸8	22B A	正方形	181	157	54	834	掘	掘
井戸9	22B A	円形	128	140	65	810	掘	掘
井戸10	22B A	円形	170	65	59	833	掘	掘
井戸11	21B C	円形	191	-	68	804	掘	掘

河段名称	桩号	断面号	河宽 (m)	水深 (m)	流速 (m/s)	流量 (m³/s)	日期	设备
上游12	21+00	断面1	120	40	0.60	2880	2015.10.26	ADP
上游13	21+50	断面2	145	41	0.62	3620	2015.10.26	ADP

## 土壤

采样点编号	桩号	断面号	河宽 (m)	水深 (m)	流速 (m/s)	流量 (m³/s)	日期	设备
土壤1	15M	断面1	111	73	15	530		潜水层
土壤2	15M	断面1	106	19	572			潜水层
土壤3	16Q、S	断面2	100	70	16	570		潜水层
土壤4	19E	断面3	97	47	19	562		潜水层
土壤5	19E	断面3	(200)	124	19	560		潜水层
土壤6	12G	断面4	104	125	37	531		潜水层
土壤7	12G	断面4	106	100	(54)	514		潜水层
土壤8	12G	断面4	(300)	70	20	540		潜水层
土壤9	12G	断面4	(300)	165	66	771		潜水层
土壤10	14K	断面5	101	85	33	525		潜水层
土壤11	11K	断面6	88	33	515		潜水层	
土壤12	14K	断面6	170	54	27	538		潜水层
土壤13	14K	断面6	105	(80)	19	544		潜水层
土壤14	14K、M	断面7	107	35	20	774		潜水层
土壤15	14K、M	断面7	208	100	62	802		潜水层
土壤16	11M	断面8	100	85	13	502		潜水层
土壤17	14M	断面8	(300)	100	23	532		潜水层
土壤18	16M	断面9	100	-	34	550		潜水层
土壤19	14M、16M	断面9	(300)	70	28	547		潜水层
土壤20	11M	断面9	100	95	19	570		潜水层
土壤21	11M	断面9	114	104	16	591		潜水层
土壤22	14M	断面9	102	104	25	534		潜水层
土壤23	11M	断面9	102	82	26	535		潜水层
土壤24	14M	断面9	131	115	18	560		潜水层
土壤25	11M	断面9	90	80	18	501		潜水层
土壤26	11M	断面9	100	30	38	523		潜水层
土壤27	14M	断面9	114	75	17	564		潜水层
土壤28	16M	断面9	(300)	68	38	540		潜水层
土壤29	16M	断面9	-	(111)	41	545		潜水层
土壤30	16M	断面9	170	71	28	591		潜水层
土壤31	16Q	断面9	70	61	35	517		潜水层
土壤32	16M、Q	断面9	(280)	50	64	515		潜水层
土壤33	16Q	断面9	(110)	108	8	574		潜水层
土壤34	16Q	断面9	(150)	110	70	518		潜水层
土壤35	16Q	断面9	-	(50)	31	531		潜水层
土壤36	16Q	断面9	-	(100)	11	571		潜水层
土壤37	16Q	断面9	102	70	41	535		潜水层
土壤38	16Q	断面9	(240)	95	36	577		潜水层
土壤39	16Q	断面9	(170)	165	31	571		潜水层
土壤40	16Q	断面9	90	83	22	575		潜水层
土壤41	16Q	断面9	140	(95)	15	584		潜水层
土壤42	16Q	断面9	110	71	19	581		潜水层
土壤43	16Q	断面9	-	(50)	30	500		潜水层
土壤44	16Q	断面9	138	(94)	35	564		潜水层
土壤45	16Q	断面9	(160)	82	32	563		潜水层
土壤46	16Q	断面9	(220)	39	28	572		潜水层
土壤47	16Q	断面9	200	105	21	560		潜水层
土壤48	16Q	断面9	92	75	35	542		潜水层
土壤49	16Q	断面9	(200)	65	13	564		潜水层
土壤50	16Q	断面9	(101)	82	18	567		潜水层
土壤51	16Q	断面9	-	91	11	567		潜水层
土壤52	16Q	断面9	130	(110)	28	590		潜水层
土壤53	16Q、Q	断面9	200	120	45	540		潜水层
土壤54	16Q	断面9	93	53	12	517		潜水层
土壤55	16Q	断面9	133	(80)	19	571		潜水层
土壤56	16Q	断面9	(65)	91	(12)	571		潜水层
土壤57	16Q	断面9	(200)	127	29	577		潜水层
土壤58	16、18Q	断面9	(108)	-	28	500		潜水层
土壤59	16Q	断面9	105	70	11	587		潜水层
土壤60	16Q	断面9	-	98	(94)	797		潜水层
土壤61	16Q	断面9	110	90	19	583		潜水层
土壤62	16Q	断面9	(70)	65	56	533		潜水层
土壤63	16Q	断面9	(110)	77	11	573		潜水层
土壤64	18Q	断面9	80	80	22	537		潜水层
土壤65	18Q	断面9	100	(85)	16	570		潜水层
土壤66	18S	断面9	116	82	17	531		潜水层
土壤67	18S	断面9	100	69	13	566		潜水层

編號	坐落	方位	平面形	剖面形	尺寸 (cm)			重量 (g)	質地	用途	備註
					口徑	底徑	器高				
土庫8	18S	不規則方形	直 a	100	82	12	807	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫9	18S	橢圓形	直 b	105	101	12	839	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫10	18S	方形	直 a	111	111	13	810	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫11	20A	不規則方形	直 a	(270)	165	27	870	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫12	20V	不規則方形	直 a	245	142	25	858	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫13	20V	橢圓形	直 a	(175)	83	14	805	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫14	20V	字盤形	直 b	(200)	150	63	825	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫15	20V	方形	直 b	130	85	12	808	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫16	22V	方形	直 a	135	82	13	802	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫17	22V	橢圓形	直 a	138	79	6	863	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫18	22V, Y	橢圓形	直 b	135	69	15	853	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫19	22V	字盤形	直 a	91	-	8	861	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫20	22V	圓形	直 b	205	130	25	815	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫21	22V	橢圓形	直 a	(250)	(130)	37	848	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫22	22V	不規則方形	直 a	100	78	12	868	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫23	22V	不規則方形	直 c	121	93	68	865	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫24	22V	方形	直 b	127	95	22	860	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫25	22V	方形	直 a	181	99	19	891	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫26	22B A	橢圓形	直 a	220	102	49	838	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫27	22-24B A	不規則方形	直 b	180	64	8	855	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫28	22-24B A	不規則方形	直 a	140	115	27	843	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫29	22-24B A	不規則方形	直 c	(150)	95	3	875	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫30	22B A	不規則方形	直 a	(72)	(85)	(15)	812	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫31	24B A	不規則方形	直 b	(240)	79	9	854	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫32	24B A	不規則方形	直 a	109	-	13	861	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫33	24B A	不規則方形	直 a	(245)	67	59	830	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫34	24B A	圓形	直 b	162	92	31	811	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫35	24B C	不規則方形	直 b	(130)	117	13	860	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫36	25B B	不規則方形	直 c	135	99	10	860	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫37	21B B	橢圓形	直 a	100	108	25	831	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫38	25B B	方形	直 a ?	100	(70)	42	842	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫39	15C	圓形	(直 a)	80	41	12	877	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫40	15G	不規則方形	直 a	125	95	15	831	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫41	15C	不規則方形	直 a	240	-	10	889	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫42	15C	不規則方形	直 b	180	(120)	42	858	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫43	15C	橢圓形	直 a	155	100	29	882	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫44	15C	不規則方形	直 a	196	63	15	885	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫45	15C	不規則方形	直 a	100	51	15	885	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫46	15C	橢圓形	直 c	111	87	11	886	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫47	20A	橢圓形	(直 a)	245	179	37	827	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫48	22V	字盤形	直 b	118	117	25	858	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫49	22V	橢圓形	直 a	114	-	12	838	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫50	22V	橢圓形	直 a	117	115	28	822	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫51	22V	不規則方形	直 a	108	(85)	22	835	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫52	22V	橢圓形	直 a	158	102	22	858	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫53	22V	橢圓形	直 a	185	-	75	814	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫54	22B A	橢圓形	直 a	(185)	-	73	810	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫55	22V	不規則方形	(直 a)	(200)	-	29	839	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫56	22V	方形	直 a	130	-	38	819	硬泥	碗	碗底有刻字	
土庫57	24B C	圓形	直 a	134	(130)	59	832	硬泥	碗	碗底有刻字	

## 北滿手遺跡遺物觀察表

### 土器

編號	出土地點	種類	形制	口徑 (cm)			器高 (cm)	重量 (g)	質地	用途	備註
				口徑	底徑	器高					
1	土庫1	陶文土器	碗	(2.3)	無	2.5V(34.3)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
2		陶文土器	碗	(4.3)	無	3V(36.5)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
3		陶文土器	碗	(3.0)	無	2.5V(36.4)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
4		陶文土器	碗	(3.2)	無	2.5V(37.1)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
5		陶文土器	碗	(2.9)	無	2.5V(35.2)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
6		陶文土器	碗	(3.1)	無	2.5V(37.2)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
7		陶文土器	碗	(4.1)	無	3.5V(40.7)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
8		陶文土器	碗	(2.6)	無	2.5V(31)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
9		陶文土器	碗	(3.9)	無	2.5V(38.3)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
10	土庫2	陶文土器	碗	(2.5)	無	2.5V(33.3)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
11		陶文土器	碗	(4.7)	無	3.5V(40.4)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
12		陶文土器	碗	(2.4)	無	2.5V(30.7)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
13	土庫3	陶文土器	碗	(3.3)	無	2.5V(36.3)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	
14		陶文土器	碗	(3.0)	無	2.5V(35.2)	無	碗底有刻字	碗	碗底有刻字	

河川 番号	河川名称	河川 名称	河川 名称	a 距離 (km)		色澤	湖沼、準川、特殊立川	備考	
				L1道	L2道				
									L1道
15	七穴1	阿波上流	成体		(1.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
16	七穴2	阿波上流	成体	(21.7)	(11.2)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
17		阿波上流	成体	(11.8)	(5.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
18		阿波上流	成体		(4.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
19		阿波上流	成体		(2.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
20		阿波上流	成体		(2.5)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
21		阿波上流	成体		(6.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
22		阿波上流	成体		(8.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
23	渡津川(砂の 川)	阿波上流	成体	(11.0)	(6.2)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
24		阿波上流	成体		(2.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
25		阿波上流	成体		(1.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
26		阿波上流	成体		(3.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
27		阿波上流	成体		(1.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
28		阿波上流	成体		(2.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
29		阿波上流	成体	(24.4)	(1.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
30		阿波上流	成体		(1.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
31		渡津川(湖)	阿波上流	成体	11.1	(25.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
32			阿波上流	成体	13.8	(5.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
33	阿波上流		成体		(3.6)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
34	阿波上流		成体	13.5	(9.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
35	阿波上流		成体	17.5	(7.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
36	阿波上流		成体	17.5	(8.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
37	阿波上流		成体	25.8	(13.5)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
38	阿波上流		成体	23.2	(3.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
39	阿波上流		成体	19.6	(3.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
40	阿波上流		成体	15.2	(39.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
41	渡津川(湖)	阿波上流	成体		5.3	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
42		阿波上流	成体	11.8	(6.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
43		阿波上流	成体	11.9	(3.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
44		阿波上流	成体	18.8	(5.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
45		阿波上流	成体	(21.0)	(1.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
46		阿波上流	成体	(21.8)	(2.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
47		阿波上流	成体		4.9	(3.3)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
48		阿波上流	成体		(6.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
49		阿波上流	成体	17.0	(13.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
50		阿波上流	成体		16.9	(7.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
51	渡津川(湖)	阿波上流	成体	(12.0)	(3.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
52		阿波上流	成体		(3.3)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
53		阿波上流	成体	(21.4)	(2.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
54		阿波上流	成体		(3.5)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
55		阿波上流	成体		(3.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
56		阿波上流	成体		8.4	(23.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
57		阿波上流	成体	8.0	(2.5)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
58		阿波上流	成体	13.0	(5.2)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
59		阿波上流	成体		(4.2)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
60		阿波上流	成体		(2.3)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
61	阿波上流	成体		(2.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
62	阿波上流	成体		(2.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
63	阿波上流	成体		(3.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
64	阿波上流	成体		(9.6)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
65	阿波上流	成体		(14.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
66	阿波上流	成体	(21.0)	(22.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
67	阿波上流	成体	21.8	(9.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
68	阿波上流	成体		(2.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
69	渡津川(湖)	阿波上流	成体		(5.6)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
70		阿波上流	成体		8.0	(9.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
71		阿波上流	成体		7.1	(5.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
72		阿波上流	成体		6.9	(1.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
73		阿波上流	成体		7.4	(6.0)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
74		阿波上流	成体		5.5	(4.6)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
75		阿波上流	成体		7.0	(11.1)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川	
76		阿波上流	成体	15.5	(3.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
77		阿波上流	成体	11.0	(4.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
78		阿波上流	成体		(6.4)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
79	阿波上流	成体		(8.3)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
80	阿波上流	成体		7.2	(6.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
81	阿波上流	成体		10.2	(2.9)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
82	阿波上流	成体		6.1	(5.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
83	阿波上流	成体		(6.3)	(7.2)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川		
84	阿波上流	成体	30.8	(27.5)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
85	阿波上流	成体		(4.6)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
86	阿波上流	成体		(6.7)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			
87	阿波上流	成体		(1.8)	坂東橋(191812)	汚、臭、L1河川			

河橋 路號	向教課程名	科目	教材	α 程度 (mm)		色澤	距離、手元、特殊立止	備考
				L1道	距離			
				道名	距離			
88	初中上級	華	(115)	(33)	以FA-書(7.3)27(1)	英、日		
89	初中上級	華	(115)	(33)	以FA-書(7.3)27(1)	英、日		
90	初中上級	華	(115)	(33)	以FA-書(7.3)27(2)	英、日、葡文		
91	初中上級	華		(28)	英向(0)VR8/2	英、日		
92	初中上級	華		(36)	以FA-書(10)VR7(4)	英、日		
93	初中上級	華		(32)	以FA-書(7.3)VR7(4)	英、日		
94	初中上級	華		(31)	以FA-書(10)VR5(2)	英、日、葡文、葡文		
95	初中上級	華		(48)	以FA-書(7.3)VR5(4)	英、日		
96	初中上級	華		(28)	以FA-書(7.3)VR5(1)	英、日		
97	初中上級	華		(41)	以FA-書(7.3)VR5(1)	英、日、葡文、葡文		
98	初中上級	華		(48)	以FA-書(10)VR6(3)	英、日、葡文、葡文		
99	初中上級	華		(57)	以FA-書(10)VR6(6)	英、日、葡文		
100	初中上級	華		(26)	以FA-書(7.3)VR7(4)	英、日		
101	初中上級	華		(50)	英向(0)VR5(2)	英、日		
102	初中上級	華		(33)	以FA-書(7.3)VR7(4)	英、日		
103	初中上級	華		(37)	以FA-書(7.3)VR5(1)	英、日		
104	初中上級	華		(21)	以FA-書(7.3)VR5(1)			
105	初中上級	華		(44)	以FA-書(10)VR7(2)			
106	初中上級	華		(16)	英向(0)VR8/2			
107	初中上級	華		(31)	以FA-書(7.3)VR5(4)			
108	初中上級	華		(15)	以FA-書(10)VR8/2			
109	初中上級	華	105	(58)	以FA-書(10)VR8/2			
110	初中上級	華	(96)	(24)	以FA-書(10)VR8(3)	英、日		
111	初中上級	華	(145)	(40)	以FA-書(7.3)VR7(4)	英、日		
112	初中上級	華		(47)	以FA-書(10)VR7(3)	英、日、葡文、葡文		
113	初中上級	華		(19)	以FA-書(10)VR8/2	英、日		
114	初中上級	華		(12)	英向(0)VR5(1)	英、日		
115	初中上級	華		(58)	英向(0)VR8(2)	英、日		
116	初中上級	華		(35)	英向(0)VR8(2)	英、日		
117	初中上級	華		(32)	以FA-書(10)VR6(6)	英、日		
118	初中上級	華		(59)	以FA-書(10)VR8/2	英、日		
119	初中上級	華		(28)	以FA-書(10)VR8/2	英、日		
120	初中上級	華	(26)	(67)	以FA-書(10)VR8(3)	英、日		
121	初中上級	華		(44)	英向(0)VR8/2	英、日		
122	初中上級	華	(20)	(51)	以FA-書(10)VR7(3)	英、日		
123	初中上級	華		(39)	以FA-書(10)VR8/2	英、日		
124	初中上級	華		(27)	英向(0)VR8(2)	英、日		
125	初中上級	華		(51)	英向(0)VR8(2)	英、日		
126	初中上級	華		(57)	以FA-書(7.3)VR7(4)	英、日		
127	初中上級	華	(18)	(46)	以FA-書(7.3)VR5(1)	英、日		
128	初中上級	華		(27)	以FA-書(7.3)VR8(1)	英、日		
129	初中上級	華		(20)	英向(0)VR5(2)	英、日		
130	初中上級	華		(38)	以FA-書(10)VR7(3)	英、日		
131	初中上級	華		(33)	以FA-書(7.3)VR5(4)	英、日		
132	初中上級	華		(34)	以FA-書(10)VR7(3)	英、日		
133	初中上級	華		(32)	以FA-書(10)VR8/2	英、日		
134	初中上級	華	138	73	英向(0)VR7(4)	英、日		
135	初中上級	華	171	(53)	以FA-書(7.3)VR8(1)	英、日		
136	初中上級	華	199	43	英向(0)VR8(2)	英、日		
137	初中上級	華	118	47	以FA-書(10)VR5(2)	英、日		
138	初中上級	華	134		以FA-書(7.3)VR5(1)	英、日		
139	初中上級	華		58	以FA-書(10)VR6(6)	英、日		
140	初中上級	華	117	62	英向(0)VR8(2)	英、日		
141	初中上級	華		(23)	英向(0)VR8(2)	英、日		
142	初中上級	華		85	以FA-書(7.3)VR7(1)	英、日		
143	初中上級	華		(63)	英向(0)VR8(2)	英、日		
144	初中上級	華		(91)	以FA-書(7.3)VR8(1)	英、日		
145	初中上級	華		69	英向(0)VR8(2)	英、日		
146	初中上級	華		78	英向(0)VR8(2)	英、日		
147	初中上級	華		92	以FA-書(7.3)VR6(4)	英、日		
148	初中上級	華	133	(73)	以FA-書(7.3)VR6(4)	英、日		
149	初中上級	華		(25)	英向(0)VR8(2)	英、日		
150	初中上級	華		139	(50)	以FA-書(10)VR6(3)	英、日	
151	初中上級	華		125	(51)	英向(0)VR8(2)	英、日	
152	初中上級	華		(10)	英向(0)VR8(2)	英、日		
153	初中上級	華		(14)	以FA-書(7.3)VR6(6)	英、日		
154	初中上級	華	119	(38)	英向(0)VR8(2)	英、日		
155	初中上級	華	179	304	英向(0)VR8(2)	英、日		
156	初中上級	華	93	(72)	以FA-書(10)VR6(6)	英、日		
157	初中上級	華	132	(57)	以FA-書(7.3)VR6(4)	英、日		
158	初中上級	華	177	(72)	以FA-書(7.3)VR6(4)	英、日		
159	初中上級	華		59	(70)	以FA-書(10)VR7(3)	英、日	
160	初中上級	華	149	(59)	英向(0)VR8(2)	英、日		

序號	西學漢語	類別	冊數	α 刊題 (冊)		卷目	說明、手寫刊題文字	備註
				1-12	13-24			
				卷目	冊數			
161	歐大伴道喜新	佛經上經	高平	(228)	(17)	摩訶輪(2)SV85(2)		
162	歐大伴道喜新	佛經上經	高平	(227)	(18)	摩訶輪(2)SV85(2)		
163	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(70)	以3A-卷(7)SV85(1)		
164	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(41)	摩訶輪(2)SV85(1)		
165	歐大伴道喜	佛經上經	佛	10.0	(48)	以3A-卷(10)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
166	歐大伴道喜	佛經上經	佛	27.0	(61)	以3A-卷(5)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
167	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(50)	摩訶輪(2)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
168	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(83)	以3A-卷(10)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
169	歐大伴道喜	佛經上經	佛	5.5	(20)	以3A-卷(2)SV85(1)		
170	歐大伴道喜	佛經上經	佛	8.0	(10)	摩訶輪(2)SV87(1)		
171	歐大伴道喜	佛經上經	佛	11.1	(16)	摩訶輪(2)SV85(1)		
172	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(110)	以3A-卷(7)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
173	歐大伴道喜	佛經上經	佛	10.8	5.8	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
174	歐大伴道喜	佛經上經	佛	20.8	(25.7)	以3A-卷(5)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
175	歐大伴道喜	佛經上經	佛	15.0	(116)	以3A-卷(7)SV85(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
176	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(17.7)	以3A-卷(7)SV85(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
177	歐大伴道喜	佛經上經	佛	10.7	(11.1)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
178	歐大伴道喜	佛經上經	佛	13.0	(15)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
179	歐大伴道喜	佛經上經	佛	13.5	(4.3)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
180	歐大伴道喜	佛經上經	佛	13.8	(20)	以3A-卷(7)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
181	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(16.8)	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
182	歐大伴道喜	佛經上經	佛	(110)	(6.9)	摩訶輪(2)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
183	歐大伴道喜	佛經上經	佛	16.8	(10.6)	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
184	歐大伴道喜	佛經上經	佛	12.0	(15.5)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
185	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(20)	以3A-卷(7)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
186	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(21)	以3A-卷(7)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
187	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(31)	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
188	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(21)	摩訶輪(2)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
189	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(4.3)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
190	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(22)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
191	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(1.0)	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
192	歐大伴道喜	佛經上經	佛	8.8	(10.2)	佛經(25)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
193	歐大伴道喜	佛經上經	佛	8.0	(11.1)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
194	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(20)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
195	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(5.7)	以3A-卷(7)SV85(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
196	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(10.2)	以3A-卷(7)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
197	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(21.1)	摩訶輪(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
198	歐大伴道喜	佛經上經	佛	5.7	(1.1)	以3A-卷(7)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
199	歐大伴道喜	佛經上經	佛	(14.0)	(31)	佛經(10)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
200	歐大伴道喜	佛經上經	佛	10.0	(8.8)	摩訶輪(2)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
201	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(15)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
202	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(10)	摩訶輪(2)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
203	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(1.0)	以3A-卷(10)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
204	歐大伴道喜	佛經上經	佛	5.8	(4.7)	以3A-卷(2)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
205	歐大伴道喜	佛經上經	佛	7.4	(5.6)	佛經(25)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
206	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(1.1)	以3A-卷(10)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
207	歐大伴道喜	佛經上經	佛	12.0	(7.0)	摩訶輪(2)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
208	歐大伴道喜	佛經上經	佛	(18.5)	(1.8)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
209	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(3.1)	佛經(10)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
210	歐大伴道喜	佛經上經	佛	14.1	(7.5)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
211	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(1.1)	佛經(10)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
212	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(6.0)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
213	歐大伴道喜	佛經上經	佛	13.0	(3.9)	以3A-卷(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
214	歐大伴道喜	佛經上經	佛	13.7	(4.6)	佛經(25)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
215	歐大伴道喜	佛經上經	佛	14.7	(4.2)	以3A-卷(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
216	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(5.0)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
217	歐大伴道喜	佛經上經	佛	17.0	(3.5)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
218	歐大伴道喜	佛經上經	佛	16.0	(8.0)	摩訶輪(2)SV85(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
219	歐大伴道喜	佛經上經	佛	15.0	(6.8)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
220	歐大伴道喜	佛經上經	佛	18.0	(4.8)	佛經(25)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
221	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(3.5)	佛經(7)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
222	歐大伴道喜	佛經上經	佛	(11.0)	(8.9)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
223	歐大伴道喜	佛經上經	佛	20.8	10.1	佛經(25)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
224	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(25.0)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
225	歐大伴道喜	佛經上經	佛	25.0	(21.6)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
226	歐大伴道喜	佛經上經	佛	21.5	(22.0)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
227	歐大伴道喜	佛經上經	佛	20.1	(11.0)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
228	歐大伴道喜	佛經上經	佛	27.2	(16.4)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
229	歐大伴道喜	佛經上經	佛	34.8	(13.0)	佛經(7)SV87(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
230	歐大伴道喜	佛經上經	佛	20.4	(23.0)	佛經(25)SV85(1)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
231	歐大伴道喜	佛經上經	佛	18.2	(17.7)	以3A-卷(7)SV87(4)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
232	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(9.9)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	
233	歐大伴道喜	佛經上經	佛		(8.0)	以3A-卷(10)SV87(2)	佛: 摩訶、次經、別目、佛經	

河橋 橋号	河川名称	河川	河川	α 距離 (m)		色澤	距離、単位等	備考
				上流	下流			
				位置	距離			
231	赤川上流	橋	30.0	(1.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(1)			
232	赤川上流	橋	35.1	(7.5)	α-Ka-橋(7.5)R7(1)			
233	赤川上流	橋	47.3	(6.1)	赤川橋(7.5)R8(0)			
237	赤川上流	橋	46.8	(7.1)	赤川橋(7.5)R8(0)			
238	赤川上流	橋	15.0	(0.4)	赤川橋(7.5)R8(0)			
239	赤川上流	橋	16.7	(7.1)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)			
219	赤川上流	橋	11.8	5.7	27.8	α-Ka-橋(7.5)R7(1)	橋：田原、深付橋	
211	赤川上流	橋	13.0	(8.8)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：上流	
242	赤川上流	橋	15.8	5.0	15.5	α-Ka-橋(10)R7(2)	橋：田原、深付橋	
243	赤川上流	橋	14.8	(4.6)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)			
244	赤川上流	橋	12.6	(4.0)	α-Ka-橋(7.5)R6(7)		橋：上流	
215	赤川上流	橋	11.7	(3.8)	α-Ka-橋(10)R6(3)		橋：田原、深付橋	
246	赤川上流	橋	15.6	(3.0)	赤川橋(10)R4(2)		橋：上流	
247	赤川上流	橋	13.6	(6.8)	赤川橋(10)R6(2)		橋：田原	
248	赤川上流	橋	14.3	(5.8)	赤川橋(10)R6(4)		橋：上流	
219	赤川上流	橋	11.1	(5.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)		橋：上流	
250	赤川上流	橋	11.2	(30.6)	α-Ka-橋(7.5)R7(1)			
251	赤川上流	橋	14.0	(30.3)	α-Ka-橋(7.5)R6(4)			
252	赤川上流	橋	15.0	(0.1)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：上流	
253	赤川上流	橋	15.2	(30.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)		橋：田原	
254	赤川上流	橋	13.1	(0.0)	α-Ka-橋(10)R6(3)		橋：田原	
251	赤川上流	橋	18.0	(32)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
256	赤川上流	橋	14.4	(4.6)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
257	赤川上流	橋	14.2	(5.1)	α-Ka-橋(10)R6(2)		橋：田原	
258	赤川上流	橋	15.0	(5.2)	赤川橋(7.5)R8(0)			
259	赤川上流	橋	15.8	(30.0)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
260	赤川上流	橋	11.7	(23.8)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
261	赤川上流	橋	10.0	(1.8)	α-Ka-橋(10)R6(3)		橋：田原	
262	赤川上流	橋	11.1	(7.8)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)		橋：田原	
263	赤川上流	橋	15.4	(15.8)	α-Ka-橋(10)R6(2)		橋：田原	
264	赤川上流	橋	11.0	(7.2)	赤川橋(10)R6(1)		橋：田原	
265	赤川上流	橋	11.8	(30)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
266	赤川上流	橋	14.0	(6.8)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
267	赤川上流	橋	21.0	(7.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)			
268	赤川上流	橋	5.5	(14.5)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原	
269	赤川上流	橋	5.1	(10)	赤川橋(10)R6(2)		橋：田原	
270	赤川上流	橋	5.3	(5.0)	赤川橋(10)R6(1)		橋：田原	
271	赤川上流	橋	4.0	(5.1)	α-Ka-橋(7.5)R6(1)		橋：田原	
272	赤川上流	橋	5.0	(5.0)	赤川橋(10)R6(2)		橋：田原	
273	赤川上流	橋	5.0	(5.0)	赤川橋(7.5)R7(4)		橋：田原	
274	赤川上流	橋	6.0	(16.7)	α-Ka-橋(10)R6(3)		橋：田原、深付橋	
275	赤川上流	橋	5.2	(18.8)	α-Ka-橋(10)R7(2)		橋：田原、深付橋	
276	赤川上流	橋	8.0	(1.8)	赤川橋(10)R6(2)		橋：田原	
277	赤川上流	橋	18.0	12.7	11.2	α-Ka-橋(7.5)R7(2)	橋：田原	
278	赤川上流	橋	13.8	11.3	10.2	α-Ka-橋(10)R7(2)	橋：田原	
279	赤川上流	橋	15.8	(7.3)	赤川橋(7.5)R6(5)			
280	赤川上流	橋	17.8	(5.0)	赤川橋(7.5)R7(0)			
281	赤川上流	橋	15.8	(5.1)	赤川橋(7.5)R8(0)			
282	赤川上流	橋	18.3	(8.8)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)			
283	赤川上流	橋	19.0	(9.2)	赤川橋(7.5)R7(4)			
284	赤川上流	橋	19.1	(6.4)	α-Ka-橋(7.5)R7(2)		橋：田原	
285	赤川上流	橋	18.1	(5.8)	赤川橋(10)R6(3)			
286	赤川上流	橋	17.8	(6.0)	赤川橋(7.5)R7(4)			
287	赤川上流	橋	16.2	(7.3)	赤川橋(10)R8(0)			
288	赤川上流	橋	15.4	(9.6)	赤川橋(7.5)R8(0)		橋：田原	
289	赤川上流	橋	16.2	(8.0)	赤川橋(7.5)R6(5)		橋：田原	
290	赤川上流	橋		11.7	(7.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(1)	橋：田原	
291	赤川上流	橋		(12)	(1.0)	赤川橋(7.5)R7(0)	橋：田原	
292	赤川上流	橋		(12.0)	(5.0)	α-Ka-橋(10)R7(2)	橋：田原	
293	赤川上流	橋		(11.7)	(4.0)	赤川橋(7.5)R7(2)	橋：田原	
294	赤川上流	橋		(11.8)	(4.8)	赤川橋(10)R6(3)	橋：田原	
295	赤川上流	橋		(11.8)	(1.5)	赤川橋(7.5)R7(4)	橋：田原	
296	赤川上流	橋		(16.0)	(3.0)	α-Ka-橋(7.5)R7(4)	橋：田原	
297	赤川上流	橋	10.0		(9.1)	α-Ka-橋(7.5)R6(4)		
298	赤川上流	橋	11.0		(6.4)	α-Ka-橋(7.5)R6(4)		
299	赤川上流	橋	12.8		(6.3)	α-Ka-橋(10)R7(2)		
300	赤川上流	橋	13.8		(5.0)	赤川橋(10)R6(3)		
301	赤川上流	橋	14.0		(7.5)	赤川橋(10)R8(0)		
302	赤川上流	橋	14.0		(4.8)	赤川橋(10)R4(1)		
303	赤川上流	橋	12.8	4.0	5.0	α-Ka-橋(7.5)R7(2)		
304	赤川上流	橋	14.3		6.3	赤川橋(7.5)R8(0)		
305	赤川上流	橋	15.8		(9.2)	α-Ka-橋(7.5)R7(2)	橋：田原	
306	赤川上流	橋	14.3	3.0	6.3	α-Ka-橋(7.5)R7(2)	橋：田原	

河橋 橋号	河名・渡橋名	方向	材料	α 距離 (mm)			色澤	形質、断面・特殊立上	備考
				L1道		L2道			
				位置	距離				
307	赤川上流	橋	11.5	(7.1)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)			
308	赤川上流	橋	18.1	7.8	9.7	紅・黄褐色(10.1)R7(2)	橋・保形書		
309	赤川上流	橋	18.3	6.9	8.2	紅・黄褐色(10.1)R7(2)			
310	赤川上流	橋	18.7	(7.1)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)			
311	赤川上流	橋	30.2	(9.8)		紅・黄褐色(10.1)R7(2)			
312	赤川上流	橋	30.7	(11.2)		灰黄色(10.1)R8(1)			
313	赤川上流	橋	31.0	(11.0)		紅・黄褐色(10.1)R7(2)	橋・L1道		
314	赤川上流	橋	31.0	(10.5)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・L1道		
315	赤川上流	橋	43.3	10.3	15.5	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・凹縁・断面		
316	赤川上流	橋	31.4	(11.1)		黄・黄褐色(5)			
317	赤川上流	橋	31.6	(7.0)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)			
318	赤川上流	橋	31.8	(11.1)		紅・黄褐色(10.1)R7(2)			
319	赤川上流	橋	37.4	(6.8)		黄・黄褐色(5)			
320	赤川上流	橋	38.0	(8.5)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・断面		
321	赤川上流	橋	38.8	(10.7)		灰黄色(7.5)R6(4)			
322	赤川上流	橋	31.1	(6.2)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・L1道・L2		
323	赤川上流	橋		(1.3)		紅・黄褐色(2.5)R5(7)	橋・L1道・L2		
324	赤川上流	橋		(3.3)		紅・黄褐色(2.5)R4(7)	橋・L1道・L2		
325	赤川上流	橋		(4.6)		黄褐色(2.5)R7(7)	橋・L1道・L2		
326	赤川上流	橋		(4.2)		紅・黄褐色(2.5)R6(4)	橋・L1道・L2		
327	赤川上流	橋		(4.9)		紅・黄褐色(2.5)R5(7)	橋・L1道・L2		
328	赤川上流	橋		(4.9)		紅・黄褐色(2.5)R6(7)	橋・L1道・L2		
329	赤川上流	橋		(4.4)		黄褐色(2.5)R5(7)	橋・L1道・L2		
330	赤川上流	橋		(4.9)		紅・黄褐色(2.5)R6(4)	橋・L1道・L2		
331	赤川上流	橋		(4.7)		紅・黄褐色(2.5)R6(4)	橋・L1道・L2		
332	赤川上流	橋		(4.9)		紅・黄褐色(2.5)R5(7)	橋・L1道・L2		
333	赤川上流	橋		(4.9)		紅・黄褐色(2.5)R6(7)	橋・L1道・L2		
334	赤川上流	橋		(10.7)		紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・凹縁		
335	赤川上流	橋		(20.1)		黄・黄褐色(5)			
336	赤川上流	橋		(13.8)		黄・黄褐色(5)			
337	赤川上流	橋		(15.8)	4.1	25.2	紅・黄褐色(7.5)R6(7)	橋・凹縁・保形書	
338	赤川上流	橋		(15.8)		(3.1)	紅・黄褐色(7.5)R6(4)		
339	赤川上流	橋		(15.8)		(1.0)	紅・黄褐色(7.5)R7(2)		
340	赤川上流	橋		(5.0)		(4.3)	灰黄色(10.1)R5(2)	橋・保形書	
341	赤川上流	橋		(20.0)		(10.1)	黄・黄褐色(5)	橋・L1道・L2	
342	赤川上流	橋		(17.0)		(10.2)	紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・L1道・L2	
343	赤川上流	橋		(13.0)		(4.8)	紅・黄褐色(7.5)R6(7)	橋・L1道・L2	
344	赤川上流	橋		(11.7)		(1.7)	黄・黄褐色(5)	橋・L1道・L2	
345	赤川上流	橋		(5.0)		(4.4)	紅・黄褐色(10.1)R7(1)		
346	赤川上流	橋		(11.6)	5.0	10.4	紅・黄褐色(7.5)R7(1)		
347	赤川上流	橋		(14.7)		(8.7)	黄・黄褐色(5)	橋・L1道	
348	赤川上流	橋		(17.7)		(10.3)	黄・黄褐色(5)	橋・保形書	
349	赤川上流	橋		(7.0)		(3.1)	黄・黄褐色(5)		
350	赤川上流	橋		(13.0)	4.0	14.5	灰黄色(10.1)R8(1)		
351	赤川上流	橋		(16.6)		(16.6)	灰黄色(10.1)R5(2)	橋・L1道・L2・凹縁・断面・保形書・L1道	
352	赤川上流	橋		(19.2)		(12.0)	灰黄色(10.1)R5(2)	橋・L1道・L2・凹縁・断面・保形書	
353	赤川上流	橋		(15.0)		(15.0)	灰黄色(10.1)R8(1)	橋・凹縁・断面・保形書	
354	赤川上流	橋		(11.1)		(11.1)	紅・黄褐色(10.1)R7(2)	橋・凹縁・断面	
355	赤川上流	橋		(4.6)		(4.6)	灰黄色(10.1)R8(1)	橋・凹縁・断面	
356	赤川上流	橋		(17.3)		(14.7)	紅・黄褐色(2.5)R6(4)		
357	赤川上流	橋		(4.8)		(4.8)	灰黄色(10.1)R4(1)		
358	赤川上流	橋		(2.8)		(2.8)	紅・黄褐色(7.5)R7(2)		
359	赤川上流	橋		(2.7)		(2.7)	紅・黄褐色(10.1)R7(2)		
360	赤川上流	橋		(7.8)		(7.8)	紅・黄褐色(10.1)R7(2)	橋・断面	
361	赤川上流	橋		(8.1)		(8.1)	黄・黄褐色(5)	橋・字	
362	赤川上流	橋		(7.0)		(7.0)	灰黄色(10.1)R5(2)		
363	赤川上流	橋		(5.0)		(5.0)	黄褐色(2.5)R5(7)		
364	赤川上流	橋		(16.0)		(16.0)	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・L1道・L2・凹縁・断面・L1道・L2	
365	赤川上流	橋		(16.0)	8.8	21.0	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・L1道・L2・凹縁・断面・L1道・L2・断面	
366	赤川上流	橋		(15.0)		(6.1)	黄・黄褐色(5)		
367	赤川上流	橋		(6.8)		(7.2)	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・断面	
368	赤川上流	橋		(9.3)		(9.3)	黄・黄褐色(5)	橋・L1道	
369	赤川上流	橋		(13.0)	5.9	15.0	黄・黄褐色(5)	橋・断面・橋・L1道・L2・凹縁・断面・L1道・L2	
370	赤川上流	橋		(8.7)		(8.7)	紅・黄褐色(7.5)R5(7)	橋・L1道・L2・凹縁・断面	
371	赤川上流	橋		(6.0)		(6.0)	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・L1道・L2・凹縁・断面	
372	赤川上流	橋		(12.5)		(6.1)	黄褐色(2.5)R5(7)		
373	赤川上流	橋		(11.7)	10.1	16.2	紅・黄褐色(7.5)R6(7)	橋・断面・L1道・L2・凹縁・断面	
374	赤川上流	橋		(6.8)		(3.8)	灰黄色(10.1)R6(2)		
375	赤川上流	橋		(3.6)		(3.6)	紅・黄褐色(7.5)R7(1)	橋・L1道・L2・凹縁・断面・L1道・L2・凹縁・断面	
376	赤川上流	橋		(8.0)		(8.0)	黄・黄褐色(5)		
377	赤川上流	橋		(16.1)		(4.8)	紅・黄褐色(7.5)R6(4)	橋・橋・断面	
378	赤川上流	橋		(12.8)		(1.1)	紅・黄褐色(7.5)R5(7)	橋・L1道・L2・凹縁・断面	
379	赤川上流	橋		(7.3)		(7.3)	紅・黄褐色(10.1)R7(2)	橋・断面・L1道・L2・凹縁・断面	

河橋 番号	河川名称	河川	河川	α 距離 (km)			色澤	湖沼、水辺の有様など	備考
				L1道	L2道	L3道			
280	赤川上流	豊		17.3		0222	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、浅瀬	
281	赤川上流	山				0511	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、割目	
282	赤川上流	豊				1375	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、磯田川流	
283	赤川上流	山		6.5		1041	赤川上流(10)106(3)		
284	赤川上流	豊				0610	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、へつら川流	
285	赤川上流	豊		15.1		1741	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
286	赤川上流	豊		17.5	4.3	2081	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、摩子	
287	赤川上流	豊		18.8	5.2	2881	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、摩子、磯田	
288	赤川上流	豊		16.9		0610	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、磯田	
289	赤川上流	豊		18.2		0511	赤川上流(10)106(3)	赤川上流	
290	赤川上流	豊		19.8		1655	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
291	赤川上流	豊		20.8		1723	赤川上流(10)106(3)		
292	赤川上流	豊		23.1		0610	赤川上流(5)105(5)		
293	赤川上流	豊		16.9		1341	赤川上流(7)106(4)		
294	赤川上流	豊		15.0		0010	赤川上流(5)107(4)		
295	赤川上流	豊			5.0	1017	赤川上流(10)106(3)	赤川上流	
296	赤川上流	豊			5.1	1008	赤川上流(5)	赤川上流	
297	赤川上流	豊			7.5	1841	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
298	赤川上流	山		17.6	7.9	1410	赤川上流(10)107(3)		
299	赤川上流	山		17.1	7.1	1671	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、磯田川流、赤川、割目	
300	赤川上流	山		19.5		0611	赤川上流(10)107(2)		
301	赤川上流	山		20.8		0851	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
302	赤川上流	山			16.6	0851	赤川上流(7)106(4)		
303	赤川上流	山		25.0		0011	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
304	赤川上流	山		19.8	6.6	0671	赤川上流(7)		
305	赤川上流	山		15.1	9.1	2731	赤川上流(5)	赤川上流、赤川	
306	赤川上流	山				0251	赤川上流(5)105(5)	赤川上流	
307	赤川上流	山		16.9		1151	赤川上流(5)105(5)	赤川上流、磯田川流、赤川上流	
308	赤川上流	山				0711	赤川上流(10)107(1)	赤川上流	
309	赤川上流	山		10.6		0610	赤川上流(7)106(4)		
310	赤川上流	山		17.9		0881	赤川上流(10)106(3)		
311	赤川上流	山		15.2		0851	赤川上流(7)106(4)		
312	赤川上流	山		19.7		1051	赤川上流(10)107(2)	赤川上流	
313	赤川上流	山			11.0	0010	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、磯田	
314	赤川上流	山		4.5		0251	赤川上流(6)	赤川上流、赤川	
315	赤川上流	山		5.8		0728	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、磯田、赤川上流	
316	赤川上流	山		22.2		1181	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、磯田、赤川上流、赤川上流、赤川上流、赤川上流	
317	赤川上流	山		17.2		1151	赤川上流(10)107(2)	赤川上流、赤川上流	
318	赤川上流	山			11.1	1171	赤川上流(10)106(3)	赤川上流、赤川上流	
319	赤川上流	山		13.1		0661	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、赤川上流、赤川上流	
320	赤川上流	山		18.8		0611	赤川上流(7)	赤川上流	
321	赤川上流	山				0871	赤川上流(2)107(2)	赤川上流	
322	赤川上流	山		20.8		1050	赤川上流(7)106(4)	赤川上流、赤川上流	
323	赤川上流	山		18.5		1062	赤川上流(7)106(4)	赤川上流	
324	赤川上流	山		24.4		0810	赤川上流(10)107(4)	赤川上流	
325	赤川上流	山				0831	赤川上流(10)107(3)	赤川上流、赤川上流、赤川上流	
326	赤川上流	山		16.5		0810	赤川上流(5)105(5)		
327	赤川上流	山			6.0	0571	赤川上流(5)105(5)		
328	赤川上流	山				1131	赤川上流(10)106(3)	赤川上流	
329	赤川上流	山				1311	赤川上流(6)		
330	赤川上流	山				0351	赤川上流(7)106(4)		
331	赤川上流	山		10.5		1110	赤川上流(5)	赤川上流、割目	
332	赤川上流	山			6.1	1161	赤川上流(8)		
333	赤川上流	山			9.6	1171	赤川上流(6)		
334	赤川上流	山		7.1	5.1	1171	赤川上流(10)106(3)		
335	赤川上流	山			7.0	1211	赤川上流(10)106(3)		
336	赤川上流	山				0271	赤川上流(10)106(3)		
337	赤川上流	山				0231	赤川上流(5)		
338	赤川上流	山			5.0	0441	赤川上流(8)		
339	赤川上流	山		13.8		1771	赤川上流(7)106(4)		
340	赤川上流	山			7.8	1311	赤川上流(5)		
341	赤川上流	山		16.7		0831	赤川上流(7)106(4)		
342	赤川上流	山		25.2		0811	赤川上流(7)106(4)		
343	赤川上流	山		21.6		1771	赤川上流(10)107(2)		
344	赤川上流	山			5.0	1401	赤川上流(5)105(5)		
345	赤川上流	山			7.8	0521	赤川上流(5)105(5)		
346	赤川上流	山			9.8	0921	赤川上流(10)106(3)		
347	赤川上流	山				1261	赤川上流(10)106(3)	赤川上流	
348	赤川上流	山				1461	赤川上流(5)105(5)		
349	赤川上流	山		14.8		1121	赤川上流(10)106(3)	赤川上流	
350	赤川上流	山				0441	赤川上流(5)105(5)	赤川上流	
351	赤川上流	山		17.8		0771	赤川上流(5)	赤川上流、赤川上流	
352	赤川上流	山		10.6		0741	赤川上流(7)106(4)		

河橋 番号	河名	河川	河川	a 距離 (km)		色澤	河原、主な利用状況	備考
				a 距離 (km)				
				上流	下流			
152	赤川	赤川	赤川	19.1	(12.0)	赤川(赤川)105-5	赤川	
151	赤川	赤川	赤川	15.9	(7.2)	赤川(赤川)104-2	赤川	
153	赤川	赤川	赤川	10.9	(6.6)	赤川(赤川)105-6	赤川	
154	赤川	赤川	赤川	18.4	(6.4)	赤川(赤川)106-4	赤川	
157	赤川	赤川	赤川	13.3	(8.0)	赤川(赤川)105-7	赤川	
158	赤川	赤川	赤川	17.6	(8.1)	赤川(赤川)106-3	赤川	
159	赤川	赤川	赤川	18.6	(5.5)	赤川(赤川)105-5	赤川	
159	赤川	赤川	赤川	7.9	(4.8)	赤川(赤川)104-2	赤川	
161	赤川	赤川	赤川	8.4	(5.4)	赤川(赤川)105-6	赤川	
162	赤川	赤川	赤川	7.0	(8.7)	赤川(赤川)105-6	赤川	
163	赤川	赤川	赤川	10.6	(4.1)	赤川(赤川)104-2	赤川	
164	赤川	赤川	赤川	12.7	(8.3)	赤川(赤川)105-4	赤川	
165	赤川	赤川	赤川	9.4	(7.9)	赤川(赤川)105-4	赤川	
166	赤川	赤川	赤川	20.9	(1.5)	赤川(赤川)104-2	赤川	
167	赤川	赤川	赤川	18.1	(10.0)	赤川(赤川)105-6	赤川	
168	赤川	赤川	赤川	21.6	(5.4)	赤川(赤川)106-4	赤川	
169	赤川	赤川	赤川	22.0	(7.1)	赤川(赤川)104-2	赤川	
170	赤川	赤川	赤川	10.1	(8.2)	赤川(赤川)105-6	赤川	
171	赤川	赤川	赤川	28.6	(4.6)	赤川(赤川)104-2	赤川	
172	赤川	赤川	赤川	12.6	(4.4)	赤川(赤川)105-4	赤川	
173	赤川	赤川	赤川	10.0	(3.1)	赤川(赤川)104-2	赤川	
174	赤川	赤川	赤川	5.0	(8.7)	赤川(赤川)105-5	赤川	
175	赤川	赤川	赤川	4.6	(2.6)	赤川(赤川)106-3	赤川	
176	赤川	赤川	赤川	7.5	(2.5)	赤川(赤川)105-5	赤川	
177	赤川	赤川	赤川	3.4	(2.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
178	赤川	赤川	赤川	11.0	(7.5)	赤川(赤川)105-4	赤川	
179	赤川	赤川	赤川	13.9	5.8	赤川(赤川)104-2	赤川	
180	赤川	赤川	赤川	14.9	(2.8)	赤川(赤川)105-5	赤川	
181	赤川	赤川	赤川	11.9	(3.1)	赤川(赤川)105-4	赤川	
182	赤川	赤川	赤川	4.8	(8.0)	赤川(赤川)107-2	赤川	
183	赤川	赤川	赤川	15.7	(8.0)	赤川(赤川)105-4	赤川	
184	赤川	赤川	赤川	20.7	(10.3)	赤川(赤川)107-2	赤川	
185	赤川	赤川	赤川	12.1	(10.1)	赤川(赤川)105-5	赤川	
186	赤川	赤川	赤川	15.8	(13.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
187	赤川	赤川	赤川	10.0	(2.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
188	赤川	赤川	赤川	21.6	(5.2)	赤川(赤川)105-4	赤川	
189	赤川	赤川	赤川	6.2	(5.1)	赤川(赤川)103-1	赤川	
190	赤川	赤川	赤川	9.2	(2.8)	赤川(赤川)107-2	赤川	
191	赤川	赤川	赤川	7.8	(2.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
192	赤川	赤川	赤川	16.9	(11.2)	赤川(赤川)105-6	赤川	
193	赤川	赤川	赤川		(2.1)	赤川(赤川)105-4	赤川	
194	赤川	赤川	赤川	22.8	(2.8)	赤川(赤川)106-4	赤川	
195	赤川	赤川	赤川	20.9	(8.5)	赤川(赤川)107-2	赤川	
196	赤川	赤川	赤川	15.7	(16.6)	赤川(赤川)105-5	赤川	
197	赤川	赤川	赤川	13.9	6.0	赤川(赤川)106-4	赤川	
198	赤川	赤川	赤川	11.1	4.5	赤川(赤川)105-4	赤川	
199	赤川	赤川	赤川	7.0	(3.9)	赤川(赤川)105-4	赤川	
200	赤川	赤川	赤川		(11.9)	赤川(赤川)107-2	赤川	
201	赤川	赤川	赤川	11.4	(4.4)	赤川(赤川)106-3	赤川	
202	赤川	赤川	赤川	15.8	(2.7)	赤川(赤川)105-5	赤川	
203	赤川	赤川	赤川	16.9	(4.8)	赤川(赤川)104-2	赤川	
204	赤川	赤川	赤川	20.1	(1.9)	赤川(赤川)107-2	赤川	
205	赤川	赤川	赤川	21.8	(3.1)	赤川(赤川)105-5	赤川	
206	赤川	赤川	赤川	25.8	(3.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
207	赤川	赤川	赤川		3.3	赤川(赤川)104-2	赤川	
208	赤川	赤川	赤川	11.7	(5.2)	赤川(赤川)107-2	赤川	
209	赤川	赤川	赤川	13.8	(5.2)	赤川(赤川)105-5	赤川	
210	赤川	赤川	赤川	5.3	(8.0)	赤川(赤川)105-5	赤川	
211	赤川	赤川	赤川	5.4	(3.7)	赤川(赤川)105-5	赤川	
212	赤川	赤川	赤川	18.1	12.4	赤川(赤川)106-4	赤川	
213	赤川	赤川	赤川	9.8	(5.6)	赤川(赤川)107-2	赤川	
214	赤川	赤川	赤川	5.6	2.2	赤川(赤川)107-2	赤川	
215	赤川	赤川	赤川	5.9	6.2	赤川(赤川)107-2	赤川	
216	赤川	赤川	赤川		(11.4)	赤川(赤川)104-2	赤川	
217	赤川	赤川	赤川	10.9	(5.1)	赤川(赤川)105-5	赤川	
218	赤川	赤川	赤川		(23.4)	赤川(赤川)104-2	赤川	
219	赤川	赤川	赤川	16.9	(11.5)	赤川(赤川)105-4	赤川	
220	赤川	赤川	赤川	15.2	(4.0)	赤川(赤川)107-2	赤川	
221	赤川	赤川	赤川	17.8	(5.0)	赤川(赤川)105-5	赤川	
222	赤川	赤川	赤川	5.2	(11.1)	赤川(赤川)105-5	赤川	
223	赤川	赤川	赤川	25.6	(10.1)	赤川(赤川)106-3	赤川	
224	赤川	赤川	赤川		(3.1)	赤川(赤川)105-4	赤川	
225	赤川	赤川	赤川		(5.0)	赤川(赤川)105-4	赤川	

河川 番号	河川名称	河川	河川	a 距離 (km)		色澤	湖沼、水辺の有無など	備考
				上遊	下流			
325	上野43	赤川上流	準		8.0	(18)	柳木橋(2)SY85(準)	
327	上野45	赤川上流	準			(38)	石巻橋(1)SY85(準)	橋、魚目
328	上野45	赤川上流	準	(27.6)		(51)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、魚目、沈殿
329	上野47	赤川上流	準		16.1	(22.1)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、沈殿
330	上野47	赤川上流	準			(51)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、魚目、沈殿
331	上野47	赤川上流	準			(51)	石巻橋(2)SY85(準)	
332	上野47	赤川上流	準			(51)	石巻橋(2)SY85(準)	
333	上野48	赤川上流	準		11.8	(22.3)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
334	上野48	赤川上流	準		15.3	36.7	石巻橋(2)SY85(準)	橋、懸崖、沈殿
335	上野48	赤川上流	準		11.6	(6.8)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
336	上野49	赤川上流	準			(7.2)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
337	上野49	赤川上流	準		20.5	(8.9)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
338	上野49	赤川上流	準			(7.6)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
339	上野49	赤川上流	準			(2.4)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
340	上野50	赤川上流	準		12.0	(13.3)	石巻橋(2)SY85(準)	
341	上野50	赤川上流	準		15.1	5.8	石巻橋(2)SY85(準)	橋、阿波、タケノコ、懸崖、川底
342	上野50	赤川上流	準		10.0	6.1	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
343	上野50	赤川上流	準		15.0	4.8	石巻橋(2)SY87(準)	橋、川底
344	上野50	赤川上流	準		15.0	5.1	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
345	上野52	赤川上流	準		14.8	(4.5)	石巻橋(1)SY85(準)	
346	上野52	赤川上流	準		11.8	(5.1)	石巻橋(2)SY85(準)	
347	上野52	赤川上流	準		13.8	(6.8)	石巻橋(2)SY85(準)	
348	上野52	赤川上流	準			(4.3)	石巻橋(2)SY87(準)	橋、川底
349	上野52	赤川上流	準		13.4	(8.7)	石巻橋(2)SY85(準)	
350	上野52	赤川上流	準		18.5	9.6	石巻橋(2)SY87(準)	
351	上野52	赤川上流	準			(2.1)	石巻橋(1)SY87(準)	
352	上野53	赤川上流	準			(3.8)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
353	上野53	赤川上流	準			(5.0)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
354	上野54	赤川上流	準			(1.3)	石巻橋(2)SY85(準)	
355	上野55	赤川上流	準			(4.8)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
356	上野55	赤川上流	準		8.9	(2.7)	石巻橋(2)SY85(準)	
357	上野55	赤川上流	準			(3.0)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、魚目
358	上野57	赤川上流	準			(1.3)	石巻橋(2)SY87(準)	橋、川底
359	上野59	赤川上流	準		8.8	(2.3)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
360	上野58	赤川上流	準			(6.5)	石巻橋(1)SY85(準)	橋、川底
361	上野59	赤川上流	準			(2.8)	石巻橋(2)SY85(準)	
362	上野59	赤川上流	準			(2.5)	石巻橋(2)SY85(準)	
363	上野59	赤川上流	準			(7.8)	石巻橋(1)SY87(準)	
364	上野59	赤川上流	準		18.1	(18.3)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
365	上野60	赤川上流	準		13.8	(5.2)	石巻橋(2)SY87(準)	
366	上野60	赤川上流	準		22.8	(3.8)	石巻橋(2)SY85(準)	
367	上野60	赤川上流	準		22.4	(8.4)	石巻橋(2)SY87(準)	
368	上野60	赤川上流	準			(6.6)	石巻橋(2)SY85(準)	
369	上野60	赤川上流	準			(6.0)	石巻橋(2)SY85(準)	
370	上野60	赤川上流	準			(3.0)	石巻橋(2)SY85(準)	
371	上野61	赤川上流	準		18.8	(5.8)	石巻橋(1)SY85(準)	橋、川底
372	上野61	赤川上流	準			(9.7)	柳木橋(2)SY85(準)	
373	上野62	赤川上流	準			(2.8)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、魚目
374	上野63	赤川上流	準		28.0	(6.5)	石巻橋(1)SY85(準)	橋、魚目
375	上野63	赤川上流	準			(18.1)	石巻橋(2)SY85(準)	
376	上野64	赤川上流	準		14.4	(6.3)	石巻橋(2)SY85(準)	
377	上野64	赤川上流	準		11.5	(7.1)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
378	上野66	赤川上流	準			(1.5)	石巻橋(2)SY85(準)	
379	上野67	赤川上流	準		16.8	(4.0)	石巻橋(2)SY87(準)	
380	上野67	赤川上流	準		17.8	(5.0)	石巻橋(2)SY85(準)	
381	上野68	赤川上流	準			(5.5)	石巻橋(1)SY85(準)	
382	上野68	赤川上流	準			(1.2)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、魚目
383	上野68	赤川上流	準			(1.5)	石巻橋(1)SY85(準)	
384	上野68	赤川上流	準			(5.7)	石巻橋(2)SY85(準)	
385	上野68	赤川上流	準			(4.3)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
386	上野69	赤川上流	準		15.8	(8.3)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
387	上野70	赤川上流	準			(3.2)	石巻橋(2)SY87(準)	
388	上野70	赤川上流	準			(9.2)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
389	上野70	赤川上流	準			(5.4)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
390	上野70	赤川上流	準		11.6	(6.4)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
391	上野71	赤川上流	準			(10.4)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
392	上野71	赤川上流	準			(10.0)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
393	上野71	赤川上流	準			(11.6)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
394	上野71	赤川上流	準			(3.0)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
395	上野71	赤川上流	準			(5.0)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
396	上野71	赤川上流	準			(3.6)	石巻橋(1)SY87(準)	橋、川底
397	上野72	赤川上流	準		20.1	(5.1)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底
398	上野72	赤川上流	準		14.3	(9.1)	石巻橋(2)SY85(準)	橋、川底

詞類 詞號	詞義漢語	方音	韻目	u 聲韻 (5a)		色澤	韻別：平水/等韻/古	備考	
				韻目					
				上韻	聲韻				
369	土韻2	中平上聲	韻	35.4	(8.8)	乃 (3Y37'8)			
369	土韻2	平上上聲	韻		7.3	(8.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y106'2)		
361		中平上聲	韻	(17.5)	(7.1)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：更平，攝韻流注文、韻定	
362		平上上聲	韻		(4.7)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻	
363		中平上聲	韻	(30.4)	(6.1)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)			
364	土韻74	中平上聲	韻	(18.5)	(4.0)	理 (3Y) 韻 (6)			
365		中平上聲	韻		(2.5)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)			
366		中平上聲	韻		5.4	(4.3)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		
367		平上上聲	韻		5.3	(6.1)	既 (3Y) 韻 (10Y106'2)		
368	土韻78	中平上聲	韻	(1.18)	(1.8)	理 (3Y) 韻 (6)		係：韻定	
369		中平上聲	韻	12.7	(10.5)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻	
369		中平上聲	韻	17.7	(5.5)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平，攝韻流注文	
361		平上上聲	韻	(17.5)	(2.1)	既 (3Y) 韻 (10Y104'2)		係：平韻	
362		平上上聲	韻	(14.8)	(1.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)			
363	土韻81	中平上聲	韻	22.8	(1.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)			
364		中平上聲	韻		(6.0)	理 (3Y) 韻 (6)			
365		中平上聲	韻		(8.5)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻、韻	
366		平上上聲	韻		5.6	(6.0)	既 (3Y) 韻 (10Y106'2)		
367		平上上聲	韻		6.6	(2.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		
368		中平上聲	韻		(4.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：平、平、平、平、平、平、平、平	
369		中平上聲	韻		(3.6)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
329		中平上聲	韻	12.5	(5.8)	乃 (3Y) 韻 (8)		係：平、平、平、平、平、平、平、平	
321	土韻85	平上上聲	韻	45.3	(15.4)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：平韻	
322		平上上聲	韻	14.5	(15.0)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
323		中平上聲	韻		(8.1)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
321		中平上聲	韻		(1.8)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
325	土韻86	中平上聲	韻	16.9	5.4	27.2	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
326		平上上聲	韻	(17.2)	(7.8)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)			
327		中平上聲	韻		(5.0)	既 (3Y) 韻 (10Y104'2)			
328		中平上聲	韻		5.4	(5.7)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
329		中平上聲	韻	(12.7)	(5.1)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y106'2)			
330		中平上聲	韻		(2.1)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
331	土韻88	平上上聲	韻		(2.8)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
332		平上上聲	韻		(5.7)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
333		中平上聲	韻	11.8	(7.0)	理 (3Y) 韻 (6)			
331	土韻90	中平上聲	韻	17.5	(12)	乃 (3Y) 韻 (8)			
335		中平上聲	韻	11.5	(5.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)			
336	土韻91	平上上聲	韻	5.4	(5.0)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：上韻	
337		平上上聲	韻	(16.5)	(3.4)	既 (3Y) 韻 (10Y104'2)		係：更平	
338		中平上聲	韻	18.8	(6.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)			
339	土韻93	中平上聲	韻	(22.7)	(8.0)	乃 (3Y) 韻 (8)			
340		平上上聲	韻		6.2	(3.3)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		
341		平上上聲	韻		8.6	(5.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		
342		中平上聲	韻	16.1	5.1	25.3	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
343	土韻95	中平上聲	韻	18.7	(11.7)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)			
344		中平上聲	韻		5.5	(8.2)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		
345	土韻96	平上上聲	韻		6.4	(1.2)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		
346		中平上聲	韻	(16.8)	(3.5)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)			
347	土韻97	平上上聲	韻	(17.6)	(4.8)	既 (3Y) 韻 (10Y104'2)			
348		平上上聲	韻		8.8	(12.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
349		中平上聲	韻	6.0	(7.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
350		中平上聲	韻	20.8	(8.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
351		中平上聲	韻	18.8	(1.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
352		平上上聲	韻	17.5	(5.0)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)			
353		中平上聲	韻	19.0	(12.5)	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
354		中平上聲	韻	11.8	(4.2)	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
355		中平上聲	韻	12.8	(3.6)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)			
356		中平上聲	韻	16.5	(3.6)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
357		平上上聲	韻	8.2	(3.2)	理 (3Y) 韻 (6)			
358		中平上聲	韻		(5.2)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
359		中平上聲	韻	12.2	(3.0)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
360		中平上聲	韻	12.9	(1.5)	乃 (3Y) 韻 (8)			
361		平上上聲	韻	11.0	(4.8)	既 (3Y) 韻 (10Y106'2)			
362		平上上聲	韻	15.2	(7.8)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
363		中平上聲	韻	22.9	(4.0)	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
364		中平上聲	韻		(11.7)	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
365		中平上聲	韻		7.9	(8.0)	乃 (3Y) 韻 (8)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
366		平上上聲	韻		15.2	(5.8)	既 (3Y) 韻 (10Y106'2)		
367		平上上聲	韻		16.2	(3.5)	理 (3Y) 韻 (6)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平
368		中平上聲	韻	14.2	(5.2)	既 (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
369		中平上聲	韻	20.7	(3.0)	既 (3Y) 韻 (10Y105'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
370		中平上聲	韻	22.6	(11.3)	ㄥ (3Y) 韻 (10Y107'2)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	
371		平上上聲	韻		(9.0)	乃 (3Y) 韻 (8)		係：更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平、更平	

可動 番号	西鉄運轉区	方向	種別	α 距離 (km)			色紙	印刷、手紙の有無など	備考
				L1道	L2道				
					電区	距離			
672	池上線	準		17.2	(25.1)	α-KA-特7.3Y107-1	紙：明細文、ツツメ、...		
673	池上線	準		14.5	(18.3)	α-KA-特7.3Y106-1	紙：明細文、ツツメ、...		
674	池上線	準		128	(9.7)	α-KA-特7.3Y105-1	紙：明細文、...		
675	池上線	準		128	8.6	準-7.3Y107-6	紙：明細文、...		
676	池上線	準		126	(2.8)	α-KA-準10V106-3	紙：...		
677	池上線	準		148	(4.5)	α-KA-準10V107-3	紙：...		
678	池上線	準		139	(5.3)	α-KA-特7.3Y107-1	紙：ツツメ、...		
679	池上線	準		11.5	5.1	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
680	池上線	準		19.7	(7.8)	準10V108-2	紙：...		
681	池上線	準		12.9	4.2	準-7.3Y106-6	紙：色紙付箋、...		
682	池上線	準		5.1	(7.8)	α-KA-準-5V106-3	紙：...		
683	池上線	準		7.8	(11.0)	α-KA-準5	紙：...		
684	池上線	準		6.5	(6.4)	α-KA-準10V106-3	紙：...		
685	池上線	準		15.9	(5.5)	準-7.3Y106-6	紙：...		
686	池上線	準付箋			11.4	10.7	α-KA-準-5V106-4	紙：...	
687	池上線	準付		20.1	(4.6)	準-2.5V106-6	紙：...		
688	池上線	準付		27.9	(5.5)	α-KA-特7.3Y105-1	紙：...		
689	池上線	特付			15.9	(3.1)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...	
690	池上線	準		54.7	(8.3)	準10V108-3	紙：...		
691	池上線	準付			12.1	(10.7)	準-7.3Y106-6	紙：...	
692	池上線	準		(10.0)	(1.5)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
693	池上線	準		15.2	(1.9)	α-KA-準10V105-3	紙：...		
694	池上線	準			(5.7)	準-7.3Y106-6	紙：...		
695	池上線	準			(11.0)	α-KA-準10V107-4	紙：...		
696	池上線	準			(1.4)	準-7.3Y107-6	紙：...		
697	池上線	準			(1.5)	α-KA-準5	紙：...		
698	池上線	準			(2.7)	α-KA-特7.3Y107-1	紙：...		
699	池上線	準付		(21.7)	(2.7)	α-KA-準5	紙：...		
700	池上線	準		10.9	(4.4)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
701	池上線	準		13.2	(4.2)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
702	池上線	準		(14.0)	(1.1)	準10V108-3	紙：...		
703	池上線	準			(2.6)	α-KA-準5	紙：...		
704	池上線	準			(1.0)	α-KA-準5	紙：...		
705	池上線	準			(3.0)	準10V108-3	紙：...		
706	池上線	準			(2.1)	準-7.3Y106-6	紙：...		
707	池上線	準		13.9	(1.7)	α-KA-特7.3Y106-6	紙：...		
708	池上線	準		(16.0)	(1.5)	α-KA-準5	紙：...		
709	池上線	準		(17.8)	(1.0)	α-KA-準5	紙：...		
710	池上線	準		(24.0)	(6.5)	準-7.3Y107-6	紙：...		
711	池上線	準付		(23.0)	(3.6)	準-7.3Y106-6	紙：...		
712	池上線	準付		14.9	(6.3)	準10V108-3	紙：明細文、...		
713	池上線	準付		128	(7.4)	準-7.3Y106-6	紙：...		
714	池上線	準付			(6.3)	準10V108-3	紙：...		
715	池上線	準		(13.4)	(13.7)	準-7.3Y107-6	紙：...		
716	池上線	準		15.4	(11.4)	準-7.3Y106-6	紙：...		
717	池上線	準		15.7	(3.8)	α-KA-特7.3Y107-5	紙：...		
718	池上線	準		14.4	(1.5)	α-KA-特10V107-4	紙：...		
719	池上線	準		118	(15.3)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
720	池上線	準		14.7	(12.3)	α-KA-準10V107-3	紙：...		
721	池上線	準		8.7	10.0	α-KA-準10V107-3	紙：...		
722	池上線	準		12.4	(6.5)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
723	池上線	準付			13.9	(1.8)	α-KA-準5	紙：...	
724	池上線	準		11.9	5.9	準10V108-3	紙：...		
725	池上線	準		(14.4)	(5.1)	準10V108-3	紙：...		
726	池上線	準		12.9	3.6	準-7.3Y107-6	紙：...		
727	池上線	準付		(11.4)	5.3	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
728	池上線	準		18.1	(9.1)	準-7.3Y107-6	紙：...		
729	池上線	準			(10.5)	準10V108-3	紙：...		
730	池上線	準		126	(3.3)	準-7.3Y107-6	紙：...		
731	池上線	準		148	(3.8)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
732	池上線	準		15.9	(8.4)	準10V108-3	紙：...		
733	池上線	準		15.9	(1.1)	α-KA-特7.3Y107-1	紙：...		
734	池上線	準		148	(8.0)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
735	池上線	準		11.9	(8.2)	準-7.3Y106-6	紙：...		
736	池上線	準付		13.9	(10.0)	準-7.3Y107-6	紙：...		
737	池上線	準付			108	(3.7)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...	
738	池上線	準		(16.0)	(8.0)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
739	池上線	準		(16.2)	(4.8)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
740	池上線	準		(16.0)	(15.5)	α-KA-特7.3Y107-4	紙：...		
741	池上線	準		16.9	(10.3)	準-7.3Y107-6	紙：...		
742	池上線	準		14.3	(3.1)	α-KA-準10V107-2	紙：...		
743	池上線	準			5.9	(2.6)	α-KA-準10V107-3	紙：...	
744	池上線	準				(5.6)	α-KA-特7.3Y107-1	紙：...	

河川 番号	河川名称	河川	河川	a 距離 (km)		色澤	湖沼、準自然河川等	備考
				上遊	下流			
715	津17	赤川上流	津		(39)	川口橋(7.3105/5)		
716	津20	赤川上流	津		(35)	乃(7.3106/6)		
717		赤川上流	津	20.8	(66)	坂屋(7.3105/2)		
748		赤川上流	津		(34)	川口橋(10.07/2)	赤：支流	
749		赤川上流	津		(58)	川口橋(10.07/3)	赤：川口橋	
750		赤川上流	津		(50)	川口橋(10.07/3)	赤：川口橋、川口	
751		赤川上流	津	0.9	(72)	坂屋橋(5.105/5)	赤：坂屋	
752		赤川上流	津	11.8	(64)	川口橋(10.07/2)	赤：坂屋川、支流	
753		赤川上流	津	10.6	(30)	津(7.3107/6)		
754	赤川1	赤川上流	津		(40)	津(7.3106/6)		
755		赤川上流	津		(10)	津(7.3106/6)		
756		赤川上流	津		(10)	乃(7.3107/5)	赤：津、川	
757		赤川上流	津	6.5	(40)	川口橋(10.07/2)		
758		赤川上流	津	6.4	(36)	津橋(7.3107/1)		
759		赤川上流	津	7.9	(47)	坂屋橋(7.3108/3)		
760		赤川上流	津	8.2	(81)	川口橋(7.3105/4)		
761		赤川上流	津	6.7	(65)	川口橋(7.3105/4)		
762		赤川上流	津		(48)	川口橋(7.3107/4)	赤：津	
763		赤川上流	津		(15)	津(7.3106/6)	赤：津	
764	赤川3	赤川上流	津		(24)	坂屋橋(10.07/2)	赤：津	
765		赤川上流	津		(110)	川口橋(10.07/3)	赤：坂屋、川	
766	赤川7	赤川上流	津		(17)	川口橋(10.07/3)	赤：津	
767	赤川7	赤川上流	津		(68)	川口橋(10.07/2)	赤：坂屋川、川	
768	赤川8	赤川上流	津	13.6	(116)	川口橋(10.07/2)		
769	赤川9	赤川上流	津	10.8	(46)	川口橋(10.07/2)	赤：津	
770	赤川9	赤川上流	津	7.8	(16)	川口橋(10.07/2)		
771	赤川10	赤川上流	津	10.8	(135)	川口橋(10.07/3)	赤：津	
772	赤川11	赤川上流	津		(78)	坂屋橋(7.3108/4)	赤：津	
773		赤川上流	津		(18)	乃(7.3106/6)	赤：支流	
774	赤川13	赤川上流	津	7.4	(82)	川口橋(10.07/3)		
775		赤川上流	津		(133)	川口橋(10.07/4)	赤：津、津、津、津	
776		赤川上流	津	(127)	(32)	川口橋(10.07/3)	赤：津	
777		赤川上流	津	12.6	(33)	川口橋(7.3107/1)	赤：津	
778		赤川上流	津	13.8	(60)	津(7.3107/6)		
779		赤川上流	津		(61)	坂屋(7.3107/1)	赤：津、津	
780		赤川上流	津		(21)	乃(7.3106/6)	赤：津	
781		赤川上流	津		(28)	川口橋(7.3107/1)	赤：津	
782		赤川上流	津	7.4	(130)	坂屋橋(7.3108/3)	赤：津	
783		赤川上流	津	8.3	(53)	川口橋(10.07/4)	赤：津	
784		赤川上流	津	(94)	(41)	川口橋(7.3106/6)		
785		赤川上流	津	13.0	(69)	乃(7.3106/6)		
786		赤川上流	津	9.0	(28)	津橋(7.3108/4)	赤：津	
787		赤川上流	津	18.8	(39)	坂屋(7.3108/2)	赤：津	
788		赤川上流	津		(38)	津(7.3107/6)	赤：津	
789		赤川上流	津		(58)	坂屋(7.3108/2)	赤：津、津	
790		赤川上流	津		(11)	川口橋(7.3107/1)	赤：津、津	
791		赤川上流	津	17.8	(38)	乃(7.3107/8)	赤：津	
792		赤川上流	津		(56)	津(7.3108/2)	赤：津	
793		赤川上流	津		(103)	川口橋(7.3106/4)	赤：津、津	
794	赤川14	赤川上流	津	(127)	(127)	津橋(7.3108/2)	赤：津、津	
795		赤川上流	津	(100)	(30)	津(7.3106/6)	赤：津、津	
796		赤川上流	津	24.1	(59)	坂屋(7.3108/3)	赤：津、津	
797		赤川上流	津		(19)	乃(7.3107/6)	赤：津、津	
798		赤川上流	津		(31)	川口橋(10.07/5)	赤：津、津、川	
799		赤川上流	津	11.0	(61)	乃(7.3106/6)	赤：津、津、川	
800		赤川上流	津	(160)	(57)	坂屋(7.3108/2)	赤：津、津、川	
801		赤川上流	津		(33)	坂屋(7.3108/1)	赤：津、津、川	
802		赤川上流	津	11.9	(59)	坂屋(7.3108/2)	赤：津、津、川	
803		赤川上流	津	10.0	(100)	坂屋(7.3108/4)	赤：津、津	
804		赤川上流	津	8.8	(73)	津(7.3107/5)	赤：津、津	
805		赤川上流	津	14.1	(76)	川口橋(7.3107/4)		
806		赤川上流	津	18.2	(111)	坂屋(7.3108/2)	赤：津	
807		赤川上流	津	(182)	(58)	川口橋(10.07/3)	赤：津、津	
808		赤川上流	津	(114)	(33)	坂屋(7.3108/2)	赤：津、津	
809		赤川上流	津	23.5	(50)	坂屋(7.3108/2)	赤：津、津	
810		赤川上流	津		(25)	川口橋(7.3107/4)		
811		赤川上流	津		(72)	坂屋(7.3107/1)	赤：津、津	
812		赤川上流	津		(13)	津(7.3106/6)		
813		赤川上流	津	(157)	(10)	津(7.3106/6)		
814	赤川15	赤川上流	津	14.8	(14)	津(7.3106/6)		
815		赤川上流	津	4.6	(16)	川口橋(7.3107/4)		
816		赤川上流	津	6.8	(11)	川口橋(10.07/2)		
817		赤川上流	津	(80)	(17)	川口橋(10.07/2)		



河川番号	河川名称	河川	河川	a 距離 (km)		色澤	距離・単位・特種など	備考
				1区	2区			
800	池田川(ついで)	上河原	濁	7.9	(3.0)	56.5(10YR5/2)		
801		土井	濁	7.3	(3.3)	56.5(10YR5/2)		
802		上河原	濁	5.8	(2.2)	56.5(10YR5/2)	船舶(清浄25(7.3))	
803		池田	濁	5.7	(1.8)	56.5(10YR5/2)	船舶(オセワ元(10YR5/2))	舟・船支
804	池田	濁	11.2	3.8	50	56.5(10YR5/2)	舟・船支(清浄25(7.3))	舟・船支

## 石製品

河川番号	河川名称	河川	石種	寸法 (cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚			
S1	区1	濁	サヌカイト	(14.0)	(10.3)	4.0	(0.92)	縄文前期	
S2	溝川(ついで)	濁	サヌカイト	(24.0)	14.0	3.0	(1.06)	約文	
S3		濁	サヌカイト	13.0	7.0	2.0	(1.13)		
S4		濁	サヌカイト	10.0	11.0	10.0	100.0		
S5	区1	濁	花崗岩(中硬)	25.0	25.0	15.0	1200.0	区1中期	山内系
S6	区1	濁	花崗岩	20.0	27.0	7.0	80.0	区1中期	山内系
S7		濁	サヌカイト	23.0	19.0	3.0	1.29		
S8	区2	濁	サヌカイト	(11.5)	14.0	2.8	(0.45)	区2中期	山内系
S9	濁	サヌカイト	27.0	25.0	5.0	4.51			
S10	区2	濁	サヌカイト	20.0	31.0	11.0	11.01	区2中期	山内系
S11		濁	サヌカイト	12.0	12.0	2.0	0.32		
S12		濁	サヌカイト	14.0	15.0	3.0	0.45		
S13		濁	サヌカイト	(14.5)	14.0	2.0	(0.47)		
S14		濁	サヌカイト	18.0	14.0	2.8	0.39		
S15		濁	サヌカイト	18.0	11.0	2.0	0.58		
S16		濁	サヌカイト	19.0	17.0	2.0	0.70		
S17		濁	サヌカイト	19.0	18.0	3.0	0.60		
S18		濁	サヌカイト	23.0	16.0	2.0	0.55		
S19		濁	サヌカイト	21.0	14.0	2.0	0.40		
S20		濁	サヌカイト	30.0	(22.0)	5.0	(2.80)		
S21		濁	サヌカイト	(33.0)	20.0	5.0	(3.30)		
S22		濁	サヌカイト	(13.0)	5	3.0	(0.51)		
S23		濁	サヌカイト	21.8	15.8	6.0	2.04		
S24	濁	サヌカイト	(34.0)	14.0	6.8	(2.50)			
S25	濁	サヌカイト	33.0	15.0	4.0	1.05			
S26	濁	サヌカイト	21.0	9.0	11.0	1.26			
S27	濁	サヌカイト	23.0	28.0	4.0	3.04			
S28	濁	サヌカイト	17.0	13.0	4.0	1.37			
S29	濁	サヌカイト	15.0	12.0	3.0	0.39			
S30	濁	サヌカイト	13.0	11.0	2.0	0.25			
S31	濁	サヌカイト	(13.0)	11.0	2.0	(0.30)			
S32	濁	サヌカイト	(15.0)	17.0	3.0	(0.51)			
S33	濁	サヌカイト	(21.0)	16.0	4.0	(0.64)			
S34	濁	サヌカイト	21.0	13.0	3.0	0.63			
S35	濁	サヌカイト	(21.0)	(10.0)	4.0	(1.00)			
S36	濁	サヌカイト	(16.0)	16.0	2.0	(0.48)			
S37	濁	サヌカイト	(15.0)	15.0	4.0	(0.51)			
S38	濁	サヌカイト	27.8	15.8	4.0	1.56	区2中期	山内系	
S39	濁	サヌカイト	29.0	11.0	6.0	1.50			
S40	濁	サヌカイト	(20.0)	13.0	3.0	(0.60)			
S41	濁	サヌカイト	21.0	18.0	3.0	0.87			
S42	濁	サヌカイト	(22.0)	21.0	4.0	(1.70)			
S43	濁	花崗岩	30.0	48.0	55.0	493.19			
S44	濁	花崗岩	(110.0)	48.0	40.0	(379.04)			
S45	スクレイパー	サヌカイト	66.0	56.0	5.0	236.0			
S46	スクレイパー	サヌカイト	(31.0)	45.0	11.0	(28.20)			
S47	スクレイパー	サヌカイト	11.0	24.0	6.0	3.82			
S48	和	サヌカイト	37.0	30.0	8.0	10.70			
S49	和	サヌカイト	33.0	29.0	13.0	15.88			
S50	和	サヌカイト	21.0	21.0	7.0	4.00			
S51	和	サヌカイト	73.0	42.0	29.0	701.1			
S52	和	花崗岩	15.0			(0.21)			
S53	和	花崗岩	70.0	48.0	23.0	95.32			
S54	和	サヌカイト	13.0	9.0	3.0	(0.30)			
S55	和	サヌカイト	12.0	8.0	1.8	0.10			
S56	和	サヌカイト	13.0	12.0	1.7	0.23			
S57	和	サヌカイト	15.0	14.0	3.0	0.46			
S58	和	サヌカイト	(15.0)	15.0	2.0	(0.40)			
S59	和	サヌカイト	15.0	12.0	2.0	0.42			
S60	和	サヌカイト	19.0	14.0	2.0	0.37			
S61	和	サヌカイト	15.0	11.0	2.0	0.31			
S62	和	サヌカイト	(15.0)	15.0	3.0	(0.31)			

河川番号	河川名称	部材	工種	計測値 (mm)			基準値 (mm)	時期	備考
				観測値	観測値	観測値			
S62	豊水川	橋	スチール	210	15.0	30	0.05		
S64		橋	スチール	180	12.5	3.5	0.79		
S65		橋	スチール	210	130	30	0.80		
S66		橋	スチール	(17.0)	190	30	(0.60)		
S67		橋	スチール	175	19.5	30	0.91		
S68		橋	スチール	230	16.5	30	(0.55)		
S69		橋	スチール	(27.0)	185	30	(1.80)		
S70		橋	スチール	270	210	45	2.50		
S71		橋	スチール	30.5	150	30	0.91		
S72		橋	スチール	(36.0)	(16.5)	4.7	(1.60)		
S73		橋	スチール	(30.0)	(16.0)	4.0	(1.30)		
S74		橋	スチール	280	140	110	1.24	津波	
S75		橋	スチール	(18.0)	17.5	30	(0.92)		
S76		橋	スチール	(28.0)	22.5	5.0	(3.20)	津波	
S77		橋	スチール	300	210	42	2.83		
S78		橋	スチール	14.5	12.5	30	0.53	津波	
S79		橋	スチール	(21.0)	210	4.1	(2.00)	津波	
S80		橋	スチール	(36.0)	160	4.7	(1.31)		
S81		橋	スチール	(42.0)	160	4.0	(1.67)		
S82		橋	スチール	32.5	10.5	6.5	(2.44)		
S83		橋	スチール	110	130	5.0	2.10		
S84		橋	スチール	35.5	160	6.5	(2.28)		
S85		橋	スチール	300	150	5.0	3.10		
S86		橋	スチール	135	150	5.5	0.54		
S87		橋	スチール	150	150	28	0.32		
S88		橋	スチール	158	190	30	(0.77)		
S89		橋	スチール	180	140	2.5	0.95		
S90		橋	スチール	23.5	13.5	4.5	0.98		
S91		橋	スチール	280	22.5	48	1.62		
S92		橋	スチール	330	160	5.0	3.25		
S93	橋	スチール	320	12.5	5.0	1.64			
S94	スクリュー	スチール	(50)	360	5.0	5.82			
S95	橋	スチール	330	400	21.0	34.30	津波		
S96	スクリュー	スチール	830	360	19.5	(87.00)			
S97	スクリュー	スチール	880	790	15.5	129.25			
S98	スクリュー	スチール	1220	720	11.5	194.91			
S99	河川内橋	スチール	(42.0)	(70.0)	12.5	(31.61)			
S300	スクリュー	スチール	62.5	270	6.0	11.10			
S301	スクリュー	スチール	50.5	340	7.0	11.51			
S302	スクリュー	スチール	500	410	11.0	24.72			
S303	スクリュー	スチール	660	510	7.5	21.88			
S304	橋	スチール	300	265	6.0	1.87			
S305	不明	柱/穴	(113.0)	31.5	130	(50.51)	河川内橋		
S306	観音堂工務所	スチール	410	110	40	(4.03)			
S307	観音	石/土	183.5	77.0	40.0	93.31			
S308	河川	輸砂用設備	1130	1000	10.0	158.97			
S309	河川	防砂用設備	1870	1070	40.0	1364.73			
S310	河川	堤防	335.6	1000	100.0	819.00	河川内橋(津波)		
S311	橋	スチール	31.0	(14.0)	4.0	(0.67)			
S312	橋	スチール	(35.0)	16.8	4.5	(2.92)	河川内橋		
S313	橋	スチール	(35.0)	46.0	6.5	(19.40)	津波		
S314	橋	スチール	(18.0)	160	30	(0.89)			
S315	橋	スチール	21.6	190	30	0.83			
S316	橋	スチール	240	(15.0)	30	(0.70)	河川内橋		
S317	橋	スチール	270	(19.0)	40	(1.35)			
S318	橋	スチール	(32.0)	15.0	5.0	(2.27)			
S319	橋	輸砂用設備	1790	53.5	11.0	(138.87)	河川内橋		
S320	橋	河川	32.5	9.5	2.5	1.08			
S321	橋	スチール	22.8	190	5.0	1.75			
S322	橋	スチール	240	(14.5)	28	(0.73)			
S323	橋	スチール	(11.5)	(14.5)	2.5	(0.40)	河川内橋		
S324	河川	輸砂用設備	1800	(22.0)	10.0	(23.00)			
S325	橋	スチール	12.5	(10.0)	28	(0.51)			
S326	橋	スチール	13.5	8.2	5.0	2.27			
S327	橋	河川	(35.0)	30.0	5.0	(64.71)	河川内橋(津波)		
S328	橋	河川	(74.0)	(32.0)	26.0	(37.05)			
S329	橋	スチール	180	10.5	28	0.44	河川内橋(津波)		
S330	橋	スチール	17.8	140	28	0.52	河川内橋(津波)		
S331	橋	スチール	19.5	(14.0)	30	(0.55)	河川内橋		
S332	橋	スチール	(28.0)	19.0	2.5	(1.50)	河川内橋(津波)		
S333	橋	スチール	(27.0)	11.5	88	(4.20)			
S334	橋	スチール	330	20.8	4.7	2.73	河川内橋		
S335	橋	スチール	143	12.0	30	0.72	河川内橋		

河川番号	河川名称	都府	河川	計測区 (km)			流量 (t)	時期	備考
				観測点	観測点	観測点			
S-106	恵火川18	山口	徳島県高松市	2020	1800	840	472000	近年中期未満	
S-107			中ノ島	150	125	2.5	9.38		
S-108			橋	155	115	20	6020		
S-109			橋	200	150	5.0	1.47		
S-110			橋	213.0	9.5	5.0	0.801		
S-111	恵火川19	山口	中ノ島	134.0	130	5.0	1.81	近年中期未満	
S-112			スレノイバ	160.0	25.5	5.5	8.82		
S-113			太田船場石倉	179.5	690	48.5	918.70		
S-114			飯石	184.0	66.0	76.0	6600.00		
S-115			山口	徳島県高松市	257.0	1280	130.0	7500.00	
S-116	恵火川20	打越	岩戸川	481.0	410	32	1342	近年中期未満	
S-117	恵火川22	橋	中ノ島	370	140	45	1.79	近年中期未満	
S-118	中ノ島	山口	藤江川	2550	2150	630	7950.00	近年中期未満	
S-119	中ノ島	橋	中ノ島	105.5	130	5.5	0.54	近年中期未満	
S-120	土庫4	橋	中ノ島	113.0	46.3	2.5	0.81	近年中期未満	
S-121			中ノ島	163.0	48.5	30	0.85		
S-122	土庫12	橋	中ノ島	360	370	150	692	近年中期未満	
S-123			橋	175	150	3.5	0.76		
S-124			橋	255	170	30	0.86		
S-125			橋	175.0	170	3.3	0.68		
S-126			橋	113.0	140	20	0.80		
S-127			橋	230	150	4.3	1.08		
S-128	土庫14	橋	中ノ島	213.0	46.0	40	0.76	最近中期未満	
S-129			橋	272	134	30	0.86		
S-130			橋	442.0	230	70	6.68		
S-131			橋	280	335	50	4.77		
S-132			橋	430	250	110	12.38		
S-133			飯石	1040	500	250	458.40	大正期至昭和前期利用	
S-134			橋	175	44.0	28	0.57		
S-135	土庫15	橋	中ノ島	280	46.5	30	1.81	近年中期未満	
S-136			橋	221.0	110	45	0.82		
S-137	土庫16	橋	中ノ島	135	145	20	5.38	近年中期未満	
S-138	土庫21	橋	中ノ島	340	110	30	0.79	近年中期	
S-139	土庫22	打越	岩戸川	490	140	110	13.35	近年中期未満	
S-140	土庫23	橋	中ノ島	271.5	160	30	0.82	近年中期未満	
S-141	土庫25	橋	中ノ島	220	160	30	5.78	近年中期未満	
S-142	土庫26	橋	中ノ島	190.0	370	110	127.67	近年中期未満	
S-143	土庫30	架け石	中ノ島	1150	210	60	7.17	近年中期未満	
S-144	土庫30	橋	飯石	660	560	430	243.32	近年中期未満	
S-145	土庫35	橋	中ノ島	240.0	105	5.0	1.84	近年中期未満	
S-146	土庫40	橋	中ノ島	150	110	30	5.80	近年中期未満	
S-147	土庫49	橋	中ノ島	256	60	32	0.54	近年中期未満	
S-148	土庫50	橋	中ノ島	185.0	165	3.3	0.72	近年中期未満	
S-149			橋	195	138	40	3.61		
S-150	土庫51	橋	中ノ島	305	45.5	3.5	1.37	近年中期未満	
S-151			橋	273.0	175	60	9.210		
S-152	土庫59	橋	中ノ島	255	130	5.5	0.71	近年中期未満	
S-153	土庫64	橋	中ノ島	195	135	45	0.81	近年中期未満	
S-154	土庫66	橋	中ノ島	250	135	5.5	0.54	近年中期未満	
S-155	土庫68	架け石	中ノ島	170.0	240	75	14.20	近年中期未満	
S-156	土庫71	打越	岩戸川	760	380	160	50.67	近年中期未満	
S-157			橋	225	130	40	0.91		
S-158	土庫73	橋	中ノ島	165	125	28	0.85	近年中期未満	
S-159	土庫79	架け石	中ノ島	360	550	400	186.35	近年中期未満	
S-160	土庫79	打越	岩戸川	880.0	550	110	163.86	近年中期未満	
S-161			橋	115.0	150	30	0.50		
S-162			橋	200	130	40	0.77		
S-163			橋	275	175	45	2.28		
S-164			橋	310	150	50	2.41		
S-165	土庫81	橋	中ノ島	425	340	85	14.61	近年中期未満	
S-166			橋	280	380	130	14.48		
S-167			架け石	915	500	210	121.78		
S-168			飯石	1710	860	280	242.80		
S-169	土庫83	打越	岩戸川	1375	420	85	11.77	近年中期未満	
S-170	土庫84	架け石	中ノ島	111.3	51.0		722.64	近年中期未満	
S-171	土庫85	橋	中ノ島	112	110	28	3.22	近年中期未満	
S-172	土庫86	橋	中ノ島	200.0	160	40	0.89		
S-173	土庫87	山口	岩手川	1240.0	1300	111.0	1940.00		
S-174			橋	135	112	18	0.37		
S-175			橋	130	105	18	0.21		
S-176			橋	135	105	30	0.40		
S-177			橋	185	130	40	0.53		
S-178			橋	135.0	150	20	0.51		

洋名 番号	洋名漢字	製法	丁数	背巾度 (cm)			重量 (g)	銘柄	備考
				肩丈幅	肩巾	肩巾深			
S200		織	サツカイト	185.0	17.5	4.0	1280		
S201		織	サツカイト	150	15.5	2.5	9.95		
S211		織	サツカイト	115.0	12.0	2.5	9.01		
S202		織	サツカイト	18.0	14.3	4.0	3.68		
S203		織	サツカイト	17.0	11.0	3.0	3.50		
S204		織	サツカイト	17.2	11.0	2.5	3.41		
S215		織	サツカイト	20.0	14.9	2.5	9.48		
S216		織	サツカイト	18.5	13.3	4.0	9.58		
S217		織	サツカイト	16.0	16.5	2.5	3.48		
S218		織	サツカイト	16.0	17.0	2.5	9.67		
S219		織	サツカイト	15.3	11.9	3.2	9.30		
S200		織	サツカイト	14.0	14.0	3.0	3.74		
S221		織	サツカイト	17.0	11.5	2.5	9.11		
S222		織	サツカイト	19.4	16.0	4.5	1.23		
S223		織	サツカイト	27.5	17.0	3.5	1.26		
S224		織	サツカイト	28.0	19.0	4.0	1.30		
S225		織	サツカイト	30.5	14.0	4.5	1.51		
S226		織	サツカイト	22.0	17.0	3.0	9.80		
S227		織	サツカイト	22.8	16.8	1.8	3.88		
S228		織	サツカイト	28.0	17.0	4.0	12.01		
S229		織	サツカイト	132.0	19.0	3.3	12.21		
N240		織	サツカイト	26.0	13.0	3.3	1.21		
N241		布	サツカイト	21.5	18.5	7.0	9.00		
S230		織	サツカイト	38.5	16.5	5.3	2.51		
S231		布	サツカイト	31.5	12.0	6.0	2.72		
S234		布	サツカイト	26.0	17.0	4.0	1.10		
N245		布	サツカイト	21.6	13.0	4.0	9.71		
S236		布	サツカイト	23.0	10.0	4.0	3.62		
S237		布	サツカイト	25.0	7.5	2.0	9.81		
S238		布	サツカイト	35.0	11.2	5.0	1.10		
S239		布	和装用のカシメフェリス	68.5	56.0	18.5	32.54		
N246		巾着	サツカイト	26.5	21.0	6.0	9.68		和装に種々の色用紙、葉か
S241		織	サツカイト	15.0	11.0	27.0	35.52		
S242		ストレッチ	サツカイト	99.0	51.0	8.3	27.18		
S243		ストレッチ	サツカイト	130.5	20.0	5.0	14.60		丁製子包丁用
S244		ストレッチ	サツカイト	74.5	22.0	8.0	13.46		
N245		ストレッチ	サツカイト	41.5	30.5	5.0	2.97		
S246		ストレッチ	サツカイト	99.0	52.0	9.0	46.58		
S247		布	サツカイト	73.0	64.0	8.5	50.00		
S248		織	サツカイト	53.0	47.0	51.0	137.66		
S249		巻製刀袋	古布利用本宅染民布	90.0	44.0	18.5	134.70		
N249		丁製巾着	現状布	111.0	30.0	21.0	184.10		
S251		織	雲上布	111.0	74.0	18.5	234.01		
S252		織	現状布	118.0	43.0	25.0	307.14		
S253	道巾	織	現状布	85.0	100.0	67.0	619.00		10C
N254	和伊豆	織	和紙布	188.0	131.0	12.3	222.14		巻紙一冊用
N255	上伊豆	織	現状布	81.5	42.0	4.0	153.11		10C
S256	巻紙	織	巻紙布	194.0	81.0	40.0	1910.91		10C
S257		織	和紙布	51.0	21.0	8.0	12.01		一寸一丁用
S258	和門3	織	和紙布	84.0	41.0	7.0	64.50		巾着一丁用

## 土製品

洋名 番号	漢字漢字	製法	背巾度 (cm)					重量 (g)	銘柄	備考
			肩丈幅	肩巾	肩巾深	肩巾	肩巾			
C1	腰丈仕立3	織	二葉布	114.0	8.0	8.0	1.4	巻紙(25731)		
C2	丁製二葉布	織	二葉布	131.7	30.5	8.0	42.66	和紙(383)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙、和紙色紙
C3	腰丈仕立4	織	二葉布	91.5	23.0	6.1	15.9	和紙(191976)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C4	腰丈仕立6	織	二葉布	109.7	19.0	4.1	4.1	和紙(75764)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C5	腰丈仕立7	織	二葉布	43.2	42.2	4.5	4.6	和紙(75765)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C6	腰丈仕立7	織	二葉布	38.2	25.0	4.9	5.1	和紙(75766)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C7	腰丈仕立7	織	二葉布	36.8	39.1	6.1	22	和紙(75767)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C8	腰丈仕立8	織	二葉布	41.2	34.8	6.9	11.9	和紙(75768)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C9	腰丈仕立10	織	二葉布	65.7	23.8	9.3	16.0	和紙(75769)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C10	腰丈仕立11	織	二葉布	83.3	69.3	24.4	66.7	和紙(191977)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙
C11	腰丈仕立12	織	二葉布	25.0	19.0	4.9	6.0	和紙(191978)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙
C12	和伊豆3	織	二葉布	67.0	12.0	3.0	3.0	和紙(75770)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙
C13	土俵44	織	二葉布	11.1	49.6	6.1	17.3	和紙(75771)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C14	土俵15	織	二葉布	43.0	13.1	7.0	11.2	和紙(75772)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C15	土俵80	織	二葉布	43.8	42.1	5.2	13.1	和紙(191979)	袋丈の用紙	赤土呂布用紙
C16	巻紙1	織	巻紙布	136.1	89.2	17.7	22.2	和紙(191980)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙
C17	巻紙1	織	巻紙布	132.0	91.5	13.0	18.9	和紙(191981)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙
C18	巻紙1	織	巻紙布	36.3	39.1	5.6	3.2	和紙(191982)	巻紙一冊用紙	赤土呂布用紙

試験番号	試験名	材料	寸法 (mm)			質量 (g)	寸法	時期	備考
			最大径	最小径	平均径				
C20	試験に供しない標準品	標準品	25.1	22.6	23.8	3.7	8.8	品番(10Y103)2	赤土試験用
C20		標準品	28.9	26.6	27.8	3.4	11.2	品番(10Y103)3	赤土試験用
C24		標準品	67.9	23.6		7.0	25.8	品番(7.5Y106)6	
C25	試験に供しない標準品	標準品	33.6	16.0	16.1		10.6	品番(7.5Y107)3	青埋
C23		標準品	35.2	10.3		18	3.1	品番(7.5Y107)4	
C24		標準品	32.1	9.0		11	1.9	品番(10Y105)3	
C25	試験品	標準品	16.0	12.1		4.8	15.5	品番(10Y108)3	
C26		標準品	29.1	11.1		18	14.1	品番(2.5Y13)1	
C27		標準品	19.5	9.6		4.1	12.1	品番(2.5Y15)2	
C28	試験品	試験品二色用	25.5	22.6	10.9		8.2	品(106)0	無塵試験用、打込み成形
C29		試験品二色用	26.1	22.3	11.5		8.2	品(106)0	無塵試験用、打込み成形
C30		試験品二色用	29.9	10.0		10	13.5	品(2.5Y105)2	10℃後手
C31	試験品	試験品二色用	25.5	24.4	11.3		9.9	品(104)0	10℃
C32		試験品二色用	54.9	25.0	17.9		152.1	品白(5Y17)1	18℃試験
C33		標準品	47.3	11.1		18	16.0	品白(2.5Y18)2	
C34	試験品	標準品	19.5	20.1		4.1	14.4	品白(5Y18)7(3)	
C35		試験品二色用	27.2	21.9	11.8		9.4	品白(5Y18)7(3)	門栓
C36		試験品二色用	28.4	27.0	10.8		10.1	品白(5Y18)5	赤土試験用、打込み成形
C37	試験品	標準品	56.8	12.7		3.3	18.1	品白(2.5Y17)2	
C38		試験品二色用	26.1	25.0	11.4		8.4	品白(7.5Y17)1	10℃
C39		標準品	16.7	12.6		4.8	15.5	品白(10Y12)1	
C40	試験品・40	標準品	27.3	10.1		17	12.7	品白(10Y12)1	門栓
C41		試験品二色用	27.1	23.3	8.9		5.4	品(106)0	
C42		試験品二色用	46.9	19.6	7.5		17.5	品(106)0	門栓
C43	試験品	試験品二色用	144.9	19.6	10.9		116.5	品白(2.5Y14)1	濃色試験用、打込み成形
C44		試験品二色用	62.9	19.6	12.9		129.9	品白(2.5Y14)1	濃色試験用、打込み成形
C45		試験品二色用	49.3	10.0		4.9	5.1	品白(5Y18)7(3)	
C46	試験品	標準品	28.7	10.1		4.5	13.6	品番(10Y108)3	
C47		標準品	18.5	9.0		3.4	12.9	品番(10Y12)1	門栓・10℃
C48		標準品	41.5	13.7		4.5	15.0	品番(2.5Y13)1	
C49	試験品	標準品	196.8	13.2		3.1	17.2	品白(10Y108)2	門栓・10℃
C50		標準品	21.1	7.5		12	12.9	品白(7.5Y107)6	門栓
C51		標準品	17.9	10.0		4.0	11.7	品番(10Y108)3	
C52	試験品	試験品二色用	19.9	19.2	8.5		4.3	品白(10Y108)3	濃色試験用、打込み成形
C53		試験品二色用	22.8	22.3	6.8		4.6	品白(10Y108)3	濃色試験用、打込み成形
C54		試験品二色用	24.9	22.6	8.9		7.9	品白(10Y108)2	濃色試験用、打込み成形
C55	試験品	試験品二色用	56.1	21.5	10.1		7.9	品白(10Y108)2	濃色試験用、打込み成形
C56		試験品二色用	47.7	47.5	11.5		23.4	品白(10Y108)1	濃色試験用、打込み成形
C57		試験品二色用	12.5	12.6	12.6		22.7	品白(5Y17)1	濃色試験用、打込み成形
C58	試験品	試験品二色用	16.1	18.3	10.9		3.9	品(106)0	濃色試験用、打込み成形
C59		試験品二色用	219	218	12.6		9.1	品白(2.5Y18)1	濃色試験用、打込み成形
C60		試験品二色用	21.9	21.6		12.6	8.1	品白(2.5Y18)2	濃色試験用、打込み成形
C61	試験品	試験品二色用	17.6	26.7	10.9		8.1	品白(10Y108)3	濃色試験用、打込み成形
C62		試験品二色用	38.9	35.3	12.5		18.7	品番(10Y103)1	濃色試験用、打込み成形
C63		試験品二色用	48.5	44.2	17.9		17.6	品(106)0	濃色試験用、打込み成形

## 金属製品

試験番号	試験名	部材	材質	寸法 (mm)			質量 (g)	時期	備考
				最大径	最小径	平均径			
M1	試験に供しない標準品	丸鋼	鋼	21.5	9.0	24	2.8		
M2	試験品	六角	鋼	18.0	15.0	16	11.2	1/2	試験
M3	試験品	六角	鋼	16.0	14.0	14	12.5	門栓・10℃	
M4	試験に供しない標準品	丸	鋼	16.0	12.1	18	11.8		
M5		丸	鋼	40.7	14.5	15	19.8		
M6		丸	鋼	21.5		11	2.0		1/2、10℃、半日月

## 新旧遺構名称対照表

### 窪木遺跡

旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号
神代柱礎跡1		16	土庫基1・2		5	土庫4		6
神代柱礎跡2		17	土庫1		11	土庫5		12
柱穴跡1		14	土庫2		13	溝1		1
柱穴跡2		15	土庫2		10	溝2		5

### 南満手遺跡

旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	
平穴柱礎1	D区	17	土庫18	C区	51	土庫57	C区	9	
平穴柱礎2	C区	41	土庫19	C区	59	土庫57	C区	7	
平穴柱礎3	C区	22	土庫20	C区	19	土庫58	C区	8	
平穴柱礎4	C区	12	土庫21	C区	71	溝1	D区	20	
神代柱礎跡1	C区	28	土庫22	C区	63	溝2	C区	1	
神代柱礎跡2	D区	4	土庫23	C区	43	溝3	C区	10	
神代柱礎跡3	D区	21	土庫24	D区	39	溝4	C区	6	
神代柱礎跡4	C区	4	土庫25	D区	32	溝5	D区	31	
神代柱礎跡5	C区	17	土庫26	D区	15	溝6	C区	38	
神代柱礎跡6	C区	14	土庫27	D区	13	溝7	D区	1	
柱穴跡1	C区	30	土庫28	D区	16	溝8・溝9	D区	5	
柱穴跡2	C区	56	土庫29	D区	13	溝10	D区	15	
柱穴跡3	D区	33	土庫30	C区	64	溝11	D区	10	
柱穴跡4	C区	18	土庫31	C区	41	溝12	D区	9	
柱穴跡5	C区	25	土庫32	C区	58	溝13	D区	2	
柱穴跡6	C区	10	土庫33	C区	47	溝14	D区	35	
井跡1	C区	35	土庫34	C区	49	溝15	D区	26	
井跡2	C区	36	土庫35	C区	62	溝16	D区	3	
井跡3	C区	43	土庫36	C区	61	溝17	D区	14	
井跡4	C区	32	土庫37	C区	27	溝18	D区	27	
井跡5	C区	27	土庫38	C区	33	溝19	D区	11	
井跡6	C区	50	土庫39	C区	33	土庫跡跡1	C区	2	
井跡7	D区	37	土庫40	C区	55	土庫跡跡2	C区	5	
井跡8	D区	56	土庫41	C区	35	土庫跡跡3	A区	1	
井跡9	D区	8	土庫42	C区	53		A区	3	
土庫1	C区	66	土庫43	C区	54		A区	4	
土庫2	C区	44	土庫44	C区	58		A区	5	
土庫3	C区	40	土庫45	C区	34		A区	7	
土庫4	C区	72	土庫46	D区	3		A区	8	
土庫5	C区	57	土庫47	C区	45	A区	9		
土庫6	C区	59	土庫48	A区	5	A区	10		
土庫7	C区	34	土庫49	A区	2	A区	11		
土庫8	D区	22	土庫50	D区	38	土庫跡跡4	D区	6	
土庫9	D区	25	土庫51	D区	19		D区	7	
土庫10	D区	24	土庫52	D区	29		D区	1	
土庫11	D区	30	土庫53	D区	28		土庫跡跡4	C区	15
土庫12	C区	67	土庫54	C区	3		土庫跡跡5	D区	
土庫13	C区	65	土庫55	C区	13		土庫跡跡6	C区	
土庫14	C区	49	土庫56	C区	9		土庫跡跡7	溝・木	7
土庫15	C区	68	土庫57	C区	7		溝跡1	D区	3
土庫16	C区	70	土庫58	C区	8		溝跡2	D区	2
土庫17	C区	45	土庫59	C区	13				

### 北満手遺跡

旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号	旧遺構名称	旧地区	旧遺構番号
平穴柱礎1	B区	121	平穴柱礎16	B区	32	井跡1	B区	83
平穴柱礎2	B区	118	平穴柱礎17	B区	19	井跡2	D区	41
平穴柱礎3	B区	110	平穴柱礎18	A区	96	井跡3	A区	50
平穴柱礎4	B区	114	平穴柱礎19	A区	74	井跡4	A区	58
平穴柱礎5	B区	81	平穴柱礎20	A区	70	井跡5	A区	71
平穴柱礎6	B区	75	平穴柱礎21	A区	78	井跡6	A区	72
平穴柱礎7	B区	65	平穴柱礎22	A区	96	井跡7	A区	73
平穴柱礎8	B区	66	平穴柱礎23	A区	96	井跡8	A区	75
平穴柱礎9	B区	79	神代柱礎跡1	B区	73	井跡9	A区	76
平穴柱礎10	B区	60	神代柱礎跡2	B区	100	井跡10	A区	77
平穴柱礎11	B区	58	神代柱礎跡3	B区	42	井跡11	A区	716
平穴柱礎12	B区	37	神代柱礎跡4	A区	96	井跡12	A区	713
平穴柱礎13	B区	33	神代柱礎跡5	A区	74	井跡13	A区	714
平穴柱礎14	B区	33	神代柱礎跡6	A区	96	土庫1	D区	817
平穴柱礎15	B区	33		A区	70	土庫2	B区	97

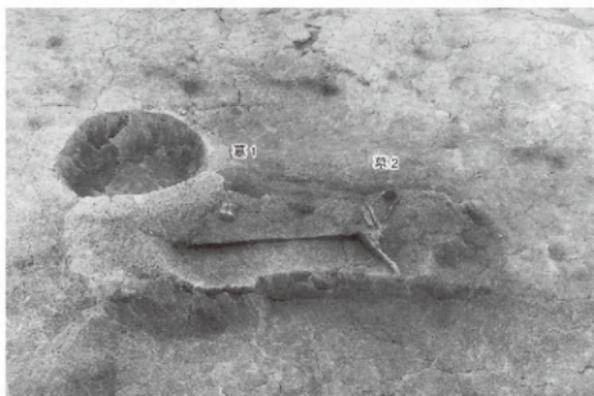
海峽名稱	伊拉區	回聲機番號	海峽名稱	伊拉區	回聲機番號	海峽名稱	伊拉區	回聲機番號
上嶺 3	B區	10	上嶺 77	A區	755	廣 20	C區	2
上嶺 4	C區	16	上嶺 78	A區	752	廣 31	C區	4
上嶺 5	C區	17	上嶺 79	A區	~89	廣 34	C區	3
上嶺 6	C區	18	上嶺 80	A區	750	廣 35	C區	6
上嶺 7	C區	24	上嶺 81	A區	754		C區	7
上嶺 8	C區	21	上嶺 82	A區	753		C區	8
上嶺 9	C區	23	上嶺 83	A區	756		C區	9
上嶺 10	B區	120	上嶺 84	A區	758		C區	10
上嶺 11	B區	125	上嶺 85	A區	751		C區	11
上嶺 12	B區	122	上嶺 86	A區	755		C區	12
上嶺 13	B區	125	上嶺 87	A區	757		C區	13
上嶺 14	B區	124	上嶺 88	A區	753		C區	14
上嶺 15	B區	123	上嶺 89	A區	755	廣 37	B區	81
上嶺 16	B區	116	上嶺 90	A區	~34	廣 38	B區	80
上嶺 17	B區	117	上嶺 91	A區	~31	廣 39	B區	20
上嶺 18	B區	113	上嶺 92	A區	756	廣 40	B區	23
上嶺 19	B區	115	上嶺 93	A區	756	廣 41	B區	26
上嶺 20	B區	102	上嶺 94	A區	758	廣 42	B區	22
上嶺 21	B區	101	上嶺 95	A區	~17	廣 43	B區	5
上嶺 22	B區	98	上嶺 96	A區	~18	廣 44	B區	6
上嶺 23	B區	100	上嶺 97	A區	756	廣 45	B區	8
上嶺 24	B區	96	上嶺 98	A區	755	廣 46	B區	9
上嶺 25	B區	95	上嶺 99	B區	89	廣 47	B區	16
上嶺 26	B區	94	上嶺 100	C區	5	廣 48	B區	18
上嶺 27	B區	93	上嶺 101	B區	2	廣 49	A區	~6
上嶺 28	B區	111	上嶺 102	B區	3	廣 50	A區	寬 8
上嶺 29	B區	112	上嶺 103	B區	4	廣 51	A區	寬 2
上嶺 30	B區	87	上嶺 104	B區	12	廣 52	A區	寬 8
上嶺 31	B區	91	上嶺 105	B區	11	廣 53	A區	寬 10
上嶺 32	B區	92	上嶺 106	B區	38	廣 54	A區	寬 8
上嶺 33	B區	104	上嶺 107	A區	寬 15	廣 55	A區	寬 12
上嶺 34	B區	108	上嶺 108	A區	寬 20	廣 56	A區	寬 6
上嶺 35	B區	110	上嶺 109	A區	寬 14	廣 57	A區	寬 7
上嶺 36	B區	99	上嶺 110	A區	~35	廣 58	A區	~8
上嶺 37	B區	88	上嶺 111	A區	~36	廣 59	A區	~9
上嶺 38	B區	105	上嶺 112	A區	寬 27	廣 60	A區	寬 13
上嶺 39	B區	68	上嶺 113	A區	寬 11	廣 61	A區	寬 12
上嶺 40	B區	62	上嶺 114	A區	寬 20		A區	寬 16
上嶺 41	B區	78	上嶺 115	A區	~33		A區	~58
上嶺 42	B區	77	上嶺 116	A區	~34			
上嶺 43	B區	63	上嶺 117	A區	寬 11			
上嶺 44	B區	67	嶺 1 上嶺 1	B區	89			
上嶺 45	B區	72	嶺 1	C區	15	增刊 1 增刊 1	B區	41
上嶺 46	B區	71	嶺 2	C區	22	增刊 1 增刊 2	A區	寬 2
上嶺 47	B區	61	嶺 3	B區	127	增刊 1 增刊 3	A區	寬 18
上嶺 48	B區	34	嶺 4	B區	64	增刊 1 增刊 4	C區	寬 3
上嶺 49	B區	32	嶺 5	B區	71	增刊 1 增刊 5	C區	20
上嶺 50	B區	106	嶺 6	B區	89	增刊 1 增刊 6	C區	19
上嶺 51	B區	107	嶺 7	B區	59	增刊 1 增刊 7	C區	1
上嶺 52	B區	35	嶺 8	B區	79	增刊 1 增刊 8	C區	26
上嶺 53	B區	52	嶺 9	A區	~30	增刊 1 增刊 9	A區	~4
上嶺 54	B區	56	嶺 10	A區	寬 20	增刊 1 增刊 10	A區	~5
上嶺 55	B區	85	/11	A區	寬 20	增刊 1 增刊 11	A區	寬 19
上嶺 56	B區	54		A區	寬 10	增刊 1 增刊 12	A區	寬 8
上嶺 57	B區	48	嶺 11	A區	寬 27	增刊 1 增刊 13	A區	寬 14
上嶺 58	B區	51	/13	A區	寬 20			
上嶺 59	B區	40	/14	A區	寬 20			
上嶺 60	B區	47	嶺 12	A區	寬 17			
上嶺 61	B區	39	嶺 13	A區	寬 17			
上嶺 62	B區	59	嶺 14	A區	寬 13			
上嶺 63	B區	57	/18	A區	寬 10			
上嶺 64	B區	49	/19	A區	寬 10			
上嶺 65	B區	45	嶺 15	A區	寬 19			
上嶺 66	B區	27	嶺 16	B區	11			
上嶺 67	B區	29	嶺 17	B區	24			
上嶺 68	B區	28	/20	B區	25			
上嶺 69	B區	19	/21	B區	25			
上嶺 70	B區	30	嶺 18	A區	寬 11			
上嶺 71	A區	~21	嶺 19	A區	寬 10			
上嶺 72	A區	710	嶺 20	A區	寬 17			
上嶺 73	A區	725	嶺 21	A區	寬 17			
上嶺 74	A區	730	嶺 22	A區	寬 10			
上嶺 75	A區	725	嶺 23	A區	寬 16			
上嶺 76	A區	730	嶺 24	A區	寬 14			



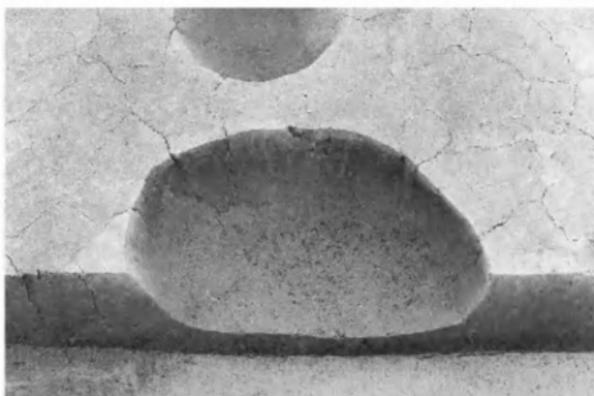
竈木遺跡



1 掘立柱建物1・2、  
柱穴列1・2  
(南から)



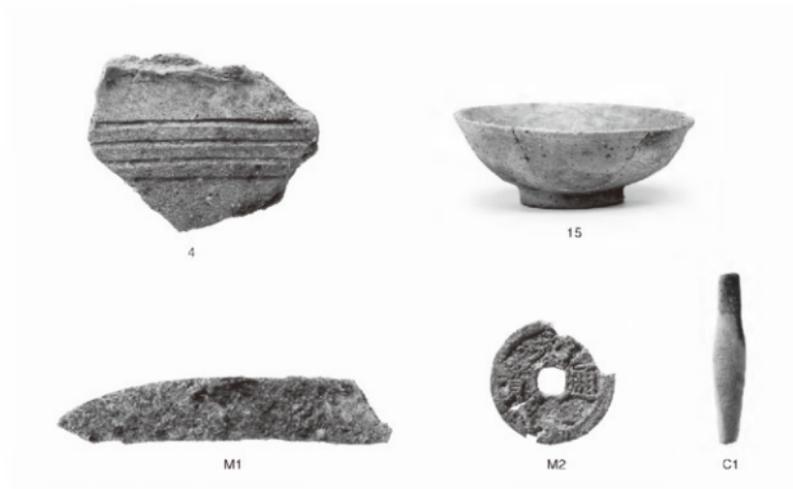
2 土壇墓1・2  
(南から)



3 土壇3 (西から)



1 遺跡全景（北西から）



2 出土遺物

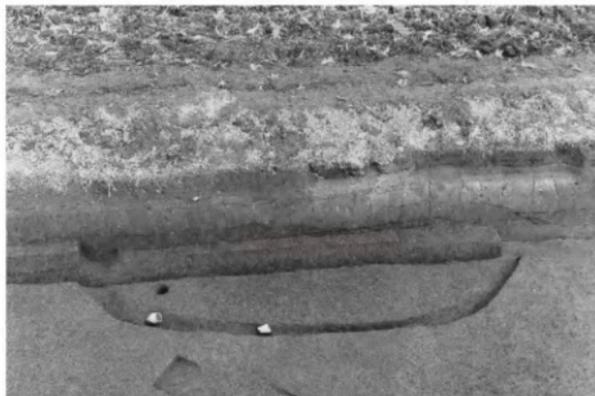
南溝手遺跡



1 32 II O~32 II W  
縄文時代後期遺物  
出土状況(南東から)



1 土壇 1 (北西から)



1 竪穴住居 1  
(西から)



2 竪穴住居 2 古  
(北から)



3 竪穴住居 2 新  
(西から)

南溝手遺跡

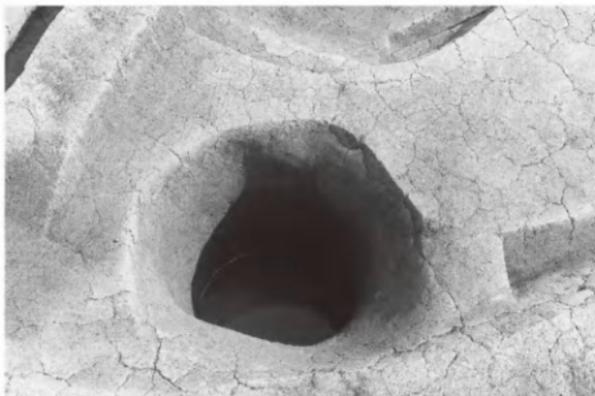
1 竪穴住居 3 古  
(北西から)



2 竪穴住居 3 新  
(北西から)

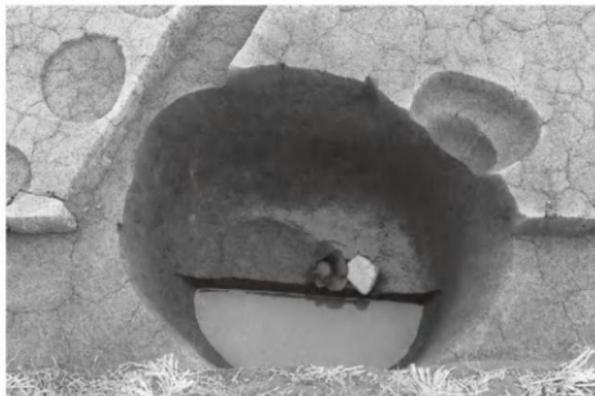


3 井戸 1 (北から)

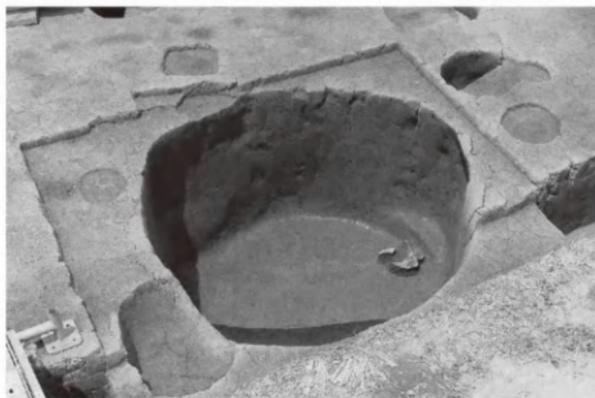


図版 6

南溝手遺跡



1 井戸 2 (北西から)



2 井戸 4 (東から)

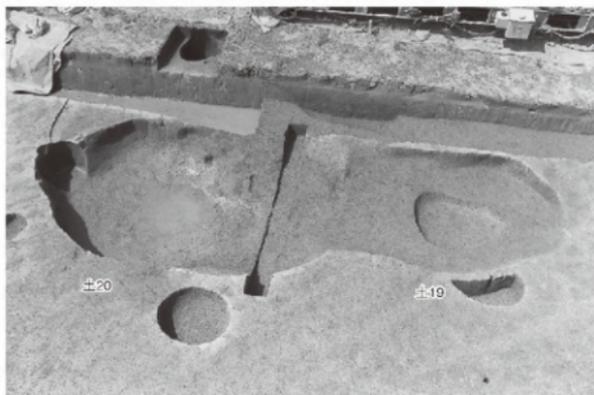


3 土坑 8 (南から)

南溝手遺跡



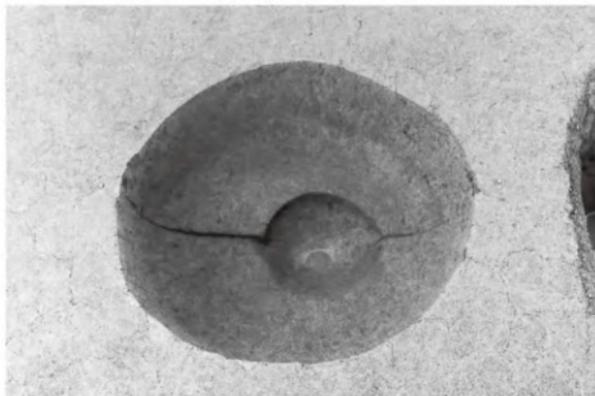
1 土壙9 (西から)



2 土壙19・20  
(東から)



3 土壙39 (北東から)



1 土壘40 (南から)



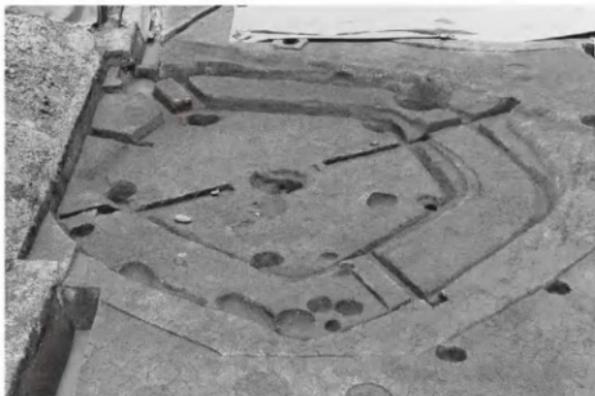
2 土壘45 (東から)



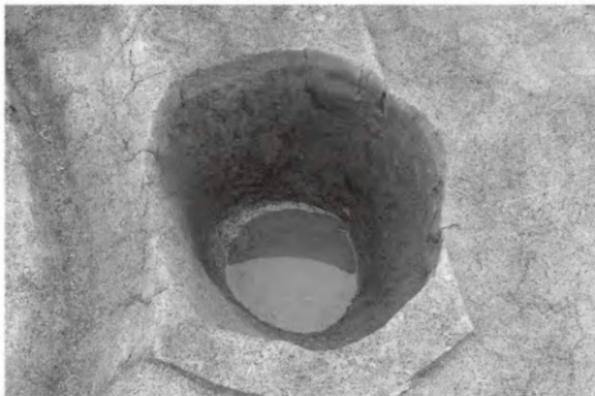
3 河道1 (南西から)

南溝手遺跡

1 竪穴住居 4  
(南東から)

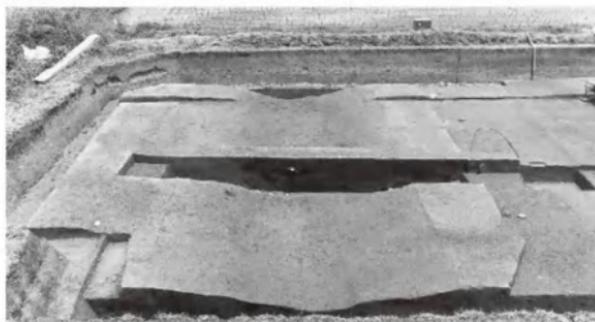


2 土壇47 (南から)



3 溝3 (東から)





1 河道2 (南西から)



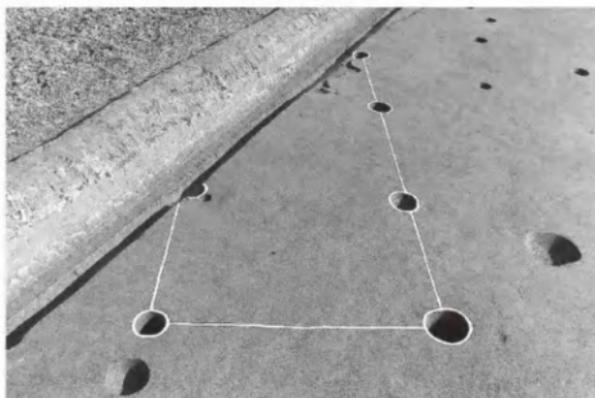
2 掘立柱建物2  
(北から)



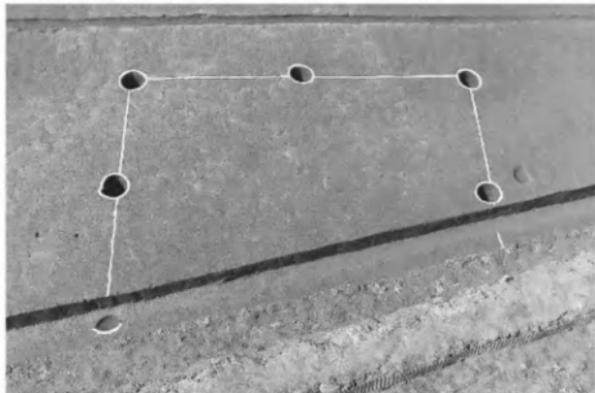
3 掘立柱建物3  
周辺 (南西から)

南溝手遺跡

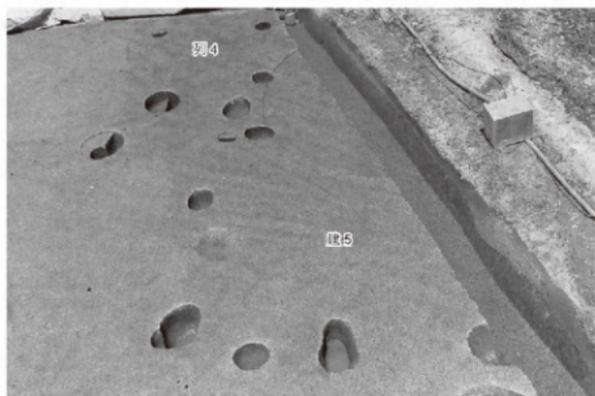
1 掘立柱建物3  
(北西から)

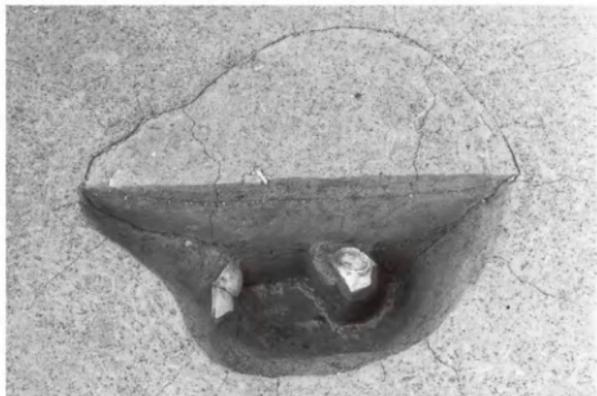


2 掘立柱建物4  
(北東から)



3 掘立柱建物5・  
柱穴列4(南から)





1 井戸8 (南東から)

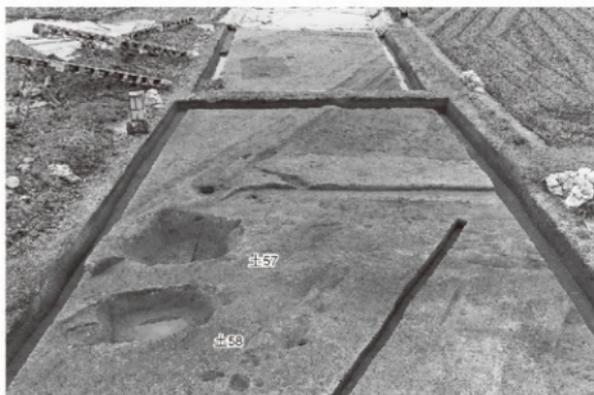


2 井戸9 (東から)

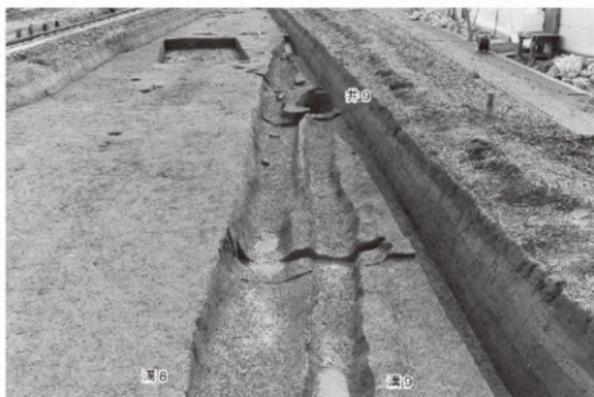


3 土壇56 (北東から)

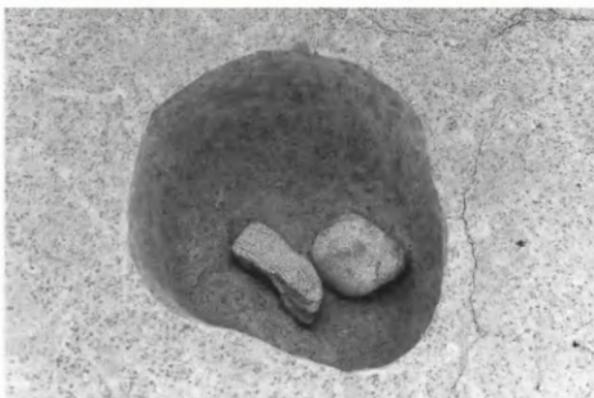
南溝手遺跡



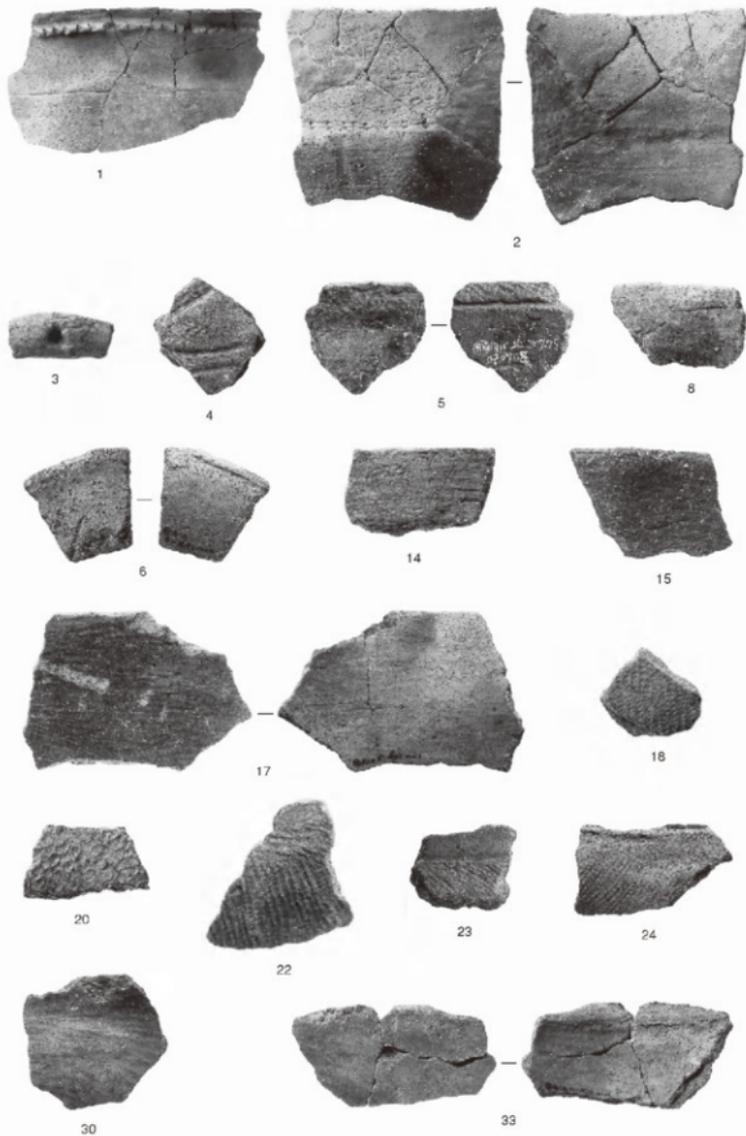
1 土壇57・58周辺  
(南東から)



2 溝8・9周辺  
(北西から)



3 柱穴12 (南東から)



南溝手遺跡



43



69



79



86



129



205



98



210



210線刻(左)



210線刻(右)

土器② (弥生土器)



279



334



320



329



388



377



353



302



394



445



447



448



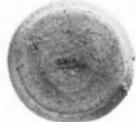
480



534



460

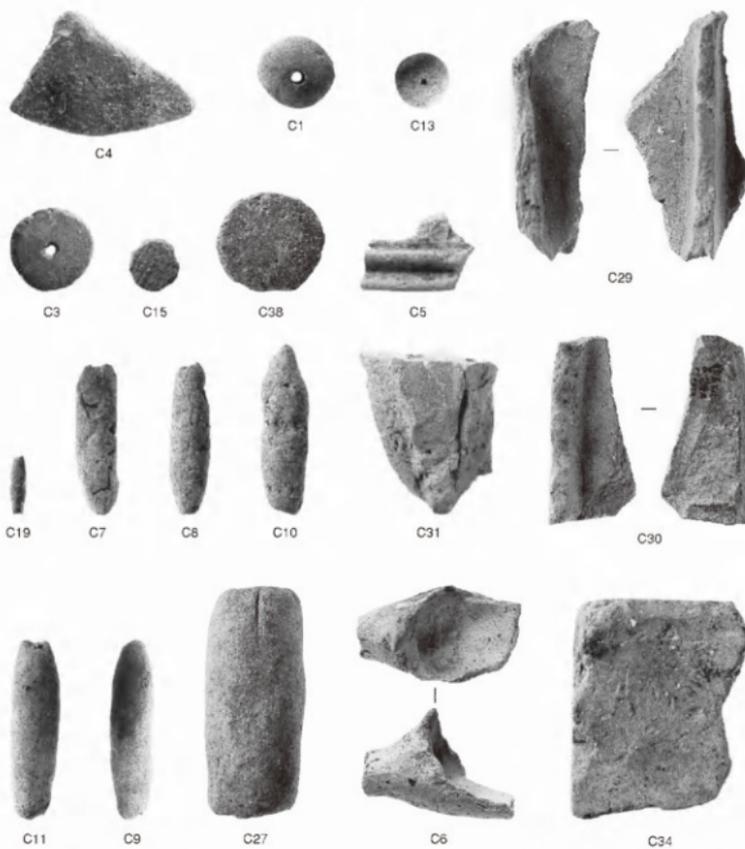


520



519

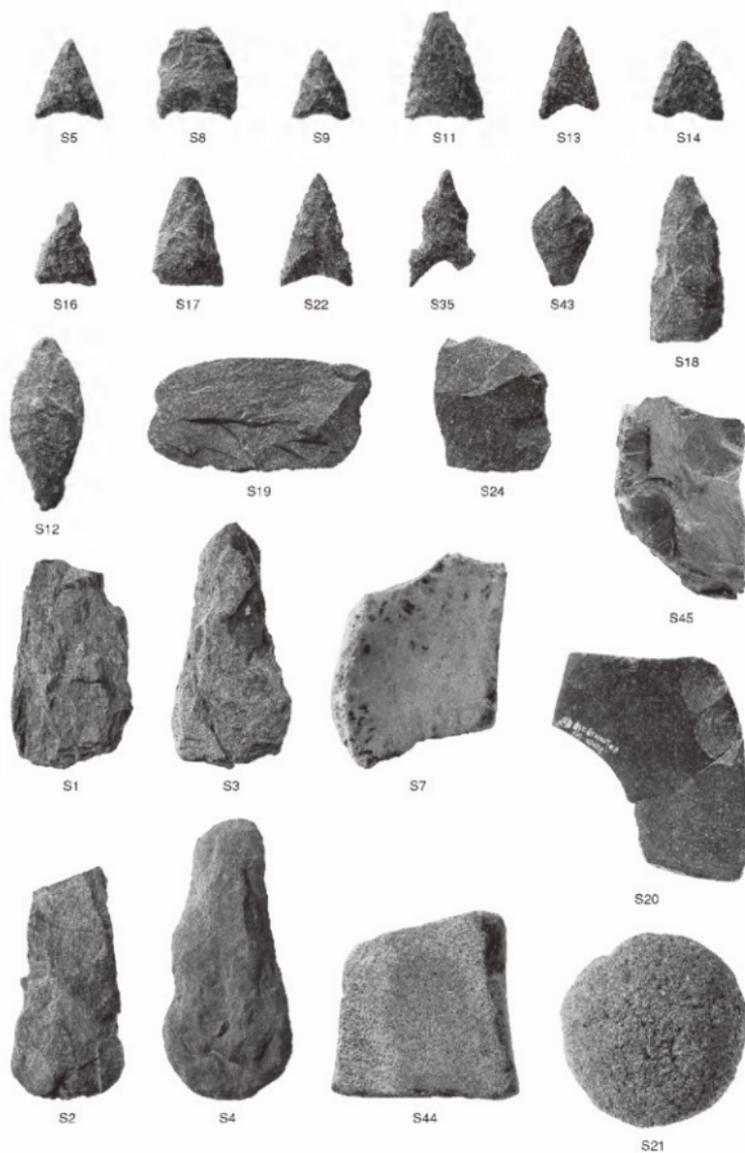
南溝手遺跡



1 土製品



2 金属製品





160・Q 弥生時代遺構全景（南から）

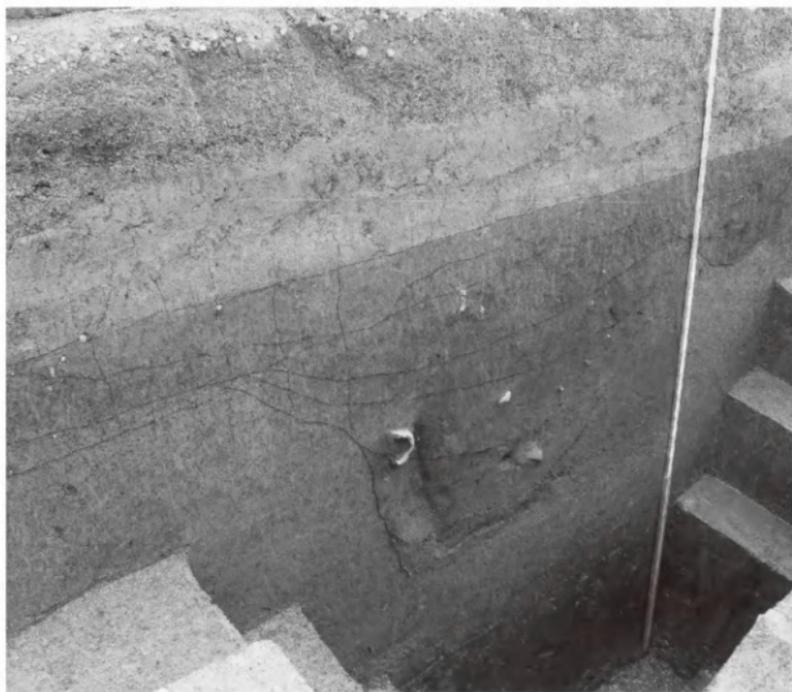


北溝手遺跡

- 1 10E・G、12G・I、  
14K・M、16M  
弥生時代遺構全景  
(上空から・  
上が北)



- 2 同上  
(北西から)



1 22 II A 調査区西壁土層断面 (南東から)



2 土塊2 (北東から)



1 10・12G  
弥生時代遺構全景  
(南東から)



2 14K・M、16M  
弥生時代遺構全景  
(南東から)



3 22W・Y  
弥生時代遺構全景  
(北西から)

北溝手遺跡

1 22W・Y  
弥生時代遺構全景  
(南東から)



2 竪穴住居 1  
(南から)



3 竪穴住居 2  
(南から)





1 竪穴住居 3  
炭化材・遺物出土  
状況① (南東から)

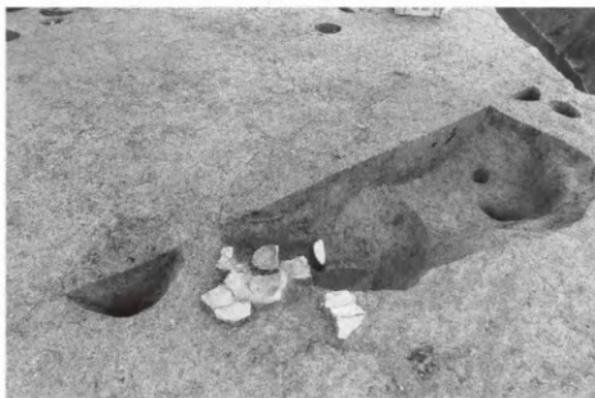


2 竪穴住居 3  
炭化材・遺物出土  
状況② (南から)



3 竪穴住居 3  
完掘状況  
(南東から)

- 1 竪穴住居 3  
P40~42土層断面  
(南から)



- 2 竪穴住居 3  
P40~42完掘状況  
(南東から)

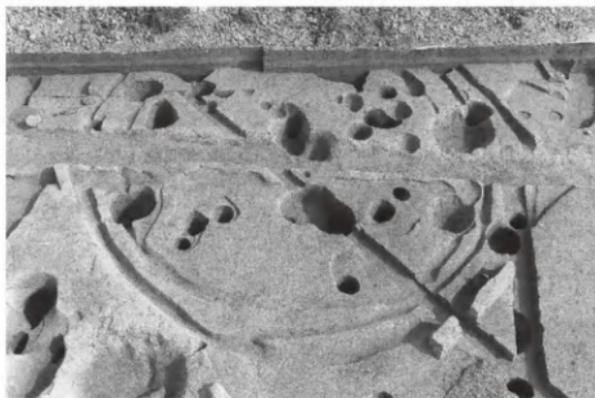


- 3 竪穴住居 4  
(北東から)





1 竪穴住居 5  
(北から)



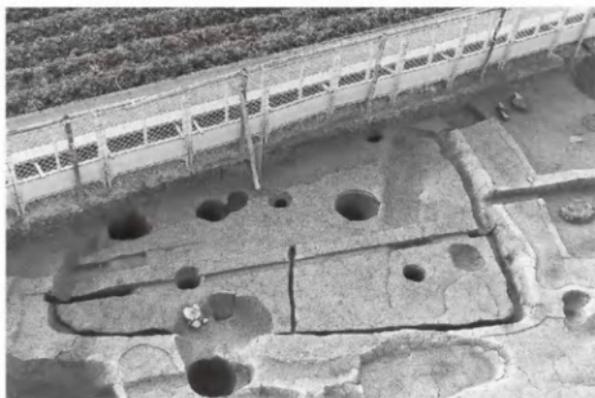
2 竪穴住居 7  
(西から)



3 竪穴住居11  
遺物出土状況  
(北から)

北溝手遺跡

1 竪穴住居12  
(東から)



2 竪穴住居13～15  
(北から)

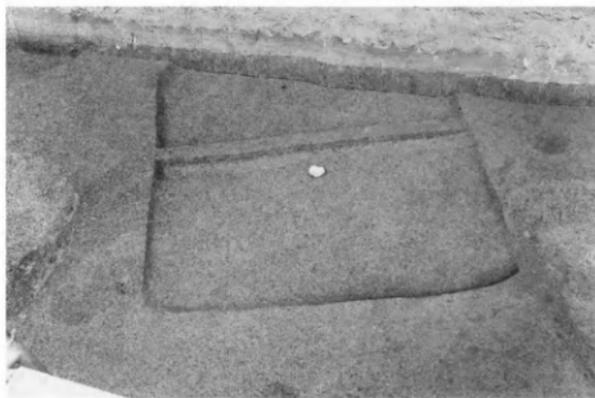


3 竪穴住居19  
(南西から)





1 竪穴住居22  
(南西から)



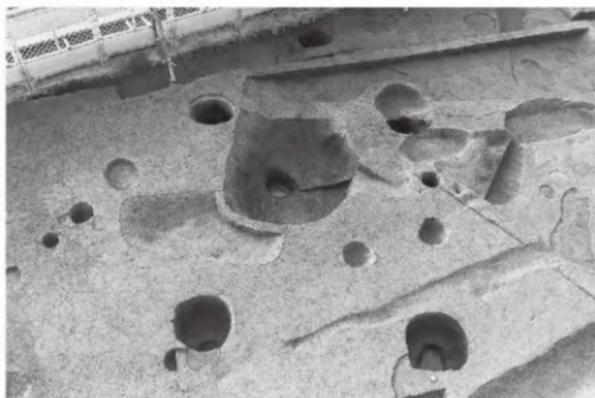
2 竪穴住居23  
(南西から)



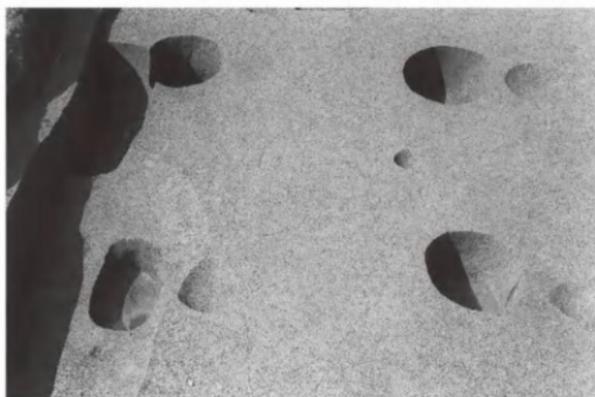
3 掘立柱建物1・2  
(東から)

北溝手遺跡

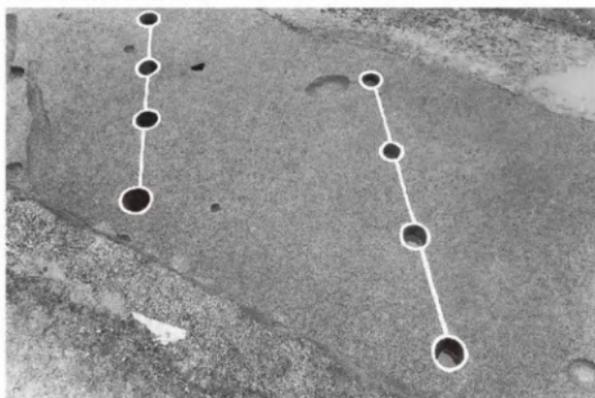
1 掘立柱建物3  
(東から)

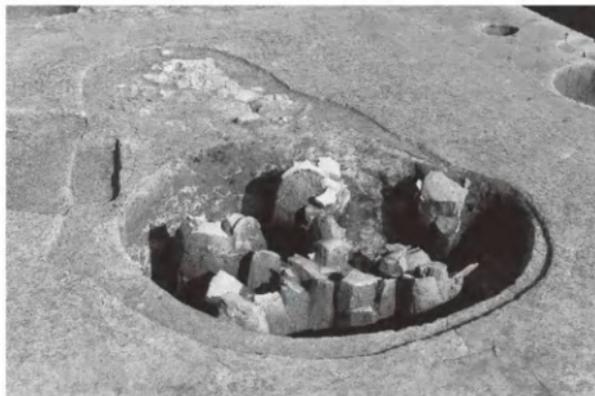


2 掘立柱建物4  
(南東から)

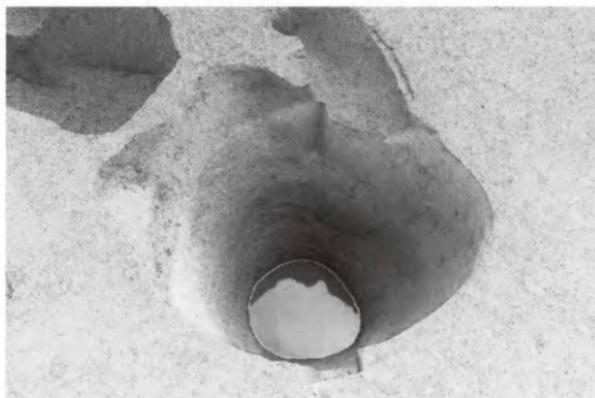


3 掘立柱建物6  
(南西から)





1 井戸1  
上層遺物出土  
状況（西から）



2 井戸1  
完掘状況  
（西から）



3 井戸2  
遺物出土状況  
（北東から）

北溝手遺跡



1 井戸3  
(北東から)



2 井戸4  
(南東から)



3 土壇5  
(南西から)



1 土壙6 (東から)



2 土壙14 (南から)



3 土壙14  
土層断面  
(南から)

北溝手遺跡



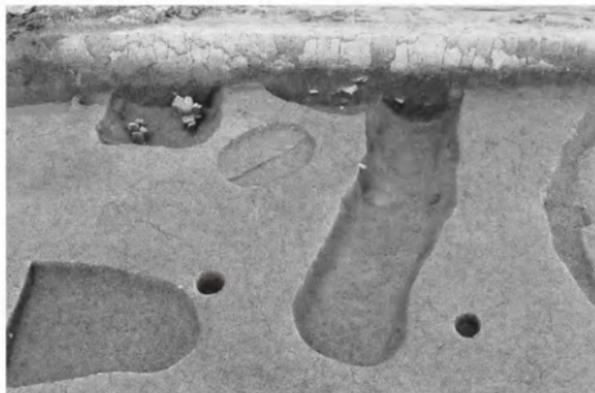
1 土壙15(南西から)



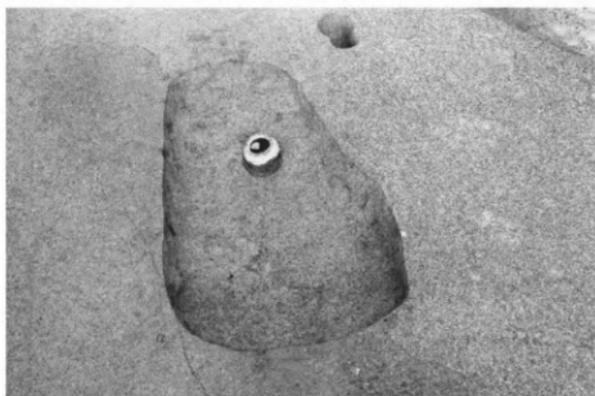
2 土壙17(西から)



3 土壙18  
遺物出土状況  
(南西から)



1 土壇17~19  
(西から)



2 土壇72 (南東から)



3 土壇78 (北東から)

北溝手遺跡



1 土壙86 (北西から)



2 土壙93 (西から)



3 溝1 (北東から)



1 溝1 土層断面  
(西から)



2 溝9~11  
(北西から)



3 柵列状遺構1・2  
(北東から)

北溝手遺跡

1 柵列状遺構 3  
(東から)



2 溝25 (北西から)



3 14K・M、16M・O  
中世～近世遺構全景  
(北西から)





1 井戸5・6  
(北西から)



2 井戸7(南東から)



3 井戸12・13  
(南西から)

北溝手遺跡

1 土壇100  
(北東から)



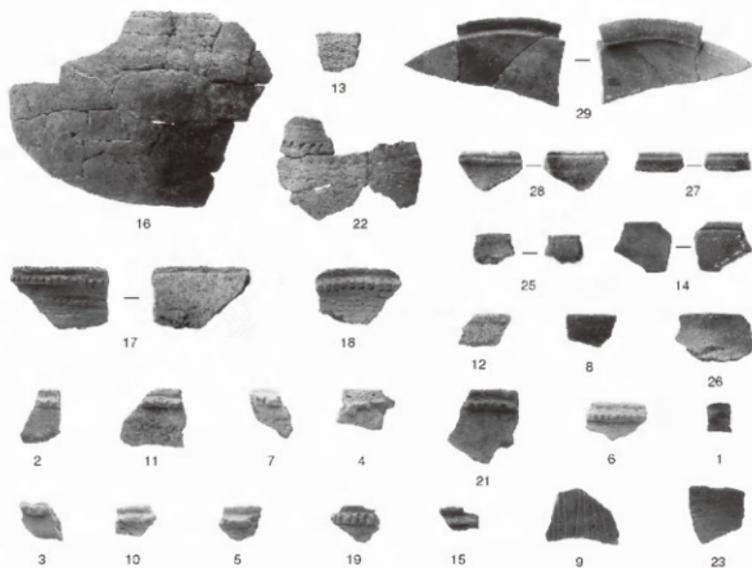
2 土壇106 (北から)



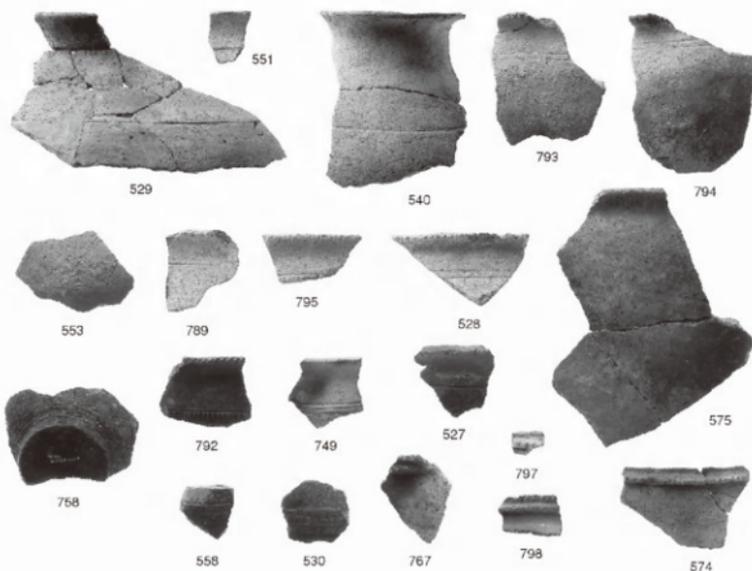
3 土壇108~112  
(南東から)



北溝手遺跡

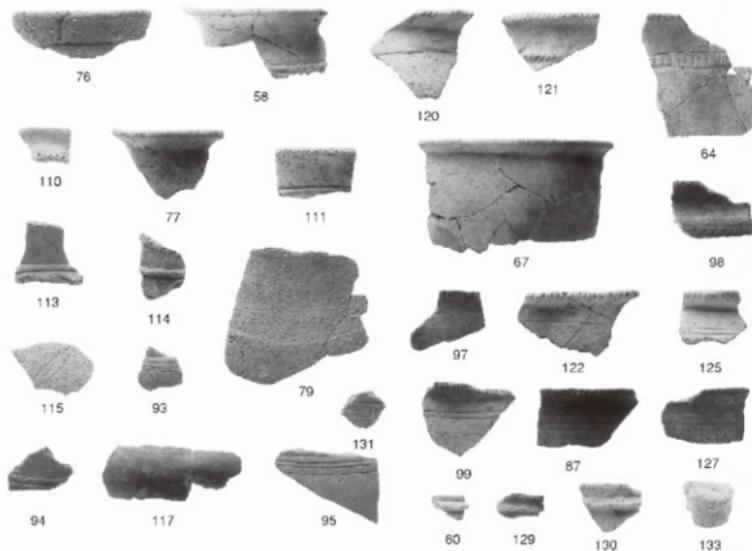


1 土器① (縄文土器)

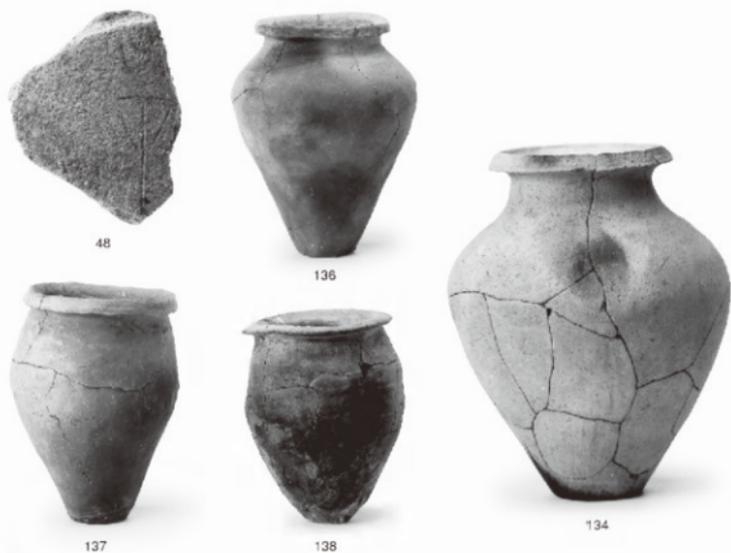


2 土器② (弥生前期土器)

## 北溝手遺跡



1 土器③ (竪穴住居3出土土器)



2 土器④ (弥生土器)



139



155



140



162



173



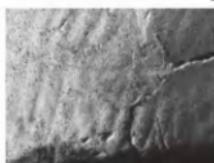
229



223



224



223底部 タタキ目



321



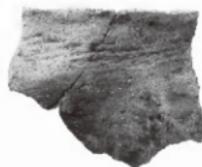
289



240



242



322



332



348



350



373



365



371

1 土器⑦(弥生土器)



2 土器⑧(土壙14出土弥生土器)



405



542



512



721



643



622



726



544

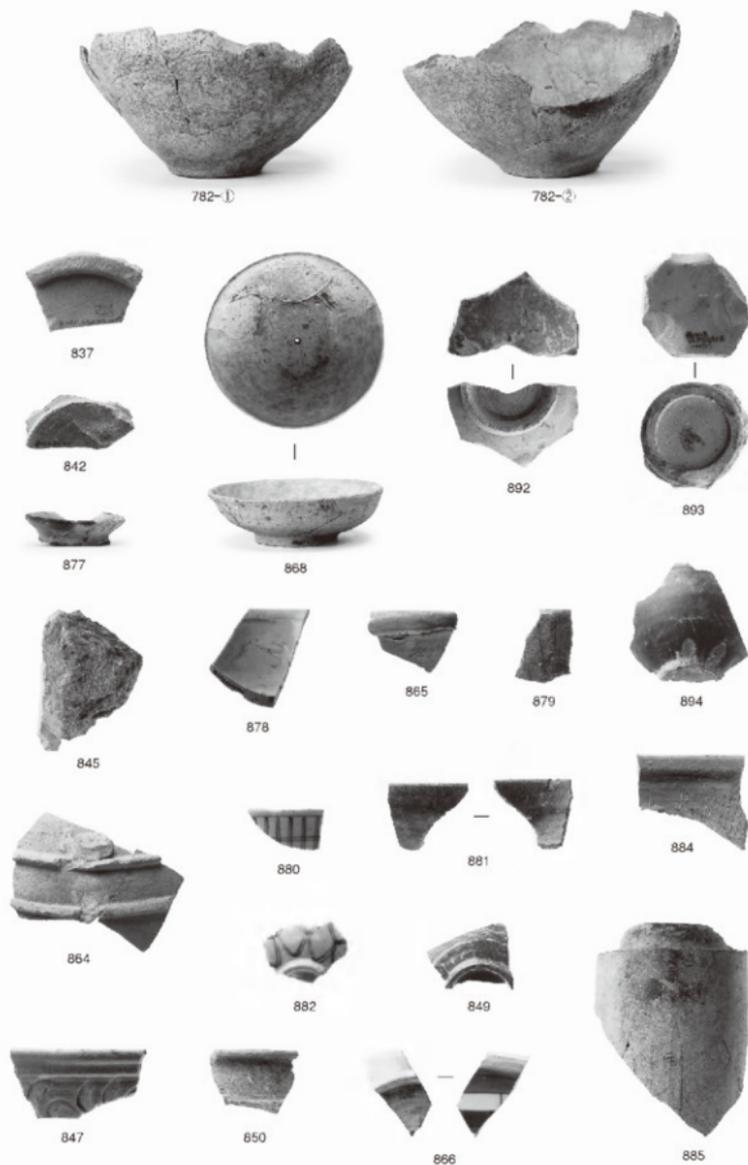


724



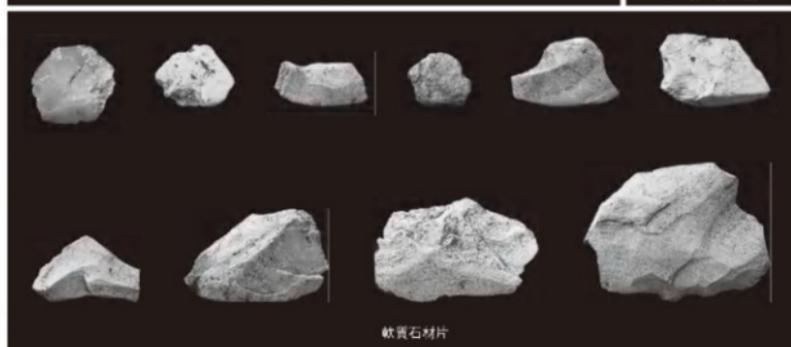
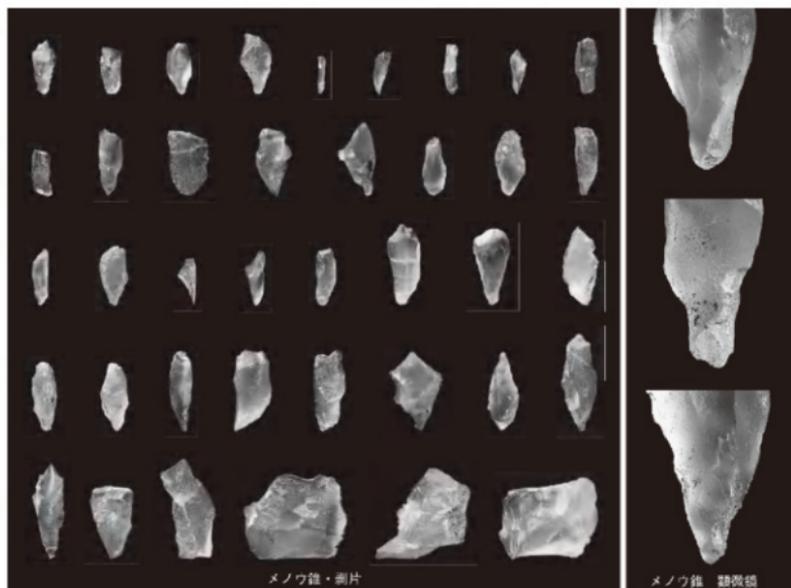
727

土器⑨ (弥生土器)



土器<sup>⑩</sup> (弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・備前焼・陶器・磁器・瓦)

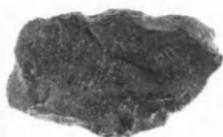
北溝手遺跡



石器①



S99



S97



S26



S28



S49



S48



S98



S96



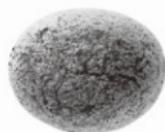
S95



S44



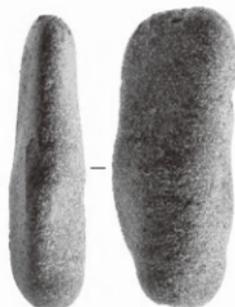
S106



S43



S105



S107



S109



S110

北溝手遺跡



S146



S239



S240



S186



S119



S3



S172



S249



S174



S143



S251

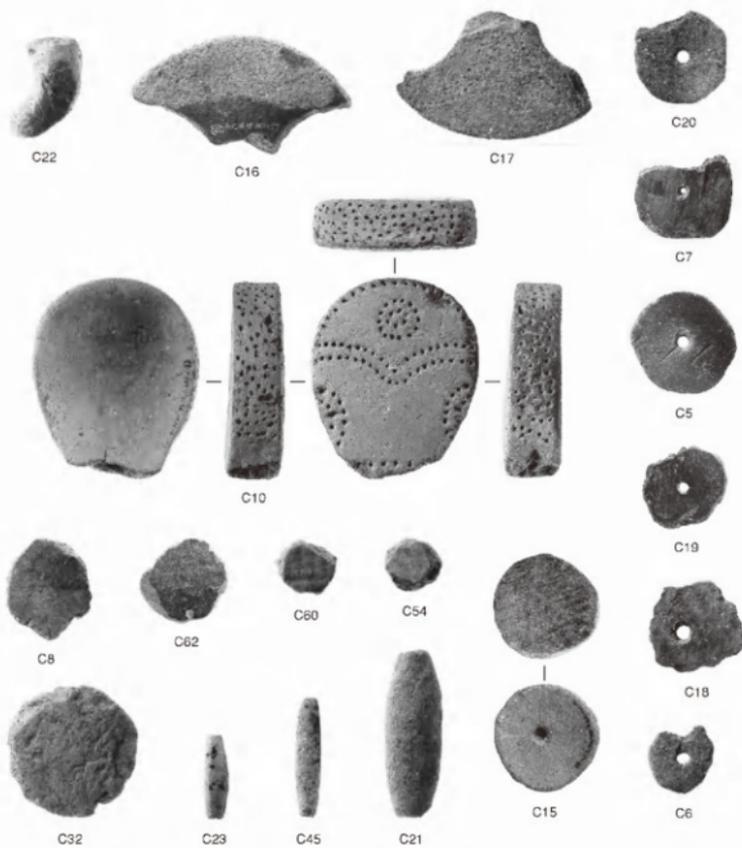


S252

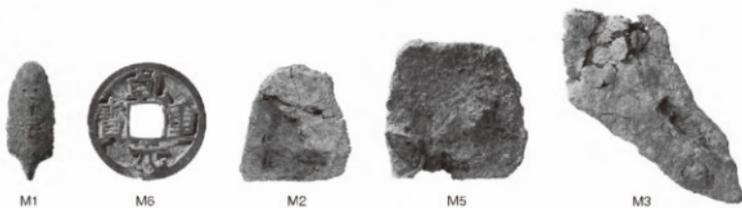


S198





1 土製品



2 金属製品

# 報告書抄録

ふりがな	くぼきいせき みなみみぞでいせき きたみぞでいせき						
書名	窪木遺跡 南溝手遺跡 北溝手遺跡						
副書名	一般県道服部停車場線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	235						
編者名	茂邊恵里子・松尾佳子・島崎 東・杉山一雄・高山沙織・白木 亨・松谷美子						
編集機関	岡山県古代古備文化財センター						
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL <a href="http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm">http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm</a>						
発行機関	岡山県教育委員会						
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111						
発行年月日	2012年2月29日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
	岡山県総社市	市町村	遺跡番号				
	窪木遺跡	窪木	332080808	34°68' 70"	133°78' 00"	20080401～20080529	145
	南溝手遺跡	南溝手	332080807	34°68' 84"	133°77' 93"	20080401～20080630 20090101～20090331 20090401～20091225	3,125
北溝手遺跡	北溝手	332080806	34°69' 10"	133°77' 72"	20091008～20100331 20100401～20100230 20110101～20110331	3,315	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
窪木遺跡	集落	古墳時代	土塚3	土師器、須恵器、鉄製鏝			
		中世	竪立柱建物2、柱穴列2、土塚52、土塚2、溝2、柱穴3	土師器、土製品、古銭			
南溝手遺跡	集落	縄文時代	土塚1、柱穴1	縄文土器、石製品	後期包含層確認		
		弥生時代	竪穴住居3、井戸6、土塚45、溝2、土器溜まり4、河道	弥生土器、石製品、土製品、鉄製品、碧玉、分銅形土製品			
		古墳時代～古代	竪穴住居1、竪立柱建物1、柱穴列2、土塚3、溝5、河道1、柱穴2	土師器、須恵器、奈良三彩、緑釉陶器、瓦、円面硯、石製品、土製品、鉄製品	古墳時代前期初頭の五角形住居確認。奈良三彩や円面硯が包含層より出土。		
		中世～近世	竪立柱建物5、柱穴列4、井戸3、土塚9、溝12、表掘溝群3	土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石製品、土製品、鉄製品、銅銭			
北溝手遺跡	集落	縄文時代	土塚3、柱穴2	縄文土器、石製品			
		弥生時代	竪穴住居23、竪立柱建物6、井戸4、土塚95、溝20、水田、河道	弥生土器、石製品、土製品、鉄製品、緑色凝灰岩製碧玉、分銅形土製品、紅褐色片岩製石鐮	弥生時代前期期下段人級の竪穴住居検出。玉作り関通石製品出土。		
		古墳時代～古代	土塚1、横列状遺構5、溝11、水田	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、石製品、土製品			
		中世～近世	井戸1、土塚18、溝31、素掘溝群2、水田	土師器、須恵器、青磁、白磁、陶器、石製品、土製品、鉄製品			
要 約	<p>窪木遺跡では、一般国道180号バイパスで明らかとなった、古墳時代後期集落が形成される微高地の北端を確認した。遺構は中世を中心としている。</p> <p>南溝手遺跡では微高地南端において、縄文時代後期の包含層を確認。弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭には集落が営まれ、五角形住居を含む竪穴住居3軒に囲まれた範囲には、井戸・土塚が集中して掘削されていた。遺跡南端に位置する低位部（旧河道）からは、奈良三彩や緑釉陶器、円面硯などが出土している。これらの遺物は、当遺跡より南西800mに位置する栢寺廃寺（7世紀中葉創建）に由来するものと思われる。</p> <p>北溝手遺跡では弥生時代前期から古墳時代初頭の集落を確認。弥生時代前期では県下で最大級となる竪穴住居も検出した。またこれまでの周辺発掘調査では非発であった弥生時代中期前半の竪穴住居や土塚が多く検出され、当該期の集落遺跡の動向を考える上で重要な知見を得た。</p>						



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告235

窪木遺跡  
南溝手遺跡  
北溝手遺跡

一般県道服部停車場線道路改築に伴う発掘調査

平成24年2月17日 印刷

平成24年2月29日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市北区西花屋1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 西尾総合印刷株式会社  
岡山県岡山市北区津高651

